

大阪大学大学院文学研究科

# 年報 2008

教育・研究(2006-2007年度)

定

一書生之而、多不、今、行、度、山、我、取、事、

一、初、也、第、据、偏、卧、而、致、可、事、

一、学、法、雅、法、之、不、各、各、之、雜、法、也、情、境、也、

一、梅、お、お、お、之、彼、法、望、く、高、の、停、上、事、

一、高、病、持、病、お、之、お、用、年、之、全、病、守、之、病、

一、望、の、お、各、用、事、

一、本、業、お、精、之、暇、之、之、之、之、善、術、詩、作、

一、澤、之、お、法、之、之、多、お、應、之、之、之、之、之、之、

一、方、之、之、之、之、

一、休、日、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

一、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

一、基、多、様、湯、お、世、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

**大阪大学大学院文学研究科**

**年報 2008**

**教育・研究(2006-2007年度)**

**大阪大学大学院文学研究科**

**評価・広報室**

## 表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

## 〔紙文〕

### 定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
  - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い漬み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
  - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
  - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相應に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
  - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
  - 一 碁象棋譜等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
  - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
  - 一 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

# 年報2008

## 目次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2008』の刊行に寄せて	江川温	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2008』発刊の趣旨	評価・広報室	2

### 第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	5
1-2	教育・研究の支援体制	9
	研究推進室	9
	評価・広報室	11
	教育支援室	17
	国際連携室	25
	国際交流センター(留学生相談室)	26
1-3	魅力ある大学院教育	28
1-4	国際交流活動	29
1-5	外部資金の導入	31
1-6	21世紀 COE プログラムについて	33
1-7	グローバル COE プログラムについて	37
1-8	懐徳堂センターの活動	39
1-9	埋蔵文化財調査室の活動	41
1-10	性差別問題委員会の活動	44
1-11	新専攻の設置と開講	45
1-12	アンケートの結果から今後へ	46

### 第2部 各専門分野における教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	49
2-2	現代思想文化学	61
2-3	臨床哲学	71
2-4	中国哲学	81
2-5	インド学・仏教学	91
2-6	日本学	99
2-7	日本史学	114
2-8	東洋史学	136
2-9	西洋史学	152
2-10	考古学	170
2-11	人文地理学	183



2-12	日本文学	193
2-13	比較文学	209
2-14	中国文学	217
2-15	国語学	223
2-16	英米文学	234
2-17	ドイツ文学	250
2-18	フランス文学	257
2-19	英語学	268
2-20	日本語学	280
2-21	美学・文芸学	300
2-22	音楽学・演劇学	317
2-23	美術史学	339
2-24	共生文明論	354
2-25	アート・メディア論	363
2-26	文学環境論	371
2-27	言語生態論	377
2-28	文化基礎学(広域文化形態論講座)	384
2-29	地域社会論(広域文化形態論講座)	385
2-30	言語文芸学(広域文化表現論講座)	387
2-31	留学生専門教育	389

## 付録 2007 年度実施アンケート結果

付録	「平成 19 年度 大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」実施結果報告 (付：「平成 19 年度大学院修了生アンケート」)	393
編集後記		404

# 大阪大学大学院文学研究科 『年報2008』の刊行に寄せて

大阪大学文学研究科の教育研究の成果を一定期間単位で報告し、評価を加える『年報』は、この2008年版で4冊目となる。最初の『年報2002』は1997年からの記録であり、この『年報2008』が2007年までをカバーするので、データの蓄積は10年間を越えたことになる。この種のデータは長期間継続して記録されることでさまざまな利用価値を帯びていくものである。その意味では、まだ私たちは仕事を始めたばかりであると言えよう。

この年報が対象とする2006～07年度に、文学研究科の研究・教育に大きな影響を与えた出来事をここで振り返ってみたい。

- ① オランダのグローニンゲン大学からは2006年10月に代表団が来学し、文学研究科に対してEUが支援するエラスムス・ムドゥス・プログラム群のひとつユーロカルチャ・プログラムに域外校として参加するよう働きかけてきた。研究科はこれを応諾し、準備を進めた。2007年度には申請書類作成のための情報を提供し、同プログラムに派遣する学生の募集、選考を行うとともに、来日する学生のための阪大側での英語授業プログラム「地球的文脈の中の日本文化」の編成を行った。最終的に2008年4月、文学研究科は域外校として認可された。このプログラムは2008年10月からスタートすることになる。
- ② 大阪外国語大学との統合、12人の教員の新規受け入れに伴う文学研究科の改組計画についての文部科学省との折衝は、2006年度半ばでほぼ終了した。2007年10月には統合が実現し、文学研究科でも文化動態論専攻が正式に発足した。これに先だって9月の大学院入学試験（秋期）では新専攻も参加し、学生の選考を実施した。2008年4月からは新専攻の授業がスタートした。
- ③ 大学評価・学位授与機構による中期目標期間終了前の暫定評価に対応する現況調査表の作成が、2007年夏から開始された。これは大庭教授をリーダーとし、評価広報室所属の全教員にいく人かの特別参加の教員を加え、2008年3月まで行われた。その後も全学の評価室の指摘に応じて改訂が繰り返されたが、6月に最終的な形が決定した。
- ④ 2008年度に始まるグローバルCOEについては2006年度から検討を始め、2007年度末に、人間科学研究科との協働による「コンフリクトの人文学」など3計画を全学の研究推進室に提出した。このうち2計画が全国応募を認められたが、最終的には「コンフリクトの人文学」のみが採用された。
- ⑤ 2007年10月から2008年3月まで、文法経本館の耐震工事が行われた。これはもちろんわれわれの安全にとって重要な事業であるが、工事期間の騒音と粉塵は、教育研究にとってきわめて大きな困難をもたらした。2008年度の8月からは3期に分けての内装改修工事が予定されている。

このように、研究科の内外では、激動と言ってもよいような変化が進行した。この中で、各専門分野、各室は懸命に自らの使命を果たそうと努めたと言えるだろう。この冊子の刊行が、成果の質・量を広く開示するとともに、達成し得たもの、なお達成し得なかったものを冷静に見つめる機会となることを切望するものである。

最後になったが、多忙の中で、『年報2008』への情報提供に努められた各教員、編集・刊行に多くの力を注がれた評価・広報室の教職員に、深い感謝のことばを捧げたい。

2008年10月

文学研究科長・文学部長  
江川 温

# 大阪大学大学院文学研究科 『年報2008』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

『年報 2008』をこのたび発行する。文学研究科年報は隔年による発行が定められている。『年報 2008』は『年報 2006』とともに、文学研究科の中期計画に基づいて今年度中に実施される外部評価の基礎資料として利用される。その編集にあたっては、『年報 2002』以来の継続性を重視し、各期間を通しての変化が容易に比較対照できるよう配慮した。

年報の内容は二部構成となっている。第 1 部「大阪大学文学研究科および文学部における 2006 年度～2007 年度の教育・研究活動の概要」では、文学研究科・文学部の教育および研究活動全般に関わる事項を報告する。その項目は、『年報 2006』をほぼ踏襲した。

第 2 部「各専門分野における教育・研究活動の概要」では、各専門分野の教育・研究活動について、その特色と、所定の項目ごとのデータを提示した。さらに、期間中の教育・研究活動に関する自己評価も、各専門分野から報告いただいた。2005 年度より、専門分野・専修ごとの具体的な年度目標とその達成状況に関する調査表を、作成・保管することになったが、この自己評価には、そうした日常的な点検作業の成果が示されている。これらの項目に続き、教員個人の期間中の業績が報告される。

今号年報ではまた、大阪外国語大学との統合に伴って新設された大学院の新専攻「文化動態論」についても、専門分野ごとの記事を掲載した。新専攻の学生の受け入れは 2008 年度からのことであったため、割愛した項目も多いが、今後の新専攻各専門分野の活動は、次号以降の年報において継続的に報告してゆくことになる。

データ収集に関して、『年報 2008』の編集作業は、これまでの方針を引継ぎ、文学研究科構成員の負担をできるかぎり軽減する方向で進めた。2007 年度より導入した、個人業績入力用のエクセル・シートは、今号年報の編集作業においても非常に有効であった。シートの仕様にはなお不十分な点もあるが、大学評価に関わる用務が年々増加する中、このシートを用いたワークフローは、編集者側にとっても作業の省力化に不可欠のものとなっている。

『年報 2008』が、これまでの年報と共有する重要な特色は、大学院生の業績について詳細に記載されていることにある。＜『年報 2004』発刊の趣旨＞にあるとおり、文学研究科では大学院生と教員が連名で論文を発表することはきわめて少なく、教員による指導がかなりなされた場合であっても、院生がその研究成果を単著として公刊することが一般的である。したがって、文学研究科の研究成果については、教員の名前が著者として記載された論文や学会発表リストをつくるだけでは不十分であり、大学院生の論文や発表も考慮に入れるべきであろう。もちろん、大学院生のこうした業績リストには、各専門分野の研究活動の成果のみならず、教育活動の成果もまた反映されている。

なお、『年報 2008』も、従来通り、文学研究科のホームページ(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通じて Web 上に公開する予定である。文学研究科の教育・研究活動全般を広く知っていただき、忌憚のないご意見をお寄せいただくよう期待したい。

# **第 1 部**

## **大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要**



\* コメントは、原則として2006年度および2007年度のデータに関するものであるが、『年報2006』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度4月1日のもの。

## 教育活動の基礎的データ

### 1. 大学院の教育活動

#### 1-1. 大学院博士前期課程入学者

一般選抜による入学者数は、2006年度、ここ数年で最低の数字となり、総計においても、はじめて募集人員(82名)を下回った。ただし、この状態は2007年度には解消されている。社会人選抜による入学者数は、『年報2006』において指摘された減少傾向が、2006年度から2007年度にかけても続いている。外国人留学生特別選抜による入学者も、今期はやや低目の数字となった。

表 1-1-1 大学院(前期課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2001	66	13	9	88
2002	68	10	13	91
2003	73	8	13	94
2004	77	7	15	99
2005	68	4	15	87
2006	61	3	9	73
2007	74	4	11	89

#### 1-2. 大学院博士前期課程学生

2006年度に学生数が大きく減少しているが、これは、その前年度の修了者数が例年に比べ多かったことと、当該年度の入学者数が少なめであったことによる。休学者、留年者については、ここ数年、全体としては緩やかに減少の傾向がみられる。

表 1-1-2 大学院(前期課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2001	228	31	44	84
2002	227	31	50	91
2003	220	28	38	83
2004	230	16	37	85
2005	223	23	39	100
2006	187	15	30	78
2007	193	21	31	59

### 1-3. 大学院博士後期課程入学者

継続して募集人員(41名)をうわまわる入学者数は確保されている。ただし、社会人特別選抜の入学者に関しては、ここ数年低い数字が定着しつつある。一般選抜の入学者数も、大きな流れとして減少の傾向がうかがわれる。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2001	54	12	10	76
2002	53	8	8	69
2003	60	6	7	73
2004	45	5	15	65
2005	34	2	9	45
2006	44	3	9	56
2007	26	3	17	46

### 1-4. 大学院博士後期課程学生

ここ数年で最も多かった2003年度から2004年度に比べ、学生数は減少の傾向がうかがわれる。休学者数は、2007年度、ここ数年で最も高い水準に達した。学位論文提出者の在学学生全体に対する割合は、2003年度(12.0%)以来、常に10%を下回ってきたが、2007年度、これまでで最も高い14.1%に達した。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数	退学者数
2001	292	52	28	51
2002	294	63	29	34
2003	318	81	38	42
2004	321	76	25	57
2005	294	77	28	36
2006	304	81	24	50
2007	290	93	41	46

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。

### 1-5. 大学院研究生

日本人研究生は、2004年度から2005年度にかけてやや増加したが、おおむね大きな変動はない。留学生に関しては、2006年度から2007年度にかけて増加した。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2001	13	3	16
2002	12	4	16
2003	12	4	16
2004	20	2	22
2005	21	2	23
2006	14	7	21
2007	13	8	21

## 2. 学部の教育活動

### 2-1. 学部入学者

一般入試による入学は、定員(前期日程 125 名、後期日程 40 名、計 165 名)を 10 名程度うまわる数で推移しており、大きな変化はない。外国人入学者は、2004 年度から 2005 年度にかけては 0 名の状態であったが、2006 年度、2007 年度は入学者があった。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2001	176	4	180
2002	172	2	174
2003	178	2	180
2004	174	0	174
2005	174	0	174
2006	177	2	179
2007	173	1	174

### 2-2. 学部学生

学生数・卒業生数に大きな変化はない。休学者数および留年者数は、年度ごとの変動はあるものの、おおむね大きな変化はない。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2001	791	33	72	171
2002	783	36	79	182
2003	777	41	70	171
2004	773	29	64	150
2005	791	35	87	179
2006	785	28	74	163
2007	793	31	84	188

### 2-3. 学部研究生

日本人、留学生とも、全体としては、ここ数年漸減の傾向がうかがわれる。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2001	19	20	39
2002	15	15	31
2003	32	10	42
2004	15	23	38
2005	12	14	26
2006	10	10	20
2007	9	10	19



## 研究推進室

### 組織・体制

文学研究科内のさまざまなレベルの研究活動の現状をトータルに把握し、かつ研究を支援する機能をそなえた組織が「研究推進室」である。そのメンバーは文学研究科の教職員によって構成される。「研究推進室」の室長および副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱することになっている。

「研究推進室」は、「科研・共同研究部門」「図書管理部門」「紀要・論叢部門」の3部門体制になっており、各部門にチーフが置かれている(チーフは室長が委嘱する)。各部門が行っている業務内容は、次のとおりである。

### 1. 科研・共同研究部門

- 1) 文学研究科共同研究の募集・選定、運営に関すること
- 2) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供、申請書作成・計画実施の補助に関すること
- 3) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること
- 4) 全学研究推進室その他の関係組織との連絡・調整に関すること

### 2. 図書管理部門

- 1) 「学生自習室」の管理運営および設備機器の充実に関すること
- 2) 文学研究科共同利用にかかる図書、資料に関する企画、運用に関すること
- 3) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡、調整に関すること

### 3. 紀要・論叢部門

- 1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』および『待兼山論叢』の発行、ならびにこれに付随する諸問題の処理に関すること
- 2) その他

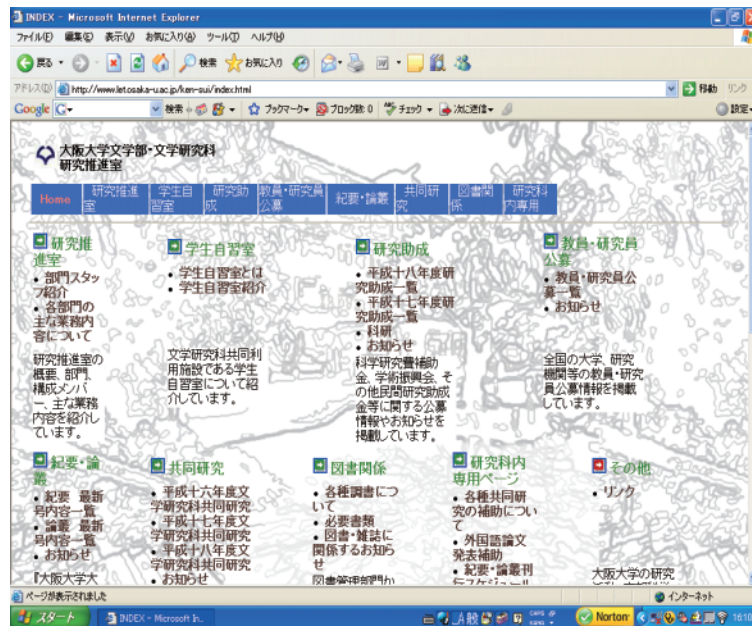
### 活動状況

1. 「研究推進室」独自のホームページの運営。
2. 文学研究科内共同研究の募集および管理(平成18年度4件、平成19年度6件)にあたったほか、文学研究科教員が中心となり開催する研究会への補助をおこなった。(平成18年度7件、平成19年度7件)
3. 競争的外部資金の情報収集・広報をおこなったほか、文部科学省の募集するプログラムへの応募を推進、支援した。(海外先進研究実践支援プログラム等)
4. 科学研究費補助金応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナーの開催(7月、3月)、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを行い、採択率向上に貢献した。

年度	申請件数	採択率(%)	交付総件数	交付額(千円)
19	48	60.4	57	130,080
20	43	43	72	168,210

5. 日本学術振興会特別研究員応募を支援する体制も整え、申請書作成セミナー(3月)を行うとともに、申請時のアドバイスおよび申請書類のチェックを行った。
6. 文学研究科共同施設である「学生自習室」の効果的な運営につとめ、夜間および土曜日開室も実施した。

7. 附属図書館から依頼のあった各種調書の各専攻への連絡、調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌、図書の運用を支援した。
8. 『文学研究科紀要』第47巻、第48巻（斯波義信名誉教授、山崎正和名誉教授 文化功労者顕彰記念号）『待兼山論叢』（計5冊）40号、41号を刊行した。
9. 「外国語論文発表補助」事業として、研究成果を国外へ発信し情報交換を促進するために、文学研究科の専任教員（助教）および博士後期課程学生が国内外の学術誌に発表する外国語論文の校閲費用の補助をおこなった。  
（平成18年度10件、平成19年度9件）



【研究推進室ホームページ】

URL <http://www.let.osaka-u.ac.jp/ken-sui/index.html>



「文学研究科共同研究成果報告書」



「学生自習室の風景」

（荒木浩）

## 評価・広報室

### 組織・体制

評価・広報室は、2004年度の法人化に伴い、従来の企画・評価委員会と広報委員会を合体させて新たに設置したもので、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動をになっている。

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門によって構成され、室長・副室長を除く室員全員が、そのいずれかに所属している。ただし、一部の室員は、複数の部門（具体的には広報部門とネットワーク部門）に所属している。研究評価部門は、教員・大学院生の研究業績を初めとする各種データの収集や年報の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント（FD）実施など、広報部門は高校生の大学見学や出張依頼講義への対応、『文学研究科紹介』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの管理など、また、ネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長および副室長は、室全体の活動を統轄するとともに、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統轄している。また、教務補佐員1名が配置され、室の事務全般を担当している。

(村田路人)

### 活動状況

#### 1. 評価・広報室全般

##### 1-1. 各部門の活動内容と会議（室会議、総務委員会）

本室には、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門があり、この2年間の活動内容は次の通りである。研究評価部門は『年報2006』の編集と刊行を行い、教育評価部門はFDや各種アンケートの企画・実施にあたった。また、広報部門は『文学部紹介』『大学院紹介』等の作成・刊行やHPの維持・管理や文学部説明会・見学会の開催等を行い、ネットワーク部門は文学研究科サーバ、メールアドレス、LAN等の維持・管理にあたった。

また、本室の会議には、各部門の個別の部門会議、室長と副室長そして部門のチーフによるチーフ会議、室員全体が出席する全体会議がある。部門会議は各部門において単独で開催し、各部門に分担された事案について協議した。チーフ会議は必要に応じて開催し、主に本部からの依頼事項の処理等にあたった。全体会議は隔週の木曜日に開催し、室員全員で当室の全体的な活動の問題に対応した。室長は総務委員会において当室の活動報告を行い、問題点等があれば室に持ち帰って協議・対応した。

##### 1-2. データ収集（全学基礎データ、教員基礎データ）と『年報』作成

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」のデータ収集については、積極的にこれに関わり、各専門分野や各教員の自己評価への意識を高めた。「全学基礎データ」の資料は、『全学基礎データ2006』、『全学基礎データ2007』という小冊子にまとめ、文学研究科内の各種評価に便宜を図っている。

また、これらのデータに基づき自己評価書である『年報2006』を刊行し、本研究科の専門分野別の教育・研究状況ならびにその自己評価を学外に向けて公開・発信した。これに関して特筆すべきは、「教員基礎データ」と『年報』とReaDに共通して利用できるデータベース作成用ソフトを制作したことである。これによって、教員基礎データとReaDへの入力率の上昇と『年報』の情報の充実が見込まれる。

##### 1-3. 年度計画・達成状況と暫定評価「現況調査表」の作成

例年通り、年度計画の策定（12月）と達成状況の自己評価（3月）を行った。これは全学規模の評価活動の一環として、中期計画・中期目標の方針にのっとり行ったものである。本室では、評価体制の基盤構築と広報活動の活発化を中心に計画をたて、活動を行ってきた。たとえば、前者に関しては上記のソフト制作、また後者に関しては各種紹介冊子の

内容の充実、HP のリニューアル（英文 HP を含む）、高校生のための文学部説明会・見学会の積極的な開催等があげられる。いずれも計画通り実行することができた。

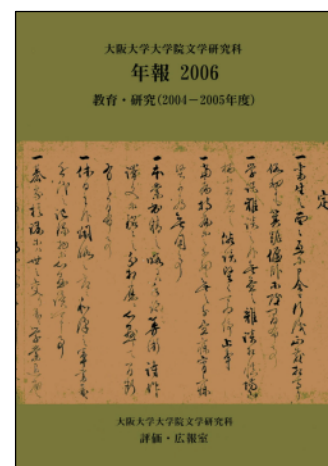
また、2007 年度は暫定評価「現況調査表」を作成した。これは 2004 年度から 2007 年度までの教育（学部と大学院）と研究（大学院）について、文学部・文学研究科の組織として自己評価を行ったものである。本室の室員全員と教育支援室の室員 3 名と評議員でこの作業にあたり、約 1 年間（2007 年 7 月から初め 2008 年 6 月まで）を要し作業が完了した。作成した「現況調査表」は印刷して記録に残した。

（大庭幸男・福永伸哉）

## 2. 研究評価部門

### 2-1. 年報

2006 年度には過去 2 年間(2004~2005)における教育・研究活動の情報を収集整理した『年報 2006』（A4 判 368 頁）を刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務部はもちろん、学内の他部局、学外機関等を含め、400 冊以上を配布した。法人化にともない教育・研究の支援体制として整備された 4 室（教育支援室、研究推進室、国際連携室、評価・広報室）の活動状況が詳細に報告されている点や、「魅力ある大学院教育」、「性差別問題委員会の活動」、「大阪外国語大学との統合にともなう改組計画」といった記事が掲載されている点が、『年報 2004』（A4 判 330 頁）とは異なっているが、基本的な編集方針はこれを踏襲した。したがって第 1 部には研究科全体としての組織運営・活動に関する記事を、第 2 部には各専門分野単位の活動をまとめた記事を、さらに付録として 2005 年度に実施された「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」および「卒業生アンケート」の実施結果報告をそれぞれ掲載した。各専門分野が活動成果に基づいて行った「過去 2 年間の自己点検と評価」を掲載することにより、この冊子がたんなる情報発信のためだけのものではなく、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。各専門分野および各教員からのデータは、第 1 次締切りの段階で約 3/4 を回収し、データ収集が完了したのは締切り後 1 ヶ月、これを上出来と見るかいは意見の分かれるところであろうが、当初の編集作業計画の見直しを余儀なくされたことは事実である。また、教員データに関して言えば、記載項目および記載順の不統一や該当頁数の記載漏れが多かった点など、専門分野の記事に関して言えば、該当年度以外の活動が多く記載されたまま提出され、複数回の校正にもかかわらずなかなか修正されなかった点など、次号を刊行する際には留意すべきであろう。なお、『年報 2006』は文学部・文学研究科の公式サイトにおいて PDF ファイルとして公開中である。



『年報 2006』文学部・文学研究科  
公式サイトにて PDF で公開中。

### 2-2. 専門分野別年度目標

2004 年度に文学研究科・文学部の自己点検評価の実施方法について検討した結果、23 専門分野が年度当初に「教育」「研究」「社会貢献」について年度目標を設定し、これに対する達成度を年度末に自己点検する方式をとることになった（ただし達成度の報告は、次年度当初に行われる目標設定の報告と同時にされる）。この方式による自己点検評価は 2005 年度から始まっていたが、2006 年度において初めて、前年度に設定された目標の達成状況について自己評価が行われた。どの程度の評価を行えばよいかに関する問い合わせが多く、参考として哲学哲学史専門分野のファイルを送付した。2007 年度も、各専門分野に対して 2006 年度の達成状況に関する自己評価と年度目標の設定を依頼し、情報を蓄積した。引き続き、年度目標や達成状況の自己評価結果をどのように周知活用していくかといった運用面についての検討を進めていくことが必要である。



## 2-3. DB ソフト

2006 年度までは、各教員の研究業績データが、全学レベルの教員基礎データと文学研究科『年報』の作成用データとして、それぞればらばらに収集されていた。このうち後者に関しては、100 パーセントの提供が実現されていたが（そもそもデータが 100 パーセント揃わなければ文学研究科『年報』の意味がないだろう）、前者については、入力それ自体が煩瑣であることに加え、登録事項が必ずしも文学研究科教員に独特の研究業績をすべて反映できるように設定されているとは言えず、データ収集がうまく行われていなかった。諸般の理由から前者のデータ更新率を高める必要があり、各教員から年に 1 度データを収集するだけで、それを教員基礎データにも『年報』作成用データにも転用できる方が検討され、福永副室長をチーフとして大庭室長、栗原研究評価部門員、舟場研究評価部門チーフの 4 人でデータベースソフト（＝DB ソフト）を開発するワーキング・グループを形成した。ワーキング・グループでは会議を重ね、教員基礎データと『年報』データの登録項目が異なる件やプルダウンによる処理の件、使用する PC の機種やソフトのバージョンのせいでデータ入力に際してコピー＆ペーストを利用するとエラー表示が出る件など、大小さまざまな問題をひとつひとつ解決し、着手より 5 ヶ月余りを経てようやく納品が完了した。その後も微調整を重ねる必要はあったが、2007 年度は教員基礎データの更新率を大幅に高めることができた。

## 2-4. その他

上記以外にも、暫定評価書の作成や全学の年度目標および達成状況評価シートの記入、全学基礎データの収集および冊子化、GCOE に応募するためのデータ収集など、研究評価部門の果たす役割は多岐にわたった。

なお、いずれの仕事に関しても事務スタッフである高橋理恵氏の貢献を抜きにして語ることはできない。

（舟場保之）

## 3. 教育評価部門

2006（平成 18）・2007（同 19）年度に、評価・広報室ないしその教育評価部門が関わって行ったアンケートおよびファカルティ・ディベロップメント（FD）について、報告する。

### 3-1. アンケート

評価・広報室は、2006 年 10 月 6～18 日、2005・2006 年度に入学した他大学出身の大学院生（博士前期課程）を対象として、アンケートを行った。この結果は、FD の一環として 2007 年 1 月 25 日開催の教授会懇談会で報告し検討し、また、総務委員会でも検討の上、ホームページ（<http://www.let.osaka-u.ac.jp/letters/internal/surveys/surveyG2006.pdf>）に、「概観」「結果の分析（設問 1～設問 15 について、自由記述欄について）」および、設問 1～設問 15 の集計結果の表を掲載した。

また、評価・広報室を中心とする暫定評価「現況調査表」作成会議は、2007 年 10 月、学部学生・大学院生を対象として、「平成 19 年度学部生の教育・研究環境等に関するアンケート」「平成 19 年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」を行い、また、暫定評価「現況調査表」作成会議（教育支援室から加わった者を中心に）は、同じ時に、学部卒業生・大学院修了生を対象として、「平成 19 年度文学部卒業生アンケート」「平成 19 年度大学院修了生アンケート」を行った。これらは、暫定評価「現況調査表」作成に利用された。これらのアンケートの結果をどのように発表するかについてであるが、とりあえず、「平成 19 年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」「平成 19 年度大学院修了生アンケート」について、この『年報 2008』に掲載するが、その他を含めて追ってホームページに掲載する方向で検討中である。

### 3-2. ファカルティ・ディベロップメント（FD）

2006 年 11 月 16 日、文学研究科・文学部は研究教育フォーラムを開催し、その中の FD 関係として、グローニンゲン大学教授・国際日本文化研究センター客員教授リエン・T・セーガース氏により、「The Changing Status of Universities and Globalizing Tendencies : An Outside View Based on a Comparative Approach」という題で講演していただいた（司

会：大庭幸男教授)。参加人数は約 40 名。

2007 年 3 月 4・5 日、文学研究科（研究推進室、教育支援室、評価・広報室、国際連携室）主催の FD 講演会・FD セミナーを開催した。4 日の FD 講演会は、タイのチュラロンコーン大学教授プラトゥーム・アングラロヒタ氏により、「Internationalizing University Education in Humanities（大学における人文学教育の国際化に向けて）」という題で講演していただいた（司会：望月太郎教授）。参加人数は約 40 名。また、5 日の FD セミナーでは、同氏を囲んで、英語を母語としない教員による英語授業の方法・課題をめぐって懇談した。参加人数は約 10 名。

また、2007 年 1 月 25 日開催の教授会懇談会において、他大学出身の大学院生（博士前期課程）を対象としたアンケートの結果について報告し検討したことも、FD の一環としてである。

(蜂矢真郷)

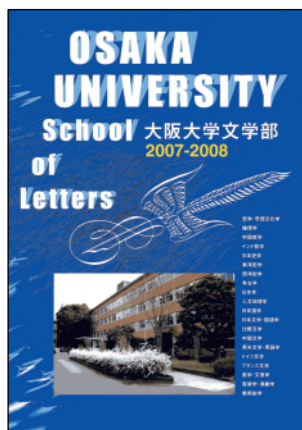
## 4. 広報部門

2004 年 4 月 1 日に委員会が改組され四室体制となった時に評価・広報室が発足し、その中の一部門として広報部門が誕生し、それ以来 4 年の歴史を持つに至った。広報部門は大学における広報の役割の重要性を認識し、文学研究科・文学部から発信する情報を常に刷新し、また広く高校生や社会人に研究と教育の現況の情報を提供し続けている。冊子メディア、電子メディア(HP)、オープンキャンパスに分け、三つのジャンルの活動について、2006 年度から 2007 年度を概観し、その問題点と今後の展望を述べておきたい。

### 4-1. 冊子メディア

文学部で広報活動の一環として重要なものが、『文学部紹介』である。この冊子は、毎年刊行されているもので、各高校、各種大学説明会などで配布される。毎年 6000 部を刊行し、文学部の研究と教育の現状と理念を分かりやすく紹介している。構成は、文学部のアドミッション・ポリシー、文学部長挨拶、入学後の学習課程、各専修紹介、文学部沿革、卒業後の進路、その他懐徳堂記念会の紹介や、埋蔵文化財調査室などの紹介まで、文学部に関わる基本的な事項が網羅された簡便な紹介冊子である。

中でも専修紹介には力を入れており、毎年のように掲載写真を刷新し、紹介原稿に修正を加えることで常に最新の情報を提供している。またここでは各教員すべての、専門領域と研究テーマ、そして高校生へのメッセージを、顔写真入りで掲載している。文学部内の専修の教育と研究のあり方を、各教員の生の声と写真とで、きわめて人間的で、近づきやすく、そして視覚的にも豊かに提示している。2004-2005 年版から導入した新しい編集方針により、現任教員・在校生・卒業生の声を「Meet 教授陣に聞く、学問の魅力」「Campus Life」「Face 大阪大学の輝く先輩」という一連の欄にまとめ、大阪大学文学部の魅力を教員・在校生・卒業生と様々な視点から語ってもらう工夫を行っている。専修紹介では各研究を分かりやすくキャッチ・コピーで提示している。また卒業論文一覧を各専修紹介の中に収め、同時に開講科目の題目名を掲載することで、専修の



『大阪大学文学部 2007-2008』



『大阪大学文学部 2008-2009』



『大阪大学大学院  
文学研究科紹介 2007-2008』



『大阪大学大学院  
文学研究科紹介 2008-2009』

イメージを膨らませやすくしている。また卒業後の進路のページにも力をいれ、文学部を出た後の姿をイメージしやすくしている。

『大阪大学大学院文学研究科紹介』も毎年刊行しており、全国の大学に配布している。最新版の『文学研究科紹介 2007-2008』では、2007年10月に大阪外国語大学と統合したことを受け、文学研究科に移籍された教員の情報も含め、大幅な書き換えを行った。

#### 4-2. 電子メディア

大学と学部選択、及び大学院と研究科選択にあたって学生たちが参照する割合が最も大きいのが、文学部公式サイト(以下 HP と略記)である。ほとんどの新生は HP を見て、詳しい情報を得ている。HP 充実は、広報活動としては、『文学部紹介』と共に極めて重要な位置を占めている。

HP の中では、『文学部紹介』での内容とは基本的に変わらないものの、差違化を計った情報発信を行っている。大学院入試問題の掲載を行うことで、入学希望者への便宜を図っている一方で、各教員の出版、受賞、研究会などの様々な活動を「トピックス」欄においてタイムリーに掲載することに努力し、冊子媒体にはない迅速な情報提供に資している。また英語版 HP も作成し掲載している。

何年か大阪大学文学部・文学研究科の HP は同じデザインを踏襲してきたが、2005年度に、よりスリムで分かり易い HP を目指して準備を行い、2006年度よりデザインを一新し、情報を取り出しやすいものとした。2007年10月に大阪外国語大学と統合したことを受け、情報を大幅に刷新した。

#### 4-3. オープンキャンパス

広報活動の3つ目の柱はオープンキャンパスである。これには大阪大学の全学部が8月に行う大学説明会の一環として文学部で行うものと、文学部独自に行う文学部見学会がある。

文学部独自の見学会は、希望する高等学校から事務局学生部学務課総務係を通じて申し込みをもらい、評価・広報室で受け入れの可否を決定する。2007年度に、受け入れのガイドライン策定を行い、その基準により受け入れの諾否を決めている。毎年教員がそれぞれの専門を高校生向けにわかりやすく授業し、文学部の研究と教育への関心の向上を図っている。同時に、各研究室を開放し、自由に高校生に研究室の雰囲気味わってもらい貴重な機会を提供している。この見学会は文学部独自のものであるため、高校生のニーズに合わせて柔軟に対応している。

また毎年8月に行われる大学説明会(文学部)には、多くの高校生や父母が来られ、毎年千人前後の参加者があり、関心の高さが窺われる。学部長の挨拶の後、教員の講演、在校生のスピーチ、各ブロックから一人ずつ教員が出て各ブロックの教育と研究を分かりやすく説明する。その後、参加者との質疑応答があり、参加者への理解を高める努力をしている。

ここ何年かは、個別に高等学校が見学を要望されるケースが増えている。その都度、出来る限り対応するよう努力を行っており、2006年度には、滋賀県安曇川高校、岡山大安寺高校、広島城北高校、福岡県立明善高校、大阪府立池田高校、群馬桐生高校の見学会受け入れを行い、2007年度には、梅花高校、広島城北高校、金沢二水高校、開明高校の見学会受け入れを行った。2007年からの受け入れはガイドラインに従って決定している。

この他、各種大学説明会が学外で開催されているが、それらの説明会にも上記冊子媒体や入学要項、その他の冊子を提供するなどして広報に努めている。



「文学部説明会」(2008年度)

#### 4-4. 展望

2006年度から2007年度の広報関係の状況は以上の通りであるが、文学研究科としては破格の予算を計上して、懸命の広報活動を行っているが、事実上評価・広報室に所属する教員が専ら対応しているため、対応には限界がある。金銭的なリソースが少ないというだけでなく、広報部門の教員の数は限られており、紹介冊子、電子メディア、オープンキャンパスという三本柱のルーティンをこなすだけで精一杯という状況が続いている。今後、一層激化する大学間競争において、広報活動が果たす役割は大きく、何らかの抜本的対策を講じることが望まれる。今後の課題として、広く社会に開かれた広報活動の活性化を挙げたい。大阪大学の重点化以来、文学研究科が本体となったわけだが、大学院の広報にまで手が回らないという状況は続いている。様々な課題を抱えながらも、何とか少しずつでも改革を進めることが肝要であろう。文学部見学会を積極的に受け入れているのも、地道な活動ではあるが重要なことであり、見学会に来られる高校の希望とこちらのキャパシティのすりあわせのために、受け入れガイドラインを策定したのも一つの成果であった。

(服部典之)

### 5. ネットワーク部門

評価・広報室、ネットワーク部門の主な業務は、文学研究科サーバ管理、教職員および学生へのメールアカウント管理、その他、研究科内ネットワーク設備の管理およびネットワーク・セキュリティの維持全般である。以下に、「サーバ管理」「メールアカウント」および「ネットワークの維持」に分けて2年間の総括を行う。

#### 5-1. 文学研究科サーバ管理

ネットワーク部門が管理してきたWebサーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、COEプログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会におけるITへの依存度が増せば増すほど、サーバの安定運用ということが求められるのであり、Webやメールが止まることで、さまざまな業務がたちまち大きな影響を受けることになるのである。しかも、外部からのアタックやウィルスメールなど、ネットワークに対する脅威への不安も日々高まる一方であり、セキュリティ保持の作業は、大変責任の重い業務である。

ネットワーク部門では、このような問題を解決するために、2007年4月にWebサーバ、メールサーバ、ネームサーバを、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスにお願いし、文学研究科内のサーバマシンには、DHCPの機能のみが残された(後にこれも停止。5-3参照)。このことによってサーバの安全性が格段に増大することになった。引き続き、ネットワーク部門では、ホームページ管理用のアカウント管理などを行っている。

#### 5-2. メールアカウント

上に述べたように、文学研究科では、...@let.osaka-u.ac.jpのアカウントを発行している(サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託したが、メールアカウントの管理は引き続き、評価・広報室のネットワーク部門が行っている)。教員および非常勤の職員は、ほぼ全員このアカウントを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、以前より発行数が減少している。この減少は、全学生について、教育システムによるメールが使えるということが浸透したため、研究科発行のアカウントを必要としなくなったことによるものと考えられる。一方、メーリングリストの設定は増加しており、室・委員会等の運営において、メーリングリストの利用はもはや不可欠のものとなっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のものとなった以上、もとめられるのは、安全・安心な運用である。これは即ち、サーバダウンの回避、ウィルスメール、スパムメール等の排除など、セキュリティの確保を意味する。サーバの維持については、前節に述べたとおりで、2006年度からのサイバーメディアセンターによるホスティングサービスによって、より安定した運用がなされることとなった。ウィルスメール対策についても、ODINSが提供するウィルス監視システムを介することによって、かなり安全性が高まった。しかしながらこれでも完全ではないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェックなど、今後も油断なく続行していく必要がある。一方、最近とみに増加しているのが、スパムメールで



あり、メールの利便性を大きく損なうものである。これに対しては、サーバや端末でのスパムチェックがあるが、いまだ、完璧な防護策とはなっていない。スパムチェックの感度を高めると、必要であるメールが届かないということも起きるので、バランスを考えつつ運用して行く必要がある。

### 5-3. ネットワークの維持

時折、ネットワークの不具合が生じる。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどの現象であるが、原因としては、端末の不具合、設定の誤り、DHCP のトラブル、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等さまざまであり、その原因の特定が難しい。不具合の報告を受けた場合、ODINS 機器の不具合であることが考えられれば ODINS の職員の方が対応して下さるのだが、まずはネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であり、望ましいこととは言えないが、部局ネットワークの維持が部局の責任として任されている以上、致し方のないことであった。こうした事態を改善するために、業者と契約し、ネットワーク不具合時には、問題の切り分けを依頼することができるようになった。

それに加えて、大学全体のネットワーク（ODINS）の更新も 2007 年度に行われ、2008 年度からは、より安定したネットワーク運用が可能な状況となっている。

また、DHCP サーバで運用していると、その問題により、ネットに繋がらないことがしばしば起きたし、問題となる端末の特定も困難であることもある。そこで DHCP サーバを停止して、すべて固定 IP アドレスで運用することとした。DHCP の停止により、サーバ維持のコストも不要となり、安定した運用が行いやすくなった。

### 5-4. 展望

すでに述べたように、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバはすでにサイバーメディアセンターのホスティングサービスに移行し、DHCP サーバを廃止した。とはいえ、なお残る問題や固定 IP ならではの問題もあり、これを今後どのようにしていくかが一つの課題となる。サブネットワークの管理責任者を設定して、サブネットワークの問題はできるだけその中で解決していただくという管理方式を徹底していけば、ネットワーク部門の教員の負担もある程度軽減されるであろう。インターネットの維持・管理は、全てのユーザによる不断の努力が不可欠であるということを、文学研究科ユーザが自覚していくためにも、管理責任の分割は必要な方針であると考えられる。

また、各ユーザが、必要な知識がないままネットワークに接続すると、問題が生じることもあり、そのためにも、ネットワークについての情報提供がますます望まれる。研究科内向けのホームページに、ネットワークに関する情報を載せるなどして、情報提供に努めているが、より一層の情報提供活動が必要となるであろう。

(岡島昭浩)

## 教育支援室

### 組織・体制

教育支援室は、文学部学生・文学研究科大学院生に対する教育支援のための組織で、2006 年度、2007 年度は、下記の体制のもとに運営された。

教育支援室長（1名）・副室長（2名）

- (1) 教務・学位部門：部門チーフ、学位専門委員および室員
- (2) 入試部門：部門チーフおよび室員
- (3) 学習・生活支援部門：部門チーフおよび室員
- (4) 就職支援部門：部門チーフおよび室員
- (5) 共通教育部門：部門チーフおよび室員

(1)教務・学位部門と(2)入試部門と(4)就職支援部門は、従来の部門のままである。(3)学習・生活支援部門は、従来の2部門、すなわち学習支援部門と生活支援部門を統合したものである。(5)共通教育部門は、大学教育実践センターの兼任教員を中心に新たに設置した部門である。また、博物館実習委員会、教務係、庶務係、会計係とも連携しつつ、教育支援室の三役会議、チーフ会議と各部門会議によって運営が進められた。

従来と同様に、学生・院生に対する教育支援を充実させるために、非常勤職員2名を配置し、常時学生の相談ができる体制をとり、また新たに2007年度から5時以後7時までは学生アルバイトによって開室した。また、ホームページの充実、第2ミーティングルームの管理運営、授業用機器の貸し出しなどを行なった。

## 活動状況

### 1. 教育支援室長・副室長

#### 1-1. 会議

総務委員会とも連携しつつ、下記のような会議を開催した。

##### 【2006年度】

- (1)2006年3月に教育支援室全体会議を開催して、2006年度と2007年度の2年間は、基本的に同じ室長、副室長、部門チーフ（教務・学位部門だけは負担が重いため1年任期）、室員という体制で取り組むこと確認し、部門チーフと各部門室員の確定を行なった。
- (2)各部門会議は、教授会開催日（原則隔週）におこない、正副室長、部門チーフからなるチーフ会議は、教授会のない木曜日の午後、総務委員会（原則隔週）の前に行なった。チーフ会議には、教務係長、事務スタッフ、また必要に応じて関係教員も、出席した。また必要に応じて、教育支援室の三役会議（正副室長会議）を教授会の前に行い、教育支援室全体に関わる調整などを行なった。
- (3)室長は、常に総務委員会に出席して、教育支援室チーフ会議における重要な案件を説明した。総務委員会における議論や判断を、教育支援室に持ち帰りチーフ会議で決定した。
- (4)室長は、教授会開催前に、「教育支援室活動報告」を教授会メンバーにMLで配布し、必要に応じて教授会で口頭で補足説明を行なった。また教授会では、必要に応じて、副室長、各部門のチーフからも報告を行なった。また、教員全体の意見集約、議論が必要な案件は、教授会懇談会の課題とした。また、室長はチーフ会議の「議事録」を作成し、全室員、事務スタッフにMLで配布した。
- (5)室長は、教育課程委員会に出席し、全学との連携を図った。

##### 【2007年度】

- (1)2007年4月4日のチーフ会議で、教務・学位部門と共通教育部門のチーフの交代を確認し、昨年度の反省、年間計画の確認などを行なった。
- (2)2006年度と同様に、チーフ会議と部門会議を隔週に行った。チーフ会議は、18回開催し、必要に応じて、正副室長で三役会議を行った。
- (3)2006年度と同様に、室長は、常時総務委員会に出席し、文学部・文学研究科全体における調整をおこなった。
- (4)室長は、教育課程委員会に出席し、全学との連携を図った。

#### 1-2. 教育支援室（玄関横）の運営

文学研究科本館の玄関横に設置した教育支援室は、室長をはじめとする教育支援室の教員と事務スタッフが協力して運営にあたってきた。開室は月曜日から金曜日の午前10時から午後5時までであったのを2007年4月より午前10時から午後7時までとした。情報機器ではパソコン6台、プリンター1台、コピー機を配置している。就職関連図書を配架し、室内外に設置した掲示板に求人情報などの各種案内を掲示して学生の利用に供してきた。

事務スタッフは、2005年度から非常勤職員2名が常時在室する体制をとり、来室する学生の相談などに対応している。

2007年4月からは、午後5時から午後7時までを非常勤職員(大学院生)が図書の貸出しなどにあたっている。

また、正副室長、部門チーフ、教務係等との連携のもとに、次のような活動を行った。教育支援室内の情報機器やホームページの維持管理、各種案内の掲示、プロジェクター・スクリーン・スピーカーなどの備品の貸出しや保管、過去の大学院入試問題の公開と複写サービス、TAの任用やTA研修会に際しての案内、大阪大学が初めての院生のためのガイダンスの案内、奨学金の返還免除申請に必要な書類の配布、第2ミーティングルームの利用受付と鍵の管理、学習相談の窓口を務め、学習報告書を管理、就職関係では求人票の管理・履歴書用紙の配布・就職関係図書の購入及び貸出・就職ガイダンスや就職説明会の事務、博物館実習ノートの管理、教育支援室の予算書・決算書・年度計画書、年報・外部評価報告書などの教育支援室関連部分の作成のための事務補助、教育支援室内の各種会議の会場設定や資料作成などである。



「教育支援室」

### 1-3. 教育支援室ホームページ

教育支援室ホームページの開設は2004年度、2005年度に、教育支援室に関連するすべての業務に関する包括的なホームページを構築した。2006年度にはweb版シラバスを公開し、インターンシップ報告書、留学の案内などを掲載した。引き続き、全教員のオフィスアワー、奨学金返還免除の情報や就職活動を支援する情報の掲載を行ってきた。また、相談フォームからのメールによる学習相談を随時受付している。



【教育支援室ホームページ】 URL <http://www.let.osaka-u.ac.jp/kyoushi/index.html>

### 1-4. その他の活動と今後の課題

- (1)2007年度の二学期から KOAN が導入され、文学部でもこれに取り組んだが、文学部のカリキュラム編成は、他部局に比べて非常に複雑であり、多くの困難があった。今後は、カリキュラム編成の科目設定を簡素化してゆく必要がある。
- (2)学部及び大学院の成績評価のガイドライン策定および、そのための成績評価の現状の調査を、さらに推進する必要

がある。

(3)2008年3月に、文学部と文学研究科の学位記授与式を豊中キャンパスの文学部の教室で実施した。今後もこれを充実させることが望ましい。

(入江幸男)

---

## 2. 教務・学位部門

### 2-1. 教務関係

教務係と連携しつつ、教務に関する業務を行った。神戸大学、大阪外国語大学との相互履修制度に基づく教育交流も担っている（ただし、大阪外国語大学とは統合により2007年9月をもって解消）。社会人等に向けて「大学院の長期履修学生制度」の導入を決定し、そのための内規ならびに運用規則を整備し、2006年度末から申請を受け付け、2007年度より実施を開始した。06年度末には博士後期課程の学生1名がこの制度を初めて利用したが、07年度末には修士課程、博士前期課程、博士後期課程の3課程にわたって合計7名の利用者が認定された。文化動態論専攻の新設に伴い、既存の科目名の一部修正も含めて、研究科および学部の授業科目名を整理し、規程に反映した。

学部1年次生のため、年度初頭にオリエンテーションを実施し、1学期には全専修参加の「文学部共通概説」を行い、秋には「専修ガイダンス」を通して専修決定への便宜を提供している。さらに、毎春、3年次学生の成績を点検し、卒業論文執筆にあたっての履修状況の把握に努めている。楠本賞・文学部賞の審査基準について検討し、教授会での合意を経て、決定し、2007年度より同基準を適用した運用を開始した。

(須藤訓任・杉原達)

### 2-2. 学位関係

学位部門と教務部門は、チーフだけは別に設けているが、両部門に属する室員は完全に同じであり、全員で業務を遂行している。学位部門が扱うのは、主に博士の学位に関わることで、具体的には論文博士論文と課程博士論文の審査にいたるまでの受領手続き業務であるが、付随的に課程博士にいたる中間段階での博士予備論文の受領と認定、さらにその前段階である修士論文の認定なども扱う。ただし、学士の学位を認定するための卒業論文に関わる業務は、教務部門に委ねている。業務の大部分は、これらの受領と認定をはじめ、院生の論文提出資格の判定、題目提出・論文提出日の確定、教員の可否判定提出締切日の確定などである。

かつて文学博士の学位を取得するのは極めて困難であったが、今や出きるだけ多くの者に博士の学位を授与することが、社会的にも要請されている。そのため学位部門では、大学院生たちが課程博士号を取得しやすいような環境作りに努めている。そもそも博士予備論文というものを設けたこと自体が、指導教員と院生との連携を密にし、課程博士論文執筆が円滑にいくようにとの配慮からであった。その一方で、院生とのトラブルを未然に防ぐために、複数指導教員制度を活用して、課程博士論文の受領がすなわち審査に合格することの保証ではないことを明確化した。

2006年度は78名の文学修士、24名の課程博士、11名の論文博士が、2007年度は59名の文学修士、41名の課程博士、10名の論文博士が誕生している。なお、博士予備論文の合格者数は、2006年度54名、2007年度43名であった。

引継事項になっていた学位論文の評価に、可否判定のみならず段階的な成績判定を設ける件については、あまり積極的な意見が出なかったため、当面は見送ることにした。

(森安孝夫)

---

## 3. 入試部門

教務係と連携しつつ、文学研究科・文学部の各種入学試験とそれに関連する業務を行った。

### 【2006年度】

2007（平成19）年度の文学研究科・文学部入学試験に関する業務を行った。文学部入試に関しては、2007年2月に前期日程の個別学力試験を、同3月に後期日程の個別学力試験を実施した。

文学研究科入試に関しては、秋期（9月）・春期（2月）の二回に分けて実施した。2006年9月には、博士前期課程（一

般)、博士前期課程(社会人)、博士後期課程(社会人)の試験を実施し、2007年2月には、博士前期課程(一般)、博士後期課程(一般)、博士前期課程(外国人留学生)、博士後期課程(外国人留学生)の試験を実施した。また、文学研究科の入学試験については、教育支援室において一定の期間を設けて過去の入学試験問題の閲覧を行うとともに、文学研究科ホームページ上でも一部公開した。このほか、入学試験に関する各種広報活動を文学研究科ホームページなどを通して行った。

教授会懇談会の場で文学研究科・文学部入試に関する反省会を実施した。2007年3月に2007(平成19)年度文学部入試に関する反省会を実施し、2007年6月に同文学研究科入試に関する反省会を実施した。

適切な入学試験のあり方を検討するため、文学研究科・文学部の入学者の入学試験の成績とその後の成績との関連を調査した。

2007(平成19)年度の文学研究科および文学部研究生の選抜を、2006年9月および2007年3月に行った。

#### 【2007年度】

2008(平成20)年度の文学研究科・文学部入学試験に関する業務を行った。文学部入試に関しては、2008年2月に前期日程の個別学力試験を、同3月に後期日程の個別学力試験を実施した。

文学研究科入試に関しては、前年度同様、秋期・春期の二回に分けて実施した。2007年9月には、博士前期課程(一般)、博士前期課程(社会人)、博士後期課程(社会人)の試験を実施し、2008年2月には、博士前期課程(一般)、博士後期課程(一般)、博士前期課程(外国人留学生)、博士後期課程(外国人留学生)の試験を実施した。

文学研究科入試には、本年度より新たに修士課程(文化動態論専攻)の入試が加わり、秋期・春期の二回に分けて実施した。2007年9月には、修士課程(一般)、修士課程(社会人)の試験を実施し、2008年2月には、修士課程(一般)、修士課程(外国人留学生)の試験を実施した。

また、文学研究科の入学試験については、教育支援室において一定の期間を設けて過去の入学試験問題の閲覧を行うとともに、文学研究科ホームページ上でも一部公開した。このほか、入学試験に関する各種広報活動を文学研究科ホームページなどを通して行った。

教授会懇談会の場で文学研究科・文学部入試に関する反省会を実施した。2008年4月に2008(平成20)年度文学部入試に関する反省会を実施し、2008年6月に同文学研究科入試に関する反省会を実施した。

適切な入学試験のあり方を検討するため、前年度に策定した方法に基づき、文学研究科・文学部の入学者の入学試験の成績とその後の成績との関連について調査を開始した。

2008(平成20)年度の文学研究科および文学部研究生の選抜を、2007年9月および2008年3月に行った。

2008(平成20)年度の文学部学士入学試験を2008年2月に行った。

(浅見洋二)

---

## 4. 学習・生活部門

### 4-1. 学習・生活支援

#### 【2006年度】

前年度からの改革として、学習支援部門と生活支援部門を学習・生活支援部門に統合した。これに伴い、奨学金および奨学金返還免除関連、TA雇用関連、インターンシップ関連、学習相談の各セクションについて担当を定め、これまでの経緯を引き継ぎながら初年度をスタートした。基本的には部門会議を隔週に開催し、教務係と教育支援室のスタッフと連携しながらの体制である。まず、日本学生支援機構大学院奨学生の推薦順位について、これまでの経緯を整理し、順位決定についてのルールを明文化して確認した。またTAの募集と決定を例年通り行なったが、これと並行して全学レベルでTAおよびRA制度が見直されつつあることを考慮し、あたらしいTAのあり方について検討し、教授会懇談会(11月30日)などの場で報告した。また昨年を引き続き、TA研修会を前期(4月14日)、後期(10月6日)ともに開催した。

奨学金返還免除については、10月26日に説明会を実施した。またロッカーの使用状況について調査を行い、報告した。年末には文学研究科に本部より照会のあった「留学者・長期欠席者数調」について各専修にアンケート調査を行ない、回答をとりまとめた。

また年度末には事業を総括し、次年度への引き継ぎ事項を確認した。

#### 【2007年度】

部門会議を隔週に開催し、奨学金および奨学金返還免除関連、TA雇用関連、インターンシップ関連、学習相談について、検討を行った。中心的業務の一つであるTAについては、4月11日にTA研修会を開催した（後期については10月初旬に個別に案内した）。今年度からTAの制度が変更になり、特定の授業と結びつけられないTA雇用が可能となったので、報告書様式を再検討し、さらにTAの効率的運用について、会計・庶務係とも連携しつつ、円滑な執行を推進した。奨学金免除については、例年どおり説明会を10月25日に開催した。また、施設や教育環境に関する要望について、教育支援室に投書箱および所定様式を設置することにし、年度末より実施した。

さらに本年度よりはじめての試みとして、「大阪大学が初めての院生のためのガイダンス」を4月12日に開催した。これは院生に対するアンケートでの要望に応えるものである。また昨年同様、「留年者・長期欠席者数調」について各専修にアンケート調査を行ない、回答をとりまとめて教授会で報告した。年度末には事業を総括し、次年度への引き継ぎ事項を確認した。

(伊東信宏)

### 4-2. インターンシップ

---

#### 【2006年度】

これまで同様、インターンシップについて研究科としての情報把握や報告書作成を行なった。

2006年度には、劇場、撮影所、音楽ホールを受け入れ機関として、計10名（他研究科の院生を含む）のインターンシップを実施した。なお、これに関連して、事前事後指導という形で、上記の諸機関から、授業にゲスト講師を招いた。また、受け入れ機関における報告会も実施した。

これらの活動は2006年度インターンシップ報告書としてまとめられ、教育支援室ホームページに掲載されるとともに、冊子として刊行された。ここには当該学生による報告、担当教員によるまとめ、受け入れ機関からのメッセージなどが、掲載されている。また前年度同様、シラバスに「インターンシップを含む科目」という頁を設け、学生への情報提供を行なった。

#### 【2007年度】

本年度も、シラバスに「インターンシップを含む科目」という頁を設け、学生への情報提供を行なったうえ、劇場、音楽ホールなどを受け入れ機関として、計13名（他研究科の院生を含む）のインターンシップを実施した。これらの活動については前年度同様の報告書を作成した。また、前年度のインターンシップ報告書（冊子）を教育支援室に配置する以外に、受け入れ先や大阪大学本部等に配布して、広く活動を周知した。

(中岡成文・伊東信宏)

### 4-3. 学習相談室

---

学内の各部署の学習・生活支援体制を調査したうえで、2004年度に教育支援室のなかに学習相談室を設置した。学習相談室では、専修決定、履修方法、進路相談など学習上の悩みに対して、メールおよび教育支援室への来室に応じて、随時相談を受け付けている。相談件数は、2006年度は14件、2007年度は20件で、先立つ年度に比してやや多くなった。

(上野修)

## 5. 就職支援部門

---

2006年度及び2007年度に行った就職支援活動は、以下の(1)から(8)に挙げるものである。

### 5-1. 就職ガイダンス

---

文学研究科・文学部では7月と10月に就職ガイダンスを実施してきたが、この2年間も同様のガイダンスを行った。7月には同窓会との共催で、実社会で活躍する卒業生3名を招いての講演および就職活動体験談を披露してもらうガイダンスを行い、2006年度に60名、2007年度に40名の学生参加があった。10月には、(i)就職情報会社による就職活動全体に関する講演（学情担当）、(ii)2社の企業人事担当者による説明（2006年度は読売新聞社とサントリー、2007年度は読売新聞社と阪急百貨店）、(iii)3名の就職内定者の就職活動体験談報告、というプログラムでガイダンスを行った。時期



的にも就職活動に対する意識が強くなる頃でもあることから、2006年度は80名、2007年度は100名の学生参加があった。

## 5-2. 企業セミナー

個別の企業採用説明会を行うよりも、多くの企業の人事担当者を集まってブースを開設してもらい、という形式である方が学生が多くの企業と接触できる機会を設けられるということで、2006年度は18社（明治安田生命、三井住友リース、MIT、大陽日酸、大阪めいらく、リクルート、セコム、ヴィンキュラム・ジャパン、NTTコムウェア、リクルートHRマーケティング関西、読売新聞社、岡村製作所、サンテスト、サントリー、三菱重工業、JAC Japan、コスモ石油、日本システムディヴェロップメント）、2007年度は16社（明治安田生命、三井住友ファイナンス&リース、大阪めいらく、セコム、読売新聞社、岡村製作所、サントリー、三菱重工業、コスモ石油、阪急百貨店、JTB西日本、新日本製鐵、池田銀行、富士ゼロックス、阪急電鉄、日鉄日立システムエンジニアリング）の参加を得て、企業セミナーを開催した。それぞれ、60名と40名の学生参加があった。なお、2007年度には、読売新聞社から別途採用説明会を開催したいとの申し出があり、年度末の3月に再度個別の説明会を開催した。



「就職活動準備講座」(2007年)

## 5-3. 私立学校教員採用に関する講演会

近畿大学附属豊岡高等学校より申し出があり、私立学校教員の採用に関する説明会を2006年度、2007年度にそれぞれ1度ずつ開催した。一般に私立学校教員の採用実態に関しては不明なことが多く、その一方で学校教員を目指す学生は数多くいると思われることから、このような企画は有益と判断した。説明会では、教師という職業について、公立学校教員採用との違い、採用者から見た留意すべき点などについての説明が行われ、参加者はそれぞれ、45名と20名であった。

## 5-4. 就職対策講座

就職情報会社から担当者を派遣してもらう形式で、文学研究科・文学部学生向けの就職対策講座を各年度数回ずつ行った。内容としては、就職活動全体を概観することにより、自己分析、企業分析、インターンシップ講座、エントリーシート対策、面接対策などを行ったが、2006年度は4回、2007年度は5回開催し、それぞれ延べ人数で、120名と290名の参加があった。少しずつ就職支援活動の内容が学生に理解され、積極的な参加が見込めるようになってきたことの現れであると思われる。

学生に対してガイダンスや講座の開催を周知徹底することは難しいところもあり、ポスターを張り出すだけでなく、就職支援部門で設置したメーリングリストに登録してもらって案内を流したり、就職情報会社にメールアドレスを登録している学生に対しては、直接会社の方から案内を送信してもらうなどして、参加者を増やす努力を行ってきた。



「面接対策講習会」(2007年)

### 5-5. 就職情報の提供と整理

---

2006年度・2007年度とも教育支援室において文学研究科・文学部に対する求人票及び求人票データベースを公開した。教育支援室には学生の就職相談に専門的に応じる事ができるスタッフがいらないため、学生には豊中学生センター就職相談室を訪れるように勧めた。

### 5-6. 就職関係図書の購入・管理

---

就職関係図書の充実にはこれまで同様に努め、一部の図書は貸し出しも行った。就職情報誌や就職活動マニュアル本ばかりではなく、広く日本及び世界の経済状況に関わる図書なども購入するように努めている。

### 5-7. 就職支援部門ホームページの維持・管理

---

就職支援部門ホームページには、就職支援行事に関する情報を随時掲載した。また、過去の学部卒業生・大学院修了生の就職実績の一覧を掲載するなどの改善を行った。今後も頻繁に内容更新を行うとともに、就職活動体験記や就職活動のモデルケースを掲載するなどの工夫が必要と思われる。

### 5-8. 進路・就職(内定)状況調査

---

「学部卒業予定者・大学院修了予定者の進路・就職(内定)状況調査」に関しては、文学研究科・文学部では、10月、12月、2月、4月の4回にわたって調査結果を学生部に提出することになっている。これは学生・院生が提出する「進路・就職(内定)届」を集計した結果を報告しているものであるが、学部、修士修了生に関する届け提出率はこれまで同様に高水準を維持できている。ただ、博士課程修了生の進路状況に関しては、留学生など本国に帰国するものや、非常勤講師職に就くものも多く、不明な場合が多い。今後の調査方法の改善が必要であると考えられる。

(岡田禎之)

## 6. 共通教育部門

---

本部門の構成員は、みな大学教育実践センターの兼任教員として、全学共通教育の企画運営を行う「共通教育実践部」と、FD活動を中心とした大学教育全体の実践的研究を行う「教育実践研究部」とに所属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。したがって教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討・運用することにある。

2006年度・2007年度ともに、年度当初に行われる文学部の「新入生ガイダンス」において、共通教育の履修について新入生に説明を行った。とくに2007年度より共通教育のカリキュラムが大幅に改変されたので、旧カリキュラムで履修してきた在校生に対しては、大学実践センターのガイダンス室などを通じて履修指導を受ける機会を設けた。さらにカリキュラムの改訂にともない文学部にとって教育上の不利益となる問題の解決にあたった。すなわち、2008年度から共通教育における外国語の履修は、実質上、英語以外に外国語を一つしか選択できない体制に移行することから、外国語教育を主導する言語文化部と協議を重ね、従来のように英語以外に外国語を正式に二つ履修できる体制を構築した。

また現在、文学部は教養教育科目（基礎教養1・現代教養・国際教養）だけでなく、専門基礎教育科目・基礎セミナーに多くの開講科目を全学に提供しているが、2006年度・2007年度ともに、文学部の担当教員の了解のもとに、次年度のカリキュラムの策定をおこなった。とくに、2007年度は大阪外国語大学と統合し、文学研究科に12名の教員が新たに加わったが、そうした増員に対する共通教育科目の担当について大学教育実践センターと文学研究科との間で協議を重ねた。結論として、2008年度は新たに分属した12名の教員が1人1コマ、共通教育の授業を担当することを決定した。

なお2007年度末には、同年度1学期の共通教育関係科目の成績分布表を回覧し、今後より良い成績評価を行うための資料提供を行った。

(荒川正晴)

## 7. 博物館実習

---

2006年度・2007年度とも、大阪歴史博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館・大阪市立美術館の

4館に実習生を受け入れて頂いた。実習生の数は、2006年度は38名、2007年度は33名であった。両年度とも、実習前年の12月に実習履修予定者登録を行い、実習が行われる年の7月初めに実施した実習ガイダンスで、最終的な実習生の各館振り分けを行った。また、博物館実習委員会委員(3名)は、実習実施前にお礼と挨拶のため、手分けをして各実習受け入れ館に赴いた。

(村田路人)

## 国際連携室

### 組織・体制

2004年度および2005年度における組織・体制を踏襲し、室長1名、副室長1名、〈国際教育交流〉〈国際研究交流〉〈留学生支援〉の3部門、これに専門事務職員1名のほか、教務係より留学生関係事項についての担当者が加わる形で活動を開始した。室長が部内の国際交流センター長を、また副室長が同副センター長をそれぞれ兼務すること、専門事務職員が同センター留学生相談室の実務を行うことも、従前の通りである。しかし、2006年度の活動を進めるなかで、より効率的な業務分担を推し進めることが必要との判断から、それまでの3部門を〈連携推進〉〈留学生受入〉〈留学助成〉の新たな3部門へと再編成することとし、それに関わる室内規の改正を教授会に提案し、承認を得た。そのほか2006年10月2日および3日に本学において行われたグローニンゲン大学(オランダ)との学術交流セミナーを機に、エラスムス・ムンドゥス関係の事業(「ユーロカルチャー」プログラムへの域外パートナーとしての参加)が大きな課題となってきたが、室において直接受けとめる形を採らず、総務委員会のもとに構成されたワーキング・グループ(WG)に委ねることとなった。とはいえ、室として事実上担ってきた仕事がけっして少なくなかったことも記しておかなければならない。

### 活動状況

定例の会議としては教授会開催日に会議を開き、さまざまな事項を審議してきたが、必要に応じ、該当する部門の担当者や室長・副室長らが協議し対処した。

## 1. 通常処理事項

大使館推薦による国費外国人留学生の受入れ、国内採用による国費外国人留学生の受入れ、外国の奨学金による外国人留学生の受入れ、部局間協定外国人留学生の受入れ、OUSSEP留学生の受入れ、部局分散短期留学生の受入れ、私費外国人留学生の入学試験(学部、学部研究生、大学院研究生)に関する諸事項、外国人招へい研究員の受入れ及び大阪大学招へい教授称号授与に関する諸事項。これらはいずれも教授会における審議に向けての提案事項となるものであり、関係事務担当者との連携のもと、室会議において資料の検討・審議等を行った。さらに、すでに在籍している留学生への各種奨学金に関しても、担当部門において申請者の審査ならびに推薦を行った。

## 2. 2006年度実績

主として以下の業務を担当した。文系短期研修委員会からの呼びかけに基づくグローニンゲン大学短期訪問プログラムの準備と実施、メールマガジン『大阪大学大学院文学研究科～国際連携室便り～』(SOL Magazine)の発行、Bulletin(室報)の発行(第53、54号)、グローニンゲン大学日本研究センター長セーゲルス氏による授業と講演にむけての準備、HPの開設。このほか、国立台湾大学文学院との協定の締結の実施、クィーンズランド大学との協定締結の準備、マンチェスター大学、カレル大学、国立イラン博物館等との協定の検討を進めた。また、大学院外国人留学生入学試験過去問題の閲覧期間の延長を検討し、教育支援室入試部門との連携のもとに、教授会における審議を経て、秋期入試、春期入試にむけ、それぞれにつき閲覧期間を今までの1ヶ月から2ヶ月に延長した。

## 3. 2007年度実績

主として以下の業務を担当した。台湾成功大学文学院訪問団への対応準備、グローニンゲン大学学生来訪への対応、文系短期研修委員会からの呼びかけに基づくグローニンゲン大学およびマヒドン大学(タイ)への短期訪問プログラムの準備

備と実施、エラスムス・ムンドゥス英語授業開設WGの設置と諸課題の処理、韓国漢城大校人文大学学長一行来訪への対応準備、メールマガジン『大阪大学大学院文学研究科～国際連携室便り～』(SOL Magazine)の発行、*Bulletin* (室報)の発行(第55、56号)、エラスムス・ムンドゥス奨学生の募集の準備、エラスムス・ムンドゥス・プログラムに関する国際シンポジウム(中之島センター)への協力と参加、エラスムス・ムンドゥス英語授業についての海外の学生むけ広報(チラシ)の作成、アングロヒタ教授(タイ・チュラロンコーン大学)によるFD講演「大学における人文学教育の国際化にむけて」およびFDセミナーの開催準備。このほか、文学研究科と外国諸大学・研究科との協定基本文書改訂案の作成と総務委員会への提案、国立台湾大学文学院との協定の大学間協定化にむけての準備、クィーンズランド大学およびマンチェスター大学との協定締結の準備、カレル大学、国立イラン博物館、シンガポール国立大学アジア研究所、デュッセルドルフ大学との協定の検討を進めた。また、外国人招へい研究員の招聘基準および期間について、部内申し合わせの案を準備し、教授会において承認を得た。

(根岸一美)

## 国際交流センター(留学生相談室)

### 組織・体制

国際連携室併設の国際交流センターでは、センター長(国際連携室長による兼任)、副センター長(同副室長による兼任)の統括の下に、留学生専門教育教員1名と担当職員1名が配置され、留学生および招聘研究員の勉学・研究と生活の面での支援を提供し、国際交流に関する教員の活動、教務系の業務を補佐している。留学生専門教育教員は、論文作成法と日本語の授業を受け持ち、個人指導も行っている。担当職員は、留学生からの生活、勉学・研究上のさまざまな相談にあたるほか、行事、教務関連業務担当している。

### 活動状況

#### 1. 留学生相談

日常の教務として、留学生専門教育教員と担当職員は、留学生の勉学・研究および生活上の多様な相談に対応している。

勉学・研究に関する相談は、主として、大学院入試、学位論文、研究の方法、受講する授業内容や単位の修得、休学・退学・転学などに関わる制度についてである。勉学の援助としては、新規入学の留学生にはチューターを、学位論文執筆者には、日本語の添削を目的とする論文添削チューターをつけている。留学生が学生生活になじめるよう、前者のチューターを対象に説明会を実施している。また、貸し出し用のノートパソコンの台数を増やした。

一方、生活上の相談の多くは、宿舍、奨学金、在留資格(ビザ)の延長・変更、リサイクル用品、医療についてであり、相談内容は日本での日常生活を送る上での細かな事柄から、健康上の不安や、精神的な問題にいたるまで多様である。少数ではあるが、進路や人間関係などに起因する精神的な悩みについての相談も寄せられている。心身の問題については、必要に応じて保健センターや学生相談、指導教員と連携を図りながら対応している。

#### 2. 年間行事

留学生生活の充実を図るべく、1年を通じて以下の行事を催している。

- ・新入生オリエンテーション(4月、10月)
- ・チューター懇談会(5月、11月)
- ・新歓バス旅行(4月末から5月初旬、2006年度は伊勢神宮、2007年度は淡路島)
- ・研究科長との懇談会
- ・親睦パーティー(12月)
- ・日本の芸能鑑賞



・新入生交歓バス旅行—淡路島—(2007年)



・ことばの教室（2006年度はロシア語、2007年度はイタリア語）

これらは、日本人学生や教職員との交流の場となるものも含まれ、学内の国際交流を深める機会となっている。



・第27回親睦パーティー—留学生とともに—（2007年）



・ことばの教室—イタリア語—（2007年）

### 3. 教務関連業務

教務関連の業務として、奨学金・寮・各種招待行事への応募の取りまとめ、印刷物の配布・掲示、各種調査の回答、留学希望者からの問い合わせへの対応などを行っている。

### 4. その他の留学生支援

留学生と学内の教職員や部局、学外者や留学生支援団体をつなぐ役割を果たしている。具体的には、留学生センターが催す日本語・英語プログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、海外留学オリエンテーションなどに協力するとともに、留学生に学外の催し物や課外活動に関する情報を提供し、参加申込みの補助を行っている。日本人学生の調査研究や地域団体の企画へ留学生の人材紹介も行っている。

### 5. 広報

文学研究科・文学部の留学交流・学術交流のおもな事項を記録し、広報することを目的として、年2回『室報』を刊行している。2006年度は53・54号、2007年度は55・56号を刊行した。

### 6. 留学生担当職員

大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワークに参加している。これは大阪大学の他部局で留学交流に携わる教職員および留学生センター生活指導部門からなる組織であり、年4回開催される定例のミーティングで、留学生に関する情報の交換・共有を図っている。課題によっては関係部署に働きかけ、よりよいサービス体制の構築を目指している。

（西田充穂）

**組織・体制**

研究科長を取組代表者にして、実施責任者 1 名、実施担当者 2 名をおき活動を行っている。また専従の補佐員を雇用し実務にあたっている。事業の実際の運営については、文学研究科全体が支援する体制をとっているが、とりわけ、4 つの主要事業に直接関わっている芸術学講座、世界史講座、西洋文学・語学講座、および、国際連携室の支援を受け、効率的な運営を行った。

**活動状況****1. 芸術関連機関とのネットワーク形成とインターン、リカレント教育の遂行**

アートネットワーク会議(PAN: Praxis, Arts Network)を 3 月に国立国際美術館において開催。美術、音楽、演劇、映画等関係者約 60 名が集まり、ネットワークの可能性について議論を交わした。同時にネットワークの参加者の登録も開始した。大学院生を京都国立美術館などに派遣し、実際の業務ならびにその補佐を行うとともに、インターンなど今後の協力の可能性についても調査を行った。

**2. 中等歴史教育研究会の組織化**

大学院学生が運営し、京阪神だけでなく北海道、関東、東海、中国、九州の高校・予備校教員も共同研究者として、計 4 回の研究会を開催したほか、ホームページ・メーリングリストも立ち上げた。それらを通じて、アジア海域史と東南アジア史、近現代の宗教史、日本列島の北方史などの分野で現在の学界動向を踏まえた歴史教育改善の方向性を明らかにした。

**3. 理想の教科書像の策定**

フランス文学史が出版され好評を得た。アメリカ文学史の教科書については使用者へのアンケート調査、古書店での書き込み等の調査をふまえ、大幅に拡充された内容の改訂版を作成した。新規のドイツ文学の教科書、英文学理論の教科書も院生を大幅に動員し出版を終えている。

**4. 国際連携ネットワーク構築と海外インターンシップ**

旧留学生のメールアドレスの整備を終え、メールマガジン編集方針を策定し、すでに 2 号を発刊した。また、旧留学生が多い韓国(ソウル)にて同窓会の立ち上げに関係者が参加したり、タイでの同窓会組織立ち上げのための準備を行った。さらには、日本人学生の短期留学先として米国アイヴィーリーグを中心に選定のための基礎的リサーチを行った。

(森岡裕一)



## 客員研究員の受け入れと本研究科教員の海外における研究活動

### 1. 外国人招へい研究員

2006年度の標記研究員は総勢23名。中国(11名)、韓国(3名)からが多く、アメリカ、タイからそれぞれ2名、あとはイラン、台湾、チェコ、ドイツ、フランスからそれぞれ1名ずつ受け入れている。分野的には日本文学、日本語研究が相対的に多く、他に日本学、音楽学、美学、歴史学分野の研究員なども数名受け入れている。

2007年度は17名(中国8、韓国6、アメリカ1、ブルガリア1、タイ1)。やはり中国、韓国が大半を占め、分野的にも前年度とほぼ同様の傾向を示している。

### 2. 教員の海外研究活動

本研究科教員の海外での研究活動については、2006年度の外国出張は延べ91件と大幅に伸び、地域別内訳は北米12、ヨーロッパ31、アジア55、オーストラリア4、その他が1となっている。ほとんどがフィールドワーク・学会参加および発表・講演を目的としており、科研、海外政府・大学の招聘による出張である。海外研修は18件、うちヨーロッパ10、アジア9、その他1となっている。

2007年度の外国出張は105件で、地域別内訳は北米15、アジア45、ヨーロッパ19、中南米3、オーストラリア2、アフリカ1である。海外研修は17件、うちアジア14件、アメリカ、メキシコ、ヨーロッパがそれぞれ1件ずつである。

教員数で単純計算すると、この2年間は、ほぼ教員全員がなんらかの形で海外でのフィールドワーク・学会参加・研究発表・講演等の活動に従事したことになり、これに在外研究等、長期の海外滞在者を加えると、本研究科の研究成果の一端を海外において積極的に公開し、還元を行ったと結論づけることができるだろう。

## 留学状況および留学生の受け入れ状況

### 1. 留学状況

2006年度に送り出した学生は、ヨーロッパ22名(フランス10名、ドイツ7名、イギリス3名、オーストリア1名、オランダ1名/D3(12名)、D2(2名)、M2(4名)、M1(1名)、B4(2名)、B3(1名))、北米6名(アメリカ5名、カナダ1名/D3(4名)、B4(2名))、オセアニア5名(オーストラリア4名、ニュージーランド1名/D3(3名)、D2(1名)、B2(1名))、アジア3名(中国2名、タイ1名/D3(2名)、D1(1名))の計36名である。

2007年度はヨーロッパ17名(フランス5名、イギリス3名、ドイツ3名、イタリア、オーストリア、チェコ、フィンランド、ベルギー、ポーランド各1名ずつ/D3(6名)、D2(2名)、D1(3名)、M2(2名)、M1(3名)、B3(1名))、北米10名(アメリカ7名、カナダ3名/D3(5名)、D2(1名)、B4(3名)、B3(1名))、アジア3名(中国3名/D3(1名)、D1(1名)、M2(1名))、オセアニア3名(オーストラリア3名/D3(2名)、B3(1名))、その他1名(D3)の計34名である。

以上はここ数年の傾向と大差はないが、今後、さらに、海外の大学事情、留学情報の周知、TOEFL等の語学能力テスト受験のアシストなど国際連携室として支援の方策を検討しなければならないだろう。

### 2. 留学生の受け入れ状況

2006年度は、合計101名(男36名、女65名)の留学生を受け入れている。地域別では韓国・中国・台湾が圧倒的に多く、ついでタイ・オーストラリア・アメリカ・カナダ・シンガポール等が続いている。大学院レベルが大半だが、研究生が17名を数え、また特別聴講生が9名いる。受入分野は日本語学、日本文学、比較文学、日本学、音楽学・演劇学、東洋史学、美術史学、国語学、美学・文芸学、日本史学などとなっている。

2007年度は、総計が116名(男39名、女77名)、うち特別聴講学生が24名、研究生が18名在籍し、受入分野は前年同様である。

なお、大阪大学短期留学制度による留学生在が、2006年度には13名、2007年度には16名含まれている。

### **留学生の博士学位取得**

2006年度は、日本語学2名、美学・文芸学1名の計3名が、2007年度は、美学・文芸学2名、日本文学2名、日本語学2名、美術史学1名の計7名が、博士(文学)の学位を取得した。

(根岸一美)

近年の文学研究科では、教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金はさまざまなかたちで導入されており、その全容の把握は容易ではない。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではない。ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金について概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

\* コメントは、原則として2006年度および2007年度のデータに関するものであるが、『年報2006』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。

## 1. 科学研究費

科学研究費の取得について件数、金額の増減をまずみておくことにしたい。ここには、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 2-5-1 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
件数	58	58	62	64	64	66	70
増減	—	1.00	1.07	1.03	1.00	1.03	1.06
金額(千円)	102,861	106,340	103,210	120,920	152,020	163,860	175,630
増減	—	1.03	0.97	1.17	1.26	1.08	1.07
科研費予算総額(億円)	1,580	1,703	1,765	1,830	1,880	1,895	1,913
増減	—	1.08	1.04	1.04	1.03	1.01	1.01

2004年度、2005年度において横ばいであった科研費の取得件数は、2006年度から2007年度にかけて上昇に転じた。予算総額の増加率が伸び悩んでいる中で、本研究科において取得された科学研究費総額は増加しており、所属教員の努力の結果と思われる。

表 2-5-2 取得された科研費の内訳

年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
特定領域研究件数	4	0	0	0	2	2	2
同金額(千円)	9,300	0	0	0	9,200	9,100	9,000
基盤研究(A)	1	3	1	2	4	4	4
同金額(千円)	5,300	23,800	11,310	25,220	54,080	44,460	32,210
基盤研究(B)	12	10	12	13	15	18	17
同金額(千円)	46,400	30,200	40,100	47,000	49,000	68,290	80,180
基盤研究(C)	16	14	25	26	19	19	25
同金額(千円)	18,861	16,900	30,200	26,300	16,300	21,700	33,150

基盤研究(A)は、2005年度の取得数を引継ぎ、高い水準を維持している。特定領域研究も同様である。基盤研究(B)および基盤研究(C)は、件数、金額ともにここ数年で最も高い数字を示している。

## 2. その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金も近年ますます重要になっている。COEプロジェクトに関しては、2006年度に終了した「21世紀 COE」に続き、2007年度からは、「グローバル COE」がスタートした（人間科学研究科に事務局）。また、研究拠点形成費等補助金など近年始まった助成金制度や、各種財団などからの奨学寄付金も積極的に申請・受給している。このなかには大学院生が取得しているものもある。

種類	件数と金額	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
21世紀 COE	件数	1	1	1	1	1	—
	金額(千円)	106,000	164,000	110,200	83,600	76,670	—
グローバル COE	件数	—	—	—	—	—	1
	金額(千円)	—	—	—	—	—	8,830 <sup>1</sup>
研究拠点形成費等補助金(若手研究者養成費) <sup>2</sup>	件数	—	—	—	1	1	0
	金額(千円)	—	—	—	7,188	18,792	0
研究拠点形成費等補助金(海外先進研究実践支援) <sup>3</sup>	件数	—	—	2	2	2	2
	金額(千円)	—	—	865	7,135	4,153	5,552
研究拠点形成費等補助金(海外先進教育実践支援) <sup>3</sup>	件数	—	—	0	0	0	1
	金額(千円)	—	—	0	0	0	10,000
科学技術振興調整費	件数	1	1	0	0	0	0
	金額(千円)	23,061	16,520	0	0	0	0
各種財団などからの研究助成金	件数	5	5	4	8	4	9
	金額(千円)	3,800	6,800	3,150	13,358	8,200	10,270
大学院生の獲得している研究助成金	件数	6	10	5	5	13	27
	金額	3,147千円 3,000US ドル 12,200ユー ロ	1,800千円 6,500US ドル 6,600ポンド 30,760ユー ロ 7,900オース トラ リアドル	5,680千円 25,000US ドル	3,360千円 14,085ユー ロ	4,501千円 49,417US ドル 15,590ポンド 5,600ユーロ 45,000コ ル ナ 45,000デン マーク クロ ネ	9,331千円 40,262US ドル 10,290ユー ロ 21,180フラン 11,545ポ ンド 18,463ノ ル ウ エ ー ク ロ ー ネ 7,260ズ ウ オ テ イ 135,000コ ル ナ
受託研究	件数	1	0	2	2	3	2
	金額(千円)	7,000	0	9,251	10,701	15,450	10,950

<sup>1</sup> 文学研究科教員獲得分

<sup>2</sup> 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

<sup>3</sup> 大学教育の国際化推進プログラム

**概要**

本研究科は、2002-2006年度の間、人間科学研究科、言語文化研究科と共同で21世紀COEプログラムに取り組んだ。概要は次の通りである。

- **プログラム名** 「インターフェイスの人文学」(英語名: Interface Humanities)
- **担当部局** 文学研究科、人間科学研究科、言語文化研究科、コミュニケーションデザイン・センター(2005年度より)
- **拠点リーダー** 鷺田清一(大阪大学理事・副学長 — 2006年度当時)
- **期間** 2002年10月～2007年3月
- **交付金額** 2006年度 76,670千円(間接経費6,970千円を含む)
- **後継プログラム** 本21世紀COEプログラムは、組織再編の上、グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」(2007年度採択。人間科学研究科、文学研究科、コミュニケーションデザイン・センターが担当)に引き継がれた。

**事業推進担当者(2006年度)**

鷺田清一(大阪大学理事・副学長)、柏木隆雄(文学研究科)、小泉潤二(人間科学研究科)、園府寺司(文学研究科)、栗本英世(人間科学研究科)、中川敏(人間科学研究科)、ヴォルフガング・シュヴェントカー(人間科学研究科)、森安孝夫(文学研究科)、桃木至朗(文学研究科)、平雅行(文学研究科)、秋田茂(文学研究科)、金水敏(文学研究科)、富山一郎(文学研究科)、津田葵(言語文化研究科)、真田信治(文学研究科)、工藤眞由美(文学研究科)、永田靖(文学研究科)、中岡成文(文学研究科)、藤田治彦(コミュニケーションデザイン・センター)、渥美公秀(コミュニケーションデザイン・センター)、小林傳司(コミュニケーションデザイン・センター)、池田光穂(コミュニケーションデザイン・センター)、前迫孝憲(人間科学研究科)

**プログラムの目標・活動方針****1. 国家・地域・言語等を超えた複層的な人文学アプローチ**

本プログラム《インターフェイスの人文学》は、ディシプリンを中心に編制され、文献主義に徹してきたこれまでの人文学のありかたを反省し、現代社会に生起している諸問題、とりわけさまざまな文化が接触する界面(インターフェイス)に発生する対立、葛藤、軋轢、あるいはコミュニケーションの不全や断絶に適切に対応できる、新たな研究の姿勢と方法を創出するために企画された。このような諸文化のインターフェイスと取組むにあたり、本プログラムはその水平的展開と垂直的展開とをともに視野に収めてきた。すなわち、〈横断的な知〉(transboundary studies)と〈臨床的な知〉(clinical studies)である。〈横断的な知〉とは、これまで「単一的」「均質的」とわれがちであった文化の生成を、つねに異なる複数文化の接触という次元でとらえる。つまり、とりわけ相互浸透や交差、衝突や軋轢の面から動態的に、かつ国家や言語や地域を横断するかたちで考える研究スタイルである。これにたいして〈臨床的な知〉とは、そもそも学術研究が社会もしくは市民のさまざまな活動とふれあう場面で、人文学はいったい何をなすのかという問題意識に立って、研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋する〈知〉のあり方を模索するスタイルをいう。本プログラムの特徴は、横断と臨床という両軸を設定し、しかもそれらを交差させていくところにある。現在の人文学をこれらふたつの〈知〉を核とするものへと構造変換し、水平・垂直それぞれの方向で、複数文化の錯綜のなかで発生する多様な課題にアクチュア

ルに応接できる、問題解決型・社会連携型の人文学をデザインすることが、《インターフェイスの人文学》の目標である。

## 2. 6つのモデル研究とそれらを統合する2つのプロジェクト

《インターフェイスの人文学》は、〈横断的な知〉と〈臨床的な知〉の両軸が交わる場所に展開されるべきものである。そのために私たちは、従来は厳格に分画されていた人文学のさまざまなディシプリンの相互横断的な組織化と、専門家どうしの内向きの共同研究ではなく、社会の問題発生の現場、さらにはその問題解決に取り組む現場の研究者たちとの強い連携とを、ひとつに重ね合わせて追求した。そこから生まれてきたのが、《インターフェイスの人文学》のモデル研究、つまりディシプリン別に固定化しがちなこれまでの人文学研究の体制を動的に組み換える、新しい方法と研究スタイルの事例である。こうした事例の集積にあたっては、研究対象そのものの新たな発見・開拓にとどまらず、研究の方法や姿勢、取り組みの体制じたいを《インターフェイス》の観点から問いなおさなければならないというプログラム当初からの問題意識が、強く働いている。

モデル研究の構築にあたっては、《交錯する世界》《縫合される日本》《越境する芸術・文化》《臨床と対話》という4つのテーマ領域を設定し、そこに「トランスナショナリティ研究」「世界システムと海域アジア交通」「イメージとしての〈日本〉」「言語の接触と混交」「モダニズムと中東欧の芸術・文化」「臨床と対話」という6つの研究プロジェクトを組織した。

また、新しい人文学の方法や姿勢についての反省的検討をおこなうために、以上の6研究プロジェクトとは別に、さらにふたつの重要な研究プロジェクトを組織した。ひとつは、人文学が取り組むように要請されている現代の諸問題を、学問の生成の歴史（科学史）のなかでどのように位置づけるかという研究であり、いまひとつは、脱ディシプリンの人文学の研究活動はどのような原理と手法で遂行されるべきかを検討する方法論的研究である。

前者は、「岐路に立つ人文学」のタイトルのもとで、「人文学と社会」の関係を問いなおす問題群の所在を明らかにしてきた。後者は、本プログラムに参加したすべての若手研究者による「研究集合」において、どのような討議空間をどのようなツールを用いてデザインするかという、すぐれて実践的な観点からすすめられた。とりわけ「研究集合」では、それぞれのディシプリンにおいてすでに厳格な学問的トレーニングを受け、各研究プロジェクトの研究活動に従事しながら、同時にディシプリンを乗り越える研究の創出をめぐる実践知的な方法論が探究された。それは、本プログラム発足当時から研究支援組織「メディアラボ」の全面的サポートのもとで、「討議空間のデザイン」の開発として取り組まれた。人文学的な知の導出プロセスそのものを、視覚的ツールの積極的な利用によって共働化・共有化する技法は、たんなる技術論にとどまらず、学問的コミュニケーションの現代的形態の開拓に挑むものである。

## 主要な成果

### 3. 大阪大学における人文学の研究教育の再編

《インターフェイスの人文学》の理念と活動は、大阪大学全体でも幅広い理解と支援を得た。その結果、〈臨床的な知〉と〈横断的な知〉の両軸と対応するかたちで、ふたつの研究拠点があらたに設置された。ひとつは「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター」(Center for the Study of Communication-Design、略称 CSCD) で、本研究プログラムにおける臨床的な研究軸（とくに「臨床と対話」テーマ領域）を制度的に展開すべく2005（平成17）年4月に設置された。また、本研究プログラムにおける横断的な研究軸（とくに「交錯する世界」テーマ領域）を制度的に展開するために、2007（平成19）年4月に、「大阪大学グローバルコラボレーション・センター」（略称 GLOCOL）が開設された。さらに、2007（平成19）年10月の大阪外国語大学との統合にあわせて、文学研究科および人間科学研究科に発足したふたつの新専攻（文化動態論専攻(文学研究科)および人間科学研究科グローバル人間学専攻(人間科学研究科)）もまた、本研究プログラムの理念を制度化するものである。



---

## 4. 報告書(2006年度)

本プログラムの最終成果報告である『インターフェイスの人文科学研究報告書 2004-2006』全 8 巻をはじめとして、以下の報告書、ワーキングペーパーが刊行された。発行はすべて大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」である。

- ・鷺田清一（監修）、三谷研爾・藤本武司（通巻編集）『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書 2004-2006』全 8 巻、2006.01.
  - 第 1 巻：鷺田清一（責任編集）、中岡成文（編集）『岐路に立つ人文科学』
  - 第 2 巻：若手研究集合（編集）『人文科学討議空間のデザインと創出——若手研究集合』
  - 第 3 巻：小泉潤二・栗本英世（責任編集）、上田達（編集）『トランスナショナルリテリチュア研究』
  - 第 4 巻：桃木至朗（責任編集）、佐藤貴保（編集）『世界システムと海域アジア交通』
  - 第 5 巻：伊藤公雄・金水敏（責任編集）、藤田智博（編集）『イメージとしての〈日本〉』
  - 第 6 巻：津田葵・真田信治・工藤眞由美（責任編集）、山下仁（編集）『言語の接触と混交』
  - 第 7 巻：関府寺司（責任編集）、樋上千寿（編集）『モダニズムと中東欧の藝術・文化』
  - 第 8 巻：中岡成文（責任編集）、高橋綾（編集）『臨床と対話』
- ・三谷研爾・藤本武司（編集）『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」Data Book 2004-2006』2006.03.
- ・若手研究集合（編集）『プロセスを共有する人文科学のために——若手研究集合の試み——』2007.03. (DVD 報告書)
- ・木前利秋（責任編集）、亀山俊朗・高桜善信（編集）『ポストナショナル・シティズンシップ——トランスナショナルリテリチュア研究 6』2007.03.
- ・秋田茂（責任編集）『Creating Global History from Asian Perspectives, Proceedings of Global History Seminars and Workshops, 世界システムと海域アジア交通 2004-2006』2007.03.
- ・Jügen Osterhammel, *Approaches to Global History and the Question of the “Civilizing Mission”*, “Global History and Maritime Asia, Working and Discussion Paper Series”, no. 3, 2006.12.
- ・Kent Deng, *Foreign Silver, China’s Economy and Globalisation of the Sixteenth to Nineteenth Centuries*, “Global History and Maritime Asia, Working and Discussion Paper Series”, no. 4, 2007.01
- ・Susanne Weigelin-Schwiedrzik, *World History and Chinese History: 20th Century Chinese Historiography between Universality and Particularity*, “Global History and Maritime Asia, Working and Discussion Paper Series”, no. 5, 2007.01.
- ・工藤眞由美（責任編集）『言語の接触と混交——ブラジル日系人（沖縄系）言語調査報告』（CD-ROM 付属）2007.01.
- ・関府寺司（責任編集）、樋上千寿（編集）『越境／モダンアート Transboundary / Modern Art』2007.03.
- ・稲葉一人・家高洋（編集）『「臨床と対話」研究グループ 2006 年度報告書——第 5 回対話シンポジウム』2007.03.
- ・三谷研爾他（編集）『ニュース・レター、Interface Humanities』no. 7, 2006.11.

---

## 5. イベント(2006年度)

定例の研究会、セミナー以外にも、多くの国際シンポジウム、フォーラム、講演会、ワークショップ、研究会等のイベントが開催された。以下に一部を紹介する。

「第 4 回全国高等学校歴史教育研究会——阪大史学の挑戦」大阪大学附属図書館本館図書館ホール, 2006/8/1-3

「研究者交流ワークショップ：ポピュラー・カルチャー研究のゆくえ——イメージとしての〈日本〉の研究プロジェクトから見えてきた課題をふまえて」大阪大学文学研究科第一会議室, 2006/9/9

「国際シンポジウム「大阪大学 21 世紀 COE プログラム〈インターフェイスの人文科学〉」」大阪大学中之島センター, 2006/10/15

「第2回 COE - ARI ワークショップ：躍動する周縁と開かれた中心——相互交渉の場<インターフェイス>としての海  
域アジア」長崎歴史文化博物館ホール, 2006/10/27-29

「第5回対話シンポジウム：地域からの対話促進の発信——対話の多様性と可能性」大阪大学銀杏会館, 2006/11/3-4

「第2回韓日英国史フォーラム：Intellectual framework, Education and a birth of ‘History’ in modern Britain, 大阪  
大学中之島センター, 2006/11/23

---

## 6. COE 科目(2006 年度)

従来に引き続き、COE 科目として、2006 年度も下記のような科目数の授業が提供された。

	博士前期課程	博士後期課程
文学研究科	8	14
人間科学研究科	8	7
言語文化研究科	4	4

(藤本武司)

**概要**

本研究科は、2007年8月より、人間科学研究科と共同でグローバル COE プログラムに取り組んでいる。概要は次の通りである。

- **プログラム名** 「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」(英語名 : A Research Base for Conflict Studies in the Humanities)
- **担当部局** 人間科学研究科、文学研究科、コミュニケーションデザイン・センター、グローバルコラボレーション・センター
- **拠点リーダー** 小泉 潤二(大阪大学理事・副学長)
- **期間** 2007年8月採択 (5カ年計画)
- **交付金額** 2007年度 120,510千円(間接経費 27,810千円を含む)

**事業推進担当者(2007年度)**

小泉潤二(拠点リーダー、理事・副学長)、栗本英世(拠点サブリーダー兼事務局長、人間科学研究科)、工藤眞由美(文学研究科)、真田信治(文学研究科)、渋谷勝己(文学研究科)、園府寺司(文学研究科)、伊東信宏(文学研究科)、三谷研爾(文学研究科)、富山一郎(文学研究科)、金水敏(文学研究科)、春日直樹(人間科学研究科)、中川敏(人間科学研究科)、池田光穂(コミュニケーションデザイン・センター)、志水宏吉(人間科学研究科)、厚東洋輔(人間科学研究科)、ヴォルフガング・シュヴェントカー(人間科学研究科)、染田秀藤(人間科学研究科)、中村安秀(人間科学研究科) 平沢安政(人間科学研究科)、峯陽一(人間科学研究科/グローバルコラボレーション・センター)、草郷孝好(人間科学研究科/グローバルコラボレーション・センター)、渥美公秀(人間科学研究科/コミュニケーションデザイン・センター)、鷺田清一(総長)、小林傳司(コミュニケーションデザイン・センター)、中岡成文(文学研究科)

**プログラムの目標・活動方針**

本拠点は、「グローバルな次元におけるコンフリクト」という問題について実践的研究を推進し優秀な人材を育成する。このため、人文科学の諸分野ばかりでなく、社会科学の一部分野を連結し協働することが必要である。中心となるのは人類学の諸分野(文化人類学、政治人類学、社会人類学、経済人類学、医療人類学)である。これに、言語学(社会言語学、言語接触論、言語類型論、歴史言語学)、哲学(とくに臨床哲学)、芸術学(とくに越境美術論)が中心的な役割を果たす。

グローバルな問題についてさらに広い基礎的展望を得るために、歴史学(植民地史)、社会思想史、社会学(グローバル研究)、科学技術社会論、現代文明学、文学(越境文学)が加わる。このほか、グローバルな取り組みにおける実践的分野として、国際協力学、多文化教育学、臨床教育学、人間開発学、地域共生論、人間の安全保障論を加えている。グローバルなコンフリクトという問題は、単に研究されるべき対象ではなく、研究と実践的取組みとの間に常に相互のフィードバックが形成されるべきである。

以上にあげた分野は多彩である一方、「グローバルな次元におけるコンフリクト」というテーマのもとに緊密に収斂している。

本プログラムは、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」の成果に基づいて、大阪大学に「コンフリクトの人文科学」の国際的な研究教育拠点を形成することを目的とする。この目的のために、前項で述べた人類学、言語学、哲学などを中心とし、歴史学や社会学ほかの基礎的分野に加えて国際協力学、人間開発学、教育学、人間の安全保障論等の実践的分野が協働して、研究教育を推進する体制を構築する。

社会的・文化的・民族的な対立と対抗関係の問題を分析し、その問題になんらかのかたちで対処することは、現代のグローバル世界における最も緊要な課題の一つである。東西の冷戦構造が崩壊した 1990 年代以降、この課題は先鋭化すると同時に質的にも変化した。国家間、ブロック間、あるいは大イデオロギー間の比較的わかりやすい政治対立の図式から、きわめて多数の社会的・文化的・民族的集団が互いに複雑に絡まりあい、そこでは集団自身が急速に変化していくような流動的状況が生まれる中で、文化的、宗教的、社会的、経済的なレベルを含む様々な対立が様々に生起している。このように複雑化し流動化する対立の状況を理解するためには、現地調査に基づく綿密な、あるいは「厚い」(thick) 現実理解が必須であり、そのような対立を減じる方策があるとすれば、それはそのような理解を前提としなければならない。これが、クリフォード・ギアツの解釈人類学が教えるところである。

国家や社会や文化など、グローバル社会を構成する部分要素が相互の関係を緊密化したことにより、そうした関係の実態を研究者が分析することさえ困難であるような状況がもたらされている。そこに生起するコンフリクトの質も変化した。従来よく知られてきた政治的軍事的コンフリクトや経済利害をめぐるコンフリクトばかりでなく、それらに加えて、民族あるいはエスニックなコンフリクト、言語を基盤とするコンフリクト、芸術の所有や越境やアイデンティティに関するコンフリクト、各種イデオロギーのコンフリクト、宗教的信仰や実践に由来するコンフリクト、歴史あるいは歴史理解をめぐるコンフリクトなどが、現代世界の最前面でますます目立つようになっている。つまり「価値」をめぐるコンフリクトである。

この種のコンフリクトを理解し、それに対処する現実的方策を考えるためには、社会科学的あるいは政治経済的なアプローチに加えて、人文科学的なアプローチによる研究が必要であることが明らかになりつつある。そうした研究を展開できる拠点を、国際的な協力体制のもとに構築することが、本グローバル COE プログラムの目的である。

本拠点の研究上のアプローチは以下のような特徴を持つ。

1. 対立とコンフリクトの状況について個々の事例ごとに現実を経験的かつダイナミックに把握する。
2. 個別に生きる人びとの視点と実践を現在進行形の中で臨的に捉える。そのためにフィールドワークに基づいて資料収集をはかる。
3. そうした資料に基づいて、分析のための概念装置の洗練と理論構築を進める。その際個別の学問分野に閉じることなく、関係しうる学問分野を広くリベラルに展望する。
4. 概念化と理論化は、欧米中心主義的な「歴史の終焉」や「文明の衝突」などに還元するのではなく、新しい枠組みによる。そうした枠組みを求めて、欧米や欧米外の研究者を含む国際的な協働を実現する。
5. そのような協働に基づいて、問題への実践的取り組み（対立やコンフリクトの解消ではなく軽減に向かうような現実的な取り組み）を、理解と対話の中に目指す。（プログラムHP：<http://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/about.html> より）

**機能と活動(2006年度・2007年度の概況)**

1. 懐徳堂デジタルコンテンツ、特に懐徳堂研究の総合サイトである「WEB 懐徳堂」の運営、懐徳堂センターHP、関係CD・ROMなどを含む電子情報の制作・公開。
2. 懐徳堂関係資料、レプリカ・パネル、デジタルコンテンツの展示解説(常設展)。
3. 総合学術博物館企画展、懐徳堂アーカイブ講座など学内外での展示解説(特別展)。
4. 学内所蔵の懐徳堂関係資料の調査・研究(学内調査)。
5. 学外からの寄託資料、調査依頼資料についての調査・研究(学外調査)。
6. 懐徳堂関係資料の学内外からの問い合わせに対する調査・回答。
7. 附属図書館所蔵の「懐徳堂文庫」の複写・転載願、問い合わせなどへの対応。
8. (財)懐徳堂記念会事業に関する資料調査・研究。
9. 『懐徳堂センター報』、懐徳堂センターパンフレットなど、広報媒体の編集・刊行。
10. 学内教職員・学生に対する広報や教育活動。

その他、当該年度で特記すべき事項としては、次の三点がある。

- 待兼山修学館オープンにともなう資料展示協力……平成 19 年 8 月 18 日、大阪大学総合学術博物館待兼山修学館が開館した。その内の「大阪大学の系譜」のコーナーにおける懐徳堂資料展示について協力をした。
- 淀屋サミットにおける貴重資料展示……平成 19 年 5 月 7 日から 13 日、大阪市中央区平野町の辰野ひらのまちギャラリーにて、懐徳堂関係資料を展示した。
- 大阪大学総合学術博物館企画展における貴重資料展示……平成 18 年 10 月 30 日～11 月 24 日、大阪大学総合学術博物館特別展「「みる科学」の歴史——懐徳堂・中井履軒から超高压電子顕微鏡まで」において、青貝印匣・左九羅帖・越俎載筆などの貴重資料を展示した。

**現状と問題点(2006年度・2007年度の概況)****1. 文学研究科内における位置の問題**

懐徳堂センターは、当初、文学研究科全体の広報活動の拠点として設立された。しかし、2000 年度までは、資料展示のスペースがまったく得られず、また、2001 年度にセンター室が確保された後も、そうした目的を達成するためのスペースとしては狭隘であり、防音や遮光の問題、温度・湿度管理の問題なども残った。そのため、常設展示としては、懐徳堂関係資料を中心とし、かつデジタルコンテンツやパネル、レプリカなどを展示するに止まっている。

さらに、2004 年度、大阪大学の法人化にともない、文学研究科内の業務組織が改編され、新たに、評価・広報室および研究推進室などが開設された。これにより、当初、懐徳堂センターに求められていた機能を、この内の評価・広報室が担うこととなり、懐徳堂センターはむしろ、懐徳堂の資料調査、電子情報化などを推進する拠点、というのがその実態となりつつある。2005 年度には、他の室とともに、委員会組織として再編され、現在、委員長 1 名、委員 2 名、非常勤職員 1 名の体制で運営を続けている。

**2. 職員・予算に関する問題点**

懐徳堂センターは、上記のような膨大な業務を抱えながら、それを専門に担当する常勤スタッフは 1 名も配置されて

いない。文学研究科予算の中から週 30 時間を上限とする非常勤職員 1 名が配置されているのみであり、担っている機能に比してスタッフが著しく少なく、このことは、下記のように、2003 年度の文学研究科外部評価によってもすでに指摘されている。

【参考】文学研究科外部評価 2003 年 3 月(抜粋)

懐徳堂に関わる研究活動を安定的に持続させるために、懐徳堂センターに専任スタッフを配置するといった取り組みも必要であろう。(東北大学・浅野裕一教授)

また、懐徳堂センターの経費については、文学研究科内で年間 200 万円程度を計上しているが、この内の数割は(財)懐徳堂記念会等との共催事業関係費であり、純粋にセンターの活動費として執行できる予算はそれほど多くはない。

---

### 3. (財)懐徳堂記念会との関係

(財)懐徳堂記念会と文学研究科とが密接な関係にあることは言うまでもない。ただ、本来、懐徳堂記念会が担うべき記念会関係資料の調査・研究業務が、現在は、すべて懐徳堂センターに委託されている。これは、懐徳堂記念会が法人賛助会員の減少により、研究員を配置する余裕がないことにもよるが、懐徳堂センターの側にも、専任スタッフは配置されておらず、両者がもたれ合う関係になっている。

---

### 4. 附属図書館との関係

懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館に収蔵されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしてきている。ただ本来、附属図書館が担うべき懐徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、すべて懐徳堂センターに委託されている。これは、附属図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがないことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であると言える。

(湯浅邦弘)



### 活動の概要とその特色

2006年度・2007年度の専任スタッフは寺前直人助教の1名である。兼任として文学研究科の福永伸哉教授、高橋照彦准教授の2名が業務を担っている。

豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登録されている。また、医学部や附属病院がかつて所在し、現在は大阪大学中之島センターがある大阪市北区中之島は、江戸時代の蔵屋敷が建ち並んだ場所として知られている。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が校地内遺跡の調査にあっている。

2006年度、2007年度においても石橋団地を中心に建物の改修や新設が引き続き進行しており、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、2005年度実施した待兼山修景工事に伴う埋蔵文化財調査において出土した多数の埋蔵文化財については、2006年度に整理作業を実施し、その結果、大阪府下では珍しい馬形埴輪と馬曳人がセットで用いられていたことが判明した。この成果を2007年3月20日に発表し、翌日3月21日には新聞各紙で報道された。さらにこの成果を含む発掘調査報告書を2008年3月に刊行している。

なお、これらの遺物は2007年8月17日にオープンした総合学術博物館修学館にて常時公開されている。

### 現在の組織

教授 0(1) 准教授 0(1) 助教 1 (括弧内は兼任教員数)

教授：福永 伸哉(兼任)

准教授：高橋 照彦(兼任)

助教：寺前 直人

### 組織の活動

#### 1. 発掘調査

2006・2007年度は、以下の埋蔵文化財発掘調査を実施した。

【2006年度】

8月30日	石橋団地：理学部研究棟改修に伴う立会調査(1)
8月31日	石橋団地：理学部研究棟改修に伴う立会調査(2)
9月5日	石橋団地：理学部研究棟改修に伴う立会調査(3)
10月3日	石橋団地：待兼山修学館横水道移設に伴う立会調査
10月15日	石橋団地：待兼山修学館改修に伴う立会調査(1)
10月24日	石橋団地：理学部研究棟改修に伴う立会調査(4)
10月27日	石橋団地：共通教育棟改修に伴う立会調査
12月18日	石橋団地：イ号館横外灯設置に伴う立会調査
12月18日	石橋団地：弓道場改修に伴う立会調査
12月22日～27日	石橋団地：文系総合研究棟新営に伴う発掘調査(1)
1月31日	石橋団地：基礎工学部研究棟改修に伴う立会調査
1月31日	石橋団地：待兼山修学館改修に伴う立会調査(2)

2月5日	石橋団地：待兼山修学館改修に伴う立会調査(3)
2月6日～23日	石橋団地：待兼山修学館改修に伴う立会調査(4)
2月28日	石橋団地：待兼山修学館改修に伴う立会調査(5)
3月13日	石橋団地：待兼山修学館改修に伴う立会調査(6)
3月15日	石橋団地：文系総合研究棟新営に伴う発掘調査(2)
3月22日～23日	石橋団地：文系総合研究棟新営に伴う発掘調査(3)
<b>【2007年度】</b>	
9月11日	吹田団地：幼稚園建設予定地立会調査
10月29日	石橋団地：理学部本館改修に伴う立会調査(1)
11月5日	石橋団地：理学部本館改修に伴う立会調査(2)
11月7日	石橋団地：理学部本館改修に伴う立会調査(3)
11月12日	石橋団地：文法経棟改修に伴う立会調査(1)
11月13日	石橋団地：理学部本館改修に伴う立会調査(4)
11月22日	吹田団地：吹田サイバーメディアセンター南側情報ネットワーク設置に伴う立会調査
11月24日	石橋団地：文法経棟改修に伴う立会調査(2)
11月27日	石橋団地：文法経棟改修に伴う立会調査(3)
12月1日	石橋団地：情報ネットワーク設備工事に伴う立会調査(1)
12月4日	石橋団地：理学部本館改修に伴う立会調査(5)
12月5日	石橋団地：情報ネットワーク設備工事に伴う立会調査(2)
12月12日	石橋団地：文法経棟改修に伴う立会調査(4)
12月19日	石橋団地：理学部本館改修に伴う立会調査(6)
12月20日	石橋団地：ゴミ置き場取設工事に伴う立会調査
12月20日	石橋団地：体育館改修に伴う立会調査
1月6日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(1)
1月16日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(1)
1月25日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(2)
1月28日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(3)
1月28日	石橋団地：入出構管理システム設置工事に伴う立会調査
2月2日	石橋団地：屋外消火栓改修工事に伴う立会調査(1)
2月9日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(4)
2月9日	石橋団地：屋外消火栓改修工事に伴う立会調査(1)
2月13日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(5)
2月13日	石橋団地：基礎工学部本館中庭改修その他工事に伴う立会調査
2月15日	石橋団地：埋設ガス管改修工事に伴う立会調査(6)
2月18日	石橋団地：待兼山修学館外灯取設工事に伴う立会調査

## 2. 広報・埋蔵文化財の公開

### 【2006年度】

5月	いちよう祭への出展
11月	豊中市蛍池公民館講座において構内遺跡の案内
3月	待兼山5号墳出土埴輪の調査成果を新聞発表

### 【2007年度】

4月	八尾市教育委員会の待兼山遺跡出土品への調査協力
----	-------------------------

5月 歴史読本第52巻7号(新人物往来社)写真掲載  
8月 総合学術博物館常設展示へ出展

---

### 3. 印刷物の刊行

【2007年度】

阪大学埋蔵文化財調査委員会ニュース第5号  
待兼山遺跡IV(発掘調査報告書)の刊行

#### 今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。

大阪大学豊中キャンパスの所在する待兼山は、弥生時代から歴史時代までの遺構や遺物が確認されており、これまでに多数の埋蔵文化財が出土している。すでに、これらの発掘成果については、現地説明会の実施と発見された遺構の説明板と地表表示を現地に設置し、2007年度からは総合学術博物館の常設展示において出土品を常時公開することにより、大阪大学関係者のみならず地域住民に広く公開することができた。しかし、発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多い。今後の整理作業では、これらを学術的に解明したうえで、その成果に基づき、地域の歴史を復元することに努めたい。また、大阪大学総合学術博物館や地域の文化財関係者と密接に連携した普及、啓蒙活動をさらに進めていく予定である。

(寺前直人)

**組織・体制**

研究科長直属の委員会として設置。委員は、委員長 1 名を除く全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント問題にかかわる相談に当たる。必要に応じ、全学セクシュアル・ハラスメント相談室と連携をとる場合もある。

2006 年度：委員会メンバー11名(女性 6 名、男性 5 名)。

2007 年度：委員会メンバー11名(女性 6 名、男性 5 名)。退職等にもない、一部委員が交代。

**活動状況****2006 年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」とストップ・セクシュアル・ハラスメントシールを新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのセクシュアル・ハラスメント防止対策説明会を開催。講師：松岡秀子豊中地区専門相談員、テーマ：セクシュアル・ハラスメント相談室です。(4月)
3. 各専修での講座ガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットおよびシールを学生に配布。(4月)
4. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第12回全国集会(名古屋で開催)に、研修のため委員3名が参加。(7月)
5. 教職員向け研修会を開催。講師：高野明氏、テーマ：アカデミック・ハラスメントの実態とその対処・予防(11月)。
6. 参考用図書を選定・購入し、学習支援室に配備。(2007年3月)
7. パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」の訂正シールを作成。(3月)。
8. 年間相談・対処件数は3件(前年度からの継続分を含む)。

**2007 年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのセクシュアル・ハラスメント防止対策説明会を開催。講師：松岡秀子豊中地区専門相談員、テーマ：セクシュアル・ハラスメント相談室です。(4月)
3. 各専修での講座ガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを配布。(4月)
4. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第13回全国集会(福岡で開催)に、研修のため委員3名が参加。(9月)
5. 教職員、学生を対象に研修会を開催。講師：櫻田和也氏、テーマ「実例から考える被害者支援と二次被害の防ぎ方」。(2008年3月)
6. 参考用図書を選定・購入し、学習支援室に配備。(2008年3月)
7. パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」改訂版を作成。(3月)
8. 年間相談・対処件数は2件(前年度からの継続分を含む)。

(藤岡穰)

2007年10月の大阪大学と大阪外国語大学の統合に伴い、文学研究科は12人の教員（教授8、准教授4）を迎え入れた。この12人と既存専攻からの7人、合わせて19人の教員によって、新たに文化動態論専攻（修士課程、学生定員19名）が設立された。これは共生文明論（小林茂、武田佐知子、江川温、堤一昭、井本恭子）、アート・メディア論（藤村昌明、市川明、園府寺司、永田靖、三宅祥雄）、文学環境論（玉井暲、米井力也、平田由美、石割隆喜）、言語生態論（大庭幸男、加藤正治、田野村忠温、神山孝夫、渋谷勝己）の4講座＝コースからなる。設立の目的は人文科学の新しい動向を取り入れた研究教育の推進によって既存専攻のそれを補完すること、人文科学の高度な知見を有し、外国語の運用能力に優れた高度専門職業人を養成することである。同時に既存専攻の強化も図られた。すなわち新規加入教員の大部分が既存専攻の諸分野の兼務教員となり、既存専攻から異動した7人も同じく異動元の専門分野の兼務となったのである。なお、異動教員のうち武田佐知子教授が10月2日付で副学長となったので、その業務を補充する任期制教員として山内晋次准教授が選任され、2008年4月に着任した。

2007年9月末の大学院博士前期課程の秋入試、また2008年2月の同課程春入試の結果、新専攻は定員を4名上回る23名を合格させた。入学者は共生文明論7名、アート・メディア論5名、文学環境論4名、言語生態論5名、合わせて21名である。2007年春から新専攻への参加予定教員は大阪外国語大学や大阪大学で説明会を行い、また日本の各大学にポスターを配布するなどして、学生募集に尽力したが、その努力は報われたと言えるだろう。

他方で、大阪外国語大学から異動した教員に課せられた共通教育の負担配分や旧課程の授業負担の問題では、この問題を取り扱った旧外大執行部への批判が多く出た。また異動教員当たりの予算配分の問題、さらには異動教員数に対する将来的なポスト比率の設定（教授6、准教授4、助教2とされた）とそれに向けての移行プロセスのプラン決定では、大学執行部に対するかなりの不満が出た。なお2007年後期に限って言えば、文学研究科に異動教員のための十分なスペースが確保できず、非常に申し訳ない事態であったことも忘れてはならない。

2008年3月には、大学院学生のための研究室、教員のための資料室が整えられ、事務補佐員も着任した。4月には授業が始まった。新入生の雰囲気はきわめて活発である。上の年次生のいない専攻で「オート新歓コンパ」をするという諧謔心には、教員も大いに元気ももらった。

新専攻では中学・高校専修免許（英語）、中学・高校専修免許（国語）、中学専修免許（社会）、高校専修免許（地理歴史）についての教職課程申請を新たに行うこととなり、7月の初めまでに必要な書類の準備がなされた。また『待兼山論叢』についても、とりあえず08年度については一分冊が与えられることとなった。09年度以降どのような形をとるのが望ましいのかについては、なお検討が続いている。

（江川温）

評価・広報室は、2007年10月、学部学生・大学院生を対象にして「平成19年度学部生の教育・研究環境等に関するアンケート」「平成19年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」を行い、また、暫定評価「現況調査表」作成会議（教育支援室から加わった者を中心に）は、同じ時に、学部卒業生・大学院修了生を対象として、「平成19年度文学部卒業生アンケート」「平成19年度大学院修了生アンケート」を行った。これらは、暫定評価「現況調査表」作成に利用された。

これらのアンケートのうち、「平成19年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」と「平成19年度大学院修了生アンケート」の集計結果は、本年報（2008年）の付録に表を掲げた。また、その他のアンケートの結果も含め、2007年度に行ったアンケートに関わるすべての結果を追ってホームページに掲載する方向で検討中である。

2007（平成19）年度に評価・広報室ないしその教育評価部門が関わって行ったアンケートについて、その概要と簡単なコメントを、以下に挙げておく。

### 概要

「平成19年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」は、博士前期課程と博士後期課程の大学院生に対して別々に実施し、博士前期課程は79名から、博士後期課程は73名からそれぞれ回答があった。設問は、博士前期課程と博士後期課程ともに共通し、すべて19問、主に、大学院生の指導体制、指導の内容、自身の研究についての現状認識について問うた。また、「平成19年度大学院修了生アンケート」は大学院の修了生を対象に行い、113名から回答を得た。

### 特徴

「平成19年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」と「平成19年度大学院修了生アンケート」と、その集計結果から判断するに、大学院生・大学院修了生の多くは現在の教育・研究環境にある程度の満足を示していると思われる。ただし、「平成19年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」の設問の13「大阪大学において、行政、教育、芸術等の諸活動をマネージできるような教養や能力を高めることができましたか」との回答では、特に博士前期課程において、ややネガティブな意見が目立った。また、設問の16「今年度のあなたの研究の進行状況はいかがですか」、設問の17「今年度のあなたの研究は年度初めに提出した研究計画書どおりに進んでいますか」においても同様であった。これらの結果が何を意味するかは、関係委員会・室等で今後慎重に検討されるべきであろう。

また、「平成19年度大学院修了生アンケート」では、専門分野内外の授業や研究活動に対する回答もおおむね好意的であり、大学院での修養が広く社会生活にとって有意義との意見が多く、研究者養成機関としての大学院の役割は高く評価されているし、全般的な教育体制にもある程度の評価が得られているが、「教育活動全般」より「研究活動全般」に対する評価が高いのは、「平成19年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」の設問16・設問17の回答結果と共通の傾向を示していると考えられるだろう。

### その他

このほか、カリキュラムや施設、学生支援体制の不備について、「語学の授業の不充実」「地震対策に対する不安」「学外者に対する情宣不足」「教員の多忙による指導態勢の不備」「ハラスメントの相談態勢の不備」「研究職・教育職以外の就職に対する情報不足」「修了生・学位取得者に対する優遇措置の不足」などが自由記述によって指摘された。これらについては、関係委員会等で対応がすでに図られ、問題が解消されつつあるものもあるが、関係委員会・室等で今後も引き続き検討されるべき問題もある。

（高橋文治）



## **第 2 部**

### **各専門分野における 教育・研究活動の概要**

## 【凡 例】

- I. 現在の組織については、2008年4月1日を基準とし、この時点での教員および在学生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2006年度(2007年3月修了・卒業)および2007年度(2008年3月修了・卒業)について記す。
  
- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2006年度～2007年度に在籍した者が、2006年度～2007年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2006年度～2007年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。
  
- III. 教員の研究活動については、原則として2008年4月1日現在各専門分野に属している現員のものを示す。研究業績については2006年度～2007年度に発表されたものを記載する。2006年度～2007年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2006年度～2007年度にかぎらず記載する。
  
- IV. 教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2008年4月1日現在各専門分野に属している現員が代表者になっているもので、2006年度～2007年度の間に配分を受けたものを記す。
  
- V. 教員による学会役員等の引きうけ状況については、2008年4月1日現在各専門分野に属している現員が、2006年度～2007年度の間に引きうけ、あるいは遂行した任務に関して記す。

\* 広域文化形態論講座および広域文化表現論講座については、上記の限りではない。

## 2-1 哲学哲学史

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

哲学哲学史は、文学部発足当初からの長い伝統を有し、哲学と哲学史は不可分であるとの観点から、(1)アカデミズムの確立 (2)哲学の普遍性の標榜 (3)現代的課題の探求を掲げて、教育・研究を続けてきた。研究は、第一に、綿密な文献解読に基づく近代現代哲学の歴史的研究を大きな柱としている。その上で第二に、現代哲学の諸問題にも積極的に取り組んでいる。

第一の柱については、デカルトからラカン、デリダまでのフランス系の哲学、ドイツ観念論やフランクフルト学派などのドイツ系の哲学を研究の中心にしている。近年はさらに西田哲学などの日本の哲学、さらには英米系の言語哲学や問答論理学の研究にも手を広げている。

第二の柱については、伝統的な認識論や存在論のほか、精神科学方法論、言語行為論、コミュニケーション論、哲学的意味論などにも目を向けている。

研究室員はみな、隣接の現代思想文化学と連携して、自由闊達に切磋琢磨している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：入江 幸男、上野 修

准教授：舟場 保之

助教：重田 謙

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23 (哲学・思想 文化学)	6	4	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	3 (哲学・思想文化学)	1	4	2	1
'07	7 (哲学・思想文化学)	0	1	0	1
小計	10 (哲学・思想文化学)	1	5	2	2

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	2	0	2
'07	0	0	0
計	2	0	2

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

重田 謙「像の破壊と現出——『哲学探究』における規則論と私的言語論、その論証、帰結、そして限界——」2007/3

主査：入江幸男 副査：上野修、須藤訓任、舟場保之

森田邦久「科学とは何か——本質を探究する学としての科学——」2007/3

主査：入江幸男 副査：上野修、須藤訓任、伊勢田哲治

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	0	1	3	0	0	4
'07	0	0	3	0	0	3
計	0	1	6	0	0	7

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	3	0	0	0	3
'07	2	0	0	0	0	2
計	2	3	0	0	0	5

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

津崎良典「フランス全国大学評価委員会による教育評価の基準策定に関するノート——ボローニャ・プロセスにおける ENQA ガイドラインとのかかわりで」『大阪大学大学教育実践センター紀要』大阪大学大学教育実践センター, 3, pp.5-16, 2007/3

津崎良典「言説的な実践としての「省察」による自己主体化——フーコー『主体の解釈学』講義から出発して」『メタフュシカ』37, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.29-40, 2006/12

中村修一「自殺をめぐる倫理的考察——カント自殺論に即して——」『医療・生命と倫理・社会』6, 大阪大学大学院医学研究科・医の倫理学教室, pp.66-76, 2007/3

西田充穂「『存在の彼方へ』における受動性」『待兼山論叢』(大阪大学文学会)40, pp. 17-34, 2006/12

#### 【2007年度】

Yoshinori TSUZAKI, "L'esercizio morale secondo la lettera di Descartes a Elisabetta del 15 settembre 1645," in Quaderni L.E.I.F., Dipartimento di Scienze Umane, Università di Catania, n° 3, pp. 102 - 120, luglio-dicembre 2007

富岡基子「«*émotion*» の在処と行方——『情念論』における意志をめぐる——」『メタフュシカ』38, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 111-123, 2007/12

中村修一「カントの方法——『活力測定考』における数学——」『待兼山論叢』41, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-32, 2007/12

### (2)口頭発表

#### 【2006年度】

津崎良典「デカルト『方法序説』第二部における方法と徳の問題」日本哲学会, 東北大学/宮城県仙台市, 2006/5/21, 『日本哲学会第65回大会一般研究発表予稿集』(日本哲学会), pp. 27-29, 2006/5

西田充穂「レヴィナスにおける受動性——『存在の彼方へ』にみる三つの文脈から——」関西倫理学会 2006年度大会, 熊本大学/熊本県熊本市, 2006/11/4, 『関西倫理学会 2006年度大会研究発表要旨』(関西倫理学会), p. 19, 2006/11

平光哲朗「創造の持続——ベルクソンの創造論について——」日本哲学会, 東北大学/宮城県仙台市, 2006/5/20, 『日本哲学会第65回大会一般研究発表予稿集』(日本哲学会), pp. 17-19, 2006/5

#### 【2007年度】

Luke Malik, "Pragmatism and Buddhism", International Conference on East-West Studies, School of Chinese, The University of Hong Kong, 2007/10/5

Luke Malik, "Kripke and Zen", An International Conference: Analytic Philosophy and Asian Thought, Kyoto University, 2008/3/19

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2006年度】

前田秀明(翻訳)「ニコラス・ルーマン『「人格」という形式』」『メタフュシカ』第37号, 大阪大学大学院文学研究科  
哲学講座, pp.115-128, 2006/12

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計1名)

2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:1名 大学院:3名 (計4名)

2007年度 学部:0名 大学院:4名 (計4名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度~2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度~2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2006年度:3名 2007年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名

その他 2名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度:0名 2007年度:0名

### 9. 刊行物

2006年度 『メタフュシカ』第37号、*Philosophia OSAKA*, No. 2

2007年度 『メタフュシカ』第38号、*Philosophia OSAKA*, No. 3

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第23回日本フィヒテ協会大会

2007年11月17日

(日本フィヒテ協会主催)

於:大阪大学待兼山会館

スピノザ協会事務局

2007年4月~現在に至る



## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 第7回 *handai metaphysica* 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2008年3月18日  
「生の肯定か否定弁証法か——ニーチェとアドルノ」発表者：入谷秀一(大阪大学・非常勤講師)  
「意識における知識の構造——中期西田哲学の場合——」発表者：田中潤一(現代思想文化学・博士後期課程)  
「*Nam Caesar nullus nobis haec otia fecit.* ——ショーペンハウアーとその父——」発表者：須藤訓任(現代思想文化学・教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 19 名
- 第6回 *handai metaphysica* 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2007年12月12日  
「社会的コミュニケーションの論理的ダイナミクス」発表者：山田友幸(北海道大学・教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 20 名
- 第5回 *handai metaphysica* 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2007年8月3日  
「プラトンの想起、似像、メタファー」発表者：金山弥平(名古屋大学・教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 23 名
- 第4回 *handai metaphysica* 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2007年3月19日  
「知を共有するとはどういうことか」発表者：入江幸男(哲学哲学史教授)  
「超越論的なものの世間化」発表者：前田直哉(種智院大学非常勤講師)  
「複合実体と『エコー』——<実体の紐帯>を巡る一考察」発表者：山口裕人(博士後期課程院生)  
於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 19 名
- 第3回 *handai metaphysica* 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2006年8月10日  
「意識の神秘は存在するか」発表者：永井均(千葉大学教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 33 名
- 第5回 *handai metaphysica* 特別講演会 2008年1月11日  
(現代思想文化学専門分野、第6回ドイツ応用倫理学研究会と共催)  
「カントの人格概念」発表者：ラインハルト・ブランツ(マールブルク大学・教授)(通訳：田中美紀子)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 24 名
- 第4回 *handai metaphysica* 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2007年3月5日  
“Does Nishida Kitaro’s logic of place help us to understand Occidental logic? ——A Metaphysical Topology of Analytic Philosophy ——“  
発表者：Michel Dalissier (“Center for Research on Chinese, Japanese and Tibetan Civilizations”, [ Practical School of High Studies / College de France / National Center for Scientific Research – CNRS ])  
於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 15 名
- 第3回 *handai metaphysica* 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2006年11月21日  
„Institutionalisierung des Regelfolgens? Kants Rechtszustand als Modell“ 発表者：Gerhard Schönrich (TU Dresden)  
於：待兼山会館 2F 会議室、出席者約 20 名

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

学部教育(哲学・思想文化学専修)については、哲学史についての基礎的な知識を身につけるために「近代哲学史」「現代哲学概説」を開講し、また外国語の哲学文献をはじめ読む学生のための基礎的な演習として「英米哲学基本文献読解」「フランス哲学基本文献読解」「ドイツ哲学基本文献読解」を提供するとともに、英語、フランス語、ドイツ語の演習に加えて、西洋文化理解に必須のラテン語による演習を複数開講した。現代哲学を研究する上で不可欠の知識となっている「論理学」も隔年で開講した。大学院生をチューターにして、フランス語とドイツ語の勉強会をおこなった。また英語の

運用能力を高めるために英語による授業も複数開講した。また、英語授業に関しては、大学院留学生による英語を用いた補習授業も実施した。海外の大学との交流協定を利用して、1名の留学生を送り出した。研究指導については、全スタッフが、オフィスアワーを週1、2回もち、個別の相談に応じた。また、研究発表の機会(年に2回)をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練をおこなうとともに、専修が主催する研究会への学生の参加をうながした。

大学院教育については、各スタッフの専門的な講義と演習の他に、論文作成指導の授業をもうけ、文章作成、口頭発表、討論の訓練をおこなうことによって、個別の論文指導をきめ細かくでき、また専門分野主催の研究会への多数の参加をみたように、院生の自主的な研究活動を育成し支援した。院生を対象とした自主ゼミを複数実施したが、これには他専門分野や他研究科の院生の参加もあった。また、学部生に対してと同様に、英語による授業を複数開講し、留学生によって英語をもちいた補習授業をおこなった。留学の指導も積極的におこない、2006年に3名、2007年に4名を留学生として海外に送り出した。後期課程の院生に対しては、専門分野発行の専門誌への論文執筆掲載へ向けて査読および指導をおこなうとともに、学会や研究会での発表を推奨し(5回の口頭発表。そのうち1回は海外の会議での発表)、学内および学外の雑誌への論文の投稿をうながした(7本の論文。そのうち1本は海外の雑誌への掲載)。2名の卒業生が課程博士申請論文を提出し、学位を取得した。

## 12-2. 研究活動

研究活動は、学問の性格上個人研究が中心であり、各自が積極的に論文執筆、学会や研究会での発表をおこなった。海外の学会へ参加するだけでなく、外国の研究者を招き、講演会を開催した。現代思想文化学専門分野と共同で、哲学研究会 *handai metaphysica* 研究例会を3回開催し、また2008年1月には、マールブルク大学のラインハルト・ブランド教授を招いて特別講演会をおこなった。

科学研究費補助金研究である「〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究」(研究代表者・上野修)、「分析哲学とフィヒテ哲学」(研究代表者・入江幸男)、「現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究」(研究代表者・舟場保之)および「ウィトゲンシュタイン哲学の成果と限界の検証」(研究代表者・重田謙)のそれぞれのプロジェクトに従事した。上野は、2007年6月に、ハノーファー(ドイツ連邦共和国)で開かれたSBON(スピノザ文献オンラインネットワーク)のワークショップに日本代表で参加し、2008年1月には『ドゥルーズ／ガタリの現在』(平凡社)を出版した。入江は、2006年11月に、ハレ(ドイツ連邦共和国)で開かれた国際フィヒテ協会の大会と、2007年8月に、清華大学(中華人民共和国)で開かれた国際論理学科学哲学方法論会議で、それぞれ研究発表した。舟場は、文部科学省の「大学教育の国際化推進プログラム(海外先進研究実践支援)」によってヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学(フランクフルト、ドイツ連邦共和国)にて2007年9月から2008年1月まで在外研究をおこない、その間、独日倫理コロキウム(ボン)および独日カントコロキウム(フランクフルト)にて研究発表した。

当研究室の研究成果の一部として、現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野と共同で発行している年刊雑誌『メタフィシカ』の37号と38号(故溝口宏平教授追悼号)を公刊した。また現代思想文化学専門分野と共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* の2号と3号を公刊し、研究成果の海外発信に努めた。学会活動についても、これまでと同様に、ほとんどのスタッフが、各種の委員として学会の運営に貢献しており、学会での発表や司会も数多くこなした。また2007年11月には、日本フィヒテ協会の第23回大会を大阪大学で開催した。

哲学および哲学史研究の国際的な拠点となるために、これまで以上に積極的な計画を立てることが今後の重要な課題になると考えている。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 上野修教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻:哲学哲学史。

## 1-1. 論文

上野修 「スピノザと群集の声」『現代思想』36-1, 青土社, pp. 175-185, 2008/1

Ueno, Osamu, "Spinoza on Prophetic Certainty" *Philosophia Osaka*, 2, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture//Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 63-83, 2007/3

上野修 「二〇〇六年読書アンケート」『みすず』48-1, みすず書房, pp. 57-57, 2007/2

上野修 「隠蔽し誘惑するインターフェイス」『第1巻 岐路に立つ人文学』(大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006), pp. 209-222, 2007/1

上野修 「現実性と必然性——スピノザを様相的観点から読み直す」『哲学』(日本哲学会), 57, 日本哲学会, pp. 77-92, 2006/4

## 1-2. 著書

上野修 他(共著)『テキストの生成と変容』大阪大学文学研究科, pp. 41-44, 2008/3

上野修 他(共著)『ドゥルーズ/ガタリの現在』平凡社, pp. 20-40, 2008/1

## 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修 (書評)「小泉義之著『病の哲学』(筑摩書房, 2006)」日仏哲学会『フランス哲学・思想研究』日仏哲学会, 2007/8

上野修 (事典項目)「スピノザ」大庭健, 井上達夫, 川本隆史, 加藤尚武, 神崎繁, 塩野谷祐一, 成田和信『現代倫理学事典』弘文堂, 2006/12

## 1-4. 口頭発表

上野修 「主体の開設と出来事〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究 2007年度 夏の山口ワークショップ, 山口大学, 2007/8

上野修 「出来事の時間——ドゥルーズの『意味の論理学』から」山口大学時間学研究所理論的時間研究部門 基礎論セミナー#3, 山口大学時間学研究所, 山口大学, 2007/3

上野修 「「無神論者」スピノザの聖書解釈」大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究(2005年度-2007年度): テキストの生成と変容, 大阪大学, 2006/12

上野修 「ドゥルーズ『意味の論理学』は何をしているのか」ドゥルーズ研究会, ドゥルーズ研究会, 立命館大学, 2006/7

上野修 「現実性と必然性——スピノザを様相的観点から読み直す」第65回日本哲学会大会:共同討議 1:「哲学史を読み直す(第一回):スピノザ」, 日本哲学会, 東北大学, 2006/5(『哲学』57, pp. 77-92, 2006/4)

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度~2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:上野修

課題番号:19520022

研究題目:〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究

研究経費:2007年度 直接経費 2,300,000円 間接経費 690,000円

研究の目的:

本研究は主体性(主観性=私であること)の哲学的な解明を行う。「私」という自己言及的な指示詞はさまざまなパラドックスを孕むことが知られているが、本研究は指示詞「私」の奇妙なふるまいを言語獲得における主体の開設・設立の見地から明らかにし、自分を間違いなく「私」と指すことのできる人間存在の核心に迫ろうとするものである。具体的には、①永井均の「独在論」をめぐる共同討議と形而上学的考察、②指示の理論における指標詞「私」の意味論的検討、③真理条件的意味論に立つ「根源的解釈」とラカン精神分析における「主体の弁証法」との理論的接点の明確化、④言語が人間の「死」に対して有する構成的関係の存在論的な考察、⑤科学的真理と「主体の真理」の関係あるいは無関係性の明確化、⑥哲学史上の自我論からの「私」をめぐる特異な論点

の切り出しと再考、以上を随時並行しながら行う。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

関西哲学会・委員

2007年10月～現在に至る

スピノザ協会・運営委員

2006年3月～現在に至る

## 2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻：哲学哲学史。

### 2-1. 論文

---

Irie, Yukio, "What's Going on, When We Share Knowledge?" Osamu Ueno, Yukio Irie, Norihide Suto, Yasuyuki Funaba *Philosophia Osaka*, No. 3, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 37-50, 2008/3

入江幸男 「観念論を徹底するとどうなるか——フィヒテ知識学の変化の理由——」牧野英二、舟山俊明、斎藤智志、伊藤直樹『デイルタイ研究』(日本デイルタイ協会), 第18号, 日本デイルタイ協会, pp. 38-54, 2007/12

入江幸男 「近代理性と公共性に関する二つの問題」鷺田清一『岐路に立つ人文学』第一巻, COE「インターフェイスの人文学」, pp. 223-235, 2007/1

入江幸男 「知を共有するとはどういうことか」中岡成文、須藤訓任、舟場保之『メタフシカ』37, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-15, 2006/12

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

入江幸男(事典項目)「オーステイン」「言語行為論」「批判」大庭健、井上達夫、河本隆史、加藤尚武、神崎繁、塩野谷祐一、成田和信『現代倫理学事典』弘文堂, 2006/12

### 2-4. 口頭発表

---

入江幸男 「「意識の事実」における諸自我と共同自我」日本フィヒテ協会第23回大会, 日本フィヒテ協会, 大阪大学, 2007/11

Irie, Yukio "Contradiction in the Question-Answer Relation" The 13th International Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science, Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science of the International Union of History and Philosophy of Science, Tsinghua University, 2007/8

入江幸男 「フィヒテ哲学の全体像を求めて」日本デイルタイ協会2007年関西研究大会, 日本デイルタイ協会, 関西大学, 2007/6

Irie, Yukio "Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre——Einige Schwierigkeit mit der intellektuellen Anschauung——" Internationaler Fichte-Kongress an der Universitaet Halle : 'Wissen, Freiheit, Geschichte' Die Philosophie Fichtes im 19. und 20. Jahrhundert, Internationaler Fichte Gesellschaft, Halle Universitaet, 2006/10

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

入江幸男 日本フィヒテ協会研究奨励賞, 日本フィヒテ協会, 1995/11

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号:19520021

研究題目:分析哲学とフヒテ哲学

研究経費:2007年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究の目的は、現代英米の分析哲学の知見を組み入れることによって、ドイツ観念論とりわけフヒテ哲学の再解釈をおこなひ、現代的な意義を解明することです。具体的には次の四つの課題に取り組みます。

- ① 直観による知の基礎付け主義と決断主義との矛盾の解決
- ② 知的直観と命題知の関係の解明
- ③ フヒテの後期知識学の再解釈
- ④ フヒテの道徳論と他者論を現代の分析哲学の議論に関連付けて発展させること

フヒテの後期知識学への展開は「絶対知(知的直観)を命題で表現することが如何にして可能か」という問題に答える試みであったと捉えて、この思想の歩みを、現代の言語哲学の成果を援用することで、より精確に再解釈することができ、それをもとに直観と言語の関係、存在と言語の関係をめぐる現代の議論に貢献することが可能になるはずであり、それを目標にしています。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・委員	2005年5月～現在に至る
関西哲学会・委員	2004年11月～現在に至る
日本フヒテ協会・会長	2004年3月～現在に至る
日本哲学会・編集委員	2003年6月～2007年5月

## 3. 舟場 保之 准教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004年4月から現職。専攻:哲学哲学史。

### 3-1. 論文

Funaba, Yasuyuki, "Kann Gender philosophisch diskutiert werden?" *Philosophia OSAKA*, 3, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 51-63, 2008/3

舟場保之 「カントによる死刑制度擁護論からの抜け道を求めて」『倫理学研究』(関西倫理学会), 37, 晃洋書房, pp. 16-24, 2007/4

舟場保之 「ジェンダーは哲学の問題とはなりえないのか」『哲学』(日本哲学会), 58, 法政大学出版局, pp. 61-78, 2007/4

Funaba, Yasuyuki, "Die Kantische Philosophie aus der Sicht der kommunikativen Rationalität" *Philosophia OSAKA*, 2, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 85-96, 2007/3

舟場保之 「「グローバル・エシックスとは何か？」をどのように問うのか？」『現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究』(課題番号 15320005), 2003年度～2006年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書, pp. 20-27, 2007/3

舟場保之 「カントにコミュニケーション合理性を読み込む可能性について」御子柴善之, 檜垣良成(編)『理性への問い』晃洋書房, pp. 119-139, 2007/1



舟場保之 「アイデンティティ・ポリティクスとコミュニケーション——哲学は何をするのか?——」『第1巻 岐路に立つ人文学』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006), pp. 195-208, 2007/1

### 3-2. 著書

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之(書評)「中島義道著『カントの自我論』を読む。あるいは単純な独我論批判」御子柴善之, 檜垣良成(編)『理性への問い』晃洋書房, pp. 173-178, 2007/1

### 3-4. 口頭発表

Funaba, Yasuyuki “Die kantische Philosophie aus der Sicht der kommunikativen Rationalität” Deutsch-japanisches Kant-Kolloquium, Johann Wolfgang Goethe Universität, Frankfurt, GERMANY, 2008/1

Funaba, Yasuyuki “Wie sollen Normengeltungen diskutiert werden?”Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium:Ethik im Zeitalter der Globalisierung, Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY, 2007/11

舟場保之 「ジェンダーは哲学の問題とはなりえないのか」日本哲学会第 66 回大会 共同討議 I :ジェンダーと哲学, 日本哲学会, 千葉大学, 2007/5

舟場保之 「カントによる死刑制度擁護論の抜け道を求めて」関西倫理学会 2006 年度大会シンポジウム:サンクションの可能性と限界, 関西倫理学会, 熊本大学, 2006/11(『関西倫理学会 2006 年度大会予稿集』p. 29, 2006/10)

舟場保之 「「グローバル・エシックスとは何か?」をどのように問うのか?」日本倫理学会第 57 回大会ワークショップ:グローバル・エシックスとは何か, 日本倫理学会, 東京大学, 2006/10(『日本倫理学会第 57 回大会報告集』pp. 25-26, 2006/9)

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005 年度前期), 大阪大学, 2005/11

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:舟場保之

課題番号:15320005

研究題目:現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究

研究経費:2006 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

2001 年 9 月 11 日の事件が突きつける問いは、グローバリゼーションの帰結として形成されつつある新たな世界秩序において、「われわれは何をなすべきか」、「われわれはどのような規範を必要としているのか」、「われわれはどのような公共空間を築くべきか」といった、哲学的・倫理的な問いに収斂すると考えられる。戦争とテロリズム、南北格差、地球環境問題、ジェンダー、ナショナリズム、移民と難民、多文化社会など具体的な問題を踏まえ、これまでの哲学・倫理学を参照しつつ、哲学的・倫理的議論および思考を積み重ねることによって、これらの問いに応答すること、それをこの研究プロジェクトは目指している。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2007 年度、その他補助金、助成金獲得者:舟場保之

助成金名:研究拠点形成費等補助金

研究題目:普遍主義的規範形成へ向けた理論的研究

助成団体名:文部科学省

助成金額:2007 年度 直接経費 3,000,000 円



研究の目的:

経済的な側面におけるグローバル化のみが力もちさまざまな弊害を生み出す現代社会において、こうした潮流を批判的に吟味するには、グローバル・エシックスに代表されるような普遍主義的規範に基づく視点が必要不可欠である。ゲーテ大学は、伝統的に社会批判の理論を展開するフランクフルト学派の拠点であるが、なかでもルッツ=バツハマン教授は、カントの普遍主義的発想と現代のコミュニケーション理論とを重ね合わせることによって、批判的吟味が悪しき政治主義および実証主義的な社会科学に陥ることを回避しつつ独自の理論を形成している。カント解釈を含め、細部における相違点はあるものの、その基本的な方向性は申請者と軌を一にするところであり、共同研究することによって、相互の差異を明確にし、それぞれ軌道修正を施すことで、普遍主義的規範に関する理論を彫琢することが可能となる。これは、哲学研究をたんなる文献学に終わらせるのではなく、社会との接続を保ちアクチュアルな場面において有効なものとする営為でもある。

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フイヒテ協会・会計監査	2007年4月～現在に至る
日本カント協会・委員	2007年4月～現在に至る
日本カント協会・編集委員	2005年12月～2007年11月

## 4. 重田 謙 助教

1967年生。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。2007年4月から現職。専攻:哲学哲学史。

### 4-1. 論文

重田謙 「独在的な使用と経験的な使用——ウイトゲンシュタイン哲学によるウイトゲンシュタイン哲学批判の試み——」『待兼山論叢』41, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-15, 2007/12

### 4-2. 著書

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 4-4. 口頭発表

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007年度～2008年度、代表者:重田謙

課題番号:19820012

研究題目:ウイトゲンシュタイン哲学の成果と限界の検証

研究経費:2007年度 直接経費 1,070,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究はウイトゲンシュタイン哲学の成果を最大限に活用しながら、实在論と独我論(観念論)との対立に解明を与えることを目指す。具体的には、次の四つのテーゼを綿密かつ明快に論証することをその目標とする。

① 世界は私が見ている夢ではないこと(=实在論)は論証不可能である。

- ② 世界は私が見ている夢であること(=独我論)は論証不可能である。
- ① 私たちの認識は、世界は私が見ている夢ではない(=実在論)と信じざるをえない、という仕方で条件づけられている
- ② 私たちの認識は、世界は私が見ている夢である(=独我論)と信じざるをえない、という仕方で条件づけられている。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-2 現代思想文化学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

現代思想文化学は、従来の専攻・哲学哲学史から分かれて設立された新しい専門分野である。西洋近世および現代の哲学研究を基盤としながら、今日対応が焦眉の課題となっている社会的・文化的諸問題に哲学的視座から積極的にアプローチすることを目指している。

具体的には、デカルトから現代にいたる西洋哲学と科学技術史といった幅広い領域を研究対象としながら、グローバル化を見据えた英語運用能力の習得にも重点を置いている。また、サイエンス・カフェなどの活動にも積極的に取り組んでいる。哲学の実践力を広く社会で生かすことができる院生の育成を目標としている。

教育・研究活動は、専門分野哲学哲学史との密接な連携のもとに行われている。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 2(兼任1) 准教授 兼任1 講師 0 助教 0

教授：須藤 訓任、望月 太郎(大学教育実践センター所属・兼任)

准教授：中村 征樹(大学教育実践センター所属・兼任)

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23 (哲学・思想 文化学)	5	5	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	3 (哲学・思想文化学)	2	0	0	0
'07	7 (哲学・思想文化学)	1	1	0	0
小計	10 (哲学・思想文化学)	3	1	0	0

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	0	0
'07	0	0	0
計	0	0	0

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	0	0	2	0	0	2
'07	0	0	4	0	0	4
計	0	0	6	0	0	6

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	0	1	0	0	1
'07	0	2	2	0	0	4
計	0	2	3	0	0	5

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

田中潤一「意志の哲学から場所の哲学へ」『メタフュシカ』37, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.55-67, 2006/12

山口裕人「複合実体と「エコ」——〈実体的紐帯〉を巡る一考察」『メタフュシカ』37, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.41-53, 2006/12

#### 【2007年度】

生島弘子「ニヒリズムとはどういう危険か」『メタフュシカ』第38号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、pp.137-148, 2007/12

田中潤一「中期西田哲学における知識の二類型とその根柢」佛教大学教育学部学会紀要第7号, p.133-145, 2008/3/14

田中潤一「意識における知識の構造——中期西田哲学の場合——」『メタフュシカ』38, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.125-136, 2007/12

山口裕人「ライブニッツは生涯を通じて唯名論者であったか？」『待兼山論叢』41, 大阪大学大学院文学研究科, pp.33-48, 2007/12

### (2)口頭発表

#### 【2006年度】

山口裕人「個体化論に於けるライブニッツ」、ライブニッツ研究会(慶應義塾大学のCOE研究「心の解明に向けての統合的方法論構築」の一環), 2007/3/27

#### 【2007年度】

生島弘子「価値の生じる場としての自己——他者関係」第七回ニーチェ・セミナー, 大阪大学セミナーハウス, 2007/4/30

百崎清美「ラ・メトリ『人間機械論』を読む」日本科学史学会生物学史分科会関西月例会, エル大阪南73室, 2007/11/25

山口裕人「ライブニッツにおける記憶と同一性の問題」日仏哲学会 春季大会, 同志社大学今出川キャンパス, 2008/3/22

山口裕人「神と個体との関係について——ライブニッツとクザーヌス——」第二回ライブニッツ研究会, 学習院大学, 2008/3/13

### (3)その他(書評・翻訳など)

#### 【2006年度】

生島弘子(書評)「クリステン・ブラウン著『ニーチェと身体化——識別する身体と非二元論——』」『メタフュシカ』37, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.109-114, 2006/12

平野一比古(書評)「Jakub Čapek『ベルクソンの自由のアポリア』その他」『メタフュシカ』37, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.103-108, 2006/12

#### 【2007年度】

生島弘子(報告)「Peter Goodrich "Slow reading" (Nietzsche and Legal Theory : HALF-WRITTEN LAWS, edited by Peter Goodrich, Mariana Valverde, New York, Routledge, 2005, p.185-200)」第六回ニーチェ研究者の集い、2007年9月2日、大阪大学

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

2007年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部：1名 大学院：0名（計1名）  
2007年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6名  
2006年度：4名 2007年度：2名  
<内訳> 技術職 2名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名  
その他 2名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

## 9. 刊行物

2006年度 『メタフュシカ』第37号、*Philosophia OSAKA*, No. 2  
2007年度 『メタフュシカ』第38号、*Philosophia OSAKA*, No. 3

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2006年度 第5回ニーチェ研究者の集い 2006年9月9日  
2007年度 第6回ニーチェ研究者の集い 2007年9月2日  
ソクラティック・ダイアローグのワークショップ 2008年3月28日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第7回 *handai metaphysica* 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2008年3月18日  
「生の肯定か否定弁証法か——ニーチェとアドルノ」発表者：入谷秀一(大阪大学・非常勤講師)  
「意識における知識の構造——中期西田哲学の場合——」発表者：田中潤一(現代思想文化学・博士後期課程)  
「*Nam Caesar nullus nobis haec otia fecit.* ——ショーペンハウアーとその父——」発表者：須藤訓任(現代思想文化学・教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 19名  
第6回 *handai metaphysica* 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2007年12月12日  
「社会的コミュニケーションの論理的ダイナミクス」発表者：山田友幸(北海道大学・教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 20名  
第5回 *handai metaphysica* 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2007年8月3日  
「プラトンの想起、似像、メタファー」発表者：金山弥平(名古屋大学・教授)  
於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 23名  
第4回 *handai metaphysica* 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2007年3月19日  
「知を共有するとはどういうことか」発表者：入江幸男(哲学哲学史教授)  
「超越論的なものの世間化」発表者：前田直哉(種智院大学非常勤講師)



「複合実体と『エコー』——<実体的紐帯>を巡る一考察」 発表者：山口裕人(博士後期課程院生)

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 19 名

第 3 回 *handai metaphysica* 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催)

2006 年 8 月 10 日

「意識の神秘は存在するか」 発表者：永井均(千葉大学教授)

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 33 名

第 5 回 *handai metaphysica* 特別講演会

2008 年 1 月 11 日

(哲学哲学史専門分野、第 6 回ドイツ応用倫理学研究会と共催と共催)

「カントの人格概念」 発表者：ラインハルト・ブランツ(マールブルク大学・教授)(通訳：田中美紀子)

於：待兼山会館 2F 会議室、参加者 24 名

第 4 回 *handai metaphysica* 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催)

2007 年 3 月 5 日

“Does Nishida Kitaro’s logic of place help us to understand Occidental logic? ——A Metaphysical Topology of Analytic Philosophy ——“

発表者：Michel Dalissier (“Center for Research on Chinese, Japanese and Tibetan Civilizations”, [ Practical School of High Studies / College de France / National Center for Scientific Research – CNRS ])

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者 15 名

第 3 回 *handai metaphysica* 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催)

2006 年 11 月 21 日

„Institutionalisierung des Regelfolgens? Kants Rechtszustand als Modell“ 発表者：Gerhard Schönrich (TU Dresden)

於：待兼山会館 2F 会議室、出席者約 20 名

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

2007 年 11 月から大学教育実践センターの中村征樹・准教授を兼任教員に迎えた。同准教授は、科学哲学および科学技術史を中心に、教育研究活動に携わっており、本専門分野は新体制を整えたことになる。

学部教育(哲学・思想文化学専修)については、哲学史についての基礎的な知識を身につけるために「近代哲学史」「現代哲学概説」を開講し、また外国語の哲学文献をはじめ読む学生のための基礎的な演習として「英米哲学基本文献読解」「フランス哲学基本文献読解」「ドイツ哲学基本文献読解」を提供するとともに、英語、フランス語、ドイツ語の演習に加えて、西洋文化理解に必須のラテン語による演習を複数開講した。現代哲学を研究する上で不可欠の知識となっている「論理学」も隔年で開講した。大学院生をチューターにして、フランス語とドイツ語の勉強会をおこなった。また英語の運用能力を高めるために英語による授業も複数開講した。また、英語授業に関しては、大学院留学生による英語を用いた補習授業も実施した。海外の大学との交流協定を利用して、1 名の留学生を送り出した。研究指導については、全スタッフが、オフィスアワーを週 1、2 回もち、個別の相談に応じた。また、研究発表の機会(年に 2 回)をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練をおこなうとともに、専修が主催する研究会への学生の参加をうながした。

大学院教育においては、哲学哲学史専門分野との緊密な連携のもとに、フランス哲学・ドイツ哲学および科学哲学に関する専門的知識の教授に努める一方で、科学史や思想史の研究手法を取り入れつつ、学生の多様な関心に対応している。修士論文および博士論文の作成指導については、発表とディスカッションを中心とした演習を毎週 2 コマ連続で開講し、各自の論文の完成を助けると同時に、学会等での口頭発表に向け表現力を養う訓練を行い、さらに徹底したディスカッションを通じて批判的思考力を高める努力を続けている。また専門分野主催の研究会への多数の参加をみたように、院生の自主的な研究活動を育成し支援した。さらに現代社会における英語の重要性に鑑み、英語運用能力、とくに英文論文作成のための授業を開講した。留学の指導も積極的におこない、2007 年に 1 名を留学生として海外に送り出した。後期課程の院生に対しては、専門分野発行の専門誌への論文執筆掲載へ向けて査読および指導をおこなうとともに、学会や研究会での発表を推奨し(5 回の口頭発表)、学内および学外の雑誌への論文の投稿をうながした(6 本の論文)。

## 12-2. 研究活動

研究活動は、学問の性格上個人研究が中心であり、各自が積極的に論文執筆、学会や研究会での発表をおこなった。海外の学会へ参加するだけでなく、外国の研究者を招き、講演会を開催した。哲学哲学史専門分野と共同で、哲学研究会 *handai metaphysica* 研究例会を3回開催し、また2008年1月には、マールブルク大学のラインハルト・ブランド教授を招いて特別講演会を行った。科学研究費補助金研究である「クリティカル・シンキングの研究と教育」(研究代表者・望月太郎)に望月と須藤が従事するとともに、望月は以下の海外での研究発表および調査を行った。1. 「日本の大学における学生による授業評価の実践について」(2007年5月16日、[フランス語圏] 国際大学教育協会第24回大会、モントリオール大学、ケベック州、カナダ) 2. 2007年6月に、理学研究科の荻原哲教授と共同でチュラロンコン大学及びモンクット王工科大学トンブリ校(バンコク、タイ)でクリティカル・シンキングの教育実践に関する調査(上記科研費による)。また、2008年3月28日には、ピーター・ハーテロー氏(エラスムス大学実践哲学研究所、ロッテルダム、オランダ)を講師に迎えて、*Socrates on Quality*という題目で、「質」の概念について、それがどのような基準の下に、どのような視点から評価されるのか、ソクラティック・ダイアローグの手法を用いた議論の実践を行った。これにはスタッフ全員が参加した(ワーキングランゲージは英語)。その際、併せて、ヨーロッパにおける *Philosophical Practice* の現状についても報告された。須藤は『フロイト全集』(岩波書店)の編集者および翻訳者の一人として2006年11月同全集第17巻を、また2007年7月共著(子供だって哲学②自分って何だろう) (佼成出版社)、同年8月編共著『哲学の歴史9 反哲学と世紀末』(中央公論新社)を刊行した。中村は以下の国際会議で招待講演を行った。「責任ある科学の生成：科学者コミュニティ内部の／を超えたコミュニケーション」(2007年11月22-25日、第2回応用倫理国際会議、北海道大学)。また、中村と望月は共同で以下の研究発表を行った。「21世紀のための学士課程教育：卒業生からなにを学ぶことができるのか？」(2007年12月3-4日、GUNI-AP2007年年会、杭州西湖国賓館、中国)

当研究室の研究成果の一部として、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野と共同で発行している年刊雑誌『メタフュシカ』の37号と38号(故溝口宏平教授追悼号)を公刊した。また哲学哲学史専門分野と共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* の2号と3号を公刊し、研究成果の海外発信に努めた。学会活動についても、これまでと同様に、ほとんどのスタッフが、各種の委員として学会の運営に貢献しており、学会での発表や司会も数多くこなした。

哲学および現代思想研究の国際的な拠点となるために、これまで以上に積極的な研究計画を立てることが今後の重要な課題になると考えている。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 須藤 訓任 教授

京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。大谷大学助教授、同教授を経て、2004年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：西洋近現代哲学。

#### 1-1. 論文

須藤訓任 「Caesar nullus nobis haec otia fecit. ショーペンハウアーとその父」『メタフュシカ』38, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 25-46, 2007/12

須藤訓任 「「異界」とのつきあい方 アデーレとアルトゥール」中岡成文『岐路に立つ人文学』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」), 1, pp. 119-147, 2007/1

#### 1-2. 著書

須藤訓任, 新宮一成, 藤野寛他(共著) 『哲学の歴史第9巻 反哲学と世紀末 19-20世紀』中央公論新社, 750p., pp. 19-44, および pp. 263-376, 2007/8

須藤訓任, 和田秀樹, 山本容子他(共著) 『子どもだって哲学②自分って何だろう』佼成出版, 200p., pp. 161-200, 2007/7

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任他(共著)(事典項目)「現代倫理学事典」弘文堂, 2006/12

須藤訓任, 藤野寛(共訳)(翻訳)「フロイト全集第17巻」岩波書店, 2006/11

須藤訓任(解題)「フロイト全集第17巻」岩波書店, pp. 405-429, 2006/11

### 1-4. 口頭発表

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・編集委員

2005年7月～現在に至る

## 2. 望月 太郎 教授

1962年生。1985年、国際基督教大学教養学部人文科学科卒業(教養学士)。1988年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(修士課程)哲学哲学史専攻修了(文学修士)。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。文学博士(大阪大学、1997年)。1991年4月、徳島大学教養部講師。1993年4月、徳島大学総合科学部講師。1994年4月、東海大学文明研究所講師。1997年4月、東海大学文明研究所助教授。1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。2006年11月、大阪大学大学実践センター教授。専攻:現代思想。

### 2-1. 論文

荻原哲, 望月太郎(共著)「アジア型クリティカル・シンキングの教育モデルを求めて:東南アジアの諸大学における教育実践」『大阪大学大学教育実践センター紀要』4, 大阪大学大学教育実践センター, pp. 43-52, 2008/3

Mochizuki, Taro, Denis Berthiaume(共著), “The 4th International Seminar for Higher Education Study. International Perspective on Course Evaluation by Students, Comparative Study of the University of Lausanne and Osaka University” *Bulletin of Institute for Higher Education Research and Practice, Osaka University*, 5, 大阪大学大学教育実践センター, pp. 67-97, 2008/3

Mochizuki, Taro, “Rencontres avec la philosophie française. Les cas de Kuki Shūzō et d’Omodaka Hisayuki” *Actes du 3e colloque d’étude japonaise de l’Université Marc Bloch, ‘La Rencontre du Japon et de l’Europe: Images d’une découverte’*, POF-CEEJA-Département d’Études Japonaises de l’Université Marc Bloch, Strasbourg, France, pp. 197-205, 2007/4

Mochizuki, Taro, “Challenges to University Autonomy and Evaluation” *Bulletin of Institute for Higher Education Research and Practice*, 3, IHERP, Osaka University, pp. 59-63, 2007/3

望月太郎 「グローバリゼーションのなかのボローニャプロセス:ヨーロッパ高等教育の地域統合と知の世界市場化」『大学と教育』45, 東海高等教育研究所, pp. 20-33, 2007/3

望月太郎 「スピリチュアリズムと二元論:獣の魂をめぐる論争にみる精神性の歴史」『アルケー』(関西哲学会), 14, pp. 185-201, 2006/6

## 2-2. 著書

木戸衛一, 長野八久, 望月太郎他(共著)『平和の探求』解放出版社, pp. 188-198, 2008/3

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 2-4. 口頭発表

Mochizuki, Taro “Pratique de l'évaluation des cours par les étudiants à l'université japonaise”24e congrès de l'AIPU, AIPU (Association internationale de pédagogie universitaire), Université de Montréal, Québec, 2007/5(24e Congrès de l'Association internationale de pédagogie universitaire: Vers un changement de culture en enseignement supérieur. Regards sur l'innovation, la collaboration et la valorisation, p. 42, 2007/5)

Mochizuki, Taro “L'enseignement de la pensée critique à l'université japonaise”Colloque international sur les «Nouvelles Pratiques Philosophiques» à l'UNESCO, La philosophie comme pratique éducative et culturelle : une nouvelle citoyenneté, UNESCO, Maison de l'UNESCO, Paris, 2006/11

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:望月太郎

課題番号:18520012

研究題目:クリティカル・シンキングの教育:方法と実践

研究経費:2006年度 直接経費 1,700,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

クリティカル・シンキングの教育方法論を確立するとともに、その教育実践のための教材開発を試みる。本研究では、教育方法論に関して、1)批判的思考の基礎となる論理学の応用、2)日常言語の論理に沿った議論の分析・評価・構築の理論、3)とりわけ日本語でなされる議論に適応したクリティカル・シンキングのあり方についての研究を進める。教材開発に関しては、Web-CTシステムを活用した授業用教材の開発を行う。クリティカル・シンキングの実践において先駆している欧米とアジアの諸大学における調査も含める。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏哲学会・編集委員長

2004年9月～2007年8月

日仏哲学会・理事

2001年9月～現在に至る

## 3. 中村 征樹 准教授

1974年生。1997年、東京大学教養学部教養学科科学史・科学哲学分科卒業(学士(学術))。1999年、東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程修了(修士(学術))。2005年、東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻博士課程修了(博士(学術))。2002年4月、東京大学大学院工学系研究科助手。2006年3月、文部科学省科学技術政策研究所研究官を経て、2007年10月より大阪大学大学教育実践センター准教授。同年11月より同大学大学院文学研究科准教授(兼任)。専攻:科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術史、大学論。

### 3-1. 論文

中村征樹 「社会に関与する科学者コミュニティ : AAAS 年次大会参加報告」『科学技術コミュニケーション』2, 北海道大学科学技術コミュニケーション養成ユニット, pp. 70-76, 2007/9

### 3-2. 著書

中村征樹(共著)『共生のための技術哲学——「ユニバーサルデザイン」の思想』未来社, 216p., pp. 171-192, 2006/12

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村征樹 「科学技術社会論学会 2007 年初夏シンポジウム「科学研究における「不正」の構造」『生命倫理科学ニューズレター』3-1, 早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構生命倫理科学ドメイン, p. 3, 2007/9

中村征樹(書評)「堀田凱樹・酒井邦嘉著『遺伝子・脳・言語——サイエンス・カフェの愉しみ』(中央公論新社、2007 年)『蛋白質核酸 酵素』52-11, p. 1395, 2007/9

### 3-4. 口頭発表

Nakamura, Masaki, Taro MOCHIZUKI “Undergraduate Education for the 21st Century :What can we learn from the graduates?” GUNI-AP 2007 Conference:Excellence with or without a Soul: The Cultivating of Mindful University Graduates, GUNI-AP, 2007/12

Nakamura, Masaki “Responsible Science in the Making: Communication among/beyond Scientific Community” Applied Ethics: The Second International Conference in Sapporo, Hokkaido University, 2007/11

Nakamura, Masaki “The Challenges of Japanese Science Cafés” Cafés scientifiques 10th Anniversary Meeting, 2007/10

Nakamura, Masaki “Reports from World Family of Cafes : Japan” The 2nd Café Scientifique Organizers’ Conference, 2007/5

Nakamura, Masaki “Japanese Perspectives on Research Integrity” 2007 AAAS Annual Meeting, AAAS, 2007/2

Nakamura, Masaki, Tom HOPE “Science and the Public: The Challenges of Science Cafes” The 7th East Asian STS Conference, 2007/1

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2004 年度～2006 年度、若手研究(B)、代表者:中村征樹

課題番号:16700581

研究題目:産業科学の公開講義から見る 18・19 世紀の仏英における工業化過程の比較研究

研究経費:2006 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

19 世紀のフランスで、職人層を対象とした産業科学の公開講義が、フランス工芸院に設置され、さらに同種の公開講義がフランス全土に普及していった過程について、同時期にイギリスで展開しはじめたメカニクス・インスティテューション(MI)運動とのあいだの相互交流関係に重点をおきながら調査、研究を行い、その分析を通して、18・19世紀の仏英における工業化過程について明らかにする。とくに工芸院における公開講義の開設後わずか 2 年で 98 都市にまで拡大したフランス各地における公開講義の普及過程について、全般的な状況を明らかにするとともに、イギリスの MI 運動についても、フランスの公開講義との比較やそれとの交流関係に着目して、MI 運動について調査、再検討する。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大学評価学会・第5回全国大会実行委員	2007年10月～2008年3月
The Cafés Scientifiques 10th Anniversary Meeting・Driving Committee	2007年7月～2007年10月
科学技術社会論学会・第6回年次研究大会・総会実行委員	2007年5月～現在に至る
お茶の水女子大学・化学・生物総合管理の再教育講座推進委員	2007年4月～2008年3月
ESF-ORI First World Conference on Research Integrity・Planning Committee	2007年4月～2007年9月
化学史学会・評議員	2007年1月～現在に至る
科学技術社会論学会・編集委員	2006年5月～現在に至る
大学評価学会・理事	2006年4月～現在に至る
くらしとバイオプラザ21・バイオカフェ評価委員	2005年7月～2007年3月
科学技術社会論学会・理事	2005年4月～現在に至る
科学技術社会論学会・事務局幹事	2005年4月～現在に至る
日仏教育学会・編集委員	2003年9月～現在に至る
化学史学会・編集委員	2003年1月～2006年12月
化学史学会・理事	2002年9月～2006年12月



## 2-3 臨床哲学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

当分野は、現代社会において大小さまざまな問題(例えば、科学技術、医療／看護／介護、教育、環境、芸能、ジェンダー／セクシュアリティなど)について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論を探求する。それと同時に、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発を行っている。また、学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プラン作りと遂行に取り組むなど、共同研究プロジェクトを推進している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：中岡 成文、浜渦 辰二

准教授：本間 直樹

助教：家高 洋

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
30	10	7	0	0	0	3	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 3 名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	5	0	1	1	0
'07	7	1	0	0	0
小計	12	1	1	1	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	0	0	0
計	1	0	1

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

三浦隆宏「境界線上のハンナ——アレント政治理論の内／外をめぐって」2007/3

主査：中岡成文 副査：鷺田清一、本間直樹、舟場保之

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	1	1	1	0	1	4
'07	0	1	2	0	0	3
計	1	2	3	0	1	7

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	2	0	0	1	3
'07	0	1	0	0	0	1
計	0	3	0	0	1	4

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

【2006年度】

堀寛史「「統合と解釈」に対する哲学的考察——哲学的解釈学の視点から理学療法学への還元」『リハビリテーション教育研究』12, pp. 201-205, 2007/3

堀寛史「＜痛み＞を解釈する 時間的存在性からの考察」『藍野大学紀要』20, pp. 87-95, 2007/3

本間直樹, 高橋綾, 松川絵里, 櫻本直樹「哲学カフェ探求——活動とインタフェイス」大阪大学21世紀プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 第8巻『臨床と対話』pp. 127-166, 2007/3

樫本直樹「ミル『危害原理』の射程——個人の自律の可能性としての自発性」『メタフィシカ』37, pp.81-94, 2006/12  
【2007年度】

堀寛史「〈として〉の痛み——痛みの感覚・機能的側面の復権を目指して——」『メタフィシカ』38, pp.151-163, 2007/12

堀寛史「痛みと心理的ストレスの関係性——症状化するストレスの脅威——」『藍野大学紀要』21, 2008/3

堀寛史「アクチュアルな住宅をつくるために——ボクの家プロジェクト「施主編プロローグ/建築家編」」『臨床哲学』9, pp.137-167, 2008/3

## (2) 口頭発表

【2006年度】

堀寛史「統合と解釈」に対する哲学的考察——哲学的解釈学の視点から理学療法学への還元」, 全国私立リハビリテーション連絡協議会第12回教育研究大会, 盛岡市(ホテルメトロポリタン盛岡), 2006/8/25

樫本直樹「市民と陶冶——市民の社会参加とミル倫理学の接点」, 日本イギリス哲学会第31回大会, 於: 同志社大学, 2007/3/28

本間直樹/高橋綾/松川絵里/樫本直樹「哲学カフェは対話文化のなかでどのような役割を果たすのか」第5回対話シンポジウム 於: 大阪大学吹田キャンパス 2006/11/3,4, 主催: 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」

【2007年度】

堀寛史「国際疼痛学会の痛みの「定義」をどのように解釈すべきか」, 第26回日本医学哲学・倫理学会, 横浜市(鶴見大学), 2007/10/20

## (3) その他(書評・翻訳など)

【2007年度】

堀寛史「〈書評〉Success Stories: Narrative, Pain, and the Limits of Storylessness」『臨床哲学』8, pp.115-124, 2007/3

樫本直樹・小菅雅行「第2回応用倫理国際学会報告」『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』平成16年度~19年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(代表者・中岡成文), pp.129-151, 2008/3

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2007年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度~2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度~2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2006 年度：0 名 2007 年度：1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名  
その他 0 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2006 年度：0 名 2007 年度：0 名

## 9. 刊行物

2006 年度 『臨床哲学』、『臨床哲学のメチエ』

2007 年度 『臨床哲学』

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2007 年度 日本現象学会大会開催

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

引き続き臨床哲学という新しい理念を学生に理解させ、参与させるべく、種々の授業を開設しており、所定の成果をあげている。例えば「臨床哲学概論」という授業では、過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とともに明確にしようと努めている。またある授業では分科会形式をとり、学生に部分的にイニシアティブを任せると、学生の自主性を促進することに成功している。また外国語(主として英語)の発信能力を組織的に養成する授業の必要性が痛切に感じられる。これについては、英語のみで行う授業を開講し、他の教員も任意の参加者として効率的な学習をサポートしたり、授業外で希望の学生を募り英会話のトレーニングを行ったりして対応しているが、やはりネイティブスピーカーや外国の方とじかに討論する機会が定期的にあることが望ましいと思われる。この点が、今後の課題である。

### 12-2. 研究活動

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行っており、企業・自治体・NPO などからも注目を集めつつある。これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して経験を積んでいる。それに伴い、従来見られた学生の研究方向に関する迷いもかなり解消していると見られる。具体的には、研究室のメンバーが中心となり、学外に任意団体「café philo」を設立し、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用い、京都の洛星高校で 4 年間にわたり、学生の手を借りつつ哲学の授業を行っている。

また中岡が「公共的対話モデルの有効性の検討」で、本間は「「子どもの哲学」創成に向けた基礎的・実践的研究」で、紀平は「擬似法的倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み」という課題でそれぞれ科学研究費の交付を受けて、研究を遂行した。またそれらの成果や研究室発行の雑誌などは一部電子化し、インターネット上に公開している。

設備の面では、読書会・研究会の活発な開催を可能にするスペース(ゼミ室)が依然として不足しており、学生の研究遂行を圧迫している。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 中岡 成文 教授

1950年生。1973年、京都大学文学部哲学科卒。1978年、京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学修士(京都大学)。1980年、福岡女子大学専任講師。1987年、大阪大学助教授。1996年9月、大阪大学教授。専攻:倫理学/臨床哲学。

##### 1-1. 論文

中岡成文 「コミュニケーションと自己変容」中岡成文(編)『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』(科学研究費補助金(基盤研究(B))), pp. 11-42, 2008/3

中岡成文 「ヘーゲル承認論における「ひと」と「もの」の媒介関係——イェナ精神哲学を中心に」大阪大学大学院文学研究科哲学講座(共著)『メタフシカ』38, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 13-24, 2007/12

中岡成文 「「対話」は対立を乗り越えられるか(1)——ウィーンの異種移植SDに参加して」大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座(文化基礎学)(共著)『コミュニケーションと現代社会、平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書』大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座(文化基礎学), pp. 135-142, 2007/3

中岡成文 「「対話」は対立を乗り越えられるか(2)——公共的イシューへのSD適用」大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座(文化基礎学)(共著)『コミュニケーションと現代社会、平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書』大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座(文化基礎学), pp. 143-149, 2007/3

中岡成文 「倫理(学)的実践の新展開——「コミュニケーションデザイン」をめぐる」関西倫理学会『倫理学研究』(関西倫理学会), 36, 関西倫理学会, pp. 143-148, 2006/4

##### 1-2. 著書

中岡成文, 太寿堂真, 多賀健太郎(共訳)『機知——その無意識との関係』岩波書店, 329p., 2008/2

中岡成文 『パラドックスの扉』岩波書店, 148p., 2007/12

中岡成文, 池田光穂, 西村ユミ他(共編著)『臨床と対話(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006、第8巻)』246p., pp. 7-26, 2007/1

中岡成文, 田中朋弘, 直江清隆他(共編著)『岐路に立つ人文学(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006、第1巻)』235p., pp. 183-194, 2007/1

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中岡成文(訳)(翻訳エーリヒ・グリースラー/ベアータ・リティヒ)「異種移植の倫理的問題に向けたネオソクラティックダイアログ——参加型テクノロジーアセスメントにおける倫理的問題の取り扱いをめぐる」大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座(文化基礎学)『コミュニケーションと現代社会、平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書』大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座(文化基礎学), pp. 113-134, 2007/3

##### 1-4. 口頭発表

中岡成文 「倫理について」国立循環器病センター看護学会, 国立循環器病センター, 国立循環器病センター, 2008/2/2

中岡成文 「弱さの構築——死生の臨床哲学へ」東アジアの死生学」日中会議:東アジアの死生学, 東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」, 北京 起家楼飯店, 2008/2/18

中岡成文 「自己変容はいかに可能か——第5回対話シンポジウムの開催にあたって」第5回対話シンポジウム:地域からの対話促進の発信——対話の多様性と可能性, 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」, 大阪大学, 2006/11/3『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」臨床と対話』グループ2006年度報告書』pp. 12-18, 2007/3

中岡成文 「自己変容の意味と可能性——境界線はいかにして浸透可能か」MCM(医療コンフリクトマネジメント)研究会, 早稲田大学大学院法務研究科, 2006/7/2

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004年度～2007年度、基盤研究(B) 一般、代表者:中岡成文

課題番号:16320005

研究題目:新しい公共的対話モデルの有効性の検討

研究経費:2006年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

研究の目的:

本研究代表者等によりすでに開発されつつある「対話コンポーネンツ」という公共的対話のモデルを多数回実践し、遺伝カウンセリング、医療ADR、科学技術コミュニケーションなどいくつかの異なる社会的争点について当事者たちが一定の相互理解や合意を達成するうえでそれがどの程度有効であるのかを明らかにする。また、その知見のもとに、さらにこの公共的対話モデルを改善し、試行する。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西倫理学会・委員、編集委員

2002年4月～現在に至る

日本倫理学会・評議員

1998年4月～現在に至る

## 2. 浜渦 辰二 教授

1952年生。1984年、九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位取得退学。文学博士(九州大学)。1989年、九州大学文学部助手。1991年、静岡大学人文学部助教授。1996年、同教授。2008年4月より現職。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学。

### 2-1. 論文

浜渦辰二 「高齢者ケアの倫理と法をめぐって——北欧の高齢者ケア視察研修報告——」浜渦辰二『対人援助の倫理と法——「臨床と法」研究会活動報告——』3, 科学研究費報告書, pp. 97-106, 2008/3

Hamauzu, Shinji, "Caring from the Phenomenological Point of View——Decision-making in terminal care in Japan" 静岡大学人文学部『人文論集』58-2, 静岡大学人文学部, pp. 1-15, 2008/1

浜渦辰二 「死生観を育てよう——「ケアの人間学」合同研究会——」へるす出版『臨床看護』33-13, へるす出版, pp. 2011-2015, 2007/11

浜渦辰二 「緩和ケアと尊厳——ケアの現象学的人間学からのアプローチ——」青海社『緩和ケア』5-33, 青海社, pp. 395-398, 2007/9

Hamauzu, Shinji, "Fürsorge im Leben und Sterben——Aus phänomenologisch-anthropologischer Sicht——" 静岡大学人文学部『人文論集』58-1, 静岡大学人文学部, pp. 1-18, 2007/7

浜渦辰二 「生と死をケアすること——ケアの現象学的人間学から——」日本哲学会『哲學』(日本哲学会), 58, 日本哲学会, pp. 79-96, 2007/4

浜渦辰二 「脳科学と現象学」統合学術国際研究所(共著)『文明の未来、その扉を開く——近代文明を超える新しい思考の原型(モデル)を求めて』3, 統合学術国際研究所, pp. 348-367, 2007/1

浜渦辰二 「報告:看板を「哲学」から「人間学」に替えた一つの試み」中部哲学会『中部哲学会年報』(中部哲学会), 37, 中部哲学会, pp. 1-11, 2006/9

浜渦辰二 「高齢者ケアのために」静岡大学人文学部『人文論集』57-1, 静岡大学人文学部, pp. 1-14, 2006/7



## 2-2. 著書

浜渦辰二(編)『対人援助の倫理と法——「臨床と法」研究会活動報告』3, 科学研究費報告書, pp. 97-106, 2008/3

浜渦辰二(編)『ケアの人間学』5, 合同研究会要旨集, pp. 2-3, 2008/3

浜渦辰二(編)『ケアの人間学』4, 合同研究会要旨集, pp. 2-3, 2007/3

浜渦辰二(編)『対人援助の倫理と法——「臨床と法」研究会活動報告』2, 科学研究費報告書, pp. 50-58, 2007/2

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 2-4. 口頭発表

浜渦辰二 「緩和ケアと尊厳」第110回ホスピスケア研究会, ホスピスケア研究会, 東京ファッションビル, 2008/1

浜渦辰二 「医療従事者としての倫理」平成19年度日本看護協会研修, 日本看護協会, 日本看護協会神戸研修センター, 2007/12

浜渦辰二 「フッサール現象学から見た「人間と環境」」第2回学際現象学研究会, 学際現象学研究会, 京都大学大学院人間・環境学研究科, 2007/12

浜渦辰二 「北欧の高齢者ケア視察研修報告」第6回「臨床と法」研究会, 科学研究費共同研究プロジェクト, 静岡大学法科大学院, 2007/11

Hamauzu, Shinji “To the phenomenological anthropology of caring——On decision at the terminal care in Japan——”第2回応用現象学会議, 科学研究費共同研究プロジェクト, 立命館大学文学部, 2007/9

浜渦辰二 「緩和ケアと尊厳——ケアの現象学的人間学からのアプローチ——」第2回中部生命倫理研究会, 中部生命倫理研究会, 名古屋大学文学部, 2007/7

浜渦辰二 「生と死をケアすること——ケアの現象学的人間学から——」日本哲学会:共同討議Ⅱ:生・死とケアの哲学, 日本哲学会, 千葉大学, 2007/5

Hamauzu, Shinji “Caring for life and death——From a phenomenological anthropology of caring——”韓国現象学会, 韓国現象学会, ソウル・Sungkyunkwan University, 2007/3

Hamauzu, Shinji “Phenomenology and analytical philosophy in Japan——A historical study——”ソウル大学文学部「現代哲学講義」, ソウル大学文学部「現代哲学講義」, ソウル大学, 2007/3

浜渦辰二 「(かたりの)虚と実」第6回河合臨床哲学シンポジウム, 河合文化教育研究所, 東京国立博物館・平成館大講堂, 2006/12

浜渦辰二 「ケアのゆくえ:倫理と法を越えて」富士宮市社会福祉協議会職員研修会, 富士宮市社会福祉協議会, 富士宮市役所, 2006/12

浜渦辰二 「ケアのゆくえ:倫理と法を越えて」静岡大学公開講座「対人援助の倫理と法」, 静岡大学, 静岡市産学交流センター, 2006/11

浜渦辰二 「終末期医療と安楽死——ケアの人間学からのアプローチ——」唯物論研究協会第29回研究大会, 唯物論研究協会, 静岡大学教育学部, 2006/10

浜渦辰二 「「いのちのケア」をするあなたへ……」静岡県立こども病院講演会, 静岡県立こども病院, 静岡県立こども病院, 2006/9

浜渦辰二 「高齢者の看取りケア——ケアの人間学より——」静岡県老人福祉施設協議会特養部会職員研修会, 静岡県老人福祉施設協議会, 静岡商工会議所会館, 2006/8

浜渦辰二 「人間にとってのケアとは——看護の専門職業人にむけて——」看護の日・特別講演, 富士市立看護専門学校, 富士市立看護専門学校, 2006/5

浜渦辰二 「地域で育てる対人援助(心理臨床・ヒューマンケア)」静岡大学人文学部は、地域と連携します, 静岡大学人文学部, 静岡市産学交流センター, 2006/4(『静岡大学共同シーズ集 2007』pp. 275-276, 2007/3)

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2007年度、基盤研究(B) 一般、代表者:浜渦辰二

課題番号:17320005

研究題目:対人援助(心理臨床・ヒューマンケア)の倫理と法、その理論と教育プログラム開発

研究経費:2006年度 直接経費 6,200,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 4,400,000円 間接経費 1,320,000円

研究の目的:

本研究は、臨床人間学や生命倫理学、応用倫理学での研究実績をふまえ、心理臨床家の教育にたずさわるスタッフと社会福祉、少年法、刑事法等の専門家とが共同して、「援助・支援の倫理学」を構築し、「援助専門職のための倫理と法」教育の充実にむけた実践的な教育プログラムの開発をめざすものである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・編集委員	2005年4月～2008年3月
日本現象学会・委員・国際交流委員	2005年4月～現在に至る
中部哲学会・静岡県委員	2000年4月～2008年3月
西日本哲学会・中部・関東・東北・北海道地区委員	2000年4月～現在に至る
静岡大学哲学会・理事・編集委員	2000年4月～2008年3月
九州大学哲学会・委員	2000年4月～現在に至る

## 3. 本間 直樹 准教授

1970年生。1998年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1998年、大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手。2000年同研究科講師、2005年学内派遣教員として新設コミュニケーションデザイン・センター講師として文学研究科兼任、2006年4月大阪大学コミュニケーションデザインセンター准教授。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学。

### 3-1. 論文

花村周寛, 本間直樹, 清水良介他(共著)「風景を实践する:データハンダイと媒介のデザイン」コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』1, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 60-81, 2008/3

本間直樹「哲学対話の諸相と「対話進行役養成プログラム」開発」中岡成文(編)『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』(平成19年度科学研究費補助金・基盤研究B・研究成果報告書), pp. 75-87, 2008/3

本間直樹, 森淳秀(共著)「シーニュとインタフェイス」小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉(共編著)『ドゥルーズ/ガタリの現在』pp. 586-609, 2008/1

本間直樹, 玉地雅浩(共著)「実存のリズムについて——メルロ=ポンティと理学療法の現場から」『臨床哲学』8, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 2-15, 2007/3

久保田テツ, 本間直樹(共著)「顔と声の風景——映像作品「こうたにまさあき」制作に関する考察」紀平知樹(編)『擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ:「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み』(平成18年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書), pp. 135-164, 2007/3

高橋綾, 本間直樹, 榎本直樹他(共著)「哲学カフェ探究——活動とインタフェイス」中岡成文(編)『臨床と対話』(大阪大学21世紀COEプログラム「インタフェイスの人文科学」研究報告書2004-2006), 8, 大阪大学21世紀COEプログラム「インタフェイスの人文科学」, pp. 127-166, 2007/1

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

本間直樹(編訳)「フロイト全集第18巻」岩波書店, 2007/8

### 3-4. 口頭発表

---

玉地雅浩, 本間直樹 「「実存のリズム」と「人間の実存」——理学療法の現場から考える」第26回研究会, 日本現象学会, 慶応大学, 2006/11

高橋綾, 榎本直樹, 本間直樹他 「哲学カフェは対話文化のなかでどのような役割を果たすのか?」第5回対話シンポジウム, 大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, 大阪大学, 2006/11

本間直樹, 高橋綾 「「哲学カフェ」——社会のなかの議論空間のデザイン」ヒューマンコミュニケーション基礎研究会:コミュニケーションデザイン, 電子情報通信学会, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, 2006/7

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2005年度～2007年度、若手研究(A)、代表者:本間直樹

課題番号:17682001

研究題目:「子どもの哲学」創成にむけた基礎的・実践的研究

研究経費:2006年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

2007年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

研究の目的:

本研究の目的は教育学および教育技術論としての哲学の「応用」ではなく、哲学および哲学教育を一つの柱として「子どもの哲学」創成を目指すことにある。「子ども」を「大人」を完成形とした未熟な存在として捉えるのではなく、「文化の生い立ち」として「子ども⇄大人」の相互移行関係を研究の中心に据え、それについての心理学・社会学・人類学を含めた総合的研究を行う。その際、子ども自身が単に研究の対象となるのではなく、哲学的思考の主体として研究に関わることが必須である。そのために「遊び」と「対話」を重視した子どもたちとのさまざまな活動を実際に試み、そのなかで子どもたちが考えることをさまざまな表現媒体へと定着させ、そこからさらに申請者が取り組んできた哲学的対話法(ネオソクラティック・ダイアログなど)の研究と実践を活かすことによって、子どもたち自身が彼ら彼女らの具体的経験や想像力から出発して、抽象的、知的概念操作にまで至ることのできるよう、一連の方法論を確立する。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

アートミーツケア学会・理事

2006年3月～現在に至る

## 4. 家高 洋 助教

1966年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学大学院文学研究科 科学技術振興特任教員、大阪大学大学院文学研究科 21世紀 COE「インターフェイスの人文学」特任研究員などを経て現職。専攻:臨床哲学/学問論/現象学。

#### 4-1. 論文

---

家高洋 「メディアーション(自主交渉援助型調停)」中岡成文『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』科学研究費補助金 基盤研究(B), pp. 89-110, 2008/3

家高洋 「活動中の人文学」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」若手研究集合(編)『人文学討議空間のデザインと創出』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006), 2, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, pp. 15-33, 2007/3

家高洋 「異質なものの関係を考える」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」若手研究集合(編)『人文学討議空間のデザインと創出』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006), 2, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, pp. 65-84, 2007/3

家高洋 「サイエンス・ショップ」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」〈臨床と対話〉研究グループ(編)『臨床と対話』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006), 8, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, pp. 191-212, 2007/3

家高洋 「マーケティング理論におけるロボット社会実証実験」伊藤京子(共編)『ロボット社会実証実験のための外部評価の方法の確立及びガイドラインの作成 平成 18 年度受託研究報告書』pp. 59-97, 2007/3

家高洋 「哲学における(接続詞)」三谷研爾『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」ニューズレター』7, 「インターフェイスの人文学」研究開発委員会, pp. 5-5, 2006/11

#### 4-2. 著書

---

なし

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

家高洋(共訳)(翻訳、フロイト全集第18巻)「『みずからを語る』」岩波書店, pp. 61-133, 2007/8

家高洋(訳)(翻訳、フロイト全集第18巻)『『みずからを語る』補筆・その後』岩波書店, pp. 135-140, 2007/8

家高洋(訳)(翻訳、フロイト全集第18巻)「フェレンツィ・シャーンデル博士(五十歳の誕生日に)」岩波書店, pp. 281-284, 2007/8

家高洋(訳)(翻訳、フロイト全集第18巻)「雑誌『ル・ディスク・ヴェール』への寄稿」岩波書店, p. 285, 2007/8

#### 4-4. 口頭発表

---

家高洋 「科学技術論の展開」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」公開講座「科学技術と倫理」, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, 大阪大学中之島センター, 2006/12

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-4 中国哲学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

中国哲学は、中国古典の精読を通じて、広く東アジア世界の文化的特質を解明しようとする実証的学問である。本研究室は、全国の主要大学の中でも、この学問を主対象として、体系的・組織的・継続的に教育・研究を行っている数少ない拠点の一つである。

その中でも突出した特色としては、①既存の伝世文献に加え、新たに発見された竹簡・帛書などの出土資料を積極的に取り上げて考究する点、②担当教員数は少ないながらも、中国古代から近世、さらには日本漢文に至る幅広い時代・思想を対象とする点、③大阪大学が誇る漢籍コレクション「懐徳堂文庫」の整理・調査、およびその電子情報化を推進する点、などが挙げられる。具体的な成果物としては、学術誌『中国研究集刊』の編集・刊行(年2~3回)、『懐徳堂文庫図書目録』電子版の作成・公開、研究室HPを通じた研究情報の公開などがある。

また本研究室は、旧来の小講座制の良き伝統を継承しながらも、とかく閉鎖的になりがちな小講座の体質を脱却し、学内外の組織と密接な協力関係を築いている。具体的には、『中国研究集刊』の刊行母体である「大阪大学中国学会」の事務局、新出土資料を研究する「戦国楚簡研究会」の事務局、懐徳堂文庫の調査・研究に当たる「懐徳堂研究会」の事務局を兼ね、学外研究者と協力しながら斯学の発展に努めている。また、名古屋大学の中国哲学・中国文学研究室と定期的な研究交流を行い、出土資料の国際シンポジウムを開催するなど、開かれた教育・研究組織として積極的な活動を展開している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

助教：池田 光子

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	1	1	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	0	2	1	1	0
'07	1	2	0	0	0
小計	1	4	1	1	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	0	0	0
計	1	0	1

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

上野洋子「中国における夢観の展開」2007/3

主査：湯浅邦弘 副査：辛賢、高橋文治

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	1	0	0	0	0	1
'07	3	1	0	0	0	4
計	4	1	0	0	0	5

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	0	2	0	0	2
'07	0	0	2	0	0	2
計	0	0	4	0	0	4



## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

草野友子『上海博物館蔵戦国楚竹書(五)』について——形制一覧と所収文献概要——『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 40, pp. 50-66, 2006/6

#### 【2007年度】

草野友子「上博楚簡『姑成家父』訳注」『戦国楚簡研究 2007』(大阪大学中国学会), 『中国研究集刊』別冊, 45, pp. 121-143, 2007/12

草野友子「懷徳堂印存の成立」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 41, pp. 17-31, 2007/12

草野友子『上海博物館蔵戦国楚竹書(六)』について——形制一覧と所収文献概要——『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 44, pp. 32-45, 2007/12

草野友子「上博楚簡『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』の関係とその思想」『日本中国学会報』(日本中国学会), 59, pp. 3-17, 2007/10

### (2)口頭発表

#### 【2006年度】

草野友子「上博楚簡『鮑叔牙与隰朋之諫』の思想と著作意図」, 戦国楚簡研究会 第31回研究会, 於松江・レインボープラザ小会議室, 2006/12

草野友子「上博楚簡『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』訳注」・「『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』の思想構造」, 戦国楚簡研究会 第30回研究会, 於東京グリーンホテルお茶の水 会議室, 2006/10

#### 【2007年度】

草野友子「上博楚簡『姑成家父』の文献的性格」, 戦国楚簡研究会 第34回研究会, 於名古屋会議室, 2007/10

草野友子「『懷徳堂印存』について」, 第10回懷徳堂研究会, 於大阪大学文学部中庭会議室, 2007/8

### (3)その他(書評・翻訳など)

#### 【2006年度】

狩野樹理「懷徳堂関係研究文献提要(24), 『懷徳』(懷徳堂記念会), 75, pp.44-48, 懷徳堂記念会, 2007/1

西田雄生「懷徳堂関係研究文献提要(24), 『懷徳』(懷徳堂記念会), 75, pp.48-52, 懷徳堂記念会, 2007/1

草野友子「新出土資料関係文献提要(八)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 42, pp.47-58, 2006/12

草野友子「上博楚簡『競建内之』・『鮑叔牙与隰朋之諫』訳注」『戦国楚簡研究 2006』(大阪大学中国学会), 『中国研究集刊』別冊, 41, pp.161-199, 2006/12

#### 【2007年度】

狩野樹理「懷徳堂関係研究文献提要(25), 『懷徳』(懷徳堂記念会), 76, pp.39-43, 懷徳堂記念会, 2008/1

草野友子「懷徳堂関係研究文献提要(25), 『懷徳』(懷徳堂記念会), 76, pp.35-39, 懷徳堂記念会, 2008/1

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD : 1名 DC2 : 1名 DC1 : 0名 (計2名)

2007年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006 年度～2007 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006 年度～2007 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2006 年度：2 名 2007 年度：2 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名  
その他 3 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

## 9. 刊行物

2006 年度 『中国研究集刊』・半年刊(年 2 回) および別冊特集号『戦国楚簡研究 2006』1 冊

2007 年度 『中国研究集刊』・半年刊(年 2 回) および別冊特集号『戦国楚簡研究 2007』1 冊

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受)	2000 年～現在
戦国楚簡研究会(研究会、研究会開催・事務局引受)	1998 年～現在
大阪大学中国学会(学会、事務局引受)	1984 年～現在
日本道教学会第五十七回大会(学会、大会開催)	2006 年 10 月 27-28 日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 34 回戦国楚簡研究会(於名古屋会議室)	2007 年 10 月 6-8 日
第 33 回戦国楚簡研究会(於西安・長安城堡大酒店〈中国〉)	2007 年 8 月 28-30 日
第 10 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)	2007 年 8 月 6 日
第 32 回戦国楚簡研究会(於大阪大学中国哲学資料室)	2007 年 3 月 23-25 日
第 31 回戦国楚簡研究会(於松江・レインボープラザ小会議室)	2006 年 12 月 26-28 日
第 9 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部 A41 講義室)	2006 年 12 月 16 日
第 30 回戦国楚簡研究会(於東京グリーンホテルお茶の水会議室)	2006 年 10 月 8-10 日

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

①博士学位(課程博士)の取得.....研究室は、教員数・学生数も少ないながら、教育・研究の両面にわたって豊富な活動を展開している。その教育面における表れの一つが、学位の取得であろう。2006 年度は、上野洋子「中国における夢観の展開」が博士(文学)の学位を取得し、博士後期課程を修了した。研究室の教育成果、特に学位取得の態勢が整ってきたことを実証するものである。

②研究室 HP の拡充と研究室端末の整備.....全国の中国哲学研究室の中で、我が研究室は、最も早く研究室 HP を開設し、また現在も、充実したコンテンツを提供している。その後、九州大学や名古屋大学の中国哲学研究室からは、阪大中哲 HP をモデルとして研究室 HP を開設したとの連絡が入っており、人文学における電子情報化推進の先端的事例として

注目を集めている。平素、研究室の学生諸君によって研究室 HP が逐次更新され、教育活動の一環として研究室の求心力となっていることが最大の要因であろう。特に、中国古典の電子テキストや関係目録の作成・公開は、単に教育面での成果と言うにとどまらず、学界全体の研究活動に資するところが極めて大きい。また、これを支えるためのハード面も徐々に整備され、2007 年度末現在で、研究室のパソコン端末は、学生の教育活動にほぼ支障のないような数量となってきた。

③教員や大学院生の社会教育活動.....湯浅教授、辛賢講師は、近年、学内外において数多くの講演・研究発表を行っている。特に、湯浅教授は、2006 年度・2007 年度と続けて中国・台湾の国際学会で研究発表を行った。また、研究室の大学院生も、懐徳堂文庫の調査・公開など、積極的な社会教育活動を展開している。

④他大学との学術交流.....開かれた研究室を目指し、本研究室では、2000 年から名古屋大学大学院文学研究科中国哲学研究室と学術交流会を行っている。毎年秋、両研究室の全教員・院生が一堂に会して研究発表会を行うもので、研究室の学生がお互いの教育面での情報交換を行う良い機会ともなっている。2006 年 11 月には第 7 回研究会を大阪大学で開催した。

## 12-2. 研究活動

①中国思想史研究を中心とする着実な教育・研究.....本研究室は、初代教授木村英一の学風に見られる通り、実証的な経学(中国儒教経典に対する注釈学)を中心としながらも、古代から近世に至る諸思想(法家、老荘、仏教など)についても、重厚な教育・研究を展開する点に特色を有する。現在の教授である湯浅邦弘も、既存の枠に囚われることなく、思想的には、儒家に加えて、法家・兵家・道家にも充分な目配りを行い、また資料的にも、伝世文献のみならず、1970 年代以降に発見された新出土資料を積極的に取り上げ、多くの研究業績を積み上げている。こうした学風の中で薫陶を受けた大学院生も、様々な時代・思想を対象として研究を進めている。

②『中国研究集刊』の刊行.....本研究室は、1984 年(昭和 59 年)に組織された大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を年 2 回編集・刊行している。中国学に関する学術誌として国外からも高い評価を得ている。2006 年度は、通常号 2 冊に加えて別冊特集号『戦国楚簡研究 2006』を刊行し、2007 年度も、通常号 2 冊に加えて、別冊特集号『戦国楚簡研究 2007』を刊行した。

③人文学における電子情報化の開拓と推進.....本研究室の近年の最大の成果は、懐徳堂文庫資料を中心とする電子情報化の推進である。大阪大学が誇る漢籍コレクション「懐徳堂文庫」については、これまで、『懐徳堂文庫図書目録』(1976 年)があるのみであったが、湯浅教授を中心として組織された懐徳堂研究会により、貴重資料の総合調査が行われ、それらは精細な画像と解題をともなったデータベースとして結実した。その成果の集大成として、総合研究サイト「WEB 懐徳堂 <http://kaitokudo.jp/>」を公開し、人文学における電子情報化の先端的業績をあげている。

④(財)懐徳堂記念会事業への支援.....大阪大学文学部と密接な協力関係にある懐徳堂記念会については、本研究室の歴代教授がその運営幹事を務めるなど、特に積極的な支援を行っている。大学院生も、懐徳堂記念会機関誌『懐徳』に毎号、関係文献提要や関係論考・目録などを提供している。また、上記の懐徳堂電子情報化事業とも相俟って、懐徳堂記念会の諸事業に研究室を挙げて取り組んでいる。社会貢献の顕著な成果であろう。

⑤出土資料の研究.....中国哲学研究室を事務局とする「戦国楚簡研究会」が定期的に研究会合を行っている。これは、近年新たに発見され、次々と公開が進められている戦国時代の竹簡資料について、その読解と研究を進めるもので、2006 年度は国内での研究会合を 5 回、2007 年度は 4 回開催したほか、2006 年度には、資料の出土地である中国湖南省長沙の学術調査を行い、その成果を『戦国楚簡研究 2006』として発表した。また、2007 年度は、陝西省西安および上海博物館において資料調査を行い、その成果を『戦国楚簡研究 2007』として発表した。

⑥課題と要望.....本研究室は、本業の中国哲学の教育・研究に加えて、上記のような懐徳堂関係事業を長年担ってきている。それは、懐徳堂文庫の主要部分が漢籍資料(中国の儒教関係を初めとする古典)であったことによるもので、このことは、教育・研究の大きな推進力になっているとも言える。しかし一方では、わずかな人員で構成されている中国哲学研究室の大きな負担になっているのも事実である。中国哲学研究室は、長年、優に二つの研究室分の活動を推進してきた。大阪大学が、懐徳堂を大学の源流の一つとして標榜し、社会貢献の窓口として重視するのであれば、懐徳堂関係事業については、恒常的な全学的支援体制(人員と予算)を確立すべきであろう。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。専攻:中国哲学／中国古代思想史／新出土文献研究／懐徳堂研究。

##### 1-1. 論文

- 湯浅邦弘 「中井履軒の印章」『懐徳堂センター報 2008』(大阪大学懐徳堂センター), 2008, 大阪大学懐徳堂センター, pp. 1-15, 2008/2
- 湯浅邦弘 「上博楚簡『莊王既成』の「予言」」『戦国楚簡研究 2007』(大阪大学中国学会), 45, 大阪大学中国学会, pp. 44-56, 2007/12
- 湯浅邦弘 「太子の「知」——上博楚簡『平王與王子木』——」『戦国楚簡研究 2007』(大阪大学中国学会), 45, 大阪大学中国学会, pp. 57-65, 2007/12
- 湯浅邦弘 「戦国楚簡と儒家思想——「君子」の意味——」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 43, 大阪大学中国学会, pp. 1-17, 2007/6
- 湯浅邦弘 「中国新出土文献における「死」の思想」江川温『死者の葬送と記念に関する比較文明史』大阪大学大学院文学研究科, pp. 145-159, 2007/6
- 湯浅邦弘 「中井竹山の印章」『懐徳堂センター報』(大阪大学懐徳堂センター), 2007, 大阪大学懐徳堂センター, pp. 1-15, 2007/2
- 湯浅邦弘 「上博楚簡『三徳』の全体構造と文献的性格」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 41, 大阪大学中国学会, pp. 76-99, 2006/12
- 湯浅邦弘 「上博楚簡『三徳』の天人相関思想」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 41, 大阪大学中国学会, pp. 100-117, 2006/12
- 湯浅邦弘 「語り継がれる先王の故事——上博楚簡『昭王與龔之宣』の文献的性格——」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 40, 大阪大学中国学会, pp. 35-49, 2006/6
- 湯浅邦弘 「父母の合葬——上博楚簡『昭王毀室』について——」『東方宗教』(日本道教学会), 107, 日本道教学会, pp. 1-18, 2006/5
- 湯浅邦弘 「懐徳堂の小宇宙——懐徳堂印の研究——」『中国学の十字路——加地伸行博士古稀記念論集』研文出版, pp. 688-701, 2006/4

##### 1-2. 著書

- 湯浅邦弘(編)『懐徳堂研究』汲古書院, 448p., 2007/11
- 湯浅邦弘『戦いの神——中国古代兵学の展開——』研文出版, 336p., 2007/10
- 湯浅邦弘(編)『上博楚簡研究』汲古書院, 488p., 2007/5
- 湯浅邦弘(編)『懐徳堂の印章』大阪大学文学研究科, 64p., 2007/3
- 湯浅邦弘『戦国楚簡與秦簡之思想史研究』台湾・万卷楼, 276p., 2006/6

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 湯浅邦弘 「テキストの変容と故事成語の誕生」『テキストの生成と変容』大阪大学大学院文学研究科, pp. 55-59, 2008/3
- 湯浅邦弘 「漢籍善本紹介——大阪大学懐徳堂文庫(4)——」『新しい漢字漢文教育』45, 全国漢文教育学会, pp. 102-103, 2007/12
- 湯浅邦弘 「読み直す中国古代思想」『諸子百家争鳴』中央公論新社, pp. 283-295, 2007/12
- 湯浅邦弘 「近世阿波漢学史の研究 古学者高橋赤水」『徳島新聞』2007年6月19日文化欄, 徳島新聞社, 2007/6
- 湯浅邦弘 「漢籍善本紹介——大阪大学懐徳堂文庫(3)——」『新しい漢字漢文教育』44, 全国漢文教育学会, pp. 86-87,

2007/6

湯浅邦弘 「懷徳堂文庫貴重資料の修復について」『懷徳堂センター報』2007, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 119-127, 2007/2

湯浅邦弘 「新出楚簡国際学術研討会」参加記『中国研究集刊』41, 大阪大学中国学会, pp. 200-238, 2006/12

湯浅邦弘 「湖南省長沙学術調査報告」『中国研究集刊』41, 大阪大学中国学会, pp. 239-268, 2006/12

湯浅邦弘 「漢籍善本紹介——大阪大学懷徳堂文庫(2)——」『新しい漢字漢文教育』43, 全国漢文教育学会, pp. 86-87, 2006/11

湯浅邦弘 「戦国楚簡と中国古代思想史研究」『中国史学』16, 中国史学会, pp. 123-141, 2006/10

湯浅邦弘 「漢籍善本紹介——大阪大学懷徳堂文庫(1)——」『新しい漢字漢文教育』42, 全国漢文教育学会, pp. 105-107, 2006/5

湯浅邦弘 「新出土文献と孟子の思想」『孟子』中央公論新社, pp. 1-25, 2006/4

#### 1-4. 口頭発表

湯浅邦弘 「書院としての懷徳堂」関西大学 ICIS 第 1 回研究集会「東アジアにおける書院研究」, 関西大学, 関西大学, 2008/1

湯浅邦弘 「懷徳堂の電子情報化」文部科学省グローバル COE プログラム関西大学文化交渉学教育研究拠点国際シンポジウム, 関西大学, 関西大学, 2007/10

湯浅邦弘 「『儒蔵』編纂事業と中井履軒『大学雑議』について」第 10 回懷徳堂研究会, 懷徳堂研究会, 大阪大学, 2007/8

湯浅邦弘 「中国人の戦略思考の源流——孫子兵法と兵法三十六計——」ジェトロ大阪本部主催中国現地法人経営研究会, ジェトロ大阪本部, ジェトロ大阪本部, 2007/7

湯浅邦弘 「戦国楚簡と儒家思想——「君子」的意思——」『儒家哲學的典範重構與經典詮釋』國際學術研討會: 儒家哲學的典範重構與經典詮釋, 台湾・東呉大学, 台湾・東呉大学, 2007/5(『儒家哲學的典範重構與經典詮釋』國際學術研討會』pp. 1-15, 2007/5)

湯浅邦弘 「上博楚簡『三徳』的天人相關思想」道家簡帛資料暨上博新出簡研讀會, 道家簡帛資料暨上博新出簡研讀會, 台湾・政治大学, 2007/5

湯浅邦弘 「上博楚簡『三徳』的天人相關思想」新出楚簡国際学術研討会, 武漢大学ほか, 武漢大学, 2006/6(『新出楚簡国際学術研討会會議論文集』pp. 111-117, 2006/6)

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 湯浅邦弘

課題番号: 17320012

研究題目: 戦国楚簡の総合的研究

研究経費: 2006 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 2,800,000 円 間接経費 840,000 円

研究の目的:

本研究は、平成 12～15 年度の科学研究費補助金・基盤研究Bの交付を受けて推進した「戦国楚系文字資料の研究」(研究代表者: 竹田健二)の成果を踏まえ、更にそれを格段に発展させることを目的とした共同研究である。前研究では、1998 年に公開された郭店一号楚墓出土竹簡を対象とし、その全容をほぼ解明することに成功したが、本研究では更に 2001 年から公開が始まっている上海博物館蔵戦国楚竹書をも対象に加え、その全容の解明と中国古代思想史の再構築を図りたい。

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし



## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

財団法人東方学会・評議員	2008年2月～現在に至る
全国漢文教育学会・評議員	2005年4月～現在に至る
日本道教学会・理事	2004年4月～現在に至る
懐徳堂研究会・代表	2000年4月～現在に至る
中国出土資料学会・理事	1999年4月～現在に至る

## 2. 辛賢 講師

1967年、ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻:中国哲学、漢代易学。

### 2-1. 論文

---

辛賢 「「象」の淵源——「言」と「意」の狭間——」大阪大学文学研究科『大阪大学文学研究科紀要』第48巻, 大阪大学文学研究科, pp. 1-31, 2008/3

辛賢 「易緯における世軌と『京氏易伝』」『兩漢における易と三礼』汲古書院, pp.83-118, 2006/9

### 2-2. 著書

---

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

辛賢 「三国時代の思想——言語観の射程——」久保井浩俊『創文』NO.496, 創文社, pp. 19-22, 2007/4

辛賢, 渡邊義浩, 蜂屋邦夫他(編)「(コメント)蜂屋邦夫報告『儀礼』鄭玄注と服部宇之吉の『儀礼鄭注補注』」渡邊義浩(共著)『兩漢における易と三礼』汲古書院, pp. 281-286, 2006/9

辛賢, 青木吾郎, 渡辺雅之(編)「<シンポジウム要旨>中国文化学会平成17年度シンポジウム東アジア(日本・中国・台湾・韓国)の漢文(古典)教材の比較」中国語学会(共著)『中国文化』(中国語学会), 64, 中国語学会, pp. 79-83, 2006/6

### 2-4. 口頭発表

---

辛賢, 渡邊義浩, 蜂屋邦夫他「コメント 蜂屋邦夫報告『儀礼』鄭玄注と服部宇之吉の『儀礼鄭注補注』」第51回国際東方学者会議(シンポジウム兩漢における三礼の展開), 東方学会, 日本学術会館, 2006/5

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

辛賢 日本中国学会賞(哲学・思想部門), 日本中国学会賞, 2001/10

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2005年度～2007年度、若手研究(B)、代表者:辛賢

課題番号:17720007

研究題目:易緯の新研究——漢代易学における緯書思想の展開と行方——

研究経費:2006年度 直接経費 700,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 700,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、易緯資料を全面的に取りあげ、その思想内容に関する総合的研究を目指す。とくに易緯が前漢末から宋代において成立している点から大きく次のような区分によって研究を進める。(1)前漢末～六朝間における易緯の思想史的展開を考察する。象数易学の盛行と衰退、王弼易の幕が開かれる思想史的背景のなかで、易の緯書に見られるさまざまな術数技法や易説はどのように展開したかを探る。(2)六朝～唐宋間における易緯の思想史的展開を考察する。易緯資料中、後代の成立と見られる資料を取



り上げ、その思想的変容と展開を探る。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本道教学会・評議員	2008年1月～現在に至る
日本中国学会・ホームページ委員会委員	2007年4月～現在に至る
三国志学会・評議員	2006年7月～現在に至る

## 3. 池田 光子 助教

1976年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。大阪大学総合学術博物館研究支援推進員を経て2007年4月現職。専攻:中国哲学/日本漢学/懷徳堂研究。

### 3-1. 論文

---

池田光子 「中井履軒の「徳」解釈の構造——「四徳」への解釈を中心として——」大阪大学大学院文学研究科(編)『待兼山論叢』40, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-31, 2006/12

池田光子 「中井履軒の「瘤」と「目」と」大阪大学総合学術博物館(編)『「見る科学」の歴史——懷徳堂・中井履軒の目——』大阪大学総合学術博物館, pp. 50-56, 2006/10

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

湯浅邦弘, 池田光子, 黒田秀教他(共著)(解説書)「複数」湯浅邦弘(編)『懷徳堂の印章』凸版印刷株式会社, 2007/3

泉万里, 池田光子, 井上他(共著)(解説書)「複数」大阪大学総合学術博物館(編)『「見る科学」の歴史——懷徳堂・中井履軒の目——』大阪大学出版会, 2006/10

### 3-4. 口頭発表

---

なし

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2007年度～2008年度、代表者:池田光子

課題番号:19820013

研究題目:懷徳堂の「知」の生産——儒学を中心とした知識人の繋がり

研究経費:2007年度 直接経費 1,210,000円 間接経費 0円

研究の目的:

江戸期大坂で隆盛を誇った懷徳堂は、当時の知識人達と広く交流を持っていた。「懷徳堂学派」と呼ばれる独特の思想について、《交流》という面からより具体的にその特徴を抽出すると共に、その形成過程についても検討する。併せて、当時の知識人達の間において、懷徳堂が果たした役割についても考察を加えていく。また、これらの結果を踏まえ、近世儒学史における、新たな懷徳堂の位置づけを試みる。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

3-7-1. 2007年度、研究助成、助成金獲得者：池田光子

助成金名：三菱財団人文科学研究助成

研究題目：江戸期文化人・知識人達の交流——大阪を中心とした「知」のネットワーク形成とその展開——

助成団体名：財団法人三菱財団

助成金額：2007年度 直接経費 800,000円

研究の目的：

江戸期に隆盛を誇った懐徳堂の関連資料は、大阪大学附属図書館に保存されている。資料が一定量蒐集されるまでには長い年月を要したこともあり、中にはその存在が未だに明らかとされていない資料もある。これらの未調査資料の中には、当時の著名な知識人達との交流を知る手掛かりとなり得る重要な資料が存在している。未調査資料の調査・報告を行うと共に、内容についても詳細な検討を加えることで、懐徳堂学問の思想的特徴をより明らかにする。

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪大学中国学会・事務員

2007年4月～現在に至る

## 2-5 インド学・仏教学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

教育活動としては、インド学仏教学研究の基礎となる原典を正しく理解する能力を養うために、サンスクリット語やパーリ語など古典インド諸語の文献を精密に読解する演習授業が中心となる。また、各学生が文献の言語と内容とを処理する能力を習得・応用する過程で、論理的思考力や批判的精神を養うことも目指している。

研究活動としては、インド学仏教学の文献学的研究に専心しており、中でもヴェーダ祭式文献や初期の仏教文献の研究が中心となっている。特色として、本専門分野では仏教学をインド学の一環として位置づけ、仏教研究を広く当時のインド思想全体の視点から研究する一方で、仏教以外のインド学諸分野を研究する者も仏教文献を積極的に活用していることが挙げられる。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：榎本 文雄

講師：堂山英次郎

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	4	2	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	2	1	1	1	0
'07	2	0	2	2	0
小計	4	1	3	3	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	2	0	2
計	3	0	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

畑 昌利 「六十二見を中心とする初期仏教における外道思想の研究」 2007/3

主査：榎本文雄 副査：湯浅邦弘、堂山英次郎

大島智靖 「ヴェーダ祭式におけるアグニシュトーマ祭の潔斎思想——ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナを中心に——」 2008/3

主査：堂山英次郎 副査：榎本文雄、内田次信、藤井正人(京都大学)

生野昌範 「仏教における雨季の逗留生活に関する基礎的研究——Varṣāvastuの再校訂、及び読解研究——」 2008/3

主査：榎本文雄 副査：荒木浩、堂山英次郎

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	0	0	0	0	0	0
'07	1	0	0	0	0	0
計	1	0	0	0	0	0

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	0	0	0	0	0
'07	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

##### 【2007年度】

池田宣幸 「Śatapatha-Brahmaṇa の Vājapeya に関する一考察——Mādhyandina 派と Kāṇva 派の比較研究——」 『待兼山』

論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 第41号, (pp.49-63), (2007/12)

## (2) 口頭発表

なし

## (3) その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2007年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 1名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2006年度: 1名 2007年度: 0名

## 9. 刊行物

なし

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998年度より4ヶ月に1回「中央アジア学フォーラム」(阪大東洋史講座と共同で主催)

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

＜概要＞ 本専門分野の教員は2006年度まで榎本教授、堂山講師と河崎助手の3人体制であったが、2007年3月に河崎助手が任期満了に伴い退任し、代わって本研究科出身の生野昌範氏が教室助手(非常勤職員)として、研究室の事務及び教育・研究の補助等に従事し、研究室全体の教育水準を維持するのに貢献している。同氏は留学経験を持ち、昨年度に博士号を取得した気鋭の仏教研究者であり、戒律を中心とする仏教僧団の成立史・思想史を専門とする。また河崎前助手も、2007年度から本専門分野の招へい研究員として初期ジャイナ教の研究を続けている。よって本専門分野では、ヴェーダ、初期仏教一部派仏教、そして初期ジャイナ教という紀元前～紀元後に至るインド思想の中核的領域について、授業あるいはその他の形でこれまで以上に多様な勉学の可能性を学生に提供出来る体制が整っていると言える。

＜教育と学生の状況＞ 学部生の一人一人に対していかに偏り無くきめ細やかな指導を維持・改善してゆくかは、これまでと同様、個々の教員及び専門分野全体の課題である。例えば、近年の学生の関心の多様性に応じて、二次文献をより多く使った広い視野からの研究指導にも取り組み始めている。2006年度、2007年度の学部卒業生がいずれも、ヴェーダ学、仏教学それぞれにおいて多様な問題意識のもと優れた卒業論文を書き博士前期課程に進んでいることは、こうした幅広い教育の成果と評価できる。その一方で、2007年度に学部の新入生が0人であったことは反省点である。文学部の学部生に、インド学・仏教学の内容とその魅力とを伝える更なる努力が必要であろう。研究者育成という点では、課程博士号取得者を2006年度に1人、2007年度に2人出したことは、当該分野としては異例の成果である。内訳は仏教学2人、ヴェーダ学1人であるが、いずれも高水準の文献読解を基礎とした文献校訂及び文化・思想研究であり、世界的に見てもそれぞれの分野で最先端の研究に数えられる。それだけに、今後これらの博士論文が英語やドイツ語で出版されれば、世界の学界に与える影響は少なくない。一刻も早い実現が期待される。博士号の相次ぐ取得は、2003年度に本専門分野初の課程博士を輩出して以来、博士論文執筆に対する意欲が研究室に確実に根付きつつあることを実感させる。一方で、大学院生の学会発表や論文が比較的少ないことに関しては、膨大で地道な解読作業を前提とする本専門分野の性質上やむを得ない所があるにしても、より積極的な研究活動は可能であり、そのためには教員の指導にも学生の研究計画にもまだ改善の余地があると言える。留学に関しては、2006—2007年度に外国の諸大学に長期留学した学生はいない。しかし2005年度には、当時の博士後期課程学生と科目等履修生の2名がゲッティンゲン大学(ドイツ連邦共和国)で短期調査の機会を得ており、その後1人(科目等履修生)は2006年度に博士論文を提出・合格し、また1人(博士後期課程学生：現教室助手)は、これを足がかりに2006年度同大学への短期留学を実現させ、帰国後その成果を踏まえた優れた博士論文を提出し、合格している。つまり、若いうちにインド文献学の拠点たるドイツに学び、その成果として博士論文を執筆するという望ましい形が続いて実現しているのであり、このことは、他の学生の留学及び研究に対する意欲を、これまで以上に駆り立てる結果となっている。専門分野全体としても学生の留学をサポートする体制を強化しつつある。教員による海外研究拠点及び研究者との連絡や各種情報交換はもちろんであるが、例えば留学に際して必要な各種言語の運用力を養う演習や個別指導などの対策も検討し始めている。日本学術振興会特別研究員数が2006年度、2007年度ともに0名であったのは残念である。2008年度以降の採用に向け、今後も学生・教員が一層団結して努力を払う必要がある。2006年度卒業生1人が企業に就職した以外、両年度の卒業生計3人は進学をしている。また2006年度の博士前期課程修了者も進学している。博士後期課程及び博士号取得者については、常勤の教育・研究職への就職は依然厳しい現状にある。個別地域・個別言語の研究という専門分野の性質も影響しているようだが、これからの学生はより学際的な視点と知識を身につけることが望ましい。上記＜教育と学生の状況＞に触れた教育の新たな試みは、そのための1つの対策となり得ると思われる。

＜授業内容と問題点＞ 授業では、インド思想史概説の講義、普通演習としてヴェーダ語やパーリ語文献の輪読、論文作成演習ではヴェーダ文献・初期仏教経典などの研究指導が行われた。非常勤講師からは、各自が専門とするサンスクリット古典文学や大乘仏教瑜伽行唯識思想等に関する教育を受けた。また、ゲストスピーカーの制度を利用し、ヴェーダの写本研究の講義(計3回)を開催した。いずれの授業においても、基礎になるのは原典に基づく厳密な文献学的手法であるから、学生がこれに十分に習熟して自らの研究活動においても確実に行使できるよう教育の徹底化を図っている。なお、現在の本専門分野の教員によってヴェーダに始まる諸文献が広くまかなえるとはいえ、古代インドの膨大な文献とその内容の多様性から、細分化された研究分野やその文献、また当然ながら後代の宗教・哲学文献に関しては、基礎的な知識伝



授はともかく、高度な専門的訓練は非常勤講師に頼らざるを得ない。こうした状況下での非常勤講師枠削減は、学生から多様な分野・文献を習得する機会を奪うという点からも、また学生の様々な関心や研究に対応するという点からも、教員全員が極めて憂慮すべき問題と認識している。一時的なゲストスピーカーの招聘を申請するなどの措置は可能であるが、それもセメスターを通しての授業や指導の代用となり得るにはほど遠い。学外専門家による教育の強化は、本専門分野の教育活動に直接参与するものであるだけに、今後非常勤講師枠の再拡充が望まれる。

＜学外での社会教育活動＞ 2007、2008 両年度には、榎本教授、堂山講師ともに、大阪大学と朝日カルチャーセンターとの協力講座である「阪大朝日中之島塾」において、一般向けの連続講義を行なった。いずれも盛況であり、アンケート等からも多くの反響を得ている。この様な一般向けのセミナー等においては、当該専門分野の研究内容を広く紹介するだけでなく、専門的内容をより普遍的なテーマやメッセージに転換し、人間や社会のあり方を大きな視点から考える場に社会に提供してきたと考えている。こうした活動は今後も積極的に続け、本専門分野が現代社会に何を伝えるべきか、また我々が社会から何を求められているのかを常に意識するための機会とすべきであろう。

## 12-2. 研究活動

＜教員の研究資金獲得＞ 科学研究費補助金に関しては、堂山講師が 2004 年度に若手研究(B)を取得し、2006 年度はその最終年度となった。榎本教授は、『年報 2006』で述べた方針に則り、堂山講師らとともに 2006、2007 年度に基盤研究(B)を申請したが、いずれも採択されず、2007 年度には、同じく堂山講師らとともに、文学研究科内の共同研究にも申請したが、これもまた採択されなかった。しかし、今後とも官民を問わず積極的に資金を獲得して研究・教育に還元すべく、努力していきたい。

＜教員の研究成果＞ 詳しくは「Ⅲ. 教員の研究活動」を参照されたいが、特筆すべき研究成果として堂山講師の以下の業績が挙げられる。まず、2007 年度にドイツの Verlag der Weltreligionen からハーヴァード大学の Michael Witzel 教授らとともに *Rig-Veda—Das heilige Wissen, erster und zweiter Liederkreis* を出版した。本書は『リグヴェーダ』のドイツ語全訳の第一巻であり、古代インド語で書かれた難解を極める同文献を、最新の研究成果に基づいた詳細な注解を附してドイツ語に翻訳したものである。この出版は、刊行前後から *Der Spiegel* 41 (2007 年 10 月 8 日)、*Neue Zürcher Zeitung* (2007 年 7 月 11 日)をはじめ、ドイツやスイスの主要雑誌や新聞において脚光を浴び、「訳者は全員この分野の権威である」(*Focus* 41, 2007 年 10 月 8 日)、「傑出した註釈のついた Rig-Veda」(*Die Zeit*, 2007 年 10 月 11 日)などと高く評価され、学術的な書評としては、印欧語研究の専門誌 *Historische Sprachforschungen* 次号(121)に、この分野の権威である M. Mayrhofer による 9 頁にわたる書評の掲載が決まっている。また、堂山講師は 2007 年度に 'A Morphological Study of the First Person Subjunctive in the Rigveda' を発表した。この論文は、世界の印欧語研究の最先端の業績を紹介する専門誌 *Kratylos* の近刊 (53 号) に P.-A. Mumm によって接続法形態論の研究論文として掲げられている。このような海外への積極的な研究成果の発信は、本専門分野を世界にアピールすることにも貢献するものである。

さらに、堂山講師は 2006 年 6 月には第 3 回印度学宗教学会賞を受賞している。これは、当学会が若手学会員の業績の中から「新しい知識の領域を開拓した独創的な優れた研究」に贈るもので、選考委員会は、本書を今後の議論・研究の元になるスタンダードワークと位置付け、「ここに初めて信頼できる接続法研究の発表が開始されたものと言えるが、それが日本語でなされたことは、今後この分野においても我が国の研究者が最前線を切り拓く段階に至ったことを画する重要な出版である」としている(印度学宗教学会『論集』33 号、pp. 67-72)。さらに、堂山講師には、2007 年 10 月に日本南アジア学会第 1 回学会賞が授与されている。同賞は 2 年に 1 度、南アジア全般に関わる諸分野の研究の中から選ばれるものであるが、経済や政治の分野で共に受賞した他の研究とともに、堂山講師の業績が優れた文献研究の代表として認知されたことを意味する。

榎本教授は和英両文での論文発表を行うとともに、2007 年度には国際シンポジウムのパネリストを務めた。河崎助手も着実に論文発表を続けた。

研究会活動では、各教員は文学研究科内のみならず、学外の京都大学人文科学研究所や、総合地球環境学研究所における共同研究会に大学院生とともに参加し、研究発表も行っている。

＜学生の研究成果＞ 詳しくは「Ⅱ.2 大学院生等による論文発表等」を参照されたい。全体として発表数・論文数が

少ないのは 2006 年度～2007 年度にかけて在籍した博士後期課程の学生数が少ないことに起因する。個人としての論文数及び発表数は当該研究領域における年間数としては平均的であり、またその内容も他大学の同年代の学生と比べて遜色のあるものではない。博士後期課程学生には今後とも継続的に論文を書かせるよう指導していくが、学会での発表・学会誌への投稿が増えることは、それだけ年限内に博士論文執筆に割く時間が削られてしまうことを事実上意味する。博士後期課程に所属する以上、博士論文の執筆に専心させることは当然であるが、彼らの研究成果をいち早く学界に発信することは学界全体の利益になるのは当然のこと、彼ら自身の今後を考えても不可欠である。即ち現在では、研究職・教育職への公募に際し、博士号取得の有無と同時に発表論文数が問われるという事実が存在するからである。この辺の折り合いをどう付けさせるかは依然課題として残るが、課程博士号取得に対する硬直的な指導マニュアルをいきなり構築するよりも、個々の学生の特性を見極め個別に対処の方が現実的であり、またそのような日々の対処の中でのみ、何らかの方策を生み出す土壌も育まれるであろう。

<国際交流> 本専門分野では、2006 年 8 月～2007 年 2 月の半年間、イラン国立博物館の博物館研究主任兼碑文部門長のダリューシュ・アクバルザーデ博士を、外国人招へい研究員として受け入れた。博士は古代・中世イラン語の専門家であり、広くアジアの歴史・文化にも造詣が深く、滞在期間には国際交流基金の助成により、古代日本とイラン及び西アジアとの文化交流についての研究をされた。インド・イラン共通文化の観点から、またインドとイラン両国の地理的關係から、インド学・仏教学の教員と学生が博士から得るものは大変多く、共同研究や研究発表、また日常的な交流によって有益な情報交換を得ることが出来た。博士とは、帰国後も密に連絡を取り合っており、将来的には国際シンポジウムや国際共同研究等をも視野に入れている。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006 年度～2007 年度の過去 2 年間)

#### 1. 榎本文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月現職。専攻:インド仏教学。

##### 1-1. 論文

榎本文雄 「インド仏教における葬儀と墳墓に関する研究動向」江川温(編)『死者の埋葬と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——』pp. 160-169, 2007/6

Enomoto, Fumio, "Research Trend on Funerals and Tombs in Indian Buddhism" Atsusi Egawa(編) *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead: Relatives, Neighboring Societies and States*, pp. 192-203, 2007/6

榎本文雄 「佛教研究における漢譯佛典の有用性」京都大学人文科学研究所(編)『中國宗教文獻研究』pp. 59-82, 2007/2

##### 1-2. 著書

なし

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

榎本文雄 「生老病死」『那賀医師会報』350, 那賀医師会, pp. 5-7, 2008/1

##### 1-4. 口頭発表

榎本文雄 「輪廻思想と初期仏教」シルクロード・奈良国際シンポジウム 2007: インド世界への憧れ, シルクロード学研究センター, 奈良県新公会堂, 2007/12(『シルクロード・奈良国際シンポジウム 2007』p. 8, 2007/12)

榎本文雄 「インド仏教における死者観の研究整理と展望」死と生の習俗の比較史研究, 大阪大学文学研究科広域文化形態論講座地域社会論専門分野, 大阪大学, 2006/6

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西蔵学会・委員	2005年10月～現在に至る
仏教史学会・評議員	2003年11月～現在に至る
東方学会・評議員	2003年9月～現在に至る
インド思想史学会・理事	2003年4月～現在に至る
パーリ学仏教文化学会・理事	1999年4月～現在に至る
日本印度学仏教学会・理事	1996年4月～現在に至る
日本仏教学会・理事	1996年4月～現在に至る

## 2. 堂山 英次郎 講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(東北大学)、博士(文学、東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月現職。専攻：古代インド・イラン文献学、比較言語学。

### 2-1. 論文

Dōyama, Eijirō, "On the Function of the Root-Aorist Participle," 『印度學佛教學研究』, 56-3, pp. 1043-1048, 2008/3

### 2-2. 著書

Dōyama, Eijirō, Michael Witzel, Toshifumi Gotō, Mislav Ježić (共著), *Rig-Veda: Das heilige Wissen, Erster und zweiter Liederkreis*, Frankfurt am Main/Leipzig, 2007/9

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 2-4. 口頭発表

堂山英次郎 「Root-Aorist Participle の機能について」, 日本印度学仏教学会第58回学術大会, 於四国大学, 2007/9

堂山英次郎 「Vādhūla-Śrautasūtra 10.4.1-32と関連資料」, 京都大学人文科学研究所共同研究班「王権と儀礼」第16回研究会, 於京都大学人文科学研究所, 2006/6

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 日本南アジア学会第1回学会賞, 日本南アジア学会, 2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第3回学会賞, 印度学宗教学会, 2006/6

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2006年度、若手研究(B)、代表者：堂山英次郎

課題番号：16720014

研究題目:ヴェーダ語における接続法の研究——リグヴェーダを中心として——

研究経費:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究の目的は、ヴェーダ語(古インド語)の動詞組織のうち、話者の心的態度を表わす法(話法、叙法、ムード)の一つである接続法(英 subjunctive, 独 Konjunktiv)に焦点を当て、その統辞機能を包括的に分析・分類し、機能体系を明らかにすることである。対象とするのは、接続法が唯一生産的なカテゴリーとして機能するヴェーダ語最古層の文献、リグヴェーダ(RV)である。RVにおける接続法の全用例について語形を再チェックするとともに、動詞語根の構造、語幹の種類、人称、数といった語形自体が有する性質や、関係文、疑問文、複文などの文構造のタイプによって用例を分類し、それぞれにおける統辞機能(用法)を決定・分類することを主たる作業過程とする。更に、それら個々のデータの総合的な分析に基づき、接続法全体の機能体系に一定の理論的仮説を与える一方、その仮説を繰り返し個々の実例と照らし合わせることで、より実際的な機能体系を構築することを目指す。最終的には、希求法や命令法といった叙法を始めとする他の動詞組織との比較によって、接続法の機能を、共時体として見た RV の動詞体系全体の中に位置付けることを研究の区切りとしたい。一方でまた、接続法の研究により、RVの詩人や祭官が神々と如何なる関係にあったかといった思想的背景の理解にも迫りたい。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本印度学仏教学会・評議員

2004年7月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員

2004年6月～現在に至る

## 2-6 日本学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本学研究室の源流は、1974年の日本学専攻の開設にさかのぼるが、その後の組織改変を経て、近年は、ふたつの学問的特色を備えてきた。ひとつは、日本という地域の歴史や、文化、思想を孤立した特殊なもの、あるいは自明なものとしてみるのではなく、一国史・単一文化の枠を突破しようとする点である。

いまひとつは、既存のディシプリンをふまえつつ学際的な研究方法を意識的に追求する点である。この点については、教員・院生が所属し研究報告をおこなう学会の多様性に示されている。例をあげてみよう。日本民俗学会、日本民族学会、日本宗教学会、日本女性学研究会、日本思想史学会、日本社会学会、解放社会学会、女性史総合研究会、日本史研究会、日本移民学会、社会思想史学会、「女性・戦争・人権」学会、「宗教と社会」学会、口承文芸学会、近代女性史研究会、芸能史研究会、朝鮮史研究会、青丘文庫研究会(在日朝鮮人運動史研究会関西部会および朝鮮近現代史研究会)、等々。

日本学研究室は、このような特色を生かすために、多彩なアプローチの掘り下げを促すとともに、それらの意識的な交錯を保証するような教育・研究体制を組んでいる。とりわけ全教員が出席し、院生がタコソボ型の研究に陥らず、多分野の研究状況から刺激を得て論文を練り直す場としての「日本学研究方法論演習」は、日本学研究室の教育・研究活動を象徴的に表現するものである。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：荻野 美穂、川村 邦光、杉原 達、平田 由美

准教授：北原 恵、富山 一郎

助教：真鍋 昌賢

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
62	15	30	0	0	1	3	2	4

※うち留学生 19 名、社会人学生 9 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	20	6	9	2	0
'07	21	6	7	4	0
小計	41	12	16	6	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	2	0	2
'07	3	0	3
計	5	0	5

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

中村平 「到来する暴力の記憶の分有——台湾先住民族タイヤルと日本における脱植民地の民族誌記述」 2007/3

主査：富山一郎 副査：川村邦光・杉原達

茶園敏美 「「パンパン」とは誰なのか——「あこがれ」と「欲望」のゆくえ——」 2007/3

主査：富山一郎 副査：荻野美穂・杉原達・藤目ゆき(大阪外国語大学)

兵藤晶子 「精神病の日本近代——<憑依>の再定義という視座からの思想史的考察——」 2007/9

主査：川村邦光 副査：荻野美穂・杉原達・富山一郎

丸山泰明 「八甲田山雪中行軍遭難事件の民俗誌的研究」 2008/3

主査：川村邦光 副査：杉原達・富山一郎

林 葉子 「女たち/男たちの娼娼運動——日本における性の近代化とジェンダー」 2008/3

主査：荻野美穂 副査：川村邦光・杉原達

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	1	13	2	0	2	18
'07	1	10	2	0	5	18
計	2	23	4	0	7	36



## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	1	2	11	0	0	14
'07	1	6	5	0	0	12
計	2	8	16	0	0	26

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文・単行本

#### 【2006年度】

石川浩士「日本「内地」における麻薬中毒者問題と、対ハンセン病対策とのかかわり——1934年の「麻薬中毒対策座談会」について——」『日本学報』26, pp.87-96, 2007/3

石附馨「沖縄戦”未亡人”をめぐる死の現在——位牌・墓問題を中心に」『日本学報』26, pp.105-117, 2007/3

上地美和「クブングァー」闘争と沖縄出身者「社会」『日本学報』26, pp.1-18, 2007/3

上村真也「ハーフタイムの時代——在日朝鮮蹴球団の軌跡とFCコリアの挑戦を中心に——」『日本学報』26, pp.147-172, 2007/3

奥川結香「タカラヅカファンの実態——華麗な舞台の知られざる裏側」『日本学報』26, pp.173-217, 2007/3

柿田肇「ある戦時体験——西東三鬼「神戸」を読む——」『日本学報』26, pp.61-85, 2007/3

魏仙芳「戦後日本の日常生活における茶とジェンダー——サザエさん」を手がかりに」『日本学報』26, pp.19-40, 2007/3

小山有子「お洒落雑誌『スタイル』にみる食の風景——”洋風”料理の受容をめぐる——」『日本の知的遺産としての洋食文化の研究 2005年度 [サントリー文化財団] 人文科学・社会科学に関する研究助成』pp.129-147, 2007/2

小山有子「女性とファッションの類型化再考——「かまやつ女」という評価」『女性学年報』(日本女性学研究会),27, pp.176-190, 2006/11

沈恬恬「ぎゃっこうの可能性——ベンヤミン『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』を巡って——」『日本学報』26, pp.113-124, 2007/3

染川清美「俳句が海外に与えた影響——日本語残留孤児としての台湾日本語俳句『大阪大学 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」「イメージとしての<日本>」最終報告書』pp.61-87, 2007/1

宋英子「帰国・外国人児童生徒の公立学校への受け入れに関する考察——大阪市の事例を通して——」『研究紀要』(世界人権問題研究センター), 12, pp.101-135, 2007/3

土井智義「ある蜂起をめぐる考察——東京タワージャックについて——」『日本学報』26, pp.41-59, 2007/3

永岡崇「教祖の〈死〉の近代——中山みきの表象=祭祀をめぐる」『日本学報』26, pp.87-104, 2007/3

中本剛二「外国人医療サポートボランティアの位相と困難、可能性——「みのお外国人医療サポートネット」への参加から考える」『日本学報』26, pp.97-111, 2007/3

朴秋香「民族教育における「日本人」性の位置づけ——「混血」者の名前を中心に——」『多文化教育における「日本人性」の実証的研究』科学研究費補助金(基盤研究(C)(1))成果報告資料 琉球大学, pp.109-127, 2007/3

林葉子「平塚らいてうにおける性と衛生の近代——エレン・ケイの優生思想との比較から」国際会議 New Women / Modern Girls and the Colonial Modernity in East Asia [Young Feminist Pre-Conference]報告集(韓国・梨花女子大学), pp. 3-32, 2006/10

廣岡浄進「主体化と動員の陣地戦——植民地帝国日本の人種主義と総力戦体制下の部落解放運動を考えるために——」『待兼山論叢』40, pp.35-58, 2006/12

#### 【2007年度】

石川浩士「大阪府が1933年に実施した麻薬中毒患者の収容事業——保安処分について考えるために——」『日本学報』27, pp.1-15, 2008/3



- 石附馨「雑誌『青い海』バックナンバー全目録」『日本学報』27, pp.91-120, 2008/3
- 石山祥子「黒川能と能楽の近代」『[家族写真の歴史民俗学的研究] 科学研究費補助金中間報告書 近代日本における表象と語り』川村邦光編, pp.277-366, 2008/3
- 小山有子「阪大ジーパン論争再考 一九七七→二〇〇七——女性と服装をめぐる議論の矮小化と隠蔽」『待兼山論叢』41, pp.25-58, 2007/12
- 田中菜穂子「『「原爆の絵」と出会う』と出会う——〈涙〉の意味をめぐる——」『日本学報』27, pp.19-24, 2008/3
- 張紋絹「植民地台湾における台北市の空間創出——盛り場「西門町附近」を中心に——」『日本学報』27, pp.17-41, 2008/3
- 張紋絹「『「原爆の絵」と対話しつつ、想像の彼方へ——『「原爆の絵」と出会う』を手がかりにして——」『日本学報』27, pp.37-53, 2008/3
- 鄭祐宗「戦後日本国家と対朝鮮人入管政策の再編成(1946年～1947年)——在日朝鮮人の帰国の権利に対する無効化と強制送還への決定的な傾斜」『社協大阪』第18号, pp.7-13, 2008/2
- 鄭柚鎮「『「原爆の絵」と私、あるいは複数の関係としての私たち——痛みをめぐる議論の可能性を探る——』」『日本学報』27, pp.55-67, 2008/3
- 永岡崇「天理教の戦争と「真情」のポリテイクス——アジア・太平洋戦争期における「ひのきしん隊」の実践と信仰——」『日本思想史研究会会報』25, pp.22-42, 2007/12
- 永岡崇「総力戦と「革新」する天理教」『[家族写真の歴史民俗学的研究] 科学研究費補助金中間報告書 近代日本における表象と語り』川村邦光編, pp.159-227, 2008/3
- 林葉子「廃娼運動への女性の参加と周縁化——群馬の廃娼請願から全国廃娼同盟会設立期まで——」『女性史学』17, pp.1-17, 2007/7
- 林葉子「日清戦争期の女性イメージ——日本婦人矯風会機関誌における従軍看護婦の位置づけをめぐる——」『同志社法学』第59巻第2号(321号), pp.625-647, 2007/7
- 日高由貴「TAの経験から考えたこと」『日本学報』27, pp.43-57, 2008/3
- 廣岡浄進「アジア太平洋戦争下の被差別部落における皇民化運動」『〈眼差される者〉の近代・部落民・都市下層・ハンセン病・エスニシティ』解放出版社, pp.49-72, 2007/10
- 松本理沙「“娘”をめぐる欲望——宝塚歌劇の娘役に関する一考察」『日本学報』27, pp.121-156, 2008/3
- 林曉淳「台湾における結婚写真の変遷と位相——20世紀初頭から現在まで——」『[家族写真の歴史民俗学的研究] 科学研究費補助金中間報告書 近代日本における表象と語り』川村邦光編, pp.63-88, 2008/3
- 林白玫「日本植民地時代における台湾女性生活史」『[家族写真の歴史民俗学的研究] 科学研究費補助金中間報告書 近代日本における表象と語り』川村邦光編, pp.89-157, 2008/3

## (2)口頭発表

### 【2006年度】

- 石附馨「沖縄シャーマニズムの現在」国際日本学研究会, 全南大学校(韓国・光州広域市), 2006/11/3
- 小山有子「衣服の“近代化”——明治期婦人雑誌記事を中心に——」韓日国際学術フォーラム, 韓国外国語大学大学院(韓国・ソウル市), 2006/12/9
- 永岡崇「“信仰と知”の境界をめぐる——近代日本における教祖表象の諸相——」国際日本学研究会, 全南大学校(韓国・光州広域市), 2006/11/3
- 永岡崇「天理教の復元教典と中山正善」日本思想史研究会, 立命館大学(京都市), 2006/10/5
- 永岡崇「教祖の〈死〉の近代」日本宗教学会, 東北大学(仙台市), 2006/9/18
- 永岡崇「教祖の〈死〉の近代」文化／批評[cultures／critiques]研究会, 沖縄大学(那覇市), 2006/8/29
- 畑中小百合「演じられた死について」文化／批評[cultures／critiques]研究会, 沖縄大学(那覇市), 2006/8/29
- 林葉子「廃娼運動の多様性——『自由廃業』から『遊廓再建反対』まで(一)——」日本女性学研究会・近代女性史分科会, 京都市女性総合センター(京都市), 2006/10/21
- 林葉子「平塚らいてうにおける性と衛生の近代——エレン・ケイの優生思想との比較から」国際会議 New Women /

Modern Girls and the Colonial Modernity in East Asia [Young Feminist Pre-Conference], 梨花女子大学(韓国・ソウル市), 2006/10/12

林葉子「近代家族イデオロギーとしての『廢娼』論」日本女性学会, 大阪府立女性総合センター(大阪市), 2006/6/11

林葉子「日本女性史における廢娼運動の位置」日本女性学研究会・近代女性史分科会, 京都市女性総合センター(京都市), 2006/4/15

廣岡浄進「同和奉公会について——植民地帝国日本のアジア太平洋戦争と部落問題」戦後部落解放運動史研究会, 部落解放・人権研究所, 2006/11/27

廣岡浄進「同和奉公会についての覚え書き——部落解放運動についての総力戦」都市下層と部落問題研究会(II), 滋賀大学, 2006/9/19

廣岡浄進「満洲国間島省における省公署官僚の構成と統治実態」共同研究「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」国際日本文化研究センター, 2006/5/13

#### 【2007年度】

石山祥子「黒川能の近代から」日本民俗学会第59回年会, 大谷大学, 2007/10/7

石山祥子「黒川能と写真の民俗誌」第二回国際日本学研究会, 大阪大学, 2007/4/7

沈恬恬「戦時下の手帳についての考察——ベンヤミンの「歴史哲学」に思いを寄せて——」社会思想史学会第32回大会, 立命館大学, 2007/10/13

染川清美「台湾日本語俳句のトランスナショナルな視座からの一考察」天理台湾学会第17回研究大会, 天理大学, 2007/6/30

竹原明理「生人形の在る空間をめぐる」日本民俗学会第59回年会, 大谷大学, 2007/10/7

鄭祐宗「朝鮮解放直後期における朝鮮人と出入国管理との対抗——大阪府における『計画輸送』実施から外国人登録令実施過程を中心に(1946-1947年)」朝鮮史研究会関西西部会 2008年3月例会, 河合塾大阪校, 2008/3/22

鄭柚鎮「軍事化という過程を想像するということ」第九回ソウル女性映画祭国際フォーラム, 2007/4/10

鄭柚鎮「軍事化という過程を想像するということ」女性・戦争・人権学会 2007年度大会, 2007/6/24

永岡崇「民衆宗教」研究のナラティブと今日的意義」日本宗教学会第66回学術大会, 立正大学, 2007/9/16

パイエ由美子「知の国際化——International Baccalaureat について」京都日本語教育センター講師研究会, 同センター, 2007/12/19

林葉子「日露戦争と女たちの自己イメージ——婦人矯風会の慰問袋運動とその影響」女性史総合研究会, 2007/7/14

林白玫「台湾女性生活誌」第二回国際日本学研究会, 大阪大学, 2007/4/7

### (3) その他(書評・翻訳など)

#### 【2006年度】

崔博憲「書評：姜信子『ナミイ！——八重山のおばあの歌物語』『日本学報』26、pp.145-146, 2007/3

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計2名)

2007年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 1名 (計3名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2007年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006 年度～2007 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006 年度～2007 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2006 年度：3 名 2007 年度：1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 3 名  
その他 0 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2006 年度：1 名 2007 年度：1 名

## 9. 刊行物

2006 年度 『日本学報』26, 『文化／批評』冬季号

2007 年度 『日本学報』27

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2007 年度第 1 回日本学方法論の会(担当 富山一郎)

日時場所 2007 年 8 月 2 日 大阪大学待兼山会館

テーマ 『「原爆の絵」と出会う』をめぐって

発表者 門野里栄子(甲南大学)・鄭柚鎮・田中菜穂子・張紋絹

応答 直野章子(九州大学)

司会 富山一郎

2007 年度第 2 回日本学方法論の会(担当 荻野美穂)

日時場所 2007 年 11 月 30 日 大阪大学待兼山会館

テーマ 「学問」するってどんなこと?

講演者 上野千鶴子(東京大学)

企画運営 小山有子(大阪大学文学研究科院生)、宇都宮めぐみ(大阪大学文学研究科院生)

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

日本学研究室の特徴である学際的な研究方法の実践の場としての「日本学研究方法論演習」は、関連分野の研究状況に機敏に反応しつつ問題発見的な研究スタイルを習得するという当初の目標に向け、確実に成果をあげている。とくに 2002 年度から、報告者は事前にホームページ上に提出原稿をアップしておき、参加者は当日までにそれを熟読しておいたうえで授業にのぞむことを義務化している。この方式により、授業時間の大部分をコメンテーターのコメントを含めた全体的討論に当てることができ、問題意識の共有と論点の明確化に大きく寄与している。当然そのことは、学会での研究発表や

学会誌への研究論文の投稿という院生にとって重要な目的に直結するものとなっている。

また、外部からの講師を招いて定期的に行う「日本学方法論の会」も、院生の研究の幅をひろげる貴重な機会として定着してきた。とくにそこで取りあげられた研究テーマを『日本学報』の特集ページと連動させることによって、院生参加者の研究成果を発表する場が確保されている。

そのほか、各種の奨学金、助成金を得て欧米やアジア各地に研究・調査に出向く院生も少なくないし、さまざまなバックグラウンドをもった海外からの留学生も途切れることがなく、院生との多様で有益な交流が行われている。

また、21世紀COEプログラム関連のシンポジウム、ワークショップ、研究会にたいしても、多くの院生の参加が見られる。

## 12-2. 研究活動

研究室所属教員の研究活動は、学会活動ばかりでなく種々の研究プロジェクトへの参加においても盛んであり、発表する著書・論文の点数も多い。また科学研究費の獲得状況においても、基盤研究(B)、若手研究(B)で採用があり、定例的な研究会の開催、それにもとづく研究論集の刊行、国際学会への参加や海外調査もふくめ、種々の成果をあげている。

院生の研究活動としては、学術振興会特別研究員の複数の採用があるほか、国内は言うまでもなく国外の学会・研究会への参加と研究発表も少なくない。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 荻野 美穂 教授

1945年生。神戸女学院大学文学部卒業。奈良女子大学大学院博士課程中退。人文科学博士(お茶の水女子大学)。奈良女子大学文学部、京都文教大学人間学部助教授を経て2000年より大阪大学大学院文学研究科助教授。2005年8月より現職。専攻:女性史/ジェンダー論。

#### 1-1. 論文

荻野美穂 「生殖技術と近代家族の融解」お茶の水女子大学COE(共著)『F-GENS』お茶の水女子大学, pp. 57-63, 2007/3

荻野美穂 「近代日本のセクシュアリティと避妊」大阪府立大学女性学研究センター(共著)『家族・身体・セクシュアリティ』大阪府立大学女性学研究センター, pp. 74-103, 2006/11

#### 1-2. 著書

荻野美穂, 喜多悦子, 原ひろ子(共著)『ジェンダー白書6 女性と健康』明石書店, pp. 14-25, 2008/3

Ogino, Miho, W.R.LaFleur, S. Shimazono(共著), *Dark Medicine: Rationalizing Unethical Medical Research*, Indiana University Press, pp. 223-232, 2007/8

荻野美穂, 松岡悦子, 柘植あづみ(共著)『産む産まない産めない 女性のからだと生き方読本』講談社, pp. 51-65, 2007/1

荻野美穂, 市野川容孝, 柘植あづみ他(共編著)『身体をめぐるレッスン2 資源としての身体』岩波書店, 2006/12

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

荻野美穂 「ジェンダー概念が目指したもの」ジェンダー史学会・女性史総合研究会共催シンポジウム:「女性」史におけるジェンダー, ジェンダー史学会・女性史総合研究会, 京都橘大学, 2007/5

荻野美穂 「生殖技術と近代家族の融解」シンポジウム:家族の境界——表象・身体・労働の政治, お茶の水女子大学21世紀COE, お茶の水女子大学21世紀COE, 2006/11

荻野美穂 「ジェンダー化される身体」日本フェミニストカウンセリング学会大会, 2006/9

荻野美穂 「近代日本のセクシュアリティと避妊」大阪府立大学第11期女性学連続セミナー：家族・身体・セクシュアリティ，大阪府立大学女性学研究センター，2006/7

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本女性学研究会近代女性史分科会・世話役

1985年4月～現在に至る

## 2. 川村 邦光 教授

1950年生。1984年、東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東北大学、1978年)。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997年10月現職。専攻：民俗学／宗教学。

### 2-1. 論文

川村邦光 「マモノの憑依と日常世界」『宗教と現代がわかる 2008』平凡社，pp. 42-45,2008/3

川村邦光 「家族写真の系譜をめぐって」『近代日本における表象と語り』大阪大学文学研究科日本学研究室，pp. 1-62,2008/3

川村邦光 「断髪と頭脳」鈴木正崇(編)『東アジアの近代と日本』慶応義塾大学東アジア研究所，pp.237-281,2007/9

川村邦光 「近代日本における憑依のポリテイクス」川村(編)『憑依の近代とポリテイクス』青弓社，pp.17-85,2007/2

川村邦光 「子どもの死をめぐる語りと遺影」『日本学報』26，大阪大学文学研究科日本学研究室，pp. 1-35，2007/3

川村邦光 「戦死者の亡霊と帝国主義」鎌田東二編(編)『思想の身体 霊の巻』春秋社，pp. 137-170，2007/2

川村邦光 「洋食文化の場」川村邦光(編)『日本の知的遺産としての洋食文化の研究』大阪大学文学研究科日本学研究室，pp. 1-24，2007/2

川村邦光 「家族写真をめぐる覚え書」『待兼山論叢』(大阪大学文学会)，40，大阪大学文学会，pp. 1-11，2006/12

川村邦光 「戦死者の亡霊と異界」小松和彦(編)『日本人の異界観』せりか書房，pp. 83-104，2006/10

川村邦光 「マナ・外来魂とワザヲギをめぐって——折口信夫の憑依論」『国文学』51 巻10号，pp. 71-79，2006/9

川村邦光 「戦死者の亡霊と靖国」『アソシエ』17号，pp. 148-157，2006/6

川村邦光 「聖戦の凶像とその後」『岩波講座アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』岩波書店，pp. 353-380，2006/4

### 2-2. 著書

川村邦光 『聖戦のイコノグラフィー』青弓社，250p.，2007/4

川村邦光(編) 『憑依の近代とポリテイクス』青弓社，pp. 17-85，2007/2

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

川村邦光 「西村明『戦後日本と戦死者慰霊』有志舎」『宗教研究』(日本宗教学会)，353，日本宗教学会，pp. 275-282，2007/9

川村邦光 「子安宣邦『日本ナショナリズムの解説』白澤社」『東京新聞』東京新聞社，2007/5

川村邦光 「稲垣恭子『女学校と女学生』中公新書」『日本経済新聞』日本経済新聞社，2007/4

## 2-4. 口頭発表

川村邦光 「洋食文化の場——牛鍋と洋食の発生から」第355回国立民族学博物館友の会講演会, 国立民族学博物館, 2008/1

川村邦光 「家族写真の系譜をめぐって」第2回国際日本学研究会, 国際日本学研究会, 大阪大学, 2007/4

川村邦光 「近代日本の死の諸相と幼子の死をめぐる語り」日本宗教学会第65回学術大会, 日本宗教学会, 東北大学, 2006/9

川村邦光 「戦死者のゆくえ——靖国神社と近代日本」河合塾文化講演会, 河合塾天王寺校, 2006/6

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B)一般、代表者:川村邦光

課題番号:18320141

研究題目:「家族写真の歴史民俗学的研究」

研究経費:2006年度 直接経費 4,000,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

幕末維新时期から現在にかけて、欧米から導入された写真技術によって、写真が撮影され続けるなかで、家族写真の撮影が人生の節目を刻んでゆく一種の民俗的慣行となっていくことを明らかにし、家族写真の構図や被写体の配置・ポーズなどを分析して、家族観や家族制度の変遷を考察する。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本宗教学会・常任理事

2007年10月～現在に至る

## 3. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業、1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977年関西大学経済学部助手、1981年同専任講師、1984年同助教授、1991年同教授、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本学/文化交流史。

### 3-1. 論文

なし

### 3-2. 著書

倉沢愛子, 杉原達, 成田龍一他(共編)『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第8巻, 岩波書店, 412p., 2006/6

倉沢愛子, 杉原達, 成田龍一他(共編)『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第7巻, 岩波書店, 470p., 2006/5

倉沢愛子, 杉原達, 成田龍一他(共編)『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第6巻, 岩波書店, 406p., 2006/4

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

杉原達 「解説」松村高夫著『日本帝国主義下の植民地労働者』不二出版, pp. 366-373, 2007/5

### 3-4. 口頭発表

杉原達 「在日朝鮮人の歴史的形成・展開と日本の社会意識——大阪の場から考える」第20回獨協インターナショナル・フォーラム



ム:日本とドイツにおける移民・難民・外国人労働者とその受入れ, 獨協大学国際交流センター, 獨協大学, 2007/12

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 4. 平田 由美 教授

大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

### 4-1. 論文

---

Hirata, Yumi, "Recasting Women: Biographical discourse in Modern Japan" 『지식의 근대기획, 미디어의 동아시아 (知の近代企画・メディアの東アジア)』成均館大学東アジア学院シンポジウム予稿集, pp. 147-185, 2007/12

平田由美 「文学言語としての「話法」——近代日本文学における表現史と研究史——」 『表現研究』(表現学会), 86, pp. 9-19, 2007/10

平田由美 「《国=家の物語》を組み替える——「戦後文学」としての在日朝鮮人文学——」西川祐子(編) 『戦後という地政学』東京大学出版会, pp. 183-214, 2006/11

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

平田由美 「女性の改鑄——近代日本における「女伝」という言説——」, 知の近代企画・メディアの東アジア, 成均館大学東アジア学院, 成均館大学, 2007/12

Hirata, Yumi "On the Study of 'Ecriture Migrante' As a Theme for Globalization Studies", Language and the Literature of Migration in East Asia, Cornell University East Asia Program, Cornell University, 2007/10

Hirata, Yumi "On the Study of "Literature of Movement" as a Theme for Globalization Studies", NORTHEAST ASIA:RE-IMAGINING THE FUTURE, Australian National University, Australian National University, 2007/7

平田由美 「文学言語としての「話法」——近代日本文学における表現史と研究史——」表現学会第44回全国大会シンポジウム: 話法, 表現学会, 龍谷大学, 2007/6

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:19520154

研究題目:近代日本における「移動文学」のジェンダー分析

研究経費:2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

20世紀の日本文学を「移動の文学」という視点から再考することを目的に、記号や消費行動など現代社会の表層的現象の底流にある、個別的でありながら普遍的な営みとしての人の「移動」と、国境や言語を越える行為から生み出される「文学」の可能性をグローバルな文脈において探究する。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2004年度～2006年度、受託研究、助成金獲得者:平田由美

助成金名:

研究題目:日本文学分野に関する学術動向の調査・研究

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 1,500,000円

研究の目的:

日本文学の分野に関する国内外の学術研究の動向について、個別の研究状況および国内外の学術交流の現状を調査し、研究助成事業をはじめとする日本学術振興会の各種事業の実施に資することを目的とする。

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員

2004年4月～2007年3月

### 5. 北原 恵 准教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美學及び芸術學)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年より現職。専攻:表象文化論、美術史、ジェンダー論。

#### 5-1. 論文

北原恵 「《御前会議》の表象——『マッカーサー元帥レポート』と戦争画」『甲南大学紀要・文学編:社会科学特集』甲南大学, pp. 23-52, 2008/3

北原恵, 岩切みお「台湾における美術とジェンダー」北原恵ほか『イメージ&ジェンダー』(イメージ&ジェンダー研究会), 8, 彩樹社, pp. 25-30, 2008/3

北原恵 「揺れる「天皇ご一家」のアイコン——万世一系の表象」『インパクション』160, インパクト出版会, pp. 116-119, 2007/11

北原恵 「グローバル化された“フェミニスト・アート”——《ディナー・パーティ》&「グローバル・フェミニズム」展」『インパクション』159, インパクト出版会, pp. 126-135, 2007/9

北原恵 「コミカルに、かつシニカルに——韓国と日本の現代写真」『インパクション』156, インパクト出版会, pp. 146-151, 2007/2

北原恵, 横山博, 斉藤環他(共著)「2006年度公開シンポジウム:討議と質疑応答」『心の危機と臨床の知』8, 甲南大学人間科学研究科, pp. 42-63, 2007/2

北原恵 「「仰ぎ見る」昭和の記憶——昭和天皇記念館・訪問記」『インパクション』155, インパクト出版会, pp. 138-144, 2006/12

北原恵 「裏地に隠された戦争——「着物柄に見る戦争」展から」『インパクション』153, インパクト出版会, pp. 165-168, 2006/9

北原恵 「せめぎあう戦争の記憶——『マッカーサー元帥レポート』と戦争画』『インパクション』151, インパクト出版会, pp. 112-123, 2006/4

## 5-2. 著書

北原恵, 上村くにこ『暴力の発生と連鎖(「米国プロパガンダ・ポスターにみるナショナリズムとジェンダー」)』人文書院, pp. 104-130, 2008/2

北原恵, 田中かず子他(共著)『アジアから視るジェンダー(「日本の美術界とジェンダー」)』風行社, pp. 137-151, 2008/1

北原恵, 若桑みどり他(共著)『科学研究費助成報告書『家父長制世界システムにおける戦時の女性の差別の構造的研究』(2005-2006 年基盤研究 C・若桑みどり代表、研究分担者)「ナショナリズムとジェンダー——WWIポスターにみる「真のアメリカ人」の構築」』科学研究費助成報告書, 2007/4

## 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北原恵(書評)「書評:川村邦光『聖戦のイコノグラフィ』——視覚表象分析の方法論を再考する』『日本学報』27, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 59-68, 2008/3

北原恵(書評)「書評:小勝・香川『記憶の網目をさぐる』——微妙に違う視点が思考をうながすアートとジェンダーをめぐる対話』『美術運動史研究会ニュース』89, 美術運動史研究会, pp. 1-5, 2007/9

## 5-4. 口頭発表

北原恵 「“Contemporary Japan in Japanese Women Artists” International Symposium: on Gender Studies in Japan and Thailand, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, Chulalongkorn University, 2007/12(『東アジアの生活文化とジェンダー報告書』pp. 10-13, 2008/3)

北原恵 「元旦紙面にみる天皇一家像の形成」研究会「家族写真の歴史民俗学的研究」(科研研究会・川村邦光代表), 「家族写真の歴史民俗学的研究」(科研研究会・川村邦光代表), 大阪大学(豊中), 2007/11

北原恵, 宜野座菜央見, 千葉慶「『御前会議』の表象——『マッカーサーレポート』と戦争画」表象文化論学会全国大会(パネル「身体・映画・絵画にみる大日本帝国——ナショナリズムとジェンダー」を組織・発表, 表象文化論学会全国大会, 東京大学(駒場), 2007/7

北原恵 「WWIプロパガンダポスターに見る「真のアメリカ人」の構築——ジェンダー／民族の視点から」敬和学園大学・共同研究チーム研究会, 敬和学園大学・共同研究チーム研究会, 敬和学園大学(新潟), 2007/3

北原恵 「Comical&Cynical 展——日韓女性アーティストの出会い」Comical&Cynical 展フォーラム, Comical&Cynical 展実行委員会, 大阪府立女性総合センター, 2007/1

北原恵 「『ディナー・パーティ』から『ゲリラ・ガールズ』まで——フェミニズムとアートをめぐる議論と課題」「女性と創造力、女性の創造力」プロジェクト, 青山学院女子短期大学・総合文化研究所「女性と創造力、女性の創造力」プロジェクト, 青山学院女子短期大学, 2007/1

北原恵 「皇室の性と生殖を考える——2006 年、女系／男系議論から見えるもの」女性学研究会 12 月例会, 女性学研究会, とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ, 2006/12

北原恵 「美術からみる<ジェンダー>」リーブラカレッジ(連続講座), 東京都港区立男女平等参画センター「リーブラ, 2006/11

北原恵, 吉見俊哉, 若桑みどり他「ナショナリズムとジェンダー——WWI にみる「真のアメリカ人」の構築」「東大デジタルアーカイブ公開記念シンポジウム」, 東京大学情報学環, 東京大学, 2006/6

## 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

表象文化論学会・理事

2006年4月～現在に至る

イメージ&ジェンダー研究会・運営・編集委員等

1995年6月～現在に至る

## 6. 富山 一郎 准教授

1957年生。1989年京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。1989年～1997年まで神戸市外国語大学助教授、その後現職。専攻：歴史学／文化理論。

### 6-1. 論文

---

富山一郎 「接続せよ！研究機械」『インパクション』編集委員会『インパクション』153, インパクト出版会, pp. 10-21, 2006/8

### 6-2. 著書

---

富山一郎(共編著)『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院, pp. 341-376, 2008/1

富山一郎(共著)『植民者へ』松籟社, pp. 434-472, 2007/11

富山一郎(編)『記憶が語りはじめる』東京大学出版会, 264p., 2006/12

富山一郎(編)『記憶が語りはじめる』東京大学出版会, pp. 201-224, 2006/12

富山一郎(共著)『マイクロ人類学の実践』世界思想社, pp. 424-450, 2006/11

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 6-4. 口頭発表

---

Tomiyama, Ichiro “Mediated Knowledge” Globalizing Academic Publishing in Asia Conference: Globalizing Academic Publishing in Asia, National Tsing Hua University(台湾) Inter-Asia Cultural Studies Society, National Tsing Hua University(台湾), 2006/12

富山一郎 「歴史記述における感情記憶の問題」第6回日韓・韓日歴史家会議: 歴史家はいま、何をいかに語るべきか, 日韓歴史家会議組織委員会・日本学術会議私学委員会国際歴史学会議等分科会, 日韓文化交流基金, 2006/10

Tomiyama, Ichiro “運動を媒介するということ”『創作と批評』40周年記念国際シンポジウム: 東アジアの連帯と雑誌の役割, Chanbi Publishers, 延世大学(韓国), 2006/6

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

富山一郎 地域農林経済学会賞(奨励賞), 地域農林経済学会, 1991/11

富山一郎 農業史研究会賞, 農業史研究会, 1988/3

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 7. 真鍋 昌賢 助教

1969 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)。国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員を経て 2002 年現職。専攻:民俗学、口承文芸研究、近現代芸能史、メディア文化論。

### 7-1. 論文

- 真鍋昌賢 「浪曲世界の入り口と奥行き——期待を生む仕掛けについて——」『上方芸能』165, 上方芸能編集部, pp. 19-27, 2007/9
- 真鍋昌賢 「声の文化としての怪談——子どもの世界へのアプローチ——」『子どもの文化』39-10, 子どもの文化研究所, pp. 19-26, 2007/9
- 真鍋昌賢 「比較の夢——町田嘉章と「民謡」の録音・採譜——」『口承文芸研究』(日本口承文芸学会), 30, 日本口承文芸学会, pp. 150-157, 2007/3
- 真鍋昌賢 「研究対象としての「二次的な声の文化」」『口承文芸研究』(日本口承文芸学会), 30, 日本口承文芸学会, pp. 214-220, 2007/3

### 7-2. 著書

- 小川伸彦, 山泰幸, 真鍋昌賢他(共著)『現代文化の社会学入門』ミネルヴァ書房, pp. 233-249, 2007/4
- 右田紀久恵, 永岡正己, 真鍋昌賢他(共著)『都市福祉のパイオニア 志賀志那人 思想と実践』和泉書院, pp. 111-124, 2006/11

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 真鍋昌賢 「兵頭裕己編著『思想の身体 声の巻』」『口承文芸研究』, 31, 日本口承文芸学会, pp. 185-188, 2008/3
- 真鍋昌賢 「浪曲」『シリーズことばの世界第 2 巻 かたる』(日本口承文芸学会編)三弥井書店, pp.76-77, 2008/1
- 真鍋昌賢 「愛国浪曲と「語り物」の戦時体制」『世界音楽の本』(徳丸吉彦他編)岩波書店, pp. 422-425, 2007/12
- 真鍋昌賢・伊藤遊・山中千恵 「「イメ目」班における方法論の実験報告——研究ネットワークの構築のために」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006 第 5 巻 イメージとしての〈日本〉』(伊藤公雄・金水敏編), 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, pp.209-217
- 永岡正己, 森田康夫, 真鍋昌賢他(共著)「志賀志那人の思想と実践に学ぶ——地域福祉の再構築にむけて——」『大阪市社会福祉研究』(大阪市社会福祉協議会), 29, 大阪市社会福祉協議会, pp. 3-23, 2006/12

### 7-4. 口頭発表

- 真鍋昌賢 「客はいかにして可視可できるのか——芸能の受容史・試論——」シンポジウム:ポピュラーカルチャーと学問が出会うとき, GCOE コンフリクトの人文学「横断するポピュラーカルチャー」班, 大阪大学, 2008/3/8
- 真鍋昌賢 「記録の欲望、「生活」のテキスト化——1920 年代末における「民俗芸術の会」の紹介——」京都市立芸術大学 プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」(於京都市立芸術大学)2007/5/26
- Manabe, Masasyoshi 'Late night radio shows in 1990s Japan and the elderly: to whom does midnight belong?', JAPANESE STUDIES SEMINAR, Japanese Studies Centre Monash University, Australia, 2007/3/13
- 真鍋昌賢 「庶民文化の芸術化をめざして——浪花節の改良運動」シンポジウム志賀志那人の思想と実践に学ぶ——地域福祉の再構築にむけて——(於大阪市立住まい情報センター)2006/11/18
- 真鍋昌賢 「芸能史の「近代」を論じるために」京都市立芸術大学 プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」於京都市立芸術大学, 2006/9/2
- 真鍋昌賢 「アナウンサーのことば、DJ のことば——「二次的な声の文化」とイントネーション」京都市立芸術大学 プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」, 京都市立芸術大学, 2006/7/15
- 真鍋昌賢 「口承文芸研究は「落日」をのりこえたか」第 30 回口承文芸学会大会・シンポジウム口承文芸研究のこれから, 白百合女子大学, 2006/6/3
- 真鍋昌賢 「浪花節の改良と芸術化への意志——1920 年代における志賀志那人と宮川松安の実践」京都市立芸術大学プロジェ

外研究, 京都市立芸術大学 プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」, 京都市立芸術大学, 2006/5/20

#### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

7-6-1. 2004年度～2006年度、若手研究(B)、代表者:真鍋昌賢

課題番号:16720210

研究題目:「民俗芸術」概念の再検討による芸術・娯楽の民俗学の可能性

研究経費:2006年度 直接経費 600,000円 間接経費 0円

研究の目的:

民俗学における芸術・娯楽研究の可能性を「民俗芸術」概念の再検討によって分析する。中心的なテキストは雑誌『民俗芸術』であるが、その位置づけをおこなうために、幅広く周辺の研究動向に目を配っていく。

#### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本口承文芸学会・運営理事(機関誌委員)

2007年4月～現在に至る

比較日本文化研究会・運営委員

2004年12月～現在に至る



## 2-7 日本史学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本史学専門分野では、学部生・大学院生に対する教育および研究活動の基本を、(イ)日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の習得、(ロ)精緻な実証をふまえた独創的な研究能力の育成、(ハ)時代・分野の枠にとらわれない、柔軟かつ幅広い歴史的思考力の獲得、(ニ)フィールドワークや古文書調査など実地調査能力の習得、(ホ)プレゼンテーション能力の育成、に置いている。

(イ)については、特に各時代(古代・中世・近世・近代)で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めている。(ロ)では、卒論演習や大学院演習、また修士論文作成指導演習・博士論文作成指導演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図っている。(ハ)に関しては、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設けたり、高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求する歴史教育論演習を実施したりしている。また、年1回、学界の第一人者といわれる研究者に研究発表をしていただく場を日本史研究室として設定しているほか、大学院生に対しては、学会運営に積極的に携わる中で、柔軟かつ幅広い歴史的思考力を身につけるよう指導している。(ニ)については、毎年恒例の新入生歓迎小旅行や研究室旅行で、現地見学・現地調査を実施しているのに加えて、近世古文書演習において古文書調査合宿を行っている。(ホ)については、学部・大学院の演習で報告・発表させているほか、毎年7月に院生報告会、10月に卒論・修論発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表を行う機会を設けている。

以上のほか、日本史学専門分野では、学会において、教員と院生がともに委員として学会運営や研究活動を行う機会がかなりあり、本専門分野の特色のひとつをなしている。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4(兼任1) 准教授 1 講師 0 助教 2(兼任1)

教授：梅村 喬、武田佐知子(兼任)、平 雅行、村田 路人

准教授：飯塚 一幸

助教：北泊謙太郎、廣川 和花(兼任)

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
39	17	16	0	1	2	6	0	2

※うち留学生 8 名、社会人学生 2 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	16	9	5	4	0
'07	17	3	12	6	0
小計	33	12	17	10	0

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	3	4
'07	6	0	6
計	7	3	10

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

馬部 隆弘「戦国期城郭政策論」2007/3

主査：村田路人 副査：梅村 喬、平 雅行

佐伯 徳哉「中世日本海西部地域と国家的支配」2007/9

主査：平 雅行 副査：梅村 喬、村田路人

杉本 弘幸「日本現代都市社会政策史研究序説——都市社会政策とマイノリティをめぐって——」2008/3

主査：飯塚一幸 副査：平 雅行、村田路人

吉田 洋子「徳川家康の国家観と朝廷政策」2008/3

主査：村田路人 副査：平 雅行、飯塚一幸

上田 長生「幕末維新期の陵墓管理・祭祀の基礎的研究」2008/3

主査：村田路人 副査：梅村 喬、飯塚一幸

廣川 和花「近代日本のハンセン病問題と地域」2008/3

主査：飯塚一幸 副査：平 雅行、村田路人

豊田 裕章「日本の古代宮都の源流と周制との関わりについて」2008/3

主査：梅村 喬 副査：平 雅行、村田路人

##### 【論文博士】

西尾 和美(松山東雲女子大学)「戦国期の権力と婚姻」2006/11

主査：平 雅行 副査：村田路人・馬田綾子(梅花女子大学)

樋口 雄彦(国立歴史民俗博物館)「沼津兵学校の研究」2007/2

主査：猪飼隆明 副査：梅村 喬・村田路人

長野 暉(佐賀大学)「幕藩制国家の領有制と領民」2007/3

主査：猪飼隆明 副査：平 雅行・村田路人

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	7	4	0	1	8	20
'07	6	4	0	0	1	11
計	13	8	0	1	9	30

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	20	14	15	4	53
'07	0	28	26	1	1	56
計	0	48	40	16	5	109

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2006年度】

飯沼雅行「幕府広域役の実現過程に見る個別領主と地域——琉球使節綱引組合大塚組の事例——」、『地方史研究』※, 324, 地方史研究協議会, pp.20-37, 2006/12

上田長生「幕末維新期の陵墓と村・地域社会——飯豊天皇陵の祭祀・管理を事例に——」、『歴史評論』※, 673, 歴史科学協議会, pp.94-102, 2006/5

大井喜代「十世紀初頭の法家勘申——官人の懈怠を手掛かりとして——」『待兼山論叢<史学篇>』※, 40, 大阪大学文学会, pp.49-74, 2006/12

太田光俊「小牧・長久手の戦いにおける本願寺門末——北伊勢の事例から——」(藤田達生編『近世成立期の大規模戦争戦場論下』岩田書院, pp.57-81, 2006/4

太田光俊「豊臣期における木造地区の景観——文禄検地帳の分析から——」(『Mie history』18, 三重歴史文化研究会, pp.69-80, 2006/8

佐伯徳哉『杵築大社近郷絵図』と杵築大社の中世的景観——神仏分離期からの考察——, 『日本歴史』※, 703, 日本歴史学会, pp.19-35, 2006/12

田村正孝「中世都市大山崎の展開」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』, 大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.133-157, 2007/3

豊田裕章「前期難波宮の小柱穴について——礼制からみた古代建築と裳階——」, 『日本書紀研究』※, 27, 日本書紀研究会, pp.107-133, 2006/6

豊田裕章「茨木城・城下町の復元案と廃城の経過」, 豊田裕章ほか著『よみがえる茨木城』, 清文堂出版, pp.81-113, 2007/1  
※共著者は中村博司・仁木宏・中井均・片岡健・岡市正達の各氏

馬部隆弘「蝦夷の首長アテルイと枚方市——官民一体となった史蹟の捏造——」, 『史敏』2006 春号, 史敏刊行会, pp.72-90, 2006/4

馬部隆弘「河内国楠葉の石清水八幡宮神人と室町將軍家祈願寺伝宗寺——寺内町成立前史——」, 『枚方市史年報』9, 枚方市立中央図書館市史資料室, pp.15-50, 2006/4

馬部隆弘「旗本水野家の陣屋支配と坂村・岡田家・三浦家」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後

- 期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.3-44, 2007/3  
※蓮井岳史氏との共同執筆
- 馬部隆弘「三浦蘭阪の古文書蒐集——大山崎における調査を中心に——」,研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.175-194, 2007/3 ※松永和浩氏との共同執筆
- 馬部隆弘「畠山氏による和泉守護細川家の再興——「河州石川郡畑村関本氏古文書模本」の紹介——」,研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.195-208, 2007/3
- 馬部隆弘「一七世紀後半における医家由緒の創作と大名家への仕官——久居藩藤堂家に仕えた医師田丸氏二代の生涯——」,研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.209-248, 2007/3
- 廣川和花「近代日本のハンセン病者と地域——ハンセン病自由療養地をめぐる議論を素材に——」『部落問題研究』※, 176, pp.82-112, 2006/8
- 松永和浩「室町期における公事用途調達方式の成立過程——「武家御訪」から段銭へ——」,『日本史研究』※, 527, 日本史研究会, pp.1-29, 2006/7
- 松永和浩「南北朝期公家社会の求心構造と室町幕府」,『ヒストリア』※, 201, 大阪歴史学会, pp.25-52, 2006/9
- 松永和浩「南北朝内乱と左馬寮領——三浦家文書の左馬寮関係史料を手掛りに——」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.159-172, 2007/3
- 松永和浩「三浦蘭阪の古文書蒐集——大山崎における調査を中心に——」,研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.175-194, 2007/3 ※馬部隆弘氏との共同執筆
- 【2007年度】**
- 浅井七恵「米騒動における新聞社焼打ちに関する考察」『歴史と神戸』47-1(通号 266), 神戸史学会, pp.19-27, 2008/2
- 上田長生「近代移行期畿内の権力と地域社会——山陵普請・管理を素材に——」『ヒストリア』※, 208, 大阪歴史学会, pp.168-193, 2008/1
- 太田光俊「本願寺御家中衆次第について(1)」『本願寺史料研究所報』34, 本願寺史料研究所, pp.1-8, 2008/3
- 佐伯徳哉「中世前期の出雲地域と国家的支配」『日本史研究』※, 542, 日本史研究会, pp.1-25, 2007/10
- 田村正孝「室町期における宇佐宮の祭祀・造営再興」『年報中世史研究』※, 32, 中世史研究会, pp.117-140, 2007/6
- 田村正孝「中世宇佐宮の変容——宗廟から一宮へ——」『ヒストリア』※, 208, 大阪歴史学会, pp.84-106, 2008/1
- 松永和浩「倉付にみる領主・百姓関係」『史敏』2007 春号, 史敏刊行会, pp.26-47, 2007/4
- 松永和浩「室町殿権力と公家社会の求心構造」『ヒストリア』※, 208, 大阪歴史学会, pp.51-81, 2008/1
- 松永和浩「南北朝・室町期における公家と武家——権限吸収論の克服——」中世後期研究会編『室町・戦国期研究を読みなおす』思文閣出版, pp.4-28, 2007/10
- 松永和浩「軍事政策としての半済令」『待兼山論叢<史学篇>』※, 41, 大阪大学文学会, pp.55-81, 2007/12
- 芳澤元「室町期禅林における飲酒とその背景」『龍谷史壇』127, 龍谷大学史学会, pp.15-52, 2007/9

## (2)口頭発表

### 【2006年度】

- 浅井七恵「米騒動における神戸新聞社焼き打ち事件の原因に関する考察」第2回地域史卒論報告会,歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 神戸市立兵庫勤労市民センター／兵庫県神戸市, 2007/3/18
- 上田長生「幕末維新期の山陵普請・管理と村・地域社会」2007年大阪歴史学会近世史部会個人報告準備報告, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルームF会議室／大阪府大阪市, 2007/3/30
- 太田光俊「豊臣政権期における坊主衆の動向について」織豊期研究会, 織豊期研究会, 名古屋大学大学院文学研究科／愛

- 知県名古屋市, 2006/6/20
- 太田光俊「豊臣政権期における坊主衆の動向について——本山の儀式を中心に——」大阪真宗史研究会, 大阪真宗史研究会, 真宗大谷派難波別院／大阪府大阪市, 2006/7/26
- 太田光俊「湊津・寺内と伊勢街道～安濃津・一身田」中世都市研究会三重大会, 中世都市研究会, 安濃津・一身田寺内町／三重県津市, 2006/9/2
- 太田光俊「第4回読書会：池上裕子著『織豊政権と江戸幕府』」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム C 会議室／大阪府大阪市, 2006/10/20(※中野賢治氏と共同報告)
- 尾島志保「1920年代の県—町村関係——府県郡町村長会の活動を中心に——」関西郡部研究会, 関西郡部研究会, クレオ大阪西／大阪府大阪市, 2006/7/29
- 片岡太郎「戦国期京都の町衆——町組「六町」に関して——」大阪歴史科学協議会全体委員会ミニ報告, 大阪歴史科学協議会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2006/11/4
- 片岡太郎「論評：三谷博「安定と激変——複雑系をヒントに変化を考える——」」第22回歴史学入門講座実行委員会研究会, 第22回歴史学入門講座実行委員会, 関西大学／大阪府吹田市, 2006/5/14
- 片岡太郎「推薦講師について(桜井英治氏)」歴史学入門講座実行委員会, 歴史学入門講座実行委員会, 大阪府立青少年会館／大阪府大阪市, 2006/12/3
- 片岡太郎「推薦講師について Ver.2(桜井英治氏)」歴史学入門講座実行委員会, 歴史学入門講座実行委員会, 大阪府立青少年会館／大阪府大阪市, 2007/1/21
- 片山早紀「書評：吉田伸之著『日本の歴史 17 成熟する江戸』」大阪歴史学会近世史部会第2回読書会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2006/6/16
- 加藤伸行「木下尚江の社会思想——個我の開放と「生活」への視座——」名古屋大学文学部日本史学研究室近現代史研究会3月例会, 名古屋大学文学部日本史学研究室近現代史研究会, 名古屋大学文学部日本史学研究室／愛知県名古屋市, 2007/3/10
- 熊野庸一「明治前期地方行財政の展開と町村連合会——兵庫県武庫郡生津村を例に——」第2回地域史卒論報告会, 歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 神戸市立兵庫勤労市民センター／兵庫県神戸市, 2007/3/18
- 後藤敦史「書評：井上勝生『日本の歴史 18 開国と幕末変革』」大阪歴史学会近世史部会第3回読書会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2006/7/28
- 佐伯徳哉「石見銀山の史的展望——石見銀山遺跡とその文化的景観——」大阪外国語大学産官学共同連携事業, 大阪外国語大学産官学共同連携事業, 大阪梅田大和ハウス本社／大阪府大阪市, 2007/1/13
- 佐伯徳哉「石見銀山と世界遺産金銀鉱山の比較研究」山陰研究プロジェクト, 山陰研究プロジェクト, 島根大学／島根県松江市, 2007/1/14
- 田村正孝「室町・戦国期における豊前国一宮宇佐宮の展開」大阪歴史学会中世史部会大会準備報告, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2007/1/26
- 立野康志郎「論評：三谷博「比較史上の明治維新——過程と特徴——」(三谷博著『明治維新とナショナリズム』第9章)」歴史学入門講座実行委員会勉強会, 歴史学入門講座実行委員会, 東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2006/4/22
- 立野康志郎「若手新委員問題関心報告」大阪歴史科学協議会若手新委員問題関心報告会, 大阪歴史科学協議会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2006/10/14
- 戸津井俊介「中世北勢地方における守護勢力の浸透と国人の動向」日本史研究会中世史部会・大阪歴史学会中世史部会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 京大会館 102／京都府京都市, 2006/06/03
- 豊田裕章「信西の「異朝明堂指図記」について」京都大学人文科学研究所「伝統中国の生活空間班」班会, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 2006/10/24
- 豊田裕章「中国の都城と下三橋遺跡」こおりやま歴史フォーラム, こおりやま歴史フォーラム, 大和郡山城ホール／奈良県大和郡山市, 2007/2/3
- 中野賢治「第4回読書会：池上裕子著『織豊政権と江戸幕府』」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム C 会議室／大阪府大阪市, 2006/10/20(※太田光俊氏と共同報告)

- 中野賢治「信長部将の家臣団編成と名字付与」大阪歴史学会中世史・近世史合同部会,大阪歴史学会,梅田東生涯学習ルーム C 会議室/大阪府大阪市, 2006/12/22
- 長谷川裕峰「葛川明王院における聖域の再編——聖域から荘園へ——」大阪歴史学会中世史部会,大阪歴史学会,梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2007/3/9
- 馬部隆弘「京都守護職会津藩の京都防衛構想とその実現過程——河内国交野郡楠葉村における台場修築の事例から——」城郭談話会,城郭談話会,アピオ大阪/大阪府大阪市, 2006/9/9
- 廣川和花「戦前期大阪におけるハンセン病者の処遇——大阪皮膚病研究所のハンセン病治療研究をめぐって——」近代法制史研究会,近代法制史研究会,大阪大学大学院法学研究科/大阪府豊中市, 2006/7
- 廣川和花「戦前・戦中期大阪におけるハンセン病者の処遇——大阪皮膚病研究所のハンセン病治療研究をめぐって——」疾病史研究会,疾病史研究会,アピオ大阪/大阪府大阪市, 2007/2
- 古井浩幸「日露戦後における貴族院の活動と地域利害——貴族院多額納税者議員八田徳三郎を中心に——」名古屋大学文学部日本史学研究室近現代史研究会 3 月例会,名古屋大学文学部日本史学研究室近現代史研究会,名古屋大学文学部日本史学研究室/愛知県名古屋市, 2007/3/10
- 牧野雅司「維新时期朝関係における書契問題の基礎的研究」近世史フォーラム 7 月例会,近世史フォーラム,大阪市中央公会堂第 7 会議室/大阪府大阪市, 2006/7/12
- 松永和浩「南北朝期公家の所領・所職と室町幕府」中世後期研究会,中世後期研究会,京都大学/京都府京都市, 2006/5/13
- 松永和浩「南北朝期公家の所領・所職と室町幕府」日本史研究会中世史部会,日本史研究会,日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2006/5/23
- 松永和浩「南北朝～室町期公武関係論の課題と展望」中世後期研究会,中世後期研究会,KKR びわこ/滋賀県大津市, 2006/9/6
- 森脇崇文「天正初期備作動乱の一考察」吉備地方文化研究所中世史研究会第 25 回例会,吉備地方文化研究所,就実大学・就実短期大学/岡山県岡山市, 2006/9/9
- 森脇崇文「戦国期権力から豊臣大名へ——備前宇喜多氏の権力分析を通じて——」大阪歴史学会中世史・近世史合同部会,大阪歴史学会,梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2006/10/27
- 吉永壮志「『目代』と『留守』——平安時代中後期の地方行政研究の前提として——」名古屋古代史研究会 10 月例会,名古屋古代史研究会,名古屋市昭和生涯学習センター/愛知県名古屋市, 2006/10/15
- 吉永壮志「奈良時代の『目代』」大阪歴史科学協議会 11 月例会問題関心報告,大阪歴史科学協議会,大阪市梅田東学習ルーム/大阪府大阪市, 2006/11/4
- 吉永壮志「日唐令比較研究の現状」大阪歴史科学協議会前近代史部会,大阪歴史科学協議会,梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2007/1/19
- 吉村真樹子「書評:岩城卓二『近世畿内・近国支配の構造』」大阪歴史科学協議会前近代史部会,大阪歴史科学協議会,梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2006/12/7

《講演》

- 田村正孝「戦国時代の豊中」豊中市教育委員会地域教育振興課出前講座,豊中市教育委員会,豊中市立東丘小学校 6 年 1 組/大阪府豊中市, 2006/6
- 馬部隆弘「中世の楠葉」樟葉宮歴史懇話会,楠葉野会館/大阪府枚方市, 2006/9/16
- 馬部隆弘「幕末に築造された楠葉台場について」樟葉宮歴史懇話会,楠葉野会館/大阪府枚方市, 2006/12/16
- 馬部隆弘「戦国時代の枚方——津田地域を中心に——」山之上自治会,川越村/大阪府枚方市, 2006/12/22
- 馬部隆弘「枚方の戦争遺跡」津田中学校,枚方市立中央図書館/大阪府枚方市, 2007/1/17
- 馬部隆弘「江戸時代に改変された歴史——偽文書がおりなす世界——」守口市市民文化財講座,さつきホールもりぐち/大阪府守口市, 2007/1/20
- 馬部隆弘「幕末に築造された楠葉台場について」楠葉野田北自治会,鍵屋資料館/大阪府枚方市, 2007/2/1
- 馬部隆弘「『自治都市』楠葉の成立と崩壊」枚方文化観光協会,鍵屋資料館/大阪府枚方市, 2007/2/2



- 馬部隆弘「楠葉から枚方へ」枚方文化観光協会、鍵屋資料館／大阪府枚方市, 2007/2/9
- 馬部隆弘「枚方の歴史」黎明塾・百済寺を考える会、枚方市立サンプラザ生涯学習市民センター／大阪府枚方市, 2007/2/10
- 馬部隆弘「樺井文書が作り出す世界」枚方文化観光協会、鍵屋資料館／大阪府枚方市, 2007/2/16
- 馬部隆弘「津田城史再考」ユーカーリ運営委員会、枚方市立南部生涯学習市民センター／大阪府枚方市, 2007/2/24
- 馬部隆弘「枚方宿設置以前の枚方」宿場町枚方を考える会、ラポール枚方／大阪府枚方市, 2007/3/25
- 【2007年度】**
- 阿部慎「中世前期の仏教と王権——僧綱所の分析を通して——」大阪歴史学会中世史部会卒業論文報告会、大阪歴史学会、大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2007/7/22
- 岩川拓夫「16世紀南九州における贈答品」海城アジア史研究会6月例会、海城アジア史研究会、大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2007/6/23
- 岩川拓夫「16世紀南九州における贈答と秩序」大阪歴史学会中世史部会卒業論文報告会、大阪歴史学会、大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2007/7/22
- 岩川拓夫「戦国期九州における奢侈品の消費・流通に関する一断面」鹿児島地域史研究会、鹿児島地域史研究会、鹿児島県歴史資料センター黎明館／鹿児島県鹿児島市, 2007/12/15
- 岩川拓夫「鄙から見た戦国期研究」大阪歴史科学協議会前近代史部会、大阪歴史科学協議会、大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2008/1/22
- 岩川拓夫「戦国期南九州と禅僧」鹿大史学会、鹿大史学会、鹿児島大学法文学部／鹿児島県鹿児島市, 2008/2/2
- 岩川拓夫「16世紀南九州における贈答品」隼人文化研究会3月例会、隼人文化研究会、鹿児島県歴史資料センター黎明館／鹿児島県鹿児島市, 2007/3/11
- 岩瀬賀美「九世紀の国司——『類聚三代格』を素材として——」名古屋古代史研究会、名古屋古代史研究会、名古屋大学大学院文学研究科／愛知県名古屋市, 2007/4/20
- 岩瀬賀美「九世紀の国司——『類聚三代格』を素材として——」, 続日本紀研究会、続日本紀研究会、アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2007/5/11
- 上田長生「近代移行期畿内の権力と地域社会——山陵普請・管理を素材に——」大阪歴史学会近世史部会、大阪歴史学会、大阪市中央区民センター／大阪府大阪市, 2007/5/20 ※2007年度大阪歴史学会大会個人報告第2回準備報告
- 上田長生「幕末維新期の権力と地域社会——山陵普請・管理を素材に——」大阪歴史学会2007年度大会(近世史部会個人報告)、大阪歴史学会、大阪市立大学／大阪府大阪市, 2007/6/24
- 上田長生「朝廷「権威」と在地社会——崇光天皇陵の管理を中心に——」近世の天皇・朝廷研究第1回大会、近世の天皇・朝廷研究会、学習院大学／東京都豊島区, 2007/9/23
- 上田長生「泉涌寺と京都の陵墓——近世の民衆と天皇・朝廷——」ラポール学園日本史講座、ラポール学園日本史講座、ラポール京都／京都府京都市, 2007/10/29
- 金正文「中世前期の仁和寺御室——鎌倉後期を中心に——」大阪歴史学会中世史部会、大阪歴史学会、西宮市大学交流センター／兵庫県西宮市, 2007/11/9
- 後藤敦史「ペリー来航前後の対外政策と海防掛」日本史研究会近世史部会・近現代史部会合同部会、日本史研究会、日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2007/5/23
- 佐藤靖子「天平宝字年間の対外関係からみる氏族志の編纂目的」名古屋古代史研究会、名古屋古代史研究会、名古屋大学大学院文学研究科／愛知県名古屋市, 2007/4/20
- 佐藤靖子「渡来人賜姓と功田品等議定からみる氏族志の編纂目的」日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同2007年度卒業論文大報告会、日本史研究会・続日本紀研究会、大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2007/6/3
- 高山直樹「鎌倉府の軍事体制と旧族領主」大阪歴史学会中世史部会卒業論文報告会、大阪歴史学会、大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2007/7/22
- 田村正孝「中世後期における豊前国宇佐宮と地域」大阪歴史学会中世史部会、大阪歴史学会、大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2007/4/20 ※第2回大阪歴史学会大会準備報告

- 田村正孝「中世後期における豊前国宇佐宮と地域」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立梅田東学習ルーム  
／大阪府大阪市, 2007/6/1 ※第3回大阪歴史学会大会準備報告
- 田村正孝「中世宇佐宮の変容——宗廟から一宮へ——」大阪歴史学会 2007 年度大会中世史部会報告, 大阪歴史学会, 大  
阪市立大学／大阪府大阪市, 2007/6/24
- 中村翼「日宋・日元貿易と北条氏」海域アジア史研究会 10 月例会, 海域アジア史研究会, 大阪大学大学院文学研究科/  
大阪府豊中市, 2007/10/27
- 中村翼「『日本国王』冊封まで——海商・外交・倭寇——」「グローバルヒストリーと世界システム」読書会, 「グローバ  
ルヒストリーと世界システム」研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2008/3/14
- 中村翼「日宋・日元貿易と北条氏——鎌倉政権の貿易方針をめぐって——」第9回倭寇の会, 倭寇の会, すし駒旅館・別  
館／香川県仲多度郡琴平町, 2008/3/21
- 中村昌民「戦時期における農地政策とその実態——大阪府萱野村の自作農創設維持事業を事例に——」第3回地域史卒  
論報告会, 歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 神戸市立兵庫勤労市民センター／兵庫県神戸市, 2008/3/16
- 額田政男「『複姓』氏の成立とその在り方について——近江「山君」を手掛りとして——」日本史研究会古代史部会, 日  
本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2007/11/12
- 花尻千秋「中世後期における熊野三山検校と山伏」第3回地域史卒論報告会, 歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 神  
戸市立兵庫勤労市民センター／兵庫県神戸市, 2008/3/16
- 前田英之「桜井英治『日本中世における貨幣と信用について』のコメント」歴史学入門講座実行委員会勉強会, 歴史学入  
門講座実行委員会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2007/5/5
- 前田英之「治承・寿永内乱期における平氏政権の変遷」日本史研究会・大阪歴史学会中世史部会合同卒業論文報告会, 日  
本史研究会・大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター／兵庫県西宮市, 2007/5/20
- 牧野雅司「書契問題と朝鮮の対応」近世史フォーラム4月例会, 近世史フォーラム, 大阪市立弁天町市民学習センター和  
室／大阪府大阪市, 2007/4/21
- 牧野雅司「書評：家近良樹著『孝明天皇と「一会桑」——幕末・維新の新視点——』」大阪歴史学会近世史部会読書会, 大  
阪歴史学会, 大阪市西区民センター第4会議室／大阪府大阪市, 2007/5/11
- 牧野雅司「明治維新と日朝関係の変容」2007 年度第37回明治維新史学会大会, 明治維新史学会, 中央大学後楽園キャン  
パス3号館3F小ホール／東京都文京区, 2007/6/10
- 牧野雅司「明治維新と日朝関係の変容」第46回近世史サマーセミナー, 近世史サマーセミナー, かんぼの宿松島／宮城  
県東松山市, 2007/7/14
- 正岡義朗「豊臣期における政権機構の形成——取次行為の側面から——」大阪歴史学会近世史部会 2007 年度卒論報告会,  
大阪歴史学会, 大阪市西区民センター／大阪府大阪市, 2007/4/28
- 正岡義朗「平成18年度「甲賀の城」調査報告」(報告会), 城郭談話会, 城郭談話会, アピオ大阪／大阪府大阪市, 2007/5/12
- 松永和浩「室町期公武関係の形成と展開」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター／兵庫県西  
宮市, 2007/4/27
- 松永和浩「室町期公武関係の形成と展開」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター／兵庫県西  
宮市, 2007/5/25
- 松永和浩「室町殿権力と公家社会の求心構造」大阪歴史学会 2007 年度大会中世史部会報告, 大阪歴史学会, 大阪市立大  
学／大阪府大阪市, 2007/6/24
- 松永和浩「室町期公武関係論の方法・視角——権限吸収論の克服——」近世史フォーラム7月例会, 近世史フォーラム, 和  
歌山市民会館／和歌山県和歌山市, 2007/7/21
- 芳澤元「瀟湘八景・山市晴嵐詩講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所／京都府京  
都市, 2007/5/9
- 芳澤元「鎌倉後期における禅宗寺院の展開——鎌倉禅林の周辺を中心に——」鎌倉時代研究会, 鎌倉時代研究会, 京都大  
学時計台記念館／京都府京都市, 2007/5/21
- 芳澤元「富岡美術館所蔵 瀟湘八景図賛講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所／

京都府京都市, 2007/5/30

芳澤元『花園天皇日記』講読(1) 花園天皇日記研究会, 花園天皇日記研究会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/6/18

芳澤元「瀟湘八景・烟寺晚鐘詩講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/6/27

芳澤元「室町期の渡唐天神説話の展開と禅宗——守護大名大内氏との関係を手がかりに——」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター/兵庫県西宮市, 2007/7/20

芳澤元『花園天皇日記』講読(2) 花園天皇日記研究会, 花園天皇日記研究会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/7/30

芳澤元『欠伸稿』講読 欠伸稿講読会, 欠伸稿講読会, 京都大徳寺龍光院/京都府京都市, 2007/8/5

芳澤元『翰林五鳳集』瀟湘八景(遠浦帰帆)講読『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/10/31

芳澤元『翰林五鳳集』瀟湘八景(江天暮雪)講読『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/11/21

芳澤元「鎌倉後期の禅宗の展開と文芸——無学祖元・大休正念・一山一寧を中心に——」仏教史学会 11 月例会, 仏教史学会, 2007/11/24

芳澤元『翰林五鳳集』瀟湘八景(江天暮雪)講読『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/12/5

芳澤元『翰林五鳳集』瀟湘八景(洞庭秋月)講読『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学国際禅学研究所/京都府京都市, 2007/12/19

芳澤元「室町期の渡唐天神説話の展開と禅宗——応永年間の文壇と室町殿・大内氏——」海域アジア史研究会 2 月例会, 海域アジア史研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2008/2/22

吉永壮志「奈良時代の目代」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2007/7/20

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2006 年度】

飯沼雅行「新刊紹介: 渡辺和敏著『東海道交通施設と幕藩制社会』」『ヒストリア』201, 大阪歴史学会, pp.120-121, 2006/9

飯沼雅行「西南戦争戦病没者墓碑の建造に関する公文書について」小田康徳・横山篤夫・堀田暁生・西川寿勝編著『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房, pp.102-103, 2006/4

飯沼雅行「墓域縮小以前の墓地景観と真田山招魂社」小田康徳・横山篤夫・堀田暁生・西川寿勝編著『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房, pp.130-131, 2006/4

上田長生「沢良宜浜村庄屋日記」『新修茨木市史年報』5, 茨木市史編さん委員会, pp.25-49, 2006/10

上田長生「新刊紹介: 外池昇著『事典陵墓参考地——もうひとつの天皇陵——』」『日本史研究』531, 日本史研究会, pp.72-73, 2006/11

太田光俊「書評 金龍静『一向一揆論』」『織豊期研究』8, 織豊期研究会, pp.68-77, 2006/10

大根田康介「部会ニュース(中世史部会): 2005 年 5 月部会報告要旨」『日本史研究』528, 日本史研究会, pp. 73-74, 2006/8

尾島志保「深瀬文書目録・解題」『八尾市立歴史民俗資料館 研究紀要』18, 八尾市立歴史民俗資料館, pp.1-85, 2007/3 ※ 関西郡部研究会の名で掲載、目録一部作成及び解題一部執筆

小杉真之「2005 年度大会討論要旨」『歴史科学』184, 大阪歴史科学協議会, pp.21-22, 2006/5

後藤敦史「2005 年 9 月例会彙報」『歴史科学』185, 大阪歴史科学協議会, pp.48-49, 2006/8

立野康志郎「質疑・討論(2006 年度大阪歴史学会大会近世史部会吉田洋子報告)」『ヒストリア』203, 大阪歴史学会, pp.105-107, 2007/1

立野康志郎「地域における歴史系博物館の役割～大阪歴史科学協議会 11 月例会に参加して～」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』48, 歴史資料ネットワーク, pp.7-8, 2007/3

- 田村正孝「書評：一宮研究会編『中世一宮制の歴史的展開』(上・下巻)『日本史研究』527, 日本史研究会, pp.57-65, 2006/7
- 田村正孝「新刊紹介：悪党研究会編『悪党と内乱』『ヒストリア』202, 大阪歴史学会, pp.193-194, 2006/11
- 田村正孝「新刊紹介：バーナード・ルイス著、中山元訳『聖戦と聖ならざるテロリズム——イスラームそして世界の岐路——』『史敏』2006 春号, 史敏刊行会, p.18, 2006/4
- 田村正孝「史料翻刻 三浦蘭阪蒐集古代・中世文書」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.61-122, 2007/3 ※中野賢治・長谷川裕峰・馬部隆弘・松永和浩・森榮倫氏との共同執筆
- 田村正孝「古文書の世界 5 九名井をめぐる江戸時代の村々」『文化財ニュース 豊中』34, 豊中市教育委員会, pp.7-8, 2006/11
- 戸津井俊介「部会ニュース(中世史部会): 2006 年 6 月部会報告要旨」『日本史研究』534, 日本史研究会, p. 84, 2007/2
- 豊田裕章「商家か武家屋敷か? 安土桃山~江戸初期の大阪・茨木遺跡」『朝日新聞』(文化欄), 2006/6/30
- 豊田裕章「実像解明と活用の道を、大阪・茨木 地中に眠る「幻の城」」『朝日新聞』2006/7/20
- 豊田裕章「中世の城館研究 中高生ハイレベル、コンクール「卒論並み」」『読売新聞』2006/12/8
- 豊田裕章「紫金山古墳・桑原古墳群模型展示解説」大阪府立近つ飛鳥博物館, 2006/8
- 中野賢治「質疑・討論(2006 年度大阪歴史学会大会中世史部会高木久史報告)」『ヒストリア』203, 大阪歴史学会, pp.80-81, 2007/1
- 中野賢治「史料翻刻 三浦蘭阪蒐集古代・中世文書」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.61-122, 2007/3 ※田村正孝・長谷川裕峰・馬部隆弘・松永和浩・森榮倫氏との共同執筆
- 中野賢治「蘭阪随筆——翻刻と解説——」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.249-284, 2007/3 ※馬部隆弘・加島美和氏との共同執筆
- 中野賢治「水損史料救済ワークショップ実施報告」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』48, 歴史資料ネットワーク, p.5, 2007/3
- 長谷川裕峰「部会ニュース(中世史部会): 三枝暁子報告討論要旨」『日本史研究』532, 日本史研究会, pp. 74-75, 2006/11
- 長谷川裕峰「史料翻刻 三浦蘭阪蒐集古代・中世文書」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.61-122, 2007/3 ※田村正孝・中野賢治・馬部隆弘・松永和浩・森榮倫氏との共同執筆
- 馬部隆弘「史料翻刻 三浦蘭阪蒐集古代・中世文書」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.61-122, 2007/3 ※田村正孝・中野賢治・長谷川裕峰・松永和浩・森榮倫氏との共同執筆
- 馬部隆弘「蘭阪随筆——翻刻と解説——」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.249-284, 2007/3 ※中野賢治・加島美和氏との共同執筆
- 馬部隆弘「枚方宿とその周辺の高槻藩預所支配——触の廻達を中心に——」『まんだ』87, まんだ編集部, pp.32-36, 2006/8
- 馬部隆弘「本阿弥光悦書状・松花堂昭乗書状」『まんだ』88, まんだ編集部, pp.40-44, 2006/12
- 松永和浩「書評：水野智之著『室町時代公武関係の研究』」『ヒストリア』202, 大阪歴史学会, pp.173-180, 2006/11
- 松永和浩「部会ニュース(中世史部会): 2006 年 5 月部会報告要旨」『日本史研究』533, 日本史研究会, pp. 77-79, 2007/1
- 松永正浩「史料翻刻 三浦蘭阪蒐集古代・中世文書」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.61-122, 2007/3 ※田村正孝・中野賢治・長谷川裕峰・馬部隆弘・森榮倫氏との共同執筆
- 森榮倫「史料翻刻 三浦蘭阪蒐集古代・中世文書」, 研究代表者村田路人『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科日本史研究室・枚方市教育委員会, pp.61-122, 2007/3 ※田村正孝・中野賢治・長谷川裕峰・馬部隆弘・松永和浩氏との共同執筆



森榮倫「部会ニュース(中世史部会):『悪党』問題と地域社会」部会報告要旨『日本史研究』529, 日本史研究会, pp. 77-78, 2006/9

森榮倫「2005年7月例会彙報」『歴史科学』185, 大阪歴史科学協議会, p.47, 2006/8

森脇崇文「天正初期備前動乱の一考察(報告要旨)」『吉備地方文化史研究』(「平成18年度中世史部会活動報告」内), 14, 吉備地方文化史研究所, pp.105-114, 2007/3

吉永壮志「部会ニュース(古代史部会):2004年6月部会報告要旨」『日本史研究』534, 日本史研究会, pp. 72-74, 2007/2

前田英之「歴史学入門講座参加記」『歴史科学』186, 大阪歴史科学協議会, pp.45-47, 2006/11

#### 【2007年度】

浅井七恵「卒業論文報告会の感想文」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』49, 歴史資料ネットワーク, pp.4-5, 2007/5

上田長生「近代移行期畿内の権力と地域社会——山陵普請・管理を素材に——」(大会報告要旨), 『ヒストリア』205, 大阪歴史学会, pp.162-163, 2007/6

太田光俊「見学会だより① 中世安濃津と「寺内町」一身田」『中世都市研究』13, 中世都市研究会, pp.70-80, 2007/9

熊野庸一「卒業論文報告会の感想文」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』49, 歴史資料ネットワーク, pp.3-4, 2007/5

後藤敦史「部会ニュース(近世史・近現代史合同部会):2007年5月部会報告要旨」『日本史研究』544, 日本史研究会, pp.92-93, 2007/12

後藤敦史「質疑・討論(2007年度大阪歴史学会大会近世史部会笹部昌利報告)」『ヒストリア』208, 大阪歴史学会, pp.137-138, 2008/1

立野康志郎「2006年度歴史学入門講座参加記」『歴史科学』190, 大阪歴史科学協議会, pp.51-53, 2007/12

田村正孝「三浦家文書」(「中世を駆ける乙訓歴史舞台」28), 『京都新聞』洛西版, p.24, 2007/9/28 朝刊

田村正孝「中世後期における豊前国宇佐宮と地域」(大会報告要旨), 『ヒストリア』205, 大阪歴史学会, pp.158-159, 2007/6

戸津井俊介「2007年4月例会彙報」『歴史科学』191, 大阪歴史科学協議会, pp.31-32, 2008/2

中野賢治「書評:小山靖憲編『戦国期畿内の政治社会構造』」『史敏』2007春号, 史敏刊行会, pp87-94, 2007/4

中野賢治「楠葉台場跡の紹介」『ヒストリア』206, 大阪歴史学会, pp133-134, 2007/9 ※岸本直文氏と連名、大阪歴史学会企画委員会名義

中野賢治「岸和田古城跡の保存問題と現地見学検討会」『ヒストリア』206, 大阪歴史学会, pp133-156, 2007/11 ※岸本直文氏・中本和氏と連名、大阪歴史学会企画委員会名義

前田英之「部会ニュース(中世史部会):2007年5月部会報告要旨」『日本史研究』544, 日本史研究会, p. 85, 2007/12

前田英之「質疑・討論(2007年度大阪歴史学会大会中世史部会松永和浩報告)」『ヒストリア』208, 大阪歴史学会, pp.81-83, 2008/1

松永和浩「室町期公武関係の形成と展開」(大会報告要旨), 『ヒストリア』205, 大阪歴史学会, pp.157-158, 2007/6

松永和浩「池享著「中世後期の王権をめぐる」(大津透編『王権を考える——前近代日本の天皇と権力——』)」『法制史研究』57, 法制史学会, pp. , 2008/3

森脇崇文「コラム:山田重久についての一考察」『史敏』2007春号, 史敏刊行会, pp79-86, 2007/4

山田蔭「2006年度歴史学入門講座参加記」『歴史科学』190, 大阪歴史科学協議会, pp.49-51, 2007/12

吉永壮志「2006年10月例会彙報」『歴史科学』191, 大阪歴史科学協議会, pp.30-31, 2008/2

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

豊田裕章 中央大学全国中・高校生歴史サミット特別賞(築城賞), 中央大学全国中・高校生歴史サミット実行委員会(文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究——学融合を目指した総合的研究——』), 2006/11

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2007年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

廣川和花、博士後期課程修了、大阪大学総合学術博物館、助教、2008/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 9 名

2006年度:4名 2007年度:5名

<内訳> 中・高等学校教員 4名(私立立命館中学校・高等学校、私立四天王寺高等学校、私立大阪桐蔭高等学校、私立甲陽学院中学校)

大阪大学総合学術博物館研究支援推進員 1名

国立国会図書館司書 1名

ジャーナリスト 2名(株式会社文化放送、株式会社集英社(編集))

裁判官事務官Ⅱ種 1名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2006年度:1名 シーコラ、ヤン氏(カレル大学哲学部日本学科助教授、2005年9月～2006年9月)

2007年度:0名

## 9. 刊行物

なし

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「中世寺院法研究会」(研究会、研究会開催・事務局引き受け、 1988年～現在  
1988年より80回の研究会を開催)

「大阪歴史科学協議会」(学会、編集事務局引き受け) 2000年6月～2006年6月

「大阪歴史科学協議会」(学会、事務局引き受け) 2006年6月～現在

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会(1998年度～2007年度)

「戦国社会の実像」 2008年1月16日

発表者:藤木久志氏(立教大学名誉教授)

「戦後歴史学」と現在」 2007年1月17日

発表者:吉田 晶氏(岡山大学名誉教授)

「懐徳堂と日本における経済思想の成り立ち」 2006年7月11日

発表者:シーコラ、ヤン氏(カレル大学哲学部日本学科助教授)



## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

#### (1) 教員スタッフ

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対し、行き届いた教育を行うことができている。

#### (2) 学生・院生数と教育・研究環境

日本史学専修に進んだ学部2年生は、2006年度18名、2007年度4名であった。2007年度の進学者が例年と比べて少なかったが、一時的な現象と思われる。

大学院の博士前期課程入学者は、2006年度4名、2007年度10名であり、増加傾向が定着してきている。次に、博士後期課程への入学者は、2006年度4名、2007年度7名となり、以前に比して入学者が大きく増えた。また、前期課程・後期課程ともに、外国人留学生や他大学からの入学者が続いており、この流れは恒常化してきている。内部からの進学者が大半を占めていた頃に比べると、院生間に活力が出てきたという点で評価できる。

学生・院生の在籍者は、2007年度は学部生41名、院生36名となった。このほか、研究生・科目等履修生などを加えると、研究室の学生・院生等は101名に達している。ここ数年常時100名前後の構成員を数えており、研究室は活気に溢れている。ただし、現在の研究室は人数に比して手狭であり、教育・研究環境は必ずしも良好とはいえない。

#### (3) 学生・院生教育と就職状況

教員スタッフは全時代をカバーしているため、学部・大学院ともに、各時代にわたる講義・演習を用意している。この点では充実した教育体制といえる。一方、非常勤講師の割り当てが1セメスター分であるため、講座運営費でもう1セメスター分を確保して、従来通り2セメスター分を維持している。これにより前期・後期それぞれ1セメスターずつ2人の講師に講義を担当していただいているが、現状では4時代のうち2時代に限定されるので、学生・院生の間に不満の声があがっている。日本史学はもちろんのこと、文学部・文学研究科の教育における非常勤講師の役割は極めて大きいだけに、この枠の拡充が望まれる。

教育内容については、各時代とも、徹底した史料読解を訓練する史料講読演習を通して、日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の育成に努めており、一定の成果を上げている。近世古文書解読演習では、大学行事である「いちよう祭」の史料展示への参加や史料目録作りによって、実戦的な古文書教育を行っている。また、自治体史編纂事業の一環としての古文書現地調査への参加を積極的に行って、教育効果を一層高めている。

就職について特徴的な点を挙げると、学部卒業生に関しては、数年前までとは異なって極めて良好である。一般企業および官公庁が大半を占めるが、マスコミに就職した者もいる。院生に関しても、前期課程修了者はおおむね良好である。全体的に、一般企業への就職が主流となっているが、国会図書館司書や私立の中高一貫校の教員という専門性の高い分野への就職もあった。大学院博士前期課程が、高度教養人養成機関としての性格をあわせもっていることから、こうした実績は評価できる。博士後期課程修了者については、大学等への就職は相変わらず厳しいが、私立の中高一貫校及び公立高校の常勤講師として任用された者が3名出た。

#### (4) 研究室全体としての教育

例年通り、学外の第一線の研究者を招いての例会、史料の実物や現場に接する機会となる新入生歓迎小旅行や研究室旅行、卒論・修論中間発表会や院生報告会を行い、教室での講義・演習では修得できない能力の育成を図った。これらは、教育上、多大の効果を上げており、今後も継続して行いたい。

#### (5) 課程博士号学位取得

この2年間では7名に達し、前の2年間を大きく上回った。学位取得者増加のため、指導の強化を図ってきた成果と言える。

### 12-2. 研究活動

日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかたわら、『街道の日本史』（吉川弘文館）をはじめとする講座・通史の編集・執筆、『大系真宗史料』（法蔵館）や『吉田清成関係文書』（思文閣出版）などの史料集の編纂な

ど、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画している。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与している。

学会活動については、日本史研究会・歴史科学協議会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会・史学研究会・史学会・仏教史学会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史科学協議会については事務局を本専門分野で引き受けた。

共同研究・学際研究の面では、各教員がそれぞれ科学研究費を獲得し、共同研究を進めている。国際的な共同研究としては、武田佐知子教授が「日本における着衣の女性史的社会的考察」のテーマで行われたものなど、4回の国際シンポジウムで報告者となっているほか、平雅行教授がハーバード大学ライシャワー研究所での国際シンポジウム「仏教学を越えて——日本仏教学の新しい方向」に出席して問題提起を行うなど、日本史学からの情報発信に努めた。また、学際研究としては、平雅行教授と村田路人教授が、東洋史・西洋史や仏教学等の研究者とともに「死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家」(江川温代表、基盤研究(A)、2004年度～2006年度)に参加し、飯塚一幸准教授が、文化財保存学の研究者とともに「京都府行政文書を中心とした近代行政文書についての史料学的研究」(小林啓治代表、基盤研究(B)、2005年度～2007年度)に加わるなど、多彩な活動を展開した。

他方、日本史学専門分野の構成員の多くは、地域社会との連携や社会への研究成果の還元を努めている。たとえば、『愛知県史』『三重県史』『瀬戸市史』『荒尾市史』『宇土市史』『新修熊本市史』『大阪狭山市史』『新修豊中市史』『三田市史』『夜久野町史』『伊万里市史』『鳥栖市史』『彦根市史』などの自治体史編纂事業を通して、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。また、2006年6月21日、国立大学法人大阪大学と枚方市との間において、「三浦家文書の調査と研究」という題目で受託研究契約が交わされ、日本史研究室が実施主体となった。本受託研究には梅村喬教授・村田路人教授が関わり、2007年3月、調査報告書『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』(研究代表者村田路人)を刊行することができた。自治体との共同研究が円滑にいった例であり、この間の地域貢献としては、特筆すべき成果となった。

このほか、本専門分野が保管している旧摂津国住吉郡平野郷町の含翠堂(土橋家)文書や旧摂津国嶋下郡沢良宜浜村高島家文書の整理・研究も無視できない。日本史学専門分野では、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めている。また、毎年その成果の一端を、大学行事である「いちよう祭」において披露している。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 梅村 喬 教授

1945年生。1974年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程史学地理学専攻単位取得退学。文学博士(名古屋大学、1990年)。名古屋大学助手、愛知県立大学文学部助教授、同教授を経て、1999年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本史学/古代史。

##### 1-1. 論文

梅村喬他(共著)「新たに発見された法隆寺文書について」村田路人(共著)『三浦家文書の調査と研究』大阪大学大学院日本史研究室・枚方市教育委員会, pp. 123-132, 2007/3

梅村喬「日本史のことば・安堵」『日本歴史』(日本歴史学会), 704, 日本歴史学会, pp. 50-51, 2007/1

梅村喬「書評、三上喜孝著『日本古代の貨幣と社会』」歴史評論編集委員会『歴史評論』(歴史科学協議会), 676, 歴史科学協議会, pp. 94-98, 2006/8

##### 1-2. 著書

梅村喬他(共著)『三浦家文書の調査と研究』大阪大学大学院日本史研究室・枚方市教育委員会, pp. 123-132, 2007/3

片山剛, Umemura, Takashi 他(共著), *History, Manner and Customs, and Interchange-Asia and Japan-*, 大阪大学文学研究科, pp. 22-37, 2007/3

梅村喬, 玉井力, 西宮秀紀他(共著)『三重県史・資料編 古代(下)』三重県, 1288p., 2007/3

梅村喬他(共著)『瀬戸市史・通史編』上巻, 瀬戸市, pp. 41-67, 2007/2

---

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

---

### 1-4. 口頭発表

梅村喬 「三浦家所蔵法隆寺文書について——平安時代土地公証制の変容」名古屋古代史研究会例会, 名古屋古代史研究会, 名古屋大学文学部, 2007/9

---

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

---

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:梅村喬

課題番号:19520569

研究題目:平安時代における土地公証文書と所領安堵の前提的研究

研究経費:2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

現在に伝わる平安時代文書のなかから土地公証制に係わるものを精査・検討し、中世政治経済史上に支配的となる所領安堵が成立する条件を明らかにする。

---

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

---

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

## 2. 武田 佐知子 教授

1948年東京生。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科史学(日)専攻修士課程修了、東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士(東京都立大学、1985)。大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門(1985)、濱田青陵賞(1995)、紫綬褒章(2003)。専攻:日本古代史・服装史。

---

### 2-1. 論文

Takeda, Sachiko 他(共著), “La noblesse de l’époque de Heian :formes de vêtements, formes d’amour” Micheal Lucken(共著) 『Cipango:Autour du Genji monogatari』Publications Langues O’, pp. 277-289, 2008/2

---

### 2-2. 著書

武田佐知子他(共著) 『『聖徳太子の歴史を読む』第4章第3節『唐本御影』は聖徳太子像か』文英堂, pp. 298-320, 2008/1

武田佐知子他(共著) 『人はなぜ花を愛でるのか』第六章「花をまとい、花を贈るということ」八坂書房, pp. 130-155, 2007/3

---

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

武田佐知子 「門脇禎二さんを悼む」『朝日新聞夕刊』朝日新聞社, 2007/6

武田佐知子 「銀の道が運んだワニ」岩波書店『図書』699, 岩波書店, pp. 16-19, 2007/6

## 2-4. 口頭発表

なし

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

武田佐知子 サントリー学芸賞 思想歴史部門 1985年

武田佐知子 濱田青陵賞 1995年

武田佐知子 紫綬褒章 2003年

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-2. 2006年度～2009年度、基盤研究(A) 一般、代表者:武田佐知子

課題番号:18201052

研究題目:着衣する身体と女性の周縁化

研究経費:2007年度 直接経費 15,300,000円 間接経費 4,590,000円

研究の目的:

着衣という共通の素材を通して、特定の社会におけるジェンダーのあり方を研究し、さらに、地域間の比較を行なうことによって、最終的に、グローバルな視点から、世界における女性の周縁化を理解することを目的とする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

文部科学省 独立行政法人評価委員会 文化分科会 臨時委員

2007年10月～現在に至る

## 3. 平雅行 教授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橋女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻:日本中世史／古代中世仏教史。

### 3-1. 論文

平雅行 「鎌倉期随心院の史料紹介」『小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開』3, 平成19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究報告書, pp. 52-60, 2008/3

平雅行 「中世史像の変化と鎌倉仏教(2)」『じっきょう』66, 実教出版社, pp. 1-5, 2008/2

平雅行 「中世史像の変化と鎌倉仏教(1)」『じっきょう——地歴・公民科資料』65, 実教出版社, pp. 1-5, 2007/10

平雅行 「日本の古代中世における死の習俗」『死者の葬送と記念に関する比較文明史』日本学術振興会科学研究費補助金プロジェクト報告, pp. 1-18, 2007/6

平雅行 「中世民衆と親鸞聖人」『南御堂』538, 真宗大谷派難波別院, pp. 4-4, 2007/6

平雅行 「鎌倉幕府の将軍祈祷に関する一史料」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47, 大阪大学文学研究科, pp. 1-41, 2007/3

平雅行 「法然上人とその時代(後編)」『知恩』746, 浄土宗総本山知恩院, pp. 6-19, 2006/7

平雅行 「法然上人とその時代(前編)」『知恩』745, 浄土宗総本山知恩院, pp. 6-19, 2006/6

平雅行 「善鸞義絶状と偽作説」『史敏』(史敏刊行会), 3, pp. 1-18, 2006/4

### 3-2. 著書

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平雅行(批評)「シンポジウム「中世仏教の国際環境に寄せて」」『日本史研究』(日本史研究会), 524, 日本史研究会, pp. 52-56, 2006/4

### 3-4. 口頭発表

平雅行「出家と女性」国際シンポジウム: 仏教学を越えて——日本仏教学の新しい方向, ハーバード大学ライシャワー研究所, 2007/11

平雅行「中世仏教と呪術——呪術性と合理性——」歴史民俗博物館基幹研究 第6回研究会: 中近世における生業と技術・呪術信仰, 国立歴史民俗博物館, 2007/1

平雅行「善鸞義絶状と偽作説」大谷大学真宗総合研究所公開講演会, 大谷大学真宗総合研究所, 2006/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平雅行 大阪大学共通教育賞(2006年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

平雅行 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 平雅行

課題番号: 18520494

研究題目: 鎌倉幕府の権門寺院政策について

研究経費: 2006年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

鎌倉幕府による僧侶の人的編成や朝廷補任権への介入を具体的に明らかにすることによって、鎌倉幕府の権門寺院政策の基本的性格とその時期的偏差を解明する。これは鎌倉幕府の宗教政策研究の一環である。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

史学会・評議員	1999年11月～現在に至る
仏教史学会・評議員	1999年10月～現在に至る
日本宗教史懇話会・呼びかけ人代表	1999年8月～現在に至る
史学研究会・評議員	1990年5月～現在に至る

## 4. 村田 路人 教授

1955年生。1977年、大阪大学文学部史学科卒業。1979年、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了。1981年3月、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授を経て、1996年4月、大阪大学文学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2002年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 日本近世史。

#### 4-1. 論文

村田路人「宝永元年大和川付け替えの歴史的意義」大和川水系ミュージアムネットワーク(共著)『大和川付け替え三〇〇年——その歴史と意義を考える——』雄山閣, pp. 27-53, 2007/11

村田路人「日本近世における政治的重要人物の死と国家・社会——触穢令および鳴物停止令に関する研究の成果と課題——」江川温(共著)『死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——』pp. 19-33, 2007/6

Murata, Michihito “The death of key political figures and the State and society in early modern Japan——Research achievements and themes relating to the non-contact with impurity and ban on musical instruments decrees——” Atsushi EGAWA(共著) *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead——Relatives, Neighboring Societies and States——*, pp. 27-48, 2007/6

村田路人「江戸時代の大坂城——どのようにして城は維持されたのか——」懐徳堂記念会(共著)『懐徳堂ライブラリー7 大坂・近畿の城と町』和泉書院, pp. 69-108, 2007/5

#### 4-2. 著書

夜久野町史編集委員会編(執筆:村田路人, 原田敬一, 笹部昌利, 平良聡弘)『夜久野町史第三巻資料編Ⅱ』福知山市, 2008/3

脇田修, 大山喬平編(執筆:脇田修, 大山喬平, 村田路人ほか)『日本史B 新訂版』実教出版, 2008/1

村田路人(編著)『三浦家文書の調査と研究——近世後期北河内の医師三浦蘭阪蒐集史料——』大阪大学大学院文学研究科 日本史研究室・枚方市教育委員会, 2007/3

村田路人, 今井修平(共編著)『街道の日本史 33 大坂——摂津・河内・和泉——』吉川弘文館, 2006/7

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

村田路人「溜池」土木技術(日本の)加藤友康他編『歴史学事典 14 ものとわざ』弘文堂, p.370, pp. 451-452, 2007/6

#### 4-4. 口頭発表

村田路人「畿内近国支配論を振り返って」大阪歴史科学協議会 2006年12月例会, 梅田東学習ルーム, 2006/12

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:村田路人

課題番号:19520570

研究題目:近世における開発と災害防止・復旧システムについての研究

研究経費:2007年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

近世は、災害防止・復旧システムが、それ以前の時代に比べ、格段に整備された時代である。災害防止・復旧システムの中心は治水システムであるが、近世的な治水システムの構築の背景となったものは、近世に入ってさかんになった新田開発をはじめとする、自然に対する人間の大小の働きかけであった。また、これらを背景に構築された治水システムが、新たな自然に対する働きかけとなり、災害を引き起こす原因となることもあった。

本研究は、開発、災害、災害防止・復旧システムの三者の関係を究明しようとするものである。本研究では対象を畿内近国地域に絞り、(イ)開発と災害発生メカニズムおよびその近世的特徴の解明、(ロ)災害発生と、災害防止・復旧システムとの関係の解明、(ハ)災害防止・復旧システムと、元禄～享保期幕政改革との関連の解明、を試みる。



#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

4-7-1. 2006年度、受託研究、助成金獲得者：村田路人

助成金名：枚方市受託研究

研究題目：三浦家文書の調査と研究

助成団体名：大阪府枚方市

助成金額：2006年度 直接経費 4,500,000円

研究の目的：

枚方市立中央図書館が平成一七年度に、現三浦家当主義徳氏から借り受けた三浦家文書について、調査と整理(写真撮影、目録作成および重要史料の翻刻)を行うとともに、それを通して得られた成果、および三浦家文書に関する研究成果を掲載した報告書を作成・刊行する。

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪歴史科学協議会・庶務委員

2007年6月～2008年6月

### 5. 飯塚 一幸 准教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学修士(京都大学、1985年)。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授を経て、2007年4月より現職。専攻：日本近代史。

#### 5-1. 論文

---

飯塚一幸 「佐賀の乱の再検討——周辺の視点から——」なし(編)『九州史学』(九州史学研究会), 149, pp. 13-35, 2008/2

飯塚一幸 「日露戦後地域政治史研究の視角——京都府域を事例に——」なし(編)『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会), 263, pp. 1-13, 2007/3

#### 5-2. 著書

---

飯塚一幸, 高久嶺之介, 藤田恒春他(共編)『京都府熊野郡久美浜稲葉家資料調査報告書』第1分冊, 京丹後市教育委員会, pp. 1-582, 2008/3

飯塚一幸, 高久嶺之介, 藤田恒春他(共編)『京都府熊野郡久美浜稲葉家資料調査報告書』第2分冊, 京丹後市教育委員会, pp. 1-594, 2008/3

飯塚一幸, 高久嶺之介, 藤田恒春他(共編)『京都府熊野郡久美浜稲葉家資料調査報告書』第3分冊, 京丹後市教育委員会, pp. 1-486, 2008/3

飯塚一幸他(共著)『日本史学年次別論文集』2005年——近現代I, 学術文献刊行会, pp. 81-91, 2007/12

飯塚一幸, 長野暹, 生馬寛信他(共著)『伊万里市史近世近代編』伊万里市, 2007/3

飯塚一幸, 宮島敬一, 前山博他(共著)『伊万里市史資料編』伊万里市, pp. 411-563, 2007/3

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 5-4. 口頭発表

---

飯塚一幸 「日露戦後の舞鶴鎮守府と舞鶴西港」研究会：舞鶴近現代史研究会例会，舞鶴近現代史研究会，京都大学博物館，2008/3

飯塚一幸 「国会期成同盟第二回大会と憲法起草問題」研究会：日本近代法制史研究会第298回例会，日本近代法制史研究会，大阪大学大学院法経総合研究棟，2008/3

飯塚一幸 「書評、伊藤之雄編『近代京都の改造——都市経営の起源 1850～1918——』」部会：共同書評会，日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会・京都民科歴史部会・大阪歴史科学協議会，機関紙会館(京都市)，2007/10

飯塚一幸 「近代史研究と行政文書」シンポジウム:未来への遺産——重要文化財「京都府行政文書」の保存と活用——, 科研グループ「京都府行政文書を中心とした近代行政文書の史料学的研究」、京都府(共催), キャンパスプラザ京都, 2007/8  
飯塚一幸 「佐賀の乱後の憂国派——旧小城藩の場合——」2006年度読史会大会, 読史会, 京都大学, 2006/11

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・委員

2007年6月～現在に至る

### 6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻:日本史学/日本近現代史。

#### 6-1. 論文

北泊謙太郎 「私立有馬会と三田地域——私立有馬会に関する覚書——」三田市史編さん専門委員(監修)『市史研究さんだ』(三田市史編さん専門委員), 10, 三田市史編さん専門委員, pp. 25-36, 2008/3

北泊謙太郎 「日清戦争後における軍隊と地域社会——兵庫県下の在郷軍人団体を事例に——」歴史科学協議会(編)『歴史評論』(歴史科学協議会), 686, 校倉書房, pp. 77-95, 2007/6

#### 6-2. 著書

なし

#### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎(大会報告要旨)「日清戦争後における軍隊と地域社会——兵庫県下の在郷軍人団体を事例に——」『歴史評論』(歴史科学協議会), 679, 歴史科学協議会, pp. 93-96, 2006/11

北泊謙太郎(科学通信)「2006年「建国記念の日」不承認 2・11 大阪府民のつどい」の記録『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 185, 大阪歴史科学協議会, pp. 41-44, 2006/8

#### 6-4. 口頭発表

北泊謙太郎 「日清戦争後における軍隊と地域社会——兵庫県下の在郷軍人団体を事例に——」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立城北市民学習センター, 2007/9

北泊謙太郎 「日清戦争後における軍隊と地域社会——兵庫県下の在郷軍人団体を事例に——」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立弁天町市民学習センター, 2006/11

北泊謙太郎 「日清戦争後における軍隊と地域社会——兵庫県下の在郷軍人団体を事例に——」第40回歴史科学協議会大会 第2日目 テーマ:「歴史のなかの地域・伝統」, 歴史科学協議会, 京都薬科大学愛学館 A31講義室, 2006/11

#### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪歴史学会・編集委員

2006年6月～現在に至る

### 7. 廣川 和花 助教

1977年生。2007年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、専門分野:日本史学)単位修得退学。博士(文学、大阪大学、2008年)。大阪大学総合学術博物館研究支援推進員(2007年)を経て2008年より現職。専攻:日本近現代史。

#### 7-1. 論文

---

廣川和花 「史料が語るハンセン病史・岡山県と邑久町の試み——紹介『長島は語る・前編』・『邑久町史 史料編(下)』——」『部落問題研究』(部落問題研究所), 183, pp. 52-60, 2007/12

廣川和花 「草津町・旧「湯之沢部落」の痕跡をたどって」『ハンセン病市民学会年報』(ハンセン病市民学会), 2007, pp. 158-170, 2007/12

廣川和花 「病める者へのまなざし——猪飼隆明先生のハンセン病史研究」『待兼山史友会報』(待兼山史友会), 22, pp. 1-5, 2007/12

廣川和花 「近代日本のハンセン病問題と地域——ハンセン病自由療養地をめぐる議論を素材に——」『部落問題研究』(部落問題研究所), 176, pp. 82-112, 2006/8

廣川和花 「ハンセン病問題に関する歴史研究の現状と課題——『歴史評論』二〇〇四年一二月号特集「ハンセン病と隔離の歴史を問う」に寄せて——」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 183, pp. 11-18, 2006/4

#### 7-2. 著書

---

なし

#### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

廣川和花 「書評 藤野豊著『ハンセン病と戦後民主主義——なぜ隔離は強化されたのか』」『歴史評論』(歴史科学協議会), 694, pp. 95-99, 2008/1

廣川和花 「奥村報告を聞いて(第四〇回[歴史科学協議会]大会報告を聞いて)」『歴史評論』(歴史科学協議会), 687, pp. 86-88, 2007/7

#### 7-4. 口頭発表

---

廣川和花 「病める者へのまなざし——猪飼先生のハンセン病史研究」, 待兼山史友会, 2007/4『待兼山史友会報』22, pp. 1-5, 2007/12)

廣川和花 「戦前・戦中期大阪におけるハンセン病患者の処遇——大阪皮膚病研究所のハンセン病治療研究をめぐって——」, 疾病史研究会, 2007/2

廣川和花 「戦前期大阪におけるハンセン病患者の処遇——大阪皮膚病研究所のハンセン病治療研究をめぐって——」, 近代法

政史研究会, 大阪大学, 2006/7

**7-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

---

なし

**7-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

---

なし

**7-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**7-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

大阪歴史科学協議会・事務局長

2006年6月～2007年6月

## 2-8 東洋史学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

阪大東洋史が世界の学界の中で重きをなす研究領域は、唐宋以後の中国史、イスラム化以前の中央アジア史、そして東南アジア・海域アジア史である。いずれの領域の教員も漢文文献を根本史料にしながら、現地語史料とフィールドワークの成果を合わせた研究を行い、院生達にもそれを指導している。学部生に対しては、全員に漢文演習を課すと共に、3つの領域のいずれかの英語論文講読演習に出席させ、世界の学界の動きを学ばせている。

本専門分野の教育の中で最も特徴があるのは、「合同演習」と通称され、教員から学部生まで全員が出席を義務づけられている演習である。そこでは日本語の論文紹介、卒論・修論の中間報告など、学年に応じた研究発表・報告が求められ、とりわけ大学院後期課程学生は、東洋史学史・工具書等について入門講義を行い、学部生に裨益すると同時に、自らが教職に就いた時のための訓練を行う。全員がこの合同演習に出席するという事は、広大な領域にまたがり、時代も古代から近現代に亘る東洋史全般の発表を聞き討論するという事で、狭い専門に閉じこもるのを打破する効果がある。大学院に進学する者は、この「合同演習」に学部時代から積極的に出席し続けることによって、幅広い知識と関心を持った研究者・高度職業人に育っていき、学部だけで卒業していく者にとっても、学問の厳しさと奥深さを肌で感じながら、ここを卒業したという誇りと自信を持って社会に出ていくことになり、教育効果も絶大である。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：森安 孝夫、片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

准教授：青木 敦

助教：坂尻 彰宏

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
27	13	7	0	0	0	0	0	1

※うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	5	5	3	3	1
'07	8	0	2	3	1
小計	13	5	5	6	2

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	3	0	3
'07	3	0	3
計	6	0	6

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

2006年度

中田美絵「安史の乱後の唐朝と仏教」2007/3

主査：荒川正晴 副査：森安孝夫、桃木至朗

向 正樹「モンゴル帝国の海上進出まで——コネクション・軍事集団・海上勢力——」2007/3

主査：桃木至朗 副査：森安孝夫、青木敦

赤木崇敏「河西帰義軍節度使政権の研究」2007/3

主査：荒川正晴 副査：森安孝夫、青木敦

2007年度

坂本和子「織物に見るシルクロードの文化交流：トゥルファン出土染織資料——錦綾を中心に」2008/3

主査：森安孝夫 副査：青木敦、荒川正晴

大坪慶之「清末垂簾聽政下における清朝中央の政策決定過程」2008/3

主査：片山剛 副査：青木敦、桃木至朗

鈴木宏節「突厥可汗国の王権と展開」2008/3

主査：森安孝夫 副査：青木敦、荒川正晴



## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	2	0	0	0	0	2
'07	2	0	8	0	1	11
計	4	0	8	0	1	13

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	2	8	0	0	0	10
'07	1	5	0	0	0	6
計	3	13	0	0	0	16

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

##### 【2006年度】

鈴木宏節「三十姓突厥の出現——突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢——」『史学雑誌』115-10(史学会), pp. 1-36, 2006/10

中田美絵「唐朝政治史上の『仁王経』翻訳と法会——内廷勢力専権の過程と仏教——」『史学雑誌』115-3(史学会), pp. 38-63, 2006/3

田村健「9～10世紀におけるハザルの二重王権——統治者と支配者の関係」『アラブ・イスラム研究』5, (関西アラブ研究会), pp.55-70, 2006/9

大坪慶之・山本一・片山剛・荒武達朗「台湾収集の地形図および地籍図について」『近代東アジア土地調査事業研究』第2号, 大阪:大阪大学文学研究科, pp. 121-140, 2007/3

大坪慶之・片山剛「2006年南京市江心洲調査報告」『近代東アジア土地調査事業研究』第2号, 大阪:大阪大学文学研究科, pp. 141-156, 2007/3

##### 【2007年度】

白玉冬「于闐文 P.2741 文書所見韃靼駐地Buha:thum考」『西域文史』2, pp. 231-243, 2007/12

大澤孝・鈴木宏節「フィンランド・ヘルシンキ所蔵突厥関連史料調査簡報」, 松田孝一(研究代表者)『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究(課題番号17320113)平成17年度～19年度科学研究費補助金基盤研究(B)ニューズレター』03, 大阪:大阪国際大学, pp. 27-34, 2008/3/25

大澤孝・鈴木宏節「2006年度モンゴル国調査行動記録(突厥時代)」, 松田孝一(研究代表者)『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究(課題番号17320113)平成17年度～19年度科学研究費補助金基盤研究(B)ニューズレター』03, 大阪:大阪国際大学, pp. 49-92, 2008/3/10

大澤孝・鈴木宏節「2007年度モンゴル国調査行動記録(突厥時代)」, 松田孝一(研究代表者)『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究(課題番号17320113)平成17年度～19年度科学研究費補助金基盤研究(B)ニューズレター』03, 大阪:大阪国際大学, pp. 103-138, 2008/3/10

森安孝夫・鈴木宏節・齊藤茂雄・白玉冬・田村健「シネウス碑文テキスト再改訂版」, 松田孝一(研究代表者)『内陸アジア諸言語資料の解説によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究(課題番号17320113)平成17年度～19

- 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書』大阪：大阪国際大学, pp. 75-116, 2008/3/25
- 鈴木宏節「モンゴル国セレンゲ県発見の漢文碑文——七世紀後半のモンゴリアにおける羈縻支配関連史料」『内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究』(平成17年度—19年度科学研究費補助金・基盤研究(B)ニューズレター01, 研究代表者：松田孝一, 課題番号：17320113), pp.49-58, 2007/6
- 鈴木宏節「突厥可汗国の建国と王統観」『東方学』115, pp. 157-141 (r.p.), 2008/1
- 山本明志「元代蔵漢交通的駅路路線与臨洮」『成吉思汗与六盤山国際学術研討会論文集』 pp. 189-194, 2007/7
- 大坪慶之「台湾収集の民国期南京における旗地関係档案」『近代東アジア土地調査事業研究』第3号, 大阪：大阪大学文学研究科, pp. 79-90, 2008/3

## (2)口頭発表

### 【2006年度】

- 白玉冬「8～9世紀のタタール」日本アルタイ学会(第43回野尻湖クリルタイ), 長野県信濃町, 2006/7/16
- 田村健「ハザルのユダヤ教改宗に関する諸問題」日本アルタイ学会(第43回野尻湖クリルタイ), 長野県信濃町, 2006/7/17
- Suzuki Kosetsu “On the Tribal Composition of the Second Tüyük Qayanate: An Approach from the Turkic Inscriptions in Mongolia.” In: The 9th International Congress of Mongolists: Devoted to the 800th Anniversary of the Yeke Mongol Ulus, Ulaanbaatar/Mongolia, 2006/8/10
- 齊藤茂雄「隋末唐初における突厥の活動——第一可汗国後期のオルドの位置——」第7回遼金西夏史研究会大会, 関西大学, 2007/3/25
- 赤木崇敏「敦煌出土帰義軍時代仏教徒祈願文」第28回中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2006/9/30
- 鈴木宏節「2006年モンゴル国突厥関連遺蹟調査簡報」第28回中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2006/9/30
- 白玉冬「アブー=ドゥラフ=ミサル=イブシ=ムハルヒルの中国旅行記に見えるサンダビル」第30回中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2007/3/31
- 坂尻彰宏/佐藤貴保/赤木崇敏「張掖漢蔵合璧「西夏黒水橋碑」再考」第30回中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2007/3/31

### 【2007年度】

- 伊藤一馬「北宋後期の西北辺地域における軍事体制」第8回遼金西夏史研究会大会, 2008年3月23日(日) 於：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
- Suzuki Kosetsu “Reconsideration of the Choir Inscription”, Archaeological Research in Mongolia 1st International Conference, Ulaanbaatar/Mongolia, 2007/8/23
- 山本明志「元代蔵漢交通的駅路路線与臨洮」成吉思汗与六盤山国際学術研討会, 中華人民共和国寧夏回族自治区固原市, 2007/7/22
- 山本一「清末の幕僚について——張之洞の幕僚を中心に——」2007年度史学会大会, 東京大学, 2007/11/18
- 鈴木宏節「突厥第二可汗国の歴史観——キョル=テギン碑文東面冒頭の再検討——」2007年度史学会大会, 東京大学, 2007/11/18
- 大坪慶之「清末垂簾聽政下における東西両太后の意志決定と廷議——同治帝の祭祀をめぐって——」第22回満族史研究会大会, 神戸国際会議場, 2007/6/2

## (3)その他(書評・翻訳など)

### 【2006年度】

- 大坪慶之・片山剛「2006年度海外調査活動記録」『近代東アジア土地調査事業研究』第2号, 大阪：大阪大学文学研究科, 2007年3月, pp. 115-120.
- 大坪慶之(編)『『地政通訊』総目次～戦後編～』『近代東アジア土地調査事業研究』第2号, 大阪：大阪大学文学研究科, 2007年3月, pp. 170-207.

### 【2007年度】

大坪慶之・片山剛「2007年度海外調査活動記録」『近代東アジア土地調査事業研究』第3号, 大阪: 大阪大学文学研究科, 2008年3月, pp. 71-78.  
荒木遙介・片山剛(資料紹介)『台湾土地制度考査報告書』について『近代東アジア土地調査事業研究』第3号, 大阪: 大阪大学文学研究科, 2008年3月, pp. 91-100.

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)  
2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)  
2007年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
上谷浩一 博士後期課程修了, 大阪体育大学教養教育センター, 准教授, 2006/4  
佐藤貴保 博士後期課程修了, 新潟大学超域研究機構, 准教授, 2008/1

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

## 9. 刊行物

2006年度 『内陸アジア言語の研究』第21号(中央ユーラシア学研究会)  
青木敦『宋代判語に見る民事的立法と地價變動』(2005年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「江西～湖南を中心とした宋朝「政区」の境界に関する研究」Working and Discussion Paper Series No.1  
青木敦『宋代判語に見る民事的立法と地價變動 増補版』(2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)「江西～湖南を中心とした宋朝「政区」の境界に関する研究」Working and Discussion Paper Series No.2)  
青木敦『十二世紀地方勢力中の王朝角色——從金宋石刻、官印史料談起』2006年度科学研究費補助

金 基盤研究(B)「近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク」Working and Discussion Paper Series No.1)

片山剛編著『近代東アジア土地調査事業研究』第2号, 大阪: 大阪大学文学研究科, 2007年3月, 214p.

2007年度 『内陸アジア言語の研究』第22号(中央ユーラシア学研究会)

片山剛編著『近代東アジア土地調査事業研究』第3号, 大阪: 大阪大学文学研究科, 2008年3月, 100p.

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

1) 『内陸アジア言語の研究』の編集・出版

2) 中央アジア学フォーラムの開催; 会場は大阪大学文学部で年3回

参加人数は毎回35名~45名, 参加者の所属機関は延べ約30

中央ユーラシア学研究会(森安研究室に事務局)

『内陸アジア言語の研究』の編集・出版(第21号(2006年7月刊)日本語論文4本, 英語論文1本を掲載; 第22号(2007年7月刊)日本語論文4本, 英語論文1本, ドイツ語論文1本, 中国語論文1本を掲載)

中央アジア学フォーラム(森安研究室に事務局; 会場は大阪大学文学部)

参加人数は毎回30名~40名, 参加者の所属機関は延べ約30

2006年度 2006年4月8日(第27回)、2006年9月30日(第28回)、2006年12月16日(第29回)、2007年3月31日(第30回)

2007年度 2007年7月28日(第31回)、2007年12月22日(第32回)

海域アジア史研究会(桃木研究室に事務局; 会場は大阪大学文学部)

参加人数は毎回10名~30名, 参加者の所属機関は延べ26

2006年度 2006年4月22日、2006年4月、2006年5月27日、2006年6月24日、2006年7月21日、2006年10月20日、2006年12月23日、2007年1月15日、2007年2月21日

2007年度 2007年5月26日、2007年5月29日、2007年6月23日、2007年7月28日、2007年10月27日、2007年11月24日、2008年1月15日、2008年2月22日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

2006年度~2007年度の教育活動については、多くの院生が留学・海外資料調査・フィールドワークを経験し、成果を挙げている。例えば中国・南開大学への長期留学(博士後期課程1名)のほか、台湾の中央研究院・国史館・国立中央図書館台湾分館・国立台湾大学附属図書館や南京の第二歴史档案館・南京市档案館等での資料調査および南京郊外における農村実地調査(片山、2006.8.19~9.2、院生2名同行、2006.12.19~29、院生2名同行、2007.8.20~9.9、院生2名同行、2007.12.17~28、院生3名同行)、山西省での碑文調査、日中独シルクロード学術調査(日本側団長・森安)、モンゴルでの碑文調査、シルクロード東部地域での現地調査(森安、荒川、ほか院生等)などに、いずれも学生を同行させ、専門的研究を行わせた。後期課程の院生の場合は公費とくに科学研究費による短期の海外資料調査・フィールドワークがしやすくなり、世界のトップ

にある東洋学のレベルを維持するためには、喜ばしい状況になりつつあるが、引き続き今後の財政的支援が望まれる。

本専門分野の教育の最大の特徴は「合同演習」にあるが、その概要は各年度の『大阪大学大学院文学研究科紹介』で繰り返している通りなので、ここでは省略する。各教員が研究科全体の平均よりは多くの授業を担当し、教育には熱心に取り組んでいることだけの特記しておく。例えば森安は、この20年間以上、共通教育を含めて毎週8～9コマの授業を担当してきた。また青木は英語ゼミを一部英語で講じるなどの試みを行った。

本専門分野では史料言語としてはなによりもまず古典漢文があげられ、その読解力の向上には学部から大学院まで一貫して力を注いでいる。近年は高校での漢文履修状況にかんがみ、学部教育ではそれに対応できるカリキュラムを組んで訓練を施している。また、それにとどまらず、古代ウイグル語・トルコ語・モンゴル語・朝鮮語・チベット語・ベトナム語・タイ語など各自の必要に応じて修得の機会を提供してきた。さらに、論文用言語として英語はもちろん(学部段階では英文論著講読ゼミが全員必修)、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語の修得・向上を指導し、これらの言語の論文を読むゼミも行っている。また中国語に関しては留学生を講師にした自主ゼミによって、現地調査や留学のための会話力向上に努めている。

いまや東洋学の分野でもパソコンを使つての検索システムが脚光を浴びるようになり、かつては碩学にしか集められなかった史料群が学生レベルで簡単に収集できるようになってきている。本専門分野では『四部叢刊』などのCD-ROMを設置し、『大蔵経』などもネット検索ができるようになり、博士論文・修士論文・卒業論文作成に絶大な威力を発揮しつつある。さらに中国史、中央アジア史、東南アジア史において決定的重要性を持つ『宋会要輯稿』、『永樂大典』などの検索システムをいち早く導入し、教育に積極的に生かしている。

これと関連するものとして青木は、2001年6月より現在に至るまで、ウェブサイト「東洋史研究リンク集」を運営している。このサイトは、東アジア史を中心として、ネット上で用いることのできる文献・史料原文検索、その他有用な学術資源、東洋学関連の有用な個人・団体ページへのリンクを網羅的に収集するとともに、研究会の案内を随時載せ、阪大東洋史学生のみならず世界の東洋史学徒のインターネット利用の導き手となっている。日本・台湾を中心として、時にはスペインやモンゴル・カンボジアなどを含め、一日100前後のアクセスを記録しており、またその掲示板は、実名による中国史研究者の学術的討論の場となっている。サイトは台湾の中央研究院、日本の東京大学東洋文化研究所などの公式サイト、各大学東洋史学研究室の公式サイトや国立大学図書館、研究者のブログなど東洋学関係の多くのサイトからリンクされている。ここ数年Googleなどの検索サイトで「東洋史」「東洋史研究」と入力すれば1～2番目にランクされている。

この2年間では引き続き、COEの最終の2年度として、東洋史の桃木・森安両教授らを中心として、「世界システムと海域アジア交通」班を運営した。その際には海域アジア史研究会や中央アジア学フォーラムという学内外の研究会活動とも連動させて、COE事業を院生の教育に資することができた。特に第四回全国高等学校歴史教育研究会において森安・桃木が講演したが(2006.8.1～8.3)、しかしなんとといっても同班の活動のハイライトは、大学側が主宰者となる高校歴史教育研究会の継続的開催であり、それはメディアでも多く取り上げられた。もちろん、ここにも多数の院生を参加させることにより、大きな教育効果があげられた。

さらに2005年度に開始された「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の取り組み担当者となった桃木は、「大阪大学歴史教育研究会」において大学院学生を訓練し、学内外の評価を得ている。

## 12-2. 研究活動

大阪大学の東洋史関係スタッフは6名(うち助教1名)であり、研究対象範囲をパミール以東でインドを含まないアジアと明確に設定している。これは一見するとマイナス要素のようであるが、2002年度の外部評価でも述べられたように、スタッフ全員がアジア史さらには世界史全体への関心と視野を持ちつつ研究・教育を行っており、阪大東洋史の地位は今や国内のみならず海外からも評価され、揺るぎなきものとなっている。同評価で杉山正明・京都大学教授が指摘されたように、森安と荒川が担当するイスラム化以前の中央アジア史・北アジア史は、世界の中でも屈指の拠点を形成しつつある。中央アジア史、中国史、東南アジアないしアジア海域史の3分野が相互の連関と世界史への位置づけを強く意識していることは、本専門分野の教育・研究の最大の特徴である「合同演習」や、21世紀COEの一環として開催した全国初の画期的な全国高校歴史教育研究会という形に収斂しているといえよう。このように、教室全体として研究に取り組んでい



るが、以下とくに中心となった教員別に研究活動の成果を記す。

森安は平成 17 年度～20 年度にわたる科学研究費補助金(基盤研究 A)「シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相」の一環として、学内・学外の研究者・院生を多数率いてシルクロード東部地域の考査旅行(2006.8.10～9.14 および 2007.8.11～9.10)を行った。また専門論文を日本語で 2 本、英語で 3 本発表した。

森安が 2007 年 2 月に講談社より出版した『シルクロードと唐帝国』は、森安自身の研究成果を中心に諸研究を総合し、原史料を豊富に引用するという異色の構成で、一般向けとはいえかなり高度な概説書であるが、従来の唐帝国の概念を根底的に覆すものとして反響を呼んだ。特に「朝日新聞」において著者インタビューが行われ、「日経」「読売」「赤旗」のほか、共同通信配信により「秋田魁新報」「北日本新聞」「北国新聞」「山陽新聞」「琉球新報」その他にも書評が掲載された。さらに「福井新聞」「日刊ゲンダイ」などその他にも紹介されており、わが国の世界史理解に貢献した。

片山は 2005 年度に引き続き科学研究費補助金の研究課題「1930 年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用」(基盤研究(A), 2005～2008 年度)を研究代表者として遂行し、ワークショップ「近代東アジア土地調査事業研究」(2006.12.2～12.3 および 07.11.24～25)を毎年企画するとともに、研究成果を発表している。また国際シンポジウム「区域社会と文化類型」(上海:上海大学, 2007 年 6 月)に招かれて研究報告を行ったほか、国内シンポジウムでも研究成果を発表している。なお 2006 年 6 月 14 日と 07 年 1 月 17 日には、それぞれ台湾と大陸の明清史研究者を招いて「明清史国際講演会」を開催し、また 2006 年 10 月 19 日と 07 年 10 月 24 日には、いずれも中国社会科学院経済研究所の中国経済史研究者(06 年 3 名、07 年 4 名)を招いて「中国経済史研究会」を開催した。

荒川は、上記「教育活動」欄で述べた、シルクロード東部地域の考査旅行(2006.8.10～9.14)及び日中独シルクロード学術調査(07.8.11～9.10)に参加し、吉木薩爾、烏魯木齊、吐魯番、敦煌等で文書・遺跡・地形調査において、成果を上げた。

また荒川が代表を務める科学研究費補助金(基盤研究 B)「コータン出土文書の総合的研究」(平成 18～20 年度)による海外調査の一環として、2006 年度(2006.3.3～3.12)にはサンクトペテルブルクの東洋学研究所において、次いで 2007 年度(2007.12.16～12.26)にはロンドンの大英図書館において、コータン出土文書の調査を行った。

桃木はシンガポール大学アジア研究所にて開催されたアジア広域史のワークショップに招待され、報告を行った(2006.5.12～13)。21 世紀 COE プログラム「世界システムと海域アジア交通」班の代表として、2004 年度に引き続きシンガポール国立大学アジア研究所との協力を推進し、長崎で共同ワークショップ「躍動する周辺と開かれた中心」を開催した(2006.10.27～28)。また 2004 年度に引き続き、代表者として科研基盤研究(B)「近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク」にかかわる諸研究を行い、特に東洋史教室においては小規模国際シンポジウム「サブシステムとしての中国」(2006.7)を開催した。

青木は 2005 年度より引き続き特定領域研究の中の「中国の法文化の特質、変化、および地域的差異に関する研究」の研究代表者として、活動を行った。特に、東京の財団法人・東洋文庫において『宋会要輯稿』・『鶏肋編』関係の研究を継続して行い、さらに内外の研究者を招いての国際シンポジウムを台北において開催した(2006.12.17)。台湾・清華大学・歴史学科において講演会を行い(2006.12.11)、韓国において学術発表を行う(2007.12.8)など、主として近隣各国において中国語による学術活動を行った。更に、採択率 7%であったトヨタ財団研究助成プログラムにおいて 2007 年 9 月研究助成対象として採択された研究「文字を惜しむ—近世東アジアにおける「惜字亭」建設と惜字慣習の展開」を、共同研究者李季樺博士と開始し、各地での調査を行っている(2008 年 3 月)。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006 年度～2007 年度の過去 2 年間)

#### 1. 森安 孝夫 教授

1948 年生。1972 年、東京大学文学部東洋史学科卒。1975 年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻修士課程修了。1981 年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程単位修得退学。1982 年、金沢大学文学部助教授。1984 年、大阪大学文学部助教授。1994 年、大阪大学文学部教授。1998 年、大阪大学大学院文学研究科教授。博士(文学、大阪大学)。専攻:東洋史学/中央ユーラシア史/敦煌学/トゥルファン学。



## 1-1. 論文

Moriyasu, Takao, "Epistolary Formulae of the Old Uighur Letters from Central Asia." *Acta Asiatica* 94, 東方学会, pp. 127-153, 2008/2

Moriyasu, Takao, "Japanese Research on the History of the Sogdians along the Silk Road, Mainly from Sogdiana to China." *Acta Asiatica* 94, 東方学会, pp. 1-39, 2008/2

森安孝夫 「唐代における胡と仏教的世界地理」『東洋史研究』66-3, 東洋史研究会, pp. 1-33, 2007/12

森安孝夫 「西ウイグル仏教のクロノロジー——ベゼクリクのグリユンヴェーデル番号第8窟(新番号第 18 窟)の壁画年代再考——」『仏教学研究』62・63(合併号), 龍谷仏教学会, pp. 1-45, 2007/7

## 1-2. 著書

森安孝夫 『シルクロードと唐帝国』(興亡の世界史, 第5巻)講談社, 396p., 2007/2

## 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 1-4. 口頭発表

森安孝夫 「唐代における胡と仏教的世界観」東方学会第 57 回全国会員総会, 東方学会, 日本教育会館(東京都千代田区), 2007/11

森安孝夫 「シルクロードの歴史的意義とソグド人」湖南省立甲西図書館講座, 滋賀県甲西市立図書館, 2007/10

森安孝夫 「唐詩の胡姫はソグド美人なり」白鶴美術館講演会, 神戸市白鶴美術館, 2007/10

森安孝夫 「中央ユーラシアから世界史を再構成する試み——ユーラシア世界史から見た唐帝国——」神奈川県高等学校教科研究会平成 18(2006)年度社会科部会歴史分科会春季講演会, 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会, かながわ県民センター(横浜市), 2007/3

森安孝夫 「日唐文化交流の成果より見るユーラシア世界地理と「胡」の実態」第 12 回大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学歴史教育研究会(桃木至朗主宰), 大阪大学, 2007/1

森安孝夫 「モンゴル帝国出現の世界史的意義——中央ユーラシアから見る世界史——」横浜ユーラシア文化館シンポジウム「オロンスム文書」, 横浜ユーラシア文化館・横浜市教育委員会, ZAIM 別館ホール, 2006/12

森安孝夫 「西ウイグル仏教のクロノロジー——ベゼクリク第8窟(最新番号 18 窟)の壁画年代再考——」中央アジア学フォーラム(第28回), 中央ユーラシア学研究会, 大阪大学, 2006/9

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森安孝夫 コレージュ・ド・フランス招待教授記念メダル, コレージュ・ド・フランス(パリ), 2003/5

森安孝夫 大阪大学共通教育賞(第2回), 大阪大学共通教育機構, 2003/5

森安孝夫 東方学会賞(第7回), (財)東方学会, 1988/11

森安孝夫 流沙海西奨学会賞(第8回), 江上波夫記念流沙海西奨学会, 1975/11

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:森安孝夫

課題番号:17202018

研究題目:シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相

研究経費:2006 年度 直接経費 9,800,000 円 間接経費 2,940,000 円

2007 年度 直接経費 9,300,000 円 間接経費 2,790,000 円

研究の目的:

シルクロード東部地域から出土した碑銘・文書や遺品の原物調査に加え, 史跡・遺跡の現地調査によって, シルクロードによる

人・物・情報の移動の実態と、それによって活性化された文化交流や社会変動の諸相を解明することを目的とする。従来の漢籍やイスラム文献のような「外縁」の編纂史料から引き出された概括的見方を越えて、現地出土の多言語の文書を精密に解読・分析することによって、前近代のシルクロード東部地域における多民族・多言語・多宗教の人々の営みが、文字通りシルクロードと密接に結びついていたことを示したい。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

東方学会・理事	2003年9月～現在に至る
東洋史研究会・評議員	2001年11月～現在に至る
内陸アジア史学会・常任理事	1994年11月～現在に至る
日本モンゴル学会・理事	1987年5月～現在に至る

## 2. 片山 剛 教授

1952年生。1981年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士(東京大学)。1981年高知大学人文学部講師、1984年同助教授、1989年大阪大学文学部助教授、1996年同教授を経て、1998年4月より現職。専攻:中国近世/近代史。

### 2-1. 論文

---

片山剛「広東人誕生之謎:従伝説和史実之間来考察」中国地理学会歴史地理専門委員会『歴史地理』編委会(編)『歴史地理』(中国地理学会), 21, 上海人民出版社, pp. 415-431, 2006/5

### 2-2. 著書

---

片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 100p., 2008/3

片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』2, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 214p., 2007/3

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

片山剛(事典項目)「戸籍/土地台帳2(中国)」川北稔(編)『歴史学事典 13 所有と生産』弘文堂, pp. 193-194, 2006/4

### 2-4. 口頭発表

---

片山剛「中国における「近代」「国民」国家への志向をめぐって:土地調査事業と土地改革」第1回セミナー:現代中国学の新たなプラットフォーム, 大阪大学中国文化フォーラム, 大阪大学中之島センター, 2008/3

片山剛「1930年代広東省土地調査事業と郷の境界画定:「村の土地」の存否をめぐって」ワークショップ:第2回近代東アジア土地調査事業研究, 大阪大学, 2007/11(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3, pp. 31-50, 2008/3)

片山剛「珠江三角洲地区“漢族社会”的形成及其社会、文化特徴」国際シンポジウム:区域社会与文化類型, 上海大学, 2007/6

片山剛「1947年前後作製の南京江心洲の地籍図と農村社会」国際ワークショップ:近代東アジアの土地調査事業研究, 大阪大学文学研究科, 2006/12(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』2, pp. 63-76, 2007/3)

片山剛「1947年測繪の南京江心洲の地籍図与農村社会」講演, 南京大学歴史系, 2006/12

片山剛「華南“漢族社会”的形成及其特色」講演, 復旦大学中国歴史地理研究所, 2006/9

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(A) 海外、代表者:片山剛

課題番号:17251006

研究題目:1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用

研究経費:2006年度 直接経費 4,800,000円 間接経費 1,440,000円

2007年度 直接経費 5,700,000円 間接経費 1,710,000円

研究の目的:

東アジアにおける近代的土地調査事業は、日本内地を嚆矢として、沖縄、台湾、朝鮮半島と続き、1930年代に大きな波が中国大陸に押し寄せる。中国でも近代的な測量・製図技術の浸透に伴い、地籍図や土地台帳が作製されていった。だが、調査事業で作製された地図や台帳のうち、大量の現存を確認できるのは1930年代広東省の土地台帳のみである。本研究は、この土地台帳を主要資料としつつ、他省における同様の資料の探索・収集も進め、第一に、中国における近代的土地調査事業の特徴を考察し、第二に、収集資料の中からデータが比較的豊富かつ完備している郷を選定して、農村の空間的構成を復原し、第三に、中国での実地調査による知見も加えて、20世紀前半の中国農村の“細密画”を描き出すことを最終的目標とする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

史学会・評議員

2001年10月～現在に至る

中国史学会・評議員

2001年4月～現在に至る

## 3. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士(早稲田大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。専攻:中央アジア古代史、敦煌・トゥルファン文書研究。

### 3-1. 論文

---

Arakawa, Masaharu, “Sogdians and the Royal House of Ch’ü in the Kao-ch’ang Kingdom” Takao Moriyasu(ed.) *Acta Asiatica(Bulletin of the Institute of Eastern Culture)*, 94, The Toho Gakkai(The Institute of Eastern Culture), pp. 67-93, 2008/3

荒川正晴 「麹氏高昌国の王権とソグド人」福井重雅先生古稀・退職記念論集刊行会(編)『古代東アジアの社会と文化』汲古書院, pp. 337-362, 2007/3

荒川正晴 「遊牧民とオアシス民の共生関係とは何か:西突厥と麹氏高昌国のケースから」桃木至朗(編)『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』(科研研究成果報告書), pp. 28-48, 2007/3

Arakawa, Masaharu, “Oasis States and Caravan Trade in Central Asia during Pre-Islamic Times(c. 3-9C.)” Tsuyoshi Katayama(ed.) *Course Records “History, Manners and Customs, and Interchange-Asia and Japan-” in the Osaka University Short-term Student Exchange Program(OUSSEP)2006 Fall Semester,*, (Comparative Studies of Regional Societies, Graduate School of Letters, Osaka University), pp. 56-69, 2007/3

荒川正晴 「北朝隋唐初の在俗仏教信徒と五道大神」加地伸行博士古稀記念論集刊行会(編)『中国学の十字路口』研文出版, pp. 509-523, 2006/4

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

荒川正晴 「遊牧民とオアシス民の共生関係とは何か？——西突厥と麴氏高昌国のケースから——」内陸アジア出土古文献研究会例会、内陸アジア出土古文献研究会(東洋文庫), 2007/7

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 流砂海西奨学会賞, 流砂海西奨学会, 1986/12

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 海外、代表者: 荒川正晴

課題番号: 18401022

研究題目: コータン出土文書の総合的研究

研究経費: 2006年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

2007年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

本研究計画の目的は、コータンより出土した文書に焦点をあて、まずは古書学的手法に則りそれらを歴史史料として利用できる段階にまで整理・研究することにある。既に研究に付されている文書も含まれているが、これについても文書自体に関する分析はいまだ十分とは言えず、全面的に見直してゆく必要がある。このため、これらの文書が所蔵されている図書館・研究所に赴いて、対象とする文書を丹念に実見する必要がある。ただし、コータンからは、現地の言語であるコータン語文書や漢文文書およびソグド語・チベット語文書、そして漢語とコータン語とのバイリンガル文書が数多く出土しており、上記の目的達成には漢語文書の専門家と胡語文書の専門家との協力が不可欠である。文書調査を主体とするといえども、共同で作業を進める所以である。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会・監事

1995年4月～現在に至る

## 4. 桃木 至朗 教授

1955年生。1984年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。京都大学東南アジア研究センター助手、大阪外国語大学外国語学部専任講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授を経て2001年4月より現職。専攻: 東南アジア史/アジア海域史。

### 4-1. 論文

桃木至朗, 山内晋次, 藤田加代子他(共著) 「総説 海域アジア史のポテンシャル」桃木至朗・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志(共編著)『海域アジア史研究入門』岩波書店, pp. 1-12, 2008/3

中島楽章, 桃木至朗(共著) 「「交易の時代」の東・東南アジア」桃木至朗・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志(共編著)『海域アジア史研究入門』岩波書店, pp. 90-97, 2008/3

桃木至朗 「総論 歴史学の危機と21世紀の挑戦」桃木至朗(編)『インターフェイスの人文科学研究報告書 2004-2006 第4巻世界システムと海域アジア交通』大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」, pp. 9-34, 2007/1

### 4-2. 著書

桃木至朗, 山内晋次, 藤田加代子他(共編著) 『海域アジア史研究入門』岩波書店, 292p., 2008/3

桃木至朗 『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』大阪大学文学研究科, 158p., 2007/3

桃木至朗(編) 『インターフェイスの人文科学研究報告書 2004-2006 第4巻世界システムと海域アジア交通』大阪大学 21世紀 COE

プログラム「インターフェイスの人文学」, 273p., 2007/1

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 4-4. 口頭発表

---

桃木至朗 「われわれは《世界史》をどう語るのか」日本西洋史学会第 57 回大会:小シンポジウムIV「歴史教育への現代的アプローチ——歴史学者、社会科教育学者、実践家の立場から——, 日本西洋史学会, 朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター), 2007/6(pp. 87-87, 2007/6)

Momoki, Shiro, Hasuda Takashi“A Review of the Periodization of Southeast Asian Medieval/Early Modern History, in Comparison with That of Northeast Asia”The Second COE-ARI Joint Workshop:Dynamic Rimlands and Open Heartland: Maritime Asia as a Site of Interactions, Osaka University 21st Century COE Program 《Interface Himanities》 and Asia Research Institute, National University of Singapore, 長崎歴史文化博物館, 2006/10(*Proceedings of the Workshop on Dynamic Rimlands and Open Heartland: Maritime Asia as a Site of Interactions*, pp. 1-26, 2007/2)

Momoki, Shiro “The Vietnamese Empire and Its Expansion, c.980-1840.”Internaitonal Workshop:Asian Expansions: The Historical Processes of Polity Expansion in Asia, Asia Research Institute, National University of Singapore, Holiday Inn Atrium, Singapore, 2006/5

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2004 年度～2006 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桃木至朗  
課題番号:16320080

研究題目:近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク

研究経費:2006 年度 直接経費 5,600,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

近代世界史システムに包摂される以前の中近世アジア諸地域における地域システムと広域ネットワークに関して比較研究をおこなうとともに、研究動向と論点を整理し、ヨーロッパ中心主義とその裏返しとしてのアジア特定地域中心主義の不毛な対立からの脱却をはかる。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

4-7-1. 2004 年度～2006 年度、その他補助金、助成金獲得者:桃木至朗

助成金名:21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」

研究題目:世界システムと海域アジア交通

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006 年度 直接経費 2,300,000 円

研究の目的:

近現代のグローバルヒストリー、前近代の海域アジア史や中央ユーラシア史を軸に、日本史・東洋史・西洋史という既存の区分を越えた新しい歴史研究・歴史記述・歴史教育を構築する。

4-7-2. 年度、研究助成、助成金獲得者:桃木至朗

助成金名:サントリー文化財団特別研究助成

研究題目:東・東南アジアにおける「前近代」と「近代」の連続と断絶に関する理論的研究

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2006年度 直接経費 1,500,000円

研究の目的:

東～東南アジアの近世の世界史的普遍性と特殊性を理論的に検討し、歴史教育にも反映させる。

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学歴史教育研究会・代表	2005年11月～現在に至る
東南アジア学会・理事	2005年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2000年6月～現在に至る
海城アジア史研究会・代表	1993年4月～現在に至る

### 5. 青木 敦 准教授

1964年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。博士(東京大学)。東京大学東洋文化研究所助手、岡山大学文学部助教授等を経て2001年10月より現職。専攻:10-14世紀江南社会経済史。

#### 5-1. 論文

青木敦 「監司と臺諫——宋の地方官監察制度に見られる二つの型——」『東方学』(東方学会), 114, 東方学会, 2007/7

青木敦 「開発・地価・民事的法規——『清明集』に見える若干の土地典売関係法をめぐって——」『待兼山論叢』40, pp. 1-47, 2006/12

#### 5-2. 著書

青木敦 『十二世紀地方勢力中の王朝角色——從金宋石刻、官印史料談起』2006年度科学研究費補助金 基盤研究(B)「近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク」Working and Discussion Paper Series No.1, 2006/12

青木敦 『宋代判語に見る民事的立法と地價變動 増補版』2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)「江西～湖南を中心とした宋朝「政区」の境界に関する研究」Working and Discussion Paper Series No.2, 宋朝政区研究事務局出版, 2006/5

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 5-4. 口頭発表

青木敦 「有關宋代判語中出現的民事法律與其意義」中国史学会第57回学術発表会東アジア文化史の理解, 中国史学会(韓国), 2007/12

青木敦 「ニーダム・パズルと中国近世論(『歴史学研究』821号の「近世化」特集に寄せて)」, ISMC研究会, 2007/3

青木敦 「十二世紀地方勢力中の王朝角色——從金宋石刻、官印史料談起」宋代石刻史料的研析其應用方法研討會, 東吳大學, 2006/12

青木敦 「趣旨説明」法文化班主催国際シンポジウム:宋代法文化研討会 in 台北, 特定領域研究「中国の法文化の特質、変化、および地域的差異に関する研究」(課題番号:17083013), 2006/12

青木敦 「宋代の民事的法律条文の構造と日本の中世武家法(宋代民事法条の結構與日本中世武家法)」法文化班主催国際シンポジウム, 特定領域研究「中国の法文化の特質、変化、および地域的差異に関する研究」(課題番号:17083013), 2006/12

青木敦 「岸本美緒「土地市場と「找価回贖」問題」を読み宋代法典の特殊性に及ぶ(由岸本美緒「土地市場與找價回贖」問題一文、論宋代法典の特殊性)法文化班主催国際シンポジウム, 特定領域研究「中国の法文化の特質、変化、および地域的差異に関する研究」(課題番号:17083013), 2006/12

青木敦 「“健訟”的經濟論——最近日本の中国經濟秩序論的動向」大阪大学文学部座談会:中国經濟史検討会, 2006/10

青木敦 「蕃夷の武階」大阪大学小規模国際シンポジウム:サブシステムとしての中国——政治と制度の境界, 2006年度科学研究



費補助金 基盤研究(B)「近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク」, 2006/8

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:青木敦

課題番号:16520416

研究題目:江西～湖南を中心とした宋朝「政区」の境界に関する研究

研究経費:2006年度 直接経費 800,000円 間接経費 0円

研究の目的:

宋朝の実効支配領域を、地域的・社会的に確定する。

5-6-2. 2005年度～2009年度、特定領域研究、代表者:青木敦

課題番号:17083013

研究題目:中国の法文化の特質、変化、および地域的差異に関する研究

研究経費:2006年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 0円

研究の目的:

東アジア地域交流史を、法文化の観点から再検討する。

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

5-7-1. 2007年度～2009年度、その他補助金、助成金獲得者:青木敦

助成金名:トヨタ財団研究助成

研究題目:文字を惜しむ——近世東アジアにおける「惜字亭」建設と惜字慣習の展開——

助成団体名:トヨタ財団

助成金額:2007年度 直接経費 2,450,000円 間接経費 0円

研究の目的:

中国、台湾、日本、沖縄などにも存在した惜字敬紙の文化を歴史的にあとづける。

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

### 6. 坂尻 彰宏 助教

1970年生。1994年大阪大学文学部史学科東洋史学専攻卒業。2003年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学、大阪大学、2003年)。専攻:内陸アジア史、敦煌学、敦煌オアシス地域社会の研究。

#### 6-1. 論文

---

佐藤貴保, 赤木崇敏, 坂尻彰宏他(共著)「漢蔵合璧西夏「黒水橋碑」再考」『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 22, pp. 1-38, 2007/7

#### 6-2. 著書

---

なし

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 6-4. 口頭発表

---

坂尻彰宏, 佐藤貴保, 赤木崇敏 「張掖漢蔵合璧「西夏黒水橋碑」再考」第 30 回中央アジア学フォーラム, 中央ユーラシア学研究会, 2007/3

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-9 西洋史学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

一般に西洋史学の教育・研究活動においては、ある種の慣行として、古代オリエント、古代地中海世界、中世のヨーロッパ世界、近世以降のヨーロッパ、ロシア、南北アメリカ、オセアニアといった対象領域が想定されている。しかし私たちの専門分野では、こうした地理的枠を限定的なものとしてはとらえていない。歴史研究の枠組みとして真に成り立ちうるのは世界史であって、西洋史学は世界史を西洋文明のインパクトとレスポンスという相互作用から考察することに他ならないと考えるからである。

もちろん西洋史学研究は個別具体的問題の考察から始まるのであり、そこにおける中心的主張は史料分析に基礎を置くものでなければならない。時代や地域によっては史料講読だけですでに多様な語学力が必要とされる。さらにその解釈に当たっては、通史的知識はもとより、人文・社会諸科学の成果を使いこなすだけの知的容量が要求される。しかし、こうして得られた個別の知見は、さらに関係史的、比較史的な考察を通じ世界史の中で意味づけされねばならない。このことは学生にも教員にも等しく要請される課題である。

学生には、一方で個人における強い自覚と自己研鑽を伴った個別テーマへの取り組みが、他方で演習や研究会において他のテーマを研究する教員・学生と活発に議論することが求められる。指導教員による個別指導はこうした自主的努力を補うものと位置づけられている。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：江川 温、竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男

准教授：中野耕太郎、栗原 麻子

助教：戸渡 文子

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
35	16	10	0	0	0	6	0	3

※うち留学生 0 名、社会人学生 7 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	13	2	1	1	0
'07	18	1	4	3	0
小計	31	3	5	4	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	3	0	3
計	4	0	4

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

諸沢由佳「15世紀末から16世紀はじめにかけてのセビーリャの「アンダルシア商人」」2006/9

主査：江川温 副査：大内一、栗原麻子

松尾佳代子「11・12世紀ポワトゥ地方における記述史料と記憶の管理：サン・シプリアン修道院のカルチュレール編纂を手がかりに」2007/9

主査：江川温 副査：岡崎敦、栗原麻子

松田祐子「19世紀末から20世紀初頭のパリにおけるブルジョワ女性」2008/3

主査：藤川隆男 副査：竹中亨、栗原麻子

中村武司「Rulers of the Sea: Naval Commemoration and British Political Culture, c.1780-1815」2008/3

主査：秋田茂 副査：竹中亨、藤川隆男

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	4	1	0	0	0	5
'07	4	0	0	0	2	6
計	8	1	0	0	2	11

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	2	6	0	0	0	8
'07	0	6	2	0	0	8
計	2	12	2	0	0	16

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

津田博司「帝国を渡る沈黙——大戦間期カナダにおける戦没者追悼記念日——」『待兼山論叢(史学篇)』(大阪大学文学会), 40, pp. 77-102, 2006/12

紫垣聡「バイエルンにおけるポリツァイ立法の成立と都市——市場ポリツァイを中心に——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 4, pp.95-110, 2007/2

Manami Hamashita "Ethnic Minorities in Britain: The Educational Performance of Pakistani Muslims", *Public History (The Osaka University Society of Western History)*, 4, pp.77-94, 2007/2

松田祐子「ベル・エポックのフランスにおけるブルジョワ女性——結婚と離婚について——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 4, pp.40-59, 2007/2

北原靖明「トリニダードにおけるインド系住民の合意」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 4, pp.26-39, 2007/2

#### 【2007年度】

山梨淳「日本近代文学とカトリシズム——パリ外国宣教会宣教師との関係を中心に」『国際シンポジウム〈交差する文化 日本—フランス〉報告集』大阪府立大学, 2007, pp.253-262

Atsushi Yamanashi « Littérature japonaise moderne et catholicisme : Les relations entre la Société des Missions Etrangères de Paris et les écrivains japonais », Catherine Mayaux (éd.) *France-Japon : regards croisés. Échanges littéraires et mutations culturelles*, Bern: Peter Lang, 2007, pp.181-195.

水田大紀「"ティーカップ"のなかの「帝国」——1870-80年代マルタにおける政治改革と言語教育——」『歴史評論』(歴史科学評議会), 692, pp. 47-63, 2007/11

石田真衣「プトレマイオス朝エジプトにおける在地社会の変容——エドフの事例を中心に——」『奈良史学』(奈良史学会), 25, pp. 83-103, 2008/1

安井倫子「1960年代初頭フィラデルフィアにおける平等雇用をめざした黒人の闘い——アフターマティブ・アクションとコミュニティ再生」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 5, 2008/2

田中晶子「戦後西ドイツにおける「アメリカ化」——アメリカ化の概念史的検討——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 5, 2008/2

### (2)口頭発表

#### 【2006年度】

津田博司「イギリス帝国における植民地ナショナリズムと世界大戦の記憶」日本西洋史学会第56回大会(部会別自由論題報告 近・現代史部会 I), 千葉大学/千葉県千葉市, 2006/5/14

水田大紀「「天の臣民」は英国化をめざす——マルタの本国官僚任用試験実施の請願を通じて——」日本西洋史学会第56回大会(部会別自由論題報告 近現代史部会 I), 千葉大学/千葉県千葉市, 2006/5/14

Hiroshi Tsuda "Whiteness of the Fallen: War Commemoration and Boundary of the Nation in Australia", Symposium "The East and the Idea of Europe: A Dialogue between Finnish and Japanese Scholars", 京都大学/

京都府京都市, 2006/5/25

森新太「中世イタリア商人による知識の編纂と提示」第 11 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2006/6/10

Atsushi Yamanashi «Littérature moderne et Catholicisme : une étude des relations entre la Société des Missions Étrangères de Paris et les écrivains japonais» *Cultures croisées Japon – France : Colloque international et interdisciplinaire* (Université Cergy-Pontoise / Val d'Oise(France)), 2006/9/27

安井倫子「1960 年代初頭フィラデルフィアの黒人運動——草の根からのアフーマティブ・アクション——」2006 年度広島史学研究大会, 広島大学/広島県広島市, 2006/10/30

中尾恭三「ヘレニズム時代におけるサラピス崇拝伝播——デロス島を中心として——」西洋古代史研究会大会, 京都大学/京都府京都市, 2006/12/17

中村武司「急進的なウェストミンスタにおけるコクリン卿と政治文化、1807-1818 年」九州西洋史学会・2006 年度春季大会、九州大学/福岡県福岡市、2007/3/24

#### 【2007 年度】

中村武司「ネルソンの国葬——セント・ポール大聖堂における軍事顕彰とモニュメント」2007 年度史学研究学会例会, 京都大学/京都府京都市、2007/4/21

石田真衣「プトレマイオス朝エジプトにおける在地社会の変容——エドフの事例を中心に——」属州研究会, 同志社大学/京都府京都市, 2007/5/20

田中晶子「西ドイツ A P O 運動における「公共圏」——1960 年代のハンブルク S D S の広報活動——」第 12 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2007/6/2

森本慶太「20 世紀初頭スイスにおける観光政策の形成——観光局の設立とその背景——」第 12 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2007/6/2

中尾恭三「ヘレニズム時代ギリシアにおけるサラピス崇拝の受容——デロス島を中心として——」日本西洋史学会第 57 回大会 (部会別自由論題報告 古代・中世史部会), 新潟大学/新潟県新潟市, 2007/6/17

中尾恭三「前 2 世紀カイロネアにおける奴隷解放からみたサラピス神の機能と役割」2007 年広島史学研究大会, 広島大学/広島県広島市, 2007/10/28

多田愛子「14 世紀後半、列聖訴訟にみる教皇庁、訴訟発起人と信徒たち」関西中世史研究会 11 月例会・京都, 京都大学/京都府京都市, 2007/11/17

森新太「『商売の手引』にみる商人の知識編纂をめぐる都市間での考察」2007 年度九州西洋史学会春季大会, 九州大学/福岡県福岡市, 2008/3/22

### (3)その他(書評・翻訳など)

#### 【2006 年度】

津田博司(書評)「スティーブ・ブラード著、田村恵子訳『鉄条網に掛かる毛布——カウラ捕虜収容所脱走事件とその後——』オーストラリア戦争記念館、2006 年」『オーストラリア研究』(オーストラリア学会), 20, pp. 129-132, 2007/3

森新太(書評)「大黒俊二著『嘘と食欲 西欧中世の商業・商人観』名古屋大学出版会、2006 年」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 4, pp.113-117, 2007/2

森本慶太(翻訳)「W・デーメル「近世ヨーロッパから見た日本の法制度(1)」(竹中亨との共訳)『近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究 平成 16~平成 18 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書』(研究代表者 武田雅哉), pp.196-212, 2007/3

#### 【2007 年度】

米澤理奈(書評)「Shelley Baranowski, *Strength through Joy: Consumerism and Tourism in the Third Reich*, 2004」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 5, pp. 72-76, 2008/2

伊藤祐(書評)「長井伸仁著『歴史がつくった偉人たち 近代フランスとパンテオン』」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 5, pp.68-72, 2008/2



中尾恭三(翻訳)「バーバラ・レヴィック「ローマ時代の2つのプリュギア共同体 対比と補完」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 5, pp.14-33, 2008/2  
 北原靖明(翻訳)「百の悲しみの門」『キプリング インド傑作選』橋本楨矩・高橋和久編、東京:鳳書房, 2008/3

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)  
 2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 2名 大学院: 5名 (計7名)  
 2007年度 学部: 0名 大学院: 6名 (計6名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
 なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名  
 2006年度: 3名 2007年度: 1名  
 <内訳> 技術職 4名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
 その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 34名  
 2006年度: 21名 2007年度: 13名

### 9. 刊行物

2006年度 『西洋史学』221号～224号 学術雑誌(日本西洋史学会)  
 『パブリック・ヒストリー』第4号 学術雑誌(大阪大学西洋史学会)  
 2007年度 『西洋史学』225号～228号 学術雑誌(日本西洋史学会)  
 『パブリック・ヒストリー』第5号 学術雑誌(大阪大学西洋史学会)

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー(経済学研究科と共催)	2006年度～現在
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2006年度～現在
大阪大学西洋史学会	2006年度～現在
『オーストラリア研究』編集・発行	2006年度
大阪イギリス史研究会	2006年4月～2006年10月
イギリス帝国史研究会	2006年4月～2006年12月

ローラン・モレル教授講演会  
ゲルハルト・トゥール教授講演会

2007年3月5日  
2008年3月18日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2006年度

グローバルヒストリー・セミナー

第15回 2006年4月20日(世界史講座と共催) 於：待兼山会館

発表者：Harriet T. Zurndorfer (University of Leiden), 'Science without Modernization: China's First Encounter with Useful and Reliable Knowledge from Europe'

コメンテータ：片山 剛(大阪大学)

第16回 2006年5月20日 於：待兼山会館

発表者：Pierrick Pourchasse (University of Bretagne, France), 'The Consulates, an Essential Service for the World of Trade: A Comparative Approach between France and Scandinavia'

コメンテータ：玉木俊明(京都産業大学)

発表者：Wolfgang Schwentker (Osaka University), 'Globalization and Historiography: Themes, Methods and the Critique of Global History'

コメンテータ：秋田 茂(大阪大学)

第17回 2006年7月15日 於：大阪大学中之島センター

発表者：Antony G. Hopkins (University of Texas, Austin), 'Interactions between the Universal and the Local'

コメンテータ：秋田 茂(大阪大学)

第18回 2006年9月21日 於：大阪大学中之島センター(菅科研研究会と共催)

発表者：Ilya V. Gaiduk (Russian Academy of Sciences, Institute of World History), 'The Cold War: New Approaches, New Documents'

コメンテータ：菅 英輝(西南女学院大学)

第19回 2006年10月6日 於：京都産業大学(京都産業大学経済学部と共催)

発表者：Lars Magnusson (Uppsala University, Sweden), 'Proto-industrialization in Sweden: Context and Consequences'

コメンテータ：斉藤 修(一橋大学), 'Proto-industrialization' in the Light of a Recent Debate in Global Economic History'

第20回 2006年10月30日 於：待兼山会館 (世界史講座と共催)

'Time, Space, and Economic Institutions of Early-Modern Maritime Asia'

発表者：R. Bin Wong (UCLA Asia Institute), 'Maritime Asia in the Longue Duree: Institutional Change in Regional Focus'

発表者：George Bryan Souza (National University of Singapore), 'A Global History of the Political Economy of Commerce and Commodities in Asia and the Early Modern World? An Introduction'

第21回 2007年2月17日 於：千里中央・阪急千里朝日ビル (大阪外国語大学「現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境」特別研究IIプロジェクトと共催)

「中華人民共和国の60年を問う——日本における中国研究の到達点——」

発表者：毛里和子(早稲田大学)「当代中国外交研究のための覚え書」

コメンテータ：西村成雄(大阪外国語大学)

発表者：高原明生(東京大学)「成長か均衡か——中華人民共和国の経済政策論争と中央・地方関係」

コメンテータ：許 衛東(大阪外国語大学)

発表者：山田辰雄(放送大学)「歴史のなかの中華人民共和国」

コメンテータ：田中 仁(大阪外国語大学)

2007年度

グローバルヒストリー・セミナー

第22回 2007年5月12日 於：大阪大学中之島センター

発表者：J. Forbes Munro (Professor, University of Glasgow), 'Diaspora and Newworks: Scottish Merchants in Nineteenth Century Asia'

発表者：Tomotaka Kawamura (Associate Professor, Toyama University), 'British Business and Empire in Asia: The Eastern Exchange Banks, 1851-63'

第23回 2007年5月19日 於：大阪大学中之島センター(南アジア学会・関西支部との共催)

発表者：Kenneth Pomeranz (Professor, University of California, Irvine), 'Long-Term Development Paths in East Asia and South Asia'

第24回 2007年7月20日 於：待兼山会館

発表者：Mark Metzler (Associate Professor of History and Asian Studies, University of Texas, at Austin), 'Writing Global History: How are we to understand the international cycle of reform and reaction in the late nineteenth century?'

第25回 2007年10月8日 於：大阪大学中之島センター

発表者：Michael North (Department of History, Ernst Moritz Arndt University Greifswald), 'The Baltic Region in the World Economy'

第26回 2008年3月5日 於：大阪大学豊中キャンパス・法経大学院総合研究棟(大阪大学経済史・経営史研究会との共催)

発表者：Sven Beckert (Professor of American History at Harvard University, USA), 'Empire of Cotton: A New Global History'

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

大学院生に対しては、学内での教育・研究を支援するだけでなく、海外留学を奨励し、毎年3名～5名が常時留学している状況にある。これらの学生に対する財政的な支援は今後の課題の一つであろう。西洋史専門分野は、社会人学生や他大学の学生の受け入れにも熱心であるが、スタッフの不足は深刻である。さらに、IT教育の充実と研究への利用を重要な目標とし、データベースの作成とウェブ上での公開を教育・研究活動の一部としている。100万字を越えるデータを西洋史ホームページ上で検索可能であり、英文のデータベースの作成も行っている。

### 12-2. 研究活動

西洋史研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、イギリス帝国史研究会、「世界システムと海域アジア交通」研究会(阪大 COE)、「グローバルヒストリー・セミナー、ワークショップ」(阪大、サントリー文化財団、JFE21世紀財団、村田学術振興財団の後援)などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の結節点としての役割を果たしてきた。共同研究機関のごとき役割を果たせるのは、スタッフの高い能力と、外部の研究者の高い評価を示唆している。また、日本西洋史学会の代表者や編集委員、日本歴史学協会や史学会、史学研究会、日仏歴史学会の役員を提供し、西洋史学界を支えてきた。

西洋史研究室のスタッフは、個人として個別研究に注力するのだけではなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のための作業にも積極的に参加している。それぞれ個人を見ると、江川は中世フランスを中心に王権論、貴族の社会関係、キリスト教と民衆文化に関する研究でユニークな視点を提供し、竹中は日独関係の研究を文化移転論など他領域に拡大する一方、国際的な場で成果を発表している。また、西洋史学会で西洋史研究のあり方に問題提起をしたのは記憶に新しい。秋田はアジア国際秩序を中心に、新たな関係史的な視点からグローバルヒストリーの構築をめざしている。また、外国人研究者を招いた国際セミナー(ワークショップ)を実施するとともに

に、シンガポール国立大学、リヴァプール・ジョンムーア大学、ハーヴァード大学、中山大学での国際会議 や Association of Asian Studies (AAS) や Global Economic History Network (GEHN)の研究ワークショップ、国際歴史学会等で研究成果を発表している。藤川はオーストラリア史の著書を出版するほか、白人研究に関する本を出版するなど、広範な領域で活動している。栗原は、社会史の立場から古代民主制の見直しを進めている。中野はナショナリズム、移民問題を中心にアメリカ社会史研究の成果を発表するとともに、民主主義や自由主義を対象とする思想史的考察にも積極的に取り組み、研究の幅を広げようとしている。戸渡は老人史を専門としているが、ジェンダー分析を導入した研究を行う一方、日英歴史学会等で研究成果を発表している。これらの研究活動は、各種の科学研究費だけではなく、松下国際財団・サントリー文化財団、JFE21世紀財団、村田学術振興財団などの支援などのかたちで社会的評価を受けている。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 江川 温 教授

1950年生。1979年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て、1996年教授。2004年4月より放送大学客員教授。専攻:西欧中世史。

##### 1-1. 論文

江川温 「中世フランス国王の葬儀と墓」、江川温(編)『死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——』(基盤研究(A)報告), 江川温, pp. 84-98, 2007/6

Egawa, Atsushi, “Funerals and Graves of Kings in Medieval France: Research Trends”, Egawa, Atsushi (ed.), *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead: Relatives, Neighboring Societies and States*, (A report of research project subsidized by Grants-in-Aid for Scientific Research), pp. 106-122, 2007/6

江川温 「君主記念の施設——日仏比較史の試み」『公家と武家 III 王権と儀礼の比較文明的考察』思文閣出版, pp. 426-442, 2006/11

江川温 「歴史の風 死の比較史的研究」『史学雑誌』115-9, 史学会, pp. 38-40, 2006/9

江川温 「西欧中近世における権力者の彫像——フランスを中心に」『歴史と地理 世界史の研究』207, 山川出版社, pp. 1-14, 2006/5

##### 1-2. 著書

江川温(編)『死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——』(基盤研究(A)報告) 江川温, 2007/6

Egawa, Atsushi (ed.), *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead: Relatives, Neighboring Societies and States*, (A report of research project subsidized by Grants-in-Aid for Scientific Research), 2007/6

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

##### 1-4. 口頭発表

なし

##### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

##### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(A) 一般、代表者:江川温

課題番号:16202012

研究題目:死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——

研究経費:2006年度 直接経費 2,000,000円 間接経費 600,000円

研究の目的:

古代から現代にいたる諸文明の葬送と死者記念を比較史的に検討し、人類の死と死者への対処における多様性と共通性を明らかにする。

1-6-2. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:江川温

課題番号:19520628

研究題目:フランス封建社会と神の平和運動

研究経費:2007年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

フランス11, 12世紀における神の平和・休戦の運動の起源と各地方における展開を分析することを通じて、この時期のフランスにおける公的秩序観念の展開を明らかにする。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

史学会・評議員	2005年10月～現在に至る
日本西洋史学会・代表	2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2004年4月～現在に至る
日仏歴史学会・理事	2003年4月～現在に至る

## 2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。博士(文学、京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻:近代ドイツ史。

### 2-1. 論文

竹中亨 「明治のワーグナー・ブーム」『大阪大学大学院文学研究科紀要』48, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 33-65, 2008/3

竹中亨 「ジューメンス社の対日事業」工藤章、田嶋信雄(編)『日独関係史1890～1945』第1巻、東京大学出版会, pp. 221-264, 2008/1

竹中亨 「歴史学の誕生」須藤訓任(編)『反哲学と世紀末』中央公論新社, pp. 100-103, 2007/8

竹中亨 「鉄道網・金融市場の発達——深刻な社会変動」須藤訓任(編)『反哲学と世紀末』中央公論新社, pp. 103-106, 2007/8

竹中亨 「一九世紀ヨーロッパの国境と国籍」須藤訓任(編)『反哲学と世紀末』中央公論新社, pp. 603-604, 2007/8

竹中亨 「明治期の洋楽留学生と外国人教師——ドイツとの関係を中心に」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-25, 2007/3

竹中亨 「転換期におけるドイツの日本観——諷刺雑誌の挿画を材料に」武田雅哉(編)『近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究』pp. 108-126, 2007/3

Takenaka, Toru, "Geschichtsbild des modernen Deutschlands in der japanischen Historiographie" Korean Society of German History/Dept. of History Education, Daegu Univ.(eds.) *International Conference on Reception of German History in East Asia*, pp. 85-93, 2006/12

### 2-2. 著書

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

竹中亨, 森本慶太(共訳)(翻訳)「W・デーメル「近世ヨーロッパから見た日本の法制度」」武田雅哉(編)『近代の日本・西洋・中国における外国人イメージの総合的研究』pp. 196-212, 2007/3

竹中亨(書評)「滝田毅『エルザスの軍民衝突——「ツァーベルン事件」とドイツ帝国統治体制』』『週刊読書人』2006年12月15日号, pp. 3-3, 2006/12

竹中亨(書評)「山名淳『無限のドイツ田園都市——教育共同体ヘレラウの挑戦』』『社会経済史学』72-4, 社会経済史学会, pp. 509-511, 2006/11

竹中亨(書評)「D・キャナダイン編著『いま歴史とは何か』』『西洋史学』221, 日本西洋史学会, pp. 76-77, 2006/6

## 2-4. 口頭発表

---

Takenaka, Toru “Die Domestizierung fremder Musik. Zur Entstehung der Musikästhetik im modernen Japan”: Wissenschaft zwischen den Kulturen. Wie Deutschland und Japan voneinander lernten: Historische Aspekte und Aktuelle Entwicklungen, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, 2008/3

Takenaka, Toru “New Approaches of Historical Western Studies in Osaka” Roundtable on Asian and World History: “Beyond National History”, Asian Research Institute, Singapore National University, 2007/5

Takenaka, Toru “Geschichtsbild des modernen Deutschlands in der japanischen Historiographie” International Conference on Reception of German History in East Asia, Korean Society for German History/Dept. of History Education, Daegu Univ., 2006/12

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

竹中亨 大阪大学共通教育賞(2005年度第1学期), 大阪大学大学教育実践センター, 2005/12

竹中亨 Annual Report 論文100選, 大阪大学, 2005/11

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:竹中亨

課題番号:19320118

研究題目:近代化過程における宗教の再活性化の比較的研究

研究経費:2007年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

従来、宗教は近代化の進展とともに衰退するとの見方が一般的であった。しかし、19世紀後半には、世界各地で宗教の再活性化の現象が確認できる。本研究は、世界各国における事例を比較史的に考察して、宗教の再活性と近代化の関連を分析する。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

2-7-1. 2007年度～2007年度、その他補助金、助成金獲得者:竹中亨

助成金名:大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育実践支援)

研究題目:エラスムス協定運営のための教育実践調査

助成団体名:文部科学省

助成金額:2007年度 直接経費 10,000,000円

研究の目的:

ヨーロッパの大学における先進的な教育実践を現地調査することで、本学で計画中のエラスムス協定に関連する授業の質の向上をはかり、ひいてはわが国の高等教育の質向上に寄与する。

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本西洋史学会・主任編集幹事

2006年4月～2008年3月



### 3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学、2003年)。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻:イギリス帝国史、アジア国際関係史、グローバルヒストリー。

#### 3-1. 論文

Akita, Shigeru, “Creating Global History from Asian Perspectives: Introduction”, Shigeru Akita(編)『グローバルヒストリーの構築とアジア世界』(平成17-19年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書), 大阪大学文学研究科, pp. 1-11, 2008/3

Akita, Shigeru, “The East Asian International Economic Order and the Sterling Area from the 1930s to 1950s”, Shigeru Akita(編)『グローバルヒストリーの構築とアジア世界』(平成17-19年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書), 大阪大学文学研究科, pp. 187-202, 2008/3

秋田茂 「グローバルヒストリー研究と南アジア」『南アジア研究』(日本南アジア学会), 19, 日本南アジア学会, pp. 132-137, 2007/12

秋田茂 「1930年代のイギリス「非公式帝国」と東アジア世界」『ヨーロッパ文化研究』(東北学院大学ヨーロッパ文化研究所), 8, 東北学院大学ヨーロッパ文化研究所, pp. 185-232, 2007/3

Akita, Shigeru, “Creating Global History from Asian Perspectives: Introduction”, Shigeru Akita(編) *Creating Global History from Asian Perspectives: Proceedings of Global History Seminars and Workshops*, (The 21st Century COE Program: Interface Humanities, ‘Global History and Maritime Asia’), 2004-2006, Osaka University, pp. 1-8, 2007/3

Akita, Shigeru, “The East Asian International Economic Order in the 1950s”, Shigeru Akita(編) *Creating Global History from Asian Perspectives: Proceedings of Global History Seminars and Workshops*, (The 21st Century COE Program: Interface Humanities, ‘Global History and Maritime Asia’), 2004-2006, Osaka University, pp. 89-108, 2007/3

秋田茂 「特集第20回国際歴史学会議シドニー大会 個別テーマ7:経済的グローバル化——歴史的展望と研究状況」歴史学研究会『歴史学研究』(歴史学研究会), 815, 青木書店, pp. 57-61, 2006/6

#### 3-2. 著書

秋田茂, 桃木至朗他(共著)『海域アジア史研究入門』岩波書店, pp. 158-166, 2008/3

秋田茂, 西村成雄, 田中仁他(共著)『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』汲古書院, pp. 193-208, 2008/3

Akita, Shigeru, Patrick Manning(共著), *Global Practice in World History: Advances Worldwide*, Markus Wiener Publishers, pp. 57-68, 2008/2

秋田茂, 渡辺昭一他(共著)『帝国の終焉とアメリカ——アジア国際秩序の再編』山川出版社, pp. 134-165, 2006/5

#### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(翻訳)「N.J.ホワイト「帝国の残影 イギリスの影響力と東南アジアの脱植民地化」渡辺昭一(訳)『帝国の終焉とアメリカ——アジア国際秩序の再編』山川出版社, pp. 106-133, 2006/5

#### 3-4. 口頭発表

Akita, Shigeru, “World History and the Creation of a New Global History: Japanese Perspectives”, Global History, Globally: International Conference, Department of History, Harvard University, Harvard University, 2008/2

Akita, Shigeru, “East Asian International Economic Order in the 1950s”, The Cold War in Asia: Beyond Geopolitics and Diplomacy: International Workshop, Sun Yat-sen University, University of Manchester and Harvard University, Sun Yat-sen University, 2007/11(*The Cold War in Asia: Beyond Geopolitics and Diplomacy*, pp. 1-20, 2007/11)

Akita, Shigeru, “Creating Global History from Asian Perspectives”, Global and World History Seminar: History Seminar, Department of History, Sun Yat-sen University, Sun Yat-sen University, 2007/11

- 秋田茂 「司会:全体シンポジウム」南アジア・日本・世界:グローバル化と南アジア認識の変貌:南アジア地域研究, 日本南アジア学会, 大阪市立大学, 2007/10
- 秋田茂 「1930-50年代アジア国際経済秩序」「現代中国社会変動と東アジア新秩序」国際学術会議:中国史, 南開大学歴史学院・大阪外国語大学・東華大学歴史学系・中国現代史学会, 中国・南開大学歴史学院, 2007/8 (『現代中国社会変動と東アジア新秩序 国際学術会議 論文集』 pp. 330-337, 2007/8)
- 秋田茂 「アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー」EALAI テーマ講義「グローバル歴史の挑戦」:グローバル歴史, 東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ, 東京大学教養学部, 2007/7 (『グローバル歴史の挑戦 報告集』2007年度-夏学期, pp. 34-35, 2007/8)
- 秋田茂 「コメント」小シンポジウムIV「歴史教育への現代的アプローチ——歴史学者、社会科教育学者、実践家の立場から:西洋史学と世界史教育, 日本西洋史学会, 新潟大学, 2007/6
- Akita, Shigeru “司会「分岐か独立か——アジア史とグローバル・ヒストリー」第52回国際東方学会会議:アジア学, 財団法人東方学会, 日本教育会館, 2007/5
- Akita, Shigeru, “The Global History Project in Osaka”, Roundtable on Asian and World History: “Beyond National History”: Asian History and World History, Department of History & Asia Research Institute, National University of Singapore, National University of Singapore, 2007/5
- Akita, Shigeru, “The East Asian International Economic Order in the 1950s”, Seminar on British Imperial History: British Imperial History, School of Social Science, Liverpool John Moores University, Liverpool John Moores University, 2007/3
- Akita, Shigeru, “The British Empire as ‘Imperial Structural Power’ within an Asian International Order”, Inviting Lecture of Liverpool John Moores University, School of Social Science, Liverpool John Moores University, Liverpool John Moores University, 2007/3
- Akita, Shigeru, “Creating Global History from Asian Perspectives”, Seminar on Global History: Global History, Department of History, University of Texas, Austin, University of Texas, Austin, 2007/2
- Akita, Shigeru, “British Economic Thoughts and India at the turn of the 19th-20th centuries”, The International Workshop on the British Empire and Economic Thought: The British Empire and Economic Thought, Grant-in-Aid Research Group for the British Economic Thoughts, Yokohama National University, 2006/12
- Akita, Shigeru, “Chair of Concluding General Discussions”, The Second Korean-Japanese Conference of British History: Intellectual framework, Education and a Birth of History, The Korean-Japanese Forum for British History and The Korean Society of British History, Osaka University, 2006/11 (*The Haskins Society Journal, Japan*, 2, 2007/3)
- Akita, Shigeru, “Comments on ‘The Culture of Porcelain’ and ‘Culture and Consumption’”, The 10th GEHN (Global Economic History Network) Workshop: Cultures and Economies: Patterns and Variations, GEHN (Global Economic History Network), George Mason University, USA, 2006/9
- Akita, Shigeru, “Chair of Session Thirteen: British Business and Empire in Asia”, The 5th Anglo-Japanese Conference of Historians: Migration and Identity in British History, The Institute of Historical Research and The AJC 2006 Committee, 2006/9 (*Migration and Identity in British History: Proceedings of the Fifth Anglo-Japanese Conference of Historians*, pp. 191-192, 2006/12)
- 秋田茂 「1930-50年代アジア国際秩序とイギリス帝国——グローバル歴史の視点から」第四回全国高等学校歴史教育研究会: 阪大史学の挑戦, 大阪大学21世紀COE「インターフェイスの人文学」, 大阪大学, 2006/8 (『世界システムと海域アジア交通』4, pp. 134-139, 2007/1)
- Akita, Shigeru, “The International Order of Asia and Hong Kong in the 1930s and 1950s from a Comparative Perspective”, The 6th Global History Workshop: Maritime Trade and Trading Metropolises: Europe and Asia, 17th to 20th Centuries, Arbeitsstelle für Hamburgische Geschichte und Wirtschaftsgeschichtliche Forschungsstelle, Universität Hamburg, 2006/8
- 秋田茂 「三つのヘゲモニー国家とグローバル歴史: 大阪大学共通教育「西洋史学基礎」科目での授業例」第21回例会: 歴史教育, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2008/1
- Akita, Shigeru, “The East Asian International Economic Order and the Sterling Area from the 1930s to the 1950s”, Cross-regional

Chains in Global History: Europe-Asia Interface through Commodity and Information Flows:Global History Workshop, 大阪大学グローバルヒストリー研究会, 大阪大学, 2007/12 (*Creating Global History from Asian Perspectives: Proceedings of Global History Workshop, 14th-16th December 2007 in Osaka*, pp. 187-202, 2008/3)

秋田茂 「1950-60年代のコロンボプラン」渡辺科研2007年度第三回研究会:科研研究会, 東北学院大学渡辺科研研究会, 琉球大学, 2007/12

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第20回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2005年度~2007年度、基盤研究(B) 一般、代表者:秋田茂

課題番号:17320095

研究題目:グローバルヒストリーの構築とアジア世界

研究経費:2006年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

研究の目的:

本研究は、近代世界システムの形成・発展・変容の歴史的過程に着目し、アジア世界との関連に重点を置いて、アジアの側からグローバルヒストリーを構築することを目指している。具体的には、近代世界システムの形成と安定にとって、「中核」として決定的な役割を演じたとされるヘゲモニー国家の歴史的意義を、アジア世界との関連で以下の三点に絞って再検討し、現代のグローバリゼーションを歴史的に相対化する理論的枠組みを考える。

(1)十七世紀オランダの「ヘゲモニー」の世界史的意義は何か。

(2)十九世紀イギリス(パクス・ブリタニカ)、二十世紀アメリカ合衆国(パクス・アメリカーナ)の両ヘゲモニー国家にとって、アジア世界との関連はいかなる意味を有したのか。

(3)近代世界システムにおけるアジア世界の「相対的独自性」は、世界システムの変容にいかなる影響を及ぼしたのか。

(4)世界システム論の再考により、いかなるグローバルヒストリーが構築できるのか。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2007年度、研究助成、助成金獲得者:秋田茂

助成金名:アジア歴史研究助成

研究題目:東アジア地域統合の歴史的考察

助成団体名:財団法人JFE21世紀財団

助成金額:2007年度 直接経費 1,500,000円

研究の目的:

21世紀におけるアジアでの日本の位置を考えるうえで、東アジアにおいてEU的な地域統合が可能かどうかは決定的に重要であり、「東アジア共同体」構想の是非が議論されるようになった。本共同研究は、「広義の東アジア」地域(東南アジア、中央アジア、南アジアの一部を含む東ユーラシア)における地域統合を構想することが、現実的にどの程度可能なのかを考えるため、東アジア世界がいかなる歴史の実体であるのかを解明することを目的としている。相互交流を通じた歴史的一体性のないところに、地域統合はありえないからである。歴史的に見ると、東アジア地域は単一・均質の地域空間ではなく、複数の地域空間の複合からなっている。具体的に言えば、それは中央アジア的空間、海域アジア的空間、太平洋的空間の3つから構成される。逆に言えば、これら3つの地域空間が接合し、あるいは重畳する地域が、東アジア世界なのである。本研究はまず、この複合的な地域空間の歴史的構造を解明することを目的としている。こうした複合的な東アジア地域が、それでもなお「東アジア世界」という枠をもつのは、それがとくに近代において、外部から闖入してきた欧米近代との接触と対立のなかで、「東アジア」という自己規定が生まれたからである。その意味で、外から見た「東アジア世界」は、本地域の歴史的な性格を考察するうえで重要な一因となっている。

以上のような基本認識に立って、本研究は、以下のような四つの視点を組み合わせ、「広義の東アジア」地域の歴史的構造と

その変容を考察する;

- I 「中央アジア的空間としての東アジア」(佐藤担当)
- II 「海域アジア的空間としての東アジア」(桃木担当)
- III 「アジア・太平洋的空間としての東アジア」(秋田担当)
- IV 「近代世界の中の東アジア」(竹中担当)

3-7-2. 2007 年度、研究助成、助成金獲得者:秋田茂

助成金名:第 23 回研究会助成

研究題目:グローバルヒストリー国際ワークショップ「モノの移動と情報から見るグローバルヒストリーの構築:17 世紀から現代まで」

助成団体名:財団法人 村田学術振興財団

助成金額:2007 年度 直接経費 300,000 円

研究の目的:

グローバルヒストリー研究プロジェクトの中間総括として、2007 年 12 月 14-16 日に阪大で開催予定のワークショップ開催に対する助成金。

3-7-3. 2007 年度～2008 年度、研究助成、助成金獲得者:秋田茂

助成金名:2007 年度人文科学・社会科学に関する研究助成

研究題目:モノの移動と情報から見るグローバルヒストリーの構築——17 世紀から現代まで

助成団体名:財団法人 サントリー文化財団

助成金額:2007 年度 直接経費 700,000 円

研究の目的:

グローバルヒストリー研究プロジェクトの中間総括として、2007 年 12 月 14-16 日に阪大で開催予定のワークショップ開催に対する助成金。

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人日本学術振興会・グローバル COE プログラム委員会・人文科学部門審査員	2007 年 1 月～2007 年 7 月
日本学術会議・連携会員(歴史学)	2006 年 8 月～現在に至る
社会経済史学会・評議員	2005 年 5 月～現在に至る
日本南アジア学会・理事	2004 年 10 月～現在に至る
The Royal Historical Society (UK)・Fellow	2001 年 3 月～現在に至る
日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員	2000 年 10 月～現在に至る
西洋史研究会(東北大学)・評議員	1998 年 10 月～現在に至る

## 4. 藤川 隆男 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科前期課程修了。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

### 4-1. 論文

Fujikawa, Takao, “Whiteness Studies in Japan: Types of Whiteness Visible and Invisible”大阪大学西洋史学会(編)『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 5, 大阪大学西洋史学会, pp. 1-13, 2008/2

藤川隆男 「文化とアイデンティティの衝突」歴史学研究会(編)『歴史学研究』(歴史学研究会), 815, 青木書店, pp. 51-57, 2006/6

### 4-2. 著書

藤川隆男, 指昭博, 山本正他(共著)『王はいかに受け入れられたか』刀水書房, pp. 154-172, 2007/12

藤川隆男 『猫に紅茶を』大阪大学出版会, 220p., 2007/12

Fujikawa, Takao, Patricia Grimshaw, Russell McGregor(共著), *Collisions of Cultures and Identities*, University of Melbourne, pp. 229-243, 2007/1

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男(書評)「D. R. ロディガー著『アメリカにおける白人意識の構築』」『図書新聞』2807, 図書新聞, p. 2, 2007/1

#### 4-4. 口頭発表

Fujikawa, Takao “Whiteness Studies in Japan: Visible and invisible types of whiteness” Conference: HISTORICISING WHITENESS, the Department of History, University of Melbourne, the Department of History, University of Melbourne, 2006/11

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:15510200

研究題目:19世紀オーストラリア連邦運動の研究

研究経費:2006年度 直接経費 600,000円 間接経費 0円

研究の目的:

主な目的は、オーストラリアにおける史料の調査と、既存の史料のデータ・ベース化である。オーストラリア連邦運動の集会に関するデータの基本項目を整理して、これをデータ・ベース化することが第1の目的である。これによって、連邦運動に関する基礎的な事実の確定が、従来に比べてはるかに容易になり、今後の研究の展開の基礎にできる。第2に、連邦憲法制定会議の議事録のデータ・ベースを利用し、連邦運動の集会のデータとつぎあわせることによって、歴史的コンテキストの中に連邦運動を位置づけ、集会データによって、従来の歴史解釈の体系的な分析を行うのが第2の目的である。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

オーストラリア学会・理事	2004年4月～現在に至る
オーストラリア研究・編集委員	2004年4月～現在に至る
大阪大学西洋史学会・理事	2003年6月～現在に至る
パブリック・ヒストリー・編集委員	2003年6月～現在に至る
日本西洋史学会・西洋史学・編集委員	1996年4月～現在に至る

### 5. 中野 耕太郎 准教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻現代史学)中退。文学修士(京都大学、1993年)。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授を経て、2007年10月より現職。専攻:アメリカ現代史。

#### 5-1. 論文

なし

## 5-2. 著書

井上徹, 中野耕太郎他(共著)『都市文化理論の構築に向けて』清文堂, pp. 80-85, 2007/3

小塩和人, 中野耕太郎, 樋口映美他(共著)『原典アメリカ史 社会史史料集』岩波書店, pp. 165-175, 2006/8

中野耕太郎, 上杉忍, 巽孝之他(共著)『アメリカの文明と自画像』ミネルヴァ書房, pp. 179-205, 2006/6

## 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中野耕太郎(訳)トーマス・ラウゼン著「支配された植民者たち——満州のポーランド人」玉野井麻利子(編), 山本武利監訳『満州——交錯する歴史』藤原書店, pp. 248-272, 2008/2

中野耕太郎(書評)「藤川隆男編『白人とは何か? ——ホワイトネス・スタディーズ入門』」『西洋史学』224, 日本西洋史学会, pp. 84-86, 2007/3

## 5-4. 口頭発表

中野耕太郎「移民とアメリカの歴史——第一次世界大戦期のポーランド移民」平成 19 年度芦屋川カレッジ, 芦屋市立公民館, 2008/2

中野耕太郎「第一次世界大戦とアメリカの多元的国民統合——戦時アメリカ化政策を中心に」第 74 回西洋史読書会大会, 西洋史読書会, 2006/11

## 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・編集幹事	2006年4月～2008年3月
日本西洋史学会・編集委員	2003年4月～現在に至る
関西アメリカ史研究会・編集委員	1994年11月～現在に至る

## 6. 栗原 麻子 准教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学、京都大学、1998年)。京都大学研修員、日本学術振興会特別研究員を経て、1996年より奈良大学講師。2004年より大阪大学文学研究科助教授。専攻:西洋古代史。

### 6-1. 論文

栗原麻子「アブラグモシュネ(消極主義)と市民性——リュシアスの法廷弁論を中心として——」『待兼山論叢 史学編』(大阪大学大学院文学研究科), 41, pp. 1-26, 2007/12

栗原麻子「古代ギリシアの社会と生活」南川高志・山辺規子(共編著)『西洋史入門 古代・中世編』ミネルヴァ書房, pp. 37-46, 2006/8

### 6-2. 著書

なし



### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

栗原麻子(書評)「R. Parker, Polytheism and Athenian Society (Oxford, 2005)』『西洋古典学研究』(日本西洋古典学会), 55, 岩波書店, pp. 131-133, 2008/3

栗原麻子(書評)「三宅正樹著『文明と時間』(東海大学出版会、2005年5月)』『西洋史学』(日本西洋史学会), 227, pp. 66-67, 2007/12

栗原麻子(書評)「中井義明著『古代ギリシャ史における帝国と都市——ペルシャ・アテナイ・スパルタ——』』『社会経済史学』(社会経済史学会), 72-2, pp. 104-105, 2006/5

栗原麻子((翻訳)エレイス・マシューズ)「古代世界におけるギリシア人と名前——伝統と革新——」浦野聡・深津行徳(編)『古代文字史料の中心性と周縁性』春風社, pp. 147-184, 2006/4

### 6-4. 口頭発表

なし

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:栗原麻子

課題番号:18320123

研究題目:東地中海周辺域における都市共同体と儀礼

研究経費:2006年度 直接経費 4,500,000円 間接経費 1,350,000円

2007年度 直接経費 88,400,000円 間接経費 2,040,000円

研究の目的:

東地中海域の古代世界において、儀礼が共同体においてはたしていた役割を、都市の政治空間との関係において明らかにする。その際に、都市国家からローマ帝国支配、ビザンツ帝国へと政治的環境の変遷を念頭に置き、儀礼と都市の共同体性とのあいだの双方向的な影響関係を明らかにすることを目的とする。儀礼研究を狭い意味での宗教史から解放し、政治文化の問題としてとらえることで、古代社会における都市共同体の性格を明らかにすることが、大きな目的である。

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・編集委員

2005年10月～現在に至る

## 7. 戸渡 文子 助教

1973年生。大阪大学文学研究科2006年単位修得退学。文学修士(大阪大学)。2006年より現職。専攻:イギリス史・老人史。

### 7-1. 論文

Towatari, Ayako, “Construction of old age and religion: English parish in the nineteenth century and the impact of migration” *Migration and Identity in British History: Proceedings of the Fifth Anglo-Japanese Conference of Historians*, (Anglo-Japanese Conference of Historians), pp. 131-144, 2006/12

### 7-2. 著書

なし

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 7-4. 口頭発表

---

戸渡文子 「老人の誕生と19世紀イギリスの国教会教区」近代社会史研究会, 京都大学, 2006/12

Towatari, Ayako “Construction of old age and religion: English parish in the nineteenth century and the impact of migration”, The Fifth Anglo-Japanese Conference of Historians: Migration and Identity in British History, Anglo-Japanese Conference of Historians, Institute of Historical Research, University of London, 2006/9

戸渡文子 「ウィリアム・ルーリ・ブラックリの「国民倭約保険」構想における老人観——ジェンダーとの交差を中心に——」イギリス生  
活史研究会, 京都大学, 2006/7

### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

7-6-1. 2007年度～2009年度、若手研究(B)、代表者:戸渡文子

課題番号:19720191

研究題目:老人の誕生と19世紀イギリスの国教会教区

研究経費:2007年度 直接経費 600,000円 間接経費 0円

研究の目的:

「老人」というカテゴリは、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、ヨーロッパや北米の諸国において、労働者としての役割を果たす成人から明確に区別された福祉の対象として定義された。本研究の目的は、イギリスにおいて老人が福祉の対象として定義される過程で、1820年代から1880年代にかけての国教会教区で、聖職者男性や、ヴォランティアとして活動する中産階級女性らが果たした役割を明らかにすることである。

### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本西洋史学会・編集委員

2006年4月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・編集委員

2006年4月～現在に至る

## 2-10 考古学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本学考古学分野の大きな特色としては次の3点があげられる。

第一は、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視していることである。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みを継続している。

第二は、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組んでいることである。とくに教員や大学院生は海外の調査や学会にも参加して、自らの研究の意味をつねに問うことを心がけている。

第三は、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視していることである。地域社会に入って行うフィールド調査、現地説明会、成果報告会などを通じて、地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係を追求している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1(兼任)

教授：福永 伸哉

准教授：高橋 照彦

助教：寺前 直人(兼任)

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
15	5	4	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 3 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	5	3	1	1	2
'07	3	4	1	2	3
小計	8	7	2	3	5

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	1	1	2
計	2	1	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

中村大介「弥生文化形成過程の研究」2007/3

主査：福永伸哉 副査：小林茂 高橋照彦

中原 計「弥生時代木製品の研究」2008/3

主査：高橋照彦 副査：福永伸哉 小林茂

##### 【論文博士】

清家 章「古墳時代の埋葬原理と親族構造」2007/8

主査：福永伸哉 副査：梅村喬 高橋照彦

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	1	1	0	0	0	2
'07	2	0	6	0	2	10
計	3	1	6	0	2	12

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	1	1	0	0	2
'07	0	1	5	0	0	6
計	0	2	6	0	0	8

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

高松雅文「群集墳からみた地域支配(上)」『古代学研究』175, pp. 1-20, 2006/12

大庭重信・杉山拓己・中久保辰夫「スス・コゲからみた長原遺跡古墳時代中期の煮炊具の使用法」『大阪歴史博物館研究紀要』第5号, pp. 21-40, 2006/10

#### 【2007年度】

高松雅文「群集墳からみた地域支配(下)」『古代学研究』176, pp. 1-20, 2007/3

前田俊雄「竜王山古墳群における横穴墓の位置づけに関する考察」『近畿の横穴式石室』, pp.305-316, 2007/7

田中由理「日本・韓国出土甕の法量比較検討——銜と引手の長さ注目して——」『待兼山論叢』第41号史学篇, pp. 1-25, 2007/12

田中由理「緑釉陶器の基礎的分析——法量と釉調を中心に——」『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 29-40, 2008/3

中久保辰夫「摂津地域における古墳時代中期の煮炊器」『待兼山遺跡IV』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 83-94, 2008/3

中久保辰夫「須恵器供膳器からみた平安時代前半期の窯業生産」『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 49-56, 2008/3

酒井将史「篠窯跡群大谷3号窯の調査成果」『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 13-28, 2008/3

高上拓「篠・大谷3号窯出土の緑釉陶器稜椀」『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 41-48, 2008/3

木村理恵 2008「篠窯跡群出土の鉢類の検討」『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 57-62, 2008/3

田村美沙 2008「篠・大谷3号窯出土の壺について」『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 63-64, 2008/3

### (2)口頭発表

#### 【2006年度】

高松雅文「群集墳からみた民衆把握の進展とその特質」古墳時代後期の政治変動に関する考古学的研究 横穴式石室研究会, 大手前大学/西宮市, 2006/10/7

東影悠「尾張系埴輪の拡散と生産体制」古墳時代研究会 例会, 向日市文化資料館/向日市, 2007/1/27

#### 【2007年度】

前田俊雄「龍王山古墳群における横穴墓の位置づけに関する考察」研究集会「近畿の横穴式石室」, 大手前大学さくら夙川キャンパス/西宮市, 2007/7/15

田村美沙「千里丘陵における須恵器の生産とその供給域」大阪歴史学会考古部会 11月例会, 大阪府立中央青年センター/大阪市, 2007/11/16

酒井将史「篠窯跡群大谷3号窯の調査成果」研究集会「日本古代窯業生産をめぐる諸問題」大阪大学総合学術博物館/豊

中市,2008/3/1

田中由理「緑釉陶器の基礎的分析——法量と釉調を中心に——」研究集会「日本古代窯業生産をめぐる諸問題」大阪大学総合学術博物館/豊中市, 2008/3/1

高上拓「篠・大谷 3号窯出土の緑釉陶器稜椀」研究集会「日本古代窯業生産をめぐる諸問題」大阪大学総合学術博物館/豊中市, 2008/3/1

中久保辰夫「須恵器供膳器からみた平安時代前半期の窯業生産」研究集会「日本古代窯業生産をめぐる諸問題」大阪大学総合学術博物館/豊中市, 2008/3/1

木村理恵「篠窯跡群出土の鉢類の検討」研究集会「日本古代窯業生産をめぐる諸問題」大阪大学総合学術博物館/豊中市, 2008/3/1

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2006年度】

木村理恵・高橋照彦「考古学研究会関西例会シンポジウム「都城周辺の都市的景観」参加記」『考古学研究』第53巻第1号, 2006/6, pp.24-27

東影悠「篠窯跡群の概要」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.1

木村理恵「平安時代における須恵器生産の展開——近畿地方を中心に——」『東洋陶磁学会会報』第60号,2006/8,p.4

中久保辰夫「分布調査」『緑釉陶器・緑釉素地』『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,pp.2・10-12

吉田知史「測量調査」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.3

田中由理「3-1号窯」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.6

高松雅文「3-2号窯」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.6

横田真吾「器種構成」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.10

木村理恵「須恵器」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.12

酒井将史「窯道具ほか」『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2006/8,p.12

高松雅文「遺跡の位置と環境」「北側土坑ほか」「大谷3-1窯」「大谷3号窯周辺地区の調査」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2007/3,pp.7-16・47-58・67-72

田村美沙「大谷3-2号窯の窯体構造」「焼成部の改修状況」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2007/3,pp. 27-39

酒井将史「燃焼部の改修状況」「北側灰原の概要」「灰原の堆積状況」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2007/3,pp. 40-47

高上拓「南側灰原・大谷3-1号窯近接遺構」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室),2007/3,pp. 48-64

木村理恵「出土遺物」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究室), 2007/3, pp. 73-79

酒井将史「川戸遺跡の後期弥生土器」『川戸遺跡』兵庫県文化財調査報告書第314冊,(兵庫県教育委員会), 2007/3, pp.40-49

【2007年度】

酒井将史「鎌倉山遺跡の外来土器」『美作町史』(通史編1),美作町,2007/8, pp. 90-92

田中由理「羨道の構造」「羨道における遺物出土状況」「馬具」「その他」「不明鉄器」『勝福寺古墳の研究』大阪大学部文学研究科考古学研究報告第4冊,(大阪大学文学研究科考古学研究室),2007/10, pp. 76-82・132-139・174

北山峰生・宮元香織・丹羽恵二・西谷麻衣子・前田俊雄「地域別概説 大和の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』,横穴式石室研究会, pp. 115-130, 2007/7

前田俊雄「出土陶棺」『桑原遺跡』大阪府教育委員会, pp. 25-28, 2008/3

前田俊雄「桑原西古墳群出土陶棺について」『桑原遺跡』大阪府教育委員会, pp. 60-64, 2008/3



田村美沙「須恵器」『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 59-61, 2008/3

中久保辰夫「土師器ほか」「瓦器」『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 61-62・72, 2008/3

木村理恵「火葬灰集積土坑」「火葬場および火葬墓遺構」「土師器」「そのほかの土器類」『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 69-70・72-74, 2008/3

大川沙織「石製品」『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 77-79, 2008/3

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2007年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専等の常勤職員として就職した者について)

中原 計 博士後期課程, 徳島大学埋蔵文化財調査室, 助教, 2006/4(2006年度も社会人学生として在籍)

東影 悠 博士前期課程, 奈良県立橿原考古学研究所, 技師, 2007/4

横田真吾 博士前期課程, 宇治市教育委員会, 嘱託職員, 2007/4

高松雅文 博士後期課程, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 嘱託職員, 2008/4

高上 拓 博士前期課程, 高松市教育委員会, 専門職員, 2008/4

木村理恵 博士前期課程, 奈良文化財研究所, 特別研究員, 2008/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7名

2006年度: 4名 2007年度: 3名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 7名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

### 9. 刊行物

2006年度 『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』, 2006/8

『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』, 2007/3

2007年度 『勝福寺古墳の研究』大阪大学部文学研究科考古学研究報告第4冊, 2007/10

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

ダーラム大学ロバート＝レイトン教授学術講演会，大阪大学／豊中市，2008/1/12・13

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究集会「日本古代窯業生産をめぐる諸問題」，大阪大学総合学術博物館／豊中市，2008/3/1

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

考古学分野における教育の方針としては、自らの学問的関心に基づく研究テーマと、学外組織とも協力して共同プロジェクトにかかわる研究テーマの二者を課すことによって、幅広い研究能力を向上させるとともに、学問の社会的意味を考えさせることに重点を置いている。その方針に基づいて、3つの取り組みを行ってきた。

第一は、考古学研究に不可欠な発掘調査や出土資料分析などにかかわる基礎的な技術や知識の習得を重視することである。2006年度には2004年度から継続調査してきた京都府亀岡市の篠窯跡群大谷3号窯の発掘調査を行い、2007年度には新たに兵庫県宝塚市の長尾山古墳の発掘調査を開始した。前者では平安時代の須恵器や緑釉陶器、後者では古墳時代前期の埴輪など、それぞれの遺跡から出土した遺物について発掘調査後に整理作業も実施した。これらにより、考古学で必要とする実践的な技能を深めることができたものと評価できる。

第二は、世界の考古学の研究動向に目を配りながら、比較考古学を積極的に進め、広い視野で研究に取り組ませることである。すべての学年において英書講読を取り入れており、2006年度はアンデス文明など中南米考古学における国家形成に関する集中講義も開講し、日本を含めて世界的な視野で国家形成の比較考古学を進める素養の涵養を目指した。また、海外からの留学生の受け入れや海外への留学生の派遣についても、この2年間では積極的に行うことができた。この他、海外から研究者が来日した際には講演を依頼するような取り組みも従前から行っているが、2007年度にはイギリスからロバート＝レイトン教授(ダーラム大学人類学部長)を迎えて2日連続での講演会を実施した。英語での討論も含めて世界的に著名な研究者との直接的な対話は学生にとっての得難い体験になったはずである。

第三は、社会との積極的なかかわりを重視することである。亀岡市や宝塚市での発掘調査においては、これまでからの継続的な試みとして、学生がコンテンツ作製などに参加する形で調査成果をHPで広く情報発信を行った。それとともに、市民向けの現地説明会の開催においても、見学者への解説などを分担することにしており、研究成果の社会還元的重要性についての認識を深めた。それらへの積極的な参加を導くことにより、教育的な効果を果たすことができたものと言える。さらに、講義の中でも非常勤講師により文化財行政などに関連する授業を設けて、現代社会と考古学についても考える機会を与えるようカリキュラムを工夫した。

また、2005年度から考古学の教員数が3名から2名となったこともあり、学生に提供できる講義の数を維持しつつ、新たな教育内容を展開する目的で、共同プロジェクトなどのフィールド調査にかかわる形での演習、あるいは出土資料の整理作業への参加の中で実践的な技術の習得を教える演習などを新たに設けたが、2006・2007年度もそれらに対して部分的に改善を図りつつ、そのカリキュラムを継続させた。また、通常の講義についても、これまでは学部と大学院に共通する単位として設定していたことから、やや専門的な内容に偏していたため、学部生のみを対象とした講義を2005年度から継続して開講しており、基礎的な学問の知識を習得できる場を提供し、教育的な効果も生まれている。

前回の年報においては、教育面で留意すべきことの1つとして、学部生における他専修への変更希望が少なくない点を掲げていた。学生の多様な希望に沿うシステムとして2年次での専修変更を認めていることもあって、専修変更がなくなっているわけではないものの、ひとところに比べると安定している。フィールド調査などに馴染むことができるかどうか専修変更の大きな分岐点と考えられたため、専修決定前の1回生の段階で、夏季の発掘調査への参加を広く呼びかけることによって、専修決定に先立ち専門課程における教育・研究の内容についてある程度の見きわめができるようになったものと思われ、この側面は改善に向かいつつある。

また、前回の年報などでも継続課題として掲げていた研究室紀要的な刊行物の創刊については、資金的な問題もあって、この2年間においても先送りする結果となった。ただし、それに代わるものとして、研究室による発掘調査の正報告書

や概要報告書の刊行などを行い、学生の執筆機会を増やすことに努めた。それとともに、研究室のプロジェクトとして推進した発掘調査にかかわってテーマを設定し、学外の研究会との共催という形で研究集会を開催するなど、様々な研究活動の成果を発表する機会も提供した。これらにより、専門とする研究以外にも視野を広めるとともに、研究発信に向けた活動を促す教育的な効果も果たしたものと言える。2008年度以降には、研究室の論文集や研究室紀要のような刊行物の発刊を目指しており、研究成果の公表を促進させるために教育システムのさらなる向上を課題としたい。

このほか、専門機関への就職が厳しい状況下にあるものの、博士前期課程修了生のなかには考古学調査に携わる教育委員会の正職員などとして就職する者もあり、また前年度に嘱託職員などとして勤めていた者の中にも専門機関への就職を決めるなど、この分野の中では比較的良好な就職実績を挙げている。

以上のとおり、教育活動に関して通観すれば、研究室紀要的な刊行物の創刊は果たせなかったものの、概ね所期の目標を達成しているものと評価できる。

## 12-2. 研究活動

組織全体の調査・研究活動としては、2004年まで発掘調査を行ってきた兵庫県川西市勝福寺古墳に関して、2007年度に学術報告書『勝福寺古墳の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究报告 第4冊)を刊行した。本書は、論文10篇を含む総頁数444頁の大冊である。内容としても横穴式石室を有する前方後円墳の研究や継体朝前後の政治動向を考える上で注目される新たな成果が示されており、学界に寄与するところも少なくないだろう。

また、これまでに研究室が主な研究対象としてきた弥生・古墳時代だけではなく、奈良・平安時代へも検討領域を広げる形で、京都府亀岡市篠窠跡群のうち大谷3号窠について継続的な発掘調査も行った。その結果、篠窠最古段階の緑釉陶器窠であることが判明するなど、平安時代陶磁器を研究する上で貴重な学問的成果が出ている。教育活動の項目でも記したように、これまでも積極的に取り組んでいることながら、HPによる情報発信や市民向けの現地説明会の開催、さらには現地の高校生を対象とした見学会の受け入れなどによって、調査研究成果を積極的に社会還元を行うべく努めた。2006年には『大谷3号窠——篠窠跡群北部域の調査——』と題して2005年度までの調査の概要報告書をまとめ、さらに2007年には科学研究費補助金の研究成果報告書のなかで、2006年度までの調査成果のうち窠跡の遺構に関する知見を中心に報告をまとめた。篠窠の発掘調査は2006年度でひとまず終了し、現在はその出土遺物の成果を含めた最終報告書の刊行に向けて、整理作業などを進めている。

さらに2007年度には、研究室の調査対象としては久しぶりの前期古墳の調査として、兵庫県宝塚市長尾山古墳の調査に着手した。初年度の2007年には、測量と墳丘裾部を中心とするトレンチ調査を行い、これまで指摘されていた前方後方墳ではなく、前方後円墳の可能性が高くなった。また、これまで周辺地域では確認されていない埴輪の出土などもあり、今後の当該期の埴輪研究を進める上での貴重な基礎資料になるものである。これらの調査に当たっては、HPによる情報発信や現地説明会の開催などを行っており、現地説明会では200名ほどの市民の参加を得て、好評を博した。2008年度も調査を継続する予定であり、猪名川流域など摂津地域における古墳の動態の解明を目指している。なお、これらのフィールドワークを伴う諸調査に関しては、プロジェクトを推進するために、すべての教員が積極的に外部資金の申請に応募し、資金の獲得を果たしている。

個人研究に属するものとはいうものの、2006年度には福永伸哉が「三角縁神獣鏡と国家形成の研究」により第19回浜田青陵賞(大阪府岸和田市・朝日新聞社主催)を受賞した。大阪大学考古学研究室としては、前任の大阪大学教授であった都出比呂志(現名誉教授)の第2回浜田青陵賞に次ぐ受賞であり、当研究室における研究活動の充実振りの一端が示されている。

以上のほかに、考古学分野では純粋の研究とともに社会貢献に属する分野についても従前から重視して活動を行ってきた。例えば所蔵保管資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館からの貸出依頼に積極的に応じており、奈良県香芝市の二上山博物館ほかの特別展に出品の協力をした。また、大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に対しても教員・学生も含めて支援をしており、2007年度には待兼山5号墳ならびに中近世墓地遺跡の発掘調査成果の報告書として『待兼山遺跡IV』の刊行を果たすことができた。さらに、大阪大学総合学術博物館では、修学館の改修に伴う展示施設のリニューアルの一環として、埋蔵文化財調査室に係る考古学成果の展示スペースを設けたが、これについても研究室として全面的に協力し、展示の充実化のために一定の役割を果たすことができたものと評価

できる。このほかにも、地方自治体の発掘調査や出土品整理への学術協力、自治体史の編纂などへの関与なども行っており、地域の文化行政を支援するように努めている。

このように、研究面において所期の目標はほぼ達成でき、十分に成果を出せたものと評価できる。ただ、教育とも重なる側面として前回の年報でも指摘をしたことながら、大学院学生の研究成果についてはまだまだ改善の余地が大きい。特に、報告書等への執筆はかなり増加したものの、学術雑誌への投稿論文数が必ずしも増えているとはいえない。研究室紀要などにより発表の機会を提供することも必要であることから、先にも記したように、この紀要の創刊について来年度以降の課題として掲げておきたいが、それとともに、論文作成演習以外にも投稿論文作成の個別指導を継続的に進めることを含めてなおいっそうの強化が望まれる。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、2005年より現職。専攻:日本考古学(特に弥生時代、古墳時代)。

##### 1-1. 論文

福永伸哉 「前方後円墳成立期の東四国と畿内」『鳴門史学』(鳴門史学会), 21, pp. 1-16, 2007/10

福永伸哉 「継体王権と韓半島の前方後円墳」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科, pp. 425-434, 2007/10

福永伸哉 「副葬鏡群からみた前方後円墳成立期の近江」『考古学論究——小笠原好彦先生退任記念論集』真陽社, pp. 145-164, 2007/3

福永伸哉 「韓国における前方後円形墳築造の歴史背景——前方後円形であることの意味——」小澤一雅(編)『前方後円墳のシステム型理解にもとづく古墳時代の情報学的復元』大阪電気通信大学, pp. 135-146, 2007/3

福永伸哉 「近畿地方における弥生時代開始期の埋葬姿勢」『喜谷美宣先生古稀記念論文集』同刊行会, pp. 29-38, 2006/6

##### 1-2. 著書

寺前直人, 福永伸哉(編)『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科, pp. 425-444, 2007/10

福永伸哉(編)『原始古代埋葬姿勢の比較考古学的研究』大阪大学文学研究科, pp. 15-40, 2007/3

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉 「横穴式石室に斬新さ——難工事が表す継体新政権の決意——」『毎日新聞』毎日新聞社, 2007/3

Fukunaga, Shinya et al. “Perspectives of Japanese Archaeology” Tsuyoshi Katayama(編), *Course Records “History, Manners and Customs, and Interchange——Asia and Japan——” (OUSSEP) 2006 Fall Semester*, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 4-21, 2007/3

脇田修, 大山喬平, 福永伸哉他 「日本文化のあけぼの」脇田修, 大山喬平(共編)実教出版, pp. 26-49, 2007/3

福永伸哉 「鳴門・板野古墳群を考える——政権と太いパイプ——」『徳島新聞』徳島新聞社, 2006/10

福永伸哉 「隠された歴史まだ深く——三角縁神獣鏡が語るもの——」『朝日新聞』朝日新聞社, 2006/9

##### 1-4. 口頭発表

福永伸哉 「長尾山丘陵における前方後円墳の調査」考古学研究会関西例会第149回例会, 考古学研究会関西例会, 2007/12

福永伸哉 「日本の前方後円墳と韓国の前方後円墳」湖南考古学会第15回定期学術大会:交流と葛藤, 湖南考古学会, 大韓民国圓光大学校, 2007/5『交流と葛藤』pp. 163-184, 2007/5

福永伸哉 「勝福寺古墳出土の画文帯神獣鏡が語るもの」平成18年度勝福寺古墳発掘調査報告講演会:勝福寺古墳を探る, 川西市教育委員会, 2007/3

福永伸哉 「トルコゲミレル島遺跡の発掘調査成果」忠南大学校人文大学招請講演会, 忠南大学校, 2006/11



福永伸哉 「銅鐸を必要とした社会」茨木市文化財シンポジウム:銅鐸の謎を知る, 茨木市教育委員会, 2006/11

福永伸哉 「前方後円墳成立期の阿波と畿内」2006年度鳴門史学会研究大会:鳴門・板野古墳群を考える——古代阿波の世界——, 鳴門史学会, 2006/10

福永伸哉 「古墳時代の実年代論」日本史研究会例会:弥生・古墳時代の実年代論, 日本史研究会, 2006/7

福永伸哉 「大和川と淀川——前方後円墳成立期の地域関係——」難波宮址を守る会 2006 年度総会, 難波宮址を守る会, 2006/4

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

福永伸哉 第19回濱田青陵賞, 朝日新聞社・岸和田市, 2006/9

福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2002/12

福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号:16520461

研究題目:原始古代埋葬姿勢の比較考古学的研究——日本及び旧世界の事例を中心に——

研究経費:2006年度 直接経費 800,000円 間接経費 0円

研究の目的:

原始古代葬制にかんする諸要素の中でも本格的な考察が遅れている埋葬姿勢に着目し、比較考古学的な視点を重視しながら、葬制研究の新たな領域を開拓する。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

1-7-1. 2006年度～2006年度、研究助成、助成金獲得者:福永伸哉

助成金名:瀬戸内文化研究助成金

研究題目:備後姫谷窯の考古学的研究——瀬戸内地域の江戸初期色絵磁器窯の実態解明——

助成団体名:福武学術文化振興財団

助成金額:2006年度 直接経費 800,000円

研究の目的:

備後南部に存在する17世紀後半の姫谷窯の未公表陶片資料を整理して資料化するとともに、形態、製作技術、絵付けの手法などを分析して、近世初期の瀬戸内に花開いた技術・芸術の力と、瀬戸内海を介したその波及状況を明らかにする。

1-7-2. 2007年度～2008年度、研究助成、助成金獲得者:福永伸哉

助成金名:アジア歴史研究助成

研究題目:古代国家形成期における日韓交流史の考古学的再構築

助成団体名:(財)JFE21世紀財団

助成金額:2007年度 直接経費 1,500,000円

研究の目的:

日本列島の古墳時代と朝鮮半島の三国時代の社会が、それぞれ明確な主体性を持った相互交流を行うことにより急速な国家形成を成し遂げた過程を、1990年代以降の新出考古資料を駆使しながら実証的に解明・提示する。

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員	2007年12月～現在に至る
高槻市安満遺跡京大農場内範囲確認調査指導検討会・委員	2007年10月～現在に至る
京丹後市網野銚子山古墳発掘調査委員会・委員	2007年10月～現在に至る

福山市二子塚古墳保存整備指導委員会・委員	2006年12月～現在に至る
川西市資料購入評価委員会・委員	2006年8月～2006年9月
川西市文化財審議委員会・委員	2006年6月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員	2006年6月～現在に至る
鹿児島県塚崎古墳群発掘調査指導委員会・委員	2006年1月～現在に至る
京丹後市史編纂委員会・委員	2005年6月～現在に至る
(財)大阪市文化財協会・評議員	2005年6月～現在に至る
日本考古学協会・原稿査読委員	2005年4月～2007年3月
京丹後市史跡整備検討委員会・委員	2005年1月～2007年3月
文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員	2005年1月～2006年8月
大垣市昼飯大塚古墳調査整備委員会・委員	1994年12月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人	1980年4月～現在に至る

## 2. 高橋 照彦 准教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年より大阪大学大学院文学研究科助教授、2007年より現職。専攻：日本考古学(特に奈良時代、平安時代)。

### 2-1. 論文

- 高橋照彦 「窯業生産とミヤケ」高橋美久二先生追悼文集刊行会(編)『明日をつなぐ道』pp. 253-258, 2007/11
- 高橋照彦 「猪名川流域の古代氏族と勝福寺古墳」福永伸哉・寺前直人(編)『勝福寺古墳の研究』(大阪大学大学院文学研究科考古学研究報告4)大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 369-398, 2007/10
- 高橋照彦 「古代銭貨の経済外的使用法とその淵源」松村恵司・栄原永遠男(編)『和同開珎をめぐる諸問題(一)』奈良文化財研究所, pp. 495-508, 2007/3
- 高橋照彦 「篠窯跡群大谷地区調査をめぐる諸問題——研究成果の総括——」高橋照彦(共編著)『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 119-128, 2007/3
- 高橋照彦 「須恵器工人の存在形態に関する基礎的検討」高橋照彦(共編著)『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 129-169, 2007/3
- 高橋照彦 「六・七世紀の大王陵における合葬について——摂津・勝福寺古墳の位置付けをめぐる——」小笠原好彦先生退任記念論集刊行会(編)『考古学論究』真陽社, pp. 465-487, 2007/3
- 高橋照彦 「古墳・寺・焼き物——日本考古学からみた文献史料——」名古屋大学大学院文学研究科(編)『物質文化の歴史学再考「文化コンテキスト学」の構築をめざして』pp. 73-82, 2006/6
- 高橋照彦 「白鳳緑釉と奈良三彩——古代日本における鉛釉技術の導入過程——」吉岡康暢先生古希記念論集刊行会(編)『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房, pp. 3-14, 2006/5

### 2-2. 著書

- 寺前直人, 高橋照彦他(共編著)『待兼山遺跡』IV, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 74-77, 2008/3
- 高橋照彦, 寺前直人他(共編著)『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-169, 2007/3
- 高橋照彦, 寺前直人他(共編著)『大谷3号窯——篠窯跡群北部域の調査——』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 1-16, 2006/8

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 高橋照彦 「奈良国立博物館」「瓶子」「へら切り」「鳳首瓶」「窯業」「竜首瓶」「緑釉骨壺」小野正敏・佐藤信・館野和己・田辺征夫



(編)『歴史考古学大辞典』吉川弘文館, pp. 883・1035・1043・1051・1193・1214・1224, 2007/3

高橋照彦 「まとめ」大阪大学考古学研究室篠窯跡調査団(編)『京都府亀岡市大谷 3 号窯(篠窯跡群北部域の調査)2006 年度発掘調査現地説明会資料』, p. 8, 2006/9

木村理恵, 高橋照彦(共著)「考古学研究会関西例会シンポジウム「都城周辺の都市的景観」参加記」『考古学研究』53-1, 考古学研究会, pp. 24-27, 2006/6

## 2-4. 口頭発表

高橋照彦 「篠窯跡群の編年と生産内容に関するいくつかの問題」: 日本古代窯業生産をめぐる諸問題, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室・歴史土器研究会, 大阪大学, 2008/3(『日本古代窯業生産をめぐる諸問題』pp. 65-82, 2008/3)

高橋照彦 「器からみた宴——古代から中世へ——」考古学と中世史シンポジウム: 宴の中世——場・土器(かわらけ)・権力——, 考古学と中世史研究会, 帝京大学山梨文化財研究所, 2007/7(『宴の中世』pp. 10-21, 2007/7)

高橋照彦 「勝福寺古墳の造営氏族めぐって」川西市文化財講座, 川西市教育委員会, 川西市中央公民館, 2007/3

高橋照彦 「大谷 3 号窯発掘調査の成果」歴史土器研究会例会, 歴史土器研究会, 大阪大学, 2007/2

高橋照彦 「近江・長門周防の緑釉陶器」奈良文化財研究所陶磁器調査課程(古代), 奈良文化財研究所, 奈良文化財研究所, 2007/2

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003 年度～2006 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 高橋照彦

課題番号: 15320108

研究題目: 須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究——近畿地方を主な検討材料として——

研究経費: 2006 年度 直接経費 2,700,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、研究の手薄な、9～11 世紀頃の須恵器生産を主な検討対象とするもので、対象地域は、研究期間の関係上、近畿地方に限定する。平安時代は、須恵器生産の衰退時期と捉えられがちであるが、古代から中世への過渡期と再評価すべきである。そこで、律令期の窯業生産把握がいかに中世的な須恵器生産に変容したかという問題について、具体的な窯跡群を構造的に分析することにより、跡付けることにした。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

史学研究会・評議員 2005 年 11 月～現在に至る

東洋陶磁学会・幹事 1997 年 10 月～現在に至る

## 3. 寺前 直人 助教

1973 年生。2001 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。大阪大学教務補佐員をへて、2003 年現職。2003 年より神戸女学院非常勤講師。専攻: 日本考古学。

### 3-1. 論文

寺前直人 「ヤジリと高地性集落」古代学協会『古代文化』(古代学協会), 58-II, 古代学協会, pp. 32-41, 2007/10

寺前直人 「羨道の変遷とその背景」寺前直人・福永伸哉(共編)『勝福寺古墳の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究報告),

第4冊, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp. 355-368, 2007/10

寺前直人 「畿内型横穴式石室の基礎構造」小笠原好彦先生退任記念論集刊行会『考古学論究——小笠原好彦先生退任記念論集——』(小笠原好彦先生退任記念論集刊行会), 小笠原好彦先生退任記念論集刊行会, pp. 335-360, 2007/3

寺前直人 「尾張地域における石棒の行方」愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター), VII, 愛知県埋蔵文化財センター, pp. 2-10, 2007/3

寺前直人 「ヨモツヘグイ再考——古墳における飲食と調理の表象としての土器——」大阪大学文学会『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 40, 大阪大学文学会, pp. 1-24, 2006/12

### 3-2. 著書

---

寺前直人(編)『待兼山IV』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, 2008/3

寺前直人, 福永伸哉(共編著)『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究室, 2007/10

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

寺前直人 「太平洋ルートと弥生石器の伝播」:科学研究費研究会, 高知大学考古学研究室, 高知大学, 2007/11

寺前直人 「古墳と古墳時代社会と国家形成」日本史研究会5月例会:前方後円墳体制の再検討, 日本史研究会, 京都機関誌会館, 2007/5

寺前直人 「阪神地域の弥生開始期集落と石器」平成18年度国立歴史民俗博物館共同研究:縄文・弥生集落遺跡の集成的研究, 国立歴史民俗博物館, 大阪府立弥生文化博物館, 2007/3

寺前直人 「弥生石器の形成過程」, 大阪(大阪大学中之島センター)考古学研究会関西例会第145回:考古学研究会関西例会第145回, 考古学研究会関西例会, 大阪大学中之島センター, 2007/3

寺前直人 「近畿地方における磨製石斧様式と金属製利器普及の特質」近畿弥生の会第2回テーマ討論会:石器から鉄器への移行期における社会の変革を考える, 近畿弥生の会, 同志社大学, 2006/4

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2004年度~2006年度、若手研究(B)、代表者:寺前直人

課題番号:16720184

研究題目:弥生時代における経済構造の研究——石器流通と金属器流通の比較——

研究経費:2006年度 直接経費 500,000円 間接経費 0円

研究の目的:

属器と石器の量的比率が劇的に変化する弥生時代に属する資料を中心に資料集成を進め、これまで石器と鉄器の関係性でしか論じられなかった当該期の素材変化について、青銅器を加えることにより、全く異なった経済構造の変化過程が復元できる可能性をみいだすことを目的とする。

3-6-2. 2007年度~2009年度、若手研究(B)、代表者:寺前直人

課題番号:19720204

研究題目:武器・農工具の着装方法に基づく日本列島における金属製利器普及過程の研究

研究経費:2007年度 直接経費 900,000円 間接経費 0円

研究の目的:

これまで個別に研究されてきた弥生時代の斧や武器である石器、金属器そして木器を、着柄方法とそれに関する技術を中心に分析し、様式的に分類することにより、①着装方法を軸とする新しい様式、②異なった素材の生産体制が相互に関連した変遷過程を提示することである。そして、石製利器が鉄製利器に置換していく過程を実証的かつ連続的に論じることをめざす。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

考古学研究会・常任委員

1999年4月～現在に至る

## 2-11 人文地理学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

小規模教室ながら、現代の人文地理学の主要分野である空間分析および人間—環境関係について、先端的な研究を推進することに努め、同時にそれを教育に反映させることを目指している。また当教室の地図史研究の伝統を継承しつつ、近代地図作成に関連する学外の研究者との共同研究を組織している。

教育においては、先端の研究を意識しつつ、その実行につながるような視野と能力を修得できるよう努力している。またコンピュータ・リテラシーを重視し、各種データの整理、統計分析、プレゼンテーションの実習を課すほか、調査対象地域に関するさまざまな資料の収集、インタビューからデータの解析、報告にいたる作業も並行して実施している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：小林 茂

准教授：堤 研二

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	7	2	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 1名、社会人学生 0名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	3	0	0	1	0
'07	4	2	0	0	0
小計	7	2	0	1	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	0	0	0
計	1	0	1

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

渡辺理絵「近世城下町における武家の屋敷管理と住民把握——米沢藩を基軸として——」2006/9

主査：小林 茂 副査：村田路人、堤 研二

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	1	0	0	0	0	1
'07	1	0	0	0	0	1
計	2	0	0	0	0	2

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	5	0	0	0	5
'07	0	7	2	0	0	9
計	0	12	2	0	0	14

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

##### 【2006年度】

三木和美「大阪キタにおける路上活動者とその社会的ネットワーク——梅田新道歩道橋界限を中心として——」『人文地理』58-5, pp. 489-503, 2006/10(査読付き学会誌)

##### 【2007年度】

波江彰彦「PLS回帰を用いた地域分析の試み」『地理学評論』80-4, pp. 178-191, 2007/4(査読付き学会誌)

## (2)口頭発表

【2006年度】

波江彰彦「PLS回帰を用いた地域分析の試み——福井県におけるごみの排出を事例として——」日本地理学会秋季学術大会、静岡大学浜松キャンパス、2006/9/23(『日本地理学会発表要旨集』70, p. 79)

波江彰彦「都市ごみの地域差とその時系列変化——戦後の大阪市を事例に——」、日本地理学会地方行財政の地理研究グループ集会、静岡大学浜松キャンパス、2006/9/24

池中香絵「奈良市大和平野地域における里山フィールド活動」人文地理学会大会、近畿大学、2006/11/12(『2006年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 116-117)

多田元信「近畿地方合併市町の類型化と各類型の行政課題」日本地理学会春期学術大会、東洋大学、2007/3/20(『日本地理学会発表要旨集』71, p. 39)

久高賢市「少子化にともなう高校体育系部活動の空間変動——全国高等学校総合体育大会(インターハイ)山口県予選を例として」日本地理学会春期学術大会、東洋大学、2007/3/20(『日本地理学会発表要旨集』71, p. 50)

【2007年度】

波江彰彦「都市におけるごみ排出の時間変動——大阪市の事例分析とその研究課題——」人文地理学会都市圏研究部会(経済地理学会中部支部・日本都市地理学会と共催)、名古屋都市センター、2007/7/7(『経済地理学年報』53(4), pp. 431-432, 『人文地理』60(1), pp. 79-80)

渡邊英明「近世関東における定期市の新設・再興とその実現過程」日本地理学会秋季学術大会、熊本大学、2007/10/7(『日本地理学会発表要旨集』72, p. 58)

岡本有希子・長澤良太・今里悟之・久武哲也・小林茂「戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の評定について」日本地理学会秋期学術大会、熊本大学、2007/10/7(『日本地理学会発表要旨集』72, p. 59, 『外邦図研究ニューズレター』5, pp. 93-97)

渡邊英明「村明細帳を用いた近世武蔵国における市場網の分析」人文地理学会大会、関西学院大学、2007/11/19(『2007年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 36-37)

石橋諭「大屋霊城の都市公園論とその実践——史跡名勝の保存と整備——」人文地理学会大会、関西学院大学、2007/11/19(『2007年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 48-49)

久武哲也・鳴海邦匡・石橋諭・小林茂「総合地理研究会と皇戦会——初期地政学グループの活動——」人文地理学会大会、関西学院大学、2007/11/19(『2007年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 58-59, 『外邦図研究ニューズレター』.5, pp. 98-102)

岡本有希子「中山間地域における集落営農の展開——鳥取県を事例として——」人文地理学会大会、関西学院大学、2007/11/19(『2007年度人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 72-73)

今里悟之・池中香絵・岡本有希子・小林茂「アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について」第10回外邦図研究会、立正大学大崎キャンパス、2008/2/10

三木和美・亀山玲子・金美英・竹内加枝・小林茂「高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について」第10回外邦図研究会、立正大学大崎キャンパス、2008/2/10

## (3)その他(書評・翻訳など)

【2007年度】

今里悟之・池中香絵・岡本有希子・小林茂(2008)「アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について」、『外邦図研究ニューズレター』5, pp. 77-79, 2008/3

小林茂・金美英「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録について」『外邦図研究ニューズレター』.5, pp. 60-62, 2008/3

三木和美・亀山玲子・金美英・竹内加枝・小林茂「高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について」『外邦図研究ニューズレター』5, pp. 84-87, 2008/3



### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

渡辺理絵、日本国際地図学会第1回論文奨励賞、日本国際地図学会、2006年度(授賞式、2007/2/24)、受賞対象は論文「日本-中国間の地図作製技術の移転に関連する資料について」(『地図』42(3), pp.15-30, 2004/9刊)

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:2名 (計2名)  
2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)  
2007年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度~2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
なし

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度~2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名  
2006年度:0名 2007年度:2名  
<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名  
2006年度:0名 2007年度:0名

### 9. 刊行物

2007年度 『人口減少期の地域社会における集落システムと生活維持に関する地理学的研究』(平成17年度~19年度科学研究費補助金、基盤研究(C)(1)研究成果報告書、研究代表者:堤研二、2008/3)  
『外邦図研究ニューズレター』5号(2007年度、国土地理協会研究助成、科学研究費補助金[基盤研究(A)(1)]中間報告書、研究代表者:小林茂、2008/3)

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第9回外邦図研究会 2007年10月27-28日

### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

### 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

#### 12-1. 教育活動

2001年以後、コンピュータやプリンタなどの充実に努め、現代人文地理学の基本的手法である統計解析、とくに多変

量解析の実習をルーティン化するとともに、近年では地理情報システム(GIS)関係のソフトの充実に努めている。またコンピュータやプリンタ、スキャナーの技術革新にあわせて、その更新にも努めてきた。運営費交付金だけでなく、各種の外部資金もこれらにあてていることはいままでのない。

その結果、卒業論文や修士論文で多変量解析を行うものが増加し、付図もコンピュータで作製するようになっている。また近年では、GIS を利用するものも増大している。卒業論文・修士論文の発表会、さらに学会発表では、パワー・ポイントによるプレゼンテーションを義務づけ、コンピュータで作製する図もあわせて、その内容とともに、技術もいちじろしく向上した。

またフィールド・ワークに関する基礎的訓練を、室内・屋外での実習と現地調査実習の諸形態で実施し、調査能力を有する学生の養成に努めており、調査データを多変量解析や GIS で分析する卒業論文・修士論文も提出されている。

ただし、教室の規模が小さく、GIS の本格的な講義や実習を十分に提供することは困難で、毎年立命館大学で開かれるセミナーに大学院生を派遣して、その能力の向上を図っているが、将来は GIS 技術士の資格の授与なども考慮に入れていきたい。

以上にあわせて、大学院生・研究生による学会誌への論文の投稿や学会での口頭発表も恒常化しつつある。小規模教室ながら一時は2名の大学院生が日本学術振興会の特別研究員(DC)に採用され、また当教室で学位を取得した元院生が、研究成果公開促進費(学術図書)をえて学位論文を学術書として刊行し、あわせて日本学術振興会の特別研究員(PD)に採用された(2008年4月)のもその効果といえよう。今後は学会誌に掲載される論文の増加とともに博士の学位の授与を増加させたい。卒業生の就職は順調で、毎年ほぼ全員が一般会社、公的機関の職員のほか、システム・エンジニア、教員のような専門職にも就いている。

他方、放送大学の講義ビデオの作製や教科書『人文地理学』の編集ならびに執筆をおこない、2007年度はこれを更新して、内容の向上に努めている。また、大学院生には、TA や RA の機会を積極的に利用し、学生指導を経験させるようにしており、多変量解析や GIS に関するスキルが学生のあいだで伝達されるようになっているのは、その効果といえよう。

今後は、学部学生も含め、学生数の増加にも努力したい。

## 12-2. 研究活動

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載の増加、研究書による研究成果の公表、研究成果の国際雑誌への掲載などを実現してきた。

他方、学外の研究者との連携を強め、代表者として科学研究費の取得に努めてきた。この効果により、現在、教室構成教員によって基盤研究 2 件が取得されているほか、国土地理協会、三菱財団など、民間の財団の助成も得ている。とくに小林が共同研究を主宰してきたプロジェクトでは、1945年8月まで日本がアジア太平洋地域で作製した地図の研究を推進している。全国の研究者の参加をえて研究会を組織し、学会発表も積極的に行うほか、新聞や雑誌の取材に応じている。資料整理や目録作成にたずさわった大学院生の学会や研究会での発表も奨励している。

海外に関係した活動としては、堤が 2007年8月開催の A Workshop on “Social Capital and Development Trends in Japan’s and Sweden’s Countryside”に参加してチェアパーソンを務めるとともに、共同開催の国際地理学連合過疎地域研究グループの巡検案内を担当し“Social ties and “Social Capital” in areas under shrinking and marginalization process in Japan” というタイトルでの発表も行っている(MARG, Kushiro city, Hokkaido prefecture, Japan)。また、小林は片山剛教授(東洋史)の科研費による研究に協力し、台北で資料調査をおこなうほか、代表者をつとめる科研費により、ワシントンのアメリカ議会図書館・公文書館でも近代地図ならびに日本軍撮影の空中写真の調査を行った。くわえて、歴史地図や環境史に関する国際シンポジウム(ソウルおよび神戸)に参加するほか、ネパールでのマラリアに関連する調査の成果を国際的医学雑誌に発表するとともに、新しい地域研究の国際雑誌、International Journal of South Asian Studies にも寄稿し、受理されている。

当教室は小規模であるがゆえに、教員・大学院生が相互に協力して研究を進めざるをえない状況にあるが、今後はさらにその展開に向けて努力していきたい。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 小林 茂 教授

1948年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授を務めている。専攻: 文化地理学/文化生態学。

##### 1-1. 論文

小林茂, 渡辺理絵 「近代東アジアにおける地図作製技術の移転:日本を中心に」千田稔(編)『アジアの時代の地理学:伝統と変革』古今書院, pp. 145-158, 2008/3

小林茂, 鳴海邦匡 「沖縄県における土地整理事業の準備過程:地図作製を中心に」『待兼山論叢 日本学編』, 41, 大阪大学文学研究科, pp. 1-24, 2007/12

Suzuki, A., Hamano, S., Shirakawa, T., Watanabe, K., Endo, T., Sharma, S., Jha, B., Achariya, G. P., Nishiyama, K., Fukumaki, Y. and Kobayashi, S., “The distribution of hereditary erythrocytic disorders associated with malaria, in a lowland area of Nepal: a micro-epidemiological study” *Annals of Tropical Medicine and Parasitology*, (Liverpool School of Tropical Medicine), 101-2, Maney Publishing, pp. 113-122, 2007/3

Kobayashi, S., “Strategies to cope with smallpox in the peripheral areas of East Asia during the early modern era”脇村孝平『近代現代アジアにおける「健康」の社会経済史:疾病、開発、医療、公衆衛生』(2004～2006年度科学研究費補助金(基盤研究[B])研究成果報告書), 大阪市立大学経済学研究科, pp. 23-33, 2007/3

##### 1-2. 著書

小林茂, 杉浦芳夫(共編著)『改訂版 人文地理学』放送大学教育振興会, 329p., 2008/3

鳴海邦匡, 大澤研一, 小林茂(共編著)『城下町大坂:絵図・地図からみた武士の姿』大阪大学出版会, 100p., 2008/2

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Kobayashi, Shigeru(Proceeding) “The exploitation of forest resources and landscape change in Japan during the past 200 years” Mizoguchi, T., (ed.) *The Environmental History of Europe and Japan*, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, pp. 177-183, 2008/3

小林茂 「近代的土地所有と伝統的土地制度:「永小作」をめぐる日本と台湾」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 3-8, 2008/3

小林茂 「外邦図研究の7年」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 1-2, 2008/3

久武哲也, 小林茂(共著) 「浅井辰郎先生(1914-2006)と外邦図」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 21-24, 2008/3

金美英, 小林茂(共著)(資料紹介) 「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録について」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 60-62, 2008/3

今里悟之, 池中香絵, 岡本有希子, 小林茂(共著)(資料紹介) 「アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 77-83, 2008/3

三木和美, 亀山玲子, 金美英, 竹内加枝, 小林茂(共著)(資料紹介) 「高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 84-90, 2008/3

小林茂 「視野をひろく、オーソドックスに(若手研究者への手紙)』『学術月報』60-7, 日本学術振興会, p. 97, 2007/7

小林茂 「地名と場所イメージをセットに(社会科にとって都道府県指導の意味とは)』『社会科教育』44-5, 明治図書, p. 9, 2007/5

小林茂, 森野良典(共著)(解説と翻訳) 「ネパールの国民統合と言語問題:国民語政策提言委員会答申(翻訳)とその背景」前平泰志(編)『ネパールにおけるマージナルグループの教育様式の政治人類学的研究』(平成12～15年度科学研究費補助金(基盤研

究[B]研究成果報告書), 京都大学大学院教育学研究科, pp. 101-153, 2007/3

小林茂, 渡辺理絵(共著)「近代東アジアの土地調査事業と地図作製:地籍図作製と地形図作製の統合を中心に」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』(平成 18 年度科学研究費補助金(基盤研究[A])中間報告書), 2, 大阪大学文学研究科片山研究室, pp. 4-14, 2007/3

渡辺理絵, 小林茂(共著)「陸地測量部修技所に在学した清国留学生の名簿に関するノート」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』(平成 18 年度科学研究費補助金(基盤研究[A])中間報告書), 2, 大阪大学文学研究科片山研究室, pp. 102-114, 2007/3

久武哲也, 鳴海邦匡, 堤研二, 小林茂(共著)(著作目録と解説)「海野一隆先生の研究業績とその地図学史的意義」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 185-234, 2007/3

小林茂(紙碑)「海野一隆先生(1921-2006)を悼む」『歴史地理学』(歴史地理学会), 49-2, pp. 34-35, 2007/3

小林茂(紙碑)「海野一隆先生のご逝去を悼む」『地図情報』26-2, 財団法人地図情報センター, p. 41, 2006/8

小林茂(書評)「千葉徳爾著『新考 山の人生:柳田國男からの宿題』」『歴史地理学』(歴史地理学会), 48-3, pp. 29-32, 2006/6

#### 1-4. 口頭発表

小林茂, 村山良之, 宮澤仁「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題:戦前期の地域資料の活用に向けて」2008 年春季大会:公開シンポジウム:「地域の知」の統合に向けて:地域情報データベースの利活用, 日本地理学会, 獨協大学, 2008/3(『日本地理学会発表要旨集』73, p. 24, 2008/3)

久武哲也, 鳴海邦匡, 今里悟之, 久武哲也, 小林茂「総合地理研究会と皇戦会:初期地政学グループの活動」2007 年大会, 人文地理学会, 関西学院大学, 2007/11(『人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 58-59, 2007/11)

岡本有稀子, 長澤良太, 小林茂他「戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について」2007 年秋季大会, 日本地理学会, 熊本大学, 2007/10(『日本地理学会発表要旨集』72, p. 59, 2007/10)

Kobayashi, S. “The exploitation of forest resources and landscape change in Japan during the past 200 years”The Oxford-Kobe Environmental Seminar, Oxford-Kobe Seminar, Kobe Institute, Kobe, Japan, 2007/9(*Seminar Programme and Abstracts*, 2007/9)

鳴海邦匡, 小林茂「近世の里山景観研究における正式 2 万分の 1 地形図の意義について」第 50 回大会, 歴史地理学会, 國學院大學, 2007/5(『歴史地理学』49-5, p. 92, 2007/12)

小林茂「時系列地理情報を使った景観変化の研究:その展開と可能性」2007 年春期学術大会:シンポジウム:時系列情報を使った景観変化の研究:その展開と可能性, 日本地理学会, 東洋大学, 2007/3(『日本地理学会発表要旨集』71, p. 18, 2007/3)

岡田郷子, 小林茂「植民地期以前の朝鮮半島における日本の軍用地図作成」2007 年大会, 人文地理学会, 近畿大学, 2006/11(『2006 年人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 30-31, 2006/11)

小林茂「環境史研究の展開と「非平衡系」生態学」第 86 回地理思想史研究部会, 人文地理学会, 京都大学総合博物館, 2006/9(『人文地理』58-6, pp. 79-80, 2006/12)

Kobayashi, S., Okada, S., “Japanese military cartography in the Korean peninsula, 1873-1910”PNC 2006 Annual Conference in Conjunction with PRDLA and ECAI:GIS-Map Collections, Pacific Neighborhood Consortium (PNC), Seoul National University Hoam Faculty House, 2006/8(*Program and Abstract*, p. 46, 2006/8)

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林茂 第 4 回人文地理学会賞, 人文地理学会, 2004/11

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007 年度~2009 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:小林茂

課題番号:19200059

研究題目:アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成

研究経費:2007 年度 直接経費 8,700,000 円 間接経費 2,610,000 円

研究の目的:

経済発展にともなう環境改変の激しいアジア太平洋地域の環境変化を長期的にモニターするために、旧日本軍ならびに植民地政府が作製・撮影した地図、空中写真、さらにそれらによる気象観測資料を集積することを目的とする。これらの資料は、第2次世界大戦終結時に焼却されたものが少なくないが、なお内外の諸機関に利用の便のないまま、凍結状態で保管されているのがみられる。これらを発掘し、目録を作成して利用を促進する。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

1-7-1. 2006年度～2007年度、研究助成、助成金獲得者:小林茂

助成金名:三菱財団人文科学研究助成

研究題目:日本の旧植民地における土地調査事業と地図作製

助成団体名:三菱財団

助成金額:2006～2007年度 直接経費 1,800,000円

研究の目的:

明治以降、日本は国内だけでなく、台湾・朝鮮半島などの植民地でも、土地所有の近代化をめざしつつ、土地調査事業をおこなった。これに際して、国内での経験をふまえつつ、より体系的な事業の遂行をめざし、とくに地籍図については、三角測量を適用して国内よりも整備されたものを作製するとともに、これを縮小しつつ補足的な測量を実施して地形図も作製した。このような土地調査事業は、東アジアへの近代的測量技術の移転に比べ、中国本土の類似事業にも影響という点でも注目され、その構想および実施プロセスを追跡する。

1-7-2. 2006年度、受託研究、助成金獲得者:小林茂

助成金名:日本学術振興会学術システム研究センター実施委託研究

研究題目:環境史分野に関する学術動向の調査・研究:新分野の形成過程の追跡と評価

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006年度 直接経費 2,500,000円

2007年度 直接経費 2,500,000円

研究の目的:

近年、環境問題がグローバルイシューになるにつれて、環境の歴史だけでなく、人間と環境の関係の歴史という意味での環境史に対する関心が各方面で高まっている。ただしこれまでのこの方面の研究は、歴史学、地理学、人文地理学、文化人類学などの分野で、相互に連携のないままに進行しており、発想やテーマ、方法がさまざまである。この振興分野の動向をモニターするとともに、科学研究費の複合新領域の「環境学」分野との関係も検討する。

1-7-3. 2005年度～2009年度、研究助成、助成金獲得者:小林茂

助成金名:社会教育機関等への助成

研究題目:外邦図の研究

助成団体名:財団法人国土地理協会

助成金額:2006年度 直接経費 2,000,000円

2007年度 直接経費 2,000,000円

研究の目的:

旧日本軍および植民地政府がアジア太平洋地域で作製した地図を「外邦図」と呼んでいる。日本国内の各機関に保管されている外邦図の目録を作成するとともに、その作製過程にアプローチし、歴史研究や環境変化の研究に利用できるようにすることを目的とする。本研究助成は2005年度から継続しているもので、助成機関は5年間で予定されている。

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

豊中市教育委員会・今西氏屋敷学術検討委員会委員

2007年11月～2008年3月



日本学術振興会、学術システム研究センター・専門研究員	2006年4月～現在に至る
福岡市史考古専門部会・専門委員	2006年1月～現在に至る
国立民族学博物館・共同研究員	2005年10月～現在に至る
柳川市史・専門研究員	2005年5月～現在に至る
人文地理学会・協議員	2004年11月～現在に至る
日本地理学会・代議員	2004年4月～現在に至る
日本国際地図学会・評議員	2003年2月～現在に至る

## 2. 堤研二 准教授

1960年生。1986年3月、九州大学大学院文学研究科修士課程修了(史学・地理学専攻)。文学修士。1986年4月、国立佐世保工業高等専門学校助手。1988年4月、同校講師。1990年10月、島根大学法文学部講師。1993年7月、同学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。専攻：人文地理学。

### 2-1. 論文

堤研二 「社会的不平等」上野和彦・椿真智子・中村康子(編)『地理学基礎シリーズ(地理学概論)』1, 朝倉書店, pp. 107-111, 2007/4

堤研二 「農村人口の変動」山本正三・奥野隆史・谷内達・田林明(編)『日本の地誌(日本総論Ⅱ)』2, 朝倉書店, pp. 418-423, 2006/8

### 2-2. 著書

堤研二 『人口減少期の地域社会における集落システムと生活機能の維持に関する地理学的研究』75p., 2008/3

堤研二 『林野・水をめぐる環境コモンズと social capital』20p., 2007/3

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堤研二(書評)「書評:J. アーリ著、吉原直樹監訳:『社会を越える社会学:移動・環境・シチズンシップ』、2006年、法政大学出版局刊」『社会学研究』(東北社会学研究会), 81, 東北社会学研究会, pp. 93-97, 2007/4

### 2-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji “Social ties and “Social Capital” in areas under shrinking and marginalization process in Japan”The 4th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group & The 2007 World Conference of International Geographical Conference/C 04.27, 2007/8

堤研二 「人口激減地域の比較研究:山村と炭鉱閉山地域からの人口流出を事例に」日本人口学会第59回大会, 日本人口学会第59回大会, 2007/6

堤研二 「地域連携活動について」千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム——地域での自治活動のあり方を考える——, 千里市民フォーラム, 2007/2

Tsutsumi, Kenji “Drastic depopulation, town renovation and social capital in a coal mining island: a case of Takashima in Nagasaki prefecture”The 3rd Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Social Science Unit of Umeo Univ., MARG, Umeo Univ., 2006/8

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7



## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2005年度～2007年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堤研二

課題番号:17520534

研究題目:人口減少期の地域社会における集落システムと生活機能の維持に関する地理学的研究

研究経費:2006年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究の目的は、広く人口減少期に突入してきている我が国の地域社会スケールでの人口動向をふまえながら、集落単位での地域社会維持システムを点検し、人口が減少していく地域社会における将来のプロジェクションをシミュレートして、ミクロなスケールでの地域政策・地域生活維持を検討する方向性を打ち出すことにある。また、こうした研究を実施するにあたって、これまで申請者が行ってきた研究をもとに構築した研究のフレームワークを精緻化する作業も行う。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

人文地理学会・協議員	2006年11月～2008年10月
日本地理学会・代議員	2006年4月～2008年3月
人文地理学会・編集委員	2005年11月～2006年10月
人文地理学会・評議員	2004年11月～2006年10月

## 2-12 日本文学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本文学専門分野は、所属教員の各時代にあたる専門性を活かし、古代から現代に至るまでの文学作品と作品を生み出す日本の言語・文化の諸相を研究対象とする。隣接専門分野である国語学・比較文学と連携し、広い視野に立った教育と研究活動を行っている。

系統立てられた教育と研究の推進のため、通常の講義・演習以外に研究会を組織することもあり、また、本学以外で開催される研究会・学会への学生・院生の積極的な出席を促し、他大学・他分野の研究者との研究上の交流を促進している。論文作成にあたっては、全教員・全学生の参加する卒業論文・修士論文作成のための中間発表会を国語学・比較文学と合同で行っている。

成果の公表に関しては、国語学とともに、大阪大学国語国文学会を組織し、学会誌『語文』を年 2 回刊行、研究成果発表と卒業生・名誉教授等との交流の場として大阪大学国語国文学会総会を毎年 1 度開催し、大学院生・学部生の研究環境の向上を図っている。学生や客員研究員との交流や意見交換を行うべく、年に 2 度、春と夏に、研修旅行・ハイキングを行い、日本文学関係の各種の研究資料や臨地調査を実施している。

各国からの要請にも応える形で留学生の受け入れも積極的に行っている。現在は、アジア、オセアニア、中東、ヨーロッパの各地域からの留学生が在籍しており、研究方法の模索と博士論文の作成に及ぶ指導を行っている。また、本国内で博士号を取得する研究者・大学院生に対しては、ディサテーション・リサーチのための 1~2 年間の研究生としての留学にも応えている。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008 年 4 月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：出原 隆俊、飯倉 洋一、荒木 浩

准教授：加藤 洋介

助教：仁木 夏実

#### 2. 在学生(2008 年 4 月現在)

2008 年度の学生数*								
*学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
48	17	27	0	0	0	1	3	3

\*国語学と合わせて ※うち留学生 19 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	*学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	16	5	3	1	0
'07	18	5	6	4	0
小計	34	10	9	5	0

\*国語学と合わせて

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	4	0	4
計	5	0	5

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

山口優子「国冬本源氏物語の研究」

主査 加藤洋介 副査 飯倉洋一 荒木浩 2007/3

陳秉珊『徒然草』における中国思想受容の研究——無常観との関わりを視点として——」

主査 荒木浩 副査 飯倉洋一 加藤洋介 2007/9

中井賢一「源氏物語〈二層〉構造論——物語構造と人物造型の論理——」

主査 荒木浩 副査 飯倉洋一 加藤洋介 2008/3

細川知佐子「藤原定家の百首歌とその系譜」

主査 加藤洋介 副査 飯倉洋一 荒木浩 2008/3

Wael・Mohamed・Orabi・Abdelmaksoud「梶井基次郎の作品研究——〈心〉と〈外部〉を中心に——」

主査 出原隆俊 副査 内藤高 加藤洋介 2008/3

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	0	0	14	0	5	19
'07	3	0	12	0	3	18
計	3	0	26	0	8	37

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	1	7	20	0	0	28
'07	0	5	16	0	0	21
計	1	12	36	0	0	49

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

【2006年度】

- 飯倉洋一・岡田純平・片山拓朗・衣笠泉「享保以後大阪出版書籍目録による吉文字野市兵衛刊行年表稿(享保～安永)」『2004～2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書「奇談」書を手がかりとする近世中期上方読物史の構築』pp.128-216, 2007/3
- 恩田雅和「漱石の落語」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会),5, pp. 1-12, 2007/3
- 木下美佳「「宮仕へ」する昔男——『伊勢物語』における機能——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 40, pp. 1-13, 2006/10
- 坂井二三絵「森鷗外『電車の窓』における「女」への視線——一葉からの影響を中心として——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 86, pp. 42-45, 2006/6
- 勢田道生「頼意僧正伝記考——南朝参仕の一僧侶歌人の生涯——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 40, pp. 45-61, 2006/10
- 高嶋藍「『とはずがたり』における女性の装束描写——東二条院の書状による影響——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 39, pp. 58-77, 2006/4
- 隈乗珊「『徒然草』第三十八段における「莊子」受容考——「智」を手懸りとして——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 87, pp. 27-36, 2006/12
- 辻村尚子「其角と荷兮」『語文』(大阪大学国語国文学会), 86, pp. 30-41, 2006/6
- 辻村尚子「其角『雑談集』と尚白」『待兼山論叢(文学篇)』40,pp.15-27, 2006/12
- 井田太郎・尾崎千佳・辻村尚子「三世団十郎俳書『八日目華』について——(翻字・解題編)——」『2006年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究 2』pp.23-31, 2007/3
- 西村真由美「宮沢賢治『土神ときつね』論——樺の木の存在を視座として——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 87, pp.64-77, 2006/12
- 白雨田「薫の人物造型」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 39, pp. 39-57, 2006/4
- 浜田泰彦・篁田将樹「『新斎夜語』解題と翻刻」『2004～2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書「奇談」書を手がかりとする近世中期上方読物史の構築』pp.49-74, 2007/3
- 細川知佐子「『定家卿百番自歌合』三次本への改訂——四季の恋——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 40, pp. 29-44, 2006/10
- 松本陽子「戦時下上海の光景——武田泰淳『上海の螢』——」『2006年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書 日韓国際学術交流フォーラム「方法としての越境——東アジアにおける〈近代〉と異文化接触」』pp.32-37, 2007/3
- 水野亜紀子「芥川龍之介『酒虫』論」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会),5, pp.12-23, 2007/3
- アブドエルマクスード・ワーイル「梶井基次郎「冬の蠅」論——「私の心」と周囲の〈空間〉との関わり——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 5, pp.41-59, 2007/3
- 篁田将樹「季吟の一丁——『伊勢物語拾穂抄』成立私見——」『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 3, pp.80-89, 2006/5
- 飯倉洋一・篁田将樹「翻刻忍頂寺文庫蔵七代目団十郎の配り本三種——『遊行やまざる』『旅中腰かけざる』『なゝゑび

ぞ』——』『2006年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究2』 pp.85-104, 2007/3

#### 【2007年度】

石原のり子『『大鏡』における藤原隆家——実仁親王・輔仁親王を視座として——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 88, pp.21-32, 2007/6

岡崎昌宏「山と学歴に関する試論——北杜夫「異形」を中心に——」『解釈』53-7・8(通巻628・629), pp.39-47, 2007/8

岡崎昌宏「運命への姿勢——辻邦生『天草の雅歌』論——」『解釈』54-1・2(通巻634・635), pp.38-46, 2008/2

木下美佳「翻弄される昔男——『伊勢物語』の「色好み」「つれなし」と冠される女を視点として——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 88, pp.11-20, 2007/6

勢田道生「島原松平文庫蔵『南方紀伝』をめぐって——『南方紀伝』仮名本先行説の再検討——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 42, pp.73-86, 2007/10

高嶋藍『『とはずがたり』における「墨染めの袂」——後半部における二条の着衣描写について——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 89, pp.1-10, 2007/12

高嶋藍・湯城吉信「三木家絵画にみる江戸時代の文人世界——三木家所蔵画幅画賛積文——」『懐徳センター報2008』 pp.51-58, 2008/2

陳秉珊『『徒然草』第九十七段における「莊子」再考』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 41, pp.37-50, 2007/4

辻村尚子「テキストの生成——『文反古』とその周辺——」『テキストの生成と変容』 pp.93-99, 2008/3

西尾元伸「泉鏡花『春昼』『春昼後刻』論——その〈風景〉と「霞」をめぐって——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 89, pp.35-47, 2007/12

野上潤一「東大寺金藏院重祐についての覚書——随心院経蔵理解のための一階梯——」『小野随心院所蔵の文献・画像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開—Vol.III—随心院調査報告・国際研究集会報告・笠置寺調査報告』(科学研究費補助金基盤研究(B)17320039 研究報告書(平成19年度), pp.136-155, 2008/3

浜田泰彦『『本朝二十不孝』論——二十の不孝譚——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 89, pp.11-24, 2007/12

古田雄祐「内田百閒『冥途』における「私」——自己の写し身との関連について——」『阪大近代文学研究』5, pp.34-48, 2008/3

細川知佐子「俊成の『久安百首』「春」と「秋」の歌材と構成——顕輔との比較を中心に——」『国語国文』76-10, pp.22-39, 2007/10

細川知佐子「定家「初学百首」にみる「部立百首を詠む」ということ」『待兼山論叢』41, pp.1-18, 2007/12

ホルカ・イリナ「島崎藤村『春』における〈狂気〉のパラダイム——〈引用〉という叙述方法を視座に——」『奈良教育大学国文研究と教材』31, pp.28-40, 2008/3

アブドエルマクスード・ワーイル「梶井基次郎「城のある町にて」論——峻の〈心〉と「新しい周囲」との関係の観点から」『阪大近代文学研究』6, pp.49-67, 2008/3

## (2)口頭発表

#### 【2006年度】

石原のり子『『大鏡』語り手の設定——侍を中心に——』大阪大学古代中世文学研究会第185回例会, 2006/12/10

石原のり子『『大鏡』語り手の設定』大阪大学国語国文学会, 2007/1/13

木下美佳「陽明文庫蔵近衛政家筆『伊勢物語』について」大阪大学古代中世文学研究会第184回例会, 2006/11/12

木下美佳『『伊勢物語』における「色好み」の女』大阪大学国語国文学会, 2007/1/13

越野優子「源氏物語の喩と本文の新しい様相——〈女郎花〉〈別本〉〈源氏絵〉から」大阪大学古代中世文学研究会第181回例会, 2006/7/2

勢田道生『『新千載集』の和歌関連述懐歌群について』大阪大学古代中世文学研究会第179回例会, 2006/4/30

高嶋藍『『とはずがたり』の装束描写——後半部を中心に——』大阪大学古代中世文学研究会第181回例会, 2006/7/2

竹村明日香「忍頂寺文庫所蔵兵庫口説について——橋づくし、お染久松ものを中心に——」2006年度大阪大学大学院文

- 学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」第2回公開研究会, 2007/1/14
- 丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』における資盛の位置』大阪大学古代中世文学研究会第179回例会, 2006/4/30
- 丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』資盛・隆信歌群の再検討——「色好むと聞く人」をめぐって——』大阪大学古代中世文学研究会第183回例会, 2006/9/16
- 丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』資盛・隆信歌群の再検討——「色好むと聞く人」をめぐって——』和歌文学会第52回大会, 駒澤大学, 2006/10/29
- 陳秉珊『『徒然草』第二百十七段の「徳」について』和漢比較文学会第九十二回東部例会, 鶴見大学, 2006/7/22
- 陳秉珊『『徒然草』第九十一段における兼好の吉凶判断をめぐって』, 大阪大学古代中世文学研究会第183回例会, 2006/9/16
- 辻村尚子・井田太郎・尾崎千佳「享保俳諧のなかの団十郎俳書——忍頂寺文庫蔵本を中心とした多角的アプローチ」2006年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」第2回公開研究会, 2007/1/14
- 辻村尚子「テキストの生成——『文反古』とその周辺——」大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究(2005年度—2007年度)「テキストの生成と変容」特別研究会, 大阪大学, 2007/3/16
- 中井賢一「宇治十帖〈解体〉の論理」大阪大学古代中世文学研究会第187回例会, 2007/3/24
- 西尾元伸「泉鏡花『春昼』『春昼後刻』について——風景の用い方に関する考察」日本学術振興会人文社会科学振興プロジェクト第2回フォーラム, 大阪大学, 2006/8/10
- 西尾元伸「『春昼』『春昼後刻』考——〈風景〉を視座として——」泉鏡花研究会第46回大会, 同志社大学, 2006/12/9
- 白雨田「薫の述懐」, 大阪大学古代中世文学研究会第186回例会, 2007/2/17
- 浜田泰彦『『本朝二十不孝』論——「今の世」の不孝譚——』西鶴研究会第24回例会, 青山学院大学, 2007/3/29
- 人見匡美『『恋塚物語』について』大阪大学古代中世文学研究会第186回例会, 2007/2/17
- 細川知佐子『『定家八代抄』初撰本について——百首歌との関連——』和歌文学会平成18年度12月例会, 立教大学, 2006/12/16
- 松本陽子「戦時下上海の光景——武田泰淳『上海の蛍』論——」韓日国際学術交流フォーラム「方法としての越境」韓国外国語大学/ソウル・韓国, 2006/12/9
- 松本陽子「武田泰淳『上海の蛍』の諸相」日本近代文学会関西支部2006年度春季大会, 関西学院大学, 2006/6/10
- 村山識「『新古今和歌集』四季部における「歴史的配列」を巡って」大阪大学古代中世文学研究会第180回例会, 2006/5/27
- 山田理恵「中院通勝「句題五十首」について——四字句題と四字結題——」大阪大学古代中世文学研究会第182回例会, 2006/7/26
- 山田理恵「中院通勝「句題五十首」について——四字句題と四字結題——」和漢比較文学会第25回大会, 同志社女子大学, 2006/9/24
- アブドエルマクスード・オラビ・ワーイル「梶井基次郎「城のある町にて」を中心に」「環境と文学」(日本学術振興会人文社会科学振興プロジェクト第3回フォーラム, 大阪大学, 2007/3/17)
- 【2007年度】**
- 井真弓『『石清水物語』における男色の再評価』中世文学会, 平成19年度春季大会, 2007/6/3
- 太田嵩子『『長谷雄草紙』と類話の比較——女が水になる場面について——』大阪大学古代中世文学研究会第190回例会, 2007/6/30
- 岡室敦子「夢枕に立つ藤壺——「いみじく恨みたまへる」について——」大阪大学古代中世文学研究会第191回例会, 2007/7/21
- 木下美佳「刈谷市立図書館蔵『伊勢物語愚見抄』について」大阪大学古代中世文学研究会第193回例会, 2007/11/24
- 越野優子「源氏物語本文分類の変更へ——伝国冬筆薄雲卷一冊(天理大学附属天理図書館蔵)を素材として」大阪大学古代中世文学研究会第192回例会, 2007/10/13
- 坂井二三絵『『虞美人草』における視線——〈勸善懲惡〉の裂け目——』2007年度日本近代文学会関西支部秋季大会, 天理大学, 2007/11/10



- 神明あさ子「近世怪談集と中国説話——『拾遺御伽婢子』を中心に——」同志社大学国文学会研究発表会, 同志社大学, 2007/6/24
- 勢田道生『『南方紀伝』の成立をめぐる——『本朝通鑑』依拠説の再検討——』大阪大学古代中世文学研究会第188回例会, 2007/4/28
- 勢田道生『『南方紀伝』と『桜雲記』の関係について』大阪大学古代中世文学研究会第196回例会, 2008/2/23
- 高嶋藍『『とはずがたり』石清水八幡宮における邂逅について』大阪大学古代中世文学研究会第189回例会, 2007/5/26
- 丹下暖子『『讃岐典侍日記』の和歌をめぐる』大阪大学古代中世文学研究会第194回例会, 2007/12/15
- 野上潤一『『搦囊鈔』年中行事記事の基礎的検討——『年中行事歌合』／(ネガとしての)『公事根源』享受史のために——』大阪大学古代中世文学研究会第189回例会, 2007/5/26
- 白雨田「宿木巻の薫像について」大阪大学古代中世文学研究会第192回例会, 2007/10/13
- 人見匡美「小浜市立図書館酒井家文庫蔵『大江山鬼神退治』について」大阪大学古代中世文学研究会第193回例会, 2007/11/24
- 藤原香織『『狭衣物語』における衣装描写について』大阪大学古代中世文学研究会第191回例会, 2007/7/21
- 古田雄祐「内田百間『冥途』論——「私」を引きつける〈関わり〉の内実——」大阪教育大学 日本・アジア言語文化学会, 2007/11/23
- 古田雄祐「内田百間『東京日記』と〈環境〉——「その十七」を中心に——」第4回「環境と文学」フォーラム(「環境と文学——〈環境文学(Eco-Literature)〉の可能性とその社会的効用」), 2008/3/15
- 浜田泰彦「「慰改て咄しの点取」考——西鶴の「物は尽し」——」日本近世文学会平成19年度秋季大会, 佐賀大学, 2007/11/10
- 細川知佐子「俊成の『久安百首』から『千載集』へ——桜と月の歌群を中心に——」大阪大学古代中世文学研究会第190回例会, 2007/6/30
- 水野亜紀子「樋口一葉『この子』——ありふれたことを話題とする「私」の語り——」平成20年度大阪大学国語国文学会総会, 2008/1/12
- 宮本正章「与謝野晶子の「幻の源氏物語講義」について」大阪大学古代中世文学研究会第196回例会, 2008/2/23
- 村山識「鎌倉期勅撰集と宮廷秩序——「御製のそばに」追考——」大阪大学古代中世文学研究会第188回例会, 2007/4/28
- 村山識「鎌倉期勅撰集における御製の空間——「御製のそば」という配列意識をめぐる——」和歌文学会平成19年度7月例会, 四天王寺国際仏教大学, 2007/7/7
- 村山識「「成る」の効用——京極派和歌における動態表現の一考察——」大阪大学古代中世文学研究会第195回例会, 2008/2/2

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2007年度】

- 石原のり子「紹介 滝川幸司著『天皇と文壇——平安前期の公的文学』『語文』(大阪大学国語国文学会), 89, pp.59, 2007/12
- 丹下暖子「紹介 田島智子『屏風歌の研究 論考篇・資料篇』『語文』(大阪大学国語国文学会), 89, pp.60-61, 2007/12

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

辻村尚子、第16回柿衛賞、平成19年6月3日 財団法人柿衛文庫

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)  
 2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2007年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 9名

2006年度：2名 2007年度：7名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 4名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名  
その他 2名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 9名

2006年度：5名 2007年度：4名

## 9. 刊行物

2006年度 『阪大近代文学研究』（阪大近代文学研究）4号  
『語文』（大阪大学国語国文学会）86・87号  
『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）39・40号  
『上方文藝研究』（上方文藝研究会）3号

2007年度 『阪大近代文学研究』（阪大近代文学研究）5号  
『語文』（大阪大学国語国文学会）88・89号  
『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）41・42号  
『上方文藝研究』（上方文藝研究会）4号

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

[国内学会の開催]

2007年度 大阪大学国語国文学会総会	2007年1月13日
日本近代文学会関西支部春季大会	2007年6月9日
中古文学会関西例会第17回例会	2007年9月8日
2008年度 大阪大学国語国文学会総会	2008年1月12日

[国際学会の開催]

国際日本文学共同研究集会(国文学研究資料館との共催)	2007年3月4日
「国際的相関研究のありか」とゆくえ」	グランキューブ大阪(大阪国際会議場)

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会 第179回～第196回	2006年4月11日～2008年2月23日
上方読本を読む会	06年度 4月15日、5月20日、6月17日、7月15日、10月21日、1月27日
	07年度 4月28日 6月30日 7月21日 9月22日 11月17日 2月9日 3月22日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

専門分野主催の研究会等の活動については、10.及び12-2.に情報が関連するため、両項に詳述した。

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

日本文学専門分野は、学部では同一専修を構成する国語学、隣接専門分野の比較文学と連携し、学生の指導を行っている。大学院研究発表会を2回、学部卒業論文中間発表会・大学院修士論文中間発表会を1回行い、全教員・学生の参加のもと、のべ1週間に涉って幅広い視点から指導を行っている。その発表は、学会発表に準じ、予稿集の提出、時間厳守の発表を課している。大学院生はその成果を踏まえ、各研究会・学会への発表へと展開し、1月の論文提出に備えている。

教員は、バランスよく各時代をカバーし、多様な演習・講義を提供している。ただし、本専門分野には非常勤講師がきわめて少なく、近隣の京都大学・奈良女子大学などに比べると数分の一にすぎない。そこで研究会や学会を利用した多様な研究者との交流を院生に指導し、多様な授業提供など、教員の最大限の負担によってカバーしようとしている。

研究に必要な度の高い書籍・雑誌およびCD-ROMは可能なかぎり研究室に常備されるよう配慮されている。学生用PCや必要なソフトも十分とはいかないまでも、かなり整備されている。

国際化に関連して、国際日本文学共同研究集会として「国際的相関研究のありか」とゆくえを国文学研究資料館と共催し、日本文学の国際化という課題について、学生にも対応や自覚を促した。またさまざまな地域から留学してくる学生へも可能な限りきめ細かく対応しているが、日本文学の基礎知識をいかに習得させるかなどの課題もある。

大学院生は総じて研究熱心であり、研究室は夜遅くまで活気にあふれている。ただし、研究室の絶対的なスペースの不足と、分散して位置していることの不便さを解消することが望ましいと思われる。研究室が分散している点については、現在進められている本館耐震改修工事後には、本館4階へと集中できるよう計画されており、問題の解消が期待されることである。

また学生と教員との交流や研修を目的として、日本文学にゆかりの地を訪ねて、春には日帰りのハイキングを、夏には文献資料調査を組み入れた1・2泊の研修旅行を行っている。

### 12-2. 研究活動

個々の教員は、それぞれ中心的に研究するジャンルを中心に学界で広く活動し、院生もまた積極的に学会に参加し、成果の公表や情報の収集に努めているが、それら個々の活動・発表や学術論文執筆の詳細などについては本書に別掲されるので、繰り返さない。ここでは、教員や大学院生などによって組織運営される研究会や共同研究の活動について概観したい。教員が組織する研究会、また大学院生が自主的に企画する研究会は数多い。大阪大学古代中世文学研究会は、この2年間で、第179回(2006年4月30日)から第197回(2008年3月22日)まで19回を数え、のべ37人の研究発表が行われた。その成果は多様な媒体に活字化されているが、本研究会の機関誌『詞林』も、年2回順調に刊行されている(2008年3月まで既刊42号、以後継続中)。

近世文学関係では、「上方読本を読む会」が開かれ、他大学の大学院生をも交えてこの2年間で、13回行われた。2004年には「上方文藝研究会」を卒業生や他大学の大学院生を交えて発足させ、研究誌『上方文藝研究』創刊号を刊行、2007年度には第4号を刊行した。

大阪大学近代文学研究会は、2003年に『阪大近代文学研究』を創刊し、その後も年1回の刊行を順調に続けており、2007年度には第5号を刊行した。

本専門分野所管の忍頂寺文庫所蔵の洒落本については大阪大学学術博物館統合データベースのひとつとして2005年度に画像および書誌データを公開した。

本専門分野は国語学専門分野とともに大阪大学国語国文学会を組織し、年1回学会を開催し、講演・研究発表を行っている。半期に1度、学会誌『語文』(2008年2月時点で既刊89輯)を刊行し、その成果を公表している。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。文学修士。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

##### 1-1. 論文

出原隆俊 「裏側から読む「心」」『語文』89 輯，大阪大学国語国文学会，pp. 25-34，2007/12

出原隆俊 「「Kの代理としての私」——「心」における言葉の＜連鎖＞について——」『国語国文』76 卷 10 号，京都大学文学部国語国文学研究室，pp. 1-21，2007/10

出原隆俊 「透谷における＜内部＞と＜外部＞」『北村透谷研究』(北村透谷研究会)，18，pp. 30-40，2007/6

##### 1-2. 著書

なし

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

出原隆俊(書評) 「佐々木雅發著『独歩と漱石』」『日本近代文学』75，日本近代文学会，pp. 279-282，2006/11

##### 1-4. 口頭発表

出原隆俊他 「解釈の分かれる表現について」2007年応用日語国際学術研討会，台湾応用日語学会，国立高雄餐旅学院，2007/5

出原隆俊 「透谷における＜内部＞と＜外部＞」第三十回 北村透谷研究会全国大会，北村透谷研究会，キャンパスプラザ京都，2006/11

出原隆俊 「欧州へ——「舞姫」から「新生」まで——」懷徳堂春季講座：「旅立ち」，懷徳堂記念会，中之島センター，2006/5

##### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

##### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者：出原隆俊

課題番号：17520112

研究題目：明治中期における関西文壇の研究

研究経費：2006年度 直接経費 700,000円 間接経費 0円

研究の目的：

明治期以降については、東京集中の風潮にあつて、文学活動において関西はローカルな一地域に過ぎないかのように思われがちである。しかし、明治二十年代の前半ごろから、東京から関西の新聞社に移ってきた文学者が何人もいて盛んに発表を行っていたことや、二十年後半ばに、大阪を拠点とした文芸雑誌が相次いで創刊されたことなどは見落とせない。こうした実態についての解明は、一部の雑誌の復刻や、明治三十年代に入ってからとの与謝野晶子たちの「明星」に関心を払われることを除いては、ほとんど皆無であった。具体的な作品の分析を行って地域性の問題を浮かび上がらせようとするということに新しい視点を定める。これらの検討を通して、明治中期の関西の文壇の実態に接近するとともに、既成の文学史で大きな地歩を占めていた作品を相対化することも試みたい。

##### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員

1988年4月～現在に至る

## 2. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学。

### 2-1. 論文

飯倉洋一 「開かれたテキストへ——刊本『文反古』への変容」飯倉洋一(編)『テキストの生成と変容』(大阪大学大学院広域文化表現論講座), 大阪大学大学院広域文化表現論講座, pp. 116-126, 2008/3

飯倉洋一 「秋成和文の生成——『文反古』を中心に——」飯倉洋一・木越治(編)『秋成文学の生成』森話社, pp. 251-272, 2008/2

### 2-2. 著書

飯倉洋一(編)『テキストの生成と変容』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, 204p., 2008/3

飯倉洋一, 木越治(共編)『秋成文学の生成』森話社, 414p., 2008/3

飯倉洋一(編)『「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築』大阪大学文学研究科, 205p., 2007/3

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯倉洋一(書評)「学界時評 近世」『国文学』53-4, 学燈社, pp. 178-179, 2008/3

飯倉洋一 「テキストが生まれる時、テキストが変わる時——共同研究「テキストの生成と変容」をふりかえって——」『テキストの生成と変容』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, pp. 3-8, 2008/3

飯倉洋一 「初期読本」八戸市立図書館・国文学研究資料館『読本事典』笠間書院, pp. 14-23, 2008/2

飯倉洋一他(共著)(対談)「秋成研究の道のり」飯倉洋一・木越治(共編)『秋成文学の生成』森話社, pp. 8-30, 2008/2

飯倉洋一(書評)「生涯・万物の霊・主人公——西田耕三の「起源」」『文学・芸術・文化』19-2, 近畿大学文芸学部, pp. 57-65, 2008/2

飯倉洋一 「秋成と住吉御田植神事」上方文化芸能協会『やそしま』(上方文化芸能協会), 1, 上方文化芸能協会, pp. 34-37, 2007/11

飯倉洋一(書評)「紹介 西田耕三『主人公の誕生』」『国文学』52-12, 学燈社, p. 107, 2007/10

飯倉洋一(書評)「稲田篤信著『名分と命禄——上田秋成と同時代の人々』」飯倉洋一『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 84-6, 東京大学国語国文学会, pp. 75-79, 2007/6

飯倉洋一(学界時評)「学界時評近世」『国文学』52-3, 学燈社, pp. 148-149, 2007/3

飯倉洋一 「「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」の展開」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究2』(「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館), 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館, pp. 5-8, 2007/3

飯倉洋一, 篁田将樹(共著)(翻刻)「翻刻 忍頂寺文庫蔵 七代目団十郎の配り本三種——『遊行やまざる』『旅中腰かけざる』『なゝえびぞ』——」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究2』(「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館), 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館, pp. 85-104, 2007/3

飯倉洋一(影印)、『莊子絵抄』解説と影印 飯倉洋一『「奇談」書を中心とする近世中期上方仮名読物史の構築(2004～2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)』pp. 75-126, 2007/3

飯倉洋一, 岡田純平, 片山拓朗他(共編)(データ)「享保以後大坂出版書籍目録による吉文字屋市兵衛刊行年表稿(享保～安永)」飯倉洋一『「奇談」書を中心とする近世中期上方仮名読物史の構築(2004～2006年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)』pp. 206-216, 2007/3

飯倉洋一(学界時評)「学界時評近世」『国文学』51-10, 学燈社, pp. 164-165, 2006/9

## 2-4. 口頭発表

飯倉洋一 「昇道筆秋成消息文集について」日本近世文学会秋季大会, 日本近世文学会, 佐賀大学, 2007/11

飯倉洋一 『春雨物語』をめぐって「秋成——テキストの生成と変容:秋成——テキストの生成と変容, 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, 大阪大学, 2007/3(『テキストの生成と変容』pp. 98-106, 2008/3)

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/5

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:飯倉洋一

課題番号:16520103

研究題目:「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築

研究経費:2006年度 直接経費 800,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は宝暦四(一七五四)年刊『新增書籍目録』および、明和九(一七七二)年刊『大増書籍目録』という、享保期から明和期に出版された書籍の総合目録である両書に「奇談」として登載される百余点の仮名読物の、文学史的な位置づけを、とくに近世上方の初期読本成立と関わらせる形で行おうとするものである。その結果、従来の近世文学史の記述を考え直す視点を提供することになるのではないかという見通しを立てている。「浮世草子」「読本」らの概念を一度白紙に戻し、あらたな文学史を構築することにもつながるだろう。

2-6-2. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:飯倉洋一

課題番号:19520152

研究題目:上田秋成の和文作品本文の生成と変容についての研究

研究経費:2007年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究において中心的に扱おうとする和文作品は、『藤簍冊子』・『文反古』・『背振翁伝』・『鴛央行』・『春雨梅花歌文卷(仮題)』・『麻知文草稿類(仮題)』所収の文章である。秋成の和文作品は、それぞれが自在に影響しあい、引用されるという〈共振するテキスト群〉という側面を見せている。これを実証的に示すには、Ⅰ和文作品の本文生成の研究(異文との関わり)、Ⅱ和文作品の注釈的研究、Ⅲ秋成の事蹟と和文創作との関わりをめぐる研究が必要である。本研究の特色のひとつは、秋成の和文作品群を〈表現のコーパス〉として捉えることから、その流動性に迫ろうとするものである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1.2006年度大阪大学文学研究科共同研究,代表者:飯倉洋一(分担者 14人)

助成金名:大阪大学文学研究科共同研究

研究題目:忍頂寺文庫・小野文庫の研究

助成団体名:大阪大学

助成金額:640千円

2-7-2.2007年度大阪大学文学研究科共同研究,代表者:飯倉洋一(分担者 16人)

助成金名:大阪大学文学研究科共同研究

研究題目:忍頂寺文庫・小野文庫の研究

助成団体名:大阪大学

助成金額:200千円



## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近世文学会・「近世文藝」編集委員	2006年4月～2008年3月
上方文化芸能協会・運営委員	2005年7月～現在に至る
国文学研究資料館・共同研究員	2005年4月～現在に至る
懐徳堂記念会・運営委員幹事	2003年4月～現在に至る
日本近世文学会・常任委員	2002年6月～現在に至る
日本近世文学会・委員	2000年6月～現在に至る
柳川市史・専門研究員	1995年4月～現在に至る
国文学研究資料館・文献資料調査員(特別調査員)	1993年4月～現在に至る

## 3. 荒木浩教授

1959年生。1986年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、同文学部・文学研究科助教授を経て現職。専攻：日本文学。

### 3-1. 論文

荒木浩 「安禅寺本小記——ハーバード大学国際研究集会報告より」荒木浩(編)『小野随心院所蔵文献・図像調査を基盤とする 相關的・総合的研究とその展開—Vol. III—随心院調査報告・国際研究集会報告・笠置寺調査報告』3, 大阪大学文学研究科, pp. 167-171, 2008/3

荒木浩 「人間五十年、下天の内をくらぶれば」続貂——聖憲『阿字観』という場をめぐって——付・随心院本『寓言鈔』訓読 荒木浩(編)『小野随心院所蔵文献・図像調査を基盤とする 相關的・総合的研究とその展開—Vol. III—随心院調査報告・国際研究集会報告・笠置寺調査報告』3, 大阪大学文学研究科, pp. 7-44, 2008/3

荒木浩 「〈孝〉と〈捨身〉と——芥川龍之介「今昔物語鑑賞」改稿の周辺など——」飯倉洋一(編)『テキストの生成と変容』(大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座共同研究), 大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座, pp. 19-29, 2008/3

荒木浩 『大和物語』と『今昔物語集』——遍昭出家譚をめぐる時代観とジェンダー——小林保治(監修)『中世文学の回廊』勉誠出版, pp. 15-30, 2008/3

荒木浩 『今昔物語集』に於ける『三宝感応要略録』続貂 後藤昭雄監修、大阪大学三宝感応要略録研究会編『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』勉誠出版, pp. 161-184, 2007/12

荒木浩 「明恵と阿字観の周辺——「安立」の用例から——付・随心院蔵『阿字観』略 檜尾口決／覚鑿阿字観』翻刻 荒木浩(編)『小野随心院所蔵文献・図像調査を基盤とする 相關的・総合的研究とその展開—Vol. II—講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』Vol. II, 大阪大学文学研究科, pp. 76-91, 2007/3

荒木浩 「英語論文講読を基点とする国際共同の日本文学研究と教育の試み——日本文学の学術基盤再構築のためのケーススタディとして——(本編)伊井春樹(編)『日本文学研究ジャーナル』1, 国文学研究資料館, pp. 80-96, 2007/3

### 3-2. 著書

荒木浩他(編)『小野随心院所蔵文献・図像調査を基盤とする 相關的・総合的研究とその展開—Vol. III—随心院調査報告・国際研究集会報告・笠置寺調査報告』Vol. III, 大阪大学文学研究科, 350p., 2008/3

荒木浩 『日本文学 二重の顔 (成る)ことの詩学へ』大阪大学出版会・阪大リーブル2, 350p., 2007/4

荒木浩他(編)『小野随心院所蔵文献・図像調査を基盤とする 相關的・総合的研究とその展開—Vol. II—講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告』Vol. II, 大阪大学文学研究科, 188p., 2007/3

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒木浩(研究レポート)「ハーバード大学国際研究集会について——日本文学の国際的研究展開に関する一実践についての経緯と概要——」伊井春樹(編)『日本文学研究ジャーナル』2, 国文学研究資料館, pp. 201-214, 2008/3

- 荒木浩(翻訳)「ラジャシュリー パンディー (Rajyashree Pandey) 著 中世説話の中の演ずる身体——『沙石集』の和泉式部物語をめぐって」伊井春樹『日本文学研究ジャーナル』2, 国文学研究資料館, pp. 129-158, 2008/3
- 荒木浩(研究レポート)「インドにおける日本文学——ネルー大学滞在を通じて」伊井春樹(編)『日本文学研究ジャーナル』2, 国文学研究資料館, pp. 183-199, 2007/3
- 荒木浩(エッセイ)「手書きのころ」『日本古典文学会々会報別冊 日本古典文学会のあゆみ』(財団法人日本古典文学会), 財団法人日本古典文学会, pp. 56-57, 2006/12
- 荒木浩(書評)「書評 木村紀子著『書と声わざ——『宇治大納言物語』生成の時代——』」『説話文学研究』(説話文学会), 41, 説話文学会, pp. 187-193, 2006/7

### 3-4. 口頭発表

- 荒木浩 「北山のなにかし寺再読——寺院研究が照らし出す『源氏物語』若紫の世界——」BEYOND BUDDHOLOGY: NEW DIRECTIONS IN THE STUDY OF JAPANESE BUDDHISM: BUDDHIST TEMPLES AND THEIR CONTRIBUTION TO JAPANESE CULTURAL HISTORY 第一セッション・仏教寺院・文庫研究によって解明される日本文化・文学の世界, 日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究——尼寺調査の成果を基礎として——・小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開・日本文学の国際的共同研究基盤の構築に関する調査研究, ハーバード大学ライシャワー研究所, 2007/11
- 荒木浩 「〈すさま〉と日本古典文化——裂けた顔の仏像とその二重性をめぐって——“Aperture” and Japanese Classical Culture——Study on Torn Face Statue of Houshi and its Duality——」国際交流基金ニューデリー日本文化センター講演会: 日本古典文学, 国際交流基金ニューデリー日本文化センター, 国際交流基金ニューデリー日本文化センター Rabindranath Tagore Hall, 2007/9
- 荒木浩 「『宇治拾遺物語』再読とその方法」説話文学会 2007 年大会シンポジウム: デジタル社会の中の説話文学, 説話文学会, 慶應義塾大学, 2007/6
- 荒木浩 「宇治八の宮再読」国際的相関研究のありかとかゆくえ Re-thinking International, Interdisciplinary and Transcultural Studies of Japanese Literature: International Workshop in Osaka: そばみたる『源氏物語』——Genjimonogatari in Profile, 国文学研究資料館・大阪大学大学院文学研究科 国際日本文学共同研究集会, グランキューブ大阪, 2007/3
- 荒木浩, ラジャシュリー・パンディー他 「物語の内と外——演じる身体、ジェンダー、セクシュアリティの周辺(ディスカッサント)」国際的相関研究のありかとかゆくえ Re-thinking International, Interdisciplinary and Transcultural Studies of Japanese Literature: International Workshop in Osaka: 国際的相関研究の試み——個別研究と議論, 国文学研究資料館・大阪大学大学院文学研究科 国際日本文学共同研究集会, グランキューブ大阪, 2007/3
- 荒木浩 「「宝誌和尚立像のイコノロジー再読」」「宝誌和尚立像のイコノロジー再読」Rereading the Iconology of the Standing Statue of priest Hōshi (Pao-chih): Visions and Discourse in Japanese Buddhism, ハーバード大学・ライシャワー研究所, ハーバード大学, 2006/11

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 荒木浩 第十八回 日本古典文学会賞, 財団法人 日本古典文学会, 1992/6

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 荒木浩

課題番号: 17320039

研究題目: 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開

研究経費: 2006 年度 直接経費 3,600,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 4,400,000 円 間接経費 1,320,000 円

研究の目的:

研究の柱は、以下の6点ほどに集約される。

- 1, 随心院所蔵文献について、その奥書・識語等を摘記・集成して、随心院文献の来歴、また寺院の人的・学問的交流を解明する基礎とする。
  - 2, 随心院図像についての研究を進展させ、その目録を作成する。
  - 3, 随心院所蔵文献の個別的精読・分析を行い、成果を公表する。
  - 4, 随心院関連寺院等へ調査範囲を伸ばし、本研究後の展開を模索する。
  - 5, 本研究に参加した人文諸学(日本文学、日本史、東洋美術史、日本思想史他)の研究者のジャンル相関的な総合研究を論文等のかたちに結実し、条件が整えば、その成果を前提に、海外でのワークショップなどを企画したい。
- 上記研究成果を、研究会、講義、演習等を通じて、大学院生の研究・教育にフィードバックする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

説話文学会・委員

1997年4月～現在に至る

## 4. 加藤 洋介 准教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授を経て、2006年4月より現職。専攻：日本平安文学。

### 4-1. 論文

---

加藤洋介 「角屋保存会蔵『源氏物語』写本末摘花巻について」『角屋研究』17, pp. 1-9, 2008/3

加藤洋介 「書写という行為——『伊勢物語』テキストの生成と変容——」『テキストの生成と変容』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書), 大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座 飯倉洋一, pp. 31-32, 2008/3

加藤洋介 『『源氏物語大成』の三条西家本』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 42, pp. 62-72, 2007/10

加藤洋介 「建仁二年定家本伊勢物語の復原」『中古文学』(中古文学会), 79, pp. 91-103, 2007/6

加藤洋介 「定家本伊勢物語の展開」『語文』(大阪大学国語国文学会), 88, pp. 33-44, 2007/6

加藤洋介 「作られた河内本——書陵部本源氏物語をめぐる——」日向一雅(編)『源氏物語の始発——桐壺巻論集』竹林舎, pp. 513-533, 2006/11

### 4-2. 著書

---

加藤洋介 『河内本源氏物語の本文成立史に関する基礎的研究(平成15～18年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書)』130p., 2007/3

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

加藤洋介 「定家本伊勢物語の展開」大阪大学国語国文学会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2007/1

加藤洋介 「建仁二年定家本伊勢物語の復原」中古文学会創設四〇周年記念大会, 中古文学会, 中京大学, 2006/10(『中古文学』79, pp. 121-122, 2007/6)

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:加藤洋介

課題番号:15520113

研究題目:河内本源氏物語の本文成立史に関する基礎的研究

研究経費:2006年度 直接経費 900,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究の主たる目的は、河内本源氏物語が底本とした本文および校訂に使用した本文を具体的に明らかにし、その本文成立史の具体的様相を解明することにある。従来河内本源氏物語の成立については、源親行が記した奥書以外、その具体的事情はほとんど明らかにされていない。本研究はこの問題を解明するため、これまでの本文研究ではほとんど考察の対象とされなかった、音便や表記などの比較的軽微な異同とされてきた異文に注目し、青表紙本や別本との一致状況から、河内本源氏物語の巻ごとの底本選択状況および校訂のありようについて、具体的に明らかにすることを目的としている。そのための作業として最も重視しているのは、唯一の校本である『源氏物語大成』の別本校異について、刊行の際に割愛された音便や表記の異同を、原本や複写によりながら増補・修正することである。それによって上記の問題について、青表紙本・河内本・別本三者の詳細な比較検討が可能になると期待される。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・委員	2007年4月～現在に至る
和歌文学会・委員	2007年4月～現在に至る
日本文学協会・委員	2006年12月～現在に至る

### 5. 仁木 夏実 助教

1975年生。大阪大学文学部卒。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。2003年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学、2004年、大阪大学)。大谷大学文学部任期制助手、日本学術振興会特別研究員を経て2007年より現職。専攻:日本文学(漢文学)。

#### 5-1. 論文

仁木夏実 『新撰万葉集』と唐代伝奇小説『アジア遊学』105, 勉誠出版, pp. 176-185, 2007/12

後藤昭雄, 中川真弓, 仁木夏実他(共著) 「金剛寺蔵『明句肝要』——解題と影印・翻刻——」落合俊典『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(平成15～18年度科学研究費補助金基盤研究(A)), 国際仏教学大学院大学, pp. 317-371, 2007/3

#### 5-2. 著書

後藤昭雄監修, 大阪大学三宝感応要略録研究会(仁木夏実他)編 『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』(共編著), 勉誠出版, 262p., 2007/12

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

若槻俊秀, 佐藤義寛, 乾源俊, 浦山あゆみ, 今場正美, 福井敏, 本井牧子, 仁木夏実, 早川智美, 長谷川慎, 稲垣淳央ほか, 『法苑珠林』所録『冥祥記』の本文校訂並びに選注選釈なし『真宗総合研究所研究紀要』25, 大谷大学真宗総合研究所, pp. 94-95, 140-142, 2008/3

#### 5-4. 口頭発表

---

仁木夏実 「絵の前の文学空間」BEYOND BUDDHOLOGY: NEW DIRECTIONS IN THE STUDY OF JAPANESE BUDDHISM:

BUDDHIST TEMPLES AND THEIR CONTRIBUTION TO JAPANESE CULTURAL HISTORY 第一セッション・仏教寺院・文庫  
研究によって解明される日本文化・文学の世界, 日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究——尼寺調査の成果を基礎  
として——・小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開・日本文学の国際的共同研究基盤  
の構築に関する調査研究, ハーバード大学ライシャワー研究所, 2007/11

仁木夏実 「弘安九年後宇多天皇の上丁御会をめぐって」国際シンポジウム「世界における日中文化と文学」:世界における日中  
文化と文学, 早稲田大学古典籍研究所・東北師範大学, 東北師範大学, 2006/9

仁木夏実 「来西僧西潤子曇について——『鳩嶺集』所収二首制作の背景——」国際学術シンポジウム「ブックロードと文化交  
流」:ブックロードと文化交流, 浙江工商大学, 浙江工商大学, 2006/9

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2007年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:仁木夏実

課題番号:19529003

研究題目:中世前期貴族社会における漢詩文の基礎的研究

研究経費:2007年度 直接経費 600,000円 間接経費 0円

研究の目的:

平安時代後期から鎌倉時代、いわゆる中世前期、主に京都の貴族社会において制作された漢詩文について基礎的な研究を行うことを目的とする。従来の日本漢詩文研究は、大きく奈良時代から平安時代にかけての貴族による漢詩文、室町時代の禅僧らによる五山文学、そして、江戸時代の儒学者らによる漢詩文、という三つのピークを中心に進められてきた。それぞれは独立したものとして扱われ、それらをつなぐ試みは殆ど行われていない。本研究では、(1)中世前期漢詩文資料の調査 (2)儒者貴族の伝記研究 という二つのテーマを軸に、当時の漢詩文制作の実態について整理する。

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-13 比較文学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

比較文学専門分野は、研究室設備などの整備とともに、学部生・院生の数も増え、また留学生の関心も高まりつつある。全国の国公立大学を通して、学部・大学院ともに比較文学の専門を置いている大学は非常に少なく、特に関西圏の国立大学としては唯一ともいえるので、一般に比較文学に対して関心が高まりつつある最近の状況を考えると、日本における比較文学研究の大きな拠点として今後大いに発展させたいところである。現在、本専門分野では教育・研究活動ともに日本近代文学を主な対象にして、西洋文学が日本文学に与えた影響、日本文学が東アジアに与えた影響、日本文学と西洋あるいはアジア文学との対比研究、文学と絵画、音楽、映画などとの関係を考えるジャンル間交渉、またたとえば〈子供〉を手掛かりに数多くの作品を横断的に比較するテーマ研究など幅広い研究が行われている。着眼点としても、近代におけるセクシュアリティの問題など最近の新しい研究を反映したものも多い。日本比較文学会の研究発表において、当研究室の大学院生の発表が急激に増えているのは頼もしい限りである。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：内藤 高、米井 力也

助教：鈴木 暁世

内藤高教授は2008年8月14日に逝去されました。

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
15	5	16	0	0	0	0	0	2

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	9	4	4	1	2
'07	3	2	0	0	0
小計	12	6	4	1	2



## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	0	0	0
計	1	0	1

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

平松秀樹「タイ現代文学の地平——セーニー・サオワボン及びチャート・コープチッティ作品の位相——」2006/10  
主査：内藤 高 副査：出原隆陵、柏木隆雄、宮本マラシー

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	0	1	3	0	0	4
'07	1	1	6	1	3	12
計	1	2	9	1	3	16

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	4	1	0	0	5
'07	0	4	4	0	0	8
計	0	8	5	0	0	13

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

【2006年度】

江口恵「円地文子とジイド——『散文恋愛』と『贗金づくり』の比較を中心に——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 4, pp. 101-116, 2006/12

大廣典子「俳句革新と日本美術——始原としての滅亡論——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 4, pp. 85-100, 2006/12

荘中孝之「カズオ・イシグロの作品に見られる日本の美学——谷崎潤一郎の『文章読本』を参照して——」『研究論叢』(京都外国語大学), 67, pp.16-29, 2006/7

中野久美子「神話としての《海の幸》——青木繁と蒲原有明——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 4, pp. 101-116, 2006/12

#### 【2007年度】

梅津彰人「ポール・オースター *Travels in the Scriptorium* をめぐって」『待兼山論叢』(大阪大学文学研究科), 41, pp. 95-110, 2007/12

大廣典子「正岡子規、写生論再考——絵画・絵図・地図・図解——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 5, pp. 6-19, 2008/3

小橋玲治「『墮落女学生』の嫌う女教師——明治20年代と30年代の言説の差異」『東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ』(2007年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), pp.59-64, 2008/3

莊中孝之「Kazuo Ishiguro の作品に見られる母性への憧憬——*When We Were Orphans* を中心に」『Sell』(京都外国語大学英米語学科研究会), 24, pp.79-92, 2008/2

王鉄橋, 姚燈鎮, 張杭萍「日本新感覚派から中国新感覚派まで」『日本学研究』(香港教育出版社), pp.330-338, 2007/12

張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』——そのユーモアを中心として——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 5, pp. 94-107, 2008/3

張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』における女性像」『東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ』(2007年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), pp.68-70, 2008/3

中野久美子「崇高と美の《わだつみのいろこの宮》——青木繁と夏目漱石——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 5, pp. 61-77, 2008/3

朴利鎮「安部公房の『人魚伝』——人魚のシュールリアリスティックな姿とメタファー」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 5, pp. 78-93, 2008/3

藤田瑞穂「ニコルソン・ベイカー作品における記憶と思考——『中二階』『室温』を中心に」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 5, pp. 34-47, 2008/3

山田晃子「『お姫様』が好き！——近現代日本の翻訳作品における白雪姫像の変遷と作られていった『お姫様』イメージ」『女性学年報』(日本女性学研究会), 28, pp.66-96, 2007/11

山田晃子「近現代日本におけるグリム童話『白雪姫』の翻訳からみる『お姫様』像——その歴史の変遷を中心に——」『東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ』(2007年度大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), pp.65-67, 2008/3

## (2)口頭発表

#### 【2006年度】

姜素英「横光利一における朝鮮」日韓国際学術交流フォーラム, 韓国外国語大学(韓国), 2006/12/9

姜素英「朝鮮と横光利一」日本比較文学会第42回関西大会, 大阪大学, 2006/11/11

莊中孝之「Kazuo Ishiguro の作品に見られる母性への憧憬——*When We Were Orphans* を中心に——」日本英文学会関西支部第1回大会, 大阪大学, 2006/12/16

中野久美子「森鷗外ハルトマン受容とその影響——青木繁を中心に——」日本比較文学会第42回関西大会, 大阪大学, 2006/11/11

藤田瑞穂「ニコルソン・ベイカー作品における記憶と思考——『中二階』『室温』を中心に——」日本比較文学会第42回関西大会, 大阪大学, 2006/11/11

#### 【2007年度】

大廣典子「正岡子規と庭」「<環境文学(Eco-Literature)>の可能性とその社会的効用」第4回フォーラム, 大阪大学, 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト領域「文学・芸術の社会的媒介機能」「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」——「環境と文学」部門, 2008/3/15

小橋玲治「『墮落女学生』の嫌う女教師——明治20年代と30年代の言説の差異」2007年度大阪大学大学院文学研究科

共同研究「東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ」第4回研究会, 大阪大学, 2008/01/28  
 張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と銭鍾書『困城』における女性像」2007年度大阪大学大学院文学研究科共同研究  
 「東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ」第4回研究会, 大阪大学, 2008/1/31  
 中野久美子「漱石の『崇高な絵』と『わだつみのいろこの宮』」日本比較文学会第43回関西大会, 近畿大学, 2007/11/10  
 朴利鎮「安倍公房の『人魚伝』——沈黙するセイレーンと蘇る物語——」日本比較文学会全国大会, 北海道大学, 2006/6/16  
 朴利鎮「安部公房の境界——〈第三の空間〉の創出——」日本比較文学会第43回関西大会, 近畿大学, 2007/11/10  
 藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品における虚構と現実——“An Alternative History Of Art - Rosenthal, Kabakov, Spivak”を中心として——」日本比較文学会第43回関西大会, 近畿大学, 2007/11/10  
 山田晃子「近現代日本におけるグリム童話「白雪姫」の翻訳からみる“お姫様”像——その歴史の変遷を中心に——」2007年度大阪大学大学院文学研究科共同研究「東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ」第4回研究会, 大阪大学, 2008/01/28

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2007年度】

荘中孝之(書評)「Rajini Srikanth. *The World Next Door: South Asian American Literature and the Idea of America*」  
*AAALA Journal*(アジア系アメリカ文学研究会)No. 13, pp.86-89, 2007/12  
 テリー・オブライエン, 三原京, 荘中孝之, 福本由紀子, 木村博是『Catch Phrase: Everyday Advertisements in England』, 南雲堂, 2008/1  
 映画英語教育学会関西支部, 藤枝善之(監修), 荘中孝之『暗唱したい、映画の英語——心に刻む感動の名セリフ集』, 金星堂, 2007/9

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)  
 2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)  
 2007年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
 寺内伸介 博士後期課程, 北京語言大学, 専任講師, 2006/9  
 平松秀樹 博士後期課程, チュラロンコーン大学, 専任講師, 2007/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
 その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2006 年度 : 0 名      2007 年度 : 0 名

## 9. 刊行物

2006 年度      『阪大比較文学』 4 号

2007 年度      『阪大比較文学』 5 号

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2006 年度    文学研究科共同研究「方法としての越境——東アジアにおける〈近代〉と異文化接触」

2007 年度    文学研究科共同研究「東アジアの生活文化とジェンダー——比較文化論的アプローチ」

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

教育体制については基本的に大きな変化はない。一般的に比較文学関係の講義の受講者はかなり多く、一定の知的関心を引く講義の水準は保たれていると思う。しかし、スタッフ数の関係もあり、どうしても学部と大学院共通の講義が多くなるのは問題であろう。2 回生から、ドクターまでの講義ということになれば、どうしても学部 3、4 回生が照準となる。とくにまだ初歩段階の 2 回生には、さらにきめの細かい入門的講義がしたいのだが、それができないのは、やはり問題であろう。

こうした不足を補うために、数年前に行ったような外からの講師を招いてのシンポジウムや講演会を開き、通常では専任教員が担当できない様々な比較文学の研究テーマについて新たな知識と刺激を与える機会を持つことが是非必要であろう。

### 12-2. 研究活動

研究活動においては、DC の人数が増えたこともあり、非常に活発化しつつある。とくに日本比較文学会での活動が非常に積極的になりつつある。日本比較文学会の関西支部大会では、近年、当研究室の大学院生の発表が毎年半数近くを占め、発表の水準も一般に高いので、関西の中での学会のイニシアティブをとりつつある。また全国大会のレヴェルでも、高水準の発表が多く、査読付きの学会誌への査読委員会からの慫慂もうけている。とくに当研究室の留学生が学会活動で健闘していることは特筆に価するだろう。もちろん全国規模ではさらにレヴェルアップする必要はあるが、順調に成長していることは疑いない。また交換留学の制度を利用して留学する日本人学生も出始めており、今後国際的な繋がりがさらに広まっていくことも十分予想できる。

研究室発行の研究誌『阪大比較文学』には、毎年投稿者も多く、研究活動の活発化に大いに貢献している。運営上の問題や合評会の充実化などさらに健闘すべき点はあるが、学外者からも好評であり、順調といえよう。

院生の数が学年によってかなりばらつきがあり、コンスタントな研究体制が維持できるか、研究テーマがさらに多様化されたときの指導の対応の仕方など、いろいろ今後の課題も予想できるが、なんとか現在の盛り上がりをさらに発展させていきたいものである。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 内藤 高 教授

1949年生。1986年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。1985年、パリ第4大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東京大学、1978年)・文学博士(パリ第4大学、1987年)。同志社大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1996年10月現職。専攻:比較文学。

##### 1-1. 論文

内藤高 「比較される韓国・日本——イザベラ・バード等の旅行記を手掛りに——」『日韓学術交流フォーラム 方法としての越境——東アジアにおける近代>と異文化接触』(大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト), 大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト, pp. 11-12, 2007/3

内藤高 「『あめりか物語』と『ふらんす物語』の中の音」『阪大比較文学』, 4, 大阪大学比較文学会, pp. 1-33, 2006/12

内藤高 「日本におけるクローデル——詩、絵画、そして自然」『クローデル歿後50年 国際会議・シンポジウム論文集 クローデルと日本』(クローデル歿後50年記念企画委員会), 七月堂, pp. 188-206, 2006/11

内藤高 「媒介者としての「水の風景」——日本近代文学を中心にして」宇佐美斉(共編著)『日仏交感の近代』京都大学学術出版会, pp. 340-357, 2006/5

##### 1-2. 著書

なし

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

##### 1-4. 口頭発表

内藤高 「ポール・クローデルと日本」, 懷徳堂秋期講座: 西洋における<日本理解>の先駆者たち, 懷徳堂記念会, 大阪大学, 2007/10

内藤高他 「シンポジウム: 音のドラマとドラマの音」パネラー, 日本演劇学会全国大会, 大手前大学, 2007/6

内藤高 「比較される韓国・日本——イザベラ・バード等の旅行記を手掛りに——」, 日韓国際学術交流フォーラム: 方法としての越境——東アジアにおける<近代>と異文化接触, 大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト, 韓国外国語大学校, 2006/12

内藤高 「シンポジウム: 近代日本とフランス——文化の交流と創造」コメンテーター, 日本比較文学会関西大会, 大阪大学, 2006/11

##### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

##### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

##### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

##### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本比較文学会・理事

2001年6月～2007年6月

## 2. 米井 力也 教授

1955年生。京都大学文学部卒。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(文学)(京都大学、2001)。金蘭短期大学講師、同助教授、大阪外国語大学日本語講座助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:キリシタン文学／翻訳研究。

### 2-1. 論文

米井力也 「解説:規範と逸脱」亀井孝・大藤時彦・山田俊雄(共編)『日本語の歴史4』平凡社, pp. 469-477, 2007/4

米井力也 「キリシタンの翻訳:異文化としての〈キス〉」立教大学日本文学科(編)『立教大学日本文学科創設50周年記念国際シンポジウム「21世紀の日本文学研究」報告書』立教大学日本文学科, pp. 90-94, 2007/2

米井力也 「トンボをかける」新村出記念財団(編)『泰山木』新村出記念財団, pp. 55-57, 2006/5

### 2-2. 著書

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 2-4. 口頭発表

なし

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度、萌芽研究 代表者:米井力也

課題番号:17652022

研究題目:映像翻訳論:日本映画とアニメにおける字幕・吹替版の翻訳研究

研究経費:2007年度 直接経費 700,000円

研究の目的:

日本のアニメーションは日本文化を代表するジャンルの一つと考えられているが、受容する側の問題についてはこれまであまり考察されていない。本研究は映像翻訳を対象とする翻訳研究であり、海外における日本像の形成あるいは日本文化のさまざまな位相を逆照射するための新たな視座を設定するものである。

### 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 2-8. 外部役員等の引き受け状況

新村出記念財団評議員

2004年7月～2007年7月

## 3. 鈴木 暁世 助教

1977年生。大阪大学文学部卒。大阪大学文学部文学研究科博士前期課程修了。2005年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学、2004年)。2006年より現職。専攻:比較文学／日本近代文学。



### 3-1. 論文

---

鈴木暁世 「「放浪者」の誕生——芥川龍之介戯曲草稿「弘法大師御利生記」に関する一考察——」飯倉洋一(編)『テキストの生成と変容』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書), 1, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 67-68, 2008/3

鈴木暁世 「芥川龍之介「弘法大師御利生記」における「放浪者」——J.M.シング『聖者の泉』の影響について』『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 5, pp. 33-47, 2008/3

鈴木暁世 「芥川龍之介におけるアイルランド文学受容——背景としての「朝鮮」への距離』『日韓国際学術交流フォーラム 方法としての越境』(大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト), 1, pp. 38-40, 2007/3

鈴木暁世 「芥川龍之介『支那遊記』論——『馬の脚』『湖南の扇』への影響について——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 87 輯, pp. 50-63, 2006/12

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

鈴木暁世 「伊藤整『若い詩人の肖像』論——北海道におけるアイルランド文学教育の影響」, 近代文学研究会, 光華女子大学, 2007/7

鈴木暁世 「芥川龍之介におけるアイルランド文学受容——背景としての「朝鮮」への距離」日韓国際学術交流フォーラム 方法としての越境——東アジアにおける(近代)と異文化接触, 大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト・韓国外国語大学校日本近代文学会, 韓国外国語大学校, 2006/12

鈴木暁世 「芥川龍之介における「放浪」——アイルランド移民との交流をめぐって」日韓国際学術交流フォーラム研究会:「越境する書き手たちと「上海」」, 大阪大学大学院文学研究科東アジア国際フォーラムプロジェクト, 大阪大学, 2006/11

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-14 中国文学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育・研究の主眼が置かれており、そのため教員スタッフも伝統文学と白話文学を専門とするものが各 1 名ずつ配置されている。授業は、文献の精密な読解力とそれを踏まえての問題構成力を養うべく、大きく分けて演習と講義の二種類が設けられている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に三種の研究会が組織されており、文言体(宋代の詩)、白話体(明代の戯曲)による漢語資料の訳注稿の作成が行われている。これらの研究会は単に教育活動の一環であるのみならず、それぞれの分野で一級の研究業績を上げることを目標にしており、他大学や他専門分野の研究者も参加している。本専門分野の教育・研究活動の特色は、規模は小さいながらも、中国の古典文学の領域をバランスよくカバーしている点にある。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：高橋 文治

准教授：浅見 洋二

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	4	4	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	1	0	0	0	0
'07	2	1	2	0	1
小計	3	1	2	0	1

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	0	0
'07	0	0	0
計	0	0	0

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	3	0	0	0	0	3
'07	4	0	0	0	0	4
計	7	0	0	0	0	7

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	1	0	0	0	1
'07	0	1	0	0	0	1
計	0	2	0	0	0	2

#### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

##### (1)論文

###### 【2006年度】

陳文輝「玉簫の物語——『兩姓姻縁』雑劇の特徴とその影響」『中国研究集刊』40, pp.92-108, 2006/6

谷口高志「白居易の詩歌における音楽描写と『通感』」『白居易研究年報』7, pp.25-48, 2006/10

藤原祐子「『草堂詩餘』の類書的性格について」『風絮』3, pp.24-52, 2007/3

###### 【2007年度】

藤原祐子「『草堂詩餘』と書会」『日本中国学会報』59, pp.139-154, 2007/10

西川幸宏「サルの種類婚姻譚と『白猿伝』」追手門学院大学『アジア文化学科年報』1, pp.32-56, 2007/11

西川幸宏「『韓朋賦』の性格をめぐって」『待兼山論叢(文学篇)』41, pp.35-49, 2007/12

藤原祐子「『草堂詩餘』と柳永」『橄欖』15, pp.135-156, 2008/3

## (2)口頭発表

【2006年度】

藤原祐子「宋詞の受容をめぐって——庶民生活と俗文学からのアプローチ——」, 第10回宋代文学研究談話会, 大阪大学  
／豊中, 2006/5/27

【2007年度】

藤原祐子「柳永詞の収録状況から見る『草堂詩餘』」, 第11回宋代文学研究談話会, 早稲田大学／東京, 2007/5/26

## (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2007年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

加藤聡 元大学院博士後期課程学生および助教, 尚絅大学文化言語学部, 講師, 2007/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2006年度:0名 2007年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度:0名 2007年度:0名

## 9. 刊行物

なし

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第10回宋代文学研究談話会, 2006/5/27

文部科学省特定領域研究国際シンポジウム「東アジア海域文化交流のなかの五山禅林1」, 2007/9/8

文部科学省特定領域研究国際シンポジウム「東アジア海域文化交流のなかの五山禅林2」, 2007/11/23

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に三種の研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになってきている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

### 12-2. 研究活動

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も徐々に増加しつつある。

海外、学外の研究者との連携もつよめ、大学院生の留学、教員の海外研修、外国人研究者の受け入れも活発に行われている。2007年度の大学院生の海外留学は、2件。中国政府給費留学生として、博士前期課程在籍中の2名の学生が、浙江大學、廈門大學へそれぞれ留学している。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフ2名は2006年度、2007年度を通じて「基盤研究(C)」「特定領域研究」等を取得している。

研究活動という面において、総じて本教室は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力したい。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月現職。専攻:中国文学。

#### 1-1. 論文

なし

#### 1-2. 著書

高橋文治, 加藤聰, 佐藤貴保他(共著)『烏台筆補の研究』汲古書院, 354p., 2007/12

高橋文治, 金文京, 小松謙他(共編)『元刊本元雜劇の研究』汲古書院, 409p., 2007/9

高橋文治, 加藤聰, 谷口高志他(共著)『成化本『白兔記』の研究』汲古書院, 400p., 2006/9

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋文治(書評)「宮紀子著『モンゴル時代の出版文化』」『東洋史研究』65-3, 東洋史研究会, pp. 99-108, 2006/12

#### 1-4. 口頭発表

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 東方学会賞, 東方学会, 1989/11

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋文治

課題番号:19520301

研究題目:明代詩賛系文学の基礎的研究

研究経費:2007年度 直接経費 1,800,000円 間接経費 540,000円

研究の目的:

北京の中国国家図書館が所蔵する「潜龍馬再興七姑伝」、ならびに、今日も貴州省に残る地方戯の「太子売身」について、校本、訳注の作成も含め、その起源や発展の過程、影響関係等を総合的に考察する。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・評議員

2001年4月～現在に至る

## 2. 浅見 洋二 准教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学修士(東北大学、1986年)。東北大学助手、山口大学助手、同講師、同助教授を経て、1996年10月、現職。専攻:中国文学。

### 2-1. 論文

浅見洋二 「“焚棄”与“改定”——論宋代別集の編纂或定本の制定」『中国韻文学刊』(中国韻文学会), 42, 中国韻文学会, pp. 80-92, 2007/9

浅見洋二 「「形似」的新変——從語言与事物的關係論宋詩的日常性特点」張高評『宋代文学之会通与流變』新文豊出版公司, pp. 1-27, 2007/3

浅見洋二 「「焚棄」と「改定」——唐宋期における別集の編纂あるいは定本の制定をめぐって」『立命館文学』(立命館文学会), 598, 立命館文学会, pp. 30-40, 2007/2

浅見洋二 「「文章一小技」——五山禅林の詩僧にとつての「道」と「詩」」『アジア遊学』93, 勉誠出版, pp. 90-99, 2006/11

浅見洋二 「論“拾得”詩歌現象以及“詩本”、“詩材”、“詩料”問題——以楊万里、陸游为中心」沈松勤『第四届宋代文学国際研討會論文集』(宋代文学会), 浙江大学出版社, pp. 256-279, 2006/10

浅見洋二 「“詩中有画”与“著壁成絵”——從兩種王維詩評看中国古代詩画論」中国唐代文学会『唐代文学研究』(中国唐代文学会), 11, 広西師範大学出版社, pp. 34-55, 2006/5

浅見洋二 「「売詩」、「売文」ということ」加地伸行博士古稀記念論集刊行会『中国学の十字路』研文出版, pp. 387-402, 2006/4

### 2-2. 著書

浅見洋二 『中国の詩学認識——中世から近世への転換』創文社, 758p., 2008/2

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二(書評) 「笈文夫・野村鮎子『四庫提要南宋五十家研究』」『東方』307, 東方書店, pp. 20-23, 2006/9

### 2-4. 口頭発表

なし



## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

浅見洋二 大阪大学共通教育賞(2004年度後期), 大阪大学共通教育機構, 2005/4

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2005年度～2009年度、特定領域研究、代表者:浅見洋二

課題番号:17083014

研究題目:五山文学における宋代詩文の受容と展開——詩文集の注釈と詩話を中心に——

研究経費:2006年度 直接経費 6,300,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 6,300,000円 間接経費 0円

研究の目的:

日本漢文学の一大潮流である五山文学と中国宋代の文学との関係を考察することにより、東アジア海域文化交流の一端を明らかにする。

2-6-2. 2005年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:浅見洋二

課題番号:17520230

研究題目:中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究

研究経費:2006年度 直接経費 800,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

中国宋代における別集(個人別詩文集)の編纂の諸相を明らかにするとともに、そこに現れた文学論、およびそれを取りまく社会文化論的背景について考察を加える。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本中国学会・将来計画特別委員会委員

2007年7月～現在に至る

中国社会文化学会・評議員

2006年4月～現在に至る

## 2-15 国語学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

国語学とは、日本語の音韻、文字・表記、文法、語彙などについて、上代から近・現代にわたり、通時的・共時的に研究するものであるが、大阪大学大学院文学研究科においては、別に現代語を主な対象とする日本語学専門分野があるので、国語学専門分野では通時の研究(国語史研究)に重点を置き、明治以前の時代を主な対象とする。講義・演習などの授業も、課程博士論文・修士論文や学部の卒業論文もまた同様である。文献により実証することを重視するので文学の知識も必要であり、学部では日本文学と専修を同じくしている。また、日本文学とともに大阪大学国語国文学会を組織し、学会誌「語文」を年2回刊行し、研究発表・講演を含む総会を年1回開いている。卒業論文・修士論文中間発表会や大学院生の研究発表会などは日本文学・比較文学とともにやっている。

蜂矢真郷教授は語構成、語彙史、上代語の研究を中心とし、金水敏教授は文法史を中心としつつ役割語の研究など多岐にわたっており、岡島昭浩准教授は音韻史、日本語学史、辞書史の研究を中心としている。このように、どの研究も、個別の文献や一つの時代に限らない、全体として大きな国語史となると言えるものである。現在、文字・表記の分野がやや手薄ではあるが、互いに補い合っている。多くの大学院生の多様な研究とともに、今後とも国語史研究に重点を置いた研究・教育が進められよう。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：蜂矢 真郷、金水 敏

准教授：岡島 昭浩

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数								
学部*	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
47	7	8	0	1	0	2	1	0

\*(日本文学と併せて) ※うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業者*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	16	1	0	0	0
'07	17	3	0	2	1
小計	33	4	0	2	1

\*(日本文学と合わせて)

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	1	1
'07	2	0	2
計	2	1	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

林浩恵「形容詞語幹の用法の研究——上代における修飾用法を中心として——」2008/3

主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩

竹内史郎「古代日本語の活格性にまつわる記述的研究——ミ語法と格標示の考察——」2008/3

主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩

##### 【論文博士】

金水敏「日本語存在表現の歴史」2006/12

主査：蜂矢真郷 副査：工藤真由美、岡島昭浩

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	0	1	3	0	2	6
'07	2	1	7	0	1	11
計	2	2	10	0	3	17

## 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	1	4	4	0	0	9
'07	1	6	7	0	0	14
計	2	10	11	0	0	23

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

岩田美穂「並列形式ナリの変遷」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学大学院文学研究科), 40, pp. 75-90, 2006/12

黒木邦彦「中古日本語におけるアスペクトとテンスの相関——主節とノチ節の考察から——」『国文研究』(熊本県立大学), 52, pp.1-16, 2007/3

竹村明日香「忍頂寺文庫所蔵 兵庫口説について——橋づくし、お染久松ものを中心に——」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館), 2, pp.52-62, 2007/3

蜂矢真弓「名詞被覆形「コ〔木〕」の様相」『語文』(大阪大学国語国文学会), 86, pp. 53-63, 2006/6

林浩恵「上代形容詞の連体修飾用法——語幹による修飾と連体形による修飾——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 87, pp.1-14, 2006/12

依田恵美「忍頂寺文庫蔵近世後期洒落本について——テキスト化の報告、ならびに安永二年再板——」『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館), 2, pp.77-84, 2007/3

#### 【2007年度】

岩田美穂「「ノ・ダノ」並列の変遷——例示並列形としての位置づけについて——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 89, pp.48-58, 2007/12

岩田美穂「例示並列形式の歴史的変化——タリ・ナリを中心として」『日本語の構造変化と文法化』(ひつじ書房), pp.93-113, 2007/10

金囀泳, 崔壯源「e-learning を活用した日本語アクセント聞き取り練習——マルチメディア授業での活用を中心に——」『日語日文学研究』(韓国日語日文学会), 64, pp. 263-279, 2008/1

清田朗裕(2008)『源氏物語』の地の文にみえる指示詞について——カノN・ソノNの対照から——『国語国文 研究と教育』46, 熊本大学教育学部国文学会, pp.13-27, 2008/1, 査読なし

黒木邦彦「中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴」『語文』88, pp.45-53, 2007/6

黒木邦彦「大分県日田市方言における「-てから」の用法——「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 8, pp. 87-98, 2008/3, 査読なし

藤本真理子<sup>1</sup>・齊藤瑛子<sup>4</sup>・黒木邦彦<sup>2</sup>「北海道・新十津川方言における「-のだ」の披瀝用法」真田信治編『北海道・新十津川方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, pp. 23-30, 2008/3, 査読なし

藤本真理子<sup>1</sup>・齊藤瑛子<sup>4</sup>・黒木邦彦<sup>2</sup>「北海道・新十津川方言における「-のだ」の披瀝用法」真田信治編『北海道・新十津川方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, pp. 23-30, 2008/3, 査読なし

蜂矢真弓「連体助詞を伴う名詞被覆形による擬古的複合名詞」『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 41, pp.19-34, 2007/12

鳩野恵介「『韻引き字様』としての『干禄字書』」『訓点語と訓点資料』(訓点語学会), 120, pp.132-156, 2008/3

藤本真理子<sup>1</sup>・齊藤瑛子<sup>4</sup>・黒木邦彦<sup>2</sup>「北海道・新十津川方言における「-のだ」の披瀝用法」真田信治編『北海道・新十津川方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, pp. 23-30, 2008/3, 査読なし

## (2)口頭発表

【2006年度】

岩田美穂「並列表現の史的展開」日本語学会, 東京学芸大学, 2006/5/14

Kinuhata, Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Eguchi, and Satoshi Kinsui 'Genesis of indeterminate pattern in Japanese' The 16th Japanese/Korean Linguistics Conference, Kyoto University. 2006/11/4

清田朗裕「中古後のカ系列指示詞——カ系列の発達可能性——」筑紫日本語研究会第212会, 熊本大学, 2007/3/30

黒木邦彦「中古日本語における無標のアスペクト——テンスによるアスペクチュアルな意味の違い——」日本語学会, 東京学芸大学, 2006/5/14

黒木邦彦「『中古日本語における時の従属節のアスペクト・テンス——アスペクトとテンスの相関をめぐって——』筑紫日本語学研究会, 九州大学, 2006/12/27

黒木邦彦「『源氏物語』を資料とした「べし」の記述的研究——形態統語論的観点から——」古代中世文学研究会, 大阪大学, 2007/3/24

竹村明日香「忍頂寺文庫所蔵 兵庫口説について——橋づくし、お染久松ものを中心に——」大阪大学大学院文学研究科「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ, 大阪大学, 2007/1/14

蜂矢真弓「連体助詞を伴う名詞被覆形による複合名詞」大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2007/1/13

鳩野恵介「『韻引き字様』としての『干祿字書』」訓点語学会, 東京学芸大学, 2006/5/12

【2007年度】

大田垣仁「名詞句に生じる換喩の2つのタイプと中古日本語」言語文化レトリック研究会第60回例会, 大阪大学, 2007/11/22

清田朗裕「源氏物語の地の文にみえる指示詞——「ソノ」と「カノ」を中心に」第8回日本語文法学会パネルセッション「日本語指示詞の歴史的研究——『源氏物語』を中心に——」筑波大学, 2007/10/28

金紋敬「日本書紀古訓における母親を表す語彙に関して」古事記学会3月例会, 武庫川女子大学, 2008/3/23

金囁泳, 崔壯源「e-leaning を活用した日本語アクセント聞き取り練習——マルチメディア授業での活用を中心に——」韓国日語日文学会冬季国際学術大会, 韓国慶熙大学, 2007/12/15

黒木 邦彦「中古日本語のテンスに見られる形態統語論的特徴——現代日本語との対照から——」土曜ことばの会, 大阪大学, 2007/4/16

黒木邦彦「中古日本語における“過去の助動詞”とモダリティー標識の形態統語論的な共通性——文法範疇の再構築を目指して——」第8回日本語文法学会, 筑波大学, 2007/10/28

黒木邦彦「日本語の“過去”をめぐって——「-き」と「-けり」の使い分けに関する問題——」第194回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2007/12/15

黒木邦彦「中古日本語のアスペクト——パーフェクトと限界達成——」第217回筑紫日本語研究会, 九州大学, 2007/12/27

黒木邦彦「中古日本語の文の類型とテンス・ムード——日本語の一変種として記述すべき特徴について——」第128回変異理論研究会, 大阪府立大学, 2008/1/5

黒木邦彦「中古和文における会話文と地の文の境界——直示表現に基づく分析——」平成20年度大阪大学国語国文学会総会・公開ワークショップ, 大阪大学, 2008/1/12, 査読なし

藤本真理子「古代語カ(ア)系列指示詞の定義」, 第1回指示詞研究会, 大阪大学, 2007/5/19

藤本真理子「ソ系列の現場指示用法の発生」, 第8回日本語文法学会パネルセッション「日本語指示詞の歴史的研究——『源氏物語』を中心に——」, 筑波大学, 2007/10/28

藤本真理子「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成と展開」, 平成20年度大阪大学国語国文総会, 大阪大学, 2008/1/12

森勇太「日本語授受表現の史的展開」第8回日本語文法学会, 筑波大学, 2007/10/28

## (3)その他(書評・翻訳など)

なし

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2007年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2007年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

竹内史郎、博士後期課程修了、群馬大学教育学部、講師、2007/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2006年度:0名 2007年度:3名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名  
その他 1名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3名

2006年度:1名 2007年度:2名

### 9. 刊行物

\*(日本文学専門分野とともに)

2006年度 「語文」86, 87輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年2回

2007年度 「語文」88, 89輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年2回

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

開催 第87回国語語彙史研究会 2007/12/1

事務局 国語語彙史研究会 2002年度以前から

国語文字史研究会 2002年度以前から

土曜ことばの会 2002年度以前から

### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

\*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 1月 1日間

研究誌「語文」を年2回編集・発行

\*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 10月 3日間



## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

大学院生は前回『年報 2006』に示した数よりやや増えている。大学院生の論文数は前回とほぼ同じであるが、学会での発表は前回より増えている、大学院生の研究がコンスタントに続けられていることを示している。以前にも述べたが、国語学・日本語学界において、近年は、現代語を研究する人が多く、国語史や明治以前などを研究する人はあまり多くない。そうした中で、多くの文献資料を検討する必要があり、文学の知識も必要であるところの、決して楽ではない研究をしようとする大学院生が、これほどの論文を執筆していることは、もう少し評価されてよいのではないと思われる。外国人招へい研究員を含めて留学生が現代語以外を研究対象としているのも、大きな努力をしていると見られる。大阪大学文学部からの大学院進学者は、やや減少しているが、学部生の就職状況の好転という社会的背景によるところが大きいと思われる。一方、他大学からの大学院進学者が引き続き一定数を維持しているのは、本大学院の評価が外部から見て高いことを示しているものであろう。留学生を含めて他大学から来た大学院生ともども切磋琢磨していて、それなりに望ましい状況と言ってよい。自主的な研究会も開かれるなどしており、また新しい展開も期待される。

大学院生の研究が活発であるのに対して、研究者として就職した者が1名にとどまっているのは決して望ましい状況とは言えない。しかし、日本学術振興会特別研究員に採用された者もいて(他大学の任期付研究員を経てPDに採用されたものが1、DC2に採用されたものが1名)、近年の状況から見れば健闘している方であろう。博士の学位を取得しても大学非常勤講師の職すらない大学もあると聞く中で、博士後期課程修了者・単位修得退学者の未就職者のほとんどが(博士後期課程在学者の何人かも)大学非常勤講師に行っているのも健闘している例であると言ってよい。

### 12-2. 研究活動

前回も書いたが、蜂矢真郷教授・金水敏教授はいずれも多くの論文や著書・共著他を発表しており、岡島准教授もまた多くの論文他を発表していて、各人ともその研究が評価されている。この2年間の論文等の発表も多くあった。各人とも多くの学会の役員等をよく務めていて、学会活動に対して積極的に接しており、他方、国語語彙史研究会・国語文字史研究会・土曜ことばの会の事務局を大阪大学に置いていて、これらのことが、大学院生や学部学生に対して、研究の面でも学界に接する面でも様々なよい影響をもたらしていると思われる。2004年度以降、科研費等を用いての全国的な研究会や国際的な研究会なども、金水教授を中心に多く持たれるようになっていく。

2006年度～2008年度科学研究費基盤研究(C)「文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性について」は継続中であるが、基盤研究(C)「近現代における国語学史の資料および人物についての基礎的研究」が終了した。2007年度から金水教授の基盤研究(B)「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」が行われている。博士の学位も、課程博士を2名に、論文博士を1名に授与していて、引き続き今後も授与できる見込みである。今後とも、大学院生を含めて、研究はより活発に行われ、著書・論文等もさらに多くのものが公になることが期待できる状況であること、前回と同様である。

上記のように、今後への期待も含めて評価できるところは大きいと見られるが、教員の、教育・研究に直接する他の仕事がさらに増えていて、教育・研究の低下や、あるいは、個人の身体への悪影響をもたらすようなことにならないかと恐れるところもある。前回も書いたが、もう少し各人が教育・研究に専念できる環境を望みたいと思うのは贅沢なことだろうか。非常勤講師の配置は、現在最小限であるので、さらなる削減は是非とも避けてほしいと願っている。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 蜂矢 真郷 教授

1946年生。京都大学文学部卒業、同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。博士(文学)。親和女子大学専任講師、同助教授、帝塚山学院大学助教授、奈良女子大学文学部助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:国語学。

## 1-1. 論文

- 蜂矢真郷 「語の変容と類推——語形成における変形と類推——」国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 27, 和泉書院, pp. 273-284, 2008/3
- 蜂矢真郷 「現代仮名遣いの長音表記」国語文字史研究会『国語文字史の研究』(国語文字史研究会), 10, 和泉書院, pp. 283-296, 2007/12
- 蜂矢真郷 「ヲ[小]とコ[小]」國學院大學『國學院雑誌』(國學院大學), 108-11, 國學院大學, pp. 38-50, 2007/11
- 蜂矢真郷 「ト[門]とト[戸]とト[外]」佛教大学国語国文学会『京都語文』(佛教大学国語国文学会), 14, 佛教大学国語国文学会, pp. 4-19, 2007/11
- 蜂矢真郷 「上代特殊仮名遣に関わる語彙」萬葉学会『萬葉』(萬葉学会), 198, 萬葉学会, pp. 1-36, 2007/6
- 蜂矢真郷 「『日本唱歌集』の形容詞」国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 26, 和泉書院, pp. 273-284, 2007/3
- 蜂矢真郷 「ト[利]をめぐる語群」神戸親和女子大学国語国文学会『親和国文』(神戸親和女子大学国語国文学会), 41, 神戸親和女子大学国語国文学会, pp. 141-158, 2006/12
- 蜂矢真郷 「タテ[縦]・ヨコ[横]とその周辺」大阪大学国語国文学会『語文』(大阪大学国語国文学会), 86, 大阪大学国語国文学会, pp. 9-20, 2006/6
- 蜂矢真郷 「促音・撥音の現代ローマ字表記」国語文字史研究会『国語文字史の研究』(国語文字史研究会), 9, 和泉書院, pp. 221-236, 2006/4

## 1-2. 著書

なし

## 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 蜂矢真郷 「書評 犬飼隆著『木簡による日本語書記史』」萬葉学会『萬葉』(萬葉学会), 200, 萬葉学会, pp. 61-70, 2008/3
- 蜂矢真郷 「『池上禎造先生略歴ならびに著作目録』の訂正」日本語学会『日本語の研究』(日本語学会), 3-2, 日本語学会, p. 75, 2007/4
- 蜂矢真郷 「池上禎造先生略歴ならびに著作目録」日本語学会『日本語の研究』(日本語学会), 2-4, 日本語学会, pp. 116-121, 2006/10

## 1-4. 口頭発表

- 蜂矢真郷 「ト[門]とト[戸]とト[外]」佛教大学国語国文学会第11回大会・講演, 佛教大学国語国文学会, 佛教大学, 2006/11
- 蜂矢真郷 「上代特殊仮名遣に関わる語彙」第59回萬葉学会全国大会・講演会, 萬葉学会, 日本女子大学, 2006/10(『第59回(2006年度)萬葉学会全国大会要項集』p. 7, 2006/10)

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 蜂矢真郷 第17回新村出賞, 新村出記念財団, 1998/11

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:蜂矢真郷

課題番号:18520353

研究題目:文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性

研究経費:2006年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

従来の、歴史的文献に基づく国語史(日本語史)研究では、「口語性」を反映していると言われる文献が特に重要視されてきた。

また、特に口語的でない文献からも、「口語性」が露呈していると言われる部分を恣意的に取り出して利用するということが行われてきた。本研究は、このような従来の観点を裏返し、むしろ「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙あるいは形態を積極的に取り上げ、その由来、発展の過程を明らかにすることを目的とする。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

訓点語学会・会計監査委員	2006年6月～2007年5月
国語語彙史研究会・編集主任	2006年4月～2007年3月
国語文字史研究会・編集主任	2005年9月～現在に至る
日本語学会・常任査読委員	2004年5月～2007年5月
訓点語学会・委員	2003年11月～現在に至る
国語文字史研究会・委員	2002年4月～現在に至る
国語語彙史研究会・幹事、代表幹事	2001年4月～現在に至る
国語学会(→日本語学会)・評議員	2000年4月～現在に至る
萬葉学会・編輯委員	1979年12月～現在に至る

## 2. 金水敏教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。文学修士(東京大学、1981年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻:国語学/言語学。

### 2-1. 論文

金水敏 「翻訳における制約と創造性——役割語の観点から——」 飯倉洋一(編)『テキストの生成と変容』(2005-2006年度大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 61-66, 2008/3

金水敏 「The Interaction between Argument and Non-argument in the Diachronic Syntax of Japanese」Frellesvig, Bjarke, Shibatani, Masayoshi, and Smith, John.C.(eds.)(共著) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, Kuroshio Publishers, pp. 253-261, 2007/12

金水敏 「国語辞書と役割語」『図書』705, 岩波書店, pp. 20-21, 2007/12

金水敏 「言と文の日本語史」『文学』8-6, 岩波書店, pp. 2-13, 2007/11

金水敏 「言語コミュニティと文体・スピーチスタイル」伊井春樹(監修)加藤昌嘉(編集)(共著)『源氏物語のことばと表現』おうふう, pp. 9-29, 2007/4

金水敏 「日本(語)への発信・日本(語)からの発信(シンポジウム「歴史語用論:その可能性と課題」)『語用論研究』(日本語用論学会), 8, pp. 67-68, 2006/12

金水敏 「役割語研究の展開」『日本語学研究』(韓国日本語学会), 17, pp. 3-7, 2006/12

金水敏 「「～でいる」について」益岡隆史・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』くろしお出版, pp. 143-156, 2006/10

金水敏 「古代・中世日本語用例のローマ字表記について」音声文法研究会(編)『文法と音声 V』くろしお出版, pp. 177-190, 2006/9

金水敏 「日本語アスペクトの歴史的研究」日本語文法学会(編)『日本語文法』(日本語文法学会), 6-2, くろしお出版, pp. 33-44, 2006/9

金水敏 「シンポジウム 対照役割語論への誘(いざな)い(総括)」*KLS 26: Proceedings of the Twenty-seventh Annual Meeting June 4-5, 2005*, (関西言語学会), pp. 400-405, 2006/6

金水敏 「役割語としてのピジン日本語の歴史素描」上田功・野田尚史(編)『言外と言内の交流分野:小泉保博士傘寿記念論文

集』大学書林, pp. 163-177, 2006/4

## 2-2. 著書

---

金水敏(編)『役割語研究の地平』くろしお出版, 2007/9

金水敏『日本語史の理論的・実証的基盤の再構築』pp. 68-77, 2007/3

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 2-4. 口頭発表

---

金水敏「ヴァーチャル日本語 役割語について」6th International Conference Practical Linguistics of Japan (ICPLJ), Masahiko Minami, Makiko Asano, Tomoko Takeda; College of Humanities, San Francisco State University, College of Humanities, San Francisco State University, San Francisco, California, 2008/3

金水敏「役割語からみた日本語」第3回長崎純心大学日本語教育公開講座, 長崎純心大学言語文化センター, 純心女子学園・江角記念館, 2007/12

金水敏, 吉村和真「ことばで読み解くマンガ——「役割語」の謎」えむえむ連続講座 第11回, 京都国際マンガミュージアム/文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」(研究代表者:金水敏), 京都国際マンガミュージアム, 2007/9

金水敏「A Short History of *Oru*」(Lecture), Edwin O.Reischauer Institute of Japanese Studies/Japanese Language Program, Department of East Asian Languages and Civilizations, Harvard, Harvard University, 2007/5

Kinsui, Satoshi “On ‘Role Language’ in Contemporary Japanese: An Investigation of Prototypical Styles in Japanese” Japan Forum, Edwin O.Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard University, Harvard University, 2007/5

金水敏「『役割語』研究と社会言語学の接点」第19回社会言語学会研究大会:社会言語学における『人の社会的属性』の扱いを問い直す, 社会言語学会, 日本大学, 2007/3

Kinsui, Satoshi, Kinuhata, Tomohide, Iwata, Miho 他“Genesis of Indeterminate Pattern in Japanese”16th Japanese/Korean Linguistics Conference, 京都大学, 2006/10

金水敏「役割語とは何か——音声的アプローチも含めて——」日本音響学会 2006 年秋季研究発表会, 日本音響学会, 金沢大学, 2006/9

金水敏「現代に生きる古典日本語」2006 日本語教育国際研究大会:Classical Japanese, The Association of Teachers of Japanese/National Council of Japanese Language Teachers, コロンビア大学、ニューヨーク市, 2006/8

金水敏「ヴァーチャル日本語 役割語について」日本語教師養成講座・開講講演, 名古屋 YWCA, 名古屋 YWCA, 2006/4

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

金水敏 新村出賞, 新村出記念財団, 2006/11

原口裕, 南出康世, 金水敏他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1981/10

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2004 年度～2006 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:金水敏

課題番号:16320059

研究題目:日本語史の理論的・実証的基盤の再構築

研究経費:2006 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、日本語の歴史的研究を発展させていく上で、伝統的な研究によって蓄積された知見と、新たな言語理論によっても

たらされる視点を統合・整理し、いかなる研究形態がもっとも有用であるかという点についての指針を提示することを目的とする。

日本語史は、国語学に特有の研究領域と考えられ、議論も国語学内部に閉じこめる傾向にあった。しかも、国語・国文系の学生は年々減少する傾向にあり、その中でも資料に基づく地道な実証的研究は学生に敬遠されがちである。まさしく伝統的な日本語史研究は危機的状況にあると言える。一方、近年欧米系の歴史言語学、近年の機能言語学や生成文法の研究者の中に、日本語史に興味を持つ向きもあり、特にこの10年で急速にその層が厚くなってきている。しかし、お互いの交流が乏しいため、データは詳しいが理論的枠組みが貧しいために意義が十分伝わらない研究、データの扱いに不慣れで知識が浅いにも関わらず、理論への貢献を急ぎすぎて、危うい議論を重ねる研究などがあとを絶たないのが現状である。本研究は、これら、日本語史に興味を持つあらゆる研究者のネットワークを形成し、相互の交流と情報の共有を進めるとともに、後進の研究者にとって魅力ある日本語史の枠組みを構築することを目指す。

2-6-2. 2007年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:金水敏

課題番号:19320060

研究題目:役割語の理論的基盤に関する総合的研究

研究経費:2007年度 直接経費 3,500,000円 間接経費 525,000円

研究の目的:

「役割語」とは、ステレオタイプ的な人物像と、心理的連合によって結びつけられたスピーチスタイルのヴァリエーションのことを指す。本研究では、(1)「役割語の認知とその発達」(2)「役割語の対照言語学的研究」(3)「役割語を巡る作品と享受者のインタラクション」(4)「日常談話における役割語の運用」の諸点を明らかにするために、(a)「幼児・児童の役割語的知識に関する心理シミュレーションと、それに基づく役割語習得メカニズムの理論化」(b)「対照研究の理論的基盤の整備」(c)「ポピュラーカルチャー作品における役割語表現の機能に関する基礎研究」(d)「日常談話におけるキャラ語尾と発話キャラクターの関連に関する研究」(e)「国際的研究ネットワークの構築」の5つの課題を進めていく。併せて、本研究の遂行を通して、日本語教育を初めとする言語教育、国語教育、翻訳論、文学研究等の隣接領域へも応用的貢献への方策も探求していく。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・副会長	2007年4月～現在に至る
日本語用論学会・運営委員	2007年4月～現在に至る
日本言語学会・委員	2006年4月～現在に至る
訓点語学会・委員	2006年4月～現在に至る
関西言語学会・運営委員	2006年4月～現在に至る
日本学術会議・連携会員	2006年3月～現在に至る
日本語学会・評議員	2004年4月～現在に至る
言語処理学会・理事	2004年3月～現在に至る

## 3. 岡島 昭浩 准教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授を経て、2002年、本学助教授(のち准教授に職名変更)。専攻:国語学。

### 3-1. 論文

岡島昭浩 「〈五音歌〉の変容——外郎売りと姓名判断——」飯倉洋一『テキストの生成と変容』大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座, pp. 71-79, 2008/3

岡島昭浩 『今昔物語集』の「東鳥」と「東雁」『待兼山論叢』40, 大阪大学文学会, pp. 1-13, 2006/12

### 3-2. 著書

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩(解説) 「言語からみた近世文化」亀井孝・大藤時彦・山田俊雄『日本語の歴史5近代語の流れ』平凡社, pp. 448-454, 2007/7

### 3-4. 口頭発表

岡島昭浩 「日本語コーパスの現状と日本語教育における利用」提升外語学習成效暨 e-learning 網路教學工作坊, 淡江大學外國語文學院, 淡江大學(台湾), 2007/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006年度～2007年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡島昭浩

課題番号:18520354

研究題目:近現代における国語学史の資料および人物についての基礎的研究

研究経費:2006年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

現在では埋もれてしまっている、明治・大正期の学者による日本語研究の業績を掘り起こすことを目標として、本研究では、その基礎となるべき調査・研究を行う。これらは、日本語学の研究文献目録には載せられることもなく、知られずにあるものも多いので、それらを学界に知らしめることを目指す。

あわせて、明治・大正期の日本語研究者達の伝記的事項も調査する予定であるので、没年が明らかになり、著作権保護期間の終了が確認できることによって、その研究成果を記した論文・著書等の公開が可能になるものが増えるであろうと期待される。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・常任査読委員	2007年5月～現在に至る
日本語学会・大会・企画運営委員	2003年5月～2006年5月
国語語彙史研究会・委員	2003年4月～現在に至る



## 2-16 英米文学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

英米文学専門分野では、学生の多様な関心に対応できる態勢を維持しつつ教育と研究に当たっている。17世紀・ルネサンス文学から20世紀現代に至るイギリス文学と、19・20世紀にわたるアメリカ文学において、正典といわれる古典的な作品はいうまでもなく、最近新たな評価を獲得しはじめた作品までも幅広く取り上げ、それらの文学テキストを綿密かつ正確に読むことを基本方針としている。学生が研究対象とする作家、時代、ジャンル、テーマ、方法論等を限定することは行わず、したがって学生諸君は自分の文学的関心にもとづいて自由に研究テーマを選ぶことができるのが特色である。スタッフおよび学生は、こうした多様な教育と研究にもとづいて蓄積した実力を背景にして、日本英文学会や日本アメリカ文学会をはじめとするさまざまな学会を舞台にして精力的に研究活動を行っている。

本研究分野では、研究室修了者を主体として組織された阪大英文学会(会長・玉井暲)と連携したり、年1回研究誌(*Osaka Literary Review*)を発行したりすることで研究を推進している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 3 准教授 2 外国人教師 1 助教 1

教授：玉井 暲、森岡 裕一、服部 典之

准教授：片渕 悦久、石割 隆喜

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
88	6	19	0	0	0	8	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	23	4	2	0	2
'07	25	0	3	4	3
小計	48	0	5	4	5

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	2	2
'07	4	0	4
計	4	2	6

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

橋 幸子 “The Modern Temper of Fitzgerald’s Women: Toward the Threshold of Self-Realization.” 2007/9

主査：森岡 裕一 副査：玉井 暲、服部 典之、片渕 悦久

伊藤 佳子 “The Landscape in Hardy’s Novels: Studies in Interrelations between Man and Nature.” 2008/3

主査：玉井 暲 副査：森岡 裕一、服部 典之、片渕 悦久

片山 美穂 “Sensibility, Sentiment, and Passion: The Romanticism of Maria Edgeworth, Charlotte Brontë, and Emily Brontë.” 2008/3

主査：玉井 暲 副査：森岡 裕一、服部 典之、片渕 悦久

高橋 信隆 “Diseases of Civilization in Henry James.” 2008/3

主査：玉井 暲 副査：森岡 裕一、服部 典之、片渕 悦久、石割 隆喜

##### 【論文博士】

川口 能久 「結婚と人間関係の変容——ジェイン・オースティンとE・M・フォースターの小説研究」 2006/12

主査：玉井 暲 副査：森岡 裕一、林 正則、服部 典之

片渕 悦久 「回想・思索・物語——ユダヤ系アメリカ作家としてのソール・ペロー」 2007/1

主査：森岡 裕一 副査：玉井 暲、柏木 隆雄、服部 典之

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	13	2	0	0	30	45
'07	7	2	0	0	2	11
計	20	4	0	0	32	56

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	11	0	0	0	11
'07	0	14	0	0	0	14
計	0	25	0	0	0	25

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2006年度】

麻島徳子 “Hardy’s Last Novel?: An Analysis of the Revision in *The Well-Beloved*”, *Osaka Literary Review*, 45, pp. 69-86, 2006/12

麻島徳子「ピーター・バリー<エコクリティシズム>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 43-50, 2007/3

足達賀代子「『太陽』の留保——『妖精の女王』におけるエリザベス一世と妖精女王の表象」玉井暉・新野緑共編『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』（阪大英文学会叢書 3）, 英宝社, pp. 171-190, 2006/11

足達賀代子「第四のカリス——『羊飼の暦』の女王賛歌」日本スペンサー協会編『詩人の詩人スペンサー——日本スペンサー協会 20周年論集』九州大学出版会, pp. 183-198, 2006/8

池田景子 “Doubling in Byron’s *Cain: A Mystery*”, *Osaka Literary Review*, 45, pp. 37-54, 2006/12

池田景子「スティーヴン・ブルーム<バイロンのナルシシズム再形成>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 153-160, 2007/3

市橋孝道「異界の中の親子——サッカー『ばらと指輪』に見る教育論的意義」玉井暉・新野緑共編『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』（阪大英文学会叢書 3）, 英宝社, pp. 291-310, 2006/11

市橋孝道「ウォルフガング・イーザー<リアリズム小説の構成要素としての読者——サッカー『虚栄の市』における美的効果>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 107-122, 2007/3

今井智史「アルバート・D・ハッター<『二都物語』における精神分析>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp.161-168、2007/3

岩橋浩幸 “The Influence of Present over Past: Imagination and Rhetoric in *V.*”, *Osaka Literary Review* , 45, pp. 115-133, 2006/12

岩橋浩幸「ジョン・バース<補充の文学:ポストモダン作家の小説>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 15-23, 2007/3

隠岐尚子 “Place Where Voices Resound: Toni Morrison’s *Jazz*”, 『待兼山論叢』（文学篇）, 40, pp. 17-27, 2006/12

- 隠岐尚子『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』森岡裕一、片渕悦久、吉野成美、杉田和己、沖野泰子、小久保潤子、高橋信隆、橘幸子、阪口瑞穂、松岡信哉、松原陽子、田中沙織、隠岐尚子、森本道孝、澤邊興平による共同執筆。森岡裕一・片渕悦久共編『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』英宝社, 2007/1
- 隠岐尚子「フィリップ・ペイジ<トニ・モリスン『ジャズ』におけるデリダの痕跡>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 187-194, 2007/3
- 垣口由香「誰の声? 誰の身体——Beckett 演劇の声と身体の関係性」*Osaka Literary Review*, 45, pp. 87-100, 2006/12
- 金崎八重“A Shepherd’s Departure: The Spatial Structure in *Lycidas*”, *Osaka Literary Review*, , 45, pp. 1-16, 2006/12
- 金崎八重「イザベル・G・マッキヤフリイ<『リシダス』——風景の詩人>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp.73-80, 2007/3
- 小島生子「マイケル・M・ボードマン<デフォーと物語の伝統>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 133-141, 2007/3
- 佐野絵梨子「ジョン・シフ<『グレート・ギャツビー』における転移された悲しみと他者性>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 169-175, 2007/3
- 澤邊興平『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』森岡裕一、片渕悦久、吉野成美、杉田和己、沖野泰子、小久保潤子、高橋信隆、橘幸子、阪口瑞穂、松岡信哉、松原陽子、田中沙織、隠岐尚子、森本道孝、澤邊興平による共同執筆。森岡裕一・片渕悦久共編『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』英宝社, 2007/1
- 関良子「観察される心理と身体——「グィネヴィアの弁明」における dramatic monologue の変奏」『日本英文学会第 78 回大会 Proceedings』(日本英文学会), pp. 68-70, 2006/9
- 武内正美「政治的身体としての衣装——『桶物語』の「衣装哲学」日本ジョンソン協会編『十八世紀イギリス文学研究, 第 3 号——躍動する言語表象』開拓社, pp. 21-34, 2006/5
- 高島裕以「ジョン・クーシック<暴力の純粋性——『二都物語』>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 123-131, 2007/3
- 高橋信隆「暴力/リンチ/カニバリズム」森岡裕一・片渕悦久共編『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』英宝社, pp. 98-108, 2007/1
- 橘幸子「アメリカン・ドリーム」森岡裕一・片渕悦久共編『新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ(改訂増補版)』英宝社, pp. 109-119, 2007/1
- 橘幸子「*The Great Gatsby*におけるセクシュアリティの表象」『中・四国アメリカ文学研究』(日本アメリカ文学会中・四国支部), 42, pp. 13-23, 2006/10
- 田中和也「J・ヒリス・ミラー<『ロード・ジム』——有機体破壊としての反復>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 177-186, 2007/3
- 田中沙織“Basil’s *Nostos* and Fitzgerald’s *Algia*: ‘Double Vision’ in the Basil Stories”, 『関西アメリカ文学』(日本アメリカ文学会関西支部), 43, pp. 31-46, 2006/10
- 田中沙織『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』森岡裕一、片渕悦久、吉野成美、杉田和己、沖野泰子、小久保潤子、高橋信隆、橘幸子、阪口瑞穂、松岡信哉、松原陽子、田中沙織、隠岐尚子、森本道孝、澤邊興平による共同執筆。森岡裕一・片渕悦久共編『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』英宝社, 2007/1
- 中村仁紀“Stumbling at Self in Keats’s *Endymion*”, *Osaka Literary Review*, 45, pp. 17-36, 2006/12
- 中村仁紀「クリストファー・リックス<キーツ、バイロン、そして<滑らかな至福>>」玉井暉編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 63-71, 2007/3
- 中井麻記子“Creators of Paradise: Representations of Samoa in Somerset Maugham’s ‘The Pool’”, 『待兼山論叢』(文学篇), 40, pp. 1-15, 2006/12
- 中井麻記子「詐欺師の楽園——スティーヴンソン「ファレサの浜」における異界創造と転覆」玉井暉・新野緑共編『<異

- 界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』(阪大英文学会叢書 3), 英宝社, pp. 311-329, 2006/11
- 中井麻記子 “Representations of Rooms in Somerset Maugham’s Semi-Autobiographical Novels”, 『中国四国英文学研究』(日本英文学会中国四国支部), 3, pp. 57-65, 2006/10
- 中谷紘子「ピーター・ブルックス<プロットを求める読み>」玉井暲編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 25-32, 2007/3
- 仲渡一美「ディラン・トマスの異界のヴィジョン——初期散文・少年の物語をめぐって」玉井暲・新野緑共編『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』(阪大英文学会叢書 3), 英宝社, pp. 126-148, 2006/11
- 仲渡一美「神話的空間からウェールズ共同体へ——Dylan Thomas, *Portrait of the Artist as a Young Dog* をめぐって」『日本英文学会第 78 回大会 Proceedings』(日本英文学会), pp. 56-58, 2006/9
- 仲渡一美「バーバラ・ハーディ<緑の詩人、ディラン・トマス>」玉井暲編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 81-88, 2007/3
- 馬淵恵里「エレイン・ショウォールター<女性の伝統>」玉井暲編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 33-42, 2007/3
- 馬淵恵里「メアリー・プルーヴィー<真の英国様式——『マンスフィールド・パーク』論>」玉井暲編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 143-151, 2007/3
- 森本道孝『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』森岡裕一、片渕悦久、吉野成美、杉田和己、沖野泰子、小久保潤子、高橋信隆、橋幸子、阪口瑞穂、松岡信哉、松原陽子、田中沙織、隠岐尚子、森本道孝、澤邊興平による共同執筆。森岡裕一・片渕悦久共編『改訂増補版 新世紀アメリカ文学史——マップ・キーワード・データ』英宝社, 2007/1
- 村田幸範「人工子宮を生み出すもの——E.M.フォスター「機械が止まる」に見るネットワーク社会と自己」玉井暲・新野緑共編『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』(阪大英文学会叢書 3), 英宝社, pp. 89-106, 2006/11
- 村田幸範「ナンシー・ミラー<主体の変容——作者、エクリチュール、読者>」玉井暲編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 51-59, 2007/3
- 吉野麻子 “Elinor’s Moral Code in Barton-Delaforde Community”, *Osaka Literary Review*, 5, pp. 55-68, 2006/12
- 吉野麻子「ウェイン・ブース<ジェイン・オースティン『エマ』における距離の操作>」玉井暲編『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室, pp. 99-105, 2007/3
- 【2007 年度】**
- 麻島徳子「『恋の霊』にみるハーディ小説の終局」日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』音羽書房鶴見書店, pp. 389-410, 2007/10
- 麻島徳子「人殺しをかくまう語り手: テス擁護の「レトリック」を解き明かす」『日本英文学会第 79 回大会 Proceedings』日本英文学会, pp. 79-81, 2007/9
- 池田景子「Abyss の旅のモチーフと河口探検——*Don Juan, Heaven and Earth, The Island*」『日本バイロン協会会報』11, pp. 14-18, 2007/11
- 岩橋浩幸 “Narrating, Remembering, and Forgetting: Self-Actualization in *The Bellarosa Connection*,” 『待兼山論叢』(文学篇), 41, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 19-34, 2007/12
- 佐野絵梨子 “A New Yorker’s New Moon: Anthony Patch in *The Beautiful and Damned*,” *Osaka Literary Review*, 46, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 35-50, 2007/12
- 関良子 “The Young William Morris and the Discussion of the ‘Dramatic’: Defending ‘The Defence of Guenevere,’” 『関西英文学研究』1, 日本英文学会関西支部, pp. 59-81, 2007/12
- 関良子 “William Morris in Apprenticeship: His Étude on the Arthurian Motif,” *Osaka Literary Review*, 46, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 17-34, 2007/12
- 武内正美「解体される身体——アイルランド人とヤフー」仙葉豊・能口盾彦・干井洋一共編『未分化の母体——十八世紀英文学論集』英宝社, pp. 243-257, 2007/8
- 馬淵恵里 “The Birth of a New ‘Angel’: From *Mansfield Park* to *Jane Eyre*,” *Osaka Literary Review*, 46, 大阪大学大学

院英文学談話会, pp. 1-16, 2007/12

森本道孝 “Pretending’ as a Functionless Security Blanket in *A Lie of the Mind* and *States of Shock*,” *Osaka Literary Review*, 46, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 63-78, 2007/12

吉野麻子 “The Act of Reading in *Northanger Abbey*,” 『待兼山論叢』(文学編), 41, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 35-46, 2007/12

## (2)口頭発表

### 【2006年度】

池田景子「*Cain: A Mystery* における mystery 理解の行方」イギリス・ロマン派学会第 32 回全国大会, 鳥取大学, 2006/9/24

市橋孝道「*Henry Esmond* と *Barry Lyndon*——カイアズマスの関係とドイツ舞台の意義」日本英文学会関西支部第 1 回大会, 大阪大学, 2006/12/16

岩橋浩幸「マックスウェルの悪魔としての Dr. Tamkin——*Seize the Day* にみるエントロピー」日本英文学会関西支部第 1 回大会, 大阪大学, 2006/12/16

岩橋浩幸「現在, 過去, 未来への択一的埋没——V. にみる二進法的社会と想像力」日本アメリカ文学会関西支部例会, 京都女子大学, 2006/11/11

垣口由香「ベケット劇とコーラス——ともに唱い触れ合う声」阪大英文学会第 39 回大会, 大阪大学, 2006/11/11

関良子「観察される心理と身体——「グィネヴィアの弁明」における dramatic monologue の変奏」日本英文学会第 78 回全国大会, 中京大学, 2006/5/21

橋幸子「三十歳の向こう側——Fitzgerald の短編“Jacob’s Ladder”を中心に」日本英文学会関西支部第 1 回大会, 大阪大学, 2006/12/16

田中沙織「“Fled is that music” ——*Tender Is the Night* に聴く「心の中の音楽」」日本アメリカ文学会第 45 回全国大会, 法政大学, 2006/10/14

仲渡一美「緑のナラティブ——トマスの“Place Poem”「ファーン・ヒル」再考」日本英文学会関西支部第 1 回大会, 大阪大学, 2006/12/16

仲渡一美「神話的空間からウェールズ共同体へ——Dylan Thomas, *Portrait of the Artist as a Young Dog* をめぐって」日本英文学会第 78 回全国大会, 中京大学, 2006/5/21

中村仁紀「コールリッジのシンボル概念をめぐって」イギリス・ロマン派学会第 32 回全国大会, 鳥取大学, 2006/9/24

### 【2007年度】

麻島徳子「人殺しをかくまう語り手：テス擁護の『レトリック』を解き明かす」日本英文学会第 79 回大会, 慶應義塾大学, 2007/5/20

池田景子「Abyss の旅のモチーフと河口探検——*Don Juan, Heaven and Earth, The Island*」日本バイロン協会第 11 回大会, ゆふいん山水館, 2007/6/30

岩橋浩幸「*The Bellarosa Connection* における記憶・語り・自己成型」日本ソール・ベロー協会第 19 回大会, 高槻市生涯学習センター, 2007/9/14

岩橋浩幸「依存・共存・自己実現——思索小説として読む *The Adventures of Augie March*」日本アメリカ文学会第 46 回全国大会, 広島経済大学, 2007/10/13

金崎八重「ミルトン『デイモン墓碑銘』における自然の変容」日本英文学会関西支部第 2 回大会, 大阪大学, 2007/12/22

佐野絵梨子「*The Beautiful and Damned* に見る月の効果」日本アメリカ文学会関西支部例会, 大阪外国語大学, 2007/7/14

関良子「“How Deeply Unpoetical the Age and All One’s Surroundings Are” ——19 世紀雑誌文化の台頭と詩の機能をめぐる議論」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 7 回全国大会, 日本大学, 2007/11/17

武内正美「『ガリバー旅行記』——プロブディンナグ渡航記におけるユートピア的諸相」18 世紀英文学研究会, 同志社大学, 2007/3/17

田中沙織「夢の持続——*The Last Tycoon* と *Pat Hobby Stories* にみる映像美学」日本アメリカ文学会第 46 回全国大会,



広島経済大学, 2007/10/13

田中沙織「“It Don't Mean a Thing” ——“A Clean, Well-Lighted Place”にみる nada の意味」日本ヘミングウェイ協会  
第 18 回大会, 関東学院大学, 2007/12/16

中井麻記子「Lucy Snowe の冒険——Vilette におけるクエスト・ロマンス的要素」日本英文学会関西支部第 2 回大会, 大  
阪大学, 2007/12/22

馬淵恵里「Jane Eyre における St. John Rivers の機能」日本ブロンテ協会 2007 年大会, 関西外国語大学, 2007/10/13

村田幸範「愛のエクリチュールと再生産をめぐって——E・M・フォースター『マリアン・ソーントン伝』について」日  
本英文学会関西支部第 2 回大会, 大阪大学, 2007/12/22

森本道孝「青い眼の男の危機——Sam Shepard の Eyes for Consuela と The Late Henry Moss を中心に」日本英文学会  
関西支部第 2 回大会, 大阪大学, 2007/12/22

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2007 年度】

馬淵恵里「海老池俊治著『ジェイン・オースティン論考』(研究社・1962 年)『ジェイン・オースティン研究』(日本オー  
ステイン協会), 1, pp. 123-28, 2007/6

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2007 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006 年度 学部 : 5 名 大学院 : 3 名 (計 8 名)

2007 年度 学部 : 4 名 大学院 : 4 名 (計 8 名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006 年度～2007 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006 年度～2007 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通  
訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8 名

2006 年度 : 3 名 2007 年度 : 5 名

<内訳> 技術職 2 名 ジャーナリスト 2 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 4 名  
その他 0 名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2006 年度 : 1 名 2007 年度 : 0 名

## 9. 刊行物

2006年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 45

2007年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 46

阪大英文学会叢書 3、玉井暲・新野緑共編『〈異界〉を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏——』（英宝社、2006/11）

阪大英文学会叢書 4、河上誓作・谷口一美共編『ことばと視点』（英宝社、2007/11）

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト領域 V

「文学・芸術の社会的媒介機能」——「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」

「環境と文学——第3回フォーラム」

2007/3

「環境と文学——第4回フォーラム」

2008/3

日本英文学会関西支部第1回大会

2006/12

日本英文学会関西支部第2回大会

2007/12

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第39回大会 2006/11/11

阪大英文学会第40回大会 2007/11/17

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

スタッフ面では、専任教員として、玉井暲教授がヴィクトリア朝および世紀末英文学や批評理論、森岡裕一教授がアメリカ・モダニズム小説、服部典之教授が18世紀および現代英国小説、片渕悦久准教授がユダヤ系アメリカ小説、石割隆喜准教授がアメリカ・ポストモダニズム文学、ポール・ハーヴィ外国人教師がシェイクスピアなどを講じている。学内からは仙葉豊教授(言語文化研究科)が大学院併任教授としてスタッフに加わっている。学外非常勤講師としては、阿部公彦講師(東京大学)、西前孝講師(岡山大学)が多種多様な講義を提供している。さらに、2006年にはフルブライト招聘講師としてダニエル・シフマン講師がスタッフに加わりアメリカ文学、アメリカ研究の授業を担当するなど、ヴァラエティに富んだ国際性豊かな教育水準を維持している。

院生の研究指導体制としては、従来の談話会形式による口頭発表に司会、コメンテーター制を導入し、さらに実践的な指導を行った結果、学会での院生の口頭発表数、レフリー査読つき論文採択数、全国的学会誌への掲載数は飛躍的に伸び、予想をはるかに上回る活躍ぶりを見せている。また、その他の同窓の研究者を基にした学会誌などへの掲載論文を含めると、この2年間の院生の論文総数はおおよそ56点に達している。また、海外からの研究者との積極的な交流によって、院生・学部生の間で英米の大学・大学院へ留学する気運が高まり、ほとんど毎年1名～2名の留学生を送り出している。さらに2006年度および2007年度には、アメリカのペンシルヴェニア大学へ、毎年2名を短期留学生として派遣するプロジェクトを開始し続行中である。以上のように、院生の活躍ぶりに関しても、阪大英米文学が日本の一大拠点になりつつあり、その教育水準の高さが全国的に認められている。

学位取得に関しては、この2年間に論文博士2名、課程博士4名を生み出している。学位論文提出はここ数年途切れることなく続いており、名実ともに、本専門分野の充実振りが実証されつつある。

教育面でさらに付け加えるならば、パソコン等機器の近代化を含むコモンスペースの整備を行い、学生が自由に自習や授業の準備ができる環境を整えている。また、院生・学部生・教員を交えて春・夏の研究室旅行を実施して親睦の場を積極的に設けるなど雰囲気作りにも努力しており、学問追及の厳しい雰囲気の中にも、和気あいあいとしたアットホームな空気が醸成され、院生を中心としたホームページ作りがますます充実するなど、本研究室の雰囲気はきわめて良好である。

## 12-2. 研究活動

教員および学生の研究活動はきわめて旺盛である。その各々は、自分の従事する学問分野、研究領域にしたがって、種々の学会大会での研究発表、学会誌・専門誌への論文執筆、著書の出版、翻訳の出版等々の研究活動を行っている。とくに、日本英文学会と日本アメリカ文学会を舞台とする研究活動が積極的に行われているが、これらの学会のほかにも、日本英文学会関西支部、日本英文学会中国・四国支部学会、シェイクスピア協会、17世紀英文学会、ミルトン・センター、ジョンソン協会、日本18世紀学会、ロマン派学会、オースティン協会、ブロンテ協会、ハーディ協会、ジョージ・エリオット協会、ペイター協会、ワイルド協会、ヴィクトリア朝文化研究学会、ベケット研究会などの英文学系の学会や、日本アメリカ文学会関西支部、ホーソーン協会、フォークナー協会、ヘミングウェイ協会、フィッツジェラルド協会、ペロー協会、マラマッド協会などのアメリカ文学系の学会など、種々の学会に積極的に参加をして、意欲的な研究活動を行っている。玉井教授を中心とした「環境と文学」に関する学術会議が文学研究科全体の取組として数回開催されているが、それにも、英米文学の院生は教員ともども発表などで積極的に関わっている。

また、海外の研究者との交流にも積極的に取り組んでおり、海外への留学、海外の大学・研究機関への訪問、外国人研究者の招聘等の活動を通じて、研究の前線において行われている状況に触れることを怠りなく実行している。

本専門分野は、学部レベルで同一の専修を構成している英語学専門分野と一緒に、「阪大英文学会」を組織し、これを母体にして、毎年1回、研究発表会を開催している。本専門分野出身の学生および研究者は、この同窓会組織の学会でも活発な活動を展開している。この阪大英文学会は、近年は、従来になかったシンポジウム形式を取り入れて、斯界に今日的な問題提起や研究成果の発表を行ない、発信する学会組織としての整備を推し進めている。また、本専門分野出身者からの投稿論文を編集して「阪大英文学会叢書」の刊行(4巻まで既刊)を開始するなど、活気にあふれる研究組織として全国的に注目されている。こうした学会を運営する母体である本専門分野研究室は、ますます研究組織として充実化の一途をたどっている。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 玉井 暲 教授

1946年生。1969年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1971年、大阪大学大学院文学研究科修士課程(英文学専攻)修了。文学博士(大阪大学、2000年)。大阪大学助手、大阪府立大学助手、和歌山大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999年1月現職。専攻:英文学。

#### 1-1. 論文

玉井暲 「ワイルド編集による *The Woman's World* の復刻に当たって」『*The Woman's World*:別冊解説』アティーナ・プレス, pp. 1-6, 2008/1

玉井暲 「ハーディのリアリズムと手紙の言葉」『トマス・ハーディ全貌』音羽書房鶴見書店, pp. 742-760, 2007/10

玉井暲 「<新しい女>小説の諸相——小説・演劇・絵画」『*New Woman Fiction*:別冊解説』アティーナ・プレス, pp. 1-11, 2006/7

#### 1-2. 著書

Tamai, Akira, 角田信恵(共著), *The Woman's World*, 2 vols:監修・編集, アティーナ・プレス, 1280p., 2008/1

玉井暲, 大森文子(共編著)『Paul Harvey, Eco-Friendly Japan: 注解』英宝社, 106p., 2008/1

玉井暲(編)『批評理論を読む、テキストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学文学研究科英米文学研究室, 196p., 2007/3

玉井暲, 新野緑(共編著)『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』阪大英文学叢書3号, 英宝社, 400p., 2006/11

Tamai, Akira, 武田美保子(共編), *New Woman Fiction*, Part II:監修・編集, アティーナ・プレス, 2000p., 2006/7

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 1-4. 口頭発表

---

玉井暉 「ワイルドとジャーナリズム」日本ワイルド協会第32回大会:シンポジウム, 日本ワイルド協会, 慶応義塾大学, 2007/12

玉井暉 「シャーロット・ブロンテ小説の可能性——『シャーリー』の場合」日本ブロンテ協会2007年大会, 日本ブロンテ協会2007年大会, 関西外大, 2007/10

玉井暉 「ペイター文学の可能性」日本ペイター協会第46回年次大会・研究発表会, 日本ペイター協会, 北星学園大学, 2007/10

玉井暉 「ペイター文学の原風景」日本ペイター協会第46回年次大会・研究発表会:シンポジウム, 日本ペイター協会, 北星学園大学, 2007/10

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

玉井暉 大阪大学共通教育賞(2006年1学期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:玉井暉

課題番号:18320049

研究題目:19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス

研究経費:2006年度 直接経費 6,000,000円 間接経費 1,800,000円

2007年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

研究の目的:

イギリス19世紀末の作家ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドを中心にして、この時代の主要な小説家・詩人・批評家・思想家のテキストと資料、および当時の文化的・歴史的文献を綿密に読解・検証することを通して、男性性をめぐる言説において構築と脱構築の相反するベクトルが交錯するありようを研究する。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

1-7-1. 2004年度～2008年度、研究助成、助成金獲得者:玉井暉

助成金名:日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト

研究題目:「環境と文学——環境文学の可能性とその社会的効用」:文学・芸術の社会的媒介機能——芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006年度 直接経費 1,150,000円

2007年度 直接経費 1,350,000円

研究の目的:

英米文学、ドイツ文学、フランス文学から日本文学、比較文学におよぶ世界の主要な文学を対象にして、文学と環境との関わりを多面的、かつ総体的に検討し、環境文学の成立する可能性を探る。

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本オスカー・ワイルド協会・理事	2007年4月～現在に至る
日本英文学会関西支部・支部長	2006年4月～現在に至る
日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集顧問	2004年4月～現在に至る
日本ブロンテ協会・理事	2004年4月～現在に至る
大阪大学英文学会・会長	2003年11月～現在に至る

日本英文学会中国四国支部・学会誌『中国四国英文学研究』編集委員	2003年10月～2007年10月
日本オスカー・ワイルド協会・会長	2003年4月～2007年3月
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・理事	2001年11月～現在に至る
日本テキスト研究学会・幹事	2001年8月～現在に至る
日本英文学会・理事	2001年4月～2007年3月
日本ジョージ・エリオット協会・理事	1997年11月～現在に至る
日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集委員	1993年4月～1997年3月
日本トマス・ハーディ協会・運営委員	1992年10月～現在に至る
日本ウォルター・ペイター協会・理事	1991年10月～現在に至る

## 2. 森岡 裕一 教授

1950年生。1979年、大阪大学大学院修士課程修了。文学博士(大阪大学、2006年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻:アメリカ文学。

### 2-1. 論文

森岡裕一他(共著)「改定増補版新世紀アメリカ文学史」英宝社, pp. 1-285, 2007/1

森岡裕一 「『酒場での十夜』解説」松柏社, pp. 271-293, 2006/4

### 2-2. 著書

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森岡裕一(翻訳)「T・S・アーサー、『酒場での十夜』」松柏社, pp. 1-270, 2006/4

森岡裕一(分担執筆)『英語文学事典』ミネルヴァ書房, 2007/4

### 2-4. 口頭発表

森岡裕一 「メディアとしての禁酒小説」、日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム, 2007/10

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森岡裕一 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2005/11

森岡裕一 大阪大学共通教育賞(2005年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2005/7

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2006年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:森岡裕一

課題番号:18520197

研究題目:19世紀アメリカ小説における感傷主義の研究

研究経費:2006年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

19世紀アメリカ文学に顕著な家庭小説、禁酒小説を対象に共通のレトリックである感傷主義を分析する。

### 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本アメリカ文学会・代議員	2002年4月～現在に至る
日本アメリカ文学会関西支部・評議員	1997年4月～現在に至る

## 3. 服部 典之 教授

1958年生。1981年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学修士(大阪大学、1983年)。文学博士(大阪大学、2003年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月文学研究科助教授、2008年4月現職。専攻:英文学。

### 3-1. 論文

- 
- 服部典之 「遺棄された小説起源論——バスタディと18世紀英文学小説」仙葉豊他編『未分化の母体——十八世紀英文学論集』英宝社, pp. 76-91, 2007/7
- 服部典之 「舌のないフライデー」『中京大学評論誌 八事』(23), pp. 82-84, 2007/3

### 3-2. 著書

- 
- 服部典之 『詐術としてのフィクション——デフォーとスモレット』英宝社, 395p., 2008/3

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 
- 服部典之(書評) 「John Richetti, *The Life of Daniel Defoe* (Oxford: Blackwell Publishing, 2005)」『英文學研究』84, 日本英文學會, pp. 207-212, 2007/11
- 服部典之(訳)(翻訳) 「ゲオルゲ・フォルスター『世界周航記 下』」『岩波書店単行本』岩波書店, pp. 234-506, 2007/6
- 服部典之(書評) 「スコットランド文化辞典」津田正編『英語青年』152/12, 研究社, pp. 752-753, 2007/3
- 服部典之(訳)(翻訳) 「ゲオルゲ・フォルスター『世界周航記 上』」『岩波書店単行本』岩波書店, pp. 1-233, 2006/12
- 服部典之(書評) 「ゲオルゲ・フォルスター『世界周航記 上』解説」『岩波書店単行本』岩波書店, pp. 235-242, 2006/12

### 3-4. 口頭発表

- 
- 服部典之 「性と交易の物語学——世界周航記と「不名誉な交渉」(Infamous Commerce)」東京18世紀イギリス文学・文化研究会第10回大会, 東京18世紀イギリス文学・文化研究会, 専修大学, 2007/10
- 服部典之 「南方へ: “Keep still on SOUTHING” ——物語空間としての「南海」の発見」日本英文学会第79回全国大会シンポジア第三部門: 空間表現の近代英文学「旅立ち」と「到着」の謎, 日本英文学会, 慶應義塾大学, 2007/5

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 
- 服部典之 大阪大学共通教育賞, 大阪大学, 2004/12

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号:18520199

研究題目:初期英国小説における「孤児」主人公と、18世紀英国社会における「孤児問題」の研究

研究経費:2006年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究の最大の目的は、18世紀英国において重大な社会問題であった「孤児問題」と、初期英国小説の中に多く描かれた「孤児」主人公を取り上げ、社会と文学の相互浸透の有様を研究し、それらを代表する「孤児性」(bastardy)こそが、18世紀英国文化の根幹を成していた意識を代表する概念であることを実証することである。二つめの目的は、「近代小説」がいかにかしてイギリスに発



祥したかという問題を研究する「小説起源論」に、「孤児問題」という観点から新たな地平を切り開くことである。従来着目されなかった「孤児」小説をスタンダードなもののみならず、文学史からは忘却された、復刊されていない小説も含め、可能な限り収集しその全容を把握する。そして同時に1745年に創設された「捨て子養育院」(Foundling Hospital)のアーカイブを海外出張により入手する。これらの社会福祉施設の歴史的成り立ちと実態を調査し、「孤児問題」の社会的実態の把握を行う。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英文学会・大会準備委員	2007年5月～現在に至る
日本ジョンソン協会・総務委員	2007年5月～現在に至る
日本オーステイン協会・大会準備委員	2007年4月～現在に至る
日本英文学会関西支部・事務局長	2006年4月～現在に至る
阪大英文学会・理事	2005年4月～現在に至る

## 4. 片渕 悦久 准教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。博士(文学)(大阪大学、2007年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻:アメリカ文学、20世紀ユダヤ系小説、現代小説。

### 4-1. 論文

---

片渕悦久 「逸脱する思索——『オーギー・マーチの冒険』」日本ソール・ベロー協会(編)『ソール・ベロー研究——人間像と生き方の探求』(日本ソール・ベロー協会), 大阪教育図書, pp. 55-71, 2007/6

### 4-2. 著書

---

片渕悦久 『ソール・ベローの物語意識』晃洋書房, 322p., 2007/12

森岡裕一, 片渕悦久他(共編著)『改訂増補版新世紀アメリカ文学史』英宝社, pp. 54-73, 2007/1

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

片渕悦久, 大工原ちなみ, 伊達雅彦他 「後期中編三部作をめぐって」日本ソール・ベロー協会第19回大会シンポジウム:ノーベル賞以降のソール・ベロー, 日本ソール・ベロー協会, 高槻市生涯学習センター, 2007/9

新野緑, 岡田禎之, 片渕悦久他 「アメリカ文学の演習」阪大英文学会第39回シンポジウム:英米文学の演習・英語学の演習, 阪大英文学会, 大阪大学, 2006/11

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本ソール・ベロー協会・理事

2004年10月～現在に至る

### 5. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、同講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:アメリカ文学

#### 5-1. 論文

---

石割隆喜 「死者の〈怨〉の二つの型——フロイトの「文学」、*Vineland* の“Cahmmunism”」『関西英文学研究』(日本英文学会関西支部), 1, pp. 117-133, 2007/12

石割隆喜 「Is Pynchon Too Much with the World? —— “Is It O.K. to Be a Luddite?” と「ビン・ラディン」」『大阪外国語大学英米研究』(大阪外国語大学英米学会), 31, pp. 33-46, 2007/3

#### 5-2. 著書

---

なし

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

石割隆喜(書評) 「三浦玲一『ポストモダン・バーセルミ——「小説」というものの魔法について』」『英文学研究』(日本英文学会), 83, pp. 204-208, 2006/11

#### 5-4. 口頭発表

---

石割隆喜 「シュールリアリスティックな資本主義——*Gravity's Rainbow* における幽霊的 V2」日本英文学会関西支部第2回大会, 日本英文学会関西支部, 大阪大学, 2007/12

石割隆喜 「形式的な、あまりに形式的な——ピンチョンの「脱小説」」日本英文学会関西支部第1回大会シンポジウム: 文学研究の新しい可能性, 日本英文学会関西支部, 大阪大学, 2006/12

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 2000/5

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石割隆喜

課題番号:15520178

研究題目:現代アメリカ文学における身体意識の変容とメディアとの関係

研究経費:2006年度 直接経費 500,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、ポストモダンの状況においてますます加速化される身体とテクノロジーとのインタラクションにより、これまでになく多様化し、根源的に変容を遂げつつある人間の身体意識に着目し、日常の隅々にまで浸透してやまない広義のメディアが、主体の形成にどのように本質的に関わっているのかを、新たなフロンティアとしての身体という広く「アメリカ」的なコンテキストを視野に入れながら、具体的には主に20世紀アメリカの小説と演劇における身体表象の人種、ジェンダー、階級、イデオロギーといった面からの分析を通して、通時的かつ共時的に明らかにしようとするものである。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本アメリカ文学会・幹事

2006年4月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員

2005年4月～2007年3月

## 6. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。MA English Language and Literature, MPhil English Studies 1500-1660 (Renaissance Poetry and Prose) Oxford University。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員 (1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化学部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事 (1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化学部講師。1995年4月、大阪大学言語文化学部助教授。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学。

### 6-1. 論文

---

なし

### 6-2. 著書

---

HARVEY, Paul, A.S. *Eco-Friendly Japan*, Eihosha, Tokyo, 105p. , 2008/1

HARVEY, Paul, A.S. (共編), *Big Dipper English Course II*, Suken Shuppan, 2007/12

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Messages to My Mother Five*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 142p. , 2007/10

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Messages to My Mother Four*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 156p. , 2007/9

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Messages to My Mother Three*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 141p. , 2007/6

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Mozzicone 2*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 180p. , 2007/4

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Messages to My Mother One*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 154p. , 2007/4

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Messages to My Mother Two*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 191p. , 2007/4

HARVEY, Paul, A.S. Stean Anthony, *Mozzicone 1*, Yamaguchi Shoten, Kyoto, 150p. , 2007/3

HARVEY, Paul, A.S. (共編), *Big Dipper English Course I*, Suken Shuppan, 2006/12

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 6-4. 口頭発表

---

なし

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 7. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻:アメリカ文学。

### 7-1. 論文

---

なし

### 7-2. 著書

---

なし

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 7-4. 口頭発表

---

なし

### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

好井千代 福原賞, 福原記念英米文学研究助成基金, 1993/2

### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

7-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:好井千代

課題番号:17520166

研究題目:19世紀末のアメリカ小説とナショナリズムの諸相——グローバル化の中の国家と文学

研究経費:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、19世紀末にグローバリゼーションの潮流と葛藤しながら時には密接に結びついて発展した欧米ナショナリズムの多様な形態を、Henry James など同時代のアメリカ小説を通して分析し、更に、こうした19世紀末のナショナリズムの形が、グローバルな現代社会が抱えるナショナリズムの形といかに共通性があったかという点にまで議論を拡大し、最終的には19世紀末のナショナリズムの現代的意義を提示したい。

### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-17 ドイツ文学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、実証主義的な文献学の伝統を継承して「原典の緻密な読解」と「広範な文献資料の精査」に基づくテキスト読解という研究の基本姿勢を堅持し、そうした研究実践を可能にする基礎的知識の習得、ならびに方法論的意識の涵養を教育の根幹に据えてきた。また同時に、国内外の新しい研究状況をにらんで、地域文化論的アプローチへの関心を導く教育プログラムも提供している。

ドイツ文学では従来から、1800年前後の転換期、および1900年前後の転換期というふたつの時期をピークとする文学史的・文化史的状況が研究の焦点をなしており、2006～2007年度スタッフもまた、この両時期をカバーする配置となっている。また近年、ドイツ国民国家の領域内で展開した文学にくわえ、広く中東欧全域でドイツ語を媒体にくりひろげられた文化現象が内外の注目を集めており、そうした動向にも対応するバランスのとれたスタッフ配置であることは、本専門分野のすぐれた特色である。

ドイツ語学の基礎知識習得、および実際の運用能力向上のために、外国人教師による授業が提供されている。さらに、現スタッフでは十分にカバーすることのできない研究テーマや研究方法について、言語文化部の併任教員および学外非常勤講師の来講を得て、学問動向をつねにフォローする教育・研究活動の構築を目指している。

とりわけ課程博士論文を準備中の大学院学生については、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会と連携してその研究活動を支援し、学会活動をつうじた研究者としての自立をうながすように努めている。また、社会教育的なイベントである「ゲーテ生誕の夕べ」（日本ゲーテ協会主催）の企画・運営をバックアップし、市民レベルでの日独文化交流の促進に取り組んでいる。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 0 外国人教師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

外国人教師：ヨルク・ノヴァコヴィッチ

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
14	5	5	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	3	1	0	1	0
'07	4	1	0	5	0
小計	7	2	0	6	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	1	1
'07	1	4	5
計	1	5	6

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

村田美紀「芸術と市民性 世紀転換期のドイツにおける「文化」の諸相」2008/3

主査：林正則 副査：須藤訓任、三谷研爾

##### 【論文博士】

武市修 「中世ドイツ叙事文学の表現形式——押韻技法の観点から——」2006/7

主査：林正則 副査：大庭幸男、三谷研爾、松村國隆

渡邊洋子「ドイツ「書簡文化」と女性——ゾフィー・フォン・ラロッシュからベッティーナへ」2007/6

主査：林正則 副査：柏木隆雄、荻野美穂、三谷研爾

北島玲子「ムージルにおける終わりなき省察の行方——言語表現の可能性を求めて——」2007/11

主査：林正則 副査：和田章男、三谷研爾

阪井(三谷)葉子「歌謡と口承 ドイツ民謡研究の生成と展開」2008/1

主査：林正則 副査：玉井暲、伊東信宏

葉柳和則：「経験はいかにして表現へともたらされるのか——M.フリッシュの「順列の美学」——」2008/3

主査：林正則 副査：市川明、三谷研爾



## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	2	1	0	0	0	3
'07	1	0	0	0	0	1
計	3	1	0	0	0	4

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	1	0	0	0	1
'07	0	1	0	0	0	1
計	0	2	0	0	0	2

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2006年度】

小松紀子「カフカ『審判』における語りと読者」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 22, pp. 61-71, 2006/11

土谷真理子「Das Motiv des Meeres in den Balladen Schillers. Das Ungeheuer und der Mensch」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 22, pp. 45-59, 2006/11

別府陽子「「理解」と「救済」トーマス・マン『ファウスト博士』試論」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 40, pp. 43-58, 2006/12

【2007年度】

友田次郎「「だが留まるものをうち建てるのは詩人だ」ヘルダーリンとその故郷像」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 23, pp. 29-46, 2007/11

#### (2)口頭発表

【2006年度】

小松紀子「Franz Kafka “Der Process”における技法について——読者への指示」大阪大学ドイツ文学会第11回研究発表会, 2006/2/4

【2007年度】

別府陽子「トーマス・マン『ブッデンブローク家の人々』における古代ギリシャ悲劇の要素」大阪大学ドイツ文学会第12回研究発表会, 2007/12/8

#### (3)その他(書評・翻訳など)

なし

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

#### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

#### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2007年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

#### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)  
なし

#### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2006年度:1名 2007年度:3名

<内訳> 技術職 2名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名  
その他 0名

#### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度:0名 2007年度:0名

#### 9. 刊行物

2006年度 『独文学報』22号

2007年度 『独文学報』23号

#### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2006年2月
日本ゲーテ協会「ゲーテ生誕の夕べ」(第256回目の誕生日記念)	2006年8月
日本ゲーテ協会「ゲーテ生誕の夕べ」(第257回目の誕生日記念)	2007年8月
大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2007年12月

#### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会	2006年1月、7月、10月
	2007年7月、10月、12月

#### 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

##### 12-1. 教育活動

本研究分野の教育の基本は「原典の緻密な読解」にあり、ドイツ語テキストの正確・緻密な読解のトレーニングを重視している。過去2年間もこの方針を堅持するいっぽう、学部1年次配当の専門基礎教育科目『ドイツ文学入門』において、高等学校段階での学習内容を配慮した授業を展開し、また学部2年次・3年次を対象に中級ドイツ語文法習得をめざ

す演習を提供してきた。前者が専修志望者の獲得に効果をあらわし、後者が本専門分野のみならず他専門分野の学生のドイツ語文献読解能力向上に寄与していることは、従前どおりである。

大学院学生に関しては、ドイツ語関連の研究職ポストの加速度的減少に歯止めがかからない現在、研究職への就職状況の厳しさは緩和されていない。引き続き教育プログラムの見直しをすすめるとともに、教育目標そのものを多様化させ、研究職以外の就職を希望する大学院学生をサポートできる態勢を構築すべく試行錯誤を重ねているが、著効性のある方策を見いだすには至っていない。さしあたり、大学院生・学部学生とも、従来の学問の枠組にとらわれない、意欲的な研究課題を発見する能力の開拓を重視していきたい。

2007年度をもって林正則教授が定年退職を迎え、また文学部本館改修工事が始まろうとしている。今後数年のうち、本専門分野教育の人的・物理的環境が大きく変動することが予想される。そのなかで、教育内容のさらなる見直しもまた不可欠と思われる。

## 12-2. 研究活動

本専門分野スタッフは、それぞれの研究課題に即して着実な活動を展開してきた。林教授は、これまでのゲーテ研究を象徴論の観点から集大成し、日本学術振興会人文・社会科学振興事業プロジェクト内の「環境と文学」フォーラムなどでその成果を発表した。三谷准教授は、担当の専門基礎教育科目『ドイツ文学入門』に基づく編著『ドイツ文化史への招待』（大阪大学出版会）を刊行、さらにこれまでのカフカ研究を集大成する学位請求論文「世紀転換期のプラハ モダン都市の空間とその文学的表象」を本研究科に提出した。

この2年間に本分野関連の学位請求論文6本(課程博士1、論文博士5)を提出され、そのすべてに博士号が認められた。これは、本専門分野の研究水準の高さの指標といえよう。大学院学生の研究活動は、質的には従来と変わらず、またドイツ語論文1本を含むとはいえ、量的には決して多いものではない。後期課程への進学者じたいの減少がその主たる原因であるが、在籍者に積極的な成果発表を促していく必要もある。

中東欧地域との研究交流は、引き続き専門分野としての課題である。三谷准教授は、本学のグローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学」に事業推進担当者として参加するいっぽう、科学研究費助成金の交付を受けてドイツおよびチェコの研究者との研究ネットワーク維持に努めてきた。また、大阪大学と大阪外国語大学との統合という新しい環境のもと、他部局とも協力しつつ、中東欧地域における研究パートナー機関獲得の準備がすすめられている。

この間、学生は短期・長期を問わず、積極的にドイツ語圏に留学し、その実際にふれて自身の研究を組み立てる取組みをつづけている。留学の経験と実際の知識が専門分野内に蓄積され、それが後続学生の知的関心を刺激するというサイクルを、今後とも発展させていきたい。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(1986年)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授を経て、2008年4月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

#### 1-1. 論文

三谷研爾 「〈交通〉のユートピア プロート『チェコ人の女中』における越境と移動」『東北ドイツ文学研究』(東北ドイツ文学会), 50, pp. 101-119, 2007/5

三谷研爾 「魔都のトポグラフィー 世紀転換期のプラハにおける近代化と都市の表象」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47, 大阪大学文学研究科, pp. 47-86, 2007/3

三谷研爾 「国民文学史のはざま 「プラハのドイツ語文学」研究史をめぐって」国府寺司『モダニズムと中東欧の芸術・文化』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」, pp. 147-158, 2007/1

## 1-2. 著書

三谷研爾(編)『ドイツ文化史への招待 芸術と社会のあいだ』大阪大学出版会, 291p., 2007/10

## 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾, 家高洋, 吉田耕太郎(共訳)『フロイト全集』18, 岩波書店, 2007/8

## 1-4. 口頭発表

三谷研爾 「都市空間と物語 カフカ『失踪者』をめぐって」「環境と文学」フォーラム, 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト事業「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」, 大阪大学, 2008/3

三谷研爾 「もうひとつのモダン 1920-1930 年代における阪神間モダニズム」, プラハ・カレル大学日本学研究所, プラハ・カレル大学, 2008/2

三谷研爾 「多言語都市と国民文学 プラハのドイツ語文学の場合」日本比較文学会第42回関西大会, 日本比較文学会, 大阪大学, 2006/11

## 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

三谷研爾 大阪大学共通教育賞(2002年度前期)

## 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:19520220

研究題目:多言語地域における文化資源蓄積の比較研究

研究経費:2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、ボヘミアとシレジアというふたつの多言語地域の文化環境にかんする学知の集積状況に注目し、その歴史的展開を冷戦期、さらには1990年代以降の中欧地域の政治的・社会的コンテクストに照らしながら、比較検討をおこなう。両地域を対照することによって、ドイツ-チェコ関係およびドイツ-ポーランド関係という、それぞれ固有の歴史的条件に規定された差異の側面を確認するとともに、中欧の多言語地域に共通する問題の位相を確認する。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会・会長	2008年1月～現在に至る
阪神ドイツ文学会・幹事	2006年4月～現在に至る
関西チェコ/スロバキア協会・副会長	2003年4月～現在に至る

## 2. イオルク・ノヴァコヴィッチ 外国人教師

1952年生。1989年、ミュンヘン大学博士課程中途退学。文学修士(ミュンヘン大学、1987年)。1980-82年、熊本大学外国人教師。1989年より現職。専攻:日本学/社会学/中国学。

## 2-1. 論文

なし

**2-2. 著書**

---

なし

**2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等**

---

なし

**2-4. 口頭発表**

---

なし

**2-5. 受賞歴(年度を限定しない)**

---

なし

**2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)**

---

なし

**2-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**2-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

なし

## 2-18 フランス文学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、フランス文学研究の王道である文献学的実証性を重んじ、堅実な方法でフランス文学のテキストを読み、すでにパスカル研究では「エコール・ドーサカ(大阪学派)」と称されて著名であり、バルザック研究、プルースト研究ではフランス本国に伍して遜色のない教育と研究を行うことを創設以来努めてきた。その成果は数多くの国際的に通用する専門家を輩出したことによっても証明される。またフランス語教育において優れた経歴を持つ外国人教師はフランス語の実践的運用能力の養成に力を注ぎ、仏政府給費留学生を含む多くの留学生を海外に送った。さらに学外のアリアン・フランセーズ、関西日仏学館とも協力関係を結び、学生の語学力の向上、海外思潮の速やかな摂取を図っている。

授業科目は中世から現代までのフランス文学を併任教授の助力も仰いで教授し、知識に偏りが無いことをめざし、語学教育も専門家が先端の理論を紹介している。大学院生については毎週研究指導の時間を設け、他の院生も含めた自由討議で、論理の整合性や発表の有効な表現法について訓練する機会としている。

また年一回発行する学術誌『ガリア』に寄稿させ、論文執筆の機会を多くするように心がけている。この学術誌はフランスのもっとも権威ある学会誌にも文献として載るほど著名となっており、学生もフランス語で執筆するか、フランス語の要旨を付けることにより、海外に発信している。近年では大部分の論考がフランス語によって執筆され、国際学術誌として評価されている。

フランスから研究者および小説家、詩人などの実作者を招聘し、講演会やセミナーを頻繁に開催している。このように日仏の学術交流を積極的に進めるとともに、実作者たちの創作方法の紹介などは文学研究に強い刺激を与えている。

研究室では大学院生と学部生が自由に討議できる時間と空間を設け、積極的な学生はそれぞれに読書会を開いて知識やフランス語応用能力を涵養できるようにしている。大学院生は学部生を指導し、教員とはまた別趣の効果をあげている。

学生が自主的に運営している研究室ホームページには、研究室の活動、フランス文学についての情報など多彩な情報が盛り込まれ、充実した内容になっている。さらに『ガリア』のホームページ WEB-GALLIA では大阪大学フランス語フランス文学会の活動についての情報が載せられるとともに、『ガリア』掲載論文のほとんどすべてが公開されている。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 1 准教授 0 外国人教師 1 助教 1

教授：和田 章男

外国人教師：アニエス・ディソン

助教：深川 聡子



## 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
12	4	9	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

## 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	5	1	5	0	0
'07	3	2	2	3	0
小計	8	3	7	3	0

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	0	0
'07	1	2	3
計	1	2	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【論文博士】

奥田恭士「バルザックにおける語りの技法とその進化 ～1830-1832年雑誌掲載作品群とその後の展開について～」  
2008/1

主査：柏木隆雄 副査：服部典之、和田章男

小山美沙子「フランスで出版された女性のための知的啓蒙書(1650～1800年)に関する一研究——その特徴及び時代背景から19世紀への継承まで——」2008/1

主査：柏木隆雄 副査：荻野美穂、和田章男

##### 【課程博士】

高橋愛“La description d'Émile Zola : la réflexion théorique et *Les Rougon-Macquart*” 2008/2

主査：柏木隆雄 副査：上野修、和田章男

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集 その他	計
'06	4	0	0	0	17	21
'07	8	0	0	0	2	10
計	12	0	0	0	19	31

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	3	3	4	0	0	10
'07	0	5	10	0	0	15
計	3	8	14	0	0	25

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

##### 【2006年度】

足立和彦 “Maupassant et le théâtre : une tentative dans les années 1870” *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 46, pp. 9-16, 2007/3

岩村和泉 「挫折した試みとしての組織——バルザック『田舎ミュージック』における“Société Littéraire” ——」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 40, pp. 59-74, 2006/12

廣田大地 “La pluralité du “je” dans la poésie baudelairienne” *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 46, pp. 1-8, 2007/3

間野照世 『『パスカル博士』と『ルルド』の連続性——水の表象をめぐって——』『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 13, pp. 36-46, 2007/3

##### 【2007年度】

足立和彦 “Maupassant et le théâtre (2) : la réécriture d’un drame historique” *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 47, pp. 61-68, 2008/3

足立和彦 「封じられる女の声——モーパッサン初期作品における女性の表象」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 14, pp. 69-79, 2008/3

足立和彦 “La poésie réaliste de Maupassant” 『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会), 92, pp. 51-67, 2008/3

足立和彦 「永井荷風に見るギ・ド・モーパッサン」『テキストの生理学』(柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編, 朝日出版社), pp. 397-409, 2008/2

足立和彦 「モーパッサン『エラクリウス・グロス博士』——真理の探究から狂気へ——」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 41, pp. 79-94, 2007/12

岩村和泉 「「輝く星座のごとく」: バルザックにおける人物の集団化の一例」『テキストの生理学』(柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編, 朝日出版社), pp. 3-12, 2008/2

岩村和泉 “Les « petites sociétés » dans les *Scènes de la vie parisienne* de Balzac” モンペリエ第三大学 Master2 論文, 2007/9

- 林千宏「ミシェル・キリアン『黙示週』(1597)について——反キリスト教の表象を中心に——」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 14, pp. 25-35, 2008/3
- 林千宏“La poétique catholique dans *La Dernière Semaine* de Michel Quillian——Autour de la peinture dans le palais du paradis——” *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 47, pp. 29-36, 2008/3
- 廣田大地“Le blanc dans le vers baudelairien”『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会), 91, pp. 35-51, 2007/9
- 間野照世「ゾラの諸作品における出産描写の変遷——『ごった煮』を中心に——」 *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 47, pp. 45-52, 2008/3

## (2)口頭発表

### 【2006年度】

- 足立和彦「モーパッサンと演劇——1870年代の試み——」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2006/10/7
- 坂巻康司「『共同性』への誘い,あるいは「行動」としての批評——マラルメの「演劇に関する覚書」について」日本フランス語フランス文学会秋季大会, 岡山大学, 2006/10/28
- 中尾雪絵“MedSLT: A Multi-Lingual Grammar-Based Medical Speech Translator”, P. Bouillon, N. Chatzichrisafis, S. Halimi, B.A. Hockey, H. Isahara, K. Kanzaki, Y. Nakao, B. Novellas Vall, M. Rayner, M. Santaholma, M. Starlander, IWCI 2007, 京都大学, 2007/1/25
- 中尾雪絵“Une grammaire multilingue partagée pour la traduction automatique”, P. Bouillon, M. Rayner, B. Novella, Y. Nakao, M. Santaholma, M. Starlander, N. Chatzichrisafis, TALN 2006, ルーヴァン・カソリック大学(ベルギー), 2006/6/10-13
- 中尾雪絵“MedSLT: A Limited-Domain Unidirectional Grammar-Based Medical Speech Translator”, M. Rayner, P. Bouillon, N. Chatzichrisafis, M. Santaholma, M. Starlander, B.A. Hockey, Y. Nakao, H. Isahara, K. Kanzaki (2006), In Proceedings of First International Workshop on Medical Speech Translation, HLT-NAACL, ニューヨーク, 2006/6/9
- 廣田大地「『悪の花』における主体について」関西マラルメ研究会, 大阪大学, 2006/12/28
- 廣田大地「フランス詩における空白——ボードレールを中心に——」文芸学研究会, 大阪大学, 2006/12/22
- 廣田大地「詩行と空白——ボードレールの韻文詩の変革を巡って——」日本フランス語フランス文学会, 岡山大学, 2006/10/27
- 廣田大地「『悪の花』のレイアウト」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2006/10/7
- 間野照世「ゾラ『ルルド』から見た『パスカル博士』」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 同志社大学, 2006/11/26
- 脇聡「パリの遊歩者、ヴァロアの散策者——ネルヴァル後期作品における散策の諸相」『環境と文学——環境文学(Eco-Literature)の可能性とその社会的効用』第3回フォーラム, 大阪大学, 2007/3/31

### 【2007年度】

- 足立和彦「若手教員の悩み」関西フランス語教育研究会, 大阪日仏センター=アリアンス・フランセーズ, 2008/3/28
- 足立和彦「封じられる女の声——モーパッサン初期作品における女性の表象——」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 大阪大学, 2007/12/1
- 足立和彦「モーパッサン、ポエジー・リアリスト」日本フランス語フランス文学会春季大会, 明治大学, 2007/5/20
- 岩村和泉「バルザックにおける人物の集団化のポエティック:「パリ生活情景」の二つの組織をめぐって」関西バルザック研究会, 近畿大学, 2008/3/22
- 高橋愛「構築された叢書のなかで——ゾラの冒頭句が照らす「一家族」の歴史とその思想——」大阪大学フランス語フランス文学会研究会・柏木隆雄教授退職記念シンポジウム「いかに物語を語り始めるか——小説の冒頭句 incipit をめぐって——」, 大阪大学, 2008/3/8

- 林千宏「若手教員の悩み」 関西フランス語教育研究会, 大阪日仏センター=アリアンス・フランセーズ, 2008/3/28
- 林千宏「ミシェル・キリアン:『黙示週』(1597)について——反キリスト教の表象を中心に——」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 大阪大学, 2007/12/1
- 林千宏「ミシェル・キリアン:『黙示週』(1597)について——反キリストの表象を中心に——」ロンサール学会, 神奈川県あしがら荘, 2007/8/23
- 廣田大地「幻影と額縁——後期ボードレールの詩作観について」ボードレール研究会, 大阪日仏センター=アリアンス・フランセーズ, 2007/7/28
- 三好香菜恵「ブルトンとキリコ——シュルレアリストとキリコとの接点と相違」, 大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2007/9/29
- 村上彩子「ヴィクトル・ユゴー『東方詩集』におけるオリエント」『環境と文学——環境文学(Eco-Literature)の可能性とその社会的効用』第4回フォーラム, 大阪大学, 2008/3/15
- 脇聡「ネルヴァルの旅行記の変遷——『旅の手紙』から『旅に憑かれた男の印象記』へ——」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 大阪大学, 2007/12/1
- 脇聡「ネルヴァルの旅行記の変遷——『旅の手紙』から『旅に憑かれた男の印象記』へ——」関西ネルヴァル研究会, 大手前大学, 2007/11/3
- 脇聡「ネルヴァルとアルチスト誌——1844年から1848年に発表された旅行記事を中心に——」関西ネルヴァル研究会, 大手前大学, 2007/5/27

### (3)その他(書評・翻訳など)

- 足立和彦 <事典項目執筆> 「ラブレール」, 「ユマニスム」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 安部朋子 <事典項目執筆> 「ディドロ」, 「啓蒙思想」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 岩村和泉 <事典項目執筆> 「従姉ベット」, 「従兄ポンス」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 坂巻康司 <事典項目執筆> 「マラルメ」, 「象徴主義」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 佐藤久仁子 <事典項目執筆> 「ジッド」, 「モーリヤック」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 高橋愛 <事典項目執筆> 「ゾラ」, 「ゴンクール兄弟」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 谷口智美 <事典項目執筆> 「アーサー王伝説」, 「田舎司祭の日記」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 中尾雪絵 <事典項目執筆> 「ルソー」, 「回想録」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 長谷恵子 <事典項目執筆> 「サロート」, 「愛人」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 濱野淑美 <事典項目執筆> 「クリスチヌ・ド・ピザン」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 林千宏 <事典項目執筆> 「ロンサール」, 「モンテーニュ」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 廣田大地 <事典項目執筆> 「ボードレール」, 「ランボー」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3
- 間野照世 <事典項目執筆> 「フローベール」, 「自然主義」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3

三好香菜恵 <事典項目執筆> 「ブルトン」, 「シュルレアリスム」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3

村上彩子 <事典項目執筆> 「ヴィニー」, 「ユゴー」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3

山崎恭宏 <事典項目執筆> 「バルザック」, 「スタンダール」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3

脇聡 <事典項目執筆> 「ロマン主義」, 「ネルヴァル」他 柏木隆雄, 和田章男他編『フランス文学小事典』朝日出版社, 2007/3

脇聡 <翻訳> 「60年代の集团的調査——プロゼヴェットでの学際的調査」(アンドレ・ビュルギエール) 『先端社会研究』(関西学院大学 21世紀 COE プログラム 「『人類の幸福に資する社会調査』の研究」), 4, pp. 356-407, 2006/9/30

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

秋田尚文 「蟹工船」エッセーコンテスト奨励賞, 白樺文学館多喜二ライブラリー, 2008/01

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2007年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 1名 大学院: 2名 (計3名)

2007年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度~2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

坂巻康司 博士後期課程, 東北大学大学院国際文化研究科, 准教授, 2008/10

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度~2007年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

### 9. 刊行物

2007年度 *GALLIA* (機関誌: 大阪大学フランス語フランス文学会) n°47

2006年度 *GALLIA* (機関誌: 大阪大学フランス語フランス文学会) n°46

### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会(第62回・柏木隆雄教授退職記念シンポジウム)(国内学会) 2008年3月8日

日本フランス語フランス文学会関西支部大会(国内学会) 2007年12月1日

Christian Prigent 講演会 « Salut les anciens, salut les modernes »(講演会)	2007年11月26日
大阪大学フランス語フランス文学会(第61回)(国内学会)	2007年9月29日
Françoise Leriche 講演会 « La pratique de la citation et de l'allusion culturelle dans <i>A la recherche du temps perdu</i> — Proust est-il vraiment un romancier élitiste ? »(講演会)	2007年7月3日
大阪大学フランス語フランス文学会(第60回)(国内学会)	2007年3月3日
大阪大学フランス語フランス文学会(第59回)(国内学会)	2006年10月7日
Eric Bordas 講演会 « Le don du récit chez Balzac »(講演会)	2006年5月26日
Anne Portugal 講演会 « Sur Apollinaire »(講演会)	2006年4月17日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

2006年度は「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の一環として、教員と大学院生が共同して『フランス文学小事典』を作成した。大学院演習を同事典の作成に充て、人名、作品名、事項名の選別、分担執筆、校閲および校正、資料・文献調査、固有名・用語・文体の統一などを行い、2007年3月に朝日出版社より刊行した。新聞、雑誌に書評が掲載され、高く評価された。この活動は学生たちにとって、専門に研究している作家ばかりでなく、その周辺の潮流を理解するとともに、文学史上の位置を確認することにもつながった。また明快でわかりやすい文章を書く訓練ともなった。本事典は刊行後、1年生の入門、および学部教育にも役立つものとなっている。

この2年間に19世紀文学研究者エリック・ボルダス、ブルースト研究者フランソワーズ・ルリッシュを招き、先端の研究についての講演会を開催するとともに、詩人アンヌ・ポルチュガル、クリスチャン・プリジャンなどの実作者による講演会も実施した。フランス本国の研究者や作家との交流は学生たちにとって大きな刺激となっている。

### 12-2. 研究活動

フランス文学専門分野は、毎年春と秋に本専門分野が主体となって組織している大阪大学フランス語フランス文学会の活動として、専門家、学生による研究発表、シンポジウムを行い、学外を含めて毎回50名ほどのフランス文学・語学の研究者の参加を得て、研究活動の成果を公開し、議論している。この研究会は2008年3月で62回を数えるほどに、長い伝統を持っている。

また、大阪大学フランス語フランス文学会の機関誌『ガリア』は、1953年の初号以来、大学紛争時に延期はあったものの、2008年3月で47号を数える。このように研究室を拠点にした学術誌で、かくも長期間、定期的に発刊しているものは、フランス文学の分野では『ガリア』のみで、フランスの最も権威ある学会誌の文献目録に必ず採録されるなど国内外で注目される学術誌に成長した。フランス語での執筆者が多いこともその特徴の一つである。応募論文を、選出された委員で構成される編集委員会で審査するという査読制を導入し、質の高い論文を掲載すべく努めている。なお、過去のほとんどすべての論文をウェブ上で公開しており、多くの反響を得ている。

2007年12月には日本フランス語フランス文学会関西支部大会を言語文化研究科と共同で本学にて開催した。多くの本研究室の大学院生が研究発表を行うとともに、他大学の教員や学生との実りある研究交流の場となった。



## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 和田章男教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年大阪大学大学院文学研究科助教授、2004年より同教授。専攻：フランス文学。

#### 1-1. 論文

Wada, Akio, “Proust et Leconte de Lisle : un autre poète dans le *Contre Sainte-Beuve*” *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 47, pp. 69-76, 2008/3

和田章男 「生成研究の方法と課題——プルーストを中心に——」『テキストの生成と変容』(大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究報告書), pp. 13-18, 2008/3

和田章男 「20世紀フランス文学における旅とエクリチュール——「旅行記」の終焉と「旅行小説」の興隆」『テキストの生理学』(柏木隆雄教授退職記念論文集), 朝日出版社, pp. 543-554, 2008/2

和田章男 「ロココ文化——美的生活の極み」『18世紀ヴェルサイユ・クラヴサン音楽の美の世界』浜松市楽器博物館, pp. 7-8, 2007/12

Wada, Akio, “Proust et le paysage de Camille Corot” *Proust sans frontière, Marcel Proust 6, Lettres Modernes Minard*, pp. 121-132, 2007/9

和田章男 「プルーストとネルヴァル批評」『大阪大学大学院文学研究科紀要』, 47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 27-45, 2007/3

#### 1-2. 著書

和田章男, 柏木隆雄, 金崎春幸他(共編)『フランス文学小事典』朝日出版社, 384p., 2007/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男 「私の留学時代——研究とバカンス——」 *Bulletin* (大阪大学大学院文学研究科・文学部国際交流センター室報), 56, pp. 1-3, 2008/3

和田章男 「九州大学大学院人文科学研究院仏文学講座外部評価報告書」『九州大学大学院人文科学研究院外部評価報告書』九州大学大学院人文科学研究院自己点検・評価委員会, pp. 38-39, 2007/3

和田章男 「フランス文学小事典プロジェクト」『ソーシャルネットワーク型人文学教育の構築』「魅力ある大学院教育」イニシアティブ中間報告, pp. 44-45, 2006/12

和田章男 「プルースト研究と病」『仏文研究』(京都大学仏文学会), 特別号, pp. 389-393, 2006/6

#### 1-4. 口頭発表

和田章男 「1913年の二つの冒頭句」シンポジウム:いかに物語を語り始めるか——小説の冒頭句incipitをめぐる——, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学, 2008/3

Wada, Akio “La formation des noms de personnages dans la genèse de *A la recherche du temps perdu*” Colloque franco-japonais sur la genèse de l'œuvre dans la littérature française: Comment naît une œuvre littéraire? ——Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques——, 関西日仏学館, 2007/12

和田章男 「プルーストとルコント・ド・リール——『サント=ブーヴに反論する』におけるもう一人の詩人——」, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2007/12

和田章男 「「生成研究」の方法と課題——プルーストを中心に——」大阪大学文学研究科広域文化表現論講座共同研究:テキストの生成と変容, 大阪大学文学研究科広域文化表現論講座, 大阪大学, 2006/6

和田章男, 水野尚, 増田真 「20世紀における旅とエクリチュール——「旅」と「旅行記」の終焉」日本フランス語フランス文学会春

季大会ワークショップ:旅とエクリチュール, 日本フランス語フランス文学会, 慶応義塾大学, 2006/5

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:和田章男

課題番号:18520202

研究題目:プルースト草稿資料における固有名の調査および索引作成

研究経費:2006年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

大阪大学がマイクロフィルムで所蔵しているプルースト草稿資料のうち、75冊の草稿帳(カイエ)に現れるすべての固有名詞(人名、地名、作品名)を調査し、総合索引を作成することを目的とする。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本プルースト研究会・世話人

2006年4月～現在に至る

関西プルースト研究会・世話人

2005年9月～現在に至る

## 2. アニエス・ディソン 外国人教師

ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の教授資格(CAPES)、記号学・言語学博士号取得。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982年より現職。

### 2-1. 論文

---

DISSON, Agnès, “Turbulences et mutations : la poésie française contemporaine des années 50 aux années 2000”, *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 47, pp. 109-118, 2008/3

アニエス・ディソン, 深川聡子(訳) 『『方丈記』から半自伝的散文作品へ——日本を巡るジャック・ルーボー——』『テキストの生理学』(柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編, 朝日出版社), pp. 411-421, 2008/2

DISSON, Agnès, “Ryoko Sekiguchi : Adagio ma non troppo”, *CCP (Cahier Critique de Poésie)*, 15, CipM/Farrago, p. 148, 2008/2

DISSON, Agnès, “Donner la parole à l’autre : Ryoko Sekiguchi”, *CCP (Cahier Critique de Poésie)*, 12, CipM/Farrago, p. 122, 2006/9

DISSON, Agnès, “Roubaud sur Rimbaud : rimbaldisme, rupture métrique et monstration poétique”, Hitoshi Usami(ed.), *Arthur Rimbaud, à l’aube d’un nouveau siècle. Actes du Colloque de Kyoto (juin 2004)*, Klincksieck, pp. 107-118, 2006/4

DISSON, Agnès, “Le tunnel du temps d’Hubert Lucot”, *Revue Faire Part*, 18/19 (numéro spécial Hubert Lucot), pp. 139-142, 2006/4

### 2-2. 著書

---

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 2-4. 口頭発表

---

DISSON, Agnès “Quitane ou les paradoxes de la transparence”, Colloque international “Liberté, licence et illisibilité poétique” (30 janvier – 2 février 2008), Université Point Loma Nazarene, San Diego, USA, 2008/2

DISSON, Agnès “Rupture / Césure, communication avec Anne Portugal”, “Enjeux de la Littérature contemporaine”, Séminaire dirigé par Dominique Viart, Université Lille 3, 2007/3

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本フランス語フランス文学会関西支部・特別編集委員

2007年6月～現在に至る

## 3. 深川 聡子 助教

1973年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。2001年、リール第三大学 DEA(専門研究課程修了証書)取得。2005年、大阪大学大学院博士後期課程単位修得退学。文学修士。2007年より現職。2008年より奈良教育大学非常勤講師。専攻:20世紀フランス文学。

### 3-1. 論文

---

深川聡子「ボリス・ヴィアンとシャンソン——ユーモア、異化、ロックンロール——」, *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 47, pp. 101-108, 2008/3

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

深川聡子(翻訳), アニエス・ディソン「『方丈記』から半自伝的散文作品へ——日本を巡るジャック・ルーボー——」, 『テキストの生理学』(柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編, 朝日出版社), pp. 411-421, 2008/2

深川聡子他(項目執筆)「ヴィアン」「ウリボ」他, 『フランス文学小事典』(岩根久, 柏木隆雄, 金崎春幸, 北村卓, 永瀬春男, 春木仁孝, 和田章男編, 朝日出版社), 2007/3

### 3-4. 口頭発表

---

深川聡子「ボリス・ヴィアンとシャンソン——ユーモア・異化・ロックンロール——」大阪大学フランス語フランス文学会第61回研究会, 大阪大学, 2007/9

**3-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

---

なし

**3-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

---

なし

**3-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**3-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

なし

## 2-19 英語学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野では、主として、「統語論・生成文法理論」、「英語史」、「音声学」、「機能文法」、「意味論・語用論」、「認知意味論」、「認知言語学」、「関連性理論」などを教育・研究しており、次のような3つの特色がある。第1は、言語の生成と運用という2つの両輪で学部生・大学院生を教育・研究指導する体制をとっていることである。この指導体制の利点は、言語の生成と運用という全く異なる理論的視点から研究・教育指導を行うため、学部生・大学院生は言語事実を相補的に柔軟に観察する目を養うことができ、バランスのとれた研究ができることにある。第2は、学部生や大学院生の研究上の志向や興味を尊重していることである。実際に、学部生の卒業論文の内容や大学院生の研究分野をみると、生成文法理論、統語論、関連性理論、意味論、認知言語学、語用論、形式意味論などのようにたいへん多岐にわたっている。これは、本研究室の授業内容に多様性があるということと、学部4年生や大学院生の研究への自主性を尊重しているという本研究室のスタンスを反映している。第3の特色は、大学院生に国内外の学会でたいへん活発に研究成果を発表するよう奨励していることである。その結果、例えば、国内の学会では、日本英語学会、日本英文学会、認知言語学会、日本言語学会、関西言語学会、日本語用論学会などで研究成果を発表している。また、海外ではアメリカ、イギリス、ベルギー、ノルウェー、オーストラリア、ニュージーランドなどの国で開催された学会でも数多く発表している。

大学院生の教育の面では、博士前期課程の院生には正規の授業の他に、学内外のすぐれた講演や講義にも積極的に参加し、広く英語学の知識を身につけるよう指導している。また修士論文の作成にあたっては、中間発表や学会発表を通じて、その質的向上に努めている。博士後期課程の院生には、日本英語学会、日本英文学会などの全国大会で研究発表を行い、2年次末に博士予備論文を提出し、3年次末には学位申請論文を完成させる方向で指導している。また、学術振興会特別研究員にも積極的に応募することを勧め、同時に、英語の運用能力を試すTOEICやTOEFLを年に数回受験し、英語の実用能力を高めるよう助言している。その他、研究設備・環境の面でも、最新の書物や専門誌を完備してすぐに読めるように整備している。

なお、本研究室では、院生の研究意欲や意識を高めるために「待兼山ことばの会」を開催し、国内外の著名な言語学者や若手研究者に講演や研究発表をお願いした。また、本研究室のスタッフと大学院生による英語学論文集 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* を年1回刊行している。論文集は *MLA International Bibliography* に報告し、国際的に公表されている。この他、英米文学分野と共同で刊行している *Osaka Literary Review* に論文を投稿することもできる。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：大庭 幸男、加藤 正治、神山 孝夫

准教授：岡田 禎之

## 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
88	5	11	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

## 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	23	1	2	2	2
'07	25	1	3	1	3
小計	48	2	5	3	5

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	1	2
'07	1	0	1
計	2	1	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】 田中英理 “Scale Structures and Event Measurement” 2007/3

主査：大庭幸男 副査：金水敏、岡田禎之

森英樹 “Three Types of Imperatives and Related Constructions: A Contrastive Study of English and Japanese” 2008/3

主査：大庭幸男 副査：加藤正治、岡田禎之

【論文博士】 田中裕幸 “Feature Relations in Natural Language Syntax” 2006/5

主査：大庭幸男 副査：金水敏、岡田禎之



## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	11	1	3	0	2	17
'07	10	1	3	0	5	19
計	21	2	6	0	7	36

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	12	8	4	0	0	24
'07	8	6	1	0	0	15
計	20	14	5	0	0	39

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

##### 【2006年度】

- 岩橋一樹「絵画の特徴を述べる共感覚表現とその効果」『日本語用論学会第8回大会発表論文集』1, pp. 9-16, 2006/12/3
- 川原功司「Optional Scope Shifting Operation in Japanese」*KLS*(関西言語学会), 26, pp. 336-346, 2006/6/10
- 黒川尚彦「opposite の意味論と語用論——do the opposite を中心に」『日本語用論学会第8回大会発表論文集』1, pp. 33-40, 2006/12/3
- 香本直子“Interpretation of PRO in Rationale Clauses,”『待兼山論叢』40, 大阪大学文学会, pp. 29-42, 2006/12/25
- 篠原弘樹“*it*-Cleft 構文[*it* be X that Y]”再考——相対的に解釈される X の特定性——」*KLS* (関西言語学会), 26, pp. 242-250, 2006/6/10
- 篠原弘樹「*It*-Cleft 構文：型と文脈」『日本語用論学会第8回大会発表論文集』1, pp. 57-64, 2006/12/3
- Nagata, Yuka “On the Applicative Approach to the Double Object Construction,” in Yukio Oba and Sadayuki Okada (eds.) *OUPPEL (Osaka University Papers in English linguistics)* 11, pp. 39-72, 2007/3
- Nishiguchi, Sumiyo “Covert Emotive Modality Is a Monster,” *Proceedings of Logic and Engineering of Natural Language Semantics 2006 (LENLS 2006)*, A Satellite International Workshop of the 20th Annual Conference of The Japan Society of Artificial Intelligence (JSAI), pp. 113-144, Tokyo, Japan, 2006/6
- Nishiguchi, Sumiyo “Fake Past and a Monster,” in Tomoko Kawamura, Yunju Suh and Richard K. Larson (eds.) *Stony Brook Occasional Papers in Linguistics Vol. I: Intensionality and Sentential Complementation*, pp. 152-171, 2006/12
- Nishiguchi, Sumiyo “Categorical and Semantic Ambiguity of Possessives and Adjectives” in Yukio Oba and Sadayuki Okada (eds.) *OUPPEL (Osaka University Papers in English linguistics)* 11, pp. 73-83, 2007/3
- 平川公子「参照点構造構築現象としての文法化——have got を中心として——」*KLS*(関西言語学会), 26, pp. 122-132, 2006/6/10
- 平松佳二郎「移動様態動詞と再帰代名詞の存在——one's way 構文との比較を通して——」*KLS*(関西言語学会), 26, pp. 144-153, 2006/6/10
- 南佑亮「形容詞属性叙述文にみられる属性判断の階層性について」『日本認知言語学会論文集』6, pp. 106-116, 2006/9/10

- 南佑亮「難易構文における二つの解釈についての認知的考察」*JELS*(日本英語学会) 24, pp. 111-120, 2007/3
- Murata, Kazuhisa "Split 'PP' Structure and Syntactic Unaccusativity," in Yukio Oba and Sadayuki Okada (eds.) *OUPPEL (Osaka University Papers in English linguistics)* 11, pp. 19-37, 2007/3
- Mori, Hideki "The V-*te miro* Conditional Imperative and Other Imperative Forms: Grammaticalization of Lexemes in Constructions," *Journal of Japanese Linguistics* 22, The Ohio State University, pp. 1-16, 2007/3
- 吉本真由美「Comparative (Sub)deletion について——比較節における  $\bar{A}$  移動を探る——」*JELS*(日本英語学会) 24, pp. 241-250, 2007/3
- 【2007 年度】
- 岩橋一樹「メタファー表現の形式とその効果——品詞の相違の観点から——」*KLS*(関西言語学会) 27, pp. 65-75, 2007/6
- 岩橋一樹「視点と共感覚表現」河上誓作, 谷口一美共編『阪大英文学会叢書 4 ことばと視点』英宝社, 東京, pp. 20-30, 2007/11
- 岩橋一樹「形容詞を用いたメタファー表現はどのように解釈されるか」*JELS*(日本英語学会) 25, pp. 81-90, 2008/3
- Kawahara, Koji "A New Perspective on Japanese *Sika-Nai* Constructions," *Proceedings of the 37th NELS* (The North East Linguistic Society), pp. 1-15, 2008/1
- Shinohara, Hiroki "The *it*-Cleft Construction [it be X that Y]: *it*-pronouns in X," in Yukio Oba and Sadayuki Okada (eds.) *OUPPEL (Osaka University Papers in English linguistics)* 12, 2008/3
- Nishiguchi, Sumiyo "Polymorphic Quantifier," *Proceedings of Logic and Engineering of Natural Language Semantics 2007* (A Satellite International Workshop of the 21th Annual Conference of The Japan Society of Artificial Intelligence), pp. 284-293, 2007/6
- Nishiguchi, Sumiyo "Bimoraic Filter and Sonority Sensitive Syllable Contact in Dasenach Imperfective," *Research in African Languages and Linguistics (RALL)* 7, 2007/10
- 西口純代「物語文の現在時制における視点と文脈の変化」河上誓作, 谷口一美編『阪大英文学会叢書 4 ことばと視点』英宝社, 東京, pp. 170-176, 2007/11
- Nishiguchi, Sumiyo "Five Types of Affective Contexts: Nonmonotonic NPI Licensers," *CLS* (The Chicago Linguistic Society) 40-1, 249-264, 2008/3/15
- Nishiguchi, Sumiyo "Temporal Dynamic Semantics of Factual Counterfactuals," in Akito Sakurai et al. (eds.) *Lecture Notes in Computer Science: New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI 2003 and JSAI 2004 Conferences and Workshops, Niigata, Japan, June 23-27, 2003, Kanazawan, Japan, May 31-June 4, 2004, Revised Selected Papers*, Springer, Berlin, Heidelberg, pp. 438-448, 2007
- Nishiguchi, Sumiyo "Covert Emotive Modality Is a Monster," in Takashi Washio et al. (eds.) *Lecture Notes in Computer Science: New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI 2006 Conference and Workshops, Tokyo, Japan, June 5-9 2006, Revised Selected Papers*, Springer, Berlin, Heidelberg, pp. 191-204, 2007
- Nishiguchi, Sumiyo "Categorical Ambiguity of Possessives and Adjectives" *Linguistics in the Big Apple: CUNY/NYU Working Papers in Linguistics: the Proceedings of SUNY/CUNY/NYU Mini-Conference* 8, 2007
- 平川公子「Subjective/objective Construal と主体化との関わり」『日本認知言語学会論文集』(日本認知言語学会) 第 7 巻, pp.383-393, 2007/9
- 平川公子「福岡市方言における文末詞パイとタイ」『阪大社会言語学研究ノート』第 8 号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 116-131, 2008/3
- 南佑亮「典型的な tough 構文の多義性と主体性について」河上誓作, 谷口一美編『阪大英文学会叢書 4 ことばと視点』pp. 91-103, 2007/11
- 南佑亮「難易形容詞の意味構造と拡張用法について」『待兼山論叢』第 41 号, 大阪大学文学会, pp. 47-62, 2007/12
- Minami, Yusuke "Notes on Controllability," in Yukio Oba and Sadayuki Okada (eds.) *OUPPEL (Osaka University Papers in English linguistics)* 12, 2008/3
- 村田和久「分割前置詞句構造」*JELS*(日本英語学会)25, pp. 181-189, 2008/3

吉本真由美「空演算子移動と Left Branch Condition——比較構文の謎を解明する」*JELS*(日本英語学会)25, pp. 295-304, 2008/3

## (2)口頭発表

【2006 年度】

- 大川裕也「*There* 構文の談話機能」日本社会言語科学会第 18 回大会, 北星学園大学, 2006/8/27 (大会予稿集 pp. 70-73)
- 大川裕也「Constraints and Functions of the *There*-construction」日本言語学会第 133 回大会, 札幌学院大学, 2006/11/19 (大会予稿集 pp. 147-151)
- 岩橋一樹「メタファー表現の形式とその効果——品詞の相違の観点から——」関西言語学会第 31 回大会, 甲南大学, 2006/6/10
- Kawahara, Koji “Fragmental Answers of Negative Concord and the Theory of Ellipsis,” Syntax and Semantics Research Group, University of York, England, 2006/6/15
- Kawahara, Koji “Fragmental Answers of Negative Concord and the Theory of Ellipsis,” Linguistics Association of Great Britain Annual Meeting 2006, University of Newcastle upon Tyne, England, 2006/8/30
- Kawahara, Koji “A New Perspective on Japanese *Sika-Nai* Constructions,” 37th Meeting of the North Eastern Linguistic Society, University of Illinois, Urbana-Champaign, U.S.A., 2006/10/13
- Kawahara, Koji “Negative Induction and Unique Subtraction in Negative Concord,” Staff Student Seminar, University of York, England, 2006/10/25
- Kawahara, Koji “On NPIs in Deletion,” 4th York-Essex Morphology Meetings, University of Essex, England, 2007/2/11
- 千田愛「エコー標識としての「やはり・やっぱり」」日本語用論学会第 9 回大会ワークショップ, 桃山学院大学, 2006/12/9 (大会予稿集, p. 5)
- Nishiguchi, Sumiyo “Bipolar Items and Emotive Modality,” Swarthmore Workshop on Negation and Polarity, Swarthmore College, U.S.A., 2006/4/15
- Nishiguchi, Sumiyo “Covert Emotive Modality Is a Monster,” Logic and Engineering of Natural Language Semantics 2006, 人工知能学会国際ワークショップ, タワーホール船堀, 東京, 2006/6/6
- Nishiguchi, Sumiyo “Presupposition Accommodation by Discourse-Initial Evidential Marker *Mo*,” International Conference on Revisiting Japanese Modality, University of London, SOAS, England, 2006/6/25
- Nishiguchi, Sumiyo “Fake Past and Covert Emotive Modality,” CHRONOS 7: International Conference on tense, aspect, mood, and modality, Antwerpen University, Belgium, 2006/9/19
- Nishiguchi, Sumiyo “Categorical Ambiguity of Possessives and Adjectives,” The 8th CUNY/SUNY/NYU Mini-conference, Stony Brook University, U.S.A., 2006/11/18
- Nishiguchi, Sumiyo “Fake Past and Contexts,” Linguistic Society of America Meeting, Hilton Anaheim, Anaheim, U.S.A., 2007/1/7
- Nishiguchi, Sumiyo “Prosodic Morpheme in Dasenach,” The North American Conference on Afroasiatic Linguistics 35 (NACAL 35), San Antonio, U.S. A., 2007/3/17
- Nishiguchi, Sumiyo “The Dasenach Imperfect,” 38th Annual Conference on African Linguistics (ACAL 38), University of Florida, U.S. A., 2007/3/23
- 平川公子「Subjective/objective Construal と主体化との関わり」日本認知言語学会第 7 回大会, 京都教育大学, 2006/9/24 (JCLA Conference Handbook 2006, pp. 223-226)
- 南佑亮「難易構文における二つの解釈についての認知的考察」日本英語学会第 24 回大会, 東京大学, 2006/11/4 (Conference Handbook 24 号, pp.37-40)
- Mori, Hideki “Maori Imperatives and Ergativity,” 3rd International Postgraduate Conference, Victoria University of Wellington, New Zealand, 2006/7/22

吉本真由美「日本語の“Subcomparatives”——その容認される条件とは——」日本言語学会第 132 回大会, 東京大学, 2006/6/18 (日本言語学会第 132 回大会予行集, pp. 57-62)

吉本真由美「On Comparative (Sub)Deletion」Generative Lyceum, 関西学院大学, 2006/6/24

吉本真由美「Attributive Comparatives:  $\bar{A}$ -movement in Than-Clauses」Generative Lyceum, 関西学院大学, 2006/10/21

吉本真由美「Comparative (Sub)Deletion について——比較節における  $\bar{A}$  移動を探る——」日本英語学会第 24 回大会, 東京大学, 2006/11/6 (Conference Handbook 24 号, pp. 69-72)

【2007 年度】

Ito, Chizuru "Argument Unification and Sharing: The Syntax of the Quasi-Existential Construction", The 17th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of California, Los Angeles, USA, 2007/11/10

岩橋一樹「形容詞の多義性とメタファー表現に関する一考察」関西言語学会第 32 回大会, 同志社大学, 京都, 2007/6/10

岩橋一樹「形容詞を用いたメタファー表現はどのように解釈されるか」日本英語学会第 25 回大会, 名古屋大学, 2007/11/11

Kawahara, Koji "Differential Comparatives in Japanese and the Syntax of Measurement," The Syntax and Semantics of Measurability, CASTL workshop, University of Tromsø, Norway, 2007/9/18

Kawahara, Koji "Indefinite Null Argument and its Interaction with Negation," Ling O, University of Oxford, England, 2007/9/21

篠原 弘樹「it-Cleft 構文[it be X that Y]—it が X に生起不可の理由」関西言語学会第 32 回大会, 同志社大学, 2007/06/10

Nishiguchi, Sumiyo "Polymorphic Quantifier," Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS) 2007, 第 21 回人工知能学会全国大会国際ワークショップ, ワールドコンベンションセンターサミット, 宮崎, 2007/6/18

Nishiguchi, Sumiyo "Quantifiers in Japanese," Seventh International Tbilisi Symposium on Language, Logic and Computation (Tbilisi 2007), Tbilisi, Georgia, USA, 2007/10/4

Nishiguchi, Sumiyo "Correction by Polarity Reversing Focus in Dhaasanac," The North American Conference on Afroasiatic Linguistics (NACAL) 36, Holiday Inn Chicago Mart Plaza, Chicago, U.S.A., 2008/3/14

Minami, Yusuke "Elaborating Two Types of Construal: The Case of *Tough* Sentences in English and Japanese," 2nd UK-Cognitive Linguistics Conference (New Directions in Cognitive Linguistics), Cardiff University, England, 2007/8/28

村田和久「分割 PP 構造と非対格性」日本英語学会第 25 回大会, 名古屋大学, 2007/11/11

Mori, Hideki (Dr Peter Mickan による代理発表) "Communities of Practice in Making Lesson Plans," The 2007 ELSE Conference 'Language Learning in Communities: In Theory and Practice,' Education Development Centre, Adelaide, Australia, 2007/10/8

吉本真由美「比較構文と空演算子について——移動分析の逆説を解く」Generative Lyceum, 関西学院大学, 2007/8/30

吉本真由美「空演算子移動と Left Branch Condition——比較構文の謎を解明する」日本英語学会第 25 回大会, 名古屋大学, 2007/11/10

吉本真由美「日本語の Subcomparatives——容認性とイベントの関わりについて」日本英文学会関西支部第 2 回大会ワークショップ, 大阪大学, 2007/12/22

### (3) その他(書評・翻訳など)

【2006 年度】

黒川尚彦(調査協力) 小西友七・南出康世(編)『ジーニアス英和辞典 第 4 版』大修館書店, 東京, 2006/12/20

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

#### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

#### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:5名 大学院:6名 (計11名)

2007年度 学部:4名 大学院:8名 (計12名)

#### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

田中英理 博士後期課程 愛媛大学 講師 2007/4

大川裕也 博士後期課程 大阪医科大学 助教 2007/10

#### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2006年度:2名 2007年度:4名

<内訳> 技術職 1名 新聞記者 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 4名

その他 0名

#### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度:0名 2007年度:0名

#### 9. 刊行物

2006年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 11

*OLR (Osaka Literary Review)* No. 45

阪大英文学会叢書3『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏——』玉井暲, 新野緑共編, 英宝社, 東京.

2007年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 12

*OLR (Osaka Literary Review)* No. 46

阪大英文学会叢書4『ことばと視点』河上誓作, 谷口一美共編, 英宝社, 東京.

#### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本英文学会関西支部第1回大会

2006年12月16日

日本英文学会関西支部第2回大会

2007年12月22日

#### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 39回大会

2006年11月11日

阪大英文学会 40回大会

2007年11月17日

第75回待兼山ことばの会

2006年9月8日

第76回待兼山ことばの会

2007年7月6日

第77回待兼山ことばの会

2007年12月15日

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

2006年度～2007年度における大学院生が行った研究成果の発表件数から判断すると、本研究室の教育活動はたいへん充実していたと言える。たとえば、この2年間において大学院生が国内外の学会で行った口頭発表の総数は34件であり、また、学会誌を含む学術雑誌に掲載された論文の総数は28件にのぼる。また、本研究室で発行した *OUPEL* 第11巻(2006年)、第12巻(2007年)にはそれぞれ3名と2名の大学院生が論文を発表した。この学術雑誌は国内外の研究者や研究機関に450部送付しており、レベルの高い学術雑誌として評価を得ている。さらに、大学院生の研究意欲を促進するために「待兼山ことばの会」をこの2年間で合計3回開催した。そのうち2回は海外のゲストスピーカーによる講演会であった。博士予備論文については、6名の院生が提出した。また、課程博士論文に関しては、2名の院生が提出した。さらに、論文博士では1名(田中裕幸(関西学院大学))の提出があった。このようなことより、本研究室の教育活動は活発に行われていると判断される。

### 12-2. 研究活動

大学院生の研究活動は、極めて積極的に行われたと評価できる。すでに、上記の12-1教育活動で述べたように、日本国内のさまざまな学会(日本英語学会、日本英文学会、日本語用論学会、日本認知言語学会、関西言語学会など)の全国大会において、多数の大学院生が研究発表(34件)を行った。また、学会誌を含め各種の学術雑誌にも多くの研究成果の発表(28件)を行った。特に、口頭発表では国際学会で発表する大学院生が増加し、過去2年間で総計20件にのぼった。また、本研究室で発行している *OUPEL* 第11巻(2006年)と第12巻(2007年)には、それぞれ3名と2名が論文を発表した。このようなことから、大学院生の研究活動はきわめて活発であると評価できる。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 大庭 幸男 教授

1949年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999年4月より現職。専攻:英語学。

#### 1-1. 論文

大庭幸男 「結果構文の構造とその派生方法について」金子義明他『言語研究の現在』開拓社, pp. 134-153, 2008/3

大庭幸男 「結果構文の統語的特徴とその構造について」村井和彦・西岡宣明他『九大英文学』(九州大学大学院 英語学・英文学研究会), 50, 九州大学大学院 英語学・英文学研究会, pp. 261-280, 2008/3

大庭幸男 「結果構文の意味と構造」『インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』大阪大学文学研究科英語学, pp. 1-21, 2007/3

大庭幸男 「英語の基本文型の見直し」中村捷・金子義明『英文法研究と学習文法のインターフェイス』東北大学文学研究科, pp. 199-224, 2007/2

#### 1-2. 著書

Oba, Yukio, Sadayuki Okada (共編), *Osaka University Papers of English Linguistics*, 12, Dept. of English Linguistics, Osaka University, 156p., 2008/3

Oba, Yukio, Sadayuki Okada (共編), *Osaka University Papers of English Linguistics*, 11, Dept. of English Linguistics, Osaka University, 145p., 2007/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし



#### 1-4. 口頭発表

大庭幸男 「英語の基本文型の見直しについて」ワークショップ: 英文法: 理論と学習文法のインターフェイス, 東北大学文学研究科, 2006/8

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 大阪大学共通教育賞(2006年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

大庭幸男 1998年度市河賞, 財団法人 語学教育研究所, 1998/10

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 大庭幸男

課題番号: 18520381

研究題目: インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究

研究経費: 2006年度 直接経費 1,400,000円

間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

英語の結果構文については、これまでさまざまな理論的な枠組みで研究されてきた。しかし、そこで議論されている例を見てみると、ごく少数のタイプの動詞や結果述語の例に限られており、結果構文の全体像が把握しにくい。そこで、本研究では、実際の言語使用状況をインターネットによって調査し、次の2点を明らかにすることを目的とする。

(1) 結果構文に生起する動詞の種類と意味的特徴を明らかにする。

(2) 結果構文に生起する動詞と結果句の選択制限を明らかにする。

特に、他動詞と同様に非対格動詞と非能格動詞の結果構文の使用状況についてはこれまであまり研究されていないので、具体的にどのような動詞が結果構文に用いられているかを実際の言語使用データにあたって調査を行う。

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

財団法人 語学教育研究所・「市河賞」審査委員	2007年4月～現在に至る
日本英文学会・監事	2007年4月～現在に至る
日本英語学会・新人賞選考委員会委員	2007年4月～2008年3月
東北大学文学研究科・外部評価委員	2006年10月～2006年12月
日本英語学会・理事	2005年12月～現在に至る
日本英語学会・評議員	2004年4月～現在に至る
日本英語学会・編集委員会委員	2003年10月～2007年9月
関西言語学会・運営委員	1993年12月～現在に至る

## 2. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科英文学専攻(英語学講座)博士課程前期課程修了。文学修士(名古屋大学、1979)。名古屋大学文学部助手、甲南女子大学助手、同講師、大阪外国語大学講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 英語学。

#### 2-1. 論文

なし

## 2-2. 著書

---

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 2-4. 口頭発表

---

なし

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英文学会関西支部・大会準備委員

2006年12月～現在に至る

名古屋大学英文学会・編集委員

2006年4月～現在に至る

## 3. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学外国語学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学文学研究科教授。専攻:印欧語比較言語学、音声学。

### 3-1. 論文

---

神山孝夫 「スラブの2つの文字の由来について」 大阪外国語大学 ヨーロッパ I 講座(編) 『ロシア・東欧研究』, 12, p. 13-50, 2007/9

### 3-2. 著書

---

神山孝夫 『印欧祖語の母音組織: 研究史要説と試論』 大学教育出版, 351pp., 2006/10

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

神山孝夫 「終刊にあたって」 大阪外国語大学 ヨーロッパ I 講座(編) 『ロシア・東欧研究』, 12, p. 127-128, 2007/9

神山孝夫 「『ロシア・ソビエト研究』、『ロシア・東欧研究』 総目次・掲載記事総目録」 大阪外国語大学 ヨーロッパ I 講座(編) 『ロシア・東欧研究』, 12, p. 129-146, 2007/9

### 3-4. 口頭発表

---

なし

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

大阪言語研究会・世話人(代表)

2008年1月～現在に至る

## 4. 岡田 禎之 准教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。大阪大学助手、岡山大学教養部講師、岡山大学文学部講師、金沢大学文学部助教授、神戸市外国語大学英米学科助教授を経て、2005年10月より現職。専攻:英語学。

### 4-1. 論文

---

岡田禎之 「比較基準要素の概念拡張について」『待兼山論叢』41-文学篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2007/12

岡田禎之 「文内参加者の概念拡張可能性について」河上誓作・谷口一美(共編)『ことばと視点』(阪大英文学会叢書), 4, 阪大英文学会, pp. 45-57, 2007/11

岡田禎之 「結束関係と統語現象」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 87-121, 2007/3

岡田禎之 「比較対象表現の形式と意味のミスマッチ」津田正(編)『英語青年』152-11, 研究社, pp. 656-658, 2007/2

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

岡田禎之(書評) 「「結束構造から見る文法」Andrew Kehler: Coherence, Reference, and the Theory of Grammar」『関西英文学研究』(日本英文学会関西支部), 1, 天理時報社, pp. 153-163, 2007/12

岡田禎之(辞書項目執筆)瀬戸賢一(監修)『英語多義ネットワーク辞典』小学館, 2007/3

岡田禎之(書評)「高見健一・久野すすむ『日本語機能的構文研究』」『英語教育』55-12, 大修館書店, p. 96, 2007/1

### 4-4. 口頭発表

---

岡田禎之 「参加者の概念拡張と語彙統語的、構文的、結束構造的要因」筑波大学科学研究費(B)ワークショップ: 談話のタイプと文法の関係に関する日英語対照言語学的研究について, 研究代表者: 廣瀬幸生, 筑波大学, 2008/3

OKADA, Sadayuki “Conceptual Expansion and Parallelism in Comparison” 10th International Cognitive Linguistics Conference: Cognitive Linguistics in Action, International Cognitive Linguistics Association, ポーランド ヤゲウオ大学, 2007/7

岡田禎之 「英語学の演習」阪大英文学会シンポジウム: 英米文学・英語学の演習, 阪大英文学会, 大阪大学, 2006/11

岡田禎之 「結束関係と統語現象」第78回日本英文学会大会シンポジウム: 形式と意味の接点, 日本英文学会, 中京大学, 2006/5『第78回大会 Proceedings』pp. 173-175, 2006/9

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

岡田禎之 市河賞, (財団法人)語学教育研究所, 2003/10

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 岡田禎之

課題番号:19520420

研究題目:文内参加者の概念拡張可能性

研究経費:2007年度 直接経費 1,800,000円 間接経費 540,000円

研究の目的:

比較構文をはじめとする様々な言語環境において、文内参加者の概念拡張が認められるための条件にはどのような事項が挙げられるのかを考察していくことが目標である。また、英語だけでなく日本語や他の言語にも同様の観察が認められるかどうかという類型論的な視点も加味していきたいと考えている。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英文学会・編集委員会委員

2007年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・編集委員会委員

2007年4月～現在に至る

## 2-20 日本語学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本語学講座の特色は、日本語を一つの個別言語として客観的に対象化して観て行こうとする立場から、現代日本語学、社会言語学、対照言語学、日本語教育学の 4 つの分野について多角的な教育・研究を行っている点にある。現代日本語学では、話し言葉や書き言葉の実例を丹念に調査することによって、現代日本語の文法・語彙・音韻・表記等の特質を体系的・総合的に解明する。社会言語学では、日本語の地域差(方言)・性差・年齢差や場面による言葉の違い、非母語話者の日本語など、現代社会に存在する日本語の多様性と、それがもたらす言語学的な問題や社会的な問題を、フィールドワーク等によって把握し、分析する。対照言語学では、日本語や日本語による言語行動の特徴を、他言語やそれを用いた言語行動と比較し、その異同を把握するとともに、異文化間コミュニケーションの中で起こりうる言語に関連する問題の本質を明らかにする。日本語教育学では、日本語を第二言語として学ぶ人々、および日本語学習を支援する人々を全人的に捉え、日本語の学習および教育に関わる心理的・社会的要因を質的に研究するとともに、高度の専門知識をもった日本語教師を育てるための教師教育を行う。いずれの分野においても、外国人留学生を積極的に受け入れており、海外の研究者との交流も活発である。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 5 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：真田 信治、土岐 哲、工藤真由美、青木 直子、田野村忠温

准教授：石井 正彦、渋谷 勝己

助教：岡田 祥平

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
29	11	27	0	0	9	3	9	3

※うち留学生 37 名、社会人学生 2 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	8	11	9	2	2
'07	15	7	5	4	2
小計	23	18	14	6	4

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	2	0	2
'07	4	0	4
計	6	0	6

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

- 陳 連冬 「とりたて助辞の意味・機能と使用実態——「など」を中心とした明治期と現代との比較研究——」 2008/3  
主査：工藤真由美 副査：田野村忠温、渋谷勝己
- 林 雅子 「動詞由来の副詞的成分の「副詞度」に関する計量的研究」 2008/3  
主査：石井正彦 副査：真田信治、土岐哲
- 水谷美保 「移動・存在を表す尊敬語動詞の変化に関する研究」 2008/3  
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
- 全 永男 「中国延边朝鮮族における韓国語使用の動向」 2007/9  
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
- 李 宝瓊 「韓国語を母語とする日本語学習者における日本語の「パラ言語情報」に関する実験音声学的研究——「問い返し」と「疑い」の実現および知覚の側面から——」 2007/3  
主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦
- 金 智英 「在日コリアン一世の言語運用」 2006/9  
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己



## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	4	4	9	0	1	18
'07	4	1	6	0	5	16
計	8	5	15	0	6	34

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	6	11	8	0	0	25
'07	7	4	6	0	0	17
計	13	15	14	0	0	42

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2006年度】

- 出野晃子「二拍尾高型アクセント形式名詞が頭高型で発音される時——『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析——」  
『阪大日本語研究』19, pp. 67-96, 2007/2
- 出野晃子「単純数詞のアクセント——『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析——」『日本語教育論集』16, pp. 9-16,  
2007/3
- 岡田祥平「とりあえず『日本語話し言葉コーパス』検索」の可能性を検討する——「雰囲気」という単語の発音を例に——」  
『龍谷大学国際センター研究年報』16, pp. 59-80, 2007/3
- 金愛蘭「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法——類義語「事例」「例」「場合」との比較——」『計量国語学』25-5,  
pp. 215-236, 2006/6
- 金愛蘭「外来語「トラブル」の基本語化——20世紀後半の新聞記事における——」『日本語の研究』2-2, pp. 18-32, 2006/4
- 齊藤美穂「接続助辞ガ・ケドの用法と名詞句の役割」『阪大日本語研究』19, pp. 17-48, 2007/2
- 田川恭識「「平静の答え」と「不満の答え」の弁別に対するイントネーションパタンの影響」『四天王寺国際仏教大学紀要』  
6, pp. 223-236, 2006/7
- 全永男「対韓国人談話場面における延辺朝鮮族の言語行動」『社会言語科学』9-2, pp. 41-52, 2007/3
- 全永男「対韓国人接客場面における延辺朝鮮族の言語使用実態」『大阪産業大学論集 人文科学編』121, pp. 97-110, 2007/2
- 全永男「中国延辺朝鮮族の韓国流入語使用」『国際高麗学』11, pp. 341-356, 2007/1
- 中山亜紀子「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴——「自分らしさ」と  
いう視点から」『阪大日本語研究』19, pp. 97-128, 2007/2
- 林雅子「動詞のテ形・連用形に由来する副詞的成分の量的差異」『待兼山論叢』40, pp. 1-17, 2007/2
- 林雅子「動詞のテ形・連用形の使用差に関する計量的調査研究——新聞・論述文・小説における語彙調査の結果から——」  
『龍谷大学国際センター研究年報』16, pp.49-58,2007/3
- 範玉梅「新世代留学生の精神的な成長に関するケース・スタディー——日本語教育への示唆」『阪大日本語研究』19, pp.  
161-192, 2007/2
- 前田達朗「エスニック・コミュニティと個人の「力」——洪昌守のトロフィーをめぐる——」『多民族日本のみせかた——特

別展「多みんぞくニホン」をめぐる』(庄司博史・金美善編, 国立民族学博物館調査報告 64), pp. 129-137, 2006/12  
水谷美保「敬語動詞「オイデ」の意味用法の変化」『阪大日本語研究』19, pp. 49-66, 2007/2  
八木真奈美「多言語使用と感情という視点からある『誤用』定住外国人のエスノグラフィーから」『WEB 版リテラシーズ』3-2(<http://kurosio.mine.nu/21web/web01.html>), 2006/12  
ロクガマゲ サマンティカ(Lokugamage Samanthika)「目標言語を第2言語とする教師とその実践——スリランカの日本語教師のケース・スタディー——」『阪大日本語研究』19, pp. 193-222, 2007/2

#### 【2007年度】

出野晃子「北海道・新十津川町における言語意識——北海道で話されていることとは——」真田信治編『移民言語1 北海道・新十津川町方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, pp.135-141, 2008/3  
齊藤美穂「数量を表す語句に接続するガ・ケドの用法」待兼山論叢(日本学篇)』41, pp. 1-17, 2007/12  
白岩広行「北海道・新十津川町の推量・意思表示——談話データをもとに——」真田信治編『移民言語1 北海道・新十津川町方言の現在』, pp. 61-81, 2008/3  
田川恭識「「平静の問いかけ」と「非難の問いかけ」の弁別に対する FO パタンの影響——「見ないの」の場合——」『待兼山論叢(日本学篇)』41, pp. 39-55, 2007/12  
田川恭識「熊本市およびその周辺地域方言におけるイントネーションとパラ言語情報の表現について」『四天王寺国際仏教大学紀要』第45号, pp. 413-430, 2008/3  
方允炯「名詞に接続する形式名詞「うち」の意味・機能——明治期と現代との用例比較を通じて——」『日語日文学研究(日本語学・日本語教育学篇)』61-1, pp. 145-158, 2007/5  
平塚雄亮・水谷美保「北海道・新十津川町の否定辞」真田信治編『移民言語1 北海道・新十津川町方言の現在』, pp.15-22, 2008/3  
黄永熙「韓国高年層に残存する旧植民地日本語から見た第二言語の維持・摩滅——可能表現を中心に——」『日本学報』71, pp. 175-188, 2007/5  
黄永熙「韓国老年層日本語の存在表現から見た第二言語保存の言語内的・外的要因」『社会言語学』15-2, pp. 215-238, 2007/12  
黄永熙「韓国高年層日本語の否定表現からみる第二言語の保持」『阪大日本語研究』20, pp. 119-150, 2008/2  
金美貞・高木千恵・牧野由紀子「北海道・新十津川町の文末表現データ集」真田信治編『移民言語1 北海道・新十津川町方言の現在』, pp. 82-99, 2008/3  
水谷美保・齊藤美穂「方言との接触による標準語形式の意味・用法の変容——奄美におけるとりたて形式「ナンカ」の用法の拡張——」『日本語文法』7-2, pp. 65-82, 2007/9  
水谷美保「目的と調査概要」真田信治編『移民言語1 北海道・新十津川町方言の現在』, pp. 10-14, 2008/3  
山岸智子「持続時間の長い撥音に関する知覚と経験の関連性——近畿方言話者と首都圏方言話者——」『言語文化と日本語教育』33号, pp. 31-36, 2007/7  
山岸智子「語の聞き取りに関わる撥音の長さ——近畿方言話者と首都圏方言話者——」『阪大日本語研究』20, pp. 151-166, 2008/2  
ロクガマゲ サマンティカ(Lokugamage Samanthika)「初級クラスにおける媒介語の使用とやり取りの構造——日本語を第2言語とするスリランカの日本語教師の考え方と授業実践——」『阪大日本語研究』20, pp. 169-195, 2008/2

## (2)口頭発表

#### 【2006年度】

出野晃子「自発発話における知覚アクセントのゆれ——『日本語話し言葉コーパス』を用いた二拍形式名詞の分析——」近畿音声言語研究会月例会, ACTA 西宮東館 6階(兵庫県西宮市),2006/8/5  
出野晃子「尾高型アクセントの二拍形式名詞が頭高型で発音される時——『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析——」近畿音声言語研究会月例会,ACTA 西宮東館 6階(兵庫県西宮市),2006/11/4  
岡田祥平『『日本語話し言葉コーパス』における「雰囲気」の発音」日本音声学会 2006(平成18)年度全国大会, 順天堂大

- 学(東京都文京区), 2006/10/1
- 金愛蘭「外来語「ケース」の基本語化——20世紀後半の新聞記事における——」計量国語学会第3回定例会, 国立国語研究所(東京都立川市), 2006/5/12
- 蔡珮菁「連語と交替可能な臨時的複合語の語構成——新聞社説における「A的なB」と「A的B」の場合——」土曜ことばの会, 大阪大学(大阪府豊中市), 2007/1/27
- 白岩広行「福島市方言の文末イントネーション——高接下降調を中心に——」近畿音声言語研究会2月月例会, 西宮市大学交流センター(兵庫県西宮市), 2007/2/3
- 田川恭識「熊本方言における「非難の問いかけ」と「不満の答え」のイントネーション」近畿音声言語研究会月例会, アクタ西宮(兵庫県西宮市), 2006/5/6
- 田川恭識「熊本方言談話音声の分析; 方法と計画についての試案」近畿音声言語研究会月例会, アクタ西宮, 2007/1/6
- 田淵咲子・田川恭識「「答え」と「不満の答え」の弁別におけるイントネーションの影響: 日本語母語話者と韓国語を母語とする日本語学習者の比較を通して」2006年度日本語教育学会秋季大会, 熊本県立大学(熊本県熊本市), 2006/10/8
- TABUCHI Sakuko and TAGAWA Yukinori "The perception of dissatisfaction in Japanese :Comparison between native speakers of Japanese and Korean learners of Japanese" International workshop on the auditory processing of prosodic features and its applications: Acquisition of Linguistic Organization and Human Audition, Waikiki Beach Marriott Resort & Spa, (Honolulu, Hawaii), 2006/11/26-27
- 武田佳子「保科孝一論再考——新しく発見された講義録から見えるもの——」日本語学会2006年秋季大会, 岡山大学(岡山県岡山市), 2006/11/12
- 土岐哲, 江崎哲也, 岡田祥平, 岩男考哲, 出野晃子, 尹英和「日本語音声の実証的研究と音声教育の新展開」香港日本語教育学会第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム, 香港中文大学(香港), 2006/10/30
- 朴秀娟「テキストタイプと文法的意味・機能——「あまり」「あんまり」を中心に——」2006北京大學日本学国際シンポジウム, 北京大學(中国・北京市), 2006/10/22
- 範玉梅「中国の一人っ子の日本留学」香港日本語教育学会第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム, 香港中文大学(香港), 2006/10/30
- 方允炯「名詞に接続する形式名詞「うち」の意味・機能——明治期と現代との比較を通じて——」韓国日語日文学会, 韓国外国語大学(韓国・ソウル市), 2006/12/16
- 黄永熙「韓国高年層の日本語に見られる可能表現」韓国日本學會(KAJA)第74回国際學術大會, 韓国建國大學校(韓国・ソウル市), 2007/2/10
- 黄永熙「韓国残存日本語の否定辞からみる言語摩滅」社会言語科学会第19回大会, 日本大学(東京都世田谷区), 2007/3/4
- 前田達朗「奄美大島瀬戸内町における「シマグチ」継承運動——ひとびとの言語意識の手がかりとして」第4回多言語社会研究会研究大会, 一橋大学(東京都国立市), 2006/12/3
- 牧野由紀子「現代地域社会における行為指示のストラテジー——スタイル切換えに焦点を当てて——」第18回社会言語科学会, 北星学園大学(北海道札幌市), 2006/8/27
- 水谷美保・齋藤美穂「とりたて詞「ナンカ」の用法の拡張——奄美における標準語と方言の接触——」日本方言研究会第82回研究発表会, 東京学芸大学(東京都小金井市), 2006/5/12
- 蓑川恵理子「命名のメカニズム——商品名における再命名——」日本語学会2006年度春季大会, 東京学芸大学(東京都小金井市), 2006/5/14
- 八木真奈美「定住外国人が日本語を使って生活する場で何が起きているか」日本語教育学会秋季大会, 熊本県立大学(熊本県熊本市), 2006/10/8
- 山岸智子「撥音の聴覚印象」近畿音声言語研究会7月例会, 兵庫県西宮市大学交流センター(兵庫県西宮市), 2006/7/1
- 山岸智子「持続時間の長い撥音に関するカテゴリー知覚の一調査」日本音声学会2006(平成18)年度全国大会, 順天堂大学(東京都文京区), 2006/10/1
- S. Lokugamage., L1 use of teachers for whom Japanese is a second language in Sri Lanka., New Zealand Association of Language Teachers Conference 2006, University of Auckland(Auckland, New Zealand), 2006/7/4

### 【2007年度】

- 金愛蘭「日韓外来語事情」アジア文化研究会,アビオ大阪(大阪市中央区),2007/7/28
- 石井正彦・金愛蘭「通時コーパス作成上の諸問題——テキストの年代差と書き手の世代差——」,特定領域「日本語コーパス」日本語学班研究会,キャンパスイノベーションセンター(東京都港区),2007/12/2
- 田中牧郎・金愛蘭・桐生りか・近藤明日子「コーパスによる難解語・重要語の抽出——医療用語を例に——」,第21回社会言語科学会研究大会,東京女子大学(東京都杉並区),2008/3/22
- 金昴京「第2言語の摩滅と再習得」,日・韓次世代学術 FORUM 第4回国際学術大会,学校法人城西大学東京紀尾井町キャンパス(東京都千代田区),2007/6/23-24
- 周萍「地域の日本語教室をやめた中国人の学習者のケース・スタディー」第二回全国外語教師教育と発展学術研討会,北京師範大学(中華人民共和国・北京市),2007/9/23
- 白岩広行「推量形式の通時変化を考える——用法面を中心に——」中部日本・日本語学研究会,刈谷市産業振興センター(愛知県刈谷市),2007/5/12
- 白岩広行「推量形式の推量用法が衰退する——諸方言における確認要求表現への特化——」日本語学会2007年度春季大会,日本語学会,関西大学(大阪府吹田市),2007/5/27
- 田淵咲子・田川恭識「「平静の問い」と「非難の問い」の聴取における FO パタンの影響——日本語母語話者と韓国語を母語とする日本語学習者の比較——」第21回日本音声学会全国大会,名古屋大学(名古屋市千種区),2007/9/23
- 中井好男「中国人再履修者の学習動機を取り巻く社会的文脈」第二回全国外語教師教育と発展学術研討会,北京師範大学(中華人民共和国・北京市),2007/9/23
- 中井好男「中国人再履修者の日本語学習を支えるもの～日本語学校の教室における参与観察を通して」2007年度日本語教育学会第8回研究集会・関西地区口頭発表,大阪日本語教育センター(大阪市天王寺区),2007/9/29
- 西田朋美「日本語教師をやめない理由——Narrative Inquiryによる二人の教師の自己理解——」第二回全国外語教師教育と発展学術研討会,北京師範大学(中華人民共和国・北京市),2007/9/23
- 河在必「類義形式「トキ」と「コロ」の分析——時間性と空間性の観点から——」第5回韓国日本学連合会国際大会,誠信女子大学(韓国・ソウル市),2007/7/7
- 範玉梅「中国の新世代の留学生研究について」第二回全国外語教師教育と発展学術研討会,北京師範大学(中華人民共和国・北京市),2007/9/23
- 平塚雄亮「動詞肯定形に接続する疑問形式クナイ(カ)」第126回変異理論研究会,滋賀大学大津サテライトプラザ(滋賀県大津市),2007/9/29
- 平塚雄亮「動詞肯定形に接続する疑問形式クナイ(カ)」日本方言研究会第85回研究発表会,琉球大学(沖縄県中頭郡西原町),2007/11/16
- 黄永熙「韓国高年層日本語の文末詞ヨ」韓国日本語学会第17回学術大会韓国日本語学会,韓国建国大学校(韓国・ソウル市)2008/3/29
- 福山未樹「「日本で鳩は平和のシンボルだ」という言い方をめぐって」第5回韓国日本学連合会国際大会,誠信女子大学(韓国・ソウル市),2007/7/7
- 山岸智子「撥音の長さによる感情的印象——近畿方言話者と首都圏方言話者——」近畿音声言語研究会11月月例会,西宮市立大学交流センター(兵庫県西宮市),2007/11/3

### (3)その他(書評・翻訳など)

#### 【2006年度】

- 武田佳子(翻刻)『東京語ノ成立——新しく発見された保科孝一講義録——』国書刊行会,2006/12

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

#### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)  
2007年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

#### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)  
2007年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

#### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

岡田祥平、博士後期課程、大阪大学、助教、2007/04

金愛蘭、博士後期課程、国立国語研究所、特別奨励研究員、2007/07

阿部貴人、博士後期課程、国立国語研究所、研究補佐員、2007/08

水谷美保、博士後期課程、Catholic 大、講師、2008/3

#### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 13 名

2006年度:6名 2007年度:7名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名  
その他 10名

#### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 4 名

2006年度:3名 2007年度:1名

#### 9. 刊行物

『阪大日本語研究』(機関誌・年1回)定期刊行物

1989年度～現在

『阪大社会言語学研究ノート』(論文集・年1回)逐次刊行物

1999年度～現在

『移民言語1 北海道新十津川方言の現在』逐次刊行物

2008年3月

#### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

変異理論研究会(研究会)事務局

1989年～現在

土曜ことばの会(研究会)事務局

1980年～現在

#### 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

#### 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

##### 12-1. 教育活動

日本語学講座では、言語研究者として広くバランスのとれた視野を持つ人材を育成するとともに、高度専門職業人として教育、出版等の分野で社会的貢献のできる人材の育成を目指している。また、活動範囲は、大学内部にとどまらず広く



社会一般への啓蒙活動も積極的に行っている。

研究者養成に関しては、教員間での授業内容の重複を避け、日本語学および言語学の領域をできる限りまんべんなくカバーするように調整するとともに、卒論・修論の中間発表会および博士後期課程の学生の中間発表会を年に1回ずつ開催し、全教員出席の上で、それぞれの立場から適宜アドバイスをするという試みをしている。さらに、各教員がフィールドワーク、演習形式の授業等で、研究プロセスの現地訓練も行っている。また『阪大日本語研究』等の定期および逐次刊行物を発行し、学生への投稿を奨励し、査読を通して論文の書き方を指導することにより、研究者としての成長を支援している。これら諸活動の成果は、博士論文執筆期間に短縮の傾向が見られること、学生の論文が採用される学会誌の幅が広がる傾向が見られるなどの点で実を結びつつあると考えられる。

高度専門職業人養成に関しては、日本語教育を中心に現場の教師を積極的に大学院に受け入れ、従来の応用言語学の枠組みにとらわれない、新しいタイプの教育研究を奨励するとともに、2002年に文化庁が発表した日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議によるカリキュラムのガイドラインにあわせて、日本語学以外の知識も含めた高度な職業的能力の育成を目的とした実践的な授業を行っている。また、教師教育者の養成を目的とした授業も行っている。卒業生・修了生は、専任、非常勤講師、嘱託、青年海外協力隊等のボランティアを含めると、日本語教育の分野で多岐にわたり、幅広く活躍している。日本語教育関係の授業を履修した学生が中等教育における英語あるいは国語の教師を志し、就職するケースも見られる。また、現場の日本語教師が社会人入学する例も、社会人入学の制度ができて以来継続的に見られる。そうした意味で、日本語学講座の高度専門職業人養成に関する教育実践は社会的な評価を受けていると考える。また、広告、放送などの分野における言語使用をテーマとする研究も奨励し、教育以外の分野でも日本語学の専門的知識をもった高度職業人の育成を目指しており、そうした業種への就職にも実績をあげている。一般への啓蒙活動としては、言語使用に関する出版物の監修、講演、日本語教育に関わる団体の顧問等の役職への就任、研修会等の講師など、積極的な社会的活動を行っている。

この他、特筆すべき点としては、日本語学講座は伝統的に留学生を積極的に受け入れてきたということが挙げられる。特別聴講生、研究生等も含めると学部から博士後期課程までで2006年度は35名、2007年度は37名の留学生が在籍した。これは講座全体の学生数の3分の1程度にあたるとともに、文学研究科に在籍する留学生総数の約30%にあたる。また、この内、2006年度は21名、2007年度は17名が国費または国費に準ずる交流協会の留学生である。このことから本講座に在籍する留学生は出身国でも非常に優秀な学生たちであるということが言える。卒業・修了した留学生の多くは、日本国内外で研究者あるいは日本語に関係する職業人として活躍している。

## 12-2. 研究活動

各教員の研究活動の状況は該当ページの通りである。それぞれが積極的な研究活動を行っており、外部資金の獲得にも努力している。海外での学会発表や講演の数、海外の大学への客員教授としての招聘などからも、各教員がそれぞれの専門領域で国内はもとより海外でも第一人者と言ってよい実績をあげ評価されていることが見てとれるであろう。また、海外の研究者との交流にも力を入れており、2006年度には3名、2007年度には1名の研究者を招聘研究員として受け入れている。

外部評価によって要求された組織全体としての研究体制作りという点に関しては、全教員が参加する研究プロジェクトは現在のところ実施されていない。しかし、これは教員間の連携がないということは意味しない。『方言記述プロジェクト』や『スタイルシフト・プロジェクト』のようにプロジェクト毎に関連する分野の教員が協力するということは従来から行われてきており、新たな角度で新たな組み合わせの研究プロジェクトが生まれる可能性は常にある。こうしたゆるやかな結びつきが、各教員の独自性、それぞれが学外にもつネットワークの多様性を支え、研究者集団としての日本語学講座を開かれた豊かなものにしており、それが伝統的に本講座の教員の特徴とされる先見的でオリジナリティに富んだ研究を可能にしていると考えられる。

研究成果の公表に関しては、学外の媒体とともに、日本語学講座の刊行物によっても行っている。2006年度、2007年度に本講座で刊行した刊行物には、『阪大日本語研究』19号(2007年2月)、20号(2008年2月)、『阪大社会言語学研究ノート』8号(2008年3月)、『移民言語1 北海道新十津川方言の現在』(2008年3月)がある。また、在日外国人のため日本語学習支援ツール『日本語ポータルフォリオ』を2007年2月にウェブ上で公開した。調査票など研究のプロセス

や生のデータに関しても、サンプルが当講座の報告書類に掲載されているものもあるが、今後、さらに公開できる資料を蓄積していくべく、フィールドワーク資料の電子化や、スタイルシフト談話資料データベース化、非母語話者の自発発話による日本語音声コーパスの構築などの作業を行っている。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

#### 1. 真田 信治 教授

1946年生。1970年、東北大学大学院文学研究科修士課程修了、1972年、同博士課程中退。文学博士(大阪大学)。国立国語研究所研究員、大阪大学文学部助教授などを経て、1993年より大阪大学文学部教授。1999年4月より現職。専攻:日本語学/社会言語学。

##### 1-1. 論文

真田信治 「樺太(サハリン)における言語生活を垣間見る——残留コリアンHさんの事例から——」『國學院雑誌』108-11, 國學院大學, pp. 325-334, 2007/11

真田信治 「発話スタイルと方言」小林隆(共著)『シリーズ方言学 3 方言の機能』岩波書店, pp. 1-25, 2007/10

真田信治 「戦前の南洋群島における日本語教育を垣間見る——N氏へのインタビューを通して——」『国語 13 昭和前期日本語の問題点』明治書院, pp. 161-183, 2007/9

真田信治 『方言文法全国地図』の出发点とその後』『日本語学』26 卷-11 号, 明治書院, pp. 12-18, 2007/9

Sanada, Shinji(共著), "Japanese Dialects and Ryukyuan" Osahito Miyaoka et al.(eds.) *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*, Oxford University Press, pp. 335-367, 2007/4

真田信治 「第二言語の維持と変容——残留日本語の場合——」東呉大学日本語文学系『2007年日語教学国際会議論文集』東呉大学, pp. 51-60, 2007/4

真田信治 「残留日本語の調査研究について」山下仁(編)『言語の接触と混交』大阪大学, pp. 337-345, 2007/1

Sanada, Shinji, "Japan and Korea" Peter Trudgill et al.(eds.) *Sociolinguistics*, 3.3, Mouton de Gruyter, pp. 2021-2055, 2006/7

##### 1-2. 著書

真田信治(編)『北海道・新十津川方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, 192p., 2008/3

真田信治(編)『社会言語学の展望』(韓国語翻訳版)J & C, 410p., 2008/2

真田信治(共編)『地方別 方言語源辞典』東京堂出版, pp. 143-168, 2007/9

真田信治 『方言は気持ちを伝える』岩波書店, 193p., 2007/1

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

真田信治 「敗戦の頃——「五箇山民俗覚書」を読む——」大内力(編)『学会会報』867, 学会, pp.31-34, 2007/11

真田信治 「名著と遇い、人と会う」三樹敏『日本語学』明治書院, pp. 20-24, 2007/4

真田信治 「「流行語」「社会言語学」「富山県の方言」「近畿地方の方言」「大阪府の方言」」飛田良文他『日本語学研究事典』明治書院, 2007/1

真田信治 「ネオ方言の最近の様相」学鏡編集部『学鏡』丸善, pp. 6-9, 2006/6

真田信治 「飛騨白川村方言について」新村出記念財団記念文集編集委員会(編)『泰山木』新村出記念財団, pp. 61-64, 2006/5

##### 1-4. 口頭発表

真田信治 「台湾アタヤル族における日本語クレオール」日本語学会2007年度春季大会, 日本語学会2007年度春季大会, 関西大学, 2007/5



### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

真田信治 大阪大学共通教育賞(2004年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2004/12

真田信治 とやま賞(第8回), 富山県置県百年記念財団, 1991/5

真田信治 金田一京助記念賞(第18回), 金田一記念会, 1990/11

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度~2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:真田信治

課題番号:18320072

研究題目:東アジア残留日本語と日本語諸方言との関連にかんする研究

研究経費:2006年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

2007年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

東アジア地域(旧大東亜共栄圏)には、戦前・戦中に日本語を習得し、現在もその日本語能力を維持する人々が多数存在する。本研究では、これらの地域でのフィールドワークによって、現地での日本語運用のデータをさらに増やすとともに、そのデータにかかわる日本語諸方言を調査記述し、両者の対照を行うことを目的とする。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

NPO日本語しこば協会・理事

2007年4月~現在に至る

日本語学会・理事

2006年5月~現在に至る

財団法人新村出記念財団・評議員

1993年7月~現在に至る

## 2. 土岐 哲 教授

1946年生。早稲田大学文学部日本文学科卒業。文学士。アメリカ・カナダ 11 大学連合日本研究センター専任講師、プリンストン大学東アジア学系客員講師、東海大学専任講師、同助教授、名古屋大学助教授、大阪大学助教授を経て、1996年から現職。専攻:日本語教育学、音声学。

### 2-1. 論文

土岐哲, 特集論文の監修・とりまとめ: 西沼行博他「特集: 諸言語のイントネーション」荻野綱男(編)『音声研究』(日本音声学会), 第11巻第2号, 日本音声学会, pp. 3-64, 2007/8

土岐哲, 江崎哲也, 岡田祥平他(監修)「非母語話者による日本語話し言葉コーパス」の構築と分析・研究<平成17~18年度科学研究費補助金(基盤研究A)17202011研究成果報告書>「標記研究プロジェクト」, 2007/3

土岐哲「日本語教育の現状と今後の動向を見据えて」清華大学外語系日本語文化センター『2006 清華大学日本語文化国際フォーラム論文提要集』清華大学外語系日本語文化センター, pp. 30-31, 2006/5

### 2-2. 著書

土岐哲「日本語教育と音声」(分担執筆), 縫部義憲, 多和田眞一郎(編)『講座日本語教育学』スリーエー・ネットワーク, pp. 192-205, 2006/9

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

## 2-4. 口頭発表

土岐哲 「中国語話者のための日本語音声教育の諸問題」フォーラム:中国人のための日本語教育研究会, 中国人のための日本語教育研究会, 大阪府立大学, 2007/12

土岐哲 「日本語音声教育の諸問題」韓国カトリック大学学術祭日本語日本文学科学術発表会:韓国カトリック大学学術祭, 韓国カトリック大学日語日本文学科, 韓国カトリック大学, 2007/10

土岐哲 「音声研究の最前線」セミナー:高麗大学大学院日本語学研究会, 高麗大学大学院日本語学講座, 高麗大学, 2007/10

土岐哲 「日本語音声教育の展開と今後の展望」早稲田大学創立125周年記念講演会:「大学院日本語教育研究科主催研究会」基調講演:日本語音声教育研究会, 早稲田大学大学院日本語教育学科, 早稲田大学, 2007/7

土岐哲, 江崎哲也, 岡田祥平他 「実証的スピーチ研究に基づく初級音声教育の可能性」第5回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム:日本語初級教育の実践的研究, ドイツ語圏大学日本語教育研究会, テュービンゲン大学, 2007/3(『第15回ドイツ語圏大学日本語教育研究会予原稿』pp. 8-9, )

土岐哲 「日本語音声教育の新展開」セミナー, アルゼンチン日本語教師連合会, アルゼンチン日本語教師連合会, 2006/11

土岐哲 「日本語の音声表現について」セミナー, アルゼンチン・オオキタ財団, オオキタ財団, 2006/11

土岐哲, 江崎哲也, 岡田祥平他「日本語音声の実証的研究と音声教育の新展開」シンポジウム:日本語教育研究会, 香港中文大学日本研究科, 香港中文大学, 2006/10(『香港中文大学日本研究学科設立15周年記念、第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム』pp. 12-12, )

土岐哲 「日本語教育からの提言」日本音声学会創立80周年記念式典記念フォーラム, 日本音声学会, 順天堂大学, 2006/9(『2006年度日本音声学会第20回全国大会予稿集』pp. 12-12, 2006/10)

土岐哲 「日本語音声教育の最新事情」セミナー, 清華大学外語系日本語文化研究中心, 清華大学外語系日本語文化中心, 2006/5

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2006年度、基盤研究(A) 一般、代表者:土岐哲

課題番号:17202011

研究題目:「非母語話者による日本語話し言葉コーパス」の構築と分析・研究

研究経費:2006年度 直接経費 17,600,000円 間接経費 5,280,000円

研究の目的:

国立国語研究所等による「日本語話し言葉コーパス(PSJ)」の規格に準拠した非母語話者による日本語音声コーパスを構築し、広く、非母語話者の日本語音声研究に資することを目的とする。とくに朗読ではなく自発話の音声について母語話者と非母語話者の詳細かつ実証的な比較対照を可能とするものであるが、主たる狙いは、母語話者でもなかなか上手く行かない音声実現を浮き彫りにし、そのような音声項目まで日本語学習者に実現を要求するようなことのないよう、音声教育項目の設定や優先順位の見直しを図ると共に、非母語話者の日本語音声について広く社会一般に理解してもらおうとするものである。

2-6-2. 2007年度～2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:土岐哲

課題番号:19320077

研究題目:「非母語話者による日本語話し言葉コーパス」構築の更なる充実と分析・研究

研究経費:2007年度 直接経費 4,500,000円 間接経費 1,350,000円

研究の目的:

本研究の「非母語話者による日本語音声データ」は、精密な分析を要する性質上、収集が簡単ではない。昨年度までにも一定の成果は得られたと考えられるが、その研究活動により、理解・協力者も増え、研究を続行すれば、文字通り「世界規模の日本語音声コーパス」として一層充実させ得る可能性も出てきた。そのため、「更なる充実と分析・研究」を目指して研究を推進することと

なったものである。主たる目的は、これまで研究対象としてきたもののデータの分量が十分ではなかった地域・対象者の追加調査研究、新規の対象開発とその結果得られたデータの精密処理を含めた分析・研究である。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本音声学会・学会誌編集委員	2007年4月～現在に至る
日本国際学習支援協会・国際交流基金、日本語能力試験主任アドバイザー	2005年4月～現在に至る
日本音声学会・理事・評議員	2004年4月～現在に至る
日本音声学会・学会誌編集委員長	2004年4月～2007年3月
言語文化教育学会・理事	2002年5月～現在に至る
日本国際学習支援協会・国際交流基金、日本語教育能力検定試験実施委員会委員	1998年3月～現在に至る
日本語教育振興協会専門委員	1990年5月～現在に至る

## 3. 工藤 眞由美 教授

1949年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学、大阪大学、1999年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998年4月より現職。専攻：現代日本語文法論。

### 3-1. 論文

- 工藤眞由美 「複数の日本語という視点から捉えるアスペクト」『月刊言語』36-9, 大修館書店, pp. 32-39, 2007/9
- 工藤眞由美, 高江州頼子, 八亀裕美 「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティー」『大阪大学大学院大学研究紀要』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 151-183, 2007/3
- 工藤眞由美, 仲間恵子, 八亀裕美 「与論方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティー」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 84-3, 至文堂, pp. 53-67, 2007/3
- 工藤眞由美 「複数の日本語への視点」『言語接触と混交』大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, pp. 175-186, 2007/1
- 工藤眞由美 「話し手の感情・評価と過去の出来事の実現」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会(編)『日本語教育から研究へ』くろしお出版, pp. 177-186, 2006/11
- 工藤眞由美 「コミュニケーション活動と文法」『多様化日語教育研究』編集委員会(編)『多様化日語教育研究』西安交通大学出版社, pp. 5-9, 2006/10
- 工藤眞由美 「日本語のさまざまなアスペクト体系が提起するもの」日本語文法学会(編)『日本語文法』(日本語文法学会), 6-2, くろしお出版, pp. 3-19, 2006/9

### 3-2. 著書

- 工藤眞由美他(編)『日本語形容詞の文法』ひつじ書房, 268p., 2007/11
- 工藤眞由美, 中東靖恵, 高江州頼子他(編)『言語の接触と混交 ブラジル日系人(沖縄系)言語調査報告』大阪大学 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」報告書, pp. 1-3, 2007/1
- 工藤眞由美, 小林隆, 佐々木冠他(共著)『方言の文法』シリーズ方言学2, 岩波書店, pp. 93-136, 2006/11

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 3-4. 口頭発表

工藤眞由美 「空間表現から時間表現への文法化——日本語における3つの存在動詞の機能——」建学百周年記念シンポジウム, 同済大学, 同済大学, 2007/7

工藤眞由美 「日本語アスペクトの生成メカニズムとエヴィデンシャルティー——脱標準語中心主義のために——」フランス語談話会, フランス語談話会, 東京大学, 2007/7

工藤眞由美 「テンズとムードのインターアクション——時間・認識・評価的感情——」韓国連合日本学会国際シンポジウム, 韓国連合日本学会, 誠信女子大学校, 2007/7

工藤眞由美 「コミュニケーション活動と文法」特別講演会, 上海外国語大学, 上海外国語大学, 2006/11

工藤眞由美 「コミュニケーション活動と情報構造」特別講演会, 同済大学, 同済大学, 2006/11

工藤眞由美 「コミュニケーション活動と情報構造」特別講演会, 華東師範大学日本語学部, 華東師範大学, 2006/11

工藤眞由美 「文の対象的な内容・モダリティー・テンポラリティーの相関性をめぐって「らしい」と「ようだ」」教科研・国語部会研究会, 教育科学研究会・国語部会, 2006/11

工藤眞由美 「連語論と日本語教育」黒竜江省大学日本語教育国際シンポジウム, ハルビン工業大学, ハルビン工業大学, 2006/10

工藤眞由美 「認識的モダリティーと情報構造」北京大学日本語学研究国際シンポジウム, 北京大学, 北京大学, 2006/10

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:工藤眞由美

課題番号:19320065

研究題目:言語接触論から見た日本語の多様性に関する総合的研究

研究経費:2007年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 1,500,000円

研究の目的:

本研究は、日系移民社会・在外駐在日本人社会における日本語と、日本国内における諸方言を言語接触論的観点から注目するものであるが、この観点は、欧米における隣接した言語間というやや図式的な言語接触とは異なり、諸側面の考察が望まれるという点において、今後更なる進展が予期される総合的研究である。また、こうした観点による実証研究の蓄積により、言語学のみならず、文化人類学、言語社会学、エスノメソロジー、といった関連分野への学際的進展が大いに期待できる。本研究ではかかる問題意識に対応すべく、海外における沖縄系移民言語調査と国内における諸方言調査について綿密な調査設計をもって臨んでいるところである。なお、南米の沖縄系移民社会においては急速に同化が進んでおり、とりわけ日系一世の人口は激減の一途であり、国内における諸方言消滅の危機については贅言を繰り返すまでもない喫緊的課題である。本研究はかかる危機意識をもとに、先の共同研究の創造的発展を期すべく編成されたものと位置付けられる。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・連携会員	2006年8月～現在に至る
日本語学会・委員	2005年5月～現在に至る
独立行政法人国立国語研究所・監事	2005年4月～現在に至る
人間文化研究機構国文学研究資料館・運営会議委員	2005年4月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2000年12月～現在に至る
日本語学会・評議員	1997年6月～現在に至る

## 4. 青木 直子 教授

1983年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士課程前期修了。PhD (Trinity College, Dublin, 2003年)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻:第二言語教育学。

### 4-1. 論文

---

Aoki, Naoko, "Teacher stories to improve theories of learner/teacher autonomy" *Independence*, (Learner Autonomy SIG, International Association of Teachers of English as a Foreign Language), 43, pp. 15-17, 2008/3

青木直子 「学習者オートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』56-12, 大修館書店, pp. 10-13, 2008/2

青木直子 「教師オートノミー」春原憲一郎・横溝紳一郎(共編著)『日本語教師の成長と自己研修:新たな教師研修のストラテジーの可能性をめざして』凡人社, pp. 138-157, 2006/6

Aoki, Naoko, "Teacher autonomy, commitment to the profession, and teacher's personal autonomy" Wolff, L.F. & Batista, J.L.V. (eds.) *The Canarian Conference on Developing Autonomy in the Classroom: Each Piece of the Puzzle Enriches Us All*, Consejería de Educación, Cultura y Deportes del Gobierno de Canarias, 2006/5

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

青木直子 "Learner autonomy for plurilingual Japan" The Independent Learning Association 2007: Japan Conference: 外国語教育における学習者オートノミー, Independent Learning Association, 神戸外語大学, 2007/10 (*Programme and Abstracts: Exploring Theory, Enhancing Practice: Autonomy across Disciplines*, pp. 48-49, 2007/10)

青木直子 "A small-scale Narrative Inquiry for teacher development" The 2nd National Conference on Foreign Language Teacher Education and Development: 外国語教育における教師教育, 北京師範大学, 2007/9 (*Second National Conference on Foreign Language Teacher Education and Development: Conference Program and Abstracts*, pp. 20-20, 2007/9)

Aoki, Naoko "Narrative Inquiry for teacher development" オックスフォード神戸セミナー 第一回英語教育セミナー: Understanding the Language Classroom and New Directions for Language Teaching Research, オックスフォード大学セント・キャサリンズ・カレッジ, セントキャサリンズ・カレッジ(オックスフォード大学) 神戸インスティテュート, 兵庫教育大学, セント・キャサリンズ・カレッジ(オックスフォード大学) 神戸インスティテュート, 2007/3 (*The First Oxford-Kobe English Education Seminar: Seminar Programme and Abstracts*, pp. 32-32, 2007/3)

Aoki, Naoko, Keiko Kawashima, Manami Yagi 他 "Developing Japanese Language Portfolio for foreign residents in Japan: A technical report" 第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム: アジア太平洋地域における日本研究と日本語教育の変容と課題, 香港日本語教育研究会, 香港中文大学, 2006/10(『第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム 要旨』 pp. 77-77, 2006/10)

青木直子 「教師にとっての生の質」日本語教育学会 2006 年度秋期大会: 特になし(日本語教育全般), 日本語教育学会, 熊本県立大学, 2006/10(『日本語教育学会 2006 年度秋期大会予稿集』 pp. 37-42, 2006/10)

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

“Innovation in Language Learning and Teaching”. Multilingual Matters.・編集委員 2006年1月～現在に至る  
Japan Association for Language Teaching. Learner Development SIG.・Member-at-large 2005年11月～現在に至る

### 5. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学。

#### 5-1. 論文

---

丸山岳彦, 田野村忠温(共著)「コーパス日本語学の射程」国立国語研究所『日本語科学』編集委員会(編)『日本語科学』22(国立国語研究所), pp. 5-11, 2007/10

田野村忠温 「コピュラ再考」藤田保幸・山崎誠(共編)『複合辞研究の現在』(和泉書院), pp. 249-270, 2006/11

#### 5-2. 著書

---

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦(共著)『コーパス日本語学ガイドブック』特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, 201p., 2007/9

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 5-4. 口頭発表

---

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 19 年度研究進捗状況報告:日本語学班 コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」特定領域研究「日本語コーパス」平成 19 年度公開ワークショップ, 特定領域研究「日本語コーパス」総括班, 時事通信ホール, 2008/3『特定領域研究「日本語コーパス」平成 19 年度公開ワークショップ予稿集』2008/3)

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 18 年度研究進捗状況報告:日本語学班 コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」特定領域研究「日本語コーパス」平成 18 年度公開ワークショップ, 特定領域研究「日本語コーパス」総括班, 時事通信ホール, 2007/3『特定領域研究「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ予稿集』2007/3)

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

5-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田野村忠温

課題番号:16520240

研究題目:電子資料に基づく日本語研究の新領域の開拓および関連の諸問題に関する考察

研究経費:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

研究の目的:

日本語研究において、考察の土台となる用例を収集する手段として電子資料を利用することは昨今普及・一般化してきたが、電子資料の可能性や問題点は十分に検討・理解されていない。本研究においては、電子資料を用いた日本語の新たな研究領域・研究方法を開拓するとともに、電子資料に関連した一般的な諸問題について考察する。



5-6-2. 2006年度～2010年度、特定領域研究、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費: 2006年度 直接経費 10,600,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 8,800,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、今後の日本語研究にとって不可欠の存在となることが確実なコーパス(電子媒体の言語資料)について、具体的な事例研究を通してその利用の価値を明らかにし、従来の日本語研究を精密化するとともに日本語の新しい研究領域・手法を開発することを主たる目的とする。

また、コーパスを用いた日本語研究の啓蒙・普及を図ること、および、本特定領域研究において計画され、将来日本語研究の標準的資料として広範に利用されるはずの大規模な日本語書き言葉コーパスの構築の進行に伴い、それを日本語研究に適用し、その過程で得られた知見をコーパスの構築にフィードバックすることをも目的とする。

5-6-3. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 19520342

研究題目: 大規模な電子資料の利用による日本語文法の未開拓の基礎的諸問題の原理・実証的考察

研究経費: 2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、日本語の大規模な電子資料を用いて日本語文法の未開拓の基礎的な諸問題を考察することにより、電子資料に基づく日本語研究の基盤の形成と発展に寄与するとともに、電子資料利用の目的である日本語研究そのものに対して実質的な貢献をもたらすことを目的とする。

日本語研究の隆盛とその中での特定のテーマへの研究の集中のかげで、日本語にとって非常に基礎的でありながら表面的な言語事実の観察さえ手付かずの状態にとどまっている文法の問題もある。そうした問題について抜本的な再考と電子資料に基づく精密な分析・記述を行うとともに、大規模な電子資料の利用によって初めて可能になる文法研究の新領域の開拓を目指す。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

文部科学省・科学技術・学術審議会専門委員	2007年2月～2007年3月
国立国語研究所・『日本語科学』特集編集委員	2007年1月～2007年10月
日本言語学会・委員および常任委員	2006年4月～現在に至る
日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員	2004年8月～2006年7月

## 6. 石井 正彦 准教授

1958年生。1983年、東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士(文学)(東北大学、2007年)。国立国語研究所研究員、同室長を経て、1999年10月より現職。専攻: 日本語学/計量言語学。

### 6-1. 論文

石井正彦 「仮名遣い改定初案から「現代かなづかい」制定まで」加藤正信, 松本宙(共編著)『国語論究第13集 昭和前期日本語の問題点』明治書院, pp. 41-65, 2007/9

石井正彦 「複合語の形成と「意味表示の二重性」——複合語形成論における「くみあわせ性」と「ひとまとまり性」」『月刊言語』36-8, 大修館書店, pp. 50-58, 2007/8

石井正彦 「日本語研究における探索的データ解析の有用性」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会(編)『日本語の教育から

研究へ』くろしお出版, pp. 227-237, 2006/11

石井正彦 「(特集:日本語の謎)複合語はなぜ字面以上の意味を表すのか」『国文学』51-4, 学燈社, pp. 56-59, 2006/4

石井正彦 「(特集:日本語の謎)これから試みられてよい学際的切り口は何か」『国文学』51-4, 学燈社, pp. 126-128, 2006/4

## 6-2. 著書

---

石井正彦, 田野村忠温, 服部匡他(共著)『コーパス日本語学ガイドブック』科研費報告書, pp. 109-147, 2007/9

石井正彦『探索的データ解析による日本語研究法の開発』科研費報告書, 81p., 2007/3

石井正彦, 田野村忠温, 服部匡他(共著)『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発 I』科研費報告書, 2007/3

石井正彦『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房, 514p., 2007/2

## 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

石井正彦(書評)「斎藤倫明著『語彙論的語構成論』」『日本語の研究』(日本語学会), 3-2, 日本語学会, pp. 54-60, 2007/4

## 6-4. 口頭発表

---

石井正彦「文章顕現型の臨時一語化——その基本類型と多様性——」第94回漢字漢語研究会, 漢字漢語研究会, 早稲田大学, 2007/7

石井正彦「外来語の20世紀」日本語学会 2007 年度春季大会:日本語の20世紀, 日本語学会, 関西大学, 2007/5(『日本語学会 2007 年度春季大会予稿集』pp. 15-20, 2007/5)

石井正彦「テレビの単語使用——外来語を中心に——」第31回「ことば」フォーラム:日本語の中の外来語と外国語～新聞, テレビ, J-POP, 国立国語研究所, キャンパスプラザ京都, 2007/3

## 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2006 年度～2008 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石井正彦

課題番号:18520355

研究題目:計量的言語使用研究のためのマルチメディア・コーパスの開発に関する基礎的研究

研究経費:2006 年度 直接経費 1,800,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

本研究は、実際の言語使用場面を録画・録音した「映像・音声データ」と、そこで発話された音声言語や表示された文字言語を記録した「言語データ」とを関係づける(リンクすること)ことによって、相互に双方向から検索することのできる「マルチメディア・コーパス」を試作すること、および、そうしたマルチメディア・コーパスを利用すれば、言語使用の研究においても、大量データを使用した計量的・実証的な研究が可能になることを明らかにすること、を目的とする。

## 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本語学会・大会企画運営委員

2006 年 6 月～現在に至る

## 7. 渋谷 勝己 准教授

1959年生。東京外国語大学外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学、1990)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授を経て、1996年10月より現職。専攻:日本語学。

### 7-1. 論文

渋谷勝己 「山形市方言の文末詞ジェ」『阪大社会言語学研究ノート』8, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 1-13, 2008/3

渋谷勝己 「文末詞の長音化における語用論的機能」今石元久(編)『音声言語研究のパラダイム』和泉書院, pp. 381-398, 2007/12

渋谷勝己 「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『月刊言語』36巻12号, 大修館書店, pp. 18-25, 2007/12

渋谷勝己 「社会言語学からみた口語と文語」『文学』8巻6号, 岩波書店, pp. 115-122, 2007/11

渋谷勝己 「記述文法から見る『方言文法全国地図』」『日本語学』26-11, 明治書院, pp. 162-172, 2007/9

渋谷勝己 「学習者言語のバリエーション」『BATJ Journal』(The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language), 8, The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language, pp. 41-59, 2007/9

渋谷勝己 「なぜいまバリエーションか」『日本語教育』134, 日本語教育学会, pp. 6-17, 2007/7

### 7-2. 著書

佐々木冠, 渋谷勝己, 工藤眞由美他『シリーズ方言学3 方言文法』岩波書店, pp. 47-92, 2006/11

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己(辞典項目) 「日本語学と国語問題」飛田良文(編)『日本語学研究事典』明治書院, pp. 35-36, 2007/1

渋谷勝己(書評) 「窪田光男『第二言語習得とアイデンティティ——社会言語学的適切性習得のエスノグラフィック的ディスコース分析——』」『第二言語としての日本語の習得研究』9, 第二言語習得研究会, pp. 115-127, 2006/12

渋谷勝己(辞典項目) 「日本語の多様性」鈴木良二(編)『言語科学の百科事典』丸善, pp. 337-355, 2006/7

友定賢治, 日高水穂, 渋谷勝己(共著)(展望) 「日本語文法学界の展望5 方言文法」『日本語文法』6巻/1号, 日本語文法学会, pp. 180-186, 2006/4

### 7-4. 口頭発表

渋谷勝己 「学習者言語のバリエーション」英国日本語教育学会第9回大会講演, 英国日本語教育学会, Royal Holloway, London University, 2006/9

### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己  
課題番号:19520395

研究題目:山形市方言における動詞述語文の記述的研究

研究経費:2007年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

山形市方言の動詞述語文をとりあげて、その格、ヴォイス、アスペクト、テンス、モダリティの諸側面を網羅的に記述することを目的とする。

## 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

第二言語習得研究会・事務局	2008年1月～現在に至る
社会言語科学会・理事	2006年8月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2006年7月～現在に至る
第二言語習得研究会・ジャーナル委員長	2006年1月～2007年12月
日本語学会・常任査読委員	2003年6月～2006年6月
日本語教育学会・査読委員	2003年1月～現在に至る
日本言語政策学会・理事	2002年11月～2007年3月

## 8. 岡田 祥平 助教

1978年生。2001年早稲田大学第一文学部卒業。2003年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。2007年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。修士(文学)。2007年4月より現職。専攻:音声学・日本語学。

### 8-1. 論文

岡田祥平 「北海道・新十津川方言における《話し言葉における音変化》・《縮約形》」真田信治編『移民言語1 北海道・新十津川方言の現在』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, pp. 100-134, 2008/3

岡田祥平 「独話と対話の連続性について考える」龍谷大学国際センター研究年報編集委員会編『龍谷大学国際センター研究年報』17, 龍谷大学国際センター, pp. 3-20, 2008/3

岡田祥平 「「標準語」の多様性を認める言説についての覚書——特に1940年前後に注目して——」『阪大日本語研究』20, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1-31, 2008/2

岡田祥平 「「とりあえず『日本語話し言葉コーパス』検索」の可能性を検討する——「雰囲気」という単語の発音を例に——」龍谷大学国際センター研究年報編集委員会編『龍谷大学国際センター研究年報』龍谷大学国際センター, pp. 59-80, 2007/3

### 8-2. 著書

なし

### 8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 8-4. 口頭発表

岡田祥平 「日本語話し言葉コーパス」にみる「雰囲気」の発音」日本音声学会 2006年度(第20回)全国大会, 日本音声学会, 2006/10(発表要旨:『音声研究』10-3, pp. 105-106, 2006/12)

### 8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

### 8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

8-7-1. 2006年度、研究助成、助成金獲得者:岡田祥平

助成金名:博報「ことばと文化・教育」研究助成

研究題目:「標準語」の多様性——自発発話コーパスと独自データによる分析——

助成団体名:博報児童教育振興会

助成金額:2006年度 直接経費 1,741,000円

研究の目的:

本研究は、国立国語研究所などが製作した『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese、以下 CSJ と表記する)を、真田信治氏の提唱する「標準語」、即ちフォーマルなスピーチスタイル、公的場面で使用される音声言語のコーパスと見なし、CSJ を利用し「標準語」の多様性を記述することを試みた。また、CSJ に格納された音声の社会言語学的な性格を探るため、CSJ に則った手法で独自に音声を収集し、CSJ では知ることのできない話者の意識や生育歴などを考慮した精緻な記述を行うための基礎的データの構築を行った。

## 8-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-21 美学・文芸学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野では、おもに四つの方向で研究が行われている。第一に、古代から現代にいたる美学・芸術学の基本的な理論を、原典に即して比較研究の視点から研究すること。第二に、時代とともに変貌を続ける美的現象および芸術的造形を、事象に即して比較分析し考察すること。第三に、おなじく地域や時代によって異なったデザインの作品史や理論を、実証的に究明すること。第四に、西洋古典文学(ギリシア・ラテン文学)と古典文化を基礎としつつ、中世・近代の各国文学を、普遍的かつ体系的に研究すること。このような研究をおしすすめる上で、本講座は「美学」と「文芸学」の二つの研究室からなる。美学研究室は、ドイツ系(2006年度まで)フランス系、英米系の領域を主とする専任教員からなり、また文芸学研究室は、西洋古代の美学思想と文芸理論(レトリック)を専門とする専任教員で、構成されている。したがって本講座は、文化系統別の美学教育・研究分野を網羅する、稀有の整った体制を有し、これが第一の特色となっている。しかしまた、教員たちの研究テーマはこれら文化系統を超えて、日本の美学、造形芸術、映画とパフォーマンス・アーツ、建築を含む各種デザイン、各種文学、風景論、工芸論とにわたり、その全体としての幅広さが第二の特色となる。さらに、第一、第二の特色を活かした種々の共同研究の体制が生まれ、学内の CSCD(コミュニケーション・デザインセンター)との連携をも密にした研究プロジェクトが推進されている。これが第三の特色となっている。このような特色と理念を有する教育・研究組織は、全国の大学の中でもユニークであると言わねばならない。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 2

教授：上倉 庸敬、藤田 治彦、内田 次信

准教授：加藤 浩、三宅 祥雄

助教：渡辺 浩司、春木 有亮

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
36	14	20	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 3 名



### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	9	6	0	7	0
'07	12	6	2	4	0
小計	21	12	2	11	0

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	4	3	7
'07	3	1	4
計	7	4	11

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

2006年度

松友知香子「ブルーノ・タウトとパウル・クレーにおける色彩の造形性」 2006/9

主査：大橋良介 副査：上倉庸敬 藤田治彦

北田有亮「スーリオ美学の根本問題」 2006/9

主査：大橋良介 副査：上倉庸敬 藤田治彦

孟白麗「宗代官窯における青磁の研究——南宋修内司官窯を中心に」 2006/9

主査：藤田治彦 副査：大橋良介 上倉庸敬

高橋奈保子「近代文人としての芥川龍之介——芸術と風流の間で」 2006/3

主査：上倉庸敬 副査：大橋良介 藤田治彦 内田次信

2007年度

平井直子「《フィジーの家》とその時代をめぐる考察——ここではない何処かへ——」 2007/3

主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬 大橋良介

楊氷「内田吐夢論」 2007/3

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦 永田靖

林承緯「民芸運動の理論と実践——柳宗悦の台湾観と沖縄観を中心に——」 2007/3

主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬 藪亨

##### 【論文博士】

2006年度

圓増正之「遊戯する生の変容」——ニーチェの場合と良寛の場合——」 2006/3

主査：大橋良介 副査：上倉庸敬、藤田治彦

上倉庸敬「フランス美学のエスプリ——その系譜と展望——」 2006/3

主査：大橋良介 副査：柏木隆雄 天野文雄

角忍「カント哲学と最高善——カントにおける自律思想への転回——」 2006/3

主査：大橋良介、副査：入江幸男 須藤訓任 舟場保之

2007 年度

大坪健二「アメリカ 20 世紀美術研究 ニューヨーク近代美術館創設館長アルフレッド・H・パール Jr.の思想を中心に」

2007/3

主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦 関府寺司

## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	7	1	1	0	1	10
'07	6	2	0	0	0	8
計	13	3	1	0	1	18

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	1	13	3	1	0	18
'07	2	9	5	3	0	19
計	3	22	8	4	0	37

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (0)著書

【2006 年度】

林承緯「東アジアの工芸運動用語集」『公州 2006「芸術と福祉」国際会議論集』,pp. 126-128,2006/10、共著

【2007 年度】

吉田薫『京都絵になる風景～銀幕の舞台をたずねる』ダイヤモンド社・ダイヤモンドビッグ社, 2007/4

#### (1)論文

【2006 年度】

林承緯「柳宗悦が見た台湾民芸」『デザイン理論』48号、意匠学会, pp. 98-99, 2006/5

林承緯「南投地区西洋藝術先駆高燦卿」『水沙連雑誌』35号, pp. 11-18, 2006/7

佐々木優「バップにおける即興演奏——その基礎と自由の問題」『フィロカリア』第24号, 待兼山芸術学会編, pp. 1-18,

2007/3

春木有亮「生きている生は、感じとる」『待兼山論叢』大阪大学文学部編, pp. 27-50, 2006/12

島本英明「西田哲学からみたジャコメッティの人体彫刻——純粹経験としての彫刻制作とその射程——」『西田哲学会年報第三号』, pp. 133-150, 2006/7

林承緯「台湾の民芸と柳宗悦」『デザイン理論』49号, 意匠学会, pp. 63-73, 2006/11

林承緯「台湾民間祀神主従関係の形成と特質」『台湾文献』58巻1号、国史館台湾文献館, pp. 163-190, 2007/3

- 大塚美左恵「Essai sur le thème de la mort dans Ceux qui m'aiment prendront le train」『美学研究』第5号、大阪大学美学研究室, pp. 1-11, 2007/3
- 秋岡啓子「岡本綺堂新歌舞伎戯曲の初期におけるドラマツルギー」『第57回美学会全国大会当番校プログラム研究発表会選抜論文集』, 大阪大学美学研究室, pp. 1-9, 2007/3
- 猪谷聡／セチル・シャトゥル (Secil Satir) 「伝統的なイズニック・タイルおよび陶器の現代における評価——トルコのタイルと陶芸の発展過程と技法において」『Design Discourse Japan』Vol.2, Design History Forum, pp. 28-38, 2006/10
- 【2007年度】
- 林承緯「芸術、風土、地方——柳宗悦初期民藝思想的形成与实践」『藝術評論』17号、国立台北藝術大学, pp. 230-251, 2007/5
- 林承緯「Ceremonies for Ritual Boundaries in Huagau, A Folk Religion of Taiwan」『Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversit』, pp. 338-341, 2008/3
- 林承緯「神社太鼓与神道音楽」『台湾神社独木太鼓研究』, 国立台湾博物館, pp. 43-71, 2007/11
- 中野逸雄「「おだやかな法則」再考——アーダベルト・シュティフターの詩学」『文芸学研究』第12号、文芸学研究会, pp. 58-98, 2008/3
- 萩原康一郎「ポール・リクール『時間と物語』の虚構論としての可能性と限界」『藝術研究』第20号、広島藝術学会, pp. 1-16, 2007/7/26
- 猪谷聡「土地と工芸との関係についての試論」『フィロカリア』第25号、待兼山芸術学会, pp. 01-12, 2008/3
- 秋岡啓子「『村井長庵』に見る岡本綺堂新歌舞伎の特徴——黙阿弥『勸善懲惡視機関』と比較して——」『近現代演劇研究』1, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, pp. 35-52, 2008/2
- 春木有亮「エチエンヌ・スーリオのアイステーシス理性」『美学』229号、美学会編, pp. 29-42, 2007/6

## (2)口頭発表

### 【2006年度】

- 中野逸雄「初期シュティフターの文体」第28回文芸学研究会研究発表会、神戸大学、2006/9/22
- 高橋奈保子「芥川龍之介における文人趣味——芸術と風流の両義的問題をめぐって」第57回美学会全国大会、大阪大学、2006/10/7
- 那須木綿子「骨董再考——青山二郎の鑑賞に即して」第57回美学会全国大会、大阪大学、2006/10/7
- 横道仁志「ボナヴェントゥラにおけるハビトゥス概念」第57回美学会全国大会、大阪大学、2006/10/7
- 猪谷聡「工芸の製作における「反復」という概念」第57回美学会全国大会、大阪大学、2006/10/8
- 春木有亮「エチエンヌ・スーリオのアイステーシス理性」第260回美学会西部会例会、関西学院大学、2006/9
- 島本英明「ロダンの『面』概念について」第48回意匠学会全国大会、杉野服飾短期大学、2006/11/18
- 吉田馨「1920年代の世界映画史にみる衣笠貞之助——『狂った一頁』(1926年)と『十字路』を中心に(1928年)」ドイツ観念論研究会(特集インターカルチャー論)、京都大学芝蘭会館、2006/9/30
- 吉田馨「衣笠貞之助と1920年代の日本映画」日本映像学会西部会研究会、神戸芸術繊維大学、2006/12/2
- 吉田馨「京都市文化ボランティアのつどい」講演：文化ボランティアの意義、京都ひとまち交流館、2006/10/22
- 萩原康一郎「フィクションにおける意味と指示について——ポール・リクールの物語論を中心に」広島藝術学会第20回大会、広島平和記念資料館地下1階メモリアルホール、広島藝術学会、2006/7/29
- 竹内有子「クリストファー・ドレッサーの装飾デザイン論——日本趣味との関連を中心に——」第57回美学会全国大会、大阪大学、2006/10/9
- 秋岡啓子「岡本綺堂の新歌舞伎」第57回美学会全国大会、大阪大学、2006/10/7
- 秋岡啓子「『村井長庵』に見る岡本綺堂新歌舞伎の特徴——黙阿弥『勸善懲惡視機関』と比較して——」近現代演劇研究会、大阪市立大学、2007/2/3

- 福元崇志「ヨーゼフ・ボイスのトランス・ユーラシア」、アジア芸術学会国内シンポジウム——日本のアートを巡るインターカルチャーの可能性とそのゆくえ、同志社大学、2006/9/29
- 小林文菜「フィンランド木造建築と木の美について——アールトの木の美学から21世紀の木造建築教育まで——」意匠学会第49回大会、神戸大学、2007/11/11
- 福元崇志「ヨーゼフ・ボイスのトランス・ユーラシア」、アジア芸術学会国内シンポジウム——日本のアートを巡るインターカルチャーの可能性とそのゆくえ、同志社大学、2006/9/29
- 林承緯「台湾の法教における結界の儀式についての研究」高野山国際密教学術大会、高野山大学、2006/9/6
- 【2007年度】
- 大塚美左恵「パトリス・シェローの映画における身体」、日本映像学会第33回大会、女子美術大学、2007/6/3
- Koji MORIMOTO, Kunio Maekawa before and after the Japan-Thailand Cultural Center Competition in 1943 -The Cgange in Design Reconsidered- (The 5th Conference of the Asian Society of Arts), Ritsumeikan University, 2007/8/27
- 森本浩司「浜口隆一における「様式」概念——「日本国民建築様式の問題——建築学の立場から」を手がかりに——」第58回美学会全国大会、北海道大学、2007/10/7
- 竹内有子「クリストファー・ドレッサーのデザイン教育観に関する一考察——ジョン・ラスキンとの比較を通じて——」待兼山芸術学会、大阪大学、2007/4/7
- 竹内有子「クリストファー・ドレッサーとアート・ボタニー」第193回意匠学会研究例会、京都精華大学、2007/9/8
- 櫻間裕子「近現代美術館における展示空間について」第58回美学会全国大会、若手研究発表会、北海道大学、2007/10/7
- 櫻間裕子「近現代美術館の展示空間について——Gae Aulenti設計、パリ国立近代美術館のコレクション展示室に関する一考察」、第16回ミュージアムデザイン研究会、大阪大学、2007/12/7
- 福元崇志「行為すること、展示すること——ヨーゼフ・ボイスのアクションと遺物をめぐって」、第14回ミュージアムデザイン研究会、大阪大学、2007/6/22
- 福元崇志「ボイス以後のボイス——ヨーゼフ・ボイスの「遺物」をてがかりに——」、第58回美学会全国大会当番校プログラム、北海道大学、2007/10/7
- 福元崇志「芸術と社会？——ヨーゼフ・ボイスの理念と作品——」、remoボイス講座、東淀川体育館、2008/3/23
- 林承緯「近代台湾における【工芸】概念の形成」伝統芸術——比較デザイン論国際研究会、国立台北藝術大学伝統芸術センター、2008/3/31
- 久保美枝「エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画空間における装飾性」第57回美学会全国大会、北海道大学、2007/10/7
- 小田昇平「コンディヤック『人間認識起源論』における藝術と想像力」、第2回美のゆくえ研究会、2007/9/16
- 小田昇平「コンディヤック『人間認識起源論』における想像力」、第58回美学会全国大会、北海道大学、2007/10/8
- 小田昇平「出口なき性愛 セルジュ・ゲンスブル『Je t'aime moi non plus』試論」、2007年度第26回大阪教育大学芸術学研究会、2008/3/15
- 中野逸雄「自然描写の領域——アーダルベルトシュティフターの方法——」、美のゆくえ研究会、誓願寺、2008/1/23
- 吉田薫「特別講座『京都絵になる風景』京都・銀舞台」、シネ・ヌーヴォ、2007/7/5
- 吉田薫 第2回京都太秦シネマフェスティバル京都ロケ地探訪ツアー「映画の名場面を訪ねて」2007/9/30
- 吉田薫「りっせいシネマフェスタ——ニッポンクラシックシネマ・KYOTO——」シンポジウム司会、2007/2/11

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2006年度】

- 萩原康一郎『生命倫理百科事典』第5巻、生命倫理百科事典翻訳刊行委員会編(丸善、2007年1月)「付録 文学と医療」の訳稿の修正・改訳、3199頁から3212頁を担当。
- 竹内有子「ヨドコウ迎賓館 ライトの「有機的建築」息づく」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/6/29
- 竹内有子「ルシアン・エルヴェ展 建築家の魂をもつ写真」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」

2006/12/28

- 秋岡啓子「ジグマー・ポルケ展<童話名副題に 日本で初の本格的個展>」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/5/3
- 秋岡啓子「大阪港天保山「スヌーピー ライフデザイン展」<広がる新たな”変身世界”>」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/9/5
- 井上由里子『わたしはある』に向けて——ノヴァリナ『我を忘れた空間』のメディ・フランス上演、『美学研究』第5号、大阪大学大学院文学研究科美学研究室、pp. 119-127, 2007/3/31
- 福元崇志「中之島三井ビルの《サーペンタイン》二重の「畏」が発する警告」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/10/24
- 福元崇志「「公募 京都芸術センター2007」日常の感覚を非日常的な形に」、『大阪日々新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」、2007/2/27
- 森本浩司「京都会館〈人々を包む柔らかさ〉」(京都会館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/9/26
- 小林文菜「神戸新開地BIGMAN」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/10/30
- 林承緯「異文化に根張る焼き物の色」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2006/10/31
- 吉田馨『プロディューサーズ』実力ある舞台俳優ざらり』『信濃毎日新聞』24面、2006/4/13
- 吉田馨『奇跡の夏』兄弟のきずな 病越えて』『信濃毎日新聞』22面、2006/5/11
- 吉田馨『花よりもなほ』心やさしい若侍の人情話』『信濃毎日新聞』21面、2006/6/8
- 吉田馨『MiIII』迫力満点のアクション』『信濃毎日新聞』26面、2006/7/6
- 吉田馨『パイレーツ・オブ・カリビアン/デッドマンズ・チェスト』登場人物の風ぼう魅力』『信濃毎日新聞』20面、2006/8/3
- 吉田馨『プージェー』少女の強烈な生命力』『信濃毎日新聞』24面、2006/8/31
- 吉田馨『フラガール』夢かなえる女性の強さ』『信濃毎日新聞』20面、2006/9/28
- 吉田馨『ハリヨの夏』純粹ゆえもがく少女』『信濃毎日新聞』23面、2006/10/26
- 吉田馨『プラダを着た悪魔』働く女性の本音と実態』『信濃毎日新聞』24面、2006/11/23
- 吉田馨『犬神家の一族』遺産をめぐる猟奇殺人』『信濃毎日新聞』14面、2006/12/21
- 吉田馨『ヘンダーソン夫人の贈り物』上品で力強い反戦映画』『信濃毎日新聞』22面、2007/1/25
- 吉田馨『ドリームガールズ』歌う、歌う 圧倒的歌唱力』『信濃毎日新聞』25面、2007/2/22
- 吉田馨『アルゼンチンババア』生と死と再生を描く』『信濃毎日新聞』14面、2007/3/29
- 吉田馨「京都文化博物館・発明王エジソン展〜ほとんどが今でも使用可能」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪、2007年5月17日号、9面、2006/5/17
- 吉田馨『京都市美術館コレクション展〜春を待つ』「待つ」のイメージは』『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪 2007年1月16日号、9面、2007/1/16
- 春木有亮「触覚の面白さ」体験「さわる文字さわる世界」』『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪、2006年10月3日号(19959号)9面、2006/10/3
- 楊氷『絵本作家ワンダーランド展』京都えき美術館』『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪、2006年7月21日号、2006/7/21
- 【2007年度】
- 猪谷聡『「日本デザインの遺伝子」展の記録』日本貿易振興機構／『デザイン理論』意匠学会、2007/10
- 猪谷聡「源ヶ橋温泉」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」p.7, 2007/9/25
- 松平嘉人「奈良県立図書館情報館<古都の自然と共生するたたずまい>」、『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/9/4
- 森本浩司「開基足利義満600年忌記念「若冲展」(釈迦三尊像と動植綵絵百二十年ぶり再会)」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/6/19
- 森本浩司「BIOMBO／屏風 日本の美〈囲まれた空間の非日常〉」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/12/4

- 森本浩司「Vladimir Mako, National and Universal Aspects in the Aesthetic Judgment of Architecture-A few historical examples-」(ヴラディミール・マコ「ナショナルとユニヴァーサル：建築の美的判断における二つの相 歴史的考察をめぐって」)、Design Discourse vol.2(デザイン史論)、2007/7/31
- 秋岡啓子「浪花花形歌舞伎く上方歌舞伎盛り上げる若手たち」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/4/24
- 秋岡啓子「マリー・アントワネット生誕250年記念 麗しのロココ衣装展く浮世離れした優雅な世界」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/10/16
- 竹内有子「コレクション遊覧——旅するまなざし——」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/5/28
- 竹内有子「海を渡った日本のモダニズムとアール・デコ「大正シック」」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/8/19
- 福元崇志「片山雅史展 皮膜・千の光」視覚を超え、五感に訴え」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/6/12
- 福元崇志「イヴ・サスマン」『液晶絵画 Still/Motion』(国立国際美術館、同名展覧会カタログの作家略歴)、2008/2/14
- 小林文菜「特別展覧会く狩野永徳」(京都国立博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/12/11
- 小林文菜「特別展く川端康成と東山魁夷——響きあう美の世界——」(京都文化博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2008/3/11
- 久保美枝「福田平八郎展」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/7/31
- 小田昇平「舞台芸術の世界～ディアギレフのロシアバレエと舞台デザイン～」20世紀初頭に咲いた伝説の集団(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2007/12/25
- 小田昇平「展覧会『写真の美術／美術の写真——「浪華」「丹平」から森村泰昌まで』美術と共鳴し合う写真の存在(大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」2008/3/18
- 吉田薫『ブラックブック』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/4/19
- 吉田薫『初雪の恋』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』28面、2007/5/17
- 吉田薫『しゃべれどもしゃべれども』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/6/14
- 吉田薫『憑神』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/7/12
- 吉田薫『怪談』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/8/9
- 吉田薫『天然コケッコ』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』22面、2007/9/6
- 吉田薫『ミス・ポター』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/10/4
- 吉田薫『クワイエットルームにようこそ』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/11/1
- 吉田薫『やじきた道中 てれすこ』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』25面、2007/11/29
- 吉田薫『茶々 天涯の貴女』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』20面、2007/12/27
- 吉田薫『野田版 研辰の討たれ』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』28面、2008/1/31
- 吉田薫『歓喜の歌』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』21面、2008/2/28
- 吉田薫『魔法にかけられて』くシネマの味かた>『信濃毎日新聞』21面、2008/3/27
- 吉田薫『四姉妹のあでやかな競演：細雪1』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/4/1
- 吉田薫『四姉妹のあでやかな競演：細雪2』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/5/1
- 吉田薫『藤純子三題』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/6/1
- 吉田薫『祇園祭と浴衣』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/7/1
- 吉田薫『夜目遠目傘のうち』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/8/1
- 吉田薫『うそつき』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/9/1
- 吉田薫『それぞれの愛着』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/10/1
- 吉田薫『縞の着物』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/11/1
- 吉田薫『冬よそおい』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2007/12/1
- 吉田薫『羽織』く花園>『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2008/1/1



吉田薫『半襟』＜花園＞『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2008/2/1  
 吉田薫『貝の口』＜花園＞『銀幕のきもの語り』妙心寺派宗務本所内編集室、2008/3/1  
 吉田薫「プリンセスの輝き ティアラ展 華麗なるジュエリーの世界」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」9面、2007/7/10  
 吉田薫「特別展・京都と近代日本画 文展・帝展・新文展 100年の流れのなかで」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室」9面、2008/1/8  
 春木有亮「踏破より自己の投影 「聖地★巡礼展」」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪 2007年5月9日号(20169号)9面、2007/5/9  
 春木有亮「写実具象に意義 奈良芸術短期大学洋画コース展」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪 2007年8月14日号(20265号)10面、2007/8/14  
 楊氷「ロシア皇帝の至宝展——世界遺産クレムリンの奇跡——」大阪国立国際美術館『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪 2007年8月7日号、2007/8/7

### 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：0名（計0名）  
 2007年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：0名（計0名）

### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部：0名 大学院：4名（計4名）  
 2007年度 学部：0名 大学院：5名（計5名）

### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

春木有亮 博士後期課程、大阪大学大学院文学研究科、助教、2008/4

### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2006年度：1名 2007年度：2名

＜内訳＞ 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 1名 中・高等学校の教員 0名  
 その他 1名

### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度：0名 2007年度：0名

### 9. 刊行物

2006年度 『美学研究』5号  
 『文芸学研究』11号  
 『フィロカリア』24号

2007 年度 『文芸学研究』 12 号  
『フィロカリア』 25 号

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際デザイン史フォーラム事務局	2006 年度～2007 年度
民族藝術学会事務局	2006 年度～2007 年度
待兼山芸術学会事務局	2006 年度～2007 年度
意匠学会事務局	2006 年度～2007 年度
文芸学研究会事務局	2006 年度～2007 年度
『文芸学研究』 第 10 号合評会	2006 年 6 月 17 日
第 29 回研究発表会	2006 年 12 月 23 日
『文芸学研究』 第 11 号合評会	2006 年 7 月 21 日
美学会	
第 57 回全国大会	2006 年 10 月 7 日～9 日
西部会第 265 回研究発表会	2007 年 9 月 29 日
ギリシア・ローマ神話学研究会事務局	2007 年度
第 1 回講演会	2008 年 1 月 26 日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

待兼山芸術学会誌『フィロカリア』 第 25 号刊行	2008 年 3 月 31 日
待兼山芸術学会 第 17 回研究発表会	2007 年 4 月 7 日
待兼山芸術学会誌『フィロカリア』 第 24 号刊行	2007 年 3 月 30 日
待兼山芸術学会 第 16 回研究発表会	2006 年 4 月 8 日

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

美学研究室では大橋、上倉の両教授に、兼任教員として CSCD の藤田教授、学内非常勤講師として同じく CSCD の要講師、ほかに週 1 コマ 1 セメスター担当の非常勤講師 1 名、助手代理 2 名という体制だったが、大橋教授は 2007 年 3 月に定年退職、しかし 2007 年度 10 月、大阪外国語大学との統合を機に、動態論の三宅准教授を兼務教員に迎えた。

美学研究室における教育活動の中心は、非常勤を除く教員全員が参加して進める発表演習の授業である。毎週 1 度、学部生は 2 名がそれぞれ 30 分前後、院生は 1 名が 1 時間前後、自分の研究を発表したのち、その内容について研究室に所属する全員で質疑討論を交わす。3 時前から始まり、7 時 8 時におよぶこともある。この演習授業をとおして、学生は研究テーマの見つけ方、研究の進め方、発表の工夫を身につけ、卒業論文、修士論文、博士論文の執筆手順と方法を学ぶ。あわせて、美学芸術学に関し自分のテーマだけに閉じこもらない広い視野を手に入れる。この授業は年間を通じ、休暇期間以外、休みなく行われる。

大橋教授はドイツ語文献の講読にもとづく美学史研究、年度ごとに変わる主題追求、二つの講義を担当した。その授業形式は、ハイデガーの創始したプロトコル方式を活用した独自のものである。大橋教授は退職時、着任以来の 4 年間にわたる授業内容を、独特な授業形式をも彷彿とさせる編集で『美のゆくえ』（燈影舎、2007 年 3 月）にまとめて出版した。ほとんど学生との共著であり、美学研究室の教育活動全般を見わたせる書物になっている。

上倉教授は年間をとおして、古典古代からの美学史を毎年異なった視点から講じる美学序説、トマス・アクィナスと美学の関連を探る数年来の美学講義、劇映画を論じて毎年異なる個別作品を研究する芸術学講義、主としてフランス語による美学文献講読を担当している。

藤田教授は、環境美学関連の英語文献の講読、建築史、工芸史、デザイン史関連の講義、くわえて、エラスムス・ムン

ドゥス企画の英語での授業を提供している。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れている。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。

## 12-2. 研究活動

阪大美学研究会では、美学研究室編集の『美学研究』を刊行し、現在は4号を数えている。また各種国際学会や国内学会における発表、美学研究室大学院生が交代で執筆する大阪日日新聞のシリーズ記事「関西美術探訪」の連載など、大学院生および学部学生の活動は非常に活発である。

なお、大橋教授のイニシアチブにより、2004年10月、パリ・ラヴィレット建築エコールと文学研究科および工学研究科建築工学専攻とのあいだの「部局交流協定」が成立した。これにより2005年度からの学生交流が始まると共に、美学研究室と建築学専攻とのあいだの学内交流をおこなっている。2006年度、2007年度とも、美学研究室前期博士課程の学生がラヴィレット建築大学に留学し、2006年度にはラヴィレット建築大学から来た大学院生1名が美学研究室に在籍した。

文芸学研究室はギリシアとローマの喜劇・悲劇を中心とする研究を行っている。内田次信教授は、古代ギリシアの喜劇と悲劇、ギリシア神話を研究している。加藤准教授はプラトンの文芸論やスカリゲルの詩学などを、また渡辺助手がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究している。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が発刊され、現在は12号を数えるに至っている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表を年3回開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、極めて活発に活動している。また2007年に「ギリシア・ローマ神話学研究会」を創設し、2007年1月に第1回講演会を開催した。今後は年に数回の講演会を予定している。さらに本研究室の同様の共同研究であるクインティリアヌスの *Institutio oratoria* の邦訳も現在第5巻までが完了し、第2分冊が2008年12月に刊行される予定である。

2007年3月の大橋教授退官後、同元教授を中心に、上倉教授、藤田教授をオーガナイザーに、「美のゆくえ研究会」が発足した。2ヶ月に一度のペースで研究発表会をかさね、研究室の修了生と在籍生が交流する貴重な場ともなっている。

上倉教授は、第5回を迎えた京都映画祭の企画委員として、その実行に取り組み、研究室学生の有志とともに2006年9月、2万人を動員、映画祭の成功に力を尽くした。

藤田教授は、2006年度に、3年間継続した、日本学術振興会科学研究費研究計画(基盤(B))「近代工芸運動の総合的国際比較研究」をまとめあげ、続いて、2007年度から、同じく科学研究費研究計画(基盤(B))「比較デザイン論研究——意匠・構想・計画・創造論の射程」を開始した。

春木教室助手は、2006年9月に博士学位を取得、美学会を中心に、研究発表、論文投稿をかさねている。また2006年4月から、「美のゆくえ研究会」の事務局を担当している。猪谷教室助手は、2006年度、2007年度、意匠学会事務局幹事を担当している。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 上倉 庸敬 教授

1949年生。専攻:美学/芸術学/映画学。

#### 1-1. 論文

なし

#### 1-2. 著書

なし

### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 1-4. 口頭発表

---

なし

### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2. 藤田 治彦 教授

1951年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学、1983年)。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。専攻:美学・芸術学。

### 2-1. 論文

---

Fujita, Haruhiko, "East Asian ideas of design: Ish from Fufu to Miura Baien" Haruhiko Fujita(編) *WORDS FOR DESIGN*, 2008-3, pp. 4-15, 2008/3

藤田治彦 「柳宗悦と山本鼎」藤田治彦(編)2007-3, pp. 101-105, 2007/3

藤田治彦 「「千年の意匠」光悦と宗達」『なごみ』2006-12, 淡交社, 2006/11

藤田治彦 「アーツ・アンド・クラフツと東アジア」藤田治彦(共編)『公州「芸術と福祉」国際会議論集』(アーツ・アンド・クラフツ運動史国際会議), 国際会議実行委員会・デザイン史フォーラム, pp. 93-94, 2006/10

藤田治彦 「「清らかな意匠」谷口吉郎とル・コルビュジエ」『なごみ』2006-11, 淡交社, 2006/10

藤田治彦 「「さまざまな意匠」モダニズムの機械と装飾」『なごみ』2006-10, 淡交社, 2006/9

藤田治彦 「「古い家と新しい文学」島崎藤村の『家』」『なごみ』2006-9, 淡交社, 2006/8

藤田治彦 「「流行の門を敲く」三井呉服店の新意匠」『なごみ』2006-8, 淡交社, 2006/7

藤田治彦 「「不忍池をめぐる」龍池会の美術とアート」『なごみ』2006-7, 淡交社, 2006/6

藤田治彦 「雲井織」意匠登録第一号」『なごみ』2006-6, 淡交社, 2006/5

藤田治彦 「「国東の小宇宙」条理ひとたび立てば」『なごみ』2006-4, 淡交社, pp. 70-73, 2006/4

藤田治彦 「「高橋由一と福地桜痴」明治のふたつの意匠会」『なごみ』2006-5, 淡交社, 2006/4

### 2-2. 著書

---

川崎和男, 藤田治彦, 坂村健他(共著) 『「artificial heart:川崎和男展」カタログ』株式会社アスキー, pp. 24-30, 2006/10

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

藤田治彦(書評) 「伊勉『琉球祭祀空間の研究:カミとヒトの環境学』」『民族藝術』(民族藝術学会), 23, 民族藝術学会, pp. 210-211, 2007/3

オリヴィエ・メスレー, 藤田治彦, 遠藤ゆかり(監修)「オリヴィエ・メスレー『ターナー:色と光の錬金術』創元社, pp. 1-4, 2006/8

## 2-4. 口頭発表

藤田治彦 「天体の図像学」滋賀県立近代美術館記念講演会:「天体と宇宙の美学」記念講演会, 滋賀県立近代美術館, 滋賀県立近代美術館講堂, 2007/10

藤田治彦 「Arts and Settlements」第4回セツルメント運動史国際会議, Finnish Federation of Settlements, Finnish Federation of Settlements, 2007/9

藤田治彦 「Art and Welfare」第4回セツルメント運動史国際会議, Finnish Federation of Settlements, Finnish Federation of Settlements, 2007/9

藤田治彦 「デザイン・ミュージアムの誕生」JDMフォーラム「日本のデザイン・ミュージアムを考える」, インターナショナル・デザイン・リエゾン・センター, 2007/9

藤田治彦 「International versus Local」第5回アジア藝術学会, 立命館大学, 立命館大学, 2007/8

藤田治彦 「絵に文字を重ねる」民族藝術学会, 民族藝術学会, お茶の水女子大学, 2007/4

Fujita, Haruhiko “The Arts and Crafts Movement and East Asia: Farmers’ Art and Folk Crafts”6th International Conference on the History of the Arts and Crafts Movement: Art and Welfare, Design History Forum, 公州国立博物館 Gongju National Museum, 2006/10(『公州「芸術と福祉」国際会議論集』pp. 7-8, 2006/10)

Fujita, Haruhiko “KYOTO: A City of Gardens, for Gardens, and as a Garden”Wuhan International Forum on Garden-City: THE GREEN BOND: CITIES AND GARDENS, Wuhan University, 武漢大学 Wuhan University, 2006/10(pp. 48-49, 2006/10)

Fujita, Haruhiko “Japanese Crafts for the 21st Century – From the Past Looking to the Future”Craft in 20th-century Japan and the UK: British Museum, SISJAC, 在英国日本国大使館, 2006/9(<http://www.uk.emb-japan.go.jp/en/event/craft.html>, )

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 意匠学会賞, 意匠学会, 2002/11

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤田治彦

課題番号:16320022

研究題目:近代工芸運動の総合的国際比較研究

研究経費:2006年度 直接経費 4,100,000円 間接経費 0円

研究の目的:

イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に端を発し、19世紀末から20世紀初頭にかけて全世界に拡大した近代工芸運動に、ドイツ語圏の工芸博物館運動やフランスの装飾美術(応用美術)運動、そして、日本の民藝運動などと比較しながら、新たな光を当てる。

2-6-2. 2007年度～2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤田治彦

課題番号:19320027

研究題目:比較デザイン論研究

研究経費:2007年度 直接経費 5,400,000円 間接経費 1,620,000円

研究の目的:

本研究の目的は、デザイン論の基礎となる「デザイン(design)」およびそれに相当する各国語の歴史的用例と現代の用例を徹底的に調査し、各国・各文化における「デザイン」概念や「デザイン」理解について、その共通性や相違を明らかにし、さらに各国・各文化における実際のデザインやデザイン活動とそれらを語る言葉との関係についての比較分析を進めようとするものである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2004年度～2008年度、受託研究、助成金獲得者：藤田治彦

助成金名：人文・社会科学振興プロジェクト研究

研究題目：芸術とコミュニケーションに関する実践的研究

助成団体名：日本学術振興会

助成金額：

2006年度 直接経費 6,500千円

2007年度 直接経費 6,000千円

研究の目的：

本研究は、芸術のコミュニケーション力や、地域社会および国際社会における芸術の「媒介機能」に注目して、それらの発展をめざす、芸術とコミュニケーションに関する実践的研究である。近代芸術および近代芸術批評には、芸術家の孤独な探究や自己表現の追求を尊重するモダニズムの理念があった。本研究は、そのような近代的な芸術理念においては必ずしも重視されなかった芸術の側面として、「幸福」、「健康」、「癒し」といった、広義の「福祉」的な側面に注目し、芸術を見直そうという試みである。また、次の時代を担う子どもたちや若者たちによる芸術・文化の発信に注目し、その促進を試みる。

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

デザイン史フォーラム・代表	2006年3月～現在に至る
意匠学会・会長	2005年4月～現在に至る
美学会・委員	2000年4月～現在に至る
日本デザイン学会・評議員	1994年4月～現在に至る

## 3. 内田 次信 教授

1952年3月12日生。1974年、京都大学西洋古典学科卒業。2003年、博士(京都大学)。専攻：西洋古典学、文芸学。

### 3-1. 論文

内田次信 「エウリピデス『オレステス』とその間テクスト性」『大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 48, pp. 81-95, 2008/3

Uchida, Tsugunobu, “Beyond Mimesis” 『平成19年度研究年報』(平成19年度－21年度科学研究費補助金), pp. 16-27, 2008/1

内田次信 「ルキアノス『ニグリノス』とローマ諷刺」『大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 47, pp. 123-130, 2007/3

内田次信 「エウリピデス『メデア』における地と天上」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 40, pp. 1-26, 2006/12

### 3-2. 著書

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 3-4. 口頭発表

内田次信 「「ケルトのヘラクレス」の異様と偉容」ギリシア神話の変容, ギリシア・ローマ神話学研究会, 大阪大学, 2008/1

Uchida, Tsugunobu “Beyond Mimesis” Focus Group Gretivity, Technology and Design, University of Borgna, Faculty of Engineering, ボローニャ大学, 2007/9

内田次信 「エウリピデス『オレステス』における間テクスト性」第30会研究発表会, 文芸学研究会, 同志社大学, 2007/3



### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 4. 加藤 浩 准教授

1960年生。1983年、大阪大学文学部美学科卒業。1985年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(大阪大学、1985年)。1987年10月 岡山大学助手、1995年4月 岡山大学助教授、1998年10月 大阪大学助教授。専攻:文芸学/西洋古典学/美学。

### 4-1. 論文

---

なし

### 4-2. 著書

---

なし

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 4-4. 口頭発表

---

なし

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 5. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フ

ランス哲学／映像論。

#### 5-1. 論文

---

なし

#### 5-2. 著書

---

なし

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 5-4. 口頭発表

---

なし

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

### 6. 渡辺 浩司 助教

1962年生。1994年3月、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。1994年より現職。博士(文学、大阪大学、1998年)。専攻:文芸学／西洋古典学。

#### 6-1. 論文

---

なし

#### 6-2. 著書

---

なし

#### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介『古代哲学研究 METHODOS』(古代哲学会編)39, p. 56, p. 61, 2007/5

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介『古代哲学研究 METHODOS』(古代哲学会編)38, p. 77, 2006/5

#### 6-4. 口頭発表

---

渡辺浩司「古代ギリシアの文芸」ハンダイ懇話会, 2008/1/25

渡辺浩司「説得の論理 エンテューメーマ」科学研究費補助金基盤研究(B)「古代ローマにおける弁論術の形成と発展」平成 19年度第1回研究会, 2007/8/4

## 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2006年度～2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:渡辺浩司

課題番号:18320032

研究題目:古代ローマにおける弁論術の形成と発展

研究経費:2006年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

2007年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

研究の目的:

弁論術は古代ギリシアに起源をもつが、古代ローマに輸入され独自の発展をとげる。本研究は、古代ローマにおけるギリシア弁論術の受容過程、古代ローマの弁論術の体系ならびに古代ローマの弁論術があたえた後代への影響を西洋古典学および文芸学の観点から究明することを目的とし、キケロ『弁論家』、『ブルートゥス』、クインティリアヌス『弁論家の教育』などを主たる研究対象とする。

## 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

美学会・幹事

2007年12月～現在に至る

民族芸術学会・委員

1994年4月～現在に至る

## 7. 春木 有亮 助教

1977年生。大阪大学文学研究科後期博士課程修了(文学博士)、2008年より現職。専攻:美学・芸術学。

### 7-1. 論文

---

春木有亮 「エチエンヌ・スーリオのアイステーシス理性」美学会『美学』229, pp. 29-42, 2007/6

春木有亮 「「生きている生」は、感じとる」大阪大学文学会(編)『待兼山論叢』40, pp. 27-50, 2006/12

### 7-2. 著書

---

なし

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 7-4. 口頭発表

---

春木有亮 「エチエンヌ・スーリオのアイステーシス理性」美学会西部会研究会, 美学会, 2006/9

## 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-22 音楽学・演劇学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

#### (音楽学)

本学の音楽学研究室は、開設から30年以上を経たが、今でも我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在である。芸術大学、音楽大学における音楽学研究とも、教育大学における音楽学研究とも異なる問題意識を持ち、またいわゆる歴史的美学的探究、作曲学的分析法、人類学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法論を組み合わせながら音楽に対する新しい取り組みを行っている。

根岸はオーストリアの作曲家アントン・ブルックナーの研究を機軸に据え、広く西洋音楽史を講ずるとともに、ブルックナーの作品の日本での受容に関する研究を端緒に、大正期から昭和期にかけて関西で活躍した音楽家ヨーゼフ・ラスカの仕事について、集中的に取り組んでいる。

伊東はハンガリーを中心とする中・東欧の音楽史、民俗音楽研究を中心に、バルトーク、リゲティ、ハイドン、村の楽師の音楽、といった様々な切り口から、民衆文化の中での音楽実践の研究に取り組んでいる。

両教員ともそれぞれの研究課題を追究し、それとの密接な関連において教育活動を行っているが、音楽が生きた人間の活動であることを常に意識し、社会におけるさまざまな音楽行動を研究との関わりの中かで捉えること、また社会への発言を行うことを重視し、実践に努めている。また、このような見地より、教育においてもさまざまな形での音楽実践を取り込み、多角的な展開をめざしている。学生の個人研究については、上記両教員の研究分野を大きく超えて、日本伝統音楽の研究から、現代の音楽産業論にいたるまで、幅広い対象について、多彩な方法論による研究が展開されている。

#### (演劇学)

演劇学では、日本伝統演劇と西欧近代演劇との二つの分野を有している。日本伝統演劇を天野文雄教授が、西欧近代演劇を永田靖教授が担当している。天野文雄は世阿弥研究と能楽史研究を専らとし、700年に及ぶ能楽の歴史と理論、作品について縦横に研究し、盛んに論考を発表している。永田靖は近代演劇のロシア語圏やアジアでの展開過程に関心があり、モダン・ドラマの理論と上演分析の統合によって20世紀演劇全体を捉えなおす試みを行っている。市川明はドイツ近現代演劇を専門にし、とりわけプレヒトやハイナー・ミュラーを中心にドイツ演劇を研究している。授業はそれぞれ、専門の能楽史、近代演劇論、ドイツ演劇に関するものの他に、初学者用の能楽入門的な概説や、西欧演劇史の概説や演劇学概論の講義や演習を行っている。また西欧演劇学と日本伝統演劇史のクロスオーバー的な検討を主題にした、教員による共同演習を行い、専門領域の細分化の傾向を払拭しようとしている。また実際に劇場に赴き観劇し、上演を分析する観劇実習を行っている。また近隣の公立劇場での劇場制作研修を行い、劇場的思考の育成にも努めている。これらの教育・研究成果は継続的に発表しており、学会・研究会での口頭発表や紀要・論文集への執筆も積極的に行っている。研究室においても紀要『演劇学論叢』を刊行している。これらの教育・研究活動を通して、上演そのものの本質を解明することに加え、日本演劇と世界演劇をトータルに見る視点と、身体的にアプローチする着想を育んでいる

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：根岸 一美、天野 文雄、市川 明、永田 靖

准教授：伊東 信宏

助教：正木 喜勝

## 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
45	16	22	0	1	0	1	1	3

※うち留学生 8 名、社会人学生 2 名

## 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	8	4	5	1	0
'07	10	3	5	2	2
小計	18	7	10	3	2

## II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	1	0	1
'07	1	1	2
計	2	1	3

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

##### 【課程博士】

井手口彰典「ネットワーク・ミュージッキング：『参照の時代』の音楽と文化」2007/3

主査：伊東信宏、副査：根岸一美、永田靖、下條真司

中尾薫「明和改正謡本の成立とその背景」2008/3

主査：天野文雄、副査：永田靖、荒木浩

##### 【論文博士】

三ッ石友昭「能楽と俳諧——宝生沾圃を中心に」2008/3

主査：天野文雄、副査：永田靖、飯倉洋一



## 2. 大学院生等による論文発表等

### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	4	8	6	0	4	22
'07	3	12	6	0	1	22
計	7	20	12	0	5	44

### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	0	5	5	1	2	13
'07	5	5	4	1	3	18
計	5	10	9	2	5	31

### 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

#### (1)論文

【2006年度】

#### (音楽学)

井手口彰典「音楽聴取における『いま・ここ』性：音楽配信サービスの可能態について」関西学院大学 21 世紀 COE プログラム『先端社会研究』, 6, pp.251-272, 2007/3

井手口彰典「音楽聴取における利用可能性の(リスト)：WinMX から Winny へ」『ソシオロジ』(社会学研究会), 157, pp. 39-55, 2006/10

井手口彰典「欲望するコミュニティ：萌えソング試論」『比較日本文化研究』(比較日本文化研究会), 10, pp.113-33, 2006/10

井手口彰典「所有の魔術、あるいは音楽の象徴的支配について：女神はなぜ少年に恋をしたのか」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 4, pp.33-50, 2006/7

齋藤桂「“日本民謡”をいかにつくるか——西川林之助『民謡の作り方』を中心に」『文芸学研究』(文芸学研究会), 11, pp.50-62, 2007/3

下出美智子「第 1 部第 6 章 養護学校の場合」『生成を原理とする 21 世紀音楽カリキュラム——幼稚園から高等学校まで』日本学校音楽教育実践学会編, 東京書籍, pp.48-51, 2006/8

沈金雲「中国における 1912～1930 年の合唱音楽について」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 4, pp.51-61, 2006/7

沈金雲「署名为王洛賓創作的歌曲《老郷、上戰場》曲調探源」『澳門理工學報』, 2006 年第 2 期, pp.165-170, 2006/6

中村真「話し言葉の「音楽的側面」の記述法を求めて——レオシュ・ヤナーチェクのモラヴィア民謡研究における「発話旋律」の位置」関野寺司(編)『モダニズムと中東欧の藝術・文化』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書), 大阪大学, pp.159-178, 2007/3

正木未花「アンビヴァレントな自己表出——ヒンデミットの歌曲におけるテキスト選択」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 24, pp.19-38, 2007/3

山口篤子「宝塚交響楽団と関西の合唱運動」『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』津金澤聰廣・近藤久美共編, 世界思想社, pp. 108-121, 2006/5

## (演劇学)

- 小川幹雄「舞台監督と小山内薫」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 8, pp. 121-130, 2006/8
- 中尾薫「永正三年本《玄上》と明和改正謡本——加藤枝直説の投影をめぐって」『催花賞受賞記念論文集』(東海能楽研究会), pp.11-23, 2007/3
- 中尾薫「江戸城における謡本吟味——『幕府書物方日記』をめぐって」『東海能楽研究会年報』(東海能楽研究会), 11, pp.5-6, 2007/3
- 中尾薫「田安宗武の能楽愛好——田藩文庫の能楽関係資料を手がかりとして」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 24, pp.39-60, 2007/3
- 中尾薫「明和本《絵馬》の特徴と改訂の意図」『観世』, 74-3, 檜書店, pp.28-33, 2007/3
- 中尾薫「明和本における『源氏物語』享受——《住吉詣》の改訂をめぐって」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 8, pp. 159-168, 2006/8
- 橋場夕佳「観世大夫元章の小書——《杜若》「恋之舞」の演出意図とその影響」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 8, pp. 169-178, 2006/8
- 横田洋「歌舞伎様式の摂取——大正十五年の井上正夫」『待兼山論叢』美学篇(大阪大学文学会), 40, pp.1-20, 2006/12
- 横田洋「山崎長之輔の連鎖劇——池田文庫所蔵番付から」『演劇学論集』(日本演劇学会), 44, pp. 161-179, 2006/11
- 横田洋「スタイリストとしての小山内薫——『ある敵討』(1926)をめぐって」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 8, pp. 99-120, 2006/8

## 【2007年度】

## (音楽学)

- 大岩みどり「特集記事 質的研究における客観性:1997年~2007年の音楽療法文献の展望から」『近畿音楽療法学会誌』, 6, pp.7-15, 2007/12
- 大岩みどり「音楽の意味の『測定』をめぐって——ヘヴナーの『心理学的美学』」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 5, pp.47-64, 2007/7
- 奥村京子「ジェルジ・リゲティの『細網音楽』:亡命前後の作品の関連性」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』, 8, pp.37-55, 2008/3
- 川端美都子「カルロス・ベガ Carlos Vega(1898-1966)による／についての記述をめぐるアルゼンチン音楽研究についての一考察」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 美学篇 41, pp.53-78, 2007/12
- 小石かつら「F.メンデルスゾーンの「演奏会用序曲」《静かな海と楽しい航海》作品 27 の改訂の詳細」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 25, pp.13-30, 2008/3
- 小石かつら「印刷楽譜の普及と演奏会用序曲」『同志社女子大学音楽学会《頌啓会》会報』, 36, pp.10-21, 2007/12
- 小石かつら「対話から同化へ——メンデルスゾーン家の人びと」三谷研爾(編)『ドイツ文化史への招待 芸術と社会のあいだ』大阪:大阪大学出版会, pp.144-163, 2007/10
- 小石かつら「Felix Mendelssohn Bartholdy und seine musikalischen Tätigkeiten in London」『音楽学』(日本音楽学会), 53-1, pp.19-36, 2007/9
- 小石かつら「F.メンデルスゾーンの演奏会用序曲《静かな海と楽しい航海》Op.27の成立——同時代の資料にみられる成立の過程」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 5, pp.15-30, 2007/7
- 小林ひかり「グリーグとランスモール——1900年前後のノルウェーにおける言語論争をめぐって」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 5, pp.31-46, 2007/7
- 齋藤桂「軍歌《抜刀隊》に見る明治初期の価値観」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 5, pp.1-14, 2007/7
- 鄭守暎「韓国唱歌に窺える日本の影」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 5, pp.65-81, 2007/7

## (演劇学)

- 上野暁子「近世初期における当道座の実態」『東洋音楽研究』(東洋音楽学会), 72, pp.47-65, 2007/8
- 上野暁子「八橋検校の箏組歌「八橋十三組」の系譜——寺院歌謡・筑紫箏との関連再考」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 9, pp.92-106, 2008/3

- 中尾薫「国会図書館蔵の明和本の書入れ」『能』(京都観世会), 592, p.1, 2007/9
- 中尾薫「甲州における能楽事情——宗武卿の甲府城能舞台拝領と元章の手紙を軸として」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室),9, pp.36-56, 2008/3
- 横田洋「池田文庫の山崎長之輔関係資料——映画台本と連鎖劇番付」『館報池田文庫』(財団法人阪急学園池田文庫), 30, pp.24-26, 2007/4
- 横田洋「連鎖劇の興行とその取り締まり——東京における事例をめぐって」『フィロカリア』(待兼山芸術学会), 25, pp.31-66, 2008/3
- 多田英俊「人形浄瑠璃文楽の方向性——浄瑠璃義太夫節の現代青少年による受容の実態から」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室),9, pp.71-91, 2008/3
- 柊井智英「1950年代日本における俳優教育とセリフ術の結びつき」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室),9, pp.107-132, 2008/3
- 菊池あずさ「蜷川演出における「目の悦楽」——2003年『ペリクリーズ』上演を中心に」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室),9, pp.133-148, 2008/3
- Ondrej Hybl, Pavel Drabek, *Translating Kyogen into Czech* 『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室),9, pp.211-201, 2008/3

## (2)口頭発表

【2006年度】

### (音楽学)

- 井手口彰典「デジタルコピーは終焉に向かうか? : 『モノとしての音楽』とその限界について」日本音楽学会関西支部第327回例会, エリザベト音楽大学/広島市, 2007/3/3
- 井手口彰典「音楽聴取における「いま・ここ」性: 音楽配信サービスの可能態について」関西学院大学21世紀COEプログラム「人類の幸福に資する社会調査」公開研究発表会, 関西学院大学/西宮市, 2006/10/31
- 大岩みどり「音楽聴取時のイメージ: 作品との関係から」日本音楽学会関西支部例会, 大阪音楽大学/豊中市, 2006/9/16
- 小石かつら「F. メンデルスゾーンにおける『演奏会用序曲』: 《静かな海と楽しい航海》Op. 27の改訂とその意義をめぐって」日本音楽学会, 九州大学/福岡市, 2006/10/28

### (演劇学)

- 中尾薫「輪読 得平本《三輪》」東海能楽研究会, 名古屋女子大学/名古屋市, 2007/2/14
- 橋場夕佳「『副言巻第五』雑能の間語の再検討」東海能楽研究会, 名古屋女子大学/名古屋市, 2006/7/2
- 橋場夕佳「輪読 得平本《龍田》」東海能楽研究会, 名古屋女子大学/名古屋市, 2006/12/10
- 柊井智英「自然的行動の具現化——岡倉士朗の演出における野口体操の意味」待兼山芸術学会, 大阪大学/豊中市, 2006/4/8
- 横田洋「中村歌扇から山崎長之輔へ——連鎖劇の上演形態とその変容」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」, 京都市立芸術大学/京都市, 2006/12/23
- 横田洋「活動写真台本『残る面影』について」咄半分芝居半分の会, 高槻現代劇場/高槻市, 2007/2/18
- 横田洋「山崎長之輔の連鎖劇——池田文庫所蔵番付から」日本演劇学会, 成城大学/東京都世田谷区, 2006/6/24
- 正木喜勝「村山知義の舞台美術とその理念——『心座』前期の作品を中心に——」科学研究費補助金(基盤研究(B))「近代舞台美術に関する視覚文化的研究」研究打合せ, 東京大学/東京都文京区, 2006/10/2

【2007年度】

### (音楽学)

- 家田恭「テレジーン収容所における音楽家ヴィクトル・ウルマンの活動」日本音楽学会関西支部第331回例会, 大阪音楽大学/豊中市, 2007/8/29

KAWABATA Mitsuko “Argentine Change and Continuity: Representations of the Gaucho in the Early National Circus and Contemporary Theater.” American Musicological Society: Southern Chapter, Florida State University, 2008/3/1

KAWABATA Mitsuko “Argentine Change and Continuity: Representations of the Gaucho in the Historical Circus and Contemporary Theater.” Midwestern Graduate Music Consortium, University of Wisconsin, 2008/2/23

KAWABATA Mitsuko KAWABATA “Argentine Change and Continuity: Representations of the Gaucho in the Historical Circus and Contemporary Theater.” Musicology Forum, University of Miami, 2008/2/15

KOISHI Katsura “Ein Komponist im Kapitalismus: Die Entstehung der Konzert-Ouvertüre.” Collegium Pontes Görlitz-Zgorzelec-Zhořelec 2007, ドイツ：ゲルリッツ／ズゴジェレツ国際学術院, 2007/7/27

KOBAYASHI Hikari “The Reception of Grieg's Music in Japan.” The International Grieg Society, Bergen Public Library, 2007/6/1

齋藤桂 『新民謡』の発信——地方から『世界』へ」待兼山芸術学会第17回研究発表会, 大阪大学／豊中市, 2007/4/7

### (演劇学)

上野暁子「古今新左衛門の「古今節」について」日本演劇学会全国大会, 大手前大学／兵庫県伊丹市, 2007/6/23

上野暁子「古今節をめぐる一考察」咄半分芝居半分の会, 高槻市民会館／大阪府高槻市, 2008/2/10

ヒーブル・オンジェイ「発声における狂言の本質——各役の名乗り、道行を巡って」日本演劇学会全国大会, 大手前大学／兵庫県伊丹市, 2007/6/23

榊井智英「せりふの技術と俳優の身体——五十年代日本の新劇を通して」日本演劇学会全国大会, 大手前大学／兵庫県伊丹市, 2007/6/23

永田靖、正木喜勝、横田洋、須川渡 『『くるみ座の半世紀』展にちなんで——その活動と資料について』近現代演劇研究会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2007/10/27

永田靖、正木喜勝、横田洋、須川渡 『『くるみ座の半世紀』展にちなんで——その活動と資料について』近現代演劇研究会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2007/10/27

横田洋「連鎖劇の興行とその取締り——主に東京における事例をめぐって」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」, 大阪大学／大阪府豊中市, 2007/10/20

横田洋「役者時代の衣笠貞之助——連鎖劇との関わりを中心に」日本映像学会関西支部研究会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2008/3/28

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2006年度】

#### (音楽学)

井手口彰典(講演)「音楽学への招待：ドヴォルザークと国民楽派」主催：広島大学附属中・高等学校管弦楽団, 広島大学附属中・高等学校第一音楽室, 2006/7/22

井手口彰典(演奏会評)「関西美術探訪(195)」『大阪日日新聞』, 2006/6/7

小石かつら(演奏会評)「クラシックファンのためのコンサート」『大阪日日新聞』, 2007/3/6

小石かつら(プログラムノート)「栗東芸術文化会館アトリウムコンサート」, 2007/2/4

小石かつら(演奏会企画・監修)さきら・アトリウムコンサート「フランス風サロンのひととき」, 2007/2

小石かつら(パネル制作)「メンデルスゾーンの生涯と研究：ライブツィヒ・ゲヴァントハウス・オーケストラとのかかわりを中心に」「フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ基金」東京国際フォーラムにて展示, 2006/12/10

小石かつら(通訳)『さまよえるオランダ人』を演出する」講師：マティアス・T・フォークト(ゲルリッツ大学教授・ザクセン文化基盤研究所所長), 日本ワーグナー協会第101回関西例会, 大阪産業大学サテライト教室, 2006/12/8

小石かつら(通訳)メンデルスゾーン・ガラ・コンサート記念シンポジウム「クルト・マズアと語る『知られざるメンデルスゾーン』」司会：星野宏美, 出演：クルト・マズア, 立教大学, 2006/12/6

小石かつら(楽曲解説)「多川響子ピアノリサイタル」バロックザール, 2006/11/26

- 小石かつら(楽曲解説)「神戸国際芸術祭 2006『ウィーンの情熱：ヘーデンボルク・直樹と仲間たち』神戸舞子ピラあじさいホール, 2006/9/13
- 小石かつら(演奏会評)「長岡京室内アンサンブル」毎日新聞夕刊, 2006/7/27
- 小林ひかり(プログラム・ノート)「愛知県立芸術大学同窓会設立 20 周年記念 祝・愛知県立芸術大学創立 40 周年《音楽学部同窓会会員有志による記念コンサート・2》」愛知県立芸術大学奏楽堂, 2006/10/29
- 小林ひかり(プログラム・ノート)「日本・ノルウェー音楽家協会第 11 回演奏会《白夜の国々から》スカンジナビアの夏至祭」すみだトリフォニー小ホール, 2006/6/26
- 齋藤桂(寄稿)「関西美術探訪(237)」『大阪日日新聞』, 2007/1/30
- 重川真紀(楽曲解説)「ハーベスト・コンサート」青山国際交流協会主催, 青山ホール, 2006/10/1
- 重川真紀(楽曲解説)「第一回シマノフスキの世界、草野由美子ピアノリサイタル」ムジカーザ, 2006/5/28
- 重川真紀(寄稿)「シマノフスキの《第四交響曲》とピアノ」『フィルハーモニー』, 78-4, NHK 交響楽団, pp.41-47, 2006/4
- 重川真紀(楽曲解説)「イシハラホール Xmas コン서트」イシハラホール, 2006/12/13
- 山口篤子(楽曲解説)「池田室内合唱団第 13 回定期演奏会」川西市みつなかホール, 2006/11/26
- 山口篤子(楽曲解説)「今小路聡子・大谷祥子ジョイントリサイタル」クロスランドおやべせレナホール, 2006/4/23
- 山口篤子(寄稿)「メロディーの宝石箱」『めぐみ』193-196, 仏教婦人会総連盟事務局, 2006/3-2007/3
- (演劇学)
- 正木喜勝「演劇をととして演劇を考える——A 級 MissingLink『決定的な失策に補償などありはしない』——」『act』(国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部), 9, pp.10-11, 2006/5
- 正木喜勝「狂気と挫折の牧歌劇——兵庫県立ピッコロ劇団『ほらんばか』——」『act』(国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部), 9, pp.4-5, 2006/8
- 正木喜勝「国歌斉唱と自己不確定——上品芸術劇団『まじめにともだちを考える会の短い歴史』——」『act』(国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部), 9, pp.4-5, 2007/1
- 【2007 年度】
- (音楽学)
- 家田恭(演奏会評)「関西美術探訪(268)」『大阪日日新聞』, 2007/9/11
- 小石かつら(翻訳)「ライブツィヒ・ゲヴァントハウス『メンデルスゾーン音楽祭 2009』パンフレット」, 2008/3
- 小石かつら(翻訳)「Die cleversten Bauern ernten die dicksten Kartoffeln」『バイエルリポート』(バイエル薬品株式会社), 2007 年第 2 号, pp.37-40, 2008/1
- 小石かつら(プログラムノート)「神戸国際音楽祭 2007『ドイツ・ロマン派 秋色の響宴』」, 2007/10/6
- 小石かつら(通訳)神戸国際音楽祭 2007「専門家のためのピアノ公開レッスン」講師：ダイアナ・ケトラー(ロンドン・ロイヤルアカデミー教授), 神戸：神戸文化ホール, 2007/10/3-4
- 小石かつら(演奏会評)「石豊久&堤聡子 デュオ・コンサート 2006」diatxt, <http://diatxt.jp/>, pp.63-64, 2007/6
- 小石かつら(プログラムノート)「阿知波まどかフルトリサイタル」, 2007/4/15
- 小林ひかり(報告・翻訳)「音楽学特別講座・報告と翻訳 オスロ大学音楽学教授アルヴィド・O. ヴォルスネス「四季の作曲家——グリーグとノルウェーの音」"A Man for All Seasons - Grieg and Norwegian Sound"」『愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース紀要——ミクスト・ミュージズ』, 3, pp.78-89, 2008/3
- 小林ひかり(講演)「日本におけるグリーグ作品の受容」日本・ノルウェー音楽家協会第 15 回演奏会「グリーグ、再発見——日本の中のグリーグ」, タカギクラヴィア松濤サロン, 2008/1/27
- 小林ひかり(演奏会の企画・解説・話)「日本・ノルウェー音楽家協会第 14 回演奏会《グリーグ没後 100 年記念演奏会 Vol.3》ノルウェーの踊りと民謡～グリーグが見た田舎の情景」自由学園明日館講堂, 2007/10/14(企画は榎原聡子と共同)
- 小林ひかり(講演会企画・通訳)「日本・ノルウェー音楽家協会《グリーグ没後 100 年記念講演会》エドヴァルド・グリーグ——ときじくの作曲家」講師：アルヴィド・O. ヴォルスネス, 自由学園明日館講堂, 2007/10/14
- 小林ひかり(通訳)「公開講座 没後 100 年記念 グリーグ、ノルウェーの響き」講師：アルヴィド・O. ヴォルスネス, 朝日カルチャーセンター, 2007/10/13



- 小林ひかり(通訳)「特別講座～グリーク音楽の真髓に迫る～グリークと民俗音楽——《バラード》を中心に」講師：アル  
 ヴィド・O.ヴォルスネス, アイナル・ロッティンゲン, 東京藝術大学音楽学部第6ホール, 2007/10/12
- 小林ひかり(演奏会解説)「バルト三国——音楽に織り込まれる自然と人々の声」ザ・フェニックスホール, 2007/6/30
- 小林ひかり(演奏会の企画・解説・話)「日本・ノルウェー音楽家協会第13回演奏会《グリーク没後100年記念演奏会 Vol.2》  
 トロルハウゲンのグリーク」自由学園明日館講堂, 2007/6/23(企画は堺多恵と共同)
- 小林ひかり(演奏会解説)「ヨハンセン陽子ピアノリサイタル～グリーク没後100年に寄せて～グリークピアノ作品全曲  
 演奏会 Vol.1」ルーテル市ヶ谷センター, 2007/6/10
- 小林ひかり(翻訳協力、大東百合子、西脇万里子と共同)アイナル・ステーン＝ノクレベルグ『グリーク全ピアノ作品演奏  
 解釈』大東省三訳, 音楽之友社, 2007
- 齋藤桂(演奏会評)「音楽評」『毎日新聞』大阪版夕刊, 2007/10/25
- 齋藤桂(評論、ウェブサイト)「Eleni Karaindrou "Elegy of the Uprooting"」『diaTXT.website』, 京都芸術センター,  
 2007/6～
- 齋藤桂(評論、ウェブサイト)「Paul Auster Travels in the Scriptorium」『diaTXT.website』, 京都芸術センター, 2007/6  
 ～(9月に更新)
- 重川真紀(寄稿)「オペラ《ルッジェロ王》の魅力」『音楽現代』37(11), pp.110-111, 2007/12
- 下出美智子(演奏会の企画・運営)「彼岸会奉納演奏：高天寺橋本院」演奏：天野サチ, 橋本院, 2008/3/20
- 山口篤子(寄稿)「メロディーの宝石箱」『めぐみ』200, 仏教婦人会総連盟事務局, pp.34-38, 2008/3
- 山口篤子(寄稿)「メロディーの宝石箱」『めぐみ』198, 仏教婦人会総連盟事務局, pp.34-37, 2007/6
- 山口真季子(演奏会評)「関西美術探訪(282)」『大阪日日新聞』, 2007/12/18

### (演劇学)

- 柘井智英「フリードリヒ・ヘッベル『マグダラのマリア』序文(1844)解説・抄訳」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研  
 究科演劇学研究室), 9, pp.151-163, 2008/3
- 横田洋「ヘルマン・ヘットナー『近代劇 美学的考察』(1852)解説・抄訳」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演  
 劇学研究室), 9, pp.164-170, 2008/3
- 横田洋「不条理芝居にも積極関与——『くるみ座の半世紀——関西新劇の源流』」『大阪日日新聞』, 2007/11/14
- 須川渡「グスタフ・フライターク『戯曲の技巧』(1863)解説・抄訳」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研  
 究室), 9, pp.171-181, 2008/3
- 須川渡「「喪失」めぐり戯曲の魅力紹介——日英現代戯曲交流プロジェクト『いつか、すべて消えてなくなる』」『大阪日  
 日新聞』, 2008/3/4
- 菊池あずさ「ポール・ボンヌタン他「五人宣言」(1887)解説・抄訳」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研  
 究室), 9, pp.182-189, 2008/3
- 菊池あずさ「同時代としての『オレステス』」『Diatxt.』, 17, 2007/5
- 菊池あずさ「ぐるっぺ・あうん公演『セールスマンの死』」『大阪日日新聞』, 2007/9/18
- 池田拓郎「新鮮な興奮もたらす自主映画」『大阪日日新聞』, 2008/2/26
- 大谷俊太、福井辰彦、大石真由香、中尾薫、畑中さやか、久岡明穂、的場美穂「『名墨新詠』 解題と翻刻」『叙説』(奈良  
 女子大学国語国文学会), 35, pp.57-85, 2008/3
- 大谷節子、中尾薫、見市泰男「第四章第五節 小道具」『一色の翁舞調査報告書』(伊勢市教育委員会), pp.136-148, 2008/3
- 天野文雄、大谷節子、中尾薫、宮本圭造「第五章伊勢猿楽関係資料集成」『一色の翁舞調査報告書』(伊勢市教育委員会),  
 pp.163-243, 2008/3

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

- ヒーブル・オンジェイ「関西・こころの奨励賞」, 関西・経営と心の会, 2007年度。
- 齋藤桂, <柴田南雄音楽評論賞>奨励賞, 財団法人アリオン音楽財団, 2006年度。
- 重川真紀, 第10回ポーランド語(教養)コンテスト, 第二部《詩の暗唱》部門第1位, 主催:《フォーラム・ポーランド》

#### 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

2007年度 PD: 0名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計2名)

#### 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2007年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

#### 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

井手口彰典 博士後期課程, 鹿児島国際大学福祉社会学部現代社会学科, 講師, 2007/10

正木喜勝 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2007/4

#### 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2006年度: 0名 2007年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名  
その他 0名

#### 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 6名

2006年度: 2名 2007年度: 4名

#### 9. 刊行物

2006年度 『阪大音楽学報』第4号 『演劇学論叢』第8号

2007年度 『阪大音楽学報』第5号 『演劇学論叢』第9号

#### 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本音楽学会関西支部事務局	2007年度
民族芸術学会事務局	2006年度・2007年度
日本演劇学会事務局	2006年度・2007年度
近現代演劇研究会事務局	2006年度・2007年度
近現代演劇研究会例会開催	2008年3月15日 2007年12月22日, 10月27日, 7月28日(総会) 3月9～11日, 2月3日 2006年12月2日, 9月30日, 7月4～5日(講演会) 5月27日
日本演劇学会秋の研究集会開催	2006年11月12日
「くるみ座の半世紀」展開催	2007年11月1日～12月22日
大阪ヨーロッパ映画祭講演会	2007年11月22日



## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

中東欧音楽フォーラム「同時代の声を考える」 於：大阪大学 2008年3月5日

チュア・スーボン教授講演会「福建劇」 於：大阪大学 2007年11月28日

ディンコ・ファブリス教授講演会「ドメーニコ・スカララッティのナポリにおける初期活動」 於：大阪大学 2007年7月24日

音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム 於：大阪大学

第7回「モノコードからクラヴィコードへ」 2007年6月8日

第6回「イスラーム圏の音楽にみる『声の文化』的あり方——講演とサントゥールの演奏」 2006年11月15日

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

#### (音楽学)

本専門分野における教育活動の中心は、根岸、伊東の両教員が担当する演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて常に真剣な討議が行われ、着実な成果を挙げている。また2006年度より開催することになった通称「総合ゼミ」では、教員はもちろん、学部学生、院生、研究生など、研究室に関わる全てのメンバーが参加し、音楽学の様々な問題について研究発表と討論を行なっている(これは研究教育上、学部学生と院生との間が分断されがちであるという反省から開設された新しい演習だが、その効果は徐々に現れつつある)。これに加えて、年一回開催されている合宿でも、学位論文についての中間報告会が行われている。また、毎年非常勤講師を招き、とりわけ日本やアジアの音楽について、専任教員の専門分野を超えた教育が実施できるように配慮している。こういった授業や論文指導といった教育活動のほか、研究室主催の「コレギウム・ムジクム」が年に数回開催されているが、これは本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元するものである。2006年度、2007年度には、各1回開催され、イランのサントゥール、およびクラヴィコード製作に関するレクチャーと実演が行われた。また、海外(イタリア、ドイツ、中国)からの研究者を招いての講演会も開催され、本研究室の研究、教育に大きな刺激を与えた。さらに、本専門分野では、社会との連携についても力を入れており、複数の音楽ホールにおける音楽実務に関するインターンシップを実施してきた。これらについては、事前指導、事後指導、報告会なども行い、また文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成している。

下記の研究活動でふれるCOE、GCOE、人文社会振興プロジェクト、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」などのプロジェクトに関連して、様々な芸術分野の現在を反映したWeb雑誌(『diaTXT』)の編集、あるいは研究会での発表や議論においても本研究室の教員、大学院生は中心的な役割を果たしているが、このことも本研究室における教育活動の充実に貢献している。

#### (演劇学)

本研究室の教育活動は、2人の専任教員と1名の兼任教員(2008年度より)、また1名の助教(2007年度より)と毎年1名の非常勤講師とで行われている。専任教員は能楽を中心とする日本伝統演劇の歴史と理論、及び作品分析を中心にすすめている天野文雄教授と、西欧近代演劇の歴史と理論、作品分析を中心にすすめている永田靖教授、兼任教員にはドイツ近現代演劇の作品や研究、また戯曲翻訳と上演活動を行う市川明教授を擁している。また正木善勝助教は、日本近代演劇史を中心に研究を続け、現在博士論文を準備中である。毎年、専任教員は演劇史、演劇学、作品講読、外国語講読などの授業を5コマ前後、兼任教員は1コマ、助教も1コマを専任教員と共同で担当して教育に当たっている。学部生は当該年度の2年間で約44名、大学院学生は前期後期合わせて約34名の教育に当たってきている。とりわけ大学院学生の教育効果は、博士論文2本(課程博士1、論文博士1)、学会誌、紀要、機関誌などへの論文20本、また学会・研究会発表なども活発に指導し、計16回の研究発表を行っている。その内実は、日本演劇学会、能楽学会などの全国規模の大会や研究集会、また学会の分科会である近現代演劇研究会や六麓会などの研究会や、個別の研究プロジェクトでの研究発表など多岐にわたるようになり、大学院学生の活動の活発さが窺われる。ことに日本演劇学会と能楽学会への参加の度合いは著しく、本研究室が学会活動の主要な部分を担いつつあることが分かる。問題点としてあるとすれば、日本伝統演劇と

西欧近現代演劇が、専門領域として二つに分断される傾向があることである。今後、世界がグローバル化の中でさらに関係を強めていく傾向にある現在、演劇研究も多様な地域の演劇を幅広く研究する視野を養成することが求められている。海外からの留学生や研究者の来訪が増えているのは喜ばしいが、この点今後の課題として残っていると思われる。また、高度専門職業人、とりわけ研究職への就職が極少である点は依然として問題視されねばならない。博士前期課程修了者の一般企業などへの就職率はほぼ 100%であるが、博士後期課程修了者の就職率は高いものではない。ただ、演劇学という日本において稀少の専攻である点を考慮すれば、一概に研究室だけの問題でもないと思われる。少なくとも、本研究室の大学院修了者に非常勤講師や非常勤職員の職がないものではなく、その他の研究費などを併用することで、研究活動を今のところ維持できていることも明記しておきたい。また、学部学生とともに観劇実習、紀要・劇評誌発行、劇場研修などを行っている。観劇実習は、歌舞伎、能、浄瑠璃、小劇場、新劇、商業演劇などのジャンルから偏りなく、毎年 5 本の演劇を選択し、上演についての準備勉強を経た後に、観劇し、批評を書かせることで、上演そのものに触れさせる授業として受講者が多い。劇場研修とは、公立劇場と提携して、劇場の制作実務を経験させる教育プログラムである。2002 年度以来継続して行っており、兵庫県立ピッコロ劇場の定期公演に研修生として学生を参加させ、演劇学の実践的な展開に向けて努力している。大学院生も、社会人入学者を含めて着実に増え、それぞれの研究活動を行い、社会に開かれた大学院となっている。

## 12-2. 研究活動

### (音楽学)

本専門分野は、本学文学研究科が中心となって採択された 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」について、特に「映像人文学」の分野と「モダニズムと中東欧の芸術文化」の分野で積極的な役割を果たし、海外調査、演奏会、シンポジウム、ワークショップの開催などを行ってきた。この成果は、2007 年度から始まったグローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学」に引き継がれたが、本専門分野も引き続き、このプログラム(とりわけ「アート・メディアにおけるグローバル・コンフリクトの研究」)に参画し、芸術分野におけるコンフリクトに関する研究について大きな役割を果たしている。また、2004 年度に採択された日本学術振興会の「人文社会科学振興プロジェクト」においても「文学・芸術の社会的媒介機能」のうちの「コミュニティ・アート」分野に関わり、ゲストを招いての授業を主催し、成果をあげた。さらに 2005 年度から開始された「魅力ある大学院教育イニシアティブ」のプログラムにおいて、関西を中心とした芸術施設のフォーラム形成、および Web 上の芸術批評誌『diaTXT.』編集などについても大きな役割を果たした。

こういった活動に加えて、根岸一美教授、伊東信宏准教授、上野正章助手(2006 年度まで)の各教員はそれぞれに、日本音楽学会、東洋音楽学会、民族芸術学会などの学会において役員として活発な活動を展開している。大学院生も、これらの学会を中心に、精力的な研究発表を行っており、学界に大きな寄与を果たしている。とりわけ、博士後期課程の大学院生たちが、近年国際的な学会、研究集会において活発に研究発表を行なっていることは特筆に値する。また、伊東准教授は 2007 年度、文部科学省海外先進研究実践支援制度の助成を受け、ハンガリーとスイスで研究をおこない、国際的な研究の第一線に寄与する成果を得た。

また本研究室は論文集として『阪大音楽学報』の発行を続けている。これは、全国的に見ても稀な、音楽学に関する学術誌として今後さらに重要性を増してゆくものと思われる。これらの特筆すべき活動の他に、論文執筆、講演、解説や音楽評などの寄稿、などの通常の研究活動も非常に活発に行われており、全国的に見ても当研究室が、音楽学の分野における重要な拠点の一つを形成していると言っても過言ではない。

### (演劇学)

天野文雄教授、永田靖教授、市川明教授、正木喜勝助教とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、天野が会長、永田が事務局長、市川が理事を務める日本演劇学会の事務局がおかれている。またその分科会の近現代演劇研究会は実質的に永田が主宰して、毎年 5 回ほどの研究会を行っている。また天野教授は日本演劇学会以外にも能楽学会会長を務め、藝能史研究会、民族芸術学会などの役員として中心的メンバーであり続けており、それぞれの例会運営、個別のフォーラムなどの企画に中心的に関わっており、大学院学生などに対して、研究の面で学界に接する貴重な場を提供している。永田教授は近年国際会議への出席が頻繁と

なっており、FIRT 国際演劇学会を始め、主催する研究会を上海やソウルで開催して、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。また科研、COE、人文社会振興プロジェクトなどを通じて、学内外の研究会が増えていることも研究活動を活性化させている一因となっている。市川もプレヒト研究や現代演劇研究を軸にドイツばかりではなく、海外との接触が多く、活発に研究活動を行っている。正木もまた学会誌などへの論文執筆や各種学会発表、劇評執筆などが多い上に、各種研究会や学会に運営から参加する機会が多く、学会内外での活躍が目立ち、日本演劇学会や近現代演劇研究会などの若手として囑望されている。天野、永田、市川、正木はそれぞれ、複数の科研グループの代表者、また分担者となって研究会や研究を組織しており、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院学生の研究活動の活性化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。日本学術振興会人文社会振興プロジェクトにおいても研究部門代表となり、研究活動を活発に行っている。総じて、近年の予算削減にもかかわらず、専任教員と大学院学生の研究活動はむしろ活発さを増しているように見える。これらの研究成果の発表活動である紀要『演劇学論叢』も、毎年刊行しており、現在第 10 号を編集準備中である。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇と細分化していくのではなく、広く演劇としてトータルに捉える視点を軸に、社会の中の営みとして理解する方向性も大切にしている。

### Ⅲ. 教員の研究活動(2006 年度～2007 年度の過去 2 年間)

#### 1. 根岸 一美 教授

1946 年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士。大阪音楽大学専任講師，大阪教育大学助教授・教授，大阪大学文学部教授を経て現職。専攻：音楽学。

##### 1-1. 論文

Negishi, Kazumi, “Die im Kobe College hinterlassenen Musiknoten von Joseph Laska” 『阪大音楽学報』(大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室紀要), 5, pp. 82-92, 2007/7

根岸一美 「神戸女学院のラスカ楽譜資料」『学院史料』, 神戸女学院史料室, 21, pp. 6-16, 2006/12

根岸一美 「ブルックナーの交響曲は《第9》なしには生まれなかった」 櫻井知子(編) 『第九 歓喜のカンタービレ』, ネット武蔵野, pp. 166-167, 2006/12

##### 1-2. 著書

根岸一美 『作曲家◎人と作品 ブルックナー』, 音楽之友社, 256p., 2006/6

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

根岸一美(楽曲解説) 「リスト《詩的で宗教的な調べ》」『アルド・チッコリーニ・ピアノリサイタル』-プログラム(財)川西市文化財団, p. 3, 2008/3

根岸一美(楽曲解説) 「ショパン《ピアノ協奏曲第2番》、ブルックナー《交響曲第5番》」『大阪フィルハーモニー交響楽団第 416 回定期演奏会』-プログラム, pp. 4-8, 2008/3

根岸一美(演奏会批評) 「釈迦郡洋介ピアノリサイタル」『毎日新聞大阪本社版夕刊』45061, p. 7, 2008/3

根岸一美(演奏会批評) 「谷村由美子&ジョナス・ヴィトー フランス歌曲リサイタル」『関西音楽新聞』669, NPO法人関西芸術振興会, p. 3, 2008/3

根岸一美(演奏会批評) 「ゲルハルト・ボッセ指揮、春を呼ぶコンサート」『毎日新聞大阪本社版夕刊』45047, p. 7, 2008/2

根岸一美(演奏会批評) 「沼尻竜典指揮・大阪センチュリー交響楽団第 127 回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44978, p. 7, 2007/12

根岸一美(演奏会批評) 「松村英臣ピアノリサイタル」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44971, p. 7, 2007/12

根岸一美(楽曲解説) 「ヘンツェ:オペラ《ルプパ——ヤツガシラと息子の愛の勝利》」『東京交響楽団第 549 回定期演奏会』-プログラム, pp. 12-14, 2007/10

- 根岸一美(楽曲解説)「ハイドン《交響曲第3番》、ドヴォルザーク《チェロ協奏曲》、ベートーヴェン《交響曲第6番》「田園」」『東京交響楽団第548回定期演奏会』-プログラム, pp. 10-11, 2007/9
- 根岸一美(楽曲解説)「ハイドン《交響曲第2番》、ブラームス《交響曲第2番》、ベートーヴェン《ヴァイオリン協奏曲》」『東京交響楽団第547回定期演奏会』-プログラム, pp. 8-9, 2007/9
- 根岸一美(演奏会批評)「大阪シンフォニカー交響楽団第120回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44894, p. 4, 2007/9
- 根岸一美(演奏会批評)「京都市交響楽団第503回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44859, p. 8, 2007/8
- 根岸一美(演奏会批評)「佐渡裕プロデュースオペラ「魔笛」」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44845, p. 4, 2007/8
- 根岸一美(楽曲解説)「ハイドン《交響曲第1番》、シューマン《ピアノ協奏曲》、ベートーヴェン《交響曲第4番》」『東京交響楽団第12回川崎定期演奏会・同第42回新潟定期演奏会』-プログラム, pp. 6-7, 2007/7
- 根岸一美(楽曲解説)「ハイドン《交響曲第93番》、モーツァルト《ピアノ協奏曲第21番》、ショスタコーヴィチ《交響曲第12番》「1917年」」『東京交響楽団第546回定期演奏会』-プログラム, pp. 6-7, 2007/6
- 根岸一美(演奏会批評)「大阪フィルハーモニー交響楽団ベートーヴェン全曲演奏会第1回」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44789, p. 6, 2007/6
- 根岸一美(楽曲解説)「ブルックナー《交響曲第9番》」『NHK交響楽団第1595回定期演奏会』-プログラム, pp. 6-7, 2007/6
- 根岸一美(演奏会批評)「大阪センチュリー交響楽団第120回定期演奏会」『関西音楽新聞』660, NPO法人関西芸術振興会, p. 3, 2007/6
- 根岸一美(楽曲解説)「ベルリオーズ《序曲 ローマの謝肉祭》、ドヴォルザーク《交響曲第9番》「新世界より」」『東京交響楽団第11回川崎定期演奏会・同第41回新潟定期演奏会』-プログラム, 東京交響楽団, pp. 6-7, 2007/5
- 根岸一美(演奏会批評)「稲垣聡ピアノ・リサイタル」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44740, p. 7, 2007/4
- 根岸一美(楽曲解説)「ハイドン《交響曲第101番》「時計」、マーラー《交響曲第4番》」『東京交響楽団第545回定期演奏会』-プログラム, pp. 8-9, 2007/4
- 根岸一美(楽曲解説(CD))「ブルックナー《交響曲第3番》」『ヨッフム ブルックナー交響曲第3番「ワグナー」』TOCE-13484, 東芝EMI株式会社, pp. 2-4, 2007/3
- 根岸一美(楽曲解説(CD))「ブルックナー《交響曲第5番》」『ヨッフム ブルックナー交響曲第5番』TOCE-13485, 東芝EMI株式会社, pp. 2-4, 2007/3
- 根岸一美(演奏会批評)「関西二期会室内オペラ、チマローザ《秘密の結婚》」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44691, p. 9, 2007/3
- 根岸一美(演奏会批評)「関西フィルハーモニー管弦楽団第190回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44670, p. 9, 2007/2
- 根岸一美(演奏会批評)「ドン・コサック合唱団日本公演」『関西音楽新聞』656, NPO法人関西芸術振興会, p. 3, 2007/2
- 根岸一美(楽曲解説)「J. S. バッハ《チェンバロ協奏曲第1番》《同第3番》《同第4番》《同第5番》」『コンチェルト・コペンハーゲン演奏会』-プログラム (財)川西市文化財団, p. 3, 2007/1
- 根岸一美(演奏会批評)「松田康子ピアノリサイタル」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44615, p. 7, 2006/12
- 根岸一美(演奏会批評)「アーノンクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス演奏会」『毎日新聞東京本社版夕刊』47010, p. 7, 『毎日新聞大阪本社版夕刊』44594, p.12, 2006/11
- 根岸一美(楽曲解説(CD))「ヨーゼフ・ラスカ《奈良》」『フルート・レボリューション 難波薫』KKCC-3015, King International Inc., pp. 10-11, 2006/11
- 根岸一美(演奏会批評)「いずみシンフォニエッタ第14回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44531, p. 7, 2006/9
- 根岸一美(演奏会批評)「関西フィルハーモニー管弦楽団第186回定期演奏会」『関西音楽新聞』651, 関西芸術振興会, p. 6, 2006/9
- 根岸一美(演奏会批評)「太田雅音バイオリンリサイタル」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44503, p. 9, 2006/8
- 根岸一美(楽曲解説)「リスト《交響詩 前奏曲》、サン＝サーンス《チェロ協奏曲第1番》、チャイコフスキー《交響曲第2番》」『大阪シンフォニカー交響楽団第111回定期演奏会』-プログラム, p. 4, 2006/7
- 根岸一美(演奏会批評)「大阪フィルハーモニー交響楽団第399回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44433, p. 12, 2006/6
- 根岸一美(演奏会批評)「ロッシーニ《セヴィリアの理髪師》」『関西音楽新聞』648, 関西芸術振興会, p. 6, 2006/6



根岸一美(楽曲解説)「ブルックナー《交響曲第8番》」『NHK交響楽団第1569回定期演奏会』-プログラム, pp. 13-14, 2006/5  
根岸一美(演奏会批評)「大阪シンフォニカー交響楽団第108回定期演奏会」『毎日新聞大阪本社版夕刊』44363, p. 7, 2006/4  
根岸一美(演奏会批評)「大阪フィルハーモニー交響楽団第395回定期演奏会」『関西音楽新聞』646, 関西芸術振興会, p. 3, 2006/4

#### 1-4. 口頭発表

根岸一美「音楽学を学ぶ人のために(為学音楽学的人而作)」, 青島大学音楽学院音楽学術講座, 青島大学, 2007/4

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

アゼリア推薦新人演奏会・実行委員・審査員	2004年8月～現在に至る
日本音楽学会関西支部・監事	2001年4月～2007年3月

## 2. 天野 文雄 教授

1946年生。国学院大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。上田女子短期大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1996年から現職。専攻:能楽研究。

#### 2-1. 論文

天野文雄「小西新右衛門家二代の能楽愛好(その一)」『おもて』96, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2008/3  
天野文雄「『九位』の「奥義之上」の読みと意味」『テキストの生成と変容』大阪大学文学研究科共同研究, pp. 160-162, 2008/3  
天野文雄「伊勢三座の祝禱系芸能をめぐる諸問題——《翁》《獅子六舞》《方堅》をめぐる——」伊勢市『一色の翁舞』伊勢市, 2008/3  
天野文雄「《難波》は《難波梅》だった——《難波》における「梅」の意味——」『大槻能楽堂研究公演冊子』財団法人大槻能楽堂, pp. 1-2, 2008/2  
天野文雄「『遊楽習道風見』の執筆時期と世阿弥の環境」『おもて』95, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2007/12  
天野文雄「融と僧が織りなす幻想と懐旧——《融》を読み解く——」『福王会公演「世阿弥時代の地謡による「融」をみる」冊子』福王会, p. 1, 2007/11  
天野文雄「応永末年～永享初年の醍醐清竜宮祭礼能の「観世大夫」」『おもて』94, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2007/9  
天野文雄「「童男」という風体のこと」『おもて』93, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2007/6  
天野文雄「思想という点からみた能楽研究」『中世文学』(中世文学会), 52, 中世文学会, pp. 50-53, 2007/6  
天野文雄「普一国師志玉と金春大夫氏信」『おもて』(大槻能楽堂), 91, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2007/3  
天野文雄「五月十四日付世阿弥状の「三村殿」について」『鍔仙』554, 鍔仙会, pp. 4-5, 2007/2  
天野文雄「古演出による《自然居士》上演の経緯と意義」『大槻能楽堂研究公演』財団法人大槻能楽堂, pp. 1-2, 2007/2  
天野文雄「「主題」からみた源氏物の能概観」井伊春樹(監修)『講座源氏物語研究』1, おうふう, pp. 192-208, 2006/10  
天野文雄「《卒都婆小町》《柏崎》《松風》の物着演出を疑う」『おもて』90, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2006/9  
天野文雄「能を乱舞と呼ぶこと」『おもて』90, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2006/8

- 天野文雄 「世阿弥と月菴宗光——両者をつなぐもの——」『能と狂言』(能楽学会), 4, 能楽学会, pp. 114-120, 2006/8
- 天野文雄 「世阿弥という名前——能役者の阿弥号の意味と由来——」『能と狂言』(能楽学会), 4, 能楽学会, pp. 60-75, 2006/8
- 天野文雄 「《金札》の作意と成立の背景——原形の復元と作意の把握を通じて永徳元年の「花の御所」落成との関連におよぶ——」『演劇学論叢』8, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 1-37, 2006/8
- 天野文雄 「《高砂》の時代設定を再考する」『おもて』89, 財団法人大槻能楽堂, pp. 7-9, 2006/6

## 2-2. 著書

天野文雄 『世阿弥がいた場所——能大成期における能と能役者をめぐる環境——』ペリカン社, 650p., 2007/2

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

天野文雄(書評) 「沖本幸子著『今様の時代 変容する宮廷芸能』」『芸能史研究』(芸能史研究会), 178, 芸能史研究会, pp. 43-45, 2007/7

## 2-4. 口頭発表

- 天野文雄 「多武峰常行堂の「翁」は摩多羅神にあらず——翁系仮面研究序説——」国際シンポジウム『散楽と仮面』, 国際シンポジウム『散楽と仮面』, 早稲田大学, 2007/12
- 天野文雄 「はじめて意識された家元制度——観梅問題をめぐって——」韓国日本言語文化学会, 韓国日本言語文化学会, 世宗大学, 2007/11
- 天野文雄 「世阿弥のことば」大和猿楽サミットシンポジウム, 大和猿楽サミット, 奈良県新公会堂能舞台, 2007/3
- 天野文雄 「世阿弥研究の現在——世阿弥と三郎元重の関係をめぐって——」シンポジウム「揺らぎの中の日本文化」, 岡山大学文学部, 岡山大学, 2007/3
- 天野文雄 「古い自然居士について」大槻能楽堂研究公演講演, 大槻能楽堂, 大槻能楽堂, 2007/2
- 天野文雄 「近代能楽集から能を読む4」大阪能楽養成会講演, 大阪能楽養成会, 大阪能楽会館, 2007/2
- 天野文雄 「野村得庵の能楽愛好」京都能楽養成会講演, 京都能楽養成会, 京都観世会館, 2007/2
- 天野文雄 「猿楽から能へ——『東大寺統要録』建暦二年華嚴会記録の注記をめぐって——」国際シンポジウム「散楽の国際性」, 早稲田大学演劇博物館演劇研究センターCOE21世紀プログラム, 早稲田大学, 2006/12
- 天野文雄 「近代能楽集から能を読む3」大阪能楽養成会講演, 大阪能楽養成会, 大阪能楽会館, 2006/12
- 天野文雄 「近代能楽集から能を読む2」大阪能楽養成会講演, 大阪能楽養成会, 大阪能楽会館, 2006/9
- 天野文雄 「中世文学研究の起源」中世文学会春季大会シンポジウム, 中世文学会, 大正大学, 2006/6
- 天野文雄 「近代能楽集から能を読む1」大阪能楽養成会講演, 大阪能楽養成会, 大阪能楽会館, 2006/5

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

天野文雄 第18回観世寿夫記念法政大学能楽賞, 法政大学, 1996/1

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

民族芸術学会・副会長	2006年4月～現在に至る
日本演劇学会・会長	2006年4月～現在に至る
芸能史研究会・委員	2003年4月～現在に至る



### 3. 市川明教授

1948年生。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。1976年、大阪外国語大学外国語学研究科修士課程ドイツ語学専攻修了。文学修士。近畿大学教養部助手、同講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：ドイツ文学／ドイツ演劇。

#### 3-1. 論文

- 市川明 「表現主義の彫刻家・劇作家、エルンスト・バルラハ」『不定期船』3, pp. 100-108, 2008/2
- 市川明 「シンガーソングライター、ブレヒト——若き詩人とサブカルチャー——」市川明(編)『抒情詩への回帰——歌としてのブレヒトの詩』(科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」), 研究報告書1, pp. 11-49, 2007/12
- 市川明 「『あとから生まれてくるものたちへ』——ブレヒトとハンス・アイスラー」市川明(編)『抒情詩への回帰——歌としてのブレヒトの詩』(科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」), 研究報告書1, pp. 97-133, 2007/12
- 市川明 「街角にたたずむ作家たち——ベケット、ブレヒト、カフカ、マン」『不定期船』2, pp. 86-97, 2007/6
- 市川明 「ドイツ表現主義と宝塚歌劇」『池田文庫』30, 阪急学園池田文庫, pp. 8-9, 2007/4
- 市川明 「ベルリンのブレヒト祭」『シアターアーツ』(国際演劇評論家協会日本センター), 29, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 10-17, 2006/12
- 市川明 「暗い時代からの叫び——ブレヒトの亡命中の詩」『不定期船』1, pp. 95-102, 2006/7
- 市川明 「エルンスト・バルラハの芸術」『言語』35-6, 大修館書店, pp. 6-7, 2006/6

#### 3-2. 著書

- 市川明(訳)『ブレヒト上演台本集——言葉と音楽』研究報告書3, 科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」, 413p., 2008/3
- 市川明(編), ヤン・クノッ, ヨアヒム・ルケーゼ他『抒情詩への回帰——歌としてのブレヒトの詩』研究報告書1, 科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」, 182p., 2007/12
- 市川明, ハンス・ペピン, 木村英二(共編著)『ドイツ語ステップアップ(新訂版)』郁文堂, 198p., 2006/4

#### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 市川明 「密陽の熱い嵐——密陽国際演劇祭に参加して」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 14, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 16-17, 2007/12
- 市川明(書評) 「谷川道子『ドイツ現代演劇の構図』」『ドイツ文学』133, 日本独文学会, pp. 238-241, 2007/10
- 市川明 「ドイツからの外大の訪問客」 *Sprache und Kultur*, 40, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp.149-162, 2007/9
- 市川明 「劇団と伝統——関西芸術座の50年」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 13, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2007/8
- 市川明(劇評) 「ウィーン版ミュージカル『エリザベート』——トート(死)がたぐり寄せる運命の糸」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 13, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 10-11, 2007/8
- 市川明 「『善き人のためのソナタ』——俳優ウルリヒ・ミュエの存在感」(国際演劇評論家協会日本センター), 12, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 12-13, 2007/3
- 市川明 「映画『善き人のためのソナタ』——勇気に捧げる人間讃歌」読売新聞夕刊, 読売新聞社, 2007/3/20
- 市川明 「ブレヒトの教育劇の上演」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 11, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 2-3, 2006/12
- 市川明 「ベルリンのブレヒト祭——『肝っ玉おっ母とその子どもたち』戦争の世紀 強烈に再現」読売新聞夕刊, 読売新聞社, 2006/9/21
- 市川明(劇評) 「『ど』/黒テント——ティーカップの湯気から浮かび上がる政治の季節」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 10, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 8-9, 2006/9

### 3-4. 口頭発表

市川明 「ギターを爪弾くブレヒト——若き詩人とサブカルチャー」大阪大学独文学会総会、大阪大学独文学会、大阪大学、2007/12

市川明 「ベルリン演劇祭2007とベルリンの演劇」ベルリンの演劇を語るタベ、大阪ドイツ文化センター、2007/12

Ichikawa, Akira, Jan Knopf, Joachim Lucchesi 他 “Du musst die Führung übernehmen! – “Die Mutter” von Brecht/Eisler” 日本独文学会・ブレヒト国際シンポジウム: Musik und Bühne bei Bertolt Brecht, 日本独文学会、大阪市立大学、2007/10『日本独文学会・研究発表要旨』2007年-秋季研究発表会, p. 7, 2007/10

Ichikawa, Akira, Rhie Won-Yang, Felix Knopp 他 “Das Opium der Verwandlung – Ein Versuch, das Stück “Der Gute Mensch von Sezuhan” als Komödie zu spielen” 韓国ブレヒト学会・ブレヒト国際シンポジウム: Lehrstücke von Brecht, 韓国ブレヒト学会、密陽ブレヒト劇場、2007/8『韓国ブレヒト学会報』シンポジウム特集号, pp. 17-28, 2007/8

市川明, 鈴木雅恵, 与那覇晶子 他 『アンティゴネ』変奏——ソフォクレスからブレヒト、フガードへ』日本演劇学会・近現代演劇研究会・研究集会: 伝統演劇とモダニティ, 近現代演劇研究会, 沖縄県立芸術大学, 2007/3

市川明, Jan Knopf, Joachim Lucchesi 他 『「あとから生まれてくるものたちへ」——ブレヒトとハンス・アイスラー』阪神ドイツ文学会・ブレヒト国際シンポジウム: Rückkehr zur Lyrik – Brechts Gedichte als Lieder, 阪神ドイツ文学会、大阪大学、2006/12『ドイツ文学論叢』49, p. 99, 2007/12

市川明 「ブレヒトの生涯」ブレヒト没後 50 年・ドイツ演劇祭、前夜祭:ブレヒトのタベ、演劇創造集団ブレヒト・ケラー、谷町劇場、2006/7

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市川明, 浅岡泰子, 宇佐美幸彦 他 マックス・ダウテンダイ賞, 東京ドイツ文化センター, 2003/3

市川明 ドイツ語学文学振興会奨励賞, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 1982/4

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:市川明

課題番号:17320049

研究題目:ブレヒトと音楽—演劇学と音楽学の視点からの総合的研究

研究経費:2006 年度 直接経費 2,900,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 4,500,000 円 間接経費 1,350,000 円

研究の目的:

文学・演劇研究者と音楽関係者のコラボレーションにより、ブレヒトの詩、戯曲におけるテキストと音楽の関係を探る。従来のドイツ文学・演劇研究でまったく研究されてこなかったブレヒトと音楽の関係に光をあて、ブレヒトと彼のパートナーである作曲家との共同創作の実態を解明する。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本演劇学会・理事	2006 年 4 月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・機関誌『ひろの』編集委員	2006 年 4 月～現在に至る
大学入試センター・ドイツ語部会長	2006 年 4 月～2007 年 3 月
大学入試センター教科科目第一委員会委員	2005 年 4 月～2007 年 3 月
ドイツ語学文学振興会・評議員	2004 年 4 月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター・演劇批評誌『シアターアーツ』編集委員	2004 年 4 月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター関西支部・演劇評論誌『act』発行人	2004 年 4 月～現在に至る

演劇創造集団ブレヒト・ケラー・代表幹事  
国際演劇評論家協会日本センター・関西支部長  
阪神ドイツ文学会・幹事

2001年12月～現在に至る  
1996年4月～現在に至る  
1994年4月～2008年3月

## 4. 永田 靖 教授

1957年生。1981年、上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年、明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から大阪大学文学部助教授。2004年から現職。専攻：演劇学(ロシア演劇史・近代演劇理論)。

### 4-1. 論文

永田靖 「パフォーマンスの介入——メイエルホリド演出『スペードの女王』第1場～第2場をめぐる」、pp.19-31, 飯倉洋一編『テキストの生成と変容』(広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書), 2008/3

永田靖 「文化に抗う——玉三郎、オ・テソク、劇団ぐるみ座」『PROBE』Vol.2 北方圏学術情報センター, pp. 41-44, 2008/2

Nagata, Yasushi, “Establishing a modern-traditional theatre—a case study of Japanese regional theatre”, *Modernity and Tradition in East Asia*, Korean Theatre Study Association, pp. 67-72, 2007/5

나가타 야스시 「새로운 가족에 오래된 연극성-일본근대연극에서 가족의 초상」, 『연극포럼』, 한국예술종합학교 연극원, pp.193-209, 2007 (永田靖, 「新しい家族に古い演劇性——現代日本演劇における「家族の肖像」」, 『演劇フォーラム』, 韓國藝術綜合學校演劇院.)

永田靖 「演劇学の概説、あるいは人文学的配置」『演劇学論集』(日本演劇学会), 44号, 日本演劇学会, pp. 131-144, 2006/11

Nagata, Yasushi, “Touring Practice, or Theatre as Contact Zone” 『演劇学論叢』Vol.8, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp. 213-220, 2006/8

### 4-2. 著書

永田靖他(共訳) 『演劇論の変貌』論創社, pp. 108-143, 2007/11

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「劇団「ぐるみ座」のこと」『ACT』国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 12-13, 2007/12

永田靖 「そこにしかない演劇」『PROBE』Vol.1, 浅井学園大学北方学術情報センター, pp. 53-56, 2007/2

永田靖 「旅の演劇」『ACT』10, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2006/8

永田靖 「ソウルで考えたこと」『ACT』国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2006/5

### 4-4. 口頭発表

永田靖他「演劇から映画へ——その歴史的考察」:演劇から映画へ——その歴史的考察, 早稲田大学 GCOE, 早稲田大学, 2008/3

Nagata, Yasushi “Sharing tradition in Japanese contemporary theatre”, National Museum of Singapore, 2008/3

Nagata, Yasushi “Preservation and Innovation; on Some Trends of Contemporary Japanese Theatre”, Traditional Theatre. Modern Manifestation 2008, The Chinese Opera Institute, National Museum of Singapore, 2008/3

永田靖 「現代ロシア演劇のいくつかの言説について」:ロシアという表現・言論空間の軌跡と現在, ロシア東欧学会・JSSEES 合同全国大会, 大阪大学, 2007/10

永田靖他 『「ぐるみ座の半世紀」展にちなんで——その活動と資料について』近現代演劇研究会, 大阪大学, 2007/10

Nagata, Yasushi “Performing national identity or performing citizenship?”:Conference ‘National Theatre in World Culture’, Alexandrinsky Theatre, 2007/9

永田靖 「チェーホフの一幕物と劇」ぶんげい演劇工房学芸講座, 京都府立文化芸術会館, 2007/9

永田靖 「ロシア・アヴエンギャルドの美術と演劇」:舞台芸術の世界——ディアギレフのロシアバレエと舞台デザイン」展記念講演,

国立京都近代美術館, 国立京都近代美術館, 2007/7

永田靖, 井上理恵 「和田精と築地小劇場の音」日本演劇学会全国大会:演劇の耳-声、音、そして音楽, 日本演劇学会, 大手前大学, 2007/6

Nagata, Yasushi “Establishing a modern-traditional theatre— a case study of Japanese regional theatre,”Annual Conference : Modernity and Tradition in East Asia, Korean Theatre Study Association, SangmyungUniversity, Cheonan. Korea., 2007/5

永田靖他 「教育上演の課題と展望——札幌、ソウル、大阪」舞台芸術ワークショップ:パネルセッション, 北方圏学術情報センター, 北翔大学, 2007/5

永田靖, 椋平淳, 出口逸平 「伝統演劇と Modernity 総括セッション」近現代演劇研究会沖縄集会, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 沖縄県立芸術大学, 2007/3

永田靖 「老いとリアリズムの演技」老いと文化, 慶応義塾大学身体医文化論研究会, 慶応義塾大学, 2007/3

永田靖 「テキストとしての演出台本——スタニスラフスキイ演出台本『かもめ』を中心に」広域文化表現論「テキストの生成と変容」第10回研究会, 大阪大学文学研究科広域文化表現論専攻「テキストの生成と変容」, 大阪大学, 2006/12

Jonah Saltz, 永田靖 「インターカルチュラリズムの演劇再考——ユージェニオ・バルバ演出オディン劇場『Ur-Hamlet』をめぐって」近現代演劇研究会12月例会, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 大阪大学, 2006/12

Nagata, Yasushi “A Cuckoo and the Atomic Bomb—How to meet the Asian Modern Theatre”International Federation for Theatre Research (FIRT) 15th World Congress., International Federation for Theatre Research, Helsinki University, 2006/8

Nagata, Yasushi, Janelle Rainelt, Marvin Carson, Global vs Local. Round Table Chair, International Federation for Theatre Research (FIRT) 15th World Congress., International Federation for Theatre Research (FIRT), Helsinki University, 2006/8

永田靖 「演じられる美——蜷川幸雄インタビュー」大阪外国語大学司馬遼太郎記念学術講演会, 大阪国際交流センター, 大阪外国語大学, 2006/7

永田靖 「藝術の変貌——藝術学関連学会連合公開シンポジウムをめぐって」芸術とコミュニケーション第1回研究会, 芸術とコミュニケーション研究会, 大阪大学, 2006/6

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:永田靖

課題番号:19520100

研究題目:ロシアにおける日本・朝鮮演劇の影響及び展開過程の研究

研究経費:2007年度 直接経費 1 300 000 円 間接経費 39 000 円

研究の目的:

グローバル化の中での演劇史学の再編と「アジア」演劇の言説空間の再検討という問題意識を持ちながら、ロシアにおける日本演劇と朝鮮演劇の影響関係と展開過程を研究する。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会・国際版紀要 ICONICS 編集長	2006年4月～現在に至る
International Federation for Theatre Research・Executive Committee	2004年11月～現在に至る
日本演劇学会・理事	2002年4月～現在に至る
日本演劇学会・事務局長	2002年4月～現在に至る
日本映像学会・理事	2002年4月～現在に至る

日本映像学会関西支部・幹事	2002年4月～現在に至る
日本映像学会・紀要『映像学』及び国際版紀要ICONICS編集委員	2002年4月～現在に至る
日露演劇交流推進会議・理事	2002年3月～現在に至る
日本演劇学会近現代演劇研究会・事務局	2000年12月～現在に至る

## 5. 伊東 信宏 准教授

1960年京都生れ。大阪大学文学部卒業，同大学院博士課程単位修得退学。文学修士。リスト音楽院，ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所などに留学。1993年より大阪教育大学助教授。2004年4月より大阪大学大学院文学研究科助教授。2006年4月より現職。専攻：音楽学、民俗音楽研究。

### 5-1. 論文

- 伊東信宏 「バルトーク《44の二重奏曲》第10曲『ルテナの歌』の生成プロセス」飯倉洋一編『テキストの生成と変容』大阪大学大学院文学研究科文化表現論講座共同研究成果報告書，pp.19-31，2008/3
- 伊東信宏 「批評、プロデュース、聴衆：民俗文化のエコロジーは可能か？」徳丸吉彦、ほか3名『世界音楽の本』岩波書店，pp. 225-230，2007/12
- 伊東信宏 「中・東欧民俗音楽研究のための序説」『インターフェイスの人文科学研究報告書』第7巻，pp. 17-26，2007/3
- 伊東信宏 「「粉挽き場」というトポス：《美しき水車小屋の娘》前史」長野順子、小田部胤久『交響するロマン主義』晃洋書房，pp. 135-156，2006/6

### 5-2. 著書

- 伊東信宏(編)『ピアノはいつピアノになったか?』大阪大学出版会，2007/3
- 山崎孝，伊東信宏(共編)『バルトーク集』4、5、6巻，春秋社，2006/11

### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 伊東信宏(音楽評) 「アンドラーシュ・シフ ピアノリサイタル」『朝日新聞』38059，2008/3
- 伊東信宏(音楽評) 「フロントン指揮 シュツットガルト放送交響楽団」『朝日新聞』38031，2008/2
- 伊東信宏(音楽評) 「鈴木俊哉リコーダーリサイタル」『朝日新聞』38010，2008/1
- 伊東信宏(音楽評) 「バッハ・コレギウム・ジャパン「エジプトのイスラエル人」」『朝日新聞』37954，2007/11
- 伊東信宏(音楽評) 「ヴェルター・ヴォ・カルテット」『朝日新聞』37968，2007/11
- 伊東信宏(曲目解説) 「東京シンフォニエッタ第21回定期演奏会(リゲティ「チェロ協奏曲」ほか) 曲目解説」『東京シンフォニエッタ第21回定期演奏会』37911，2007/10
- 伊東信宏(音楽評) 「新国立劇場「ばらの騎士」」『朝日新聞』37793，2007/6
- 伊東信宏(舞台評) 「生きることは傷つくこと：アラン・ブラテル・バレエ団「聖母マリアの祈り」」『朝日新聞』37763，2007/5
- 伊東信宏(音楽評) 「ガムラン・コモンズ」『朝日新聞』37716，2007/4
- 伊東信宏(音楽評) 「新国立劇場「西武の娘」」『朝日新聞』37737，2007/4
- 伊東信宏(音楽評) 「マリオ・ブルネロ「無伴奏チェロ&・・・」」『朝日新聞』37673，2007/2
- 伊東信宏(音楽評) 「ハンガリー国立ブダペスト・オペレッタ劇場「こうもり」」『朝日新聞』37631，2007/1
- 伊東信宏(音楽評) 「コンチェルト・コペンハーゲン」『朝日新聞』37645，2007/1
- 伊東信宏(音楽評) 「ファビオ・ルイジ指揮 ウィーン交響楽団」『朝日新聞』37568，2006/11
- 伊東信宏(音楽評) 「ゲヴァントハウス・バッハ・オーケストラ」『朝日新聞』37456，2006/7
- 伊東信宏(追悼文) 「ジェルジ・リゲティを悼む」『朝日新聞』2006年6月26日朝刊，2006/6
- 伊東信宏(音楽評) 「バルトーク弦楽四重奏団「さよならコンサート」」『朝日新聞』37428，2006/6
- 伊東信宏(曲目解説) 「大阪フィルハーモニー交響楽団第400回定期演奏会(細川俊夫「旅人」ほか)」『大阪フィルハーモニー交響楽団第400回定期演奏会』37442，2006/6

伊東信宏(音楽評)「P・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマー・フィル」『朝日新聞』2006年5月25日夕刊, 2006/5

#### 5-4. 口頭発表

伊東信宏 「バルトークの民謡調査、民謡研究、民謡編曲:《44の二重奏曲》の一次資料調査から」教育研究フォーラム, 大阪大学文学研究科, 2007/11

伊東信宏 「ブラームスの小品をめぐって」, 西脇市立音楽ホール「アピカホール」, 2007/5

伊東信宏 「謀略家としてのハイドン」:ピアノの歴史, 横浜みなとみらいホール, 2007/1

伊東信宏 「チャルガに夢中:ブルガリアにおけるポップ・フォークの位置」人間文化研究機構連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」研究会, 人間文化研究機構連携研究, 2006/12

Ito, Nobuhiro “From folk song arrangement to imaginary folk ritual: two examples from compositions of postwar Japan” Special Lecture, University of Ljubljana, Musicology Department, 2006/9

伊東信宏 「頑固者とひねくれ者:バルトークとラヴェルをめぐって」中之島国際音楽祭, 大阪市, 2006/9

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊東信宏 吉田秀和賞, 水戸芸術振興財団, 1997/11

伊東信宏 アリオン賞音楽評論部門奨励賞, アリオン音楽財団, 1990/1

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2007年度、研究助成、助成金獲得者:伊東信宏

助成金名:大学教育の国際化推進プログラム(海外先進研究実践支援)

研究題目:音楽史学と民族音楽学との統合的研究

助成団体名:文部科学省

助成金額:2007年度 直接経費 2,977,000円

研究の目的:

本事業は、民族音楽学と音楽史研究との交点にあたる作品(具体的にはバルトークの民謡編曲作品)を多角的に分析、検討することによって、これら二つの分野の間にある断絶を媒介することを目指している。その資料は、冷戦時代、東西陣営に分断して保管されており、その後うまく協調できていない。今回の研究では、ブダペストとバーゼルに保管されている資料を比較し、それを統合することによって、国際的なバルトーク研究に新しい知見をもたらすことが期待される。

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本音楽学会・関西支部長	2007年4月～現在に至る
文化庁民俗芸能フェスティバル企画委員	2007年4月～現在に至る
民族藝術学会・理事	2006年4月～現在に至る
アリオン音楽財団・アリオン賞選考委員	2006年4月～現在に至る
サントリー音楽財団・専門委員、音楽賞選考委員	2001年4月～現在に至る
朝日新聞・音楽懇話会委員	2000年4月～現在に至る

## 6. 正木 喜勝 助教

1978年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。2007年より現職。専攻:演劇学、日本近代演劇史。



## 6-1. 論文

---

なし

## 6-2. 著書

---

なし

## 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

正木喜勝(翻訳)「ジョルジュ・ポルティ「三十六の劇的局面」」『演劇学論叢』大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 195-200, 2008/3

正木喜勝(解説)「ジョルジュ・ポルティ「三十六の劇的局面」」『演劇学論叢』大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 190-195, 2008/3

正木喜勝(劇評)「「陰画」としての未来像——劇団太陽族『越境する蝸牛』」国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部(編)『act』4-2, 国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部, pp. 4-5, 2007/8

正木喜勝(劇評)「岸田國士近代劇の新鮮さ」『大阪日日新聞』20245, ザ・プレス大阪, p. 9, 2007/7/24

正木喜勝(劇評)「断ち切られる三つの「関係」——桃園会第32回公演『月ト象ノ庭、或いは宵の鳥、三羽』」国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部(編)『act』4-1, 国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部, pp. 2-3, 2007/4

正木喜勝(劇評)「国歌斉唱と自己不確定——上品芸術劇団『まじめにともだちを考える会の短い歴史』——」国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部(編)『act』3-4, 国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部, pp. 4-5, 2007/1

正木喜勝(劇評)「狂気と挫折の牧歌劇——兵庫県立ピッコロ劇団『ほらんばか』——」国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部(編)『act』3-3, 国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部, pp. 4-5, 2006/8

正木喜勝(劇評)「演劇をとおして演劇を考える——A級 MissingLink『決定的な失策に補償などありはしない』——」国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部(編)『act』3-2, 国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部, pp. 10-11, 2006/5

## 6-4. 口頭発表

---

正木喜勝「プロレタリア演劇における歌舞伎」近現代演劇研究会 12 月例会, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2007/12

永田靖, 正木喜勝, 横田洋他「「くるみ座の半世紀」展にちなんで——その活動と資料について」近現代演劇研究会 10 月例会, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2007/10

正木喜勝「村山知義の舞台美術とその理念——『心座』前期の作品を中心に——」科学研究費補助金(基盤研究(B))「近代舞台美術に関する視覚文化的研究」研究打合せ, 科学研究費補助金(基盤研究(B))「近代舞台美術に関する視覚文化的研究」, 東京大学, 2006/10

## 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

民族藝術学会・委員

2007年4月～現在に至る

## 2-23 美術史学

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

先史美術から現代美術にいたるまで、絵画、彫刻はもとより、建築や工芸、デザイン、カリグラフィーも含めたあらゆる造形芸術を研究対象とし、その歴史学的研究を行っている。主として芸術理論に関する研究を行う芸術学とは密接な関連を保っているが、美術作品に関する諸問題を作品に即して実証的に解明し、あるいは美術作品が生成され、受容される歴史的背景を考究することに美術史学の特色がある。また、そのために考古学、歴史学(文献史学)、宗教学、文学、民俗学など、さまざまな隣接領域と関わりをもち、領域横断的に研究が進められていることも近年の美術史学の大きな特色である。

美術史学専修は、芸術史講座のスタッフで運営されており、日本・東洋美術史と西洋美術史の二つの研究室から構成されている。日本・東洋美術史スタッフの専門領域は仏教美術、日本絵画、西洋美術史スタッフのそれは近現代美術・建築、キリスト教美術、中南米美術であるが、その他の地域、時代、ジャンルの教育に関しては非常勤講師を招聘して補っている。学内における授業のほか、美術館、寺社などにでかけて作品を見学する学外演習にも力を入れ、さらに国内外を問わず、作品研究のためのフィールドワークを奨励している。また、コンピューターによる画像処理や文献データベースの検索、写真やビデオによる画像の収集にも力を入れている。なお、学内の総合学術博物館と連携して研究プロジェクトを推進しているほか、社会的活動としては美術展覧会の企画運営、種々の美術作品調査、鑑定などに協力し、また文化財保護、市史編さん事業などにも協力している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4(うち兼任 1) 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：藤村 昌昭、奥平 俊六、囿府寺 司、橋爪 節也(兼任)

准教授：藤岡 穰、岡田 裕成

助教：大野 陽子

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
53	13	20	0	0	0	0	3	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	17	10	0	0	0
'07	13	6	3	1	3
小計	30	16	3	3	4

## Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

### 1. 博士学位授与

#### 1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'06	0	0	0
'07	1	0	1
計	1	0	1

#### 1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

高 廷銀「クシヤン朝の仏教彫刻に関する研究」2008/2

主査：藤岡穰 副査：奥平俊六、泉万里

### 2. 大学院生等による論文発表等

#### 2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'06	2	2	0	0	1	5
'07	1	4	0	0	4	9
計	3	5	0	0	5	14

#### 2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'06	1	3	8	0	0	12
'07	1	10	4	3	1	19
計	2	13	12	3	1	31

## 2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

### (1)論文

#### 【2006年度】

古谷優子「石山寺蔵涅槃図考」『美術史』161, pp. 133-145, 2006/10

鈴木雅子「長谷寺蔵「阿弥陀聖衆来迎図」——色紙形の讃をめぐって——」『美術史』161, pp. 164-183, 2006/10

金子岳史「大宋屏風と馬形障子」『待兼山論叢』40 美学篇, pp.21-44, 2006/12

森實久美子「義湘絵についての一考察——宋代絵画の受容をめぐって——」、『フィロカリア』24, pp.61-85, 2007/3

山口隆介「笠置寺の仏像の内「毘沙門天像」作品解説」科学研究費補助金基礎研究(B)17320039 研究報告書, 小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開 Vol. 1——講演録・随心院聖教調査報告・笠置寺調査報告, pp. 108-113, 研究代表者 荒木浩, 大阪大学, 2006/3/6

#### 【2007年度】

田中竜也「ウォルター・クレインと日本美術——資料研究序論」『待兼山論叢』41, 美学篇, pp.27-52, 2007/12

萬屋健司「ヴィルヘルム・ハマスホイの室内画——その写真性に関する考察——」『フィロカリア』25, 2008/3

林羊歯代「フラ・ジョヴァンニ・ダ・ヴェローナに関する研究——ローディ大聖堂内陣祈祷席」、『愛知産業大学紀要』第16号, pp. 47-52, 2008

三田覚之「技法から見た天寿国繡張」『フィロカリア』225, pp.67-98, 2008/3

三田覚之「天寿国繡張の原形と主題について」『美術史』164 冊, pp.265-282, 2008/3

山口隆介「随心院所蔵彫刻に関する調査報告」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開——Vol. III』(科学研究費補助金基盤研究(B)17320039 研究報告書), pp.286-298, 2008/3

三田覚之「随心院所蔵絵画に関する調査報告」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開——Vol. III』(科学研究費補助金基盤研究(B)17320039 研究報告書), pp.245-285, 2008/3

古谷優子「【新資料紹介】笠置寺所蔵仏涅槃図」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開——Vol. III』(科学研究費補助金基盤研究(B)17320039 研究報告書), pp.230-232, 2008/3

郷司泰仁「笠置寺本『十卷抄』諸天上について」荒木浩編『小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開——Vol. III』(科学研究費補助金基盤研究(B)17320039 研究報告書), pp. 220-229, 2008/3

### (2)口頭発表

#### 【2006年度】

萬屋健司「ヴィルヘルム・ハマスホイの室内画——その写真性に関する考察——」待兼山藝術学会, 大阪大学, 2006/4/8

萬屋健司「ヴィルヘルム・ハマスホイの室内画——その写真性に関する考察——」第59回美術史学会全国大会, 名古屋大学/名古屋市, 2006/5/26

森實久美子「華嚴海会諸聖衆曼荼羅についての一考察」Postgraduate Workshop in Japanese Art History (St.Gabriel's Retreat & Conference Centre), 2006/6/19

古谷優子「京都・万寿寺所蔵涅槃変相図について」物語/絵画研究会, 千葉市美術館, 2006/8/29

#### 【2007年度】

青木智史「唐三彩研究における TL 法を用いた多角的アプローチ」日本情報考古学会第23回大会, 奈良先端科学技術大学院大学, 2007/3/24

青木智史「TL 法を用いた陶磁器真贋判定法——最近の発展と課題——」日本文化財科学会 24 回大会, 奈良教育大学, 2007/6/2

青木智史「考古資料における三次元デジタルアーカイブの博物館展示等への活用」日本文化財科学会第24回大会, 奈良教育大学, 2007/6/2-3

金子岳史「中世における騎馬人物図をめぐって」第17回待兼山藝術学会, 大阪大学, 2007/4/7

金子岳史「はね馬と隨身」第60回美術史学会全国大会, 筑紫女学園大学, 2007/5/26

城市真理子「室町水墨画の「煎茶」——文人図様をめぐって——」歴史美術史懇話会, 大阪市立美術館, 2007/12/23

城市真理子「承天閣美術館所蔵「沙鷗図」について」歴史美術史懇話会,大阪市立美術館,2007/4/22  
 城市真理子「陸亀蒙図について」煎茶研究会,野村美術館,2007/9/24  
 森實久美子「華嚴海会諸聖衆曼荼羅についての一考察」南都文化研究会,春日大社,2007/6/10  
 森實久美子「華嚴海会諸聖衆曼荼羅の図像とその使用について」物語／絵画研究会,大阪大学,2007/9/29  
 森實久美子「華嚴海会諸聖衆曼荼羅についての一考察」美術史学会西支部例会,関西学院大学,2007/11/17  
 古谷優子「The Death of the Buddha Shakyamuni and Related Events Owned by Manjuji, Kyoto」Postgraduate  
 Workshop in Japanese Art History,U.S.A,2007/12/2  
 三田覚之「天寿国緞帳の原形と画題について」美術史学会西支部例会,神戸大学,2007/3/17  
 山口隆介「定慶様菩薩像の再検討」古画研究会,大阪大学,2007/5/13  
 山口隆介「定慶様菩薩像の再検討」第60回美術史学会全国大会,九州国立博物館,2007/5/27  
 松野早恵「オランダ近代建築・都市計画史におけるヘット・アムステルダムス・リセウム校舎の意義」ユトレヒト大学,  
 全国研究修士課程定例会,2007/4/13  
 松野早恵「H・P・ベルラーへのアムステルダム市南部拡張計画(1)——初期の建設計画におけるユートピア思想の実践」  
 福岡大学、建築学会2007年度大会(九州)学術講演会,2007/8/29  
 國吉貴奈「マックス・エルンスト作品における科学イメージの使用について——《風景》(S/M612)と《カストルとポリ  
 ュシオン》(S/M623)の例を中心に」第105回日仏美術芸術学会例会,2007/7/7

### (3)その他(書評・翻訳など)

【2007年度】

城市真理子「伝周文筆 沙鷗図 解説」『國華』平成20年1月 國華社

## 3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

池上裕子 美術史学会賞 美術史学会 2006年度

## 4. 日本学術振興会研究員採択状況

2006年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2007年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

## 5. 大学院生・学部学生等の留学

2006年度 学部:0名 大学院:6名 (計6名)

2007年度 学部:0名 大学院:6名 (計6名)

## 6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

大野陽子 博士後期課程,大阪大学大学院文学研究科,助教,2008/4

池上裕子 博士後期課程,大阪大学人間科学研究科,特任助教,2008/4

## 7. 専門分野出身の高度職業人

(2006年度～2007年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2006年度:0名 2007年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 1名

## 8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2006年度：0名 2007年度：0名

## 9. 刊行物

2006年度 『若山映子先生ご退職記念論文集』西洋美術史研究室, 2007/3

## 10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

講演会 ズィーヴァ・アミシャイ・マイセルズ氏招聘	2006年7月
古画研究会	2007年5月13日/2008年3月2日
物語/絵画研究会	2007年9月29日
南都文化研究会	2007年6月10日

## 11. 専門分野主催の研究会等活動状況

MCE 研究会 2004年度～2006年度

## 12. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

### 12-1. 教育活動

美術史学を専門とする講座としては日本で最大規模をほこるスタッフによる授業に、さらに非常勤講師の授業を加え、美術史学全般にわたる偏りのない授業を実施している。現教員(教授、助教授)は全員、専門領域が異なるため多彩な授業が可能で、現教員では手薄な領域については非常勤講師で補ってきた。教員の出身は4大学にわたり、いわゆる「純血率」の高さによる弊害がなく、逆に幅広い人的ネットワークを保持し、多様な教育方法の導入を可能にしていることも大きな特色である。なお、2005年度末をもって西洋美術史学教授(イタリア・ルネサンス美術史)が退職し、2007年度からは新たにスペイン・中南米植民地美術を専門領域とする准教授が着任した。また、大阪外国語大学との合併にともない、2007年10月には、イタリア言語文化史・記号論を専門とする教授が美術史講座に配置換えとなった。同教授は2008年度から西洋美術史のカリキュラムを分担する。2007年度をもって総合学術博物館との兼任教授1名(日本中世絵画史)が退職し、今後その後任人事が進められる予定である。

授業に関しては、美術史に関する講義、美術作品に関わる文献を講読する演習のほか、学外における作品の見学演習を実施している。毎週一日をかけて美術館、博物館の展覧会や寺社の文化財などを見学し、レポートを課すことにより学部生の作品記述能力の向上に資するとともに、院生にとっては研究課題の発見などに大きな効果をあげている。また、論文作成指導については、カリキュラムの演習の他、オフィスアワーやその他の時間に個別にも実施しており、きめ細かな指導を実現している。これに加え、西洋美術史分野にあつては、論文作成のための現地調査を奨励しており、博士前期課程大学院生の場合、修士論文作成前に少なくとも一ヶ月程度、ないしは数ヶ月以上の期間、現地調査を行うことが定着してきた。博士後期課程の院生には常時2、3名以上の留学生がおり、その中には博士論文作成中の者もいる。一方、日本・東洋美術史分野の学生には、論文作成のための作品調査はもとより、社会的活動の一環として行っている近隣の博物館施設との連携、市史編さん事業や文化財行政に関わる作品調査などに継続的に参加させ、調査方法を実地指導している。

21世紀COE「インターフェイスの人文学」プログラムの一環として設置されたメディアラボは、2007年度から文学研究科のもとで運営されることとなり、芸術史講座はその設置、運営に深く関わってきた。ここでは、メディアスタッフによる授業を通じて学生にデジタル・メディアのより高度な利用法を学ぶ機会を提供している。また、2006年度までおこなわれた同プログラムにおいては、別に「モダニズムと中東欧の芸術」MCE研究会を主催し、これを通じて若手研究者の養成に努めた。



2005年度に「魅力ある大学院教育のためのイニシアティブ」(IAE)に採択された「ソーシャルネットワーク型人文学教育」の一環として、諸芸術研究者、芸術関連機関に関わる人々のアーツ・ネットワーク(PAN, Praxis for Arts Network)を設立したが、2006年度までの活動を通して、学生たちに大きな刺激を与えた。また、社会と関わるこうした活動の効果もあって、期間中、美術館の学芸員職への就職者は3名(非常勤1名)を数え、さらに、国立国際美術館などでのインターンシップに参加する学生も着実に増えている。在学中での学芸員職への就職者も2名(非常勤1名)を数える。

最後に、講座自体の問題ではないが、芸術史講座の授業において必要不可欠な問題として、講義室、演習室の充実に向けた取り組みがある。現在、視聴覚機器を利用できる教室が不足しており、機器類の老朽化が目立つ教室もある。今後は一層、教室および機器類の整備のために働きかけを行っていききたい。また、学生の利用できる研究室が著しく狭隘であることも大きな問題である。学生の研究スペースは実質的に約40㎡しかなく、他の国立大学の美術史学専門分野の状況にくらべてきわめて狭隘である。解決策の見出しがたい問題であるが、改善のために粘り強く働きかけていきたい。

## 12-2. 研究活動

教員(教授、助教授、助教)各人については、意欲的に研究活動を継続している。教員全員は、ほぼ継続的に科学研究費によるプログラムを遂行してきた。2006年度、2007年度ともに教員7名のうち4名が代表者として科学研究費を受託し、その研究成果については口頭発表、論文、報告書など種々のかたちで着実に公表してきた。また、PD1名が日本学術振興会研究員に採択されている。

この2年間では、若山映子教授の定年退官を記念して、西洋美術を専門領域とする教員と、卒業生、在学中の大学院生が論文集を刊行したことも大きな成果である。所属教員が事業推進担当者として参加した21世紀COE「インターフェイスの人文学」プログラムは2006年度に終了したが、その最終報告書の刊行にも大きな役割を果たした。

学生の研究活動も着実に成果をあげている。とりわけ、2004年度の論文発表のひとつである池上裕子の『美術史』掲載論文が2006年度の美術史学会賞を受賞したことは特筆される。研究成果の発表にも積極的な姿勢がみられ、過去2年間に比べると口頭発表や作品解説等の本数が格段に増加した。もともと、『美術史』や外国雑誌など、厳格なレフリー制を採用している雑誌への掲載数、博士論文の提出数なども増加している。

学会活動については、奥平教授、囀府寺教授、藤岡准教授が美術史学会の常任委員を務め、学会誌の編集事務局を引き受けた。さらに民族芸術学会事務局、種々の研究会の幹事を務めるなど、さまざまな形で貢献してきた。囀府寺教授が大阪大学COEプログラム「インターフェイスの人文学」の事務局長を務めてきたことも、これに準じる貢献と言えよう(2006年度まで)。また同教授は、2007年度から始まったGCOEの事業推進担当者・運営委員を務めている。

懐徳堂記念会の主催する講演、講座のほか、各種文化講座、美術展覧会の監修、カタログ執筆、美術館での講演活動など、さまざまな形で一般市民向けの教育、普及活動も行い、市史編纂事業などにも協力してきた。

## Ⅲ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 藤村 昌昭 教授

1947年生。京都大学大学院修士課程イタリア語学・文学専攻修了。文学修士(京都大学、1975)。大阪外国語大学助手、同講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:イタリア言語文化史/記号論。

#### 1-1. 論文

なし

#### 1-2. 著書

Fujimura, Masaaki(監修), *デイリー日伊英3か国語会話辞典*, 三省堂, 360p., 2007/1

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

藤村昌昭 「物語の時空間とその叙法についての考察——19世紀のテキストにおける「伝統」と「革新」——」イタリア学会大会, イタリア学会, 東京大学, 2007/10

藤村昌昭 「イタリアの魅力」阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 尼崎市立女性センター「トレビエ」, 2007/10

藤村昌昭 「明治とイタリア」阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 尼崎市立女性センター「トレビエ」, 2007/1

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日伊協会「イタリア語スピーチ・コンテスト」審査委員長	2005年4月～現在に至る
日本イタリア京都館・評議員	2004年7月～現在に至る

## 2. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程1984年単位取得退学。文学修士。大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て1997年現職。日本文化研究センター共同研究員、京都国立博物館調査員、東北大学、名古屋大学、岡山大学などの講師を歴任。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

#### 2-1. 論文

奥平俊六, 赤木美智, 吉井奈津江(共編著)「大庄屋三木家の絵画」大阪大学懐徳堂センター『懐徳堂センター報2007』大阪大学懐徳堂センター, pp. 3-13, 2007/3

奥平俊六 「桃山風俗画の誕生と展開」(共著)『別冊太陽』145, 平凡社, pp. 76-83, 2007/3

奥平俊六 「二人の山雪——荒磯のテラスと桃源郷」愛媛県立美術館「松本山雪——桃山と江戸のはざまに」愛媛県立美術館, pp. 4-7, 2007/2

#### 2-2. 著書

奥平俊六 『カブキモノと初期歌舞伎の図像研究』91p., 2008/3

#### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六(作品解説)「鶏図 伊藤若冲筆」『新修茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸』, 茨木市史編さん委員会, pp.187-202, 2008/3

奥平俊六(書評)「隆慶一郎『吉原御免状』」小山泰三『紫明』22, 紫明の会, p. 104, 2008/3

奥平俊六(書評)「岡谷公二著『郵便配達夫シュバルの理想宮』」小山泰三『紫明』21, 紫明の会, p. 100, 2007/9

奥平俊六(展示パネル原稿)「アートでつながる地域と福祉」(支援ネット 2007in丹波), 日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト研究事業」文学・芸術の社会的媒介機能「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」平成19年度「コミュニティ・アート」美術部門, p. 1, 2007/6

奥平俊六(書評)「はたよしこ編著『DNAパラダイス——27人のアウトサイダー・アーティストたち——』小山泰三『紫明』20, 紫明の会, p. 130, 2007/3

奥平俊六「光琳の生きた環境と時代」『市報あまがさき』1484, 尼崎市, p. 5, 2007/1

奥平俊六(書評)「森鷗外の美術展実行委員会編『森鷗外と美術』」小山泰三『紫明』19, 紫明の会, p. 108, 2006/9

## 2-4. 口頭発表

奥平俊六「なぜ乗り物を描くのか? ——アートとコミュニケーションの話」日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト研究事業」、アートキャンプ 2008 プレイベント: コミュニケーションの乗り物へアートと福祉からみる地域社会, 沖縄県立博物館・美術館、アートキャンプ 2008 実行委員会、大阪大学文学研究科, 沖縄県立博物館・美術館, 2007/11

奥平俊六「琳派という流派——絵画と意匠 宗達・光琳・抱一を結ぶもの——」愛光医会, 2007/10

奥平俊六「二人の山雪——江戸初期のく夢見る力」特別展「松本山雪とその時代」記念講演, 愛媛県立美術館, 2007/2

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

奥平俊六 第2回国華賞, 国華社, 1990/10

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2007年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 奥平俊六

課題番号: 17520079

研究題目: カブキモノと初期歌舞伎の図像研究

研究経費: 2006年度 直接経費 900,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

近世初期風俗画に描かれた、路上のカブキモノおよび初期歌舞伎の舞台上のカブキモノの図像を収集整理し、分析することによって、着衣や身に付ける器物の特色とその意味を明らかにする。たとえば、『駿府記』に言う「狂紋」とは具体的にどのような文様なのか、また舞台上のカブキモノが身に付けるロザリオや聖遺物入れはどの時点でまたどのような理由で用いられるようになったのか、といった問題である。また、カブキモノの「姿型」を、やはり路上と舞台上の両者において比較分析することによって、見得の発生の意味と初期的な展開について考察する。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

社会福祉法人素王会アトリエインカーブ評議員	2006年5月～現在に至る
大和文華館評議員	2005年4月～現在に至る
美術史学会・常任委員	2004年6月～2008年6月
神戸市博物館協議会委員	2003年4月～現在に至る
サンリツ服部美術館評議員	2002年4月～現在に至る
京都国立博物館客員研究員	1999年4月～現在に至る
山口県立美術館収集審査委員	1998年4月～現在に至る

## 3. 園府寺司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren (文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻: 西洋美術史。

### 3-1. 論文

Kodera, Tsukasa, "Hans Ludwig Cohn Jaffé 1915-1984 From the Bildung to the Ethica of De Stijl" 圀府寺司(編)『越境／モダンアート Transboundary /Modern Art』大阪大学 21 世紀 COE「インターフェイスの人文科学」, pp. 69-104, 2007/3

### 3-2. 著書

圀府寺司 『もっと知りたいゴッホ 生涯と作品』東京美術, 80p., 2007/12

圀府寺司(編)『越境／モダンアート Transboundary/Modern art』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」, 127p., 2007/3

圀府寺司, 伊東信宏, 井口壽乃他(編)『モダニズムと中東欧の藝術文化 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書 2004-2006』第 7 巻, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」, 365p., pp.7-14, 2007/1

圀府寺司 『ゴッホ』西洋絵画の巨匠 2, 小学館, 127p., 2006/4

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 3-4. 口頭発表

圀府寺司 「ファン・ゴッホ(キリスト教)対(自然)」招待講演 韓国 弘益大学校(Hong-ik University)ソウル, 2006/11

圀府寺司 「ジャガールのユダヤ性」宇都宮美術館, 2007/3

圀府寺司 「フィラデルフィア美術館を飾る多国籍の巨匠たち」フィラデルフィア美術館展「印象派と20世紀の美術」記念講演会, 京都市美術館, 2007/9

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 Erasmusprijs(Studieprijs) エラスムス研究賞, Stichting Praemium Erasmianum エラスムス財団(オランダ), 1989/2

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 圀府寺司

課題番号: 17320030

研究題目: モダニズムと中東欧の近代藝術に関する国際・学際共同研究

研究経費: 2006 年度 直接経費 2,900,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

従来、研究の乏しかった中東欧の近現代芸術について、中東欧諸国ならびに北米などの研究者と密接な国際共同研究を行い、この地域の芸術ならびにこの地域出身の芸術家、芸術関係者の役割を明確にする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

美術史学会・常任委員

2007 年 5 月～現在に至る

民族芸術学会・理事

1999 年 4 月～現在に至る

## 4. 橋爪 節也 教授

1958年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。1985年4月より東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、

1990年4月より大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室の学芸員(大阪市立美術館学芸員兼務)。1998年4月より2008年3月まで大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。専攻:日本美術史/近世近代絵画史。

#### 4-1. 論文

橋爪節也 「「野獣派」と山本發次郎」河崎晃一『山本發次郎コレクション——遺稿と蒐集品にみる全容——』淡交社, pp. 244-255, 2006/4

#### 4-2. 著書

橋爪節也他(共編著)『博物館・美術館資料でかたる おおさか事典』(小学校副読本)大阪市, 2008/3

橋爪節也他(共編著)『博物館・美術館資料で語る 大阪事典』(中学校副読本)大阪市, 2008/3

橋爪節也他(編著)『大大阪イメージ——増殖するマンモス/モダン都市の幻像』創元社, 2007/12

三井知行, 橋爪節也他(共編)『ニッポン VS 美術 近代日本画と現代美術 大観・栖鳳から村上隆まで』東方出版, 2006/10

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也 「浪花八百八橋 田蓑橋」産経新聞社『産経新聞』産経新聞社, 2008/3

橋爪節也 「美術都市大阪の発見 8——商都の博覧会で開いた美の殿堂——」大阪ガス エネルギー・文化研究所『CEL』78, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, pp. 82-85, 2008/3

橋爪節也(共同制作。大阪・道頓堀戎橋の銘板)「戎橋銘文」2008/3

橋爪節也 「モダン都市 中之島の風景 image 04」京阪電気軌道株式会社『KPRESS』108, 京阪電気軌道株式会社, p. 10, 2008/3

橋爪節也 「大阪心齋橋 大丸呉服店 衣装競似顔双六」大阪春秋編集部『大阪春秋』129, 新風書房, pp. 89-91, 2008/1

橋爪節也 「大阪戦後史の空白——OSAKA ARMY HOSPITAL とマリリン・モンロー——」大阪春秋編集部『大阪春秋』129, 新風書房, pp. 18-23, 2008/1

橋爪節也 「順才橋金太郎町の書林——狂詩集『浪華醉咏』より——」心齋橋研究同人『新菜箸本撰』5, 心齋橋研究同人, pp. 18-23, 2008/1

橋爪節也 「エコール・ド・大坂」日本経済新聞社『もっと知りたい上方文化——過去と現在を訪ねる』日本経済新聞社, 2008/1

橋爪節也 「モダン都市 中之島の風景 image 03」京阪電気軌道株式会社『KPRESS』105, 京阪電気軌道株式会社, p. 10, 2007/12

橋爪節也 「1930年代、大阪モダニズムを《街》の刊行物に読む」大阪春秋編集部『大阪春秋』128, 新風書房, pp. 72-80, 2007/10

橋爪節也 (産経新聞創刊 75 周年記念イベント「ミナミあっちこっちラリー」)「ミナミの歴史と文化、解説」『産経新聞 ミナミあっちこっちラリー情報紙』2007/10

橋爪節也 「モダン都市 中之島の風景 image 02」京阪電気軌道株式会社『KPRESS』102, 京阪電気軌道株式会社, p. 10, 2007/9

橋爪節也 「明治末・大正中期中の大阪画壇再編と北野恒富の闘い」大阪春秋編集部『大阪春秋』127, 新風書房, pp. 47-53, 2007/7

橋爪節也 「普仏戦争略記パノラマ セダンノ戦 解説」大阪春秋編集部『大阪春秋』127, 新風書房, pp. 74-75, 2007/7

橋爪節也 「美術都市大阪の発見 5——繁華街の装飾術——芝居町、モダン道頓堀「街の記憶」へのタイムとラベル」大阪ガス エネルギー・文化研究所『CEL』大阪ガス エネルギー・文化研究所, pp. 78-81, 2007/6

橋爪節也 「絵葉書国人物誌 大正・昭和初期編 北野恒富、上方贅六庵、長谷川貞信」『叢書月刊編集部』叢書月刊『叢書月刊』叢書月刊社, pp. 39-40, 2007/6

橋爪節也 「モダン都市 中之島の風景 image 01」京阪電気軌道株式会社『KPRESS』99, 京阪電気軌道株式会社, p. 10, 2007/6

橋爪節也 「「これは他人ごとではない」——愛しの乙三洞、森田権菊さんに聞く——」心齋橋研究同人『新菜箸本撰』3, 心齋橋



研究同人, pp. 2-7, 2007/1

橋爪節也 「大正十三年七月二日、岸田劉生、乙三洞を訪れること——並びに永見徳太郎のこと」心齋橋研究同人『新菜箸本撰』3, 心齋橋研究同人, pp. 14-15, 2007/1

橋爪節也 「美術都市大阪の発見 2——失われた都市の記憶を求めて——」大阪ガス エネルギー・文化研究所『CEL』78, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, pp. 90-93, 2006/9

橋爪節也 「天明八年、江戸の西洋画士・司馬江漢、浪華の「知」の巨人・木村兼葎堂を訪ねること」心齋橋研究同人『新菜箸本撰』1, 心齋橋研究同人, pp. 9-11, 2006/8

橋爪節也 「明治三十年ごろ、洋画家足立源一郎、少年時代の「おんごく」の思い出」心齋橋研究同人『新菜箸本撰』2, 心齋橋研究同人, pp. 13-15, 2006/8

橋爪節也 「絵葉書国人物誌 明治編 肥田溪楓」徬書月刊編集部『徬書月刊』248, 徬徨社, p. 10, 2006/6

橋爪節也 「絵描きたちの愛したグレート・オオサカ——しかし大阪は美術を愛したか——」上方芸能編集部『上方芸能』160, 上方芸能, pp. 25-27, 2006/6

橋爪節也 (高津宮境内頭彰碑に付設された解説板の原稿)「木谷蓬吟、千種顕彰碑 解説」2006/4

橋爪節也 「カタログの化石が燃えている」『BOOKISH』10, BOOKISHの会, 2006/7

#### 4-4. 口頭発表

橋爪節也, ロバート・キャンベル, 近藤壮 「『浪華郷友録』の聞人と大坂の文人画家の問題——木村兼葎堂を中心として——」国際シンポジウム 東アジアの文人世界: 東アジアの文人世界, 関西大学アジア文化交流研究センター, 関西大学アジア文化交流研究センター, 2008/1(『国際シンポジウム』2008/1)

脇本祐一, 橋爪節也, 荒木美江子他 「大阪ミナミの底力」シンポジウム: 「大阪ミナミの底力」結集フォーラム, 周防町通り活性化委員会, ホテル日航大阪, 2008/1

橋爪節也 「昭和30年代、島之内の8mm映像」資料解説: 8mmフィルム鑑賞会 船場特集, NPO remo/記録と表現とメディアのための組織, 日本基督教団 浪速教会礼拝堂, 2008/1

橋爪節也, 原田平作, 中谷伸生他 「《大大阪》の成立と美術家たち」公開シンポジウム: 視覚都市大阪の美術-近代日本における大阪の役割 世界に向かって何ができるか, 近代大阪美術研究会、大阪歴史博物館, 大阪歴史博物館, 2007/11(『視覚都市大阪の美術-近代日本における大阪の役割 世界に向かって何ができるか』pp. 25-28, 2007/11)

肥田皓三, 長山雅一, 橋爪節也他 「絵の中の昔の建築や風景」公開シンポジウム: 大阪を中心とした郷土建築座談会, 大阪歴史博物館, 大阪歴史博物館, 2007/11(『建築と社会』1032, pp. 54-55, 2008/3)

橋爪節也, 桂春之輔 「落語的なグラフィック」講演: 大阪落語への招待, 大阪市立大学, 大阪市立大学, 2007/6

橋爪節也, 辻本勇, 角野幸博他 「学芸員の立場から美術博物館を思う」1周年記念シンポジウム: 芦屋市立美術博物館の一年を振り返って, 芦屋市立美術博物館, 芦屋市立美術博物館, 2007/5

橋爪節也, 毛利真人 「幻影としての「大大阪」——大正14年、氾濫するイメージに占領されたモダン都市大阪を解体する」座談会: 大阪・アート・カレイドスコープ 2007——大大阪にあいたい——, 大阪府立現代美術センター, 大阪府立現代美術センター, 2007/3

弘本由香里, 樋口須賀子, 橋爪節也他 「おまけ博士を育んだ街——大大阪大正14年、氾濫するイメージに占領されたモダン都市大阪を解体する」座談会: 大阪・アート・カレイドスコープ 2007——大大阪にあいたい——, 大阪府立現代美術センター, 大阪府立現代美術センター, 2007/3

橋爪節也, 高島幸次, 桂春之輔他 「近世大坂の戯画——噺本・戯文など——」シンポジウム: 大阪再発見のつどい, 産経新聞社 上方落語協会, 天満天神繁昌亭, 2007/2

海野弘, 橋爪節也, 南陀楼綾繁他 「海野弘『モダン・シティー再び——1920年代の大阪へ』と私」座談会: 海野弘『私の100冊の本の旅』, 海文堂書店, 海文堂書店, 2007/2

橋爪節也, 有坂道子, 北川博子他 「近世大坂画壇の特質 文人画を中心に」シンポジウム 基調講演とパネリスト: 近世大坂画壇の特質, 芦屋市立美術博物館, 芦屋市立美術博物館, 2006/10

脇本祐一, 橋爪節也, 永井純他 「中之島とは、どのような空間か」公開フォーラム: 中之島パノラマ放談会, 中之島活性化委員会,



国立国際美術館, 2006/10

橋爪節也, 吉田知加, 後藤清司他「大阪市立近代美術館建設の経緯について」公開シンポジウム: 大学と博物館を結ぶ9 進化  
する博物館・美術館を知ろう, 静岡大学生涯学習教育研究センター, 静岡大学, 2006/7『生涯学習教育研究』10, pp. 53-55,  
2008/3)

橋爪節也「エコ・トーク・ライブ報告」フォーラム: 間重富生誕 250 年記念企画 なにわエコミュージアムフォーラム, なにわエコミュ  
ージアム, 大阪市立中央図書館, 2006/7

橋爪節也「近代の大阪画壇について」講演: 大阪の美術, 湯木美術館, 湯木美術館, 2006/5

橋爪節也「近代の描かれた中之島風景」第 11 回 京阪・文化フォーラム 講演: 中之島の景観に見る浪花大川眺望, 京阪電気  
鉄道株式会社, 大阪倶楽部, 2006/5

橋爪節也, 山野英嗣, 前川公秀他「大阪の美術」大手前学園創立 60 周年記念、大手前大学創立 40 年記念パネルディスカッ  
ション: 信濃橋洋画研究所とその時代, 大手前学園, 大手前大学・大手前アートセンター, 2006/4

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

### 5. 藤岡 穰 准教授

1962 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。1990 年 4 月～1999 年 3 月大阪市立美術館学芸員、1999 年 4  
月～現職。専攻: 東洋美術史。

#### 5-1. 論文

なし

#### 5-2. 著書

藤岡穰, 朝賀浩, 久米雅雄他(編)『新修 茨木市史第九巻 史料編美術工芸』茨木市, 2008/3

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 5-4. 口頭発表

藤岡穰, 山本陽子, 松村和歌子「興福寺の鎌倉復興造像と縁起」研究集会: 南都復興における縁起と美術, 科学研究費補助金  
「寺社勸進・修造をめぐる唱導文芸に関する文献学的研究」[基盤研究(C)](研究代表者: 近本謙介), 春日大社, 2007/12

荒木浩, 平雅行, 藤岡穰他「仏師のダイナミズム——密教図像から彫像へ——」国際シンポジウム: 仏教学を超えて: 日本仏教  
研究の新しい方向, ハーヴァード大学, 2007/11

藤岡穰「鎌倉彫刻における宋代美術の受容」特定領域研究による国際シンポジウム 東アジアの海域交流と日本伝統文化の形  
成——寧波を焦点とする学際的創生——: 寧波の美術から海域交流を考える, 文化交流研究部門調整班, 九州国立博物館,

### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号:18520086

研究題目:仏教美術における絵画と彫刻

研究経費:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

平安後期から鎌倉時代にかけての仏教美術について、絵画や彫刻といったジャンルを超えた視点から研究を行う。

### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

奈良国立博物館・調査員	2006年4月～現在に至る
美術史学会・常任委員	2005年6月～2008年6月
茨木市史編さん委員会・編さん委員	2001年4月～現在に至る
豊中市史編さん委員会・編さん委員	1999年4月～現在に至る

## 6. 岡田 裕成 准教授

1963年生。1986年大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、1992年同大学院文学研究科博士後期課程(芸術学)退学。鳴門教育大学助手、大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部助教授を経て、2007年4月より現職。専攻:西洋美術史。

### 6-1. 論文

岡田裕成 「インカ表象の創出と所有 植民地アンデスにおける表象の政治」関雄二、染田秀藤『他者の帝国 インカはいかにして「帝国」となったか』世界思想社, pp. 274-300, 2008/3

岡田裕成 「クスコ教モリネドの聖堂建設・装飾事業:1673-1699年」『待兼山論叢』第41号, 大阪大学文学研究科, pp. 1-26, 2007/12

岡田裕成 「征服後アンデスにおける『美術』の形成:植民地美術論再考のための序論」『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』(スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会), 第7号, pp. 91-99, 2006/11

Okada, Hiroshige, “Inverted Exoticism? Monkeys, Parrots, and Mermaids in Andean Colonial Art” Suzanne Stratton-Pruitt(ed.) *The Virgin, Saints, and Angels: Latin American Paintings from the Thoma Collection*, Iris & B. Gerald Cantor Center for Visual Arts, Stanford University, pp. 67-79, 2006/9

### 6-2. 著書

岡田裕成, 齋藤晃(共著) 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋大学出版会, pp.1-10,12-61,114-216, 315-318、資料編(巻末より別ノブル):pp.49-96, 98,106-120, 2007/2

真鍋周三, 木村秀雄, 岡田裕成他 『ボリビアを知るための68章』明石書店, pp. 316-327, 2006/4

### 6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 6-4. 口頭発表

---

岡田裕成 「芸術学の研究領域としての〈コロニアル〉 アンデス植民地美術の事例をもとに」 第17回待兼山芸術学会, 大阪大学, 2007/4

岡田裕成 「作動するテキスト 《ラス・メニーナス》と観者の享楽」 国立民族学博物館共同研究「テキスト学の構築に向けて」研究会, 国立民族学博物館, 2007/3

岡田裕成 「ティティカカ湖畔の『黄金のコンパス』 植民地時代アンデスの聖堂飾におけるヨーロッパ視覚文化の流用と屈折」 新約聖書図像研究会第6回例会, 立教大学, 2006/12

### 6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

6-6-1. 2005年度～2007年度、基盤研究(B) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号:17320028

研究題目:植民地体制下南米の異文化接触地域におけるキリスト教美術受容過程の学際的研究

研究経費:2006年度 直接経費 2,100,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

研究の目的:

キリスト教美術を中心とするヨーロッパの図像表象文化が、南米アンデス高地およびアマゾン低地の植民地において先住民社会に移入され、受容されるなか、時に本来とは異なる意味や機能を獲得していったプロセスを、実地の作品調査に加えて、詳細な史料調査をおこなうことで、学際的な視点から明らかにする。

### 6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 6-8. 外部役員等の引き受け状況

---

民族芸術学会・理事

2006年4月～現在に至る

## 7. 大野 陽子 助教

1970年生。1993年大阪外国語大学外国語学部(イタリア語科)卒、2006年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(美術史)修了。文学博士。2008年4月より現職。専攻:西洋美術史。

### 7-1. 論文

---

大野陽子 「ヴァラッロのサクロ・モンテ第三六礼拝堂(カルヴァリオへの道)——予型論図像と「キリストのまねび」の可視化」『美術史』(美術史学会), 163, 美術史学会, pp. 38-57, 2007/10

Ohno, Yoko, “La visualizzazione della *Imitatio Christi* nella cappella della *Salita al Calvario* sul Sacro Monte di Varallo.” *Arte Lombarda*, 150, Istituto per la Storia dell’Arte Lombarda, pp. 68-83, 2007/2

### 7-2. 著書

---

大野陽子 『ヴァラッロのサクロ・モンテ——北イタリアの巡礼地の生成と変貌』(株)三元社, 604p., 2008/2

### 7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 7-4. 口頭発表

---

大野陽子 「サルヴェ・レジーナの歴史——ルネッサンス、バロックのマリア信仰」第 13 回おかやま音楽祭 バッハの学校, おかやま音楽祭実行委員会 岡山市, 2006/9

大野陽子 「ヴェラッロのサクロ・モンテ第三六礼拝堂〈カルヴァリオへの道〉礼拝堂における予型論図像採択の意味」第 59 回美術史学会全国大会, 美術史学会, 名古屋大学, 2006/5『美術史』161, pp. 231-232, 2006/10)

### 7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

大野陽子 第 9 回鹿島美術財団賞, 2002/5

### 7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

### 7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 7-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-24 共生文明論

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

交通手段やコミュニケーション手段の発展とともに、時間と空間の圧縮がすすみ、人々の接触が増大して、その共生が現代社会の大きな課題となりつつある。本コースでは人々の多彩な関係を、接触、交渉から衝突や妥協、住み分けなど複合的な関係の発展まで多角的に追跡し、そのメカニズム形成の歴史的解明を課題とする。これを通じて、人々の歴史意識や言語意識、文化観や民族観の形成と変動にもアプローチして現代世界の理解と共生に貢献すること、および専門研究と教育との間の問題を考察し、教育現場などとの連携によって教育改善に寄与することをめざす。

なお本コースの修了生は、ジャーナリズム・教職のほか国際的な活動をおこなう企業や公共団体などへの就職を想定している。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 3 准教授 3 講師 0 助教 0

教授：小林 茂、武田佐知子(兼)、江川 温

准教授：堤 一昭、山内 晋次、井本 恭子

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
—	7	—	—	—	—	—	—	—

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	—	—	—	—	—
'07	—	—	—	—	—
小計	—	—	—	—	—

## Ⅱ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 小林 茂 教授

1948年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授を務めている。専攻: 文化地理学/文化生態学。

#### 1-1. 論文

小林茂, 渡辺理絵 「近代東アジアにおける地図作製技術の移転:日本を中心に」千田稔(編)『アジアの時代の地理学:伝統と変革』古今書院, pp. 145-158, 2008/3

小林茂, 鳴海邦匡 「沖縄県における土地整理事業の準備過程:地図作製を中心に」『待兼山論叢 日本学編』, 41, 大阪大学文学研究科, pp. 1-24, 2007/12

Suzuki, A., Hamano, S., Shirakawa, T., Watanabe, K., Endo, T., Sharma, S., Jha, B., Achariya, G. P., Nishiyama, K., Fukumaki, Y. and Kobayashi, S., “The distribution of hereditary erythrocytic disorders associated with malaria, in a lowland area of Nepal: a micro-epidemiological study” *Annals of Tropical Medicine and Parasitology*, (Liverpool School of Tropical Medicine), 101-2, Maney Publishing, pp. 113-122, 2007/3

Kobayashi, S., “Strategies to cope with smallpox in the peripheral areas of East Asia during the early modern era”脇村孝平『近代現代アジアにおける「健康」の社会経済史:疾病、開発、医療、公衆衛生』(2004～2006年度科学研究費補助金(基盤研究[B])研究成果報告書), 大阪市立大学経済学研究科, pp. 23-33, 2007/3

#### 1-2. 著書

小林茂, 杉浦芳夫(共編著)『改訂版 人文地理学』放送大学教育振興会, 329p., 2008/3

鳴海邦匡, 大澤研一, 小林茂(共編著)『城下町大坂:絵図・地図からみた武士の姿』大阪大学出版会, 100p., 2008/2

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Kobayashi, Shigeru(Proceeding) “The exploitation of forest resources and landscape change in Japan during the past 200 years” Mizoguchi, T., (ed.) *The Environmental History of Europe and Japan*, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, pp. 177-183, 2008/3

小林茂 「近代的土地所有と伝統的土地制度:「永小作」をめぐる日本と台湾」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 3-8, 2008/3

小林茂 「外邦図研究の7年」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 1-2, 2008/3

久武哲也, 小林茂(共著) 「浅井辰郎先生(1914-2006)と外邦図」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 21-24, 2008/3

金美英, 小林茂(共著)(資料紹介) 「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料の仮目録について」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 60-62, 2008/3

今里悟之, 池中香絵, 岡本有希子, 小林茂(共著)(資料紹介) 「アメリカ議会図書館蔵日本軍航空偵察写真について」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 77-83, 2008/3

三木和美, 亀山玲子, 金美英, 竹内加枝, 小林茂(共著)(資料紹介) 「高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について」外邦図研究グループ(編)『外邦図研究ニューズレター』5, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 84-90, 2008/3

小林茂 「視野をひろく、オーソドックスに(若手研究者への手紙)』『学術月報』60-7, 日本学術振興会, p. 97, 2007/7

小林茂 「地名と場所イメージをセットに(社会科にとって都道府県指導の意味とは)』『社会科教育』44-5, 明治図書, p. 9, 2007/5

小林茂, 森野良典(共著)(解説と翻訳) 「ネパールの国民統合と言語問題:国民語政策提言委員会答申(翻訳)とその背景」前平泰志(編)『ネパールにおけるマージナルグループの教育様式の政治人類学的研究』(平成12～15年度科学研究費補助金(基盤研



究[B]研究成果報告書), 京都大学大学院教育学研究科, pp. 101-153, 2007/3

小林茂, 渡辺理絵(共著)「近代東アジアの土地調査事業と地図作製:地籍図作製と地形図作製の統合を中心に」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』(平成 18 年度科学研究費補助金(基盤研究[A])中間報告書), 2, 大阪大学文学研究科片山研究室, pp. 4-14, 2007/3

渡辺理絵, 小林茂(共著)「陸地測量部修技所に在学した清国留学生の名簿に関するノート」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』(平成 18 年度科学研究費補助金(基盤研究[A])中間報告書), 2, 大阪大学文学研究科片山研究室, pp. 102-114, 2007/3

久武哲也, 鳴海邦匡, 堤研二, 小林茂(共著)(著作目録と解説)「海野一隆先生の研究業績とその地図学史的意義」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 185-234, 2007/3

小林茂(紙碑)「海野一隆先生(1921-2006)を悼む」『歴史地理学』(歴史地理学会), 49-2, pp. 34-35, 2007/3

小林茂(紙碑)「海野一隆先生のご逝去を悼む」『地図情報』26-2, 財団法人地図情報センター, p. 41, 2006/8

小林茂(書評)「千葉徳爾著『新考 山の人生:柳田國男からの宿題』」『歴史地理学』(歴史地理学会), 48-3, pp. 29-32, 2006/6

#### 1-4. 口頭発表

小林茂, 村山良之, 宮澤仁「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題:戦前期の地域資料の活用に向けて」2008 年春季大会:公開シンポジウム:「地域の知」の統合に向けて:地域情報データベースの利活用, 日本地理学会, 獨協大学, 2008/3(『日本地理学会発表要旨集』73, p. 24, 2008/3)

久武哲也, 鳴海邦匡, 今里悟之, 久武哲也, 小林茂「総合地理研究会と皇戦会:初期地政学グループの活動」2007 年大会, 人文地理学会, 関西学院大学, 2007/11(『人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 58-59, 2007/11)

岡本有稀子, 長澤良太, 小林茂他「戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について」2007 年秋季大会, 日本地理学会, 熊本大学, 2007/10(『日本地理学会発表要旨集』72, p. 59, 2007/10)

Kobayashi, S. “The exploitation of forest resources and landscape change in Japan during the past 200 years”The Oxford-Kobe Environmental Seminar, Oxford-Kobe Seminar, Kobe Institute, Kobe, Japan, 2007/9(*Seminar Programme and Abstracts*, 2007/9)

鳴海邦匡, 小林茂「近世の里山景観研究における正式 2 万分の 1 地形図の意義について」第 50 回大会, 歴史地理学会, 國學院大學, 2007/5(『歴史地理学』49-5, p. 92, 2007/12)

小林茂「時系列地理情報を使った景観変化の研究:その展開と可能性」2007 年春期学術大会:シンポジウム:時系列情報を使った景観変化の研究:その展開と可能性, 日本地理学会, 東洋大学, 2007/3(『日本地理学会発表要旨集』71, p. 18, 2007/3)

岡田郷子, 小林茂「植民地期以前の朝鮮半島における日本の軍用地図作成」2007 年大会, 人文地理学会, 近畿大学, 2006/11(『2006 年人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 30-31, 2006/11)

小林茂「環境史研究の展開と「非平衡系」生態学」第 86 回地理思想史研究部会, 人文地理学会, 京都大学総合博物館, 2006/9(『人文地理』58-6, pp. 79-80, 2006/12)

Kobayashi, S., Okada, S., “Japanese military cartography in the Korean peninsula, 1873-1910”PNC 2006 Annual Conference in Conjunction with PRDLA and ECAI:GIS-Map Collections, Pacific Neighborhood Consortium (PNC), Seoul National University Hoam Faculty House, 2006/8(*Program and Abstract*, p. 46, 2006/8)

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林茂 第 4 回人文地理学会賞, 人文地理学会, 2004/11

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007 年度～2009 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:小林茂

課題番号:19200059

研究題目:アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成

研究経費:2007 年度 直接経費 8,700,000 円 間接経費 2,610,000 円

研究の目的:

経済発展にともなう環境改変の激しいアジア太平洋地域の環境変化を長期的にモニターするために、旧日本軍ならびに植民地政府が作製・撮影した地図、空中写真、さらにそれらによる気象観測資料を集積することを目的とする。これらの資料は、第2次世界大戦終結時に焼却されたものが少なくないが、なお内外の諸機関に利用の便のないまま、凍結状態で保管されているのがみられる。これらを発掘し、目録を作成して利用を促進する。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

1-7-1. 2006年度～2007年度、研究助成、助成金獲得者:小林茂

助成金名:三菱財団人文科学研究助成

研究題目:日本の旧植民地における土地調査事業と地図作製

助成団体名:三菱財団

助成金額:2006～2007年度 直接経費 1,800,000円

研究の目的:

明治以降、日本は国内だけでなく、台湾・朝鮮半島などの植民地でも、土地所有の近代化をめざしつつ、土地調査事業をおこなった。これに際して、国内での経験をふまえつつ、より体系的な事業の遂行をめざし、とくに地籍図については、三角測量を適用して国内よりも整備されたものを作製するとともに、これを縮小しつつ補足的な測量を実施して地形図も作製した。このような土地調査事業は、東アジアへの近代的測量技術の移転に比べ、中国本土の類似事業にも影響という点でも注目され、その構想および実施プロセスを追跡する。

1-7-2. 2006年度、受託研究、助成金獲得者:小林茂

助成金名:日本学術振興会学術システム研究センター実施委託研究

研究題目:環境史分野に関する学術動向の調査・研究:新分野の形成過程の追跡と評価

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006年度 直接経費 2,500,000円

2007年度 直接経費 2,500,000円

研究の目的:

近年、環境問題がグローバルイシューになるにつれて、環境の歴史だけでなく、人間と環境の関係の歴史という意味での環境史に対する関心が各方面で高まっている。ただしこれまでのこの方面の研究は、歴史学、地理学、人文地理学、文化人類学などの分野で、相互に連携のないままに進行しており、発想やテーマ、方法がさまざまである。この振興分野の動向をモニターするとともに、科学研究費の複合新領域の「環境学」分野との関係も検討する。

1-7-3. 2005年度～2009年度、研究助成、助成金獲得者:小林茂

助成金名:社会教育機関等への助成

研究題目:外邦図の研究

助成団体名:財団法人国土地理協会

助成金額:2006年度 直接経費 2,000,000円

2007年度 直接経費 2,000,000円

研究の目的:

旧日本軍および植民地政府がアジア太平洋地域で作製した地図を「外邦図」と呼んでいる。日本国内の各機関に保管されている外邦図の目録を作成するとともに、その作製過程にアプローチし、歴史研究や環境変化の研究に利用できるようにすることを目的とする。本研究助成は2005年度から継続しているもので、助成機関は5年間で予定されている。

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

---

豊中市教育委員会・今西氏屋敷学術検討委員会委員

2007年11月～2008年3月

日本学術振興会、学術システム研究センター・専門研究員  
福岡市史考古専門部会・専門委員  
国立民族学博物館・共同研究員  
柳川市史・専門研究員  
人文地理学会・協議員  
日本地理学会・代議員  
日本国際地図学会・評議員

2006年4月～現在に至る  
2006年1月～現在に至る  
2005年10月～現在に至る  
2005年5月～現在に至る  
2004年11月～現在に至る  
2004年4月～現在に至る  
2003年2月～現在に至る

## 2. 武田 佐知子 教授

1948年東京生。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科史学(日)専攻修士課程修了、東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士(東京都立大学、1985)。大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門(1985)、濱田青陵賞(1995)、紫綬褒章(2003)。専攻：日本古代史・服装史。

### 2-1. 論文

Takeda, Sachiko 他(共著), “La noblesse de l’époque de Heian : formes de vêtements, formes d’amour” Micheal Lucken(共著)  
『Cipango: Autour du Genji monogatari』Publications Langues O’, pp. 277-289, 2008/2

### 2-2. 著書

武田佐知子他(共著) 『聖徳太子の歴史を読む』第4章第3節『唐本御影』は聖徳太子像か』文英堂, pp. 298-320, 2008/1  
武田佐知子他(共著) 『人はなぜ花を愛でるのか』第六章「花をまとい、花を贈るということ」八坂書房, pp. 130-155, 2007/3

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

武田佐知子 「門脇禎二さんを悼む」『朝日新聞夕刊』朝日新聞社, 2007/6  
武田佐知子 「銀の道が運んだワニ」岩波書店『図書』699, 岩波書店, pp. 16-19, 2007/6

### 2-4. 口頭発表

なし

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

武田佐知子 サントリー学芸賞 思想歴史部門 1985年  
武田佐知子 濱田青陵賞 1995年  
武田佐知子 紫綬褒章 2003年

### 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-2. 2006年度～2009年度、基盤研究(A)一般、代表者：武田佐知子  
課題番号：18201052

研究題目：着衣する身体と女性の周縁化

研究経費：2007年度 直接経費 15,300,000円 間接経費 4,590,000円

研究の目的：

着衣という共通の素材を通して、特定の社会におけるジェンダーのあり方を研究し、さらに、地域間の比較を行なうことによって、最終的に、グローバルな視点から、世界における女性の周縁化を理解することを目的とする。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

文部科学省 独立行政法人評価委員会 文化分科会 臨時委員

2007年10月～現在に至る

## 3. 江川 温 教授

1950年生。1979年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て、1996年教授。2004年4月より放送大学客員教授。専攻:西欧中世史。

### 3-1. 論文

---

江川温 「中世フランス国王の葬儀と墓」、江川温 (編)『死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——』(基盤研究(A)報告), 江川温, pp. 84-98, 2007/6

Egawa, Atsushi, “Funerals and Graves of Kings in Medieval France: Research Trends”, Egawa, Atsushi (ed.), *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead: Relatives, Neighboring Societies and States*, (A report of research project subsidized by Grants-in-Aid for Scientific Research), pp. 106-122, 2007/6

江川温 「君主記念の施設——日仏比較史の試み」『公家と武家 III 王権と儀礼の比較文明的考察』思文閣出版, pp. 426-442, 2006/11

江川温 「歴史の風 死の比較史的研究」『史学雑誌』115-9, 史学会, pp. 38-40, 2006/9

江川温 「西欧中近世における権力者の彫像——フランスを中心に」『歴史と地理 世界史の研究』207, 山川出版社, pp. 1-14, 2006/5

### 3-2. 著書

---

江川温(編)『死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——』(基盤研究(A)報告) 江川温, 2007/6

Egawa, Atsushi (ed.), *Comparative History of the Civilizations Concerning Funerals and Commemoration of the Dead: Relatives, Neighboring Societies and States*, (A report of research project subsidized by Grants-in-Aid for Scientific Research), 2007/6

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

なし

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(A) 一般、代表者:江川温

課題番号:16202012

研究題目:死者の葬送と記念に関する比較文明史——親族・近隣社会・国家——

研究経費:2006年度 直接経費 2,000,000円 間接経費 600,000円

研究の目的:

古代から現代にいたる諸文明の葬送と死者記念を比較史的に検討し、人類の死と死者への対処における多様性と共通性を明らかにする。

3-6-2. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:江川温

課題番号:19520628

研究題目:フランス封建社会と神の平和運動

研究経費:2007年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

フランス11, 12世紀における神の平和・休戦の運動の起源と各地方における展開を分析することを通じて、この時期のフランスにおける公的秩序観念の展開を明らかにする。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

---

史学会・評議員	2005年10月～現在に至る
日本西洋史学会・代表	2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2004年4月～現在に至る
日仏歴史学会・理事	2003年4月～現在に至る

## 4. 堤一昭 准教授

1960年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:東洋史学。

### 4-1. 論文

---

堤一昭 「故宮南薰殿旧蔵の元朝帝后像についての予備的考察——モンゴル時代(13-14世紀)絵画史料を「読む」ための一歩として——」『「着衣する身体と女性の周縁化」中間成果報告』(平成18～21年度科学研究費補助金基盤研究(A)「着衣する身体と女性の周縁化」(研究代表者武田佐知子大阪大学教授)), 平成18～21年度科学研究費補助金基盤研究(A)「着衣する身体と女性の周縁化」(研究代表者武田佐知子), pp. 1-16, 2008/3

堤一昭 「蒙元時代(西暦13～14世紀)における「中国」の拡大と正統性の多元化」『「現代中国社会変動と東亜新格局」国際学術論壇論文集』(「現代中国社会変動と東亜新格局」国際学術論壇), 南開大学歴史学院, pp. 125-133, 2007/8

堤一昭 「石濱文庫拓本資料調査の概要——2006年度前半まで——」『大阪外国語大学論集』(大阪外国語大学), 第35号, 大阪外国語大学, pp. 181-192, 2007/3

堤一昭 「石濱文庫の拓本資料——概要とモンゴル時代石刻拓本一覧——(改訂版)」『13, 14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究——元朝史科学の構築のために(平成16年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』(「13, 14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究——元朝史科学の構築のために」平成16年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究代表者森田憲司奈良大学教授), 「13, 14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究——元朝史科学の構築のために」平成16年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究代表者森田憲司奈良大学教授, pp. 131-138, 2007/3

### 4-2. 著書

---

堤一昭, 西村成雄, 田中仁他(共著)『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』汲古書院, pp. 175-189, 2008/3

堤一昭, 西村成雄, 田中仁他(共著)『現代中国地域研究の新たな視圈』世界思想社, pp. 30-61, 2007/3

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 4-4. 口頭発表

堤一昭 「蒙元時代(公元13～14世紀)‘中国’的拡大和正統性的多元化」現代中国社会變動与東亜新格局”国際學術論壇:現代中国社会變動与東亜新格局, 南開大学歴史学院・大阪外国語大学中国文化論壇・台湾東華大学歴史系・中国現代史学会, 南開大学歴史学院(中国・天津), 2007/8(『“現代中国社会變動与東亜新格局”国際學術論壇會議手冊』pp. 55-56, 2007/8)

堤一昭 「政治空間を如何に読むか——コメント:モンゴル史の立場より——」平成17年度～21年度文部科学省特定領域研究東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学術的創生:文献資料部門第2回研究集会:政治空間を如何に読むか, 平成17年度～21年度文部科学省特定領域研究東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学術的創生, 大阪市立大学, 2006/11

堤一昭 「「中国」とはどこか?——歴史から見た地域認識」第10回大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2006/11

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・『日本モンゴル学会紀要』編集委員  
大阪外国語大学言語社会学会・運営委員・理事

2007年5月～現在に至る

1997年12月～2007年3月

### 5. 山内 晋次 准教授

1961年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(日本史学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1997)。大阪大学大学院文学研究科COE特任助手、世界史講座(東洋史学)助教を経て、2008年4月より現職。専攻:日本古代史・海域アジア史。

#### 5-1. 論文

山内晋次 「海域アジア史研究のポテンシャル——硫黄交易と航海信仰を素材として——」京都民科歴史部会(編)『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会), 265, pp. 14-25, 2007/5

#### 5-2. 著書

山内晋次, 桃木至朗, 藤田加代子他(共編著)『海域アジア史研究入門』岩波書店, 292p., 2008/3

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 5-4. 口頭発表

山内晋次 「日宋貿易と《硫黄の道》——海域アジア史の一齣——」第2回国際シンポジウム「宋元明代の東アジア海域——貿易・外交・文化交流——」, 寧波プロジェクト・寧波—博多関係班, 浙江工商大学日本文化研究所, 2008/1

山内晋次 「9世紀の東アジア世界と日本遣唐使」記念遣唐使・遣唐使1400周年“東亜文化交流的源流”国際研討会, 浙江工商大学日本文化研究所, 2007/9

山内晋次 「9世紀～14世紀前半の日本列島と海域世界」第136回博多研究会, 博多研究会, 2007/9



山内晋次 「航海信仰からみた海域世界」にんぷろワークショップ2007, 文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」, 2007/7

**5-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

なし

**5-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

なし

**5-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

なし

**5-8. 外部役員等の引き受け状況**

なし

**6. 井本 恭子 准教授**

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学、1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパⅢ講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:人類学。

**6-1. 論文**

井本恭子 「ex-voto の謎——セディロの聖コンスタンティヌスに返礼する人びと」 *AULA NUOVA*, 6, 大阪外国語大学イタリア語研究室, pp. 29-48, 2007/3

**6-2. 著書**

なし

**6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等**

なし

**6-4. 口頭発表**

井本恭子 「イタリアのジレンマ——移民問題からみた制御と共生」追手門学院大学公開講座:国際社会と多文化共生, 追手門学院大学, 2006/4

**6-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

なし

**6-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

なし

**6-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

なし

**6-8. 外部役員等の引き受け状況**

なし

## 2-25 アート・メディア論

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本コースには大きく言ってふたつの柱がある。ひとつめの柱は、映像・空間メディア・サイバーメディア等これまで人文学や芸術学の分野では十分に扱われてこなかった領域、新しく形成され社会的重要度を高めつつある領域の研究拠点を形成し、現代アート・メディアの諸問題を専門的かつ実践的な視点から教育していくことである。ここでは既存の芸術論の枠を超え、社会的現実により密着したメディア・リテラシー等の理論学習をおし進める一方、コンピュータによるメディア処理能力を高めるための実習をも合わせて行うことが主要な目的となる。ふたつめの柱は、文化政策もしくは芸術計画に関する多角的研究である。つまり絵画・演劇・映画・文学テキストといった芸術作品を自律したものとしてとらえるのではなく、アート・メディア全般の制作および受容の具体的プロセスに着目することによって、その文化的・社会的な機能の解明をめざす。ここでは作品の分析や解釈以上に、作品を刊行・公開・上演するさいの政策(ポリシー)とシステム、およびそれらを介した作品と受容者との力動的な関係が問題の中心に据えられる。

前者が多岐にわたるアート・メディアのいわば「中身」を扱うのに対して、後者は作品そのものではなく作品の「外側」あるいはそれが位置すべき「環境」を問題にするとよい。ただし本コースに所属する学生はどちらか一方を専攻すると言うより、むしろ2本の柱をとともども自らの支えとすることで、最終的には芸術的实践をモデルにした人間と社会との連携を各人なりに模索し構想する水準にまで到達する(少なくとも到達すべく努力する)ことが求められる。

以上の理念に基づき、本コースはアート・メディアに関する深い理解と幅広い知識(既存の学問的ディシプリンを含む)を身につけ、専門性と実践的能力を生かしつつ社会で活躍できる人材の育成をめざす。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：藤村 昌昭、市川 明、永田 靖、園府寺 司

准教授：三宅 祥雄

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
—	5	—	—	—	—	—	—	—

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	—	—	—	—	—
'07	—	—	—	—	—
小計	—	—	—	—	—

## Ⅱ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 藤村 昌昭 教授

1947年生。京都大学大学院修士課程イタリア語学・文学専攻修了。文学修士(京都大学、1975)。大阪外国語大学助手、同講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:イタリア言語文化史/記号論。

#### 1-1. 論文

なし

#### 1-2. 著書

Fujimura, Masaaki(監修), *デイリー日伊英3か国語会話辞典*, 三省堂, 360p., 2007/1

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

藤村昌昭 「物語の時空間とその叙法についての考察——19世紀のテキストにおける「伝統」と「革新」——」イタリア学会大会, イタリア学会, 東京大学, 2007/10

藤村昌昭 「イタリアの魅力」阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 尼崎市立女性センター「トレビエ」, 2007/10

藤村昌昭 「明治とイタリア」阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 阪神シニアカレッジ・マイスターゼミナール, 尼崎市立女性センター「トレビエ」, 2007/1

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日伊協会「イタリア語スピーチ・コンテスト」審査委員長

2005年4月～現在に至る

日本イタリア京都会館・評議員

2004年7月～現在に至る

## 2. 市川明教授

1948年生。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。1976年、大阪外国語大学外国語学研究科修士課程ドイツ語学専攻修了。文学修士。近畿大学教養部助手、同講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:ドイツ文学/ドイツ演劇。

### 2-1. 論文

市川明 「表現主義の彫刻家・劇作家、エルンスト・バルラハ」『不定期船』3, pp. 100-108, 2008/2

市川明 「シンガーソングライター、ブレヒト——若き詩人とサブカルチャー——」市川明(編)『抒情詩への回帰——歌としてのブレヒトの詩』(科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」), 研究報告書1, pp. 11-49, 2007/12

市川明 「『あとから生まれてくるものたちへ』——ブレヒトとハンス・アイスラー」市川明(編)『抒情詩への回帰——歌としてのブレヒトの詩』(科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」), 研究報告書1, pp. 97-133, 2007/12

市川明 「街角にたたずむ作家たち——ベケット、ブレヒト、カフカ、マン」『不定期船』2, pp. 86-97, 2007/6

市川明 「ドイツ表現主義と宝塚歌劇」『池田文庫』30, 阪急学園池田文庫, pp. 8-9, 2007/4

市川明 「ベルリンのブレヒト祭」『シアターアーツ』(国際演劇評論家協会日本センター), 29, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 10-17, 2006/12

市川明 「暗い時代からの叫び——ブレヒトの亡命中の詩」『不定期船』1, pp. 95-102, 2006/7

市川明 「エルンスト・バルラハの芸術」『言語』35-6, 大修館書店, pp. 6-7, 2006/6

### 2-2. 著書

市川明(訳)『ブレヒト上演台本集——言葉と音楽』研究報告書3, 科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」, 413p., 2008/3

市川明(編), ヤン・クノッブ, ヨアヒム・ルケージー他『抒情詩への回帰——歌としてのブレヒトの詩』研究報告書1, 科研費・基盤研究(B)「ブレヒトと音楽」, 182p., 2007/12

市川明, ハンス・ペピン, 木村英二(共編著)『ドイツ語ステップアップ(新訂版)』郁文堂, 198p., 2006/4

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市川明 「密陽の熱い嵐——密陽国際演劇祭に参加して」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 14, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 16-17, 2007/12

市川明(書評)「谷川道子『ドイツ現代演劇の構図』」『ドイツ文学』133, 日本独文学会, pp. 238-241, 2007/10

市川明 「ドイツからの外大の訪問客」*Sprache und Kultur*, 40, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp.149-162, 2007/9

市川明 「劇団と伝統——関西芸術座の50年」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 13, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2007/8

市川明(劇評)「ウィーン版ミュージカル『エリザベート』——トート(死)がたぐり寄せる運命の糸」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 13, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 10-11, 2007/8

市川明 「『善き人のためのソナタ』——俳優ウルリヒ・ミュエの存在感」(国際演劇評論家協会日本センター), 12, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 12-13, 2007/3

市川明 「映画『善き人のためのソナタ』——勇気に捧げる人間讃歌」読売新聞夕刊, 読売新聞社, 2007/3/20

市川明 「ブレヒトの教育劇の上演」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 11, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 2-3, 2006/12

市川明 「ベルリンのブレヒト祭——『肝っ玉おっ母とその子どもたち』戦争の世紀 強烈に再現」読売新聞夕刊, 読売新聞社, 2006/9/21

市川明(劇評)「『ど』/黒テント——ティーカップの湯気から浮かび上がる政治の季節」『act』(国際演劇評論家協会日本センター), 10, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 8-9, 2006/9

## 2-4. 口頭発表

市川明 「ギターを爪弾くブレヒト——若き詩人とサブカルチャー」大阪大学独文学会総会, 大阪大学独文学会, 大阪大学, 2007/12

市川明 「ベルリン演劇祭2007とベルリンの演劇」ベルリンの演劇を語る夕べ, 大阪ドイツ文化センター, 2007/12

Ichikawa, Akira, Jan Knopf, Joachim Lucchesi 他 “Du musst die Führung übernehmen! ——“Die Mutter” von Brecht/Eisler” 日本独文学会・ブレヒト国際シンポジウム: Musik und Bühne bei Bertolt Brecht, 日本独文学会, 大阪市立大学, 2007/10(『日本独文学会・研究発表要旨』2007年——秋季研究発表会, p. 7, 2007/10)

Ichikawa, Akira, Rhie Won-Yang, Felix Knopp 他 “Das Opium der Verwandlung – Ein Versuch, das Stück “Der Gute Mensch von Seuzan” als Komödie zu spielen” 韓国ブレヒト学会・ブレヒト国際シンポジウム: Lehrstücke von Brecht, 韓国ブレヒト学会, 密陽ブレヒト劇場, 2007/8(『韓国ブレヒト学会報』シンポジウム特集号, pp. 17-28, 2007/8)

市川明, 鈴木雅恵, 与那覇晶子他 『『アンティゴネ』変奏——ソフォクレスからブレヒト、フガードへ』日本演劇学会・近現代演劇研究会・研究集会: 伝統演劇とモダニティ, 近現代演劇研究会, 沖縄県立芸術大学, 2007/3

市川明, Jan Knopf, Joachim Lucchesi 他 『『あとから生まれてくるものたちへ』——ブレヒトとハンス・アイスラー』阪神ドイツ文学会・ブレヒト国際シンポジウム: Rückkehr zur Lyrik – Brechts Gedichte als Lieder, 阪神ドイツ文学会, 大阪大学, 2006/12(『ドイツ文学論攷』49, p. 99, 2007/12)

市川明 「ブレヒトの生涯」ブレヒト没後 50 年・ドイツ演劇祭・前夜祭:ブレヒトの夕べ, 演劇創造集団ブレヒト・ケラー, 谷町劇場, 2006/7

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市川明, 浅岡泰子, 宇佐美幸彦他 マックス・ダウテンダイ賞, 東京ドイツ文化センター, 2003/3

市川明 ドイツ語学文学振興会奨励賞, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 1982/4

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:市川明

課題番号:17320049

研究題目:ブレヒトと音楽——演劇学と音楽学の視点からの総合的研究

研究経費:2006 年度 直接経費 2,900,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 4,500,000 円 間接経費 1,350,000 円

研究の目的:

文学・演劇研究者と音楽関係者のコラボレーションにより、ブレヒトの詩、戯曲におけるテキストと音楽の関係を探る。従来のドイツ文学・演劇研究でまったく研究されてこなかったブレヒトと音楽の関係に光をあて、ブレヒトと彼のパートナーである作曲家との共同創作の実態を解明する。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本演劇学会・理事	2006 年 4 月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・機関誌『ひろの』編集委員	2006 年 4 月～現在に至る
大学入試センター・ドイツ語部会長	2006 年 4 月～2007 年 3 月
大学入試センター教科科目第一委員会委員	2005 年 4 月～2007 年 3 月
ドイツ語学文学振興会・評議員	2004 年 4 月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター・演劇批評誌『シアターアーツ』編集委員	2004 年 4 月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター関西支部・演劇評論誌『act』発行人	2004 年 4 月～現在に至る

演劇創造集団ブレヒト・ケラー・代表幹事  
国際演劇評論家協会日本センター・関西支部長  
阪神ドイツ文学会・幹事

2001年12月～現在に至る  
1996年4月～現在に至る  
1994年4月～2008年3月

### 3. 永田 靖 教授

1957年生。1981年、上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年、明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から大阪大学文学部助教授。2004年から現職。専攻：演劇学(ロシア演劇史・近代演劇理論)。

#### 3-1. 論文

- 永田靖 「パフォーマンスの介入——メイエルホリド演出『スペードの女王』第1場～第2場をめぐる」、pp.19-31, 飯倉洋一編『テキストの生成と変容』(広域文化表現論講座共同研究研究成果報告書), 2008/3
- 永田靖 「文化に抗う——玉三郎、オ・テソク、劇団ぐるみ座」『PROBE』Vol.2 北方圏学術情報センター, pp. 41-44, 2008/2
- Nagata, Yasushi, “Establishing a modern-traditional theatre—a case study of Japanese regional theatre”, *Modernity and Tradition in East Asia*, Korean Theatre Study Association, pp. 67-72, 2007/5
- 나가타 야스시 「새로운 가족에 오래된 연극성-일본근대연극에서 가족의 초상」, 『연극포럼』, 한국예술종합학교 연극원, pp.193-209, 2007 (永田靖, 「新しい家族に古い演劇性——現代日本演劇における「家族の肖像」, 『演劇フォーラム』, 韓國藝術綜合學校演劇院.)
- 永田靖 「演劇学の概説、あるいは人文学的配置」『演劇学論集』(日本演劇学会), 44号, 日本演劇学会, pp. 131-144, 2006/11
- Nagata, Yasushi, “Touring Practice, or Theatre as Contact Zone” 『演劇学論叢』Vol.8, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp. 213-220, 2006/8

#### 3-2. 著書

永田靖他(共訳)『演劇論の変貌』論創社, pp. 108-143, 2007/11

#### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 永田靖 「劇団「ぐるみ座」のこと」『ACT』国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 12-13, 2007/12
- 永田靖 「そこにしかない演劇」『PROBE』Vol.1, 浅井学園大学北方学術情報センター, pp. 53-56, 2007/2
- 永田靖 「旅の演劇」『ACT』10, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2006/8
- 永田靖 「ソウルで考えたこと」『ACT』国際演劇評論家協会日本センター関西支部, p. 1, 2006/5

#### 3-4. 口頭発表

- 永田靖他 「演劇から映画へ——その歴史的考察」:演劇から映画へ——その歴史的考察, 早稲田大学 GCOE, 早稲田大学, 2008/3
- Nagata, Yasushi “Sharing tradition in Japanese contemporary theatre”, National Museum of Singapore, 2008/3
- Nagata, Yasushi “Preservation and Innovation; on Some Trends of Contemporary Japanese Theatre”, *Traditional Theatre. Modern Manifestation 2008*, The Chinese Opera Institute, National Museum of Singapore, 2008/3
- 永田靖 「現代ロシア演劇のいくつかの言説について」:ロシアという表現・言論空間の軌跡と現在, ロシア東欧学会・JSSEES 合同全国大会, 大阪大学, 2007/10
- 永田靖他 『ぐるみ座の半世紀』展にちなんで——その活動と資料について』近現代演劇研究会, 大阪大学, 2007/10
- Nagata, Yasushi “Performing national identity or performing citizenship?”:Conference ‘National Theatre in World Culture’, Alexandrinsky Theatre, 2007/9
- 永田靖 「チェーホフの一幕物と劇」ぶんげい演劇工房学芸講座, 京都府立文化芸術会館, 2007/9
- 永田靖 「ロシア・アヴエンギャルドの美術と演劇」:舞台芸術の世界——ディアギレフのロシアバレエと舞台デザイン』展記念講演,



国立京都近代美術館, 国立京都近代美術館, 2007/7

永田靖, 井上理恵 「和田精と築地小劇場の音」日本演劇学会全国大会:演劇の耳——声、音、そして音楽, 日本演劇学会, 大手前大学, 2007/6

Nagata, Yasushi “Establishing a modern-traditional theatre— a case study of Japanese regional theatre,” Annual Conference : Modernity and Tradition in East Asia, Korean Theatre Study Association, Sangmyung University, Cheonan. Korea., 2007/5

永田靖他 「教育上演の課題と展望——札幌、ソウル、大阪」舞台芸術ワークショップ:パネルセッション, 北方圏学術情報センター, 北翔大学, 2007/5

永田靖, 椋平淳, 出口逸平 「伝統演劇と Modernity 総括セッション」近現代演劇研究会沖縄集会, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 沖縄県立芸術大学, 2007/3

永田靖 「老いとリアリズムの演技」老いと文化, 慶応義塾大学身体医文化論研究会, 慶応義塾大学, 2007/3

永田靖 「テキストとしての演出台本——スタニスラフスキイ演出台本『かもめ』を中心に」広域文化表現論「テキストの生成と変容」第10回研究会, 大阪大学文学研究科広域文化表現論専攻「テキストの生成と変容」, 大阪大学, 2006/12

Jonah Saltz, 永田靖 「インターカルチュラリズムの演劇再考——ユージェニオ・バルバ演出オディン劇場『Ur-Hamlet』をめぐって」近現代演劇研究会12月例会, 日本演劇学会近現代演劇研究会, 大阪大学, 2006/12

Nagata, Yasushi “A Cuckoo and the Atomic Bomb—How to meet the Asian Modern Theatre” International Federation for Theatre Research (FIRT) 15th World Congress., International Federation for Theatre Research, Helsinki University, 2006/8

Nagata, Yasushi, Janelle Rainelt, Marvin Carson, Global vs Local. Round Table. Chair, International Federation for Theatre Research (FIRT) 15th World Congress., International Federation for Theatre Research (FIRT), Helsinki University, 2006/8

永田靖 「演じられる美——蜷川幸雄インタビュー」大阪外国語大学司馬遼太郎記念学術講演会, 大阪国際交流センター, 大阪外国語大学, 2006/7

永田靖 「藝術の変貌——藝術学関連学会連合公開シンポジウムをめぐって」芸術とコミュニケーション第1回研究会, 芸術とコミュニケーション研究会, 大阪大学, 2006/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:永田靖

課題番号:19520100

研究題目:ロシアにおける日本・朝鮮演劇の影響及び展開過程の研究

研究経費:2007年度 直接経費 1 300 000 円 間接経費 39 000 円

研究の目的:

グローバル化の中での演劇史学の再編と「アジア」演劇の言説空間の再検討という問題意識を持ちながら、ロシアにおける日本演劇と朝鮮演劇の影響関係と展開過程を研究する。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会・国際版紀要 ICONICS 編集長	2006年4月～現在に至る
International Federation for Theatre Research・Executive Committee	2004年11月～現在に至る
日本演劇学会・理事	2002年4月～現在に至る
日本演劇学会・事務局長	2002年4月～現在に至る
日本映像学会・理事	2002年4月～現在に至る

日本映像学会関西支部・幹事	2002年4月～現在に至る
日本映像学会・紀要『映像学』及び国際版紀要 ICONICS 編集委員	2002年4月～現在に至る
日露演劇交流推進会議・理事	2002年3月～現在に至る
日本演劇学会近現代演劇研究会・事務局	2000年12月～現在に至る

## 4. 囀府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren (文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋美術史。

### 4-1. 論文

Kodera, Tsukasa, “Hans Ludwig Cohn Jaffé 1915-1984 From the Bildung to the Ethica of De Stijl” 囀府寺司(編)『越境／モダンアート Transboundary /Modern Art』大阪大学 21 世紀 COE「インターフェイスの人文学」, pp. 69-104, 2007/3

### 4-2. 著書

囀府寺司 『もつと知りたいゴッホ 生涯と作品』東京美術, 80p., 2007/12

囀府寺司 (編)『越境／モダンアート Transboundary/Modern art』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, 127p., 2007/3

囀府寺司, 伊東信宏, 井口壽乃他(編)『モダニズムと中東欧の藝術文化 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006』第7巻, 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」, 365p., pp. 7-14, 2007/1

囀府寺司 『ゴッホ』西洋絵画の巨匠 2, 小学館, 127p., 2006/4

### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 4-4. 口頭発表

囀府寺司 「ファン・ゴッホ(キリスト教)対(自然)」招待講演 韓国 弘益大学校(Hong-ik University)ソウル, 2006/11

囀府寺司 「ジャガールのユダヤ性」宇都宮美術館, 2007/3

囀府寺司 「フィラデルフィア美術館を飾る多国籍の巨匠たち」フィラデルフィア美術館展「印象派と 20 世紀の美術」記念講演会, 京都市美術館, 2007/9

### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

囀府寺司 Erasmusprijs(Studieprijs) エラスムス研究賞, Stichting Praemium Erasmianum エラスムス財団(オランダ), 1989/2

### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:囀府寺司

課題番号:17320030

研究題目:モダニズムと中東欧の近代藝術に関する国際・学際共同研究

研究経費:2006 年度 直接経費 2,900,000 円 間接経費 0 円

2007 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

従来、研究の乏しかった中東欧の近現代芸術について、中東欧諸国ならびに北米などの研究者と密接な国際共同研究を行い、この地域の芸術ならびにこの地域出身の芸術家、芸術関係者の役割を明確にする。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

美術史学会・常任委員

2007年5月～現在に至る

民族芸術学会・理事

1999年4月～現在に至る

### 5. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フランス哲学/映像論。

#### 5-1. 論文

---

なし

#### 5-2. 著書

---

なし

#### 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

#### 5-4. 口頭発表

---

なし

#### 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

#### 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

#### 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 5-8. 外部役員等の引き受け状況

---

なし

## 2-26 文学環境論

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

「文学環境論」は、日本・東洋文学から英米文学・ヨーロッパ文学にわたる文学世界を研究対象として、文学と環境との双方向的関わりのありようを、自然、言語、歴史、人間、文化などにおける環境の多次的側面から検証することを通して、文学の成立する根源的条件を考察・研究する研究分野である。研究に当たっては、既存の文学研究では不十分であった研究領域横断型のアプローチや新しい文学研究方法論に挑戦し、文学および人文学についての今日的知見と広範な素養を修得することをめざしている。本専門分野は、ジャーナリズム、マスコミ、教職関係等での活躍をはじめ、国際的環境において活躍できる高度専門職業人の養成をめざしている。

文学環境論コースは、現在、玉井暉教授、米井力也教授、平田由美教授、石割隆喜准教授の4名の専属スタッフからなるが、外部より、斯界の多彩な専門家を招いて多面的教育・研究を行っている。平成20年度においては、柴田元幸氏(東京大学教授・翻訳家)を集中講義講師に迎えて、翻訳(論)ワークショップを開催し、学生の英語読解力の増進をはかるとともに、将来においてプロの翻訳家への道を希望する学生のための実践的トレーニングを行う予定である。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：玉井 暉、米井 力也、平田 由美

准教授：石割 隆喜

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
—	4	—	—	1	—	—	—	—

※うち留学生 1 名、社会人学生 1 名

#### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	—	—	—	—	—
'07	—	—	—	—	—
小計	—	—	—	—	—

## Ⅱ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 玉井 暲 教授

1946年生。1969年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1971年、大阪大学大学院文学研究科修士課程(英文学専攻)修了。文学博士(大阪大学、2000年)。大阪大学助手、大阪府立大学助手、和歌山大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999年1月現職。専攻:英文学。

#### 1-1. 論文

玉井暲 「ワイルド編集による The Woman's World の復刻に当たって」『The Woman's World:別冊解説』アティーナ・プレス, pp. 1-6, 2008/1

玉井暲 「ハーディのリアリズムと手紙の言葉」『トマス・ハーディ全貌』音羽書房鶴見書店, pp. 742-760, 2007/10

玉井暲 「<新しい女>小説の諸相——小説・演劇・絵画」『New Woman Fiction:別冊解説』アティーナ・プレス, pp. 1-11, 2006/7

#### 1-2. 著書

Tamai, Akira, 角田信恵(共著), *The Woman's World*, 2 vols:監修・編集, アティーナ・プレス, 1280p., 2008/1

玉井暲, 大森文子(共編著)『Paul Harvey, Eco-Friendly Japan:注解』英宝社, 106p., 2008/1

玉井暲(編)『批評理論を読む、テクストを読む——文学研究方法論への挑戦』大阪大学文学研究科英米文学研究室, 196p., 2007/3

玉井暲, 新野緑(共編著)『<異界>を創造する——英米文学におけるジャンルの変奏』阪大英文学叢書3号, 英宝社, 400p., 2006/11

Tamai, Akira, 武田美保子(共編), *New Woman Fiction*, Part II:監修・編集, アティーナ・プレス, 2000p., 2006/7

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

玉井暲 「ワイルドとジャーナリズム」日本ワイルド協会第32回大会:シンポジウム, 日本ワイルド協会, 慶応義塾大学, 2007/12

玉井暲 「シャーロット・ブロンテ小説の可能性——『シャーリー』の場合」日本ブロンテ協会2007年大会, 日本ブロンテ協会2007年大会, 関西外大, 2007/10

玉井暲 「ペイター文学の可能性」日本ペイター協会第46回年次大会・研究発表会, 日本ペイター協会, 北星学園大学, 2007/10

玉井暲 「ペイター文学の原風景」日本ペイター協会第46回年次大会・研究発表会:シンポジウム, 日本ペイター協会, 北星学園大学, 2007/10

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

玉井暲 大阪大学共通教育賞(2006年1学期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:玉井暲

課題番号:18320049

研究題目:19世紀イギリスにおける男性性の構築と脱構築のポリティクス

研究経費:2006年度 直接経費 6,000,000円 間接経費 1,800,000円

2007年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

研究の目的:

イギリス19世紀世紀末の作家ウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドを中心にして、この時代の主要な小説家・詩人・批評家・思想家のテキストと資料、および当時の文化的・歴史的文献を綿密に読解・検証することを通して、男性性をめぐる言説において構築と脱構築の相反するベクトルが交錯するありようを研究する。

## 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2004年度～2008年度、研究助成、助成金獲得者:玉井暁

助成金名:日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト

研究題目:「環境と文学——環境文学の可能性とその社会的効用」:文学・芸術の社会的媒介機能——芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006年度 直接経費 1,150,000円

2007年度 直接経費 1,350,000円

研究の目的:

英米文学、ドイツ文学、フランス文学から日本文学、比較文学におよぶ世界の主要な文学を対象にして、文学と環境との関わりを多面的、かつ総体的に検討し、環境文学の成立する可能性を探る。

## 1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オスカー・ワイルド協会・理事	2007年4月～現在に至る
日本英文学会関西支部・支部長	2006年4月～現在に至る
日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集顧問	2004年4月～現在に至る
日本ブロンテ協会・理事	2004年4月～現在に至る
大阪大学英文学会・会長	2003年11月～現在に至る
日本英文学会中国四国支部・学会誌『中国四国英文学研究』編集委員	2003年10月～2007年10月
日本オスカー・ワイルド協会・会長	2003年4月～2007年3月
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・理事	2001年11月～現在に至る
日本テキスト研究学会・幹事	2001年8月～現在に至る
日本英文学会・理事	2001年4月～2007年3月
日本ジョージ・エリオット協会・理事	1997年11月～現在に至る
日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集委員	1993年4月～1997年3月
日本トマス・ハーディ協会・運営委員	1992年10月～現在に至る
日本ウォルター・ペイター協会・理事	1991年10月～現在に至る

## 2. 米井 力也 教授

1955年生。京都大学文学部卒。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(文学)(京都大学、2001)。金蘭短期大学講師、同助教授、大阪外国語大学日本語講座助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:キリシタン文学／翻訳研究。

### 2-1. 論文

米井力也 「解説:規範と逸脱」亀井孝・大藤時彦・山田俊雄(共編)『日本語の歴史4』平凡社, pp. 469-477, 2007/4

米井力也 「キリシタンの翻訳:異文化としての〈キス〉」立教大学日本文学科(編)『立教大学日本文学科創設50周年記念国際シンポジウム「21世紀の日本文学研究」報告書』立教大学日本文学科, pp. 90-94, 2007/2

米井力也 「トンボをかける」新村出記念財団(編)『泰山木』新村出記念財団, pp. 55-57, 2006/5



## 2-2. 著書

---

なし

## 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

## 2-4. 口頭発表

---

なし

## 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

2-6-1. 2007年度、萌芽研究 代表者:米井力也

課題番号:17652022

研究題目:映像翻訳論:日本映画とアニメにおける字幕・吹替版の翻訳研究

研究経費:2007年度 直接経費 700,000円

研究の目的:

日本のアニメーションは日本文化を代表するジャンルの一つと考えられているが、受容する側の問題についてはこれまであまり考察されていない。本研究は映像翻訳を対象とする翻訳研究であり、海外における日本像の形成あるいは日本文化のさまざまな位相を逆照射するための新たな視座を設定するものである。

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

新村出記念財団評議員

2004年7月～2007年7月

## 3. 平田 由美 教授

大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

### 3-1. 論文

---

Hirata, Yumi, "Recasting Women: Biographical discourse in Modern Japan"『지식의 근대기획, 미디어의 동아시아 (知の近代企画・メディアの東アジア)』成均館大学東アジア学院シンポジウム予稿集, pp. 147-185, 2007/12

平田由美 「文学言語としての「話法」——近代日本文学における表現史と研究史——」『表現研究』(表現学会), 86, pp. 9-19, 2007/10

平田由美 「《国=家の物語》を組み替える——「戦後文学」としての在日朝鮮人文学——」西川祐子(編)『戦後という地政学』東京大学出版会, pp. 183-214, 2006/11

### 3-2. 著書

---

なし

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 3-4. 口頭発表

平田由美 「女性の改鑄——近代日本における「女伝」という言説——」, 知の近代企画・メディアの東アジア, 成均館大学東アジア学術院, 成均館大学, 2007/12

Hirata, Yumi “On the Study of ‘Ecriture Migrante’ As a Theme for Globalization Studies”, Language and the Literature of Migration in East Asia, Cornell University East Asia Program, Cornell University, 2007/10

Hirata, Yumi “On the Study of “Literature of Movement” as a Theme for Globalization Studies”, NORTHEAST ASIA:RE-IMAGINING THE FUTURE, Australian National University, Australian National University, 2007/7

平田由美 「文学言語としての「話法」——近代日本文学における表現史と研究史——」表現学会第44回全国大会シンポジウム: 話法, 表現学会, 龍谷大学, 2007/6

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

### 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:19520154

研究題目:近代日本における「移動文学」のジェンダー分析

研究経費:2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

20世紀の日本文学を「移動の文学」という視点から再考することを目的に、記号や消費行動など現代社会の表層的現象の底流にある、個別的でありながら普遍的な営みとしての人の「移動」と、国境や言語を越える行為から生み出される「文学」の可能性をグローバルな文脈において探究する。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2004年度～2006年度、受託研究、助成金獲得者:平田由美

助成金名:

研究題目:日本文学分野に関する学術動向の調査・研究

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 1,500,000円

研究の目的:

日本文学の分野に関する国内外の学術研究の動向について、個別の研究状況および国内外の学術交流の現状を調査し、研究助成事業をはじめとする日本学術振興会の各種事業の実施に資することを目的とする。

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員

2004年4月～2007年3月

## 4. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、同講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:アメリカ文学。

#### 4-1. 論文

---

石割隆喜 「死者の〈怨〉の二つの型——フロイトの「文学」、*Vineland* の “Cahmmunism”」『関西英文学研究』(日本英文学会関西支部), 1, pp. 117-133, 2007/12

石割隆喜 「Is Pynchon Too Much with the World? —— “Is It O.K. to Be a Luddite?” と「ビン・ラディン」」『大阪外国語大学英米研究』(大阪外国語大学英米学会), 31, pp. 33-46, 2007/3

#### 4-2. 著書

---

なし

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

石割隆喜(書評) 「三浦玲一『ポストモダン・バーセルミ——「小説」というものの魔法について』」『英文学研究』(日本英文学会), 83, pp. 204-208, 2006/11

#### 4-4. 口頭発表

---

石割隆喜 「シュールリアリスティックな資本主義——*Gravity's Rainbow* における幽霊的 V2」日本英文学会関西支部第2回大会, 日本英文学会関西支部, 大阪大学, 2007/12

石割隆喜 「形式的な、あまりに形式的な——ピンチョンの「脱小説」」日本英文学会関西支部第1回大会シンポジウム: 文学研究の新しい可能性, 日本英文学会関西支部, 大阪大学, 2006/12

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 2000/5

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

4-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 石割隆喜

課題番号: 15520178

研究題目: 現代アメリカ文学における身体意識の変容とメディアとの関係

研究経費: 2006年度 直接経費 500,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、ポストモダンの状況においてますます加速化される身体とテクノロジーとのインタラクションにより、これまでになく多様化し、根源的に変容を遂げつつある人間の身体意識に着目し、日常の隅々にまで浸透してやまない広義のメディアが、主体の形成にどのように本質的に関わっているのかを、新たなフロンティアとしての身体という広く「アメリカ」的なコンテキストを視野に入れながら、具体的には主に20世紀アメリカの小説と演劇における身体表象の人種、ジェンダー、階級、イデオロギーといった面からの分析を通して、通時的かつ共時的に明らかにしようとするものである。

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本アメリカ文学会・幹事

2006年4月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員

2005年4月～2007年3月

## 2-27 言語生態論

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日々国際化し、多岐にわたって情報化していく現代社会においては、言語の果たす役割がますます増大の一途をたどっている。言語は多様化する現代社会で用いられるとともに、それ自身がさまざまな側面で変容しつつあるので、その実態を適切に理解し把握するためには、これまでの言語研究の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を考えることが必要になってきた。このような視点と方法によって言語を研究するために、本コースでは、次の2つの目標を設定している。

(1) 5名の教員が個々に担当する講義および演習をとおして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につける。

(2) 5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において、院生が各自の興味にしたがって設定するテーマに関する研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、言語を分析するための実践的な能力を身につける。

本コースの特色は、一般の大学院生や、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成するところにある。従来の言語研究の考え方を十分に理解したうえで、既存の枠組みを超えた実践的な課題を設定し、そのための新たな分析方法を模索して研究を進め、その結果を社会に還元していこうとする点が、本コースのもっとも大きな特色である。

### I. 現在の組織

#### 1. 教員(2008年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：大庭 幸男、加藤 正治、田野村忠温、神山 孝夫

准教授：渋谷 勝己

#### 2. 在学生(2008年4月現在)

2008年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
—	5	—	—	—	—	—	—	—

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

### 3. 修了生・卒業生(2006年度～2007年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'06	—	—	—	—	—
'07	—	—	—	—	—
小計	—	—	—	—	—

## Ⅱ. 教員の研究活動(2006年度～2007年度の過去2年間)

### 1. 大庭 幸男 教授

1949年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999年4月より現職。専攻:英語学。

#### 1-1. 論文

大庭幸男 「結果構文の構造とその派生方法について」金子義明他『言語研究の現在』開拓社, pp. 134-153, 2008/3

大庭幸男 「結果構文の統語的特徴とその構造について」村井和彦・西岡宣明他『九大英文学』(九州大学大学院 英語学・英文学研究会), 50, 九州大学大学院 英語学・英文学研究会, pp. 261-280, 2008/3

大庭幸男 「結果構文の意味と構造」『インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』大阪大学文学研究科英語学, pp. 1-21, 2007/3

大庭幸男 「英語の基本文型の見直し」中村捷・金子義明『英文法研究と学習文法のインターフェイス』東北大学文学研究科, pp. 199-224, 2007/2

#### 1-2. 著書

Oba, Yukio, Sadayuki Okada(共編), *Osaka University Papers of English Linguistics*, 12, Dept. of English Linguistics, Osaka University, 150p., 2008/3

Oba, Yukio, Sadayuki Okada (共編), *Osaka University Papers of English Linguistics*, 11, Dept. of English Linguistics, Osaka University, 145p., 2007/3

#### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

#### 1-4. 口頭発表

大庭幸男 「英語の基本文型の見直しについて」ワークショップ:英文法:理論と学習文法のインターフェイス, 東北大学文学研究科, 2006/8

#### 1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 大阪大学共通教育賞(2006年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

大庭幸男 1998年度市河賞, 財団法人 語学教育研究所, 1998/10

#### 1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男  
課題番号:18520381

研究題目:インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究

研究経費:2006年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

英語の結果構文については、これまでさまざまな理論的な枠組みで研究されてきた。しかし、そこで議論されている例を見ると、ごく少数のタイプの動詞や結果述語の例に限られており、結果構文の全体像が把握しにくい。そこで、本研究では、実際の言語使用状況をインターネットによって調査し、次の2点を明らかにすることを目的とする。

(1) 結果構文に生起する動詞の種類と意味的特徴を明らかにする。

(2) 結果構文に生起する動詞と結果句の選択制限を明らかにする。

特に、他動詞と同様に非対格動詞と非能格動詞の結果構文の使用状況についてはこれまであまり研究されていないので、具体的にどのような動詞が結果構文に用いられているかを実際の言語使用データにあたって調査を行う。

### 1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 1-8. 外部役員等の引き受け状況

財団法人 語学教育研究所・「市河賞」審査委員	2007年4月～現在に至る
日本英文学会・監事	2007年4月～2008年3月
日本英語学会・新人賞選考委員会委員	2007年4月～現在に至る
東北大学文学研究科・外部評価委員	2006年10月～2006年12月
日本英語学会・理事	2005年12月～現在に至る
日本英語学会・評議員	2004年4月～現在に至る
日本英語学会・編集委員会委員	2003年10月～2007年9月
関西言語学会・運営委員	1993年12月～現在に至る

## 2. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科英文学専攻(英語学講座)博士課程前期課程修了。文学修士(名古屋大学、1979)。名古屋大学文学部助手、甲南女子大学助手、同講師、大阪外国語大学講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

### 2-1. 論文

なし

### 2-2. 著書

なし

### 2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

### 2-4. 口頭発表

なし

### 2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし



## 2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

なし

## 2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

---

なし

## 2-8. 外部役員等の引き受け状況

---

日本英文学会関西支部・大会準備委員

2006年12月～現在に至る

名古屋大学英文学会・編集委員

2006年4月～現在に至る

## 3. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学。

### 3-1. 論文

---

丸山岳彦, 田野村忠温(共著)「コーパス日本語学の射程」国立国語研究所『日本語科学』編集委員会(編)『日本語科学』22(国立国語研究所), pp. 5-11, 2007/10

田野村忠温 「コピュラ再考」藤田保幸・山崎誠(共編)『複合辞研究の現在』(和泉書院), pp. 249-270, 2006/11

### 3-2. 著書

---

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦(共著)『コーパス日本語学ガイドブック』特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, 201p., 2007/9

### 3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

---

なし

### 3-4. 口頭発表

---

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦「平成19年度研究進捗状況報告:日本語学班 コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」特定領域研究「日本語コーパス」平成19年度公開ワークショップ, 特定領域研究「日本語コーパス」総括班, 時事通信ホール, 2008/3(『特定領域研究「日本語コーパス」平成19年度公開ワークショップ予稿集』2008/3)

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦「平成18年度研究進捗状況報告:日本語学班 コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」特定領域研究「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ, 特定領域研究「日本語コーパス」総括班, 時事通信ホール, 2007/3(『特定領域研究「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ予稿集』2007/3)

### 3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

---

なし

## 3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

---

3-6-1. 2004年度～2006年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田野村忠温

課題番号:16520240

研究題目:電子資料に基づく日本語研究の新領域の開拓および関連の諸問題に関する考察

研究経費:2006年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

研究の目的:

日本語研究において、考察の土台となる用例を収集する手段として電子資料を利用することは昨今普及・一般化してきたが、電子資料の可能性や問題点は十分に検討・理解されていない。本研究においては、電子資料を用いた日本語の新たな研究領域・研究方法を開拓するとともに、電子資料に関連した一般的な諸問題について考察する。

3-6-2. 2006年度～2010年度、特定領域研究、代表者:田野村忠温

課題番号:18061004

研究題目:コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費:2006年度 直接経費 10,600,000円 間接経費 0円

2007年度 直接経費 8,800,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、今後の日本語研究にとって不可欠の存在となることが確実なコーパス(電子媒体の言語資料)について、具体的な事例研究を通してその利用の価値を明らかにし、従来の日本語研究を精密化するとともに日本語の新しい研究領域・手法を開発することを主たる目的とする。

また、コーパスを用いた日本語研究の啓蒙・普及を図ること、および、本特定領域研究において計画され、将来日本語研究の標準的資料として広範に利用されるはずの大規模な日本語書き言葉コーパスの構築の進行に伴い、それを日本語研究に適用し、その過程で得られた知見をコーパスの構築にフィードバックすることをも目的とする。

3-6-3. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田野村忠温

課題番号:19520342

研究題目:大規模な電子資料の利用による日本語文法の未開拓の基礎的諸問題の原理・実証的考察

研究経費:2007年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、日本語の大規模な電子資料を用いて日本語文法の未開拓の基礎的な諸問題を考察することにより、電子資料に基づく日本語研究の基盤の形成と発展に寄与するとともに、電子資料利用の目的である日本語研究そのものに対して実質的な貢献をもたらすことを目的とする。

日本語研究の隆盛とその中での特定のテーマへの研究の集中のかげで、日本語にとって非常に基礎的でありながら表面的な言語事実の観察さえ手付かずの状態にとどまっている文法の問題もある。そうした問題について抜本的な再考と電子資料に基づく精密な分析・記述を行うとともに、大規模な電子資料の利用によって初めて可能になる文法研究の新領域の開拓を目指す。

### 3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

### 3-8. 外部役員等の引き受け状況

文部科学省・科学技術・学術審議会専門委員	2007年2月～2007年3月
国立国語研究所・『日本語科学』特集編集委員	2007年1月～2007年10月
日本言語学会・委員および常任委員	2006年4月～現在に至る
日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員	2004年8月～2006年7月

## 4. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学外国語学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学文学研究科教授。専攻:印欧語比較言語学、音声学。

#### 4-1. 論文

神山孝夫 「スラブの2つの文字の由来について」 大阪外国語大学 ヨーロッパ I 講座(編) 『ロシア・東欧研究』, 12, p. 13-50, 2007/9

#### 4-2. 著書

神山孝夫 『印欧祖語の母音組織: 研究史要説と試論』 大学教育出版, 351pp., 2006/10

#### 4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

神山孝夫 「終刊にあたって」 大阪外国語大学 ヨーロッパ I 講座(編) 『ロシア・東欧研究』, 12, p. 127-128, 2007/9

神山孝夫 『ロシア・ソビエト研究』、『ロシア・東欧研究』 総目次・掲載記事総目録」 大阪外国語大学 ヨーロッパ I 講座(編) 『ロシア・東欧研究』, 12, p. 129-146, 2007/9

#### 4-4. 口頭発表

なし

#### 4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

#### 4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

#### 4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

#### 4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪言語研究会・世話人(代表)

2008年1月～現在に至る

### 5. 渋谷 勝己 准教授

1959年生。東京外国語大学外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学、1990)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授を経て、1996年10月より現職。専攻: 日本語学。

#### 5-1. 論文

渋谷勝己 「山形市方言の文末詞ジェ」『阪大社会言語学研究ノート』8, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 1-13, 2008/3

渋谷勝己 「文末詞の長音化における語用論的機能」今石元久(編)『音声言語研究のパラダイム』和泉書院, pp. 381-398, 2007/12

渋谷勝己 「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『月刊言語』36巻12号, 大修館書店, pp. 18-25, 2007/12

渋谷勝己 「社会言語学からみた口語と文語」『文学』8巻6号, 岩波書店, pp. 115-122, 2007/11

渋谷勝己 「記述文法から見る『方言文法全国地図』」『日本語学』26-11, 明治書院, pp. 162-172, 2007/9

渋谷勝己 「学習者言語のバリエーション」『BATJ Journal』(The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language), 8, The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language, pp. 41-59, 2007/9

渋谷勝己 「なぜいまバリエーションか」『日本語教育』134, 日本語教育学会, pp. 6-17, 2007/7

## 5-2. 著書

佐々木冠, 渋谷勝己, 工藤真由美他『シリーズ方言学 3 方言文法』岩波書店, pp. 47-92, 2006/11

## 5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己(辞典項目)「日本語学と国語問題」飛田良文(編)『日本語学研究事典』明治書院, pp. 35-36, 2007/1

渋谷勝己(書評)「窪田光男『第二言語習得とアイデンティティ——社会言語学的適切性習得のエスノグラフィー的ディスコース分析——』」『第二言語としての日本語の習得研究』9, 第二言語習得研究会, pp. 115-127, 2006/12

渋谷勝己(辞典項目)「日本語の多様性」鈴木良二(編)『言語科学の百科事典』丸善, pp. 337-355, 2006/7

友定賢治, 日高水穂, 渋谷勝己(共著)(展望)「日本語文法学界の展望 5 方言文法」『日本語文法』6 巻/1 号, 日本語文法学会, pp. 180-186, 2006/4

## 5-4. 口頭発表

渋谷勝己「学習者言語のバリエーション」英国日本語教育学会第9回大会講演, 英国日本語教育学会, Royal Holloway, London University, 2006/9

## 5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

## 5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2007 年度～2009 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:19520395

研究題目:山形市方言における動詞述語文の記述的研究

研究経費:2007 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

山形市方言の動詞述語文をとりあげて、その格、ヴォイス、アスペクト、テンス、モダリティの諸側面を網羅的に記述することを目的とする。

## 5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

## 5-8. 外部役員等の引き受け状況

第二言語習得研究会・事務局	2008 年 1 月～現在に至る
社会言語科学会・理事	2006 年 8 月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2006 年 7 月～現在に至る
第二言語習得研究会・ジャーナル委員長	2006 年 1 月～2007 年 12 月
日本語学会・常任査読委員	2003 年 6 月～2006 年 6 月
日本語教育学会・査読委員	2003 年 1 月～現在に至る
日本言語政策学会・理事	2002 年 11 月～2007 年 3 月

## 2-28 文化基礎学(広域文化形態論講座)

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

文化基礎学の名称に見られるとおり、主に哲学的な観点から人文学全体を貫く基礎的な諸問題を人文学のみならず、場合によっては社会科学、自然科学の領域をも視野に入れて研究する。

2003年度までは「科学と社会」をテーマとする研究プロジェクトを遂行してきたが、それを受けて2004年度からは3年間「コミュニケーションと現代社会」を共同研究のテーマとして取り上げた。コミュニケーションの重要さはいつの時代でも変わることはないが、現代社会にはコミュニケーションに伴う特有の諸位相がある。各領域の専門家と非専門家(市民)との公共的対話をサポートすることも重要である。

### I. 組織

#### 1. 教員(2006年度)

教授 1(兼任) 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：中岡 成文(兼任)

### II. 組織としての教育・研究活動(2006年度)

#### 1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

#### 2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

#### 3. 刊行物

『コミュニケーションと現代社会』(平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書)

#### 4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

講演会「ネオ・ソクラテック・ダイアログ：科学コミュニケーションの利害関係者  
(ステイクホルダー)的アプローチ～オーストリアの経験から」

2006年7月7日

#### 5. 専門分野主催の研究会等活動状況

英語プレゼンテーション・スキル向上勉強会(週1回)

自然観察会「自然観察会に哲学カフェを組み込む試み」：(万博記念公園にて)  
(大阪大学大学院臨床哲学研究室と共催)

2006年11月26日

## 2-29 地域社会論(広域文化形態論講座)

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本研究分野は、主に歴史学、考古学、地理学、民族学、民俗学などの学問分野に関わるテーマについて、本研究科内外の研究者と博士後期課程の大学院学生による共同研究を行い、人文学の新たな分野を開拓することをめざしています。2004年度から2006年度の3年間については「死と生の習俗をめぐる比較史研究」をテーマとする共同研究が実施されました。そして、日本、アジア、欧米などの諸文明圏、あるいは文明圏のなかの個別地域における、死の習俗のあり方とその「生」のあり方への影響、およびその時代的变化等の意味、さらに習俗という実態と理念との間の相関などを、地域社会や国家・宗教・民族・ジェンダーの問題と関連させながら解明するとともに、これら個別研究を人類史全体のなかに位置づけることをめざしました。また、本共同研究の成果を教育に還元する一環として、共同研究のメンバーである福永伸哉・平雅行・荒川正晴・片山剛に日本史学講座教授の梅村喬を加えた5名で、2006年度第二学期のOUSSEP授業として、“History, Manners and Customs, and Interchange -Asia and Japan-“を開講し、その授業記録集を冊子として刊行した。

### I. 組織

#### 1. 教員(2006年度)

教授 1(兼任) 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：片山 剛(兼任)

### II. 組織としての教育・研究活動(2006年度)

#### 1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

#### 2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

#### 3. 刊行物

Tsuyoshi Katayama (ed.), *Course Records “History, Manners and Customs, and Interchange -Asia and Japan-“ in the Osaka University Short-term Student Exchange Program (OUSSEP) 2006 Fall Semester*, Toyonaka: Comparative Studies of Regional Societies, Graduate School of Letters, Osaka University, 2007, 90p.

#### 4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし



## 5. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2006年度】

共同研究テーマ「死と生の習俗をめぐる比較史研究」 研究報告 15 本	
牧田満知子（本研究科博士後期課程）「開発福祉学：開発主義という考え方の展開とタイの社会福祉」	2006年12月16日
片山剛（本研究科教授）「江蘇省・上海市における寺院・僧侶・信者の需要供給の現況：位牌祭祀を中心に」	2006年12月16日
長井伸仁（徳島大学助教授）「パンテオン：その歴史と儀礼(1791 - 2002年)」	2006年11月25日
江川温（本研究科教授）「中世末期・16世紀における国王の葬儀と「葬儀像」(effigie)」	2006年7月22日
中村生雄（学習院大学教授）「死者と生者をつなぐ観念と習俗：その生成と終焉」	2006年7月22日
村田路人（本研究科教授）「日本近世における政治的重要人物の死と国家・社会：成果と課題」	2006年7月22日
平雅行（本研究科教授）「日本の古代中世における死の習俗」	2006年7月22日
指昭博（神戸市外国語大学教授）「死とイングランド宗教改革：研究史整理」	2006年7月8日
長井伸仁（徳島大学助教授）「近代フランスにおける「死の習俗」：共和派を中心に」	2006年7月8日
早瀬晋三（大阪市立大学教授）「紙の慰霊碑としての戦記もの：フィリピンを事例に」	2006年7月8日
荒川正晴（本研究科教授）「ソグド人のゾロアスター教・仏教信仰と埋葬習俗・冥界観：近年における研究の整理と展望」	2006年7月8日
片山剛（本研究科教授）「中国における死生観と死の儀礼をめぐる諸研究について」	2006年6月24日
福永伸哉（本研究科教授）「古墳時代墳墓要素の変動と政治権力」	2006年6月24日
榎本文雄（本研究科教授）「インド仏教における死者観の研究整理と展望」	2006年6月24日
湯浅邦弘（本研究科教授）「父母の合葬：上博楚簡『昭王毀室』について」	2006年5月27日

## 2-30 言語文芸学(広域文化表現論講座)

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、広く言語表現をめぐる諸領域に関連して、文学・芸術作品とそれが生まれた時代や社会背景との相互関連、また広く人間にとっての文学・芸術の意味を追求するため、多元的・総合的に言語文芸の諸相を考究する学際的な共同研究を進めてきたが、2008年度の文化動態論講座の新設に伴い、2007年度で終了することとなった。

2005年度～2007年度は、日本文学兼任の飯倉洋一教授が共同研究「テキストの生成と変容」を開催、文学テキストのみならず、思想・芸術(絵画・音楽・演劇)の「作品」をもテキストととらえ、文字通り〈広域文化表現論〉の立場から、テキストの生成と変容の問題を考えた。テーマとしては、①テキストが生成されるための、広い意味での〈場〉の問題。②テキストの推敲・添削・改作などをめぐる問題。③テキストの引用・翻案・パロディなどをめぐる問題などを扱っており、多角的な観点からテキストの生成と変容の問題に迫り、テキストの動的側面をとらえる方法を模索した。これと連動する形で、上田秋成の『文反古』というテキストを稿本本文から刊本本文への変容を分析しつつ、読解を進めた。

### I. 組織

#### 1. 教員(2006年度～2007年度)

教授 1(兼任) 助教授(准教授) 0 講師 0 助手(助教) 0

教授：飯倉 洋一(兼任)

### II. 組織としての教育・研究活動(2006年度～2007年度)

#### 1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

#### 2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

#### 3. 刊行物

【2007年度】

飯倉洋一編『テキストの生成と変容』2005～2007年度 大阪大学大学院文学研究科 広域文化表現論講座共同研究  
研究成果報告書, 2008/3/31

飯倉洋一・木越治編『秋成文学の生成』(森話社)2008/2/20

#### 4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

## 5. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2007年度】

- 第14回研究会 2007年7月19日  
蜂矢真郷（大阪大学文学研究科教授）「語の変容と類推——語形成における変形について——」
- 第13回研究会 2007年6月21日  
加藤洋介（大阪大学文学研究科准教授）「書写という行為——『伊勢物語』テキストの生成と変容——」
- 第12回研究会 2007年5月17日  
柏木隆雄（大阪大学文学研究科教授）「フランソワ・ヴィヨンから『ヴィヨンの妻』へ——太宰治の挑戦——」

【2006年度】

- 第11回研究会 2007年3月16日  
特別研究会 秋成——テキストの生成と変容——  
一戸渉（総合研究大学院大学 博士後期課程）「秋成による古典テキストの校訂——『土佐日記解』自筆本三種を中心に——」  
コメンテーター 山下久夫（金沢学院大学教授）  
辻村尚子（大阪大学大学院博士後期課程）「テキストの生成——『文反古』とその周辺——」  
コメンテーター 稲田篤信（首都大学東京教授）  
近衛典子（駒澤大学教授）「『世間妾形気』の生成」  
コメンテーター 井上泰至（防衛大学校助教授）  
木越治（金沢大学教授）「垂直な改稿、水平な改訂——『春雨物語』の生成とその評価をめぐって——」  
コメンテーター 風間誠史（相模女子大学教授）・長島弘明（東京大学教授）・飯倉洋一（大阪大学教授）
- 第10回研究会 2006年12月21日  
永田靖（大阪大学文学研究科教授）「テキストとしての「演出台本」——スタニスラフスキ『かもめ』演出台本(1898)を中心に——」
- 第9回研究会 2006年10月19日  
上野修（大阪大学文学研究科教授）「「無神論者」スピノザの聖書解釈」
- 第8回研究会 2006年8月3日  
出原隆俊（大阪大学文学研究科教授）「日本近代文学における先行作品の摂取について——一葉と鷗外を中心に——」
- 第7回研究会 2006年6月15日  
和田章男（大阪大学文学研究科教授）「「生成研究」の方法と課題——プルーストを中心に——」
- 第6回研究会 2006年5月18日  
伊東信宏（大阪大学文学研究科助教授）「バルトークによるピアノ曲《ミュゼット》の生成と変容」

## 2-31 留学生専門教育

### はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

### 教員の研究活動(2006 年度～2007 年度の過去 2 年間)

#### 1. 鄭 聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期過程修了。博士(学術、神戸大学、1999年)。日本学術振興会外国人特別研究員(大阪大学)を経て現職。専攻:言語学/韓国語学、日本語学。

##### 1-1. 論文

Chung Sung-Yeo, “Where does the ambiguity between causative and passive come from?: an investigation on the functions of Korean verbal suffixes *-i/-hi/-li/-ki*” Tokusu Kurebito(編) *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses.*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies., pp. 43-101, 2008/3

鄭聖汝 「使役と受身の曖昧性はどこからくるか? ——韓国語の動詞接辞 *-i/-hi/-li/-ki* の機能を求めて——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』48, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 97-166, 2008/3

鄭聖汝 「大阪城は誰が建てたか? ——使役連続性を超えて:日韓対照の観点から——」『神戸言語学論叢:西光義弘教授還暦記念号』5, 神戸大学文学部言語学研究室, pp. 21-33, 2007/12

Shibatani Masayoshi, Chung Sung-Yeo(共著), “On Grammaticalization of Motion Verbs: A Japanese-Korean Comparative Perspective” Naomi Hanako McGloin and Junko Mori(編) *Japanese/Korean Linguistics*, (Japanese/Korean Linguistics Conference), 15, CSLI Publications & SLA, pp. 21-40, 2007/7

鄭聖汝 「使役連続性を超えて——形式と意味の対応関係を改める——」Peter E. Hook and Yoshimi Miyake(共編)『秋田大学国際シンポジウム論文集:ことばと文学・ことばとパワー』, 秋田大学, pp. 20-30, 2007/7

鄭聖汝 「使役構文の拡張と語用論的条件」『日本語用論学会第 9 回大会発表論文集』2, 日本語用論学会, pp. 219-222, 2006/12

##### 1-2. 著書

鄭聖汝 『韓日使役構文の機能的類型論研究——動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ——』くろしお出版, 304p., 2006/8

##### 1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

##### 1-4. 口頭発表

鄭聖汝 「使役連続性を超えて——形式と意味の対応関係を改める——」Akita University International Symposium: Language and Literature & Language and Power, Akita University, 2007/7

鄭聖汝 「使役構文の拡張と語用論的条件」語用論学会ワークショップ, 桃山学院大学, 2006/12

Pardeshi Prashant, Hook Peter E., Chung Sung-Yeo “In search of the origins of compound verb in Marathi”SALA 26, Central

Institute of Indian Languages, 2006/12

鄭聖汝 “直接使役と間接使役、何が問題か——新しいモデルの提案のために——”Japanese/Korean Linguistics Pre-conference,  
京都大学, 2006/10

鄭聖汝 「SASE はなぜ、無生物被使役者を取ることができるか？」第 26 回国際日本語教育学会, Columbia University, 2006/8

**1-5. 受賞歴**(年度を限定しない)

---

なし

**1-6. 科学研究費補助金の獲得状況**(研究代表者となったもの)

---

なし

**1-7. その他の外部資金の受け入れ状況**

---

なし

**1-8. 外部役員等の引き受け状況**

---

なし

# **付 録**

## **2007 年度実施アンケート結果**

### **「平成 19 年度 大学院生の教育・研究 環境等に関するアンケート」**

**（付：「平成 19 年度 大学院修了生アンケート」）**



# 付 録

## 「平成 19 年度 大学院生の教育・研究環境等に 関するアンケート」実施結果報告

(付:「平成 19 年度 大学院修了生アンケート」)

### I 概要と分析

#### ◆概観

文学研究科評価・広報室では、文学研究科に在籍するすべての大学院生を対象に、2007 年 10 月、標記のアンケートを行った。対象学生数は、博士前期課程が 192 名、博士後期課程が 290 名。このうち、博士前期課程は 79 名から回答を得、博士後期課程は 73 名から回答を得た。回答率は、全体で 31.5%。博士前期課程では 41.2%、博士後期課程では 25.2% となり、全体では前回の回収率 (37.7%) をやや下回った。また、博士前期課程の回収率は博士後期課程をかなり上回ったが、評価結果の偏差は両者の間でほとんどない。

設問は都合 19 問。このうち設問 14 と設問 19 は自由記述となっており、各設問の内容は次の通りである。

1. あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか。
2. 1 に記した課程に入って何年目になりますか。
3. 所属する専門分野は次のどれですか。
4. 指導教員の指導について、どのような状況にありますか。
5. 現在受けている教員の指導に満足していますか。
6. 専任教員が開講する講義・演習の数や種類は十分ですか。
7. 専門分野の非常勤講師などの招聘数は十分ですか。
8. 大阪大学の授業は、講義・演習・実習等のバランスが取れていると思いますか。
9. 大阪大学の授業は、授業時間外の学習が必要だと思いますか。
10. 授業時間外に学習することができていますか。
11. 大阪大学において、人文学の基礎的な学問的方法や知識について深めることができたと思いますか。
12. 大阪大学において、研究を推進する能力や総合的な判断力を高めることができたと思いますか。
13. 大阪大学において、行政、教育、芸術等の諸活動をマネージできるような教養や能力を高めることができたと思いますか。
14. 大学院の在学中にどのような資格を取得しましたか。TOEFL や TOEIC を受験した方は何年度に何点とれたかをお書き下さい (記述欄に。複数回受験した方はそれぞれお書き下さい)。
15. 学内・学外を含め、自主的な勉強会や研究会に参加していますか。
16. 今年度のあなたの研究の進行状況はいかがですか。
17. 今年度のあなたの研究は年度初めに提出した研究計画書どおりに進んでいますか。
18. TA 業務に従事したことはありますか。TA 業務と自己の研究の関係について、どう考えていますか。
19. 全般的に、学業の成果に関して、阪大大学院文学研究科で受けた教育がどのような成果や効果を上げていると思われますか。具体的なご意見をお聞かせください (記述欄)。

以上のうち、設問 14 と 19 の記述式回答はすべて割愛することとし、設問 1～18 の数値集計を II に示す。

## ◆問題点の分析

「平成 19 年度大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」の集計結果は、大学院生の多くが現在の教育・研究環境にある程度満足していることを示しているように思われる。ただし、設問の 13「大阪大学において、行政、教育、芸術等の諸活動をマネージできるような教養や能力を高めることができましたか」との回答では、特に博士前期課程において、ややネガティブな意見が目立った。このことは恐らく、文学研究科の現在の教育体制が研究者養成に傾斜し、社会人高度専門教育に対する観点やスキル等をいまだ十分には形成し得ていないことを意味すると思われる。

また、設問の 16「今年度のあなたの研究の進行状況はいかがですか」、設問の 17「今年度のあなたの研究は年度初めに提出した研究計画書どおりに進んでいますか」においても同様に、ややネガティブな意見が目立った。このことは、大学院生の多くが自身の研究に悩みをかかえ、研究活動を必ずしも順調に展開できていないことを意味しているように思われる。

現在の教育・研究環境にはある程度の満足を感じながら、一方では自身の研究活動に多くの不安をかかえる大学院生の現状は、研究者として就職できる見通しの立ちにくい現在の状況では致し方ない面もあるが、文学研究科のアドミッション・ポリシーに「デザイン能力の養成」を掲げている以上、教育指導体制の不備をある程度想定せざるを得ない。今回のアンケート結果が示す齟齬が何を意味するか、関係委員会・室等で今後慎重に検討されなければならないだろう。

この点についてもう一つ留意しなければならないのは、設問 19 の自由記述に次のような指摘があったことだろう。すなわち「そもそもアンケートの項目からは、学生のために行っているといった意図が全く感じられない。なぜなら、学生が学問をどのようにして行っているのかを全く知らないまま、項目を作っているようにしか見えないからである。授業を受けることで研究が進んでいくとも思っているのだろうか。われわれ学生がいかに自分で動いて知識を集め、研究を行っているか知らないのであろうか」というのである。この記述が大学院生全体の感情をどの程度代弁するかは不明だが、アンケートが大学院生の現状を把握した上での調査になっていない、との指摘は耳を傾ける必要があるだろう。教育評価・研究評価に携わる評価・広報室は、アンケート等によって大学院生の何を抽出し、それをどのように分析するか、そのノウハウ・スキルを高めていく必要があるのは、言うまでもない。

## Ⅱ 資料: 数値集計

### ◆【博士前期課程】

設問1 あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか。

所属	回答数(人)	構成比(%)
①博士前期課程	79	52.0
②博士後期課程	73	48.0
合計	152	100.0

設問2 1に記した課程に入って何年目になりますか。(前期課程)

設問3 所属する専門分野は次のどれですか。

専門分野	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①哲学・思想系	2	3	0	0	0	5	6.3
②歴史学・考古学系	10	7	2	1	0	20	25.3
③文学・語学系	13	9	2	0	1	25	31.6
④日本学・日本語学・人文地理学系	5	6	1	2	0	14	17.7
⑤芸術学系	7	8	0	0	0	15	19.0
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問4 指導教員の指導について、どのような状況にありますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①面会の上で、必要な指導が受けられる	35	32	5	3	1	76	96.2
②面会は難しいが、メールなどを通して指導は受けられる	1	0	0	0	0	1	1.3
③なかなか指導は受けられない	1	1	0	0	0	2	2.5
④ほとんど指導は受けられない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問5 現在受けている教員の指導に満足していますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①大いに満足している	16	12	2	2	0	32	40.5
②満足している	15	15	3	1	0	34	43.0
③どちらとも言えない	4	5	0	0	0	9	11.4
④あまり満足していない	2	1	0	0	1	4	5.1
⑤まったく満足していない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問6 専任教員が開講する講義・演習の数や種類は十分ですか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①十分である	15	10	2	1	0	28	35.9
②ほぼ十分である	7	15	3	2	1	28	35.9
③どちらとも言えない	9	2	0	0	0	11	14.1
④やや不十分である	6	4	0	0	0	10	12.8
⑤まったく不十分である	0	1	0	0	0	1	1.3
合計	37	32	5	3	1	78	100.0

設問7 専門分野の非常勤講師などの招聘数は十分ですか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①現状で十分である	11	6	0	1	1	19	24.1
②ほぼ十分である	8	14	2	0	0	24	30.4
③どちらとも言えない	8	9	0	1	0	18	22.8
④少し増やしてほしい	6	3	3	1	0	13	16.5
⑤大幅に増やしてほしい	4	1	0	0	0	5	6.3
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問8 大阪大学の授業は、講義・演習・実習等のバランスが取れていると思いますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	5	5	1	1	0	12	15.4
②ややそう思う	19	16	4	1	1	41	52.6
③どちらとも言えない	10	9	0	1	0	20	25.6
④あまりそう思わない	2	3	0	0	0	5	6.4
⑤まったくそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	36	33	5	3	1	78	100.0

設問9 大阪大学の授業は、授業時間外の学習が必要だと感じますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	17	18	4	0	1	40	50.6
②ややそう思う	12	10	0	2	0	24	30.4
③どちらとも言えない	7	1	1	1	0	10	12.7
④あまりそう思わない	1	4	0	0	0	5	6.3
⑤まったくそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問10 授業時間外に学習することができますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	10	9	0	1	1	21	26.6
②ややそう思う	17	15	4	1	0	37	46.8
③どちらとも言えない	6	8	1	1	0	16	20.3
④あまりそう思わない	4	0	0	0	0	4	5.1
⑤まったくそう思わない	0	1	0	0	0	1	1.3
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問11 大阪大学において、人文学の基礎的な学問的方法や知識について深めることができましたか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	11	11	4	1	0	27	34.2
②ややそう思う	19	14	1	2	1	37	46.8
③どちらとも言えない	7	8	0	0	0	15	19.0
④あまりそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
⑤まったくそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問12 大阪大学において、研究を推進する能力や総合的な判断力を高めることができましたと思いますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	9	7	2	0	0	18	23.4
②ややそう思う	18	18	3	2	0	41	53.2
③どちらとも言えない	7	8	0	1	1	17	22.1
④あまりそう思わない	1	0	0	0	0	1	1.3
⑤まったくそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	35	33	5	3	1	77	100.0

設問13 大阪大学において、行政、教育、芸術等の諸活動をマネージできるような教養や能力を高めることができましたと思いますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	1	4	0	0	0	5	6.3
②ややそう思う	9	7	1	0	0	17	21.5
③どちらとも言えない	16	13	3	2	1	35	44.3
④あまりそう思わない	10	7	0	1	0	18	22.8
⑤まったくそう思わない	1	2	1	0	0	4	5.1
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問15 学内・学外を含め、自主的な勉強会や研究会に参加していますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①参加したことがない	6	3	1	0	0	10	12.7
②参加したことがあるが、今はしていない	9	12	2	3	0	26	32.9
③月に平均3度未満程度、参加している	13	16	1	0	1	31	39.2
④月に平均3～5度参加している	7	2	0	0	0	9	11.4
⑤月に平均6度以上参加している	2	0	1	0	0	3	3.8
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問16 今年度のあなたの研究の進行状況はいかがですか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①大変順調	1	0	0	0	0	1	1.3
②順調	1	4	1	0	0	6	7.6
③ふつう	16	11	1	2	1	31	39.2
④やや不調	13	13	3	1	0	30	38.0
⑤不調	6	5	0	0	0	11	13.9
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問17 今年度のあなたの研究は年度初めに提出した研究計画書どおりに進んでいますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①計画以上	0	0	0	0	0	0	0.0
②計画通り	4	11	1	1	0	17	21.5
③あまり計画通りでない	23	15	4	2	1	45	57.0
④まったく計画通り進んでいない	5	2	0	0	0	7	8.9
⑤計画を変更した	5	5	0	0	0	10	12.7
合計	37	33	5	3	1	79	100.0

設問18 TA業務に従事したことはありますか。TA業務と自己の研究の関係について、どう考えていますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①TA業務に従事したことがあり、それは自分の研究にも意義があると感じる	7	11	2	1	0	21	26.9
②TA業務に従事したことがあるが、それは自分の研究に意義があるとは感じなかった	2	3	1	1	0	7	9.0
③TA業務に従事したことがないが、機会があれば従事してみたい	20	13	2	1	0	36	46.2
④TA業務に従事したことがないし、今後も従事したいと思わない	7	6	0	0	1	14	17.9
⑤その他	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	36	33	5	3	1	78	100.0

## ◆【博士後期課程】

設問1 あなたは博士前期課程・後期課程のどちらに属していますか。

所属	回答数(人)	構成比(%)
①博士前期課程	79	52.0
②博士後期課程	73	48.0
合計	152	100.0

設問2 1に記した課程に入って何年目になりますか。(後期課程)

設問3 所属する専門分野は次のどれですか。

専門分野	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①哲学・思想系	0	1	1	0	0	2	2.7
②歴史学・考古学系	4	5	2	2	2	15	20.5
③文学・語学系	5	6	4	5	8	28	38.4
④日本学・日本語学・人文地理学系	3	3	4	2	0	12	16.4
⑤芸術学系	4	3	3	3	3	16	21.9
合計	16	18	14	12	13	73	100.0

設問4 指導教員の指導について、どのような状況にありますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①面会の上で、必要な指導が受けられる	16	14	13	12	10	65	89.0
②面会は難しいが、メールなどを通して指導は受けられる	0	1	1	0	2	4	5.5
③なかなか指導は受けられない	0	3	0	0	0	3	4.1
④ほとんど指導は受けられない	0	0	0	0	1	1	1.4
合計	16	18	14	12	13	73	100.0

設問5 現在受けている教員の指導に満足していますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①大いに満足している	9	9	4	7	5	34	46.6
②満足している	7	5	9	3	6	30	41.1
③どちらとも言えない	0	1	1	1	0	3	4.1
④あまり満足していない	0	3	0	1	2	6	8.2
⑤まったく満足していない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	16	18	14	12	13	73	100.0

設問6 専任教員が開講する講義・演習の数や種類は十分ですか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①十分である	5	6	7	5	6	29	39.7
②ほぼ十分である	8	7	4	4	4	27	37.0
③どちらとも言えない	2	2	1	2	2	9	12.3
④やや不十分である	1	2	2	1	1	7	9.6
⑤まったく不十分である	0	1	0	0	0	1	1.4
合計	16	18	14	12	13	73	100.0

設問7 専門分野の非常勤講師などの招聘数は十分ですか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①現状で十分である	2	1	2	0	1	6	8.3
②ほぼ十分である	2	9	1	1	2	15	20.8
③どちらとも言えない	6	3	0	5	3	17	23.6
④少し増やしてほしい	2	1	10	4	4	21	29.2
⑤大幅に増やしてほしい	4	4	0	2	3	13	18.1
合計	16	18	13	12	13	72	100.0



設問8 大阪大学の授業は、講義・演習・実習等のバランスが取れていると思いますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	3	3	3	4	3	16	22.5
②ややそう思う	4	7	7	4	4	26	36.6
③どちらとも言えない	6	3	2	2	2	15	21.1
④あまりそう思わない	3	4	1	2	4	14	19.7
⑤まったくそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	16	17	13	12	13	71	100.0

設問9 大阪大学の授業は、授業時間外の学習が必要だと感じますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	7	9	2	6	6	30	42.3
②ややそう思う	6	6	7	3	2	24	33.8
③どちらとも言えない	2	1	3	0	4	10	14.1
④あまりそう思わない	1	1	0	3	0	5	7.0
⑤まったくそう思わない	0	0	1	0	1	2	2.8
合計	16	17	13	12	13	71	100.0

設問10 授業時間外に学習することができますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	4	5	4	6	7	26	36.1
②ややそう思う	9	7	8	4	5	33	45.8
③どちらとも言えない	0	3	1	1	1	6	8.3
④あまりそう思わない	2	2	1	1	0	6	8.3
⑤まったくそう思わない	1	0	0	0	0	1	1.4
合計	16	17	14	12	13	72	100.0

設問11 大阪大学において、人文学の基礎的な学問的方法や知識について深めることができましたか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とてもそう思う	5	6	4	5	7	27	37.5
②ややそう思う	7	7	8	6	5	33	45.8
③どちらとも言えない	3	3	1	1	1	9	12.5
④あまりそう思わない	1	1	1	0	0	3	4.2
⑤まったくそう思わない	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	16	17	14	12	13	72	100.0

設問12 大阪大学において、研究を推進する能力や総合的な判断力を高めることができましたか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とても思う	5	7	5	6	6	29	40.3
②やや思う	8	7	8	5	6	34	47.2
③どちらとも言えない	2	2	0	1	0	5	6.9
④あまりそう思わない	1	1	0	0	1	3	4.2
⑤まったくそう思わない	0	1	0	0	0	1	1.4
合計	16	18	13	12	13	72	100.0

設問13 大阪大学において、行政、教育、芸術等の諸活動をマネージできるような教養や能力を高めることができましたか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①とても思う	2	2	1	2	3	10	14.1
②やや思う	4	3	3	4	5	19	26.8
③どちらとも言えない	6	8	7	5	3	29	40.8
④あまりそう思わない	3	3	2	0	2	10	14.1
⑤まったくそう思わない	1	1	0	1	0	3	4.2
合計	16	17	13	12	13	71	100.0

設問15 学内・学外を含め、自主的な勉強会や研究会に参加していますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①参加したことがない	2	0	0	0	2	4	5.5
②参加したことがあるが、今はしていない	0	3	3	5	1	12	16.4
③月に平均3度未満程度、参加している	10	11	8	6	6	41	56.2
④月に平均3～5度参加している	3	4	3	1	2	13	17.8
⑤月に平均6度以上参加している	1	0	0	0	2	3	4.1
合計	16	18	14	12	13	73	100.0

設問16 今年度のあなたの研究の進行状況はいかがですか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①大変順調	0	0	1	0	3	4	5.6
②順調	2	3	3	4	4	16	22.2
③ふつう	11	9	5	3	5	33	45.8
④やや不調	1	4	4	4	1	14	19.4
⑤不調	1	2	1	1	0	5	6.9
合計	15	18	14	12	13	72	100.0

設問17 今年度のあなたの研究は年度初めに提出した研究計画書どおりに進んでいますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①計画以上	0	1	0	0	1	2	2.8
②計画通り	8	7	3	4	8	30	41.7
③あまり計画通りでない	6	9	9	6	4	34	47.2
④まったく計画通り進んでいない	0	0	2	0	0	2	2.8
⑤計画を変更した	2	0	0	2	0	4	5.6
合計	16	17	14	12	13	72	100.0

設問18 TA業務に従事したことはありますか。TA業務と自己の研究の関係について、どう考えていますか。

	学年別回答数(人)					総合計	
	1年	2年	3年	4年	5年～	回答数(人)	構成比(%)
①TA業務に従事したことがあり、それは自分の研究にも意義があると感じる	8	12	10	5	6	41	56.9
②TA業務に従事したことがあるが、それは自分の研究に意義があるとは感じなかった	1	2	0	3	4	10	13.9
③TA業務に従事したことがないが、機会があれば従事してみたい	5	3	2	4	3	17	23.6
④TA業務に従事したことがないし、今後も従事したいと思わない	0	0	2	0	0	2	2.8
⑤その他	1	1	0	0	0	2	2.8
合計	15	18	14	12	13	72	100.0

### Ⅲ 付:「平成19年度 大学院修了生アンケート」

以下に、平成19年8月に実施された「平成19年度大学院修了生アンケート」の関連項目を抜粋して掲載する。本「平成19年度大学院修了生アンケート」は、平成16年から19年3月までの4年間に卒業・修了した852名を対象に実施され、文学研究科修了生から113通の回答を得た。

なお、本「平成19年度大学院修了生アンケート」の集計結果とコメントについては、『教育・研究——平成19年度 現況調査表——』に詳しい。

A.1 大阪大学大学院文学研究科における「専門分野ないしは専修の授業」は、あなたの教養を高めるためや現在の仕事や生活において役立っていますか。

大いに役立っている	いくらか役立っている	どちらとも言えない	あまり役立っていない	まったく役立っていない	合計(人)
64	33	6	4	3	110

A.2 大阪大学大学院文学研究科における「専門分野ないしは専修以外の授業」は、あなたの教養を高めるためや現在の仕事や生活において役立っていますか。

大いに役立っている	いくらか役立っている	どちらとも言えない	あまり役立っていない	まったく役立っていない	合計(人)
28	51	22	7	2	110

A.3 大阪大学大学院文学研究科における「研究活動(修士論文・博士論文)」は、あなたの教養を高めるためや現在の仕事や生活において役立っていますか。

大いに役立っている	いくらか役立っている	どちらとも言えない	あまり役立っていない	まったく役立っていない	合計(人)
58	40	6	4	2	110

B.1 大阪大学大学院文学研究科の「研究活動全般」をどのように評価しますか。

優れている	やや優れている	ふつう	やや劣っている	劣っている	合計(人)
49	38	18	3	2	110

B.2 大阪大学大学院文学研究科の「教育活動全般」をどのように評価しますか。

優れている	やや優れている	ふつう	やや劣っている	劣っている	合計(人)
25	39	35	9	2	110

B.7 大阪大学大学院文学研究科の「就職」をどのように評価しますか。

優れている	やや優れている	ふつう	やや劣っている	劣っている	合計(人)
9	24	40	25	12	110

## 編集後記

『年報 2008』は、文学研究科および文学部の 2006 年度および 2007 年度の教育・研究活動の記録である。

本年は外部評価の実施年にあたる。10 月には刷り上がった年報を外部評価者に配布せねばならず、その編集スケジュールはかなり厳しいものとなった。また、年度初めに行われた評価広報室の室員の大幅な入れ替えと、事務補佐員の交代という事情も重なって、作業は混乱の中でのスタートとなった。

第 1 部に収録した、研究科のさまざまな活動に関する報告記事は、関係する教員や各事務部局に個別に依頼して収集した。大阪外国語大学との統合にともなって新設された新専攻各専門分野の記事を追加した点などが、『年報 2006』と異なっているが、基本的な編集方針はこれを踏襲した。前号の編集担当者からは、各室の報告記事の簡素化について検討するよう引き継いでいたが、限られた準備期間の中、今回は前例に沿ったかたちで編集した。この点は次号に向けて申し送りたい。

第 2 部の各専門分野のデータの収集に際しては、助教のみなさんの協力が大きな助けとなった。年報のページのかなりの部分を占める教員個人のデータに関しては、昨年度より導入された、入力用のエクセル・シートが大いに役立った。このシートは、他のソフトで作成したデータのコピー・ペースト操作によってフリーズするなど、いくつか仕様上の制約がある。この点については教授会での説明や配布文書によって徹底を図ったが、一部には理解されず、手作業でのデータ修復を余儀なくされたケースも存在した。この仕様上の問題は、当面技術的に解決するのは難しく、今後とも各教員の理解と協力を求めてゆくしかないだろう。

以上の記事やデータは、おおむね 7 月中に収集を完了することが出来た。多忙のなか快くご協力頂いた関係の皆さまにお礼申し上げたい。

最後になったが、評価・広報室の永島とも子さんには特別の謝意を表したい。データ収集・編集・校正・印刷・出版までの膨大な作業のなかで、永島さんには常に、最も面倒で煩瑣な仕事をお願いした。『年報 2008』は、そのご尽力なくしては出版にこぎつかなかっただろう。

2008 年 10 月

藤村昌昭、平雅行、入江幸男、青木敦、岡田裕成

---

大阪大学大学院文学研究科  
**年報 2008**  
教育・研究(2006-2007年度)

2008年10月発行

**編集** 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室

**発行** 大阪大学大学院文学研究科

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5

TEL;FAX 06-6850-5107(評価・広報室)

**印刷** (株)ケーエスアイ

---

淡々為名用山字  
要言終一息字所大踏以  
之字考矣

一級之山座所之山日業之也之字

人之席切之字

一人之切之字之更之多之字之後之杯之字之傍之人之字

心

安永七年 戌六月